文學士佐成謙太郎著

謠曲大觀

第三卷

東京　明治書院

例　言

全般に亘つて

能樂の演奏には、シテ方・ワキ方・狂言方・囃子方等の役柄がありますが、その主體をなすものはシテ方で、一般に行はれてゐる謠本も亦シテ方のものであります。そして、このシテ方には觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流（梅若も一流を樹立しましたが、その謠本は觀世流のものを踏襲してゐます。）がありまして、各流二百十番乃至百八十番を現行曲としてゐます。そして、その大部分は各流共通のものでありますが、その間に多少の出入がありまして、五流現行曲は凡て二百三十五番となるのであります。（最近金剛・喜多の二流で廢曲としたものは、當然これを削除し、金剛流で新しく加へることとしたものも、未だ流布してゐないのでありますから、これを省略しました。）

本書は上述二百三十五番を、〔翁〕は別曲として第一に擧げ、〔鸚鵡小町〕以下を曲名の五十音順に從ひ、毎曲、解說・本文・語釋・口語譯・考異の五部門に分つて、これを掲げました。そして、本文・語釋・口語譯の三項は、彼此對照する便宜を考へて、上中下の三段に、互に相對するやうに記しましたが、その間に自ら繁簡の差異があつて、多少前後するこ

とを免れませんから、一曲を數節に分つて【一】【二】【三】等の符號を附し、識別し易いやうにしました。

なほ、各部門を通じて、謠曲名には必ず〔　〕の符號を附けてこれを表示し、流名には往々觀(觀世)、寶(寶生)、春(金春)、剛(金剛)、喜(喜多)の略符號を用ゐました。

解說について

解說に於ては、また能柄・人物・所・時・異稱・作者・梗概・出典・概評の諸項に細分して記しました。

イ能柄

能樂五番立の分類、脇能・二番目・三番目等の分類は、確乎たる根據のあるものともいへませんが、その曲柄を知るのには甚だ便宜なものであり、夢幻能・劇能等の名稱は、著者の私に與へたものでありますが、これも脚色の大體を知るのに便宜でなからうかと思ひましたので、兩者とも每曲にこれを揭げました。

ロ人物

舞臺に登場する每曲の役柄・人物は、發聲順又は登場順によつて揭げました。

ハ所

謠曲に描かれてゐる場所は、一曲の中でも多少移動するのが普通でありますが、ここには、その主要な場所を擧げました。前後の二段に於て主要場所の移る場合には、これを表示しました。

ニ時

謠曲に描かれた時は、明確でないものが少くありません。さうした場合には、能樂實演の取扱上指定してゐる季節を、括弧を施して、(一月)(二月)のやうに記しました。

ホ作者

謠曲の最も著しい作者が世阿彌であることには疑ひがありませんが、どの曲がだれの作であるかは、明言し難いものが少くありません。本書には、世阿彌の著書によつて明らかなものは勿論これを明示し、なほ後世の書ではありますが、作者目録として相當有力なものと認められてゐる吉田兼持の能本作者註文、觀世元章の二百十番謠目錄の說をも揭げて置きました。なほこの外、作者、制作時代等を知る傍證となるべき古記錄、金春禪竹の著書、室町時代公卿日記等の所見をも揭げました。この項に就ては、丸岡桂氏の古今謠曲解題から得たものが多いのでありますが、著

者自身も亦同様の捜索を試みましたので、同書の遺漏を多少補ひ得ました。なほ寛文學士の言經卿記に就ての研究に負ふ所も少くありません。

ヘ梗概

一曲を通じた口語譯を試みたのでありますから、梗概は一見してその大要を知り得る程度にとゞめました。

ト出典

謠曲の主材は大部分先進文藝から得たものでありまして、これを知ることは、謠曲作者の創作態度を見る上にも、謠曲を正しく解釋する上にも、必要なことでありますから、典據の索め得たものは、なるべく詳しくこれを引いて謠曲文と對照する便に供へました。

チ概評

すべて文學藝術の批評鑑賞は、その人々の主觀から出るもので、客觀的な一定の基準は定め難いものだと思ひます。著者の主觀から出發した批評などを述べるのは、誠にをこがましいことではありますが、初心の人々には多少參考になることもあらうかと思つて、敢て卑見を略述しました。

本文について

イ底本の選定

謠曲の本文は、諸流とも大體同一でありますが、その間に多少詞章の出入した所があります。それで、本書の底本には、謠曲の大成者觀阿彌・世阿彌の流系であり、その後引續いて現在も最も流布してゐる觀世流のものを採り、觀世流で行はれてゐないものは、上懸として觀世に最も近い、そして現在觀世に次いで廣く行はれてゐる寶生流を採り、上懸二流に行はれてゐないものは、下懸三流の中で流系の最も古い金春流を採り、次いで金剛流を採り、最後に古流の中最も新しい喜多流の文を採りました。

ロ本文の校訂

本文の底本には、その流の現行謠本を採りましたが、漢字・假名遣等は、古謠本及び諸流謠本を參酌して、その穩當なものに從ひました。

用語用字は各流を通じて、一定の樣式に統一しましたが、句讀はすべてその流現行曲の主張に從ひました。

漢字には、何々にて候」「何々にて候へば」の外は「さん候」などと、候を濁音で謠ふ場合も

すべて振假名を施しました。そしてその振假名は字音假名遣、歴史假名遣に從ひましたが、謠曲には特殊な謠ひ方が少くありませんので、さうした場合にはすべてその謠ひ方の發音に從つて、「御宇」「青墓」「危く」などと記し、「謠ふ」「榮うる」なども、「うたう」「さかうる」と謠はないことを明示する爲に、「謠ふ」「榮うる」と記し、假名でも、讀み誤る恐れのあるものは、「今日見ずは」などと、特に片假名を傍につけて、これを明示しました。

謠曲では、上の音が字音のタ行又は撥音ンで、その次の音がア行・ヤ行・ワ行、又はハ行はである時は、その音がタ行又はナ行或はその拗音に轉じて、「今日は」「御入り候」「陰陽」などと謠ふものであります。かうした場合、漢字の振假名にはその發音假名を記しましたが、假名書きの場合には、これに一々傍訓を施すのは、餘りに煩はしいので、省略しました。それらはすべて、「善神は」「他生の縁ありて」「利物を」などと謠ふのであります。

章句・節附の名稱、次第・道行・下歌・上歌・クリ・サシ・クセ・ロンギ等は、すべて謠本の指定に從つてこれを附し、呼掛・語・待謠等の名稱も括弧を施してこれを記しました。たゞ、カヽル・打切は本書の如き性質のものには、煩はしいばかりで必要のないものと思

つて省きました。

なほ謠がかりの部分と、節をつけないたゞ詞の部分とは、その句頭に、前者には『後者には「の印を附けて、これを辨別しました。（口語譯等に附けた「」は、會話文又は引用文を表示したもので、これとは全く意味を異にしてゐます）

八　本文の補修

能樂の實演を一度でも觀たことのある人は、誰でもすぐ氣づくやうに、謠本や從來の謠曲註釋書に記してゐる詞章は、能樂詞章の全部ではありません。謠本に記されてゐない狂言詞やワキ詞（時としてはシテ詞をも）を知らなくては、精細に謠曲を理解することが出來ないのであります。たゞこれらの詞は寫本として、役者の家家に相傳してゐるだけで、世間には殆ど出てゐないのでありますが、著者は幸ひにしてこれを見出すことが出來ましたので、すべての曲を通じて、舞臺で述べられるほどの詞は洩れなくこれを收めるやうに力めました。その中、

シテ詞・ツレ詞　は、その流現行のものに從ひ、

ワキ詞　は、現在家元の存續してゐる唯一のワキ方である脇寶生流の古寫本により、寶生流に求め得なかつたものは、高安流・春藤流などに從ひました。（寶生流以外

に據つた場合は、その都度その旨を斷つて置きます）

狂言詞　は、もと狂言には大藏・和泉・鷺の三流があり、現在はその中大藏・和泉の二流が行はれてゐるのでありますが、その詞は謠曲の他の部分に比べて流動性の多いものでありまして、現在行はれてゐるものでも、同じ流の中にも、例へば大藏流の茂山派と山本派、和泉流の三宅派と山脇派と野村派など、それ〴〵可なりの相違があるのであります。それで、本書では成るべく古い原形に近いものに據りたいと思ひ、森川杜園舊藏の大藏流古寫本（推定寛政頃）に據り、大藏流にないものは和泉流に據りました。

二　型附

能樂は一種の劇であり、從つて謠曲は一種の脚本と見られるのであります。それで、「ト書き」のない脚本が、舞臺を想像するに不都合であるやうに、型附の記されてゐない謠曲文は、能樂の演奏を想察することの困難な、從つて謠曲として十分に鑑賞することの出來ないものだと思ひます。それで、本書にはこの型附を「ト書き」風に記して見ました。そして、その型附は著者所藏の觀世大夫清親型附本を本とし、帝國圖書館所藏觀世流舞本その他の型附本、木下敬賢氏の能樂蘊奥集、大和田建樹氏

の「能の栞」、池内信嘉氏の「能の見方と謠の聞き方」、謠曲界連載の「うたひ通解」、大觀世連載の「能の型」等を參酌し、殊に著者の觀能手控を參考としました。

尤も、能の型附は極めて些細な點まで嚴密に規定してゐますと同時に、變型の少くないものでありますが、さうした詳細な型附の記載は本書の目的とするところでもなく、又却つて全篇通讀の妨げともなるものでありますから、たゞ演出の大體を想像し得る程度に略記することにとゞめました。

なほ、現行曲二百三十餘番のうち、凡そ百番内外が屢〻實演せられるもので、型附本等の參照すべきものも多いのでありますが、他の百數十番は實演せられる機會が少く、型附も殆ど見當らないのであります。著者はなるべく廣く求めて、その大概を知るに力めましたが、一二の曲に就ては、裝束附及び登場人物の出入を記すにとゞまつたものがあります。

ホ　活字の差別

以上擧げました謠本以外の狂言・ワキ等の詞及び型附は、謠曲として完全な本文を作る爲に必要な條件であると信じますが、謠本に記されてゐる部分とその他の部分とには、可なり輕重の差がつけられてゐるやうに思はれます。その上、謠本以外

の部分は、著者が必要と認めて新しく加へたものでありますから、その差別を明らかにする爲に、謠本に記されてゐる部分は十二ポイント、その他の詞は九ポイント、型附は八ポイントとして、活字の大小を以てこれを辨別しました。――狂言詞は、謠本にも時折記してゐることがあります。その場合、その文が實演に使用してゐるものと同樣のものである時にはこれに從ひ、大差ある時には著者の用ゐた狂言底本の文に從ひ、謠本の文を參考として上欄に揭げ、いづれにしても、その都度これを明示して置きますが、その謠本に從つたと否とに拘らず、狂言詞はすべて九ポイントとして、體裁を整へました。

語釋について

謠曲の語句の解釋は、夙く豐臣氏の頃から大仕掛に行はれ、德川末期、犬井恕軒の謠曲拾葉抄に於て一度大成したのであります。その後、明治時代に入つて、大和田建樹氏の謠曲評釋、丸岡桂氏の觀世流改訂謠本(刊行會本)辭解等に於て、更にこれを修補せられて、著者の新しく加へ得る所は甚だ少かつたのでありますが、多少は修正し得たかと思つて居ります。

本書に掲げた語釋は、なるべく煩雜にならないやうに、要領を記すやうに注意しましたが、引歌・引用句などはなるべく洩れなく掲げるやうにし、縁語・掛詞なども一々指摘するやうに心掛けました。

語釋は本文の上段に置いたのでありますが、それではいひ足りない時には、その曲の末尾に「附記」として掲げました。

口語譯について

謠曲の口語譯、謠曲文の全體を通じて、一貫した解釋を施すことは、これまでまだ試みられたことがないと思ひます。否、これまでは、謠曲は「綴れ錦のちやんちやんこ」のやうなものだ、などといはれてゐて、全篇を通じた逐語的飜譯は出來にくいものと考へてゐた人が少くないやうに思ひます。著者は大膽にもこれを試みて、その二三十を謠曲界に連載して、識者の敎へを乞うたのでありますが、こゝにすべての曲に亘つて口語譯を試みることとしました。著者自身が讀んでもものの足りない節が少くない、將來大に修正せらるべきものではありますが、從來全くなかつたものだけに、讀者諸君の參考にもならうかと期待してゐるのであります。

考異について

イ諸流異同

前に述べました通り、五流の詞章には多少の異同がありまして、この差異を辨別することは、各流の主張を見る上にも、謠曲を解釋する上にも、參考となるものでありますが、些細な相異まで一一指摘しますと、非常に煩雜なものとなり、頁數も甚しく増加しますので、些細なものはこれを省略し、やゝ著しい相異は必ずこれを掲げることとしました。

ロ古謠本異同

謠曲の詞章は、殆ど原形のまゝ傳へられて來たのでありますが、元祿以前とその以後とでは、やゝ著しい差異の認められるものがないでもありません。そして、この古謠本、從つて原形に近いものを知ることは、いづれの點から見ても、大切なことだと思ひますので、慶長光悦本をはじめ元祿以前の古謠本の蒐め得ましたものは、その最も古いものに從つて、これを現行曲と比較して、その相異は大小となくすべて原文のまゝで指摘しました。

なほ、世子六十以後申樂談儀、金春禪竹の五音次第・五音三曲集等に謠曲の一節を引いてゐますものは、これこそ原形を知る最も大切な資料でありますから、本項の末、又は解說の作者の項に於て、その全文を擧げ又は現行曲との異同を辨じて置きました。

能畫について

每曲冒頭に掲げました演能圖は、緒言に申し述べました通り、すべて深見坦郎畫伯の揮毫に係るものであります。これまでにも、演能の版畫又は寫眞は數多くありますが、現行曲すべてを網羅したものは、深見畫伯のものが最初であると思ひます。畫伯が本書の爲に苦心して終にこれを完成せられたのは、また一には斯道の劃期的事業であつたと信じるのであります。

し　　　す　　　せ

謠曲大觀第三卷目次

そ

た

ち

つ

て

俊寛（しゆんくわん）　觀（寶　金　剛　喜）

解　說

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】前ワキ　赦免使、ツレ　丹波少將成經、ツレ　平判官康頼、シテ　僧都俊寛、後ワキ　赦免使、
狂言　舟夫

【所】薩摩潟鬼界が島

【時】治承二年九月

【異稱】喜多流では「鬼界島」といふ。

【作者】能本作者註文・二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とし、金春禪竹の歌舞髄腦記に「俊寛僧都」を閑花風、不明體（不便體か）として、
ながむれば我山のはに雪しろし、都の人よあはれともみよ
といふ歌を掲げてゐる。言經卿記文祿四年三月三十日の條に註釋の事が見えてゐる。

【梗概】平家倒滅の陰謀が顯れて、俊寛・康頼・成經の三人は鬼界が島に流されてゐたが、今度中宮御安產の御祈禱の爲に非常の大赦が行はれ、

康頼・成經の二人は赦されることとなり、赦免使が都を立つた。島では、康頼・成經が例の通り熊野詣でをしてゐると、俊寛が迎へに來て、ともに過ぎし昔の事を語り合つた。そこへ、都の使が着いて、赦免狀を示したので、俊寛は喜んで、これを康頼に讀ませると、俊寛の名がない。俊寛は驚いて「これは筆者の誤りでないか」と疑つたが、赦免使は「俊寛は赦されないのだ」と答へた。俊寛は正氣もなく悲しみ歎いたが、やがて都の使は二人を船に乘せて漕ぎ出さうとする。「せめて向ひの地までなりと」と俊寛は哀願したが許されない。僅かに「時機を待て」と慰めの言葉を殘して、船影は遠く消えてしまつた。

【出典】　この事は源平盛衰記卷九「康頼熊野詣附祝言事」卷十「丹波少將上洛事」にも記され、本曲の前半はこれに據つたかと思はれる節もあるが、大體は平家物語卷二「康頼祝詞の事」及び卷三「足摺の事」に似て居り、殊にその主要部分は、この「足摺の事」の文をそのまゝ引いた所が多いから、これを抄出すると、

御使は丹左衛門の尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「是に都より流され給ひたりし平判官康頼入道、丹波の少將殿やおはす」と、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、……急ぎ御使の前に行き向つて、「是こそ流されたる俊寛よ」と名乘り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取出でて奉る。是をあけて見給ふに、「重科は遠流に免ず、早く歸洛の思をなすべし、今度中宮御產の御祈によつて、非常の赦行はる。然る間鬼界が島の流人少將成經・康頼法師赦免」とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に、少將や康頼法師も出で來り、少將の取つて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝることはあれ、夢かと思ひなさんとすれば、現なり、現かと思へば又夢の如し。……「抑も我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。如何なれば赦免の時、二人は召し還されて、一人こゝに殘すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆の誤りか、こは如何したる事どもぞや」と、天を仰ぎ地に伏して、泣き悲めども甲斐ぞなき。俊寛少將の袂にすがり、……「赦されなければ都までこそ叶はずとも、せめては此船に乘せて、九國の地まで着けて給べ、各々是におはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるゝやうに、おのづから故鄕の事をも傳へ聞きつれ、今より後は何としてか聞くべき」とて、悶え焦れ給ひけり。少將「誠にさこそは思しめされ候らめ。……成經先づ罷り上つて、人々にもよく／＼申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎ひに人を奉らん、……終には何か赦免なくて候べき」と、やう／＼に慰め給へども、僧都堪へ忍ぶべう

も見え給はず。さる程に、船出さんとしければ、僧都船に乘りては下りつ、下りては乘りつ、あらまし事をぞし給ひける。既に纜解いて船押し出せば、僧都綱に取りつき、腰になり脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、……と口說かれけれども、都の御使「如何にも叶ひ候まじ」とて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば終に漕ぎ出す。僧都せん方なさに渚に上り、倒れ伏し、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。……かの松浦小夜姬が唐船を慕ひつゝ、頭巾振りけんも、是には過ぎじとぞ見えし。

【概評】　本曲はその原據である平家物語の記述を甚しく變改しないで、殆ど元のまゝで現在物に脚色したのであるが、筋の運びが滑らかで、局面の變化に富み、悲痛な劇的效果を奏してゐる。殊に俊寬の性格描寫について、原作では、都の使が來ると、俊寬は驚喜して直に赦免狀を披いてゐるが、本曲では、最初自分が讀まないで、やがて「康賴御讀候へ」といつて落着きを見せ、わが名を讀まれない時にも、なほ「何とて俊寬をば讀み落し給ふぞ」と自信を保つてゐるのは、俊寬の人物を大きくする上からいつても、後の悲劇を深くする上からいつてもよい工夫であつたと思ふ。

【一】　序段

舞臺は京都で、前ワキ赦免使登場。

一「私は太政大臣平清盛公に仕へてゐる者です。さてこの度中宮樣が御安產遊ばすやうにとの御祈禱の爲に、特別の大赦が行はれて、諸國に流された罪人が赦されることとなつたのです。その中でも、鬼界が島に流された人の中で、丹波少將成經、平判官康賴の二人を赦される爲の御使を、私がいひつかつたので、唯今急いで鬼界が島へ出掛けるのです。

○見物人に事件の概略を紹介して、島に赴く意。

【一】　名乘笛にて、ワキ赦免使、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて文を懷中して名乘座に出で、

ワキ「これは相國に仕へ申す者にて候。さてもこの度中宮御產の御祈りの爲に。非常の大赦行はるゝにより。國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の中。丹波の少將成經。平判官康賴二人赦免の御使をば。某承つて候間。唯今鬼界が島へと急ぎ候

【一】
○相國―太政大臣の唐名。平清盛を指す。
○中宮―高倉天皇の中宮、後の建禮門院。清盛の女德子。これは安德天皇の御產の時のことであつた。
○非常の大赦―特別臨時の大赦。大赦とは特別の恩典により罪人の罰を減免すること。
○流人―遠流に處せられた者。
○鬼界が島―本曲の末に記す。
○丹波の少將成經、平判官康賴―本に附記す。

○赦免の御使―平家物語にその名を丹左衞門尉基康と記す。

【三】

○硫黄が島―神を齋ふを硫黄にいひかけた。硫黄が島は鬼界が島の一島。

○三つの山―願ひも滿つを三つにいひかけた。三つの山とは紀伊國熊野の三山即ち本宮、新宮、那智の三社をいふ。

○熊野參詣三十三度の―盛衰記卷九に「抑も性照三十三度熊野參詣の宿願ありて十八度までは參りて、今十五度を殘せり。當來得道の爲に岩殿の御前にて果さばやと存じ、露の命を永らへば都還りをも祈らんと思ふなり」

○勸請―神佛の靈を請じて新に祭ること。

○九十九所の王子―京都から熊野までの間に九十九箇所の社があつて、熊野大神を祭り、これを王子の社といふ。平家物語卷二に「この峰は新宮、彼は本宮、此はそんしやう、その王子かの王子など、王子王子の名を申して、康頼入道先達にて、丹波の少將相具しつつ、日毎に熊野詣の眞似をして、歸洛の事をぞ祈りける」

といひて幕に入る。

次第の囃子にて、ツレ丹波少將成經、直面・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ平判官康頼、成經と同樣の裝束（角帽子を着る）にて數珠を持ち、舞臺に入りて向合ひ、

（二人）〽次第 神を硫黄が島なれば。神を硫黄が島なれば。願ひも三つの山ならん

地取に二人とも正面に向き、

（二人）〽サシ これは九州薩摩潟。鬼界が島の流人のうち

成經〽丹波の少將成經

康頼〽平判官入道康頼

（二人）〽二人が果にて候なり（と向合ひて）我等都にありし時。熊野參詣三十三度の。歩みをなさんと立願せしに。その半ばにも數足らで。かかる遠流の身となれば所願も空しくはやなりぬ。せめての事のあまりにや。この島に三熊野を勸請申し。都よりの道中の。九十九所の王子まで

退場する。

【三】 本段

舞臺は薩摩の鬼界が島。

ツレ丹波少將成經、ツレ平判官康頼の二人登場。

二人「この硫黄が島に熊野三社をお祀りしてゐるのだから、やがてはわれわれの願ひも叶へて下さることであらう」

と次第にその心持をいひ、

二人「私たちは、九州薩摩潟の鬼界が島に流されたもので……」

成經「私は丹波少將成經―

康頼「私は平判官入道康頼―

二人「この二人のなれのはてです」

と見物人に自己紹介をし、

二人「自分達は都にゐた時、熊野へ三十三度參詣したいと願を立てたのだが、まだその半分も濟まさないうちに、このやうな遠い所に流されてしまつたので、願望も無になつてしまつた。しかしせめての事に、この島に熊野三社の神靈をお移し申して、都から熊野への道中の九十九所の王子の社をも、すべて擬へ作つて、道

○順禮―神佛を道順によつて次々に參拜して廻ること。
○神路―神の通ひ給ふ道、又は神詣の道。こゝでは道すがらの神々の意。
○同じ宮居と三熊野の―こゝも紀伊の三熊野と同じ神であると見てといひかけて、「見」より「三熊野」に轉じた。
○浦の濱木綿、白衣、散米、白木綿花の御祓―本曲の末に記す。

【三】○後の世待たで―罪業の深い者は死んだ後、地獄の鬼となるが、自分は生きてゐるうちから、鬼の世界の島守となるとの意。
○暗きより暗き道にぞ―拾遺集和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべき、はるかに照らせ山の端の月」を引いた。この歌は法華經化城喩品の「從冥入於冥、永不聞佛名」を詠んだものである。
○玉兎晝眠る雲母の地―以下「不萠の枝」まで、謡曲拾葉抄に「古詩に云ふ [illegible]也云々」といふ。玉兎は月の異名、雲母は月の仙界。月は晝間仙界に休むとの意。
○金鷄夜宿す不萠の枝―金鷄は太陽の異名、萠 [illegible]

(シテ)下歌『悉く順禮の。神路に幣を捧げつつ。上歌『ここ
とても。同じ宮居と三熊野の。同じ宮居と三熊野の。浦の濱木綿一重なる。麻衣のしをるるを唯そのままの白衣にて。眞砂をとりて散米に。白木綿花の御祓して神に歩みを、運ぶなり神に歩みを運ぶなり

【三】「神に歩みを」と謡ひながら地謡座の前へ行きて立つ。

一聲の囃子にて、シテ俊寛、面俊寛・角帽子・縹花色・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・腰蓑・扇の裝束にて杉水桶を持ちて橋懸一の松に出で、

シテ一聲『後の世を、待たで鬼界が島守と
地『なる身の果の。暗きより
シテ『暗き。道にぞ。入りにける
シテサシ『玉兎晝眠る雲母の地。金鷄夜宿す不萠の枝。寒蟬枯木を抱きて。鳴き盡して頭を回らさず。俊寛が身の上に知られて候

「寒蟬枯木を抱きて」と謡ひながら舞臺に進み常座に立つ。

すがらの神々に御幣をあげ、こゝもやはり紀伊の熊野三社と同じ神様だと思つて、粗末な萎れた麻衣をそのまゝ淨衣のつもりで、眞砂を取つて散米の代りとし、白木綿花で御祓をして、かうして神に參詣してゐるのだ」

といひながら、神に詣る態。

【三】

シテ俊寛、[illegible]水桶を持つて登場

俊寛「わしは死ぬまでもない、この世ながら鬼が島の島守となつて、闇から闇へ行く思ひをしてゐるのだ。『月は晝仙界に休み、太陽は夜葉のまだ生えない枝に寢る』といふが、わしは丁度その月日の休んでゐる時のやうな、くらやみの生活をしてゐるのだ。『秋の末死に殘つた蟬が枯木にとまつて、鳴き盡してその儘死ぬ』といふが、わしは今の身の上からその樣子が察せられるのだ」

といひながら、二人の方へ近づく。

きより暗き道」を承けて、俊寛の身上は[illegible]月、夜の日のやうなもので、いつも明るい時がないとの意。
○[illegible]枯木を抱きて―[illegible]抄に「此歌は[illegible]花[illegible]枝に[illegible]」といへ[illegible]秋の末枯木に居殘つて鳴く蟬は、鳴き盡したまゝ再び聲を[illegible]らすこともなく死んでしまふとの意。俊寛の身上に[illegible]へたのである。
○俊寛―本曲の末に記す。
【四】
○道迎へ―道の中途まで出迎へること。
○竹葉―酒の異名。
○[illegible]酒―[illegible]の酒、[illegible]は酒をそゝぐ意で、神を祭る時に酒を地にそゝぐ儀式をいふ。
○長月―九月の異稱。平家物語に「教[illegible]使は一[illegible]をば七月下旬に出でたれども、九月二十日比にぞ鬼界が島には着きにける」とある。
○重陽―本曲の末に記す。

ツレ二人シテへ向き、

【四】
康頼「あれなるは俊寛にて渡り候か、これまでは何の爲に御出でにて候ぞ
シテ「早くも御覽じ咎めたり、道迎へのその爲に酒を持ちて參りて候
康頼「そも一酒とは竹葉のこの島にあるべきか
と（シテへ行き）。立ち寄り見れば（桶を見て）、やゝこれは水なり（もとの座に歸る）
シテ「これは仰せにて候へども、それ酒と申す事はもとこれ藥の水なれば、醴酒にてなどなかるべき
二人「げにげにこれは理なり。頃は長月
シテ「時は重陽
ツレ二人「所は山路
シテ「谷水の

【四】
康頼「あれに居らるるのは俊寛ではないか。どうしてこゝへお出でになつたのだ」
俊寛「おうよう早う氣がつかれたな。途中までお迎へに酒を持つて來たのです」
康頼「一體酒とは……。酒がこの島にあるはずはないが……」
と傍へ寄つて見て、
康頼「やあ、これは水だ」
俊寛「御その通りだが、一體酒といふものは元來藥の水なのだから、これも一種の酒でないとは申せまい」
二人「なる程これは御尤もだ。今は九月……」
俊寛「重陽の節句の時で……」
二人「こゝはそれにふさはしい山路だし」
俊寛「これはその谷水なので、あの彭祖が七百年の壽命を保つたのも、[illegible]

○彭祖―同じく末に記す。
○藥と菊水の―藥と聞く、を菊にいひかけた。
○白衣の―白衣と、いふ語に、衣の[illegible]で、濡れてほすとつゞけた。
○濡れて干す山路の―古今集素性法師の歌「濡れて干す山路の菊の露の間に、いつか千年を我は經にけん」を引き、[illegible]に濡れに袖を干す[illegible]僅かの間と思つてゐるうちに、いつ千年を經たことであらう」、年月の早く經つ意であるのを、こゝには逆に、僅かの時間を永い年月のやうに思ふ意に用ひたのである。
○配所―罪人の流されてゐる所。
○法勝寺、法成寺―末に記す。
○喜見城―末に記す。
○五衰滅色の秋―同じく末に記す。
○落つる木の葉の盃―秋の語を承け、落つる木の葉のといひ、それを盃に見立てて、飲む酒にと續けたのである。
○涙川―古今集讀人不知の歌「涙川なに水上を尋ねけん物思ふ時のわが身なりけり」を引いた。

（シテ・ツレ）彭祖が七百歳を經しも。心を汲みえし深谷の水

（地上歌）飲むからに（ツレと二人坐して）げにも藥と菊水の（シテ二人に酌をして）げにも藥と菊水の。心の底も白衣の（シテ眞中に坐して）濡れて干す。山路の菊の露の間に。われも千年を。經る心地する。配所はさてもいつまでぞ（シテ立ちて）。春過ぎ夏たけて又。秋暮れ冬の來るをも。草木の色ぞ知らするや（常座に出でて）あら戀しの昔や（正面を眺めて）。思出は何につけても。あはれ都にありし時は。法勝寺法成寺唯喜見城の春の花。今はいつしか引きかへて。五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃（目附柱際にて酒を汲む態をして）。飲む酒は谷水の。流るゝもまた涙川水上は（シテ立ちて）。われなるものを。物思ふ時しもは今こそ限りなりけれ

谷の水を、その心持を飲んだからだ―（と楯の水を二人に酌して、）

俊寛「この酒を飲めば、そのまゝ藥となるといふ話だが、そのめでたい心持はわしには分らない。いや仙人の山路に入ると、菊の露に濡れた着物の袖を乾してゐる、ほんの暫くの時間だと思つてゐるうちに、千年も經つてしまふといふことだが、自分は實際に短い時間でも、それを千年もの永い年月のやうに思へるのだ。一體われ〳〵はこの配所にいつまでゐることだらう。こゝでは、春の過ぎたことも、夏が過ぎ秋が過ぎ冬の來ることも、たゞ草木の色の移り變りで知られるだけだ。あゝ昔が戀しい、思ひ出といふものは何につけても懷しいものだが、都に居つた頃は、あの法勝寺などで、天上の喜見城に居るやうな樂しみをしてゐたのが、いつの間にやら、今は全くその當時とは正反對で、天人が五衰に遭ふやうに、秋になつて木葉の散るやうに、落ちぶれてしまつたのだ。木葉といへば、このやうな盃で飲む酒、酒といつても實は谷川の水だが、その谷川のやうに流れ出る涙、これも結局われから招いた罪だと思ふと、萬事望みが絶え果てゝしまふのだ―

○今こそ限りなりけれ―續後撰集忠良の歌に「世の憂きを今は歎かじと思ふこそ身を知り果つる限りなりけれ」

【五】

○早船―船足の早い船。

○赦免狀―大赦の免狀。盛衰記卷九にその文を掲げて「依二中宮御產御祈禱一、被レ行二非常大赦一之內、薩摩方硫黃島流人丹波少將成經、前平判官康賴可レ歸二洛之由御氣色所レ候也、仍執達如レ件、七月三日」といふ。

と大小前に下に居る。後見桶を引く。

【五】

狂言舟夫、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、舟の作物を橋懸に持ち出し、棹を持ちて下に居る。

一聲の囃子にて、後ワキ赦免使、幕より出で舟に乘る、狂言も立ち、

後ワキ一聲「早船の。心にかなふ追風にて。舟子やいとど。勇むらん

狂言「御急ぎ候程に。是こそ鬼界が島にて候。御上りあつて流人の行衞を御尋ね候へ

ワキ「心得てある

といひて舟より出で文を前に捧げて、

ワキ「いかにこの島に流され人の御座候か（舞臺へ入りつゝ）都より赦免狀を持ちて參りて候（と目附柱際へ出てシテに向ひつゝ）急いで御拜見候へ

と文をシテに渡す。シテ受けて、

シテ「あらありがたや候。やがて康賴御覽候へ

と文を康賴に渡す。康賴舞臺の眞中へ出で下に居て文を開き、

康賴「何々中宮御產の御祈りの爲に。非常の大赦

と歎く。

【五】

後ワキ赦免使、狂言舟夫の舟に乘つて橋懸へ出で

使「船足の早い船で、それに都合よく追風が吹いて、船頭たちもさぞ氣味のよいことであらう」

といつて鬼界島に着いた態で、船を出て舞臺に入り、

使「やあ、この島に流された人はお出でですか。都から赦免狀を持つて來ました。すぐ拜見なされい」

と赦免狀を俊寛に渡す。

俊寛「あゝありがたい。康賴すぐ御讀なさい」

と康賴に赦免狀を渡す。康賴これを開いて、

康賴「なにと――

「中宮御安產の御祈禱の爲に、臨時の大

行はるるにより、國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人のうち、丹波の少將成經。平判官入道康賴二人赦免ある所なり（と文を拜す）

シテ「何とて俊寛をば讀み落し給ふぞ

康賴「御名はあらばこそ。赦免狀の面を御覽候へ

（と文を開きたるまゝシテに渡す、シテ文を見てワキに向ひ、）

シテ「さては筆者の誤りか

ワキ「いや某都にて承り候も。康賴成經二人は御供申せ。俊寛一人をばこの島に殘し申せとの御事にて候

【六】

シテ「こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ配所。非常も同じ大赦なるに。ひとり誓ひの網に漏れて。沈み果てなん事はいかに（と文を二つに折りてしをり）。

地「この程は三人一所にありつるだに。さも恐ろしくすさましき。荒磯島にただ一人。離れ

赦が行はれ、諸國の流人を赦免する。中にも鬼界が島の流人のうち、丹波少將成經、平判官入道康賴兩人を赦免する』

（と赦免狀を讀む。）

俊寛「何故俊寛を讀み落されるのです」

康賴「あなたのお名はないのです。赦免狀の文面を御覽なさい」

（と赦免狀を俊寛に渡す。俊寛これを見て赦免使に向ひ、）

俊寛「すると、これは筆者が間違へたのか」

使「いえ、私が都で承つたのも、康賴・成經の二人をお連れせよ、俊寛一人をこの島に殘して置けとの事でございました」

【六】

俊寛「これは何といふことだ。三人とも同じ罪で、同じ配所に流されたもので、今同じやうに特別の大赦が行はれるのに、自分獨りがその救ひに漏れて、このまゝ沈み果てようとするのか、これは何といふことだ。

この間中は三人一所にゐたのだが、それでさへ恐ろしい凄しい思ひのする、この

【六】

○誓ひの綱―佛の衆生を救ふ誓願を綱に喩へた語、ここには更に恩赦の事を喩へていふ。

○荒磯島―岸邊に荒浪の打寄する島、

○海士の捨草—海士が取捨てた草。
○波の藻屑の寄るべもなく—波に漂ふ藻屑のやうに、頼りにするものもなく。
○歎くにかひも—歎くを海士の縁語貝にいひかけた。
○渚の千鳥—かひも無きを渚といひかけ、泣くの序とす。
○時を感じては—杜甫の春望の詩「國破山河在、城春草木深、感時花濺涙、恨別鳥驚心」を引いた。
○天地を動かし—古今集眞字序の「動天地感鬼神」を借りた。
○卷物—赦免狀を指す。

て海士の捨草の。波の藻屑の寄るべもなくてあられんものかあさましや。歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりなる、有樣かな（ト少しをる）
（居クセ）ワキは後見座にくつろぐ、
地ノセ「時を感じては。花も涙をそそぎ。別れを恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりもこの島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼ある所にて今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりとこのあはれなどか知らざらん。天地を動かし鬼神も感をなすなるも人のあはれなるものを。この島の鳥獸も鳴くはわれを弔ふやらん
シテ「せめて思ひのあまりにや（ト文を開きて）
地「さきに讀みたる卷物を。又引き披き同じあとを。繰り返し繰り返し。見れども見れども唯、成經康賴と。書きたるその名ばかりなり。もしも

波の荒れ狂ふ島にたゞ一人殘されて、海士の捨てた雜草のやうに、波に漂ふ藻屑のやうに、何の頼りもなくて、この上過して行かれようか、あゝあさましいことだ。何の甲斐もないことながら、あの渚の千鳥のやうに泣くより外はないのだ。
人といふものは、その場合によつては、美しい花を見ても涙の種となり、別れを悲しんでは、鳥の鳴き聲にも心を傷ましめるものだ。ことにこの島は鬼界が島といふ所なのだから、鬼の住む所で、この世ながらの地獄なのだ。このやうな所に獨り殘されて、泣かずに居られようか。この有樣を見ては、たとひどのやうな恐ろしい鬼でも、これを氣の毒と思はない者があらうか、人の情は天地をも動かし鬼神をも感ぜしめるものなのだ。この島の鳥や獸があのやうに泣くのも、わしに同情してくれるのであらう。
せめての事に文を押して見ようと、前に讀んだ赦免狀をまた披いて、同じ所を繰返し繰返して見るが、たゞ成經・康賴と書いた、二人の名だけだ。もしや禮紙に書いてありはしないかと卷き返して見るが、僧都とも俊寛とも書いた文字は無く、

○禮紙—文句を記した書狀の上を巻く別の白紙。なほその上を包紙で包む。
○僧都—僧官で僧正の次位
俊寛は僧都であつた。
○現なき—正氣のない。

【七】

○さもあらけなく—荒々しく。

禮紙にやあるらんと卷き返して見れども（ト文を裏返して見る）僧都とも俊寛とも書ける文字は更になしこは夢かさても夢ならば（ト立ち）覺めよ覺めよと現なき俊寛が有樣を見るこそあはれなりけれ

「覺めよ覺めよ」と眞中へ出て文を捨て、たら〱と大小前へ下りて下に居てしをる。成經文を拾ひて疊み懷中す。

【七】

狂言この間に舟の纜を舞臺際へ置く。ツヽ舟の中に乗り、

ツレ 時刻移りて叶ふまじ。成經康頼二人ははや。お船に召され候へとよ

ツレ二人立ち、

シテ かくてあるべき事ならねば。よその歎きをふり捨てて。二人は船に乗らんとす

と謡ひ乍ら成經は舟に乗り、康頼は仕手柱際に立つ。

シテ 僧都も船に乗らんとて。康頼の袂にとりつけば（ト康頼の背に手をかけ）

ツレ 僧都は船に叶ふまじと。さもあらけなくい

ない。あゝ夢であらうか、夢ならば早くさめてくれ」と正氣もなく泣き〱ずれる俊寛の有樣は、はたの見る眼にも氣の毒であつた。
（その間に狂言の舟人が綱の用意をする。）

【七】

（雪）時刻が過ぎてはいけませぬ、成經・康頼の二人は早く船にお乗りなされい」

いつまでもかうはしてゐられないので、二人は船に乗らうとする、俊寛僧都も船に乗らうとして、康頼の袂にとりつくと、

（僧）僧都は船に乗つてはいけない」と、如何にも荒々しくいつたので、

○うたてや—情ないことだ
○公の私—謗に公の事にも多少人情で斟酌すること。古今著聞集に「公の中の私といふはこれたり、今三日の暇をたべ」
○向ひの地—九州の本土。
○纜—舟が流れないやうに陸に繋いで置く綱。
○せん方波に—せん方ないを波といひかけた。

ひければ（康頼も舟に乗る）
シテ「うたてやな公の私といふことのあれば。せめては向ひの地までなりとも。情に乗せてたび給へ（と舟に近づく）
ワキ『情も知らぬ舟子ども。艪櫂をふり上げ打たんとす（と棹にてシテを打ちかゝる）
シテ『さすが命のかなしさに（と眞中へ下り）。又立ち歸り出船の。「纜に取りつき引き留むる（と仕手柱際にて纜を持つ）
ワキ「舟人纜おし切つて（と纜を引切り）。船を深みに押し出だす（と舟を見る）
シテ「せん方波にゆられながら。唯手を合はせて船よなう（と下に居て舟に向ひ合掌す）
ワキ『船よといへど乗せざれば
シテ「力及はず俊寛は

俊寛「あゝ情ないことだ。『公の事にも私の取計らひ』といふことがあるのだから、せめて向ふの九州の地まででも、お情で、乗せて下さい」
と船際に行く。
しかし、情も知らない船頭達は艪や櫂をふり上げて、俊寛を打たうとする。
俊寛もさすが命が惜しいので、又陸へ立ち歸つて、出て行かうとする船の纜に取りついて引き留める。
船頭は纜を押し切つて、船を沖へ押し出す。俊寛は致し方もなく、波にゆられながら、たゞ手を合はせて、
俊寛「おうい舟よ、待つてくれ」と舟を呼ぶが、乗せてくれないので、俊寛はどうすることも出來ず、もとの

○松浦佐用姫—欽明天皇の時、大伴狭手彦が高麗征討の爲に海を渡つた時に、妻佐用姫が別れを悲しんで、肥前國松浦の山に登り、船跡を慕ひ、領巾を振つて名殘りを惜んだといふ故事。後にその山を領巾振嶺といつたので「ひれふして」を承けて、この故事を出した。

【八】

○申し直し—都合よく執り成して。

○幽かなる—聲の僅かに聞えるよと、望みの少いことを籠めていふ。

○頼みを松蔭に—待つを松にいひかけた。

○泣きさして—泣くのを中止して。

○聞くや如何にと—新古今集宮内卿の歌「聞くやいかにうはの空なる風だにも、松に音する習ひありとは」の初句を借りて、今音の意を含め、待つて居れば必ずよい音づれもあるであらうといつたのである。

○夕波の—「いふ」を夕にいひかけた。

地「もとの渚にひれふして(とシテ正面に向き安坐)。松浦佐用姫もわが身にはよもまさじと。聲も惜しまず泣き居たり(とシをる)

【八】 ツレ・ワキ シテに向ひ、

ツレ・ワキロンギ(二人)「痛はしの御事や。われら都に上りなばよきやうに申し直しつつ。やがて歸洛はあるべし御心強く待ち給へ

シテ「歸洛を待てよとの。呼ばはる聲も幽かなる。頼みを松蔭に。音を泣きさして聞き居たり(と聞く心)

ツレ・ワキ(二人)「聞くや如何にと夕波の。皆聲々に俊寛を

シテ「申し直さば程もなく

ツレ・ワキ(二人)「必ず歸洛あるべしや

シテ「これは眞か(とツレへ向く)

ツレ・ワキ(二人)「なかなかに

シテ「頼むぞよ頼もしくて

波打際に倒れ伏して、あの松浦佐用姫が夫の別れを惜しんだ悲しみも、この悲しみほどは強くあるまいと、たゞ聲も惜しまずに泣いてゐた。

【八】

康賴等「おゝ、お氣の毒なことだ、私達が都に上つたならば、都合よく執り成して、間もなく都にお歸りになれるやうにしませう。氣を強く思つて、お待ちなさい」

「都に歸る時を待つてゐよ」といつてくれる幽かな聲を、僅かな力頼みにして、俊寛は松蔭に泣き止んで、聞いてゐた。

康賴等「待つて居れば、必ずその時機が來ます。私達が皆口を揃へて、あなたの事を執り成したならば、きつと間もなく都に歸ることが出來ませう」

俊寛「それはほんとか」

二人・俊「ほんとですとも」

俊寛「お願ひします、それを力頼みにしてゐます」

地「待てよ待てよといふ聲も。姿も。次第に遠ざかる沖つ波の。幽かなる聲絶えて船影も人影も消えて見えずなりにけり跡消えて見えずなりにけり

「待てよ待てよといふ聲も」にツレ・ワキ舟より出でて幕に入り、狂言も舟を持ちて幕に入る。シテ立ちて「姿も」と跡を見送り、「跡消えて」とシをりながら留む、

二人・使「待つてお出でなさい」その「待つてゐよ」といふ聲も、船中の人の姿も、次第に遠ざかつて行つて、幽かな聲も聞えなくなり、船影も人影も消えてしまつて、全く跡方もなくなつてしまつた。

〔考　異〕

諸流（五　流）

五流の間、著しい異同はない、

古謡本（貞享三年本）

異同がない、

附　記

○鬼界が島　薩摩の沖にある島。「源平盛衰記巻七」に「薩摩潟とは總名也、鬼界は十二の島なれば、五島七島と名づけたり、端五島は日本に從へり、康頼法師をば五島の内ちとの島に捨て、俊寛をば白石の島に棄てけり、丹波の少將をば奥七島が内、三の迫の北、硫黄が島に捨てけり」とある。

○丹波の少將　藤原成經。成親の子。右近衛少將で丹波守であつたから、丹波少將と呼ばれた。父成親が俊寛の鹿谷の別莊で平家を滅ぼさうと企てたことが顯れて、之に連坐して、治承元年六月俊寛・康頼と共に鬼界が島に流された。

○平判官入道康頼　平頼季の子。後白河院の檢非違使であつたから、平判官と呼ばれた。成經・俊寛等と平家討滅を謀つて流罪に處せられたもので、

その途中周防の室積で出家して性照といつた。赦免されて歸洛した後「寶物集」を著した。
○浦の濱木綿―萬葉集柿本人麿呂の歌「み熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどたゞに逢はぬかも」に據り、百重を轉じて一重とつゞけ更に一重なるを承けて、麻衣といふ。即ち「浦の濱木綿一重なる」までは麻衣の序である。濱木綿は濱おもとともいひ、海岸に生ずる草で、夏の末に白い花を開く。
○白衣―神詣に着る淸淨な衣。平家物語卷二に「日數積りて裁ち更ふべき淨衣もなければ、麻の衣を身に纏ひ」
○散米―神前に參る時身の不淨を祓ひ淸める爲にまき散らす米をいふ。
○白木綿花の御祓―御祓は神前に參る爲に川の邊で身を淨めること。この時御幣を用ゐるが、こゝにはその用意もないので、濱木綿の花が白いのを幸ひに、これを御幣の代りとして御祓をするとの意。平家物語に「御幣紙もなければ、花を手折りて捧げつゝ」
○俊寛―源大納言雅俊の孫、仁和寺法師寛雅の子で、法勝寺の執行であつた。その別莊東山鹿が谷で、大納言成親等と平家の討滅を謀り事露れてこの鬼界が島に流され、治承三年この島で死んだ。年卅七。
○重陽―九月九日の節。魏文帝が鍾繇に與へた書に「歳往月來忽復九月九日、九爲二陽數一而日月並應、俗嘉二其名一以爲レ宜二於長久一、故以享宴高會」とある支那の風俗から來たもので、菊花を翫び菊酒を汲んで祝ふのである。
○彭祖―列仙傳に「彭祖服二菊花一壽、其年七百餘歳、顏色壯而如二十七八歳一也」。この事「菊慈童」（此慈童）に作られる。委しくは同曲の解說にいふ。
○法勝寺―洛東白川の北にあつた寺。俊寛はこの寺の執行であつた。
○法成寺―京都近衞の北京極の東にあつて、道長の建立した寺。法勝寺と音が近いので、この寺の名を出し、更に喜見城と續けたのである。
○喜見城―忉利天主帝釋の宮城で、樂しみの盡きない所であるといふ。
○五衰減色の秋―五衰は天人五衰で、天衆にも命終の時があつて、衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不レ樂二本座一の五衰が現れるといひ、減色は草木の色の變ることで、天人に五衰があり、秋に木の葉の枯れるやうに、自分達も衰へ果てたとの意。

俊成忠度（しゆんぜいただのり）

觀（寶 剛 喜）

解說

【能柄】 二番目 劇的夢幻能

【人物】 **ツレ** 藤原俊成、**トモ** 同從者、**ワキ** 岡部六彌太、**シテ** 平忠度の靈

【所】 京都五條 藤原俊成邸

【時】 壽永三年（三月）

【異稱】 〔俊成忠則〕とも書き、〔五條忠度〕ともいつた。

【作者】 能本作者註文に内藤藤左衛門（後には河内守と云ふ）の作としてゐる。この外に古記錄は見當らない。

【梗概】 平忠度を討ち取つた岡部六彌太が、その箙の中に書き遺された短冊を持つて、藤原俊成を訪ねると、忠度の靈が現れて、自分の歌を千載集に讀人知らずとして入れられた恨みを述べ、和歌の物語をし、やがて修羅の苦患を示す。

【出典】 忠度の歌を千載集に入れられた事は平家物語卷七「忠度の都落の事」（源平盛衰記卷三十二「落行人々歌附忠度自レ淀歸二謁俊成一事」）、

岡部六彌太に討ち取られる事は、同卷九「忠度の最期の事」（盛衰記卷三十七「忠度通盛等最後事」）に據り、古今集の序を文のあやとしたものであるが、平家物語の本文は〔忠度〕の解說に揭げることとして、こゝには省略する。

【解說】本曲と同樣、忠度を主題とした曲には〔忠度〕があるが、それは、俊成御內の者が忠度の最期の地を弔ふ普通の修羅物で、シテは前段には老樵夫として出て、後段には忠度の姿を現して、千載集に讀人知らずとして入れられた恨みを述べ、その當時及び最期の有樣を委しく語るのであるが、本曲には前ジテがなく、直に忠度の靈が現れて、「忠度」と同樣の事は簡單に述べて、寧ろ歌物語や修羅の闘諍を主に描いたものである。この內容の差は、恐らくは〔忠度〕が前に作られてゐたので、これとの重複を避けて、新しい方面を開拓したものと思はれる。そして修羅物に於けるクセの歌物語が一つの異例として新工夫に成功したものであらう。前ジテがなくて、直にシテが亡靈として現れる修羅物には〔清經〕など幾つかあり、この種の曲は、ワキとの關係が歷史的緣故に富んでゐるものであるが、その爲に夢幻的興味を殺がれることは少く、却つて夢とも現とも定め難い感じを深めるものが多い。本曲も亦その一で、ワキを歷史的人物にとつた場合には、正則な複式夢幻能とする〔敦盛〕などよりは、このやうに、半能の形を採つた方が成功し易いやうに思はれる。

【一】

ツレ藤原俊成、直面・風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、トモ從者、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて太刀を持ち、ツレは脇座にて床几にかゝり、トモはその次に坐す、

ワキ岡部六彌太、侍烏帽子・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帶・小刀・扇の裝束にて、短冊をつけたる矢を腰にさし、橋懸一の松に立ち、

【一】

舞臺は京都五條、藤原俊成の邸。ツレ藤原俊成、トモの從者を隨へて登場してゐる。ワキ岡部六彌太、俊成卿の門外に來て第一聲。

ワキ「かやうに候者は、武藏の國の住人、岡部の六彌太忠澄にて候。さても今度西海の合戰に。薩

岡部「私は武藏國の住人の岡部六彌太忠澄です。さて今度一の谷の合戰で、薩摩守忠度を私の手にかけて討ち取りました

○岡部六彌太忠澄—猪俣黨の部下。○西海の合戰—壽永三年二月一の谷の戰を指す。○薩摩の守忠度—平忠盛の

子、清盛の末弟。左兵衛佐薩摩守で、和歌の上手であつた。岡部六彌太に討れた時、年四十一。「忠度」參照。
○尻籠—矢を入れて背に負ふ具。矢壺、矢籠とも書く。
○五條の三位俊成卿—藤原俊忠の子、定家の父。千載和歌集の撰者で、世に勝れた歌人。正三位皇太后宮大夫で、五條に住んでゐたから、五條の三位と呼ばれ、出家して釋阿と號した。元久元年十一月九十一歳で死んだ。
○御値遇—出合ふ事、こゝでは知合、師弟の關係であつたことをいふ。
【三】
○伺候—貴人の許へ參ること。

摩の守忠度をば。某が手にかけ失ひ申して候。御最期の後尻籠を見奉れば。短冊の御座候。又承り候へば。五條の三位俊成卿と。和歌の御値遇の由申し候間。この短冊を持ちて參り。俊成卿の御目にかけばやと存じ候

といひて、舞臺際へ出でツレの方に向ひ、

【三】

ワキ「いかに案内申し候

ト、立ちて名乘座へ出で、

トモ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「岡部の六彌太忠澄が參りたる由御申し候へ

トモ「心得申し候

ト、ツレの前へ出で辭儀して、

トモ「いかに申し上げ候

ツレ「何事にてあるぞ

トモ「岡部の六彌太忠澄の伺候申されて候

が、死なれた後、その矢壺を見ると、短冊がありました。それで、忠度は五條三位俊成卿とは和歌の道でお心易い間柄だと聞きましたから、この短冊を持つて行つて、俊成卿のお目にかけようと思ふのです」

ト、見物人に事件の概略を紹介して、さて、俊成家に着いた態で、

【三】

岡部「お頼み致します」

ト、俊成の從者が出て、

從者「どなたです」

岡部「岡部六彌太忠澄が參りましたと、お取次ぎ下さい」

從者「承知しました」

俊成の前へ出て、

從者「申しあげます」

俊成「何の用だ」

從者「岡部六彌太忠澄が伺候せられました」

ツレ「こなたへと申し候へ

トモ「畏つて候

名乗座へ出でワキに向ひ、

トモ「こなたへ御參り候へ

ワキ「心得申し候

ワキ舞臺の眞中へ出で下に居る（トモ元の座に着く）。ツレ、ワキに向ひ、

ツレ「いかに忠澄。さて唯今は何の爲に來り給ひて候ぞ

ワキ「さん候唯今參る事餘の儀にあらず。西海の合戰に薩摩の守忠度をば。某が手にかけ失ひ申して候。御最期の後尻籠を見候へば。短册の御座候。承り候へば忠度とは。淺からぬ和歌の御値遇の由承り候間。御目にかけばやと存じ。唯今持ちて參りて候

ツレ「こなたへ賜はり候へ

俊成「こちらへお通り下さいと申せ」

從者「畏りました」

岡部の傍へ行き、

從者「こちらへお通り下さい」

岡部「承知しました」

岡部、一室に導かれた體で、舞臺は俊成卿の一室となる。

俊成「忠澄、唯今は何の用でお出でなされたのだ」

岡部「はい唯今伺ひましたのは、別の事ではございません。一の谷の合戰で、薩摩守忠度を私の手で討ち取りましたが、お亡くなりになつた後、その矢籠を見ますと、短册がございました。承りますれば、忠度とは和歌の道で深いお知合のやうに伺ひましたので、これをお目にかけようと思つて、唯今持つて參つたのです」

俊成「こちらへ下さい」

○弓馬の道ならねど―武士として大切な武名ではないが、和歌の名譽を世に殘したとの意。
○なになに―歌や文を讀む時にいふ發語。
○行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし―平家物語・源平盛衰記などに載せられた歌。〔忠度〕の解說參照。
○破戒無慚―破戒は佛法の戒律を破ること、戰爭は佛戒の第一殺生戒を犯すものである。無慚は罪を犯して心に恥ぢないこと。
○仁義禮智信―儒教で人の常に行ふべき道とする五つの德目。これを五常といふ。
○文武二道の忠度の―文武二道兼備の忠度といひかけ、「道」を法に轉じ、法の船とつゞけた。法の船は佛が衆生を救つて極樂の彼岸に渡すことの譬喩。
○彼の岸―生死迷妄の[illegible]を此の岸、眞實涅槃の境界を彼の岸と喩へていつたのである。
【三】
○幕―[illegible]。
○前途程遠し―[illegible]本曲の本に記す。
○八重の潮路―こゝでは深い海底、地獄・修羅道の意。
○九重―都。前の八重と數

ツレ箙より矢を拔きてツレに渡しもとの座に歸る。ツレ矢を受取りて、

ツレ「げにや弓馬の道ならねど。いつしか世に名を殘し置き給ふ事のあはれさよ。（短冊を右手に持ちて）「なになに旅宿の花といふ題にて。行き暮れて木の下蔭を宿とせば。花や今宵の主ならまし

地上歌「痛はしや忠度は（矢を下に落して）痛はしや忠度は。破戒無慚の罪を恐れ。仁義禮智信。五つの道も正しくて。歌道に達者たり弓矢に。名を揚げ給へば。文武二道の忠度の。船を得て彼の岸の。臺に到り給へや臺に到り給へや

ツキ「五つの道も正しくて」に立ち切戸より入る。

【三】

シテ平忠度、面中將・黒垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白淺黃・着附摺箔・單法被・白大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて、破戒無慚の罪を恐れ」の頃に幕を出で、地上歌に体に常座へ出て、

シテサシ「前途程遠し。思ひを雁山の夕の雲に馳す。八重の潮路に沈みし身なれども。猶九重の春に

（[illegible]を受取つて、）
俊成「これは武事の道ではないが、このやうに歌道で、早くも世に名を殘されたのは、實に殊勝なことだ。何といふ歌だな……『旅宿の花』といふ題で――『行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし』
（山路の花を一日あちらこちら眺めあるいてゐるうちに、日が暮れてしまつて、[illegible]、木の蔭を宿とすれば、花こそ今晩の宿主となつてくれるであらう）
地「あゝ氣の毒なことだ。忠度は佛戒を破つて恥ぢないやうな、さういふつまらない人間になることを恐れて、仁義禮智信の五常の道を正しく嗜み行ひ、また和歌の道にも勝れた人であつた。そして、武功をも立てゝ名を揚げられたのだから、實に文武二道兼備の人といふべきだ。どうかこの上は、佛の導きを受けて、極樂淨土に往生せられるやうに」

【三】

（[illegible]）
忠度「これから先の道のりを思ふと、隨分遠い心持がして、[illegible]のことが思ひやられる。
（冥途から遙々出て來た心持を獨言にいひ、

を重ねて文(あや)とした。
○ともにながめし花の色―俊成と一所に花を眺めた自分の姿との意。
○命ただ心に叶ふものならば―古今集しろめの歌「命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし」を引いた。
【四】○千載集―俊成が後白河上皇の院宣を奉じて撰び、文治三年九月奏上した勅撰和歌集。巻數二十、古今・新古今に次いで勝れた歌集と稱せられてゐる。
○讀人知らずと書かれしこと―平家物語「忠度都落の事」に「件の忠度が俊成に遣して行つた)巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、名字をば表はされず、故郷花といふ題にて、よまれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられける」
○よしや―それでも構はない。
○白雪の―さこそと思ひ知らるゝを白にいひかけ、雪の降るを古きにいひかけた。

ひかれ、ともにながめし花の色。わが面影や見えつらん。命ただ心に叶ふものならば、何か別れのもの憂かるべき。(ツレに向ひ)いかに俊成卿。忠度こそこれまで參りて候へ

【四】ツレ「不思議やな夢現とも分かざるに、薩摩の守の御姿。現れ給ふ不思議さよ

シテ「さても千載集に、一首の歌を入れさせ給ふ。御志は嬉しけれども。讀人知らずと書かれしこと。心にかかり候

ツレ「尤もそれはさる事なれども。朝敵の御名をあらはさんは世の憚りなり。よしやこの歌あるならば。御名は隱れよもあらじ。御心安く思し召せ

シテ「われもさこそと白雪の。古き世までも歌あらば

忠度「自分は深い那落の底に沈んだものではあるが、やはり都の春の様子が偲ばれて、かうして出て來たが、俊成卿と一所に花を眺めた頃の、あの自分の面影が、今も俊成卿に見えることであらう。一體人の壽命がわが思ふ通りになつて、死ぬといふことさへなければ、一時の別れは何も辛いことはないのであるが、たゞ死といふことがあるから、悲しみに堪へないのだ」

(といひながら俊成の前に立つて、)

忠度「俊成卿、忠度がこゝへ參りました」

【四】

俊成「これは不思議だ、夢ともなく現ともなく、薩摩守のお姿の見えるのは、實に不思議だ」

忠度「何はさて置き、千載集に私の歌を一首お入れ下さつた御親切は嬉しいが、讀人知らずと書かれたのが氣になります」

俊成「それは御尤もですが、朝敵であるあなたの名を、はつきりと出すことは遠慮しなければなりません。しかし名は出さないにしても、この歌がある以上、あなたの名が世間に知れないことは萬々ありますまい。御安心なさい」

忠度「私もさうだとは思ひます。歌があれば、永い後の世までも……」

○武藏鐙―本曲の末に記す
○われ人の―自分も他人も
○深見草―牡丹の異名。情の深きを草の名にいひかけ草の名―引くと續けた。
○さゝ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな「千載集春上に「故鄕の花といへる心をよみ侍りける讀人知らず」として收めてある。
○電光―世は電光―人生の短いこと。淮南子に「人生二天地之間一、如二石火、電火一」
○胡蝶の夢―果敢しい短い喩。莊子、齊物論に「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也、自喩適レ志與、不レ知レ周也、俄然覺、則蘧々然周也、不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲上レ周與」
○なにはの事も―何かの事もを地名の難波にいひかけた、後拾遺集遊女宮木の歌「津の國のなにはの事か法ならぬ遊び戲れまでとこそ聞け」を引いた。
○忠度なり―唯法なりを忠度にいひかけた。
【五】
○凡そ歌には六義あり―以下「クセ」の文は、俊成と忠度とが歌道について語り合ふ對話の心持である。
○六義、六道―末に附記す。

ツレ「その名もさすが武藏鐙。隱れはあらじわれ人の
シテ「情の末も深見草
ツレ「引くや詠歌も心ある
シテ「故鄕の花といふ題にて
地―歌「さゝ波や。志賀の都は荒れにしを。志賀の都は荒れにしを。昔ながらの。山櫻かなと。詠みしも永き世の。譽れを殘す詠歌かな。げにや憂き世は電光。胡蝶の夢の戲れに。謠へや舞へや津の國の。なにはの事も忠度なり。疑はせ給ふなわれ疑はせ給ふな

シテ舞臺の眞中へ出で下に居る。

【五】
ツレサシ「凡そ歌には六義あり。これ六道の巷に詠じ
地下「千早振る神代の歌は。文字の數も定めなし

俊成「その名は隱れるものでありません、誰の歌にしましても……」
忠度「お情は深く感謝してゐます」
俊成「かの集に入れた歌は心持も深いものて……」
忠度「故鄕の花といふ題で――「さゝ波や志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな」
(昔の都志賀の里は荒れてしまつて、面影もないが、たゞ櫻の花が昔に變らぬ麗はしさで咲いてゐる)
と詠んだのが、後世に名譽を殘す歌となりました。いや實に人生は電光のやうな短いもので、謠へや舞へやと遊び樂しんでゐる事も、あの胡蝶の夢のやうな短いはかないものに過ぎないので、結局何かのことはすべて佛法によるほかないのです。……から申す私が忠度であることをお疑ひ下さいますな」
【五】
俊成「佛法といへば、和歌には六義があるが、これも佛教の六道に割り當てゝ詠むことなのです。そして神代の歌には文字の數も定まつてゐなかつたのです」

〇千早振る神代の歌は|古今集序に「ちはやぶる神代には歌の文字も定まらず、すなほにして言のこゝろ分きがたかりけらし」とあるのをいふ。千早振るは神の枕詞。〇御兄|古今集序の註に「素盞鳴尊は天照るおほむ神のこのかみなり」とあるのに據つたもので、尊は天照大神の御弟であるが、古くは長幼に拘らず、男兄弟のことを兄、女兄弟のことを妹ともいつたのである。〇素盞鳴の尊より三十一字に|古今集序に「人の世になりて、素盞鳴尊よりぞ三十文字あまり一文字は詠みける」〇女と住み給はんとて|末に記す。〇八雲立つ出雲八重垣妻こめに八重垣つくるその八重垣を|古今集序の註に見えた歌。古事記には第三句「妻ごみに」とある。〇今の世のためし|現今行はれてゐる短歌の先例。〇明石の浦の朝霧|古今集柿本人麿の歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ」を指す。〇人丸世に亡くなりて|末

シテ『その後天照大神の御兄

地『素盞鳴の尊より三十一字に定め置きて。末世末代の。ためしとかや

地クセ『その故は。素盞鳴の尊の。女と住み給はんとて。出雲の國にいまして。大宮造りせし處に。八色雲の立つを。御覽じて尊の。一首の御詠かくばかり。八雲立つ出雲八重垣妻こめに。八重垣つくる。その八重垣をと。神詠もかたじけなや今の世の、ためしなるべし。（シテ立ちこれより仕科）さてもわれ須磨の浦に。旅寢して眺めやる。明石の浦の朝霧と。詠みしも思ひ知られたり

シテ『人丸世に亡くなりて

地『歌の事とどまりぬと。紀の貫之も躬恒もかくこそ、書き置きしかども。松の葉の散り失せず。眞柝のかづら。永く傳はり鳥の跡あらんその程

忠度「その後天照大神の御弟、素盞鳴尊から三十一字に定められて、後世の先例となつたのですね」

俊成「それは、素盞鳴尊が稻田姫とお住ひにならうと思つて、出雲國で御殿をお造りになつた時、幾重にも雲が立ち涌いたのを御覽になつて、尊が一首の御歌を、「八雲立つ出雲八重垣妻こめに八重垣つくるその八重垣を」

（雲が幾重にも四方から立ち起つて、自分が妻と一所に住まうとする御殿に、幾重もの垣根を作つてくれる。ほんとに嬉しいことだ）

とお詠みになつた、ありがたい神詠が今日の短歌の先例となつたのです」

などと二人で語り合ひ、

忠度「さう申せば、私は合戰の爲に須磨の浦に旅寢をしました時、あのあたりの景色を眺めて、人麻呂の『ほのぼのと明石の浦の朝霧に』といふ歌の趣を味ひました。あの人麻呂が死んだ後は、和歌の道がすたれてしまつたと、貫之も躬恒も、さう書き殘して置きますけれど、いつまでも衰へることはなく、永く傳はつて、文字のある限りには、この後もよも書き

に記す。
○紀貫之、自筆ー末に記す。古
○松の葉の散り失せずー古今集序に「松の葉の散り失せずして、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡久しく留まれらば」とあるのを引いた、松の葉、正木は長いことの喩、鳥の跡は文字のこと。
○敷島ー日本。
○男女夫婦の媒ー古今集序「男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」に據る。
【六】
○けうとさーキョオトキと讀む。氣疎き。ものすごい。
○修羅王ー常に闘爭を事とする修羅道の王。
○梵天ー色界の初禪天。忉利天のこと。
○帝釋ー忉利天の主。四天王及び他の三十二天を統領し、佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征する天王。
○もとの下界ー修羅道を指す。
○[illegible]ー帝釋に[illegible]んだのに[illegible]、修羅王の部下となつてゐるのである。
○瞋恚の焔は荒磯の一瞋恚の烈しいことを焔に喩へ、焔の荒いを荒磯にいひかけた。

は、よも盡きせじな敷島の。歌には神も納受の。男女。夫婦の媒ともこの歌の情なるべし
地「あら名殘惜しの。夜すがらやな
「カケリ」にシテ戰闘の様を示す。

【六】
ツレ「不思議や見れば忠度の。氣色變りてけうとき有様。こはそも如何なる事やらん
シテ常座にて脇正面の方を見、
シテ「あれ御覽ぜよ修羅王の。梵天に攻め上るを。帝釋出であひ修羅王を。もとの下界に追つ下す
地「すは敵陣は亂れあひ。すは敵陣は亂れあひ。をめき叫べば忠度も。瞋恚の焔は荒磯の。波の打物抜いて（太刀を抜きて仕科）。切つてかかれば敵人は矛を揃へてかかり給へば。忠度あひ向つて。うち拂へばそのまま見えず。敵を失ひあきれて

ることはありますまい。この大和歌は神も御嘉納遊ばすもので、男女夫婦の媒となるのもこの歌の心持です。……おゝ名殘の惜しまれる夜です」
といつてゐるうちに様子が變つて、
「カケリ」
を演じて、戰爭の物凄い様を示す。

【六】
俊成「不思議だ、見れば忠度の様子が變つて、物凄い有様となつた。これは一體どうした事であらう」
忠度「あれを御覽なさい、修羅王が梵天に攻め上つたのを、帝釋が對抗して、修羅王をもとの修羅道に追ひ下しました。……それつ、敵の帝釋の軍が亂れ合つて、わめいてゐる」
と、帝釋の軍が亂れ合つて、わめき叫ぶと、忠度も憤怒の炎に燃えて、刀を抜いて切つてかゝると、帝釋の軍は矛を揃へてこれと對抗せられるので、忠度がうち向つてその矛をうち拂ふと、そのまゝ見えなくなつてしまふ。敵を見失つて、呆れて立つてゐると、天か

立てば。天よりは。火車降りかかり。地よりは鐵刀足を貫き立つも立たれず居るも居られぬ（眞中に安坐して太刀を捨て）。修羅王の責。こはいかにあさましや（と面伏せ）

シテ「ややあつてささ波や（と直し）

地「ややあつてささ波や（と扇を掩けて立ち）。志賀の都は荒れにしを。昔ながらの。山櫻かなと。梵天感じ給ひしより。劍の責を免れて。くらやみと、なりしかば。燈火を背けては。共に憐む深夜の月。花を踏んでは同じく惜しむ。少年の春の夜も。はやしらしらと明け渡れば。ありつる姿は消え消えと。ありつる姿は鷄籠の山。木隱れて失せにけりあと木隱れて失せにけり（と常座にて留拍子を踏む。）

ら火の車が降りかゝり、地からは鐵刀が出て足を貫く。忠度は立つても坐つても居られず、修羅王と同樣の責め苦にあつて、

忠度「これはどうしたことであらう、實にあさましいことだ」

と歎いてゐると、暫くして――

「さゝ波や志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな」

といふ歌に帝釋が御感心になつて、劍の責め苦をお免しになつて、あたりはくらやみとなつた。そして、朗詠に謠はれる――

「燈火を背けては共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜しむ少年の春」

といふ句の通、春の頃の夜更の月を偲んでゐるうちに、春の夜は白々と明け渡つたので、今まで見えてゐた忠度の姿は、鷄の鳴く曙の、山の木蔭に隱れて、見えなくなつてしまつた。

○波の打物―波の打つといひかけた。打物は鑄物に對し、打ち鍛へた刃物をいふ。
○歳人―帝釋の軍をいふ。
○火車―地獄で罪人を載せて責める火の車。
○鐵刀―劍樹地獄にあり、罪人を苦しめる。
○修羅王の責―修羅王と同じやうに責められること。
○燈火を背けては―和漢朗詠集白居易の詩句「背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春」を引いた。
○鷄籠の山―本朝文粹、紀長谷雄の文「鷄籠之山欲レ曙」を引き、鷄の鳴く山との意に用ゐた。

考異

（一）人丸世に亡くなりて—古今集序の「人麻呂なくなりにたれど、歌のこと留まりぬ」を引いた。原文は人麻呂の死んだ後も、歌の道は殘つたとの意であるのを、こゝには歌の道がすたれたとの意に誤解したのである。人丸は姓は柿本、萬葉歌人の中、山部赤人と雙び稱せられた人、

（二）紀の貫之—古今集撰者の一人で、その序文の筆者。〔蟻通〕〔草子洗小町〕參照。

（三）躬恒—姓は凡河内、古今集撰者の一人。委しくは〔草子洗小町〕の語釋にいふ。序文の筆者ではないが、撰者の一人であるから、貫之と續けて擧げたのである。

鍾馗(しょうき)

觀(寶 春 剛 喜)

解　說

【能柄】五番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　終南山麓の者(旅人)、前シテ　鍾馗の靈、狂言　山下の者、後シテ　鍾馗

【所】支那終南山より都に到る途中

【時】(九月)

【作者】能本作者註文・二百十番謠目錄ともに、金春禪竹の作とす。但し世阿彌の五音曲條々に、哀傷音曲の末語の文」として、

　一生は風の前の雲、夢の間に歎じ易しの謠、哀傷の本風也。

と、本曲のクセの初句を掲げてゐるのを見れば、このクセの文は古くから謠はれてゐたものを、本曲に引用したものかと思はれる。金春禪竹の五音三曲集に、哀傷の例として、本曲のクセの初め「一生は風の前の雲」から、クセ上地の終り「人界をいつか離れはつべき」(本曲と同文であるが、二箇所少しの相違のあることは、語釋に於て述べる)までを掲げてゐるのは、本曲を例として擧げたものであらうと思はれるのであるが、同じ禪竹の五音三曲集の哀傷皮味の例には、前述のクセの全文を掲げた上に、このクセの前文として、

夫三界やすきことなし、なをし火宅のごとしと、佛もとき給へり。ましてや我等衆生として、ことにまよひのうみふかき、生死の世のあわれさに、いつかうかまん、無明のなみの、よるべいつくとさだめまし。

と、現行の本曲に見えない文を掲げてゐるのは、もとこの文がクリ・サシとして謡はれてゐたものを、後に省略したものであらうか。

【梗概】支那終南山の麓の者が奏上すべき事があつて、都へ上らうとして出掛けると、鍾馗の靈が現れ出て「自分は進士に及第の時自殺した執心を飜して、國土を守護しようと思ふから、その事を奏上して下さい」といつて、世間の無常を說き、やがて眞の姿を現して奇瑞を示す。

【出典】鍾馗の傳は〔皇帝〕の解說に掲げたから、こゝには省略する。

【概評】鍾馗を主題とした曲には、本曲の外に〔皇帝〕があり、それは現在物として脚色した、凄壯の感を與へるものであるが、これは幽靈物として脚色したもので、後ジテ鍾馗が旅人の夢に現れるのであるから、演奏效果を弱めてゐるばかりでなく、後段全體がシテの仕方話といふよりは、純粹の地の文、叙事文の形になつてゐる爲に、一層無理な點が多いやうに思はれる。

前段

【一】舞臺は初め支那終南山の麓で、ワキ終南山麓の者旅に出る處で登場。

旅人「私は支那の終南山の麓に住んでゐる者ですが、天子に奏上致す事があるので、唯今都に出掛けるのです。

（旅人、目に觸れ[illegible]）

旅人「終南山を出立して、野路の旅に草の露を分けて行くと、遠くの村々に煙が一面に立ち上つて、人家の多いことが知られる。それから又海路を遠く渡つて來ると、浦に歸る漁船が波に泛んでゐて、磯

【一】名乘笛にて、ワキ旅人、着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは唐土終南山の麓に住居する者にて候。さてもわれ奏聞申すべき事の候間。唯今帝都に赴き候

ワキ道行「終南山を立ち出でて。終南山を立ち出でて。野草の露を分け行けば。遠村に煙滿ち人屋しるき眺望の。海路遥かに過ぐれば釣の小舟も

【一】終南山―支那陝西省にあり、秦嶺山脈の一峯で、長安の南に當る。

〇歸る波―小舟の歸るを波のかへるにいひかけた。
〇よる程もなき―波の寄るを所の近寄る意にいひかけた。「刊行會本の傍註に「波の寄るを夜に掛く、夜もまぢかき意」といつてゐるのは、如何であらう。
【二】
〇誓願の子細―事情があつて立てた誓で。
〇賢人をなし給はば―諸註「君が賢人を任用し給はばの意」としてゐるが、疑はしい。「賢君として仁政を施し給はばの意でなからうか。
〇鍾馗―唐高祖の武徳年中の人であつたといふ。「皇帝」の解説に委しくいふ。

歸る波。よる程もなき、眺めかなよる程もなき眺めかな

両諸者静かに漕げば、と右の方に向き二三足出で、またもとに歸り、道行済みて脇座へ行く、

【三】

シテ鍾馗の霊、面三日月・黒頭・金襴鉢巻・襟花色・着附無地熨斗目・水衣・腰帯・扇の装束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）なうなうあれなる旅人に申すべき事の候

ワキ脇座にてシテに向ひ、

ワキ「何事にて候ぞ

シテ「われ昔誓願の子細あるにより。悪鬼を亡ぼし國土を守らんとの誓ひあり。君賢人をなし給はば、宮中に現じ奇瑞をなすべきとの。この事を奏してたび給へ

ワキ「これは不思議の御事かな。さてさて御身は如何なる人ぞ

シテ「今は何をかつつむべき。われは鍾馗といへ

邊近くのよい景色だ」
こいでゐるうちに、旅人は進んで[illegible]、[illegible]の近くになる。

【三】

シテ鍾馗の霊が登場。

鍾馗「もしもし、そちらへお出でになる旅人にお話がしたい」

旅人「何の御用です」

鍾馗「自分は昔ある事情があつて誓ひを立てゝゐるのだ。その誓ひといふのは、悪い鬼を亡ぼして國土を守護することだ。それで、わが君が仁政をお施しになれば、宮中に現れて、めでたい瑞相をお見せ致しますと、かう奏上して下さい」

旅人「これは不思議なお話です。一體あなたはどういふ方なのです」

鍾馗「今は何を隠さう、自分は鍾馗といふ

○進士—唐の代に官吏登用試験として、秀才、明經、進士の四種があり、後世、進士の試験が最も重いものであつた。
○及第—試験に合格すること。鍾馗は進士の試験に落第したが、死後、緑袍を賜はつて及第の取扱ひを受けた。
○亡心—亡靈。
○なかなかなり—さうである。
○夕暮の—といふを夕にいひかけた。
○草蟲露に聲しをれ—聲しをれは聲の弱ること。眼前の光景に寄せて人生の無常を言ふのである。
○終には添はぬ—いつかは離れる。
○いつをいつとか定めん—上の「いつ」はいつかは來る最後の日、死期をいふ。死期はいつかは來るのであるが、その日がいつであるかは豫知せられない、老少不定であるとの意。
【三】
○三界—衆生の生死輪廻する世界、欲界、色界、無色界の三をいふ。
○猗蘭殿—[illegible]洞冥記に「[illegible]殿[illegible]」武帝于此[illegible]

る進士なるが。及第のみぎんに亡ぜし。その執心を飜し。後世に猶望みあり（と舞臺に入り）

ワキ「げにげに鍾馗の御事は。世に隱れなき進士なるが。その亡心にてましますか

シテ「なかなかなりと夕暮の

ワキ『物すさましき

シテ『折からに

地上歌「草蟲露に聲しをれ。草蟲露に聲しをれ。尋ぬるに形なく。老松既に風絶えて。問へども松は答へず。げにや何事も。思ひ絶えなん色も香も。終には添はぬ花紅葉いつをいつとか定めん

【三】（シテ舞臺の眞中へ行きて坐し、ワキも下に居る）

シテ「一生は風の前の雲。夢の間に散じ易く三界は水の上の泡光の前に消えんとす。猗蘭殿の

進士だが、あの試験に及第する時自殺した執着の心を改めて、後世の爲に善をなさうと思ふのだ」

旅人「いかにも鍾馗といふ方は、世間に名高い進士ですが、あなたがその亡靈なのですか」

鍾馗「いかにもその通りだ」

といふその時は、夕暮の、あたりの物凄い折であつた。

鍾馗「かうして、草の露に鳴く蟲の聲は次第に弱つて、跡方もなくなつてしまひ、老松にも風はもはや吹いて來ず、いつまで待つても松風の音もしないのだ。蟲の聲や松風の音ばかりではない。世間の事一切亡びないものはなく、花の香も紅葉の色も、いつかは離れてしまふのだ。しかし、そのいつかは來る最後の時がいつであるかは分らないもので、全く老少不定の世の中だ」

【三】

鍾馗「人間の一生といふものは風に吹き拂はれる雲のやうなもので、夢の間になくなつてしまひ、この娑婆世界は水の面の

ん」と論つてゐるが、金春禪竹の五音次第には「いらんでん」とある。
○有爲―因緣によつて生ずる諸現象。
○翡翠の帳―靑々とした美しいとばり。
○有漏の願力―漏は煩惱のこと。こゝに有漏とあるのは無漏の誤りで、(五音次第にはむろとある)、無漏の願力とは、煩惱を離れて佛果を願ふ心をいふ。
○わんりき―通じない。五音次第に、わんりきとあるのは、願力で、無漏の願力を指すのであらう。
○朝顏の花の上なる―住吉物語の長歌「朝顏の花の上なる露よりも、はかなきものはかげろふの、あるかなきかの心地して、世を秋風のうち靡き、むれゐる田鶴を別れつゝ、啼くとりつみ[illegible]の[illegible]」を引き、むれゐる田鶴[illegible]詞を轉じて、
○かげろふ―陽炎、地上に立上る水蒸氣。
○世を秋風の―世を飽いを、秋にいひかけた。
○四手の田長―時鳥の異名。四手は死出と同音であるから、冥途に通ふ鳥として忌まれてゐる。

内には有爲の悲しみを告げ。翡翠の帳の内には有漏の願力ありとかや。榮華はこれ春の花。昨日は盛んなれども。今日は衰ふわんりきの。秋の光。朝に増じ。夕に滅ずとか。春去り秋來つて。花散じ葉落つ時移り氣色變じて。樂しみ既に去つて悲しみ早く來れり

シテ『朝顏の。花の上なる露よりも

地、はかなきものはかげろふの。あるかなきかの心地して。世を秋風のうち靡き。群れゐる田鶴の音を鳴きて四手の田長の一聲も。誰が冥路をか知らすらん。あはれなりける人界をいつかは離れはつべき

【四】

ツレ「これは不思議の御事かな。急ぎ帝都に赴きつつ。委しく奏聞申すべし。暫く待たせ給へとよ

やうな果敢ないもので、電光のやうに忽ちに消えてしまふものだ。だから、いかに立派な御殿の内にゐても、諸行無常の悲しみを知らないでは濟まされず、從つて美しい部屋の中にゐても、菩提を求める心が起るのだ。この世の榮華は、春の花が、昨日は盛んであつても、今日ははや衰へてしまふやうな、又あの澄みきつた秋の光が朝は盛んだが、夕には衰へてしまふやうなもので、春が去ればすぐ秋が來て、花は散り葉は落ちて、時節に忽ちに移り變り、樂しみは間もなく去つて、悲しみが早く來るものだ。

全くこの世は、朝顏の花の上の露よりもなほ果敢ないもので、あの陽炎のやうな、あるやらないやら分らない心持がするので、この世が厭はれ、この世が悲しまれ、死出の田長の鳴き聲を一聲聞いても、誰か死んで、その人を冥土へ導いてゐるのではないかと思はれるのだ。このやうな果敢ない人間世界をいつすつかり離れてしまふことが出來るのであらう」

【四】

（ツレ）「實に不思議なことです。急いで都に行き、委しく奏上致しませう。暫く、お待ちなされませ」

シテ「とても見みえし夢の中。眞の姿を現さんと
（立ち）
ワキ「いふより早く
シテ「氣色變りて
地「傳へ聞く佛在世の。傳へ聞く佛在世の。淨藏淨眼の如くに。その高さ七多羅樹。虚空にありては坐せしめ地に入つては火焔を放して。水を踏む事陸地の如くに。さらさらと走り去つて。形はさながら山彥の形はさながら山彥の。聲ばかりして、失せにけり聲ばかりして失せにけり
とシテ中入。

鐘「夢の中ながら會つたのだから、一層のことほんとの姿を見せよう」
といふや否や、その樣子が變つて、話に聞いてゐる、釋迦在世の時の淨藏・淨眼の二王子のやうに、七多羅樹のやうな高い虚空に昇つて坐り、又地に入つては火焔を放ち、水上を行くのも陸地を行くやうで、さら〳〵と走り去つて、やがて形は見えず、たゞ山彥のやうに聲だけして、姿は見えなくなつてしまつた。
前ジテ鐘馗の靈退場。

【語】
○佛在世―釋迦存命の頃。
○淨藏淨眼―法華經妙莊嚴王本事品にある二王子の名で、その父妙莊嚴王は邪見で佛法を信じなかつたが、淨藏、淨眼の二王子が種々の方便を以て父の心を飜させ、遂に法華の利益を得しめたといふ。
○七多羅樹―多羅樹は棕櫚に似た一種の高木、その七倍の高さのある木を七多羅樹といふ。非常に高い所といふ意。
○虚空にありて―淨藏淨眼が父王の心を飜す方便に用ゐた方法。妙莊嚴王本事品に「於是二子、念其父故、踊在虚空、高七多羅樹、現種々神變、於虚空中行住坐臥、身上出水、身下出火、身下出水、身上出火、或現大身滿虚空中、而復現小、小復現大、於空中滅、忽然在地、入地如水、履水如地、現如是等、種々神變、令其父王心淨信解」
○山彥―こだま。
【間】

【間】狂言山下の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、
狂言「かやうに候者は。この山の麓に住居する者にて候。今日は山へ分け入り薪を取らせ申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれなる御方は。いかなる方より御出でなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ
ワキ「是は終南山の麓に住居する者にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か
狂言「なか〳〵このあたりの者にて候

(ソ) 三史五經。三史は史記・漢書・後漢書、五經は易經・書經・詩經・春秋・禮記。

(タ) 仕合 運。

(レ) 亡心——亡魂

ツキ「左様にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候

舞臺の眞中へ出で下に居て、

狂言「さて、御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ

ツキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。古高祖の世に。鍾馗大臣の御事はさぞ〳〵子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。左様の事委しくは存ぜず候へども。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ツキ「近頃にて候

狂言「まづ鍾馗と申したる御方は。終南山の邊より御出でありたると申す。稚き時は學問を好み給ひ。三史五經の道を極め。何事にても闇き事はなかりたると申す。そのかみ太祖の御時。武德年中とやらん貞觀元年とやらん。その時の進士に選み出され及第を望み給ふに。誠に螢雪闇からぬといへども。その時の仕合いかがありけん。及第叶はず候間。扨は日頃の學問も無になりける口惜しさよとて。なんぼう猛き御方にて候。階段に頭を打碎き空しくなり給ひて候。天子その志を憐み給ひ。綠袍を死骸に賜はり都の内へ葬り御申し候。誠に鍾馗の御爲には。及第を御濟み候よりいやましの様に申し傳へ候。素より鍾馗の御亡心は。終南山の邊に鬼王となつて今に御座あると申せども。委しき事は存ぜず候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ツキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。我等徐に本聞申すべき事あるにより。

この所を通り候ところに。いづくともなく童子一人來られ。帝都へ奏聞申すべき事あり。是は古高祖の世に贈官せられし鐘馗大臣なり。惡鬼をしづめ朝家安全になすべきとの誓ひあり。若この事を疑はずして。敬信をなし給はゞ。宮中に現じ奇瑞を見すべしとて。目前に於て奇瑞を見せ。さながら山彦の如くに聲ばかりして。姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は鐘馗の御亡心と存じ候。それを如何にと申すに。御身帝都に赴き給へば。奏聞ありたき事を御頼みありたると存じ候間。暫く御逗留ありて。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候

ワキ「仰せの如く僧俗にあらずと申すことの候へば。暫く逗留申しありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ上歌「待宵の。苔の筵に法をのべ。苔の筵に法をのべ。さもすさましき山陰の。嵐とともに聲立てて。この妙經を讀誦するこの妙經を讀誦する

【六】

早笛にて、後ジテ鐘馗、面小癋見・赤頭・唐冠・赤地金緞鉢卷・[illegible]・青[illegible]厚板・[illegible]衣・半切・[illegible]帯・[illegible]の裝束に[illegible]、出で一の松に立ち、

○僧俗にあらず—僧侶と俗人との差別はない。讀經は僧がしても俗人がしてもよい。

【五】

【六】

○妙經—妙法蓮華經、

【五】　後段

旅人「この山路で回向をして、恐ろしく吹きすさぶ嵐の中で、聲を立てて、この法華經を讀誦するのだ—

と鐘馗の靈を弔ふ態。

【六】

後ジテ[illegible]

○鬼神に横道なし—徒然草に「鬼神は横しまなし咎むべからず」

○騒がしく—その下に「宸襟を悩まし奉る」等といふ意味の詞が略されてゐる。

○日月影おろそかに—劍の光の前には、月日の光も薄くなるとの意。

○惡鬼の亂れ—亂れをなす惡鬼。

【七】

○われと亡ぜし—自殺した。

○一念發起菩提心—惡心を飜す一念が即ち菩提心を起す一念となる意。菩提心は無上道を求める心。

○[illegible]まで—[illegible]けて特に、

○[illegible]

後ジテ「鬼神に横道なしといふに。何ぞみだりに騒がしく。汝知らずやわが心。國土を守る。誓ひあり（と舞臺に進み）

地「寶劍光すさましく。日月影おろそかに。松嵐梢を拂ふが如く。惡鬼の亂れ恐れ去つて。げにも鍾馗の精靈たり（と正面に出で）

【七】

ワキ、シテに向ひ、

地ロンギ「ありがたの御事や。そも君道を守らんの。その誓願の御誓ひ。いかなる謂れなるらん

シテ「鍾馗及第の。鍾馗及第の砌にて。われと亡ぜし惡心を。飜す一念發起菩提心なるべし

（といひてこれより詞に合せて仕舞）

地「げに誠ある誓ひとて。國土を鎭めわきてげに

シテ「紫禁裏雲居の樓閣の

地「ここやかしこに遍滿し

シテ「或は玉殿

鍾馗「鬼神は道に外れたことをしないといふのに、何故妄りに世を騒がし亂すのか。汝は知らないのか、自分はこの國土を守護する誓ひを立ててゐるのだぞ」

その手に持つ寶劍は、凄じいまでに光り輝いて、月日も為に光を奪はれるばかりで、松吹く嵐が梢を拂ふやうに切りまくるので、亂れを起した惡鬼も恐れて立ち去つてしまふ。實に力強い鍾馗の精靈である。

【七】

旅人「實にありがたい事です。一體わが君の國土を守護しようとの誓願をお立てになつたのは、といふわけです」

鍾馗「自分が進士に及第する折、自殺したあの惡心を改めた、その一念がやがて菩提を求める心となつたのだ」

誠にその誓ひの通りに、國土を鎭めて、殊に皇居の御殿のあちらこちらに行き廻つて、或は御殿、階下の下、御階の下までも、劍を隱し忍び隱れて、鬼神を探し出すと、[illegible]、鬼神は[illegible]が消え失せて、現れ出たので、これを

○通力―神通力、自由自在な力。

地 廊下の下。御階のもとまでも。御階のもとまでも。劍を潜めて忍び忍びに。もとむれば案の如く。鬼神は通力失せ。現れ出づれば忽ちに。ずだずだに切りはなして。まのあたりなる。その勢ひ唯この劍の威光となつて。天に輝き地に遍く。治まる國土となる事治まる國土となる事も。げにありがたき。誓ひかなげにありがたき誓ひかな

と常座にて袖をかへして留拍子を踏む。

直樣ずた〳〵に切り放してしまふ。かうして、今眼の前に示した勢ひで、この寶劍の威光となつて、天に輝き地に行き廻つて、うち治まる國土としたのは、實にありがたい誓ひである。

〔考異〕

諸流（五流）

下懸の前段は次に掲げる光悅本に近い。

古謠本（光悅本）

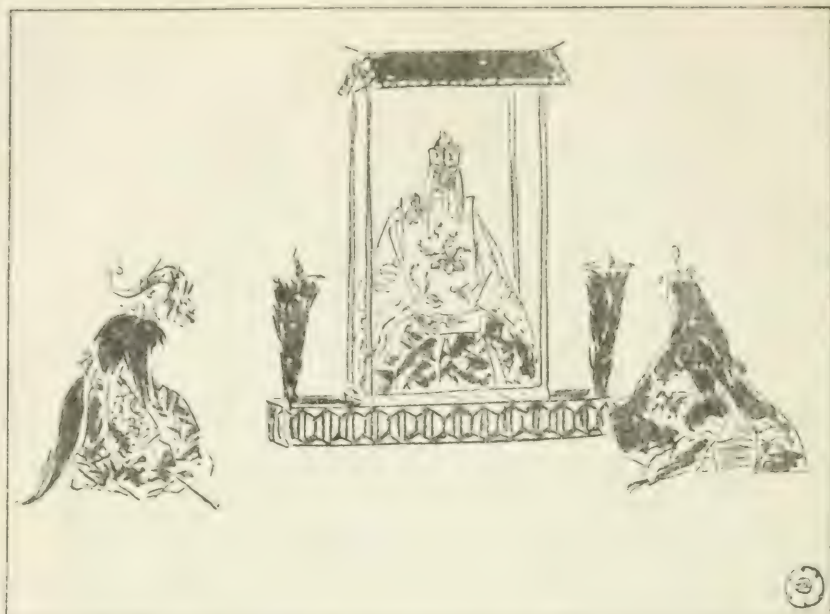
【一】ワキ「これは……住居す(光仕)る者にて候さても(光サテ)われ(光御門)に　【二】ワキ 何事にて候ぞ(光こなたの事候か)(シテ)御身宮闕に靈を給はゞ奏聞申へき事あり。委そうしてたい給へ(ワキ)やすき間の御事奏聞申へし。光其意趣をのへ給へ(シテ)われ昔嘗願の子細あるにより(光仍)……守らんとの誓ひあり(光也)君賢人(光賢臣)を……奇瑞をなすべきとの(光ナシ)この事を(光ナシ)奏してたい給へ(光給ふへし)……今は何をか……われ(光是)は鍾馗といへる道士(光しん……)なるが……げにげに……道士なるが(光し

む〱の」その……シテ「折からに（光の）　【三】地クセ「一生は……時移り氣色（光どころ）變じ……地「はかなき……冥路をか（光や）

【四】ツレ「これは不思議の……急ぎ（光先々）帝都に赴きつつ（光て）委しく奏聞申すべし（光シテ「暫く待たせ……とても見えし夢の中光に」……シテ「氣色變り（光し）て」地「傳へ聞く……火焔を放し（光ち）て……形はさながら……山彦の（光そのまゝやまひこの〱）

【五】ツレ上歌「若の蓮に法をのべ……この妙經を讀誦する（光ナシ）……　【六】地「寶劍光……松（光晴）嵐梢を……　【七】地ロンギ「ありがたの御事や（光〱）……地「廊下の下……切りはなし（光ち）て……

白髭(しらひげ)　觀(春 喜)

解説

【能柄】脇能　複式夢幻能

【人物】**ワキ**　當今勅使、**ワキツレ**　同從者(二人)、**前シテ**　漁翁(白髭明神々靈)、**前ツレ**　漁夫、**狂言**　白髭末社神、**後シテ**　白髭明神、**後ツレ**　天女、**後ツレ**　龍神

【所】近江國　白髭明神社

【時】春(三月)

【作者】能本作者註文には金春禪竹の作としてゐるが、二百十番謡目録には觀阿彌の作としてゐる。世阿彌の五音曲條々に「闌曲音曲の本躰の姿」として、

「夫一代のけうほうは五し八けうをつくり」のうたいのきよくの本風なり、上宮太子の節曲舞、白ひげ曲舞也、

といつてゐる所を見ると、古く白髭の謡曲又は白髭の曲舞のあつたことは疑はれたい。或は禪竹が古曲を改作し又は白髭の曲舞を本として

新曲を作つたものであらうか。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】勅使が近江國白鬚の社に參詣すると、明神の神靈が漁翁の姿で現れ、比叡山が佛法結界の地となつた緣起を語つて社壇に入る。やがて明神は眞の姿を現して樂を奏し、また天女・龍神も現れて、奇瑞を示し、御代を祝ふ。

【出典】本曲の主材となつてゐる白鬚明神の緣起は、太平記卷十八「比叡山開闢事」に、

それこの國の起りは、家々に傳る處各別にして、其說區々なりといへども、暫く記する處の一義に、天地已に分れて後、第九の減劫人壽二萬歲の時、迦葉佛西天に出世し給ふ。時に大聖釋尊その授記を得て、都率天に住み給ひしが、われ八相成道の後、遺敎流布の地何れの所にあるべしとて、この南瞻部洲を遍く飛行して御覽じけるに、漫々たる大海の上に、一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易と、立つ浪の音あり。釋尊是を聞召して、この波の流れ止まらんずる所、一の國となりて、吾敎法弘通する靈地たるべしと思召しければ、則ちこの浪流れ行くに隨つて、遙に十萬里の蒼海を凌ぎ給ふ。此波忽に一葉の葦の海中に浮べるにぞ留まりにける。此葦の葉果して一の島となる。今の比叡山の麓大宮大權現跡を垂れ給ふ波止土濃也。是故に波止つて土濃やか也とは書けるなるべし。其後人壽百歲の時、釋尊中天竺摩竭陀國淨飯王宮に降誕し給ふ。御年十九にて、二月上八の夜半に王宮を遁れ出で……遂に滅度を跋提河の邊、雙林樹下に唱へ給ふ。然りと雖も、佛は元來本有常住周遍法界の妙體なれば、遺敎流布の爲に、昔葦の葉の國となりし南閻浮提豐葦原の中津國に到つて見給ふに、時は鸕羽不葺合尊の御代なれば、人未だ佛法の名字をだにも聞かず。然れども此地大日遍照の本國として、佛法東漸の靈地たるべければ、何れの所にか應化利生の門を開くべきと、彼方此方を遍歷し給ふ處に、比叡山の麓佐々名美也志賀浦の邊に、釣を垂れておはせる老翁あり、釋尊之に向つて「翁もし此地の主ならば、此山を吾に與へよ、結界の地となし、佛法を弘めん」と宣ひければ、此翁答へて曰く「我は人壽六千歲の始より、此所の主として、此湖の七度迄桑原と變ぜしを見たり。但し此地結界の地とならば、釣する所を失ふべし。釋尊早く去つて他國を求め給へ」とぞ惜みける。此翁は是白鬚明神也。釋尊茲に因て、寂光土に歸らんとし給ひける處に、東方淨瑠璃世界の敎主醫王善逝、忽然として來り給へり。釋尊大に歡喜し給ひて、以前老翁が云ひつる事を語り給ふに、醫王善逝稱歎して宣はく「善哉釋迦尊、此地に佛法を弘通し給はん事、我人壽二萬歲の始より、此國の地主也、彼老翁未だ我を知らず、何ぞ此山を惜み奉るべきや、機緣時至つて佛法東流せば、釋尊は敎を傳ふる大師となつて、此山を開闢し給へ、我は此山の王と成つて、久しく後五百歲の佛法を護るべし」と誓約をなし、二佛各々東西に去り給ひにけり。

とあるのに違つたのであらう、但しこの事は、曾我物語巻六「比叡山始の事」にも同樣の記事があり、殊にクセの「その後人壽百歳の時」以下は、謠曲と曾我物語と殆と全く同文で、兩者に密接な關係のある事は疑ひないのであるが、謠曲の「それこの國の起りは」云云は曾我物語には見えないのであるから、謠曲が全くこの物語に據つたものとはいへない。殊にこのクセ一章は後に述べるやうに古くから行はれてゐたものらしいから、曾我物語の方がこの曲舞に據つたのでなからうかと思はれる。

【總評】 白髭明神を主題とした祝言物であるが、その詞章の主要部であるクセの一章は、白髭の緣起といふよりは、比叡山の緣起といつた方が適當なもので、本曲によく該當したものとはいへない。恐らくはこの曲舞を中心として、祝言物を作る爲に、白髭明神の神德を採り入れたもので、制作の動機が主客轉倒してゐる爲に、このやうな不調和を來したのであらう。しかし、この缺點を除いては、大體に推移の滑かな曲で、後段に、後ジテ神體の外に、ツレとして天女と龍神とが登場するのも、賑やかな花やかな效果を擧げてゐるだけで、この舞臺の場所柄として無理な感じを殘さない。

【一】

○君と神と道すぐに―君と神とがこの世を正しく治める事を[illegible]。

○白髭の明神―近江國高島郡小松村にあり、比良明神の別名で、猿田彦命を祀る。

【一】

後見一疊臺の兩端に燈臺を立て、上に引廻を掛けたる小宮の作物をのせて大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ勅使、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ次第「君と神との道すぐに。君と神との道すぐに。治まる國ぞ久しき

地取 地頭にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州白髭の明神は。靈神にて御座候。君この

【一】

前段

舞臺は初め京都、ワキ當今勅使、ワキヅレ從者を隨へて登場」

勅使「大君と神々とが正しく治め守り給ふわが國は、幾久しく天下泰平だ。

[illegible]

勅使「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さて近江の白髭明神はあらたかな神で、帝にはこの間不思議なあらたか

程不思議の御靈夢の御告ましますにより。急ぎ參詣申せとの宣旨を蒙り。唯今白髭の明神に。勅使に參詣仕り候

といひてワキヅレと向合ひ、

[illegible]道行〽九重の。空ものどけき春の色。空ものどけき春の色。霞む行方は、花園の志賀の山越うち過ぎて。眞野の入江の道すがら。鳰の浦風さえかへり。たち寄る波も白髭の。宮居に早く着きにけり宮居に早く着きにけり

ワキ「眞野の入江の道すがら」と正面に向き三四足前へ出で、またもとへ歸りて白髭の宮に着きたる心。道行すみて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に白髭の宮に着きて候。心靜かに神拜申さうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。ワキヅレはその次に坐す。

な夢のお告を御覽遊ばしたので、急いで明神に參詣せよと仰せ出されたから、唯今白髭明神に勅使として參詣するのです」

さ、見物人に自己紹介をし、

都の春景色は空までのどかで、春霞がたなびき渡つてゐる。その霞の中を出立して、あの花園のある志賀の山越を通り、眞野の入江のあたりを行く途中、琵琶湖の浦風が冷え冷えと吹き渡つて、濱邊に白い波のうち寄せる景色を眺めながら、白髭の明神に着いた」

[illegible]

○九重—都。

○花園—志賀の名所。天智天皇御遊覽地の舊跡であるといふ。

○志賀の山越—袖中抄に「志賀の山越は（京都）北白川の瀧の傍より登りて、如意の峰を越えて、志賀へ出づる路なり」といふ。

○眞野の入江—滋賀郡堅田の北。今の眞野村の邊。

○鳰の浦—琵琶湖をいふ。

○波も白髭の—波の色も白きを白髭にいひかけた。

【三】

前一翁の面子にて、シテ漁翁、[illegible]・着附小格子厚板・茶絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束。ツレ漁夫、直面・[illegible]・着附無地熨斗目・淺黄絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝

【三】

[illegible]

○釣の營み—釣の業を營み[illegible]にいひかけた。
○隙も波間に—隙も無いを波間にいひかけた。
○棹さし馴れたる—小舟で海を渡ることと、世渡りすることと、兩方とに[illegible]で、浮世を渡りかねてゐる[illegible]。
○風歸帆を送る萬里の程—[illegible]及び次の二句は詩の一節を引いたのであらうが、出典が分らない。
○霞の衣ほころびて—霞を衣に喩へ、衣のほころびるのを花の咲きほころびることにいひかけた。
○花誘ふ比良の山風吹きにけり—新古今集宮内卿の歌を引いた。この下句—漕ぎ行く舟の跡見ゆるまで—
○比良の山—近江國滋賀郡にあり、その暮雪は近江八景の一。
○天つ雁—[illegible]天つ[illegible]は北國[illegible]で、[illegible]を好む[illegible]るから、[illegible]したのである。

東にて、二人とも釣竿をかたげツレを先に立てて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ 一聲 釣の營み。いつまでか。隙も波間に。明け暮れん

二人とも正面に向き、

ツレ 二句 棹さし馴るる海士小舟。シテ・ツレ〔向合ひ〕渡りかねたる。浮世かな

と言ひて、二人とも舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、

シテ・ツレ サシ 風歸帆を送る萬里の程。江天渺々として水光平らかなり。シテ・ツレ〔向合ひ〕舟子は解くこれ明朝の雨。面白や頃しも今は春の空。霞の衣ほころびて。峯白妙に。咲く花の。嵐も匂ふ。日影かな

下歌 賤しき海士の心まで春こそのどけかりけれ。上歌 花誘ふ。比良の山風吹きにけり。比良の山風吹きにけり。漕ぎ行く舟の跡見ゆる。鳰の浦わも遥々と。霞み渡りて天つ雁。歸る越路

漁翁「魚釣りの仕事で、いつもいつも波間に忙しく明かし暮らしてゐることだ」
漁夫「自分達は、かうしていつも棹をさし慣れてゐる小舟のやうな、頼りない身上で、浮世を暮らしかねてゐることだ」
漁翁「いや〳〵さうではない。『追風が吹いて、浦に歸る帆かけ船を、遠い道のりの所から遙々と送り届ける。遥か彼方まで水も空も遠く見渡されて、水面が誠に穏かだ。その景色を見て、船頭は明日の朝雨が降るかどうかを早く知るのだ』といふ詩の句のやうな、誠に面白い眺めだ。殊に今は春景色で、霞がたなびき、花が綻びそめて、山に咲く花の匂ひで、嵐までが香りを含んで、實にのどかなことだ。自分達のやうな賤しい漁夫にも、春はのんびりした心持を與へてくれるのだ。

和歌に——

花誘ふ比良の山風吹きにけり、漕ぎ行く船の跡見ゆるまで

(比良の山風が櫻の花を吹き散らして、琵琶湖の水面一面に花が散り浮かんで、船がその中を漕ぎ分けて行くと、その跡だけに花がなくて、船の漕いで行つた道筋がよく分るほどだ)

○眺めにつづく―うち續いて眺められる。

【三】

○朝な朝な―毎朝、毎朝。

○御事―御方。

○御代に近江の―御代に逢ふ、を地名の近江にいひかけたもの。近江の海の―は深きの序。

の山までも。眺めにつづく、景色かな眺めにつづく景色かな

（「眺めにつづく」と謡ひながら入替りて、シテは眞中に、ツレは日附柱近くに立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、）

【三】

ワキ「いかにこれなる翁。汝はこの浦の者か

シテ「さん候この浦の漁夫にて候が。朝な朝な沖に出で釣を垂れ候。まづ御姿を見奉れば。このあたりにては見馴れ申さぬ御事なり。もし都よりの御參詣にて御座候か

ワキ「げによく見てあるものかな。これは當今に仕へ奉る臣下なるが。君この程不思議の御靈夢の御告ましますにより。勅使に參詣申して候

シテ「ありがたや君としてだにかほどまで。敬ひ給ふ御神の。御威光の程こそありがたけれ

「賤しき海士のこの身までも。すぐなる御代に。近江の海の。深き惠みを賴むなり

と詠まれた、春の琵琶湖は遠くまで霞み渡つて、かなた北越の山々までがずつと眺められることだ」

（三、あたりの景色を賞美してゐる態。）

【三】

（勅使はその漁翁を見て、）

勅使「おい老人、お前はこの浦の者か」

漁翁「はい、この浦の漁師で、毎朝沖に出て釣をしてゐる者でございます。ところで、あなた樣のお姿をお見上げしますと、この邊にはお見馴れしない御方ですが、もしや都からの御參詣でございますか」

勅使「おゝよく分つた。自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下だが、帝にはこの間不思議なあらたかな夢のお告を御覽遊ばしたので、勅使として參詣したのだ」

漁翁「ありがたいことでございます。帝までがそれ程と御崇敬遊ばす神樣の御威光を、どれ程かありがたく存じます。私とても賤しい漁師の者までが、御政道正しい大御代に浴して、深い大御恩を仰いでゐることでございます」

○瑞垣の―久しきの枕詞であるが、こゝには枕詞をそのまゝ久しきの意に用ゐた。
○神の誓ひ―神が衆生を救ひ給ふ誓願。
○心も波小舟―心も無きを波にいひかけた。心もなきは、思慮分別もない賤しいとの意。

【四】
○それこの國の起り―以下ヤセ前まで太平記の文に據る。冒頭にその本文を掲げた。
○記する所の一義―種々の說があるが、それら諸說の一說によるの意。

ワキ「げに誰とても君を仰ぎ。神を敬ふ心あらば。などか惠みにあづからざらん

シテ「殊更ここは

ワキ「所から

地上歌「瑞垣の。年も經にけり白髭の。年も經にけり白髭の。神の誓ひは今とても。變らざりけり。げにありがたや賴もしや。われは心も波小舟。釣の翁の身ながらも。安く樂しむこの時に。生まれあふ身は、ありがたや生まれあふ身はありがたや

シテ「生まれあふ身は」と常座へ行きてワキに向く、ツレは地上歌に笛座前に行き下に居り、ワキも下に居る。シテ眞中へ行き下に居て、

【四】

地クリ「それこの國の起り家々に傳はる所。おのおの別にして。その說まちまちなりといへども。暫く記する所の一義によらば。天地既に分つて

勅使「さうだ、誰でも帝の御德を仰ぎ神を敬ふ心があれば、御惠みを戴かない者はないのだ」

漁翁「さやうでございます。殊にこゝはありがたい場所柄で、明神の御鎭座遊ばされてよりこの方、隨分永い年月で、その白髭明神の御利益は昔も今も變りのないことで、誠にありがたい賴もしいことでございます。私どもは何の分別もない、小舟に乘つて釣をする老漁夫の身上でございますが、安樂に暮らすことの出來る、この大御代に生まれ逢つたのは、ほんとにありがたいことでございます」

といつて、勅使の前に坐り、

【四】

漁翁「抑もわが國の起原については、家々に傳はる所が別々で、その說がまち〳〵でありますが、書物に記された一說に據りますと、この世界が天地の二に分れた後、第九の減劫、人壽二萬歲の時、迦葉

○第九の滅劫人壽二萬歳―本曲の末に記す。○迦葉世尊―釋迦以前に出世した過去七佛の第六。迦葉は梵語 Kaśyapa、飲光と譯す。世尊は佛の尊稱。○西天―西方の天竺國。○釋尊―釋迦牟尼世尊の略。○授記―佛が發心の衆生に對し、當來必ず佛となるといふ記別(豫言)を授けること。○都率天―本曲の末に記す。○八相成道―末尾に記す。○遺教―釋尊の說き遺した教。○南瞻部洲―[illegible]この世界をいふ。閻浮提ともいふ。○一切衆生―以下「無有變易」まで涅槃經の文句「一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易」を「[illegible]如來常住にして變易あることなし」と訓讀する。○波の聲―波がこの經文を讀誦するやうな音を立てるのである。○一葉の蘆に凝り固まつて―太平記には「この波忽ちに一葉の葦の海中に浮べるにぞ止まりにける。此葦の葉果して一の島となる」とある。○大宮權現―近江國滋賀郡坂本村にある日枝神社の[illegible]山王七社の第一、大己

後。第九の滅劫人壽二萬歳の時

シテサシ「迦葉世尊西天に出世し給ふ時

地「大聖釋尊その授記を得て。都率天に住し給ひしが

シテ「われ八相成道の後。遺教流布の地いづれの所にかあるべきとて

地「この南瞻部洲を普く飛行して御覽じけるに。漫々とある大海の上に。一切衆生悉有佛性如來。常住無有變易の波の聲。一葉の蘆に凝り固まつて。一つの島となる。今の大宮權現の。橋殿なり

（居クセ）

地「その後人壽。百歳の時。悉達と生まれ給ひて。八十年の春の頃。頭北面西右脇臥跋提の波と消え給ふ。されども佛は。常住不滅法界の。妙體なれば昔。蘆の葉の島となりし中つ國を御覽

佛が西天竺に出現せられた時、大聖釋迦如來がその豫言を受けて、都率天でこの世に現れて成佛する時機をお待ちになりましたが、やがて『自分が都率天を降つて色々の相を示し、佛道を成就した後、この教を流布する土地としては、どういふ所がよからうか』と、この世界を遍く飛行して御覽になりますと、廣々した大海の上に『一切の衆生は皆悉く佛となり得る性を持つてゐる。そして如來は永久に變化することのないものである』といふ經文が、波の聲で聞え、その波が一葉の蘆に凝り固まつて、一つの島となりました。――この島が今の大宮權現の橋殿であります。――

さてその後人壽百歳の時、如來は悉達としてお生まれになり、御年八十の春の頃、頭を北にし、面を西に向け、右脇を下にして、跋提河の邊で入滅せられました。しかし佛はもとより永久に不死不滅で、法界に遍滿せられる妙體でありますから、昔蘆の葉が島となつた日本國を御

ずるに時は鵜草葺不合の尊の御代なれば佛法の名字を人知らず。ここに比叡山の麓さざ波や志賀の浦のほとりに。釣を垂るる老翁あり。釋尊かれに向つて。翁もし。この地の主たらばこの山をわれに與へよ。佛法結界の。地となすべしと宣へば。翁答へて申すやう。われ人壽。六千歳の始めより。この山の主として。この湖の七度まで。蘆原になりしをも。正に見たりし翁なり。但しこの地。結界となるならば。釣する所失せぬべしと深く惜しみ申せば。釋尊力なく。今は寂光土に。歸らんとし給へば

時に東方より

淨瑠璃世界の主藥師。忽然と出で給ひて善きかなや。釋尊この地に佛法を弘め。給はん事よ。われ人壽二萬歳の昔より。この所の主たれど。

實になりますと、その時は鵜草葺不合尊の御代で、太古のこととて、佛法の教へはその名前も人が知りません。さて、この時比叡山の麓、志賀の浦の邊で釣をしてゐる老人がありました。釋尊はその翁に向つて、「老人よ、そなたがこの地の主ならば、この山を自分にくれ、佛法を行ふ清淨境にしたいと思ふから」と仰しやると、翁が答へて申すのには、「自分は人壽六千歳の始めからこの山の主で、この琵琶湖が七度まで蘆原となつたのも確かに見た老人なのだ、それだのに、この地を清淨地とすれば、自分の釣する所がなくなるから困る」と、かう非常に惜しみましたので、釋尊も是非なく、今は寂光土へ歸らうとせられますと、その時、東の方から、淨瑠璃世界の主である藥師如來が突然に出現せられて、「釋尊、それは實によいことです。この地に佛法をお弘めにならうといふのは、ほんとに結構なことです。自分は人壽二萬歳の昔から、この所の主なのですが、この老人はまだ私を知らないのです。決してこの山を惜しみはしません、早くお開きなさい。私もこの山の主となつて、倶に一所に、後五

貴命を祀る。
○[illegible]—大宮の前にある板橋をいふ。橋殿に波止土濃の字を充て、三年毎に[illegible]會の儀が行はれた。
○その後人壽百歳の時、以下クセ上まで、「[illegible]物語」比叡山始の事にも同文。解說參照。
○悉達—瞿曇悉達多の略。釋迦牟尼の出家以前の名。
○八十年の春の頃—本曲の末に記す。
○頭北面西右脇臥—同じく末に記す。
○跋提—尸賴拏跋提河の俗稱。中印度、拘尸那揭羅國にあり、釋尊はこの河の西岸娑羅雙樹林中で入滅した。
○佛は常住不滅法界の妙體—釋尊は衆生に無常を示す方便として入滅したが、實は不死不滅で、法界に遍滿する妙體であるから、何處にでも化現することをいふ。
○中つ國—豐葦原中津國の略。日本の古名。
○鵜草葺不合の尊—地神第五代。御父は彥火々出見尊、御母は豐玉姫。
○佛法の名字—[illegible]本には名字に「妙事」二字を[illegible]てゐるが、太平記[illegible]には、名字の方、[illegible]。
○比叡山—山城・近江二

老翁未だわれを知らず。何ぞこの山を。惜しみ申すべきはや。開闢し給へわれもこの山の主となつて。共に後五百歳の。佛法を守るべしと。固く誓約し給ひて。二佛東西に去り給ふ。その時の翁も、今の白髭の神とかや

【五】

ワキ「不思議なりとよかほどまで。妙なる神祕を語る翁の。その名はいかにおぼつかな

シテ「今は何をか包むべき。その古も釣を垂れし翁なるが。勅使を慰め申さんとて。唯今ここに來りたり。殊更今宵は天燈龍燈の。神前に來現の時節なれば。暫く待たせ給ふべしと

地上歌「夕の雲も立ち騒ぎ。夕の雲も立ち騒ぎ（とシテ立ち）汀に落ち來る風の音老の波も寄り來る（と右の方へ出て面を遣ひて）釣の翁と見えつるが（ワキへ向き）われ白髭の神ぞとて玉の（作物を見）扉をおし

百歳の末世の佛法を守護しませう」と、固く約束して、釋迦如來と藥師如來とは、西と東とにお別れになりました。その時の翁が白髭明神だと申すことでございます」

【五】

勅使「これは不思議だ。このやうに委しくありがたい縁起を話して聞かせてくれる、老人の名は何といふのです。氣がかりに思はれるが」

漁翁「今は何を隱さう、昔釣をしてゐたその老人なのですが、勅使を慰めたいと思つて、唯今こゝへ來たのです。殊に今宵は天女の燈火・龍神の燈火が神前に捧げられる時なのだから、暫くお待ちなさい」

といつて、夕雲がたち騒ぎ、水際に吹き來る風の音と共に波のうち寄せる時、

漁翁「釣をする老人のやうに裝うてゐたが實は白髭の明神であるぞ」

といつて、寶殿の扉を開いて、[illegible]に

園に跨る山。山上に延暦寺がある。
○ささ波や—志賀の枕詞。
○佛法結界の地—佛法修行の清淨地として、その障害をなすものを入れないやうに、境界を定めて他と區劃した地。
○寂光土—佛の住む所。四土の一、常寂光土の略。
○淨瑠璃世界—藥師如來の住む淨土。
○藥師—委しくは藥師瑠璃光如來といひ、又大醫王佛ともいふ。東方淨瑠璃國の教主で、十二誓願を發して衆生の病患を救ふ佛。
○後五百歳—末尾に記す。
○二佛東西に去り—藥師は東方に、釋尊は西方に去る。
【五】
○神祕—神の祕事。緣起。
○天燈龍燈—天女と龍神が捧げる燈火。
○夕の雲も—待たせ給ふべしといふといひかけた。

○老の波も—老の時が寄せ來ることを湖の波の寄せ來ることにかけていふ。

【三】

○叶ふまじ—出來ない。

○御身に逢ひて—そなたに逢ってもつまらないから、會はない。

お入りになつた。
前ジテ、舞臺作物の社壇に入る。

開き社壇に入らせ給ひけり社壇に入らせ給ひけり

とシテ作物の内へ中入。来序の囃子にてツレ橋懸より幕に入る。

【四】 亂序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・腰帯・扇の装束にて名乗座へ出で、

狂言「かやうに候者は。江州白鬚の明神に仕へ申す末社の神にて候。誠に國々在々に靈神あまた御座候中にも。當社明神と申すは。後五百歲の昔より隱れもなき御神にて候。その子細に。昔釋尊都率天より天下り。是より東に佛法弘通の所を御立てあるべしとて。蘆の葉に乗つて。漫々たる蒼海を風に任せて御出であるに。當國志賀のほとりにて。波の音を聞き給ふに。一切衆生は悉有佛性如來。常住無有變易と打ち申す間。釋尊聞き給ひ。扨はこの所にて佛法開闢あるべしとて。召されたる蘆の葉をぬぎ給ふ處に。釣の翁一人ありて。この所はわが住家なり。佛法の地になすべきこと叶ふまじとありければ。釋尊も力なく。旣に寂光土に歸らんとし給ふ時に。藥師如來現れ給ひ。翁に向ひ何とて佛法の巷になすまじき。子細はいかにと問ひ給へば。翁申すやう。われ人壽六千歲の始めよりこの地の主なり。この水海千年過ぎて蘆原となり。又千年過ぎて水海となるを。七度まで見たる翁なり。この地結界となるならば。釣する所失せぬべし。この儀いかにと宣へば。その時藥師如來。愚かやわれ人壽二萬歲の昔よりこの山の主なり。御身に逢ひて益なき故見えず。一山の主は我なり。釋尊ここにて佛法を弘め給へとて。東をさして飛び給へば。釋尊も歸り給ふ。その時の翁は今の白鬚大明神にて候。その後傳教大師と生まれ替り。延曆年中に比叡山の開闢し給ふ。さるによつて寺號を延曆寺と申し候。是はこの所の昔語。扨唯今當今に仕へ御申しある臣下殿。當社へ御參詣

候を明神嬉しく思し召し。假に釣の翁と現じ。御言葉をかはし給ふが。重ねて奇特を見せ申さんとて。社壇に入り給ふ。その間我等も罷り出で。一曲仕り慰め申せとの御事により。是まで出でて候。まづ御禮申さう。（ワキに向ひ）御禮申し候。是は當社明神に仕へ申す末社の神にて候。唯今の御參詣明神嬉しく思し召し。假に釣の翁の體にて言葉をかはし給ふが。重ねて奇特を見せ申さんとの御事にて候。その間に我等がやうなる末社の神にも罷り出で。慰め申せとの御事により。是まで出でて候。何ぞ一曲仕り候か。何と御座あらうずるぞ。（仕手柱際へ歸り）あゝ一段の御機嫌に申し上げた。よからうと思し召すと見えて。左の頰がにつこと致した。急いで奏で申さう

大小前へ出で、

狂言『めでたかりける時とかや。〔三段舞〕やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も。現れ出でて謠ひ奏でて。是までなりとて末社の神は。〳〵。本の社に歸りけり

と謠ひて幕に入る。

【六】

出端の囃子にて、

地「八少女の。返す袂の色々に。宜禰が鼓も聲澄みて。神さび渡れる折からかな

後ジテ白髭明神、面鼻瘤悪尉・白垂・鳥甲・金載鉢巻・襟浅黄・着附厚板・狩衣・半切・腰帯・扇の装束にて、引廻を掛けたる作物の中にて床几にかゝり居り、

後ジテ「神は人の敬ふによつて威を増す。ましてやこれは勅の使。仰ぎても猶餘りあり

【六】

○八少女—八人の舞姫。

○宜禰—神官。禰宜と同じで

○神さび—神々しいこと。

○神は人の敬ふによつて威を増す—古諺。この句〔卷絹〕にもある。

【六】　後段

八人の舞姫が袂を翻して舞を舞ふと、神官の打つ鼓の音も澄み渡つて、まことに神々しい趣である。

後ジテ白髭明神、〔illegible〕の社壇の中から、

「神は人々が敬ふので威を増すのであるが、殊にこれは勅使であるから、一層神威を増すことと、この上もないありが

○朱の玉垣―扉も開くを朱にいひかけた。

【七】
○奇特―不思議な靈妙な事
○神樂―上古から傳へて來た、神前に奏する樂。
○催馬樂―民間の俗謠を唐樂の樂譜に合せて謠ふもので、平安初期頃から神樂の餘興などに用ゐたもの。
○絲竹―絃樂と管樂。

地上歌「不思議や社壇の內よりも。不思議や社壇の內よりも。誠に妙なる御聲を出だし。扉もおのづから。朱の玉垣かかやき渡る。白髭の。神の御姿。現れたり

【七】
ワキ「あらありがたの御事や。かかる奇特に逢ふ事も。唯これ君の御蔭ぞと。感淚袖を濕せり
シテ「いざいざさらば夜もすがら。舞樂の曲を奏しつつ。勅使を慰め申さんと
（と後見作物の引廻を下す、）
地上歌「神樂催馬樂とりどりに（シテ作物より出で）。神樂催馬樂とりどりに。絲竹の役々祕曲を盡し。拍子を揃へて夜遊の舞樂はありがたや

〔樂〕
（を舞ひ、）
シテ『面白やこの舞樂
地「面白やこの舞樂の。鼓はおのづから（と正面先へ

たいことだ」
不思議にも社壇の中から、實に神々しいお聲を出され、扉が自然と開いて、あたりに輝き渡る白髭明神の御姿が現れた。

【七】
勅使「あゝ實にありがたい事です。このやうな奇瑞に逢ふことが出來るのも、全く帝の御蔭です」
と、勅使は感激の淚で袖を濡らした。
明神「さあ、それではこの夜中、舞樂の曲を奏して、勅使をお慰めしよう―
と、神樂や催馬樂など、それ〴〵管絃の役々を定めて、祕曲を盡し拍子を揃へて、夜遊の舞樂を奏せられるのは、實にありがたいことである。

〔樂〕
明神自ら舞を舞はれる態。
明神「この舞樂は實に面白いものだ。磯打つ波はそのまゝ鼓の音となり、松風は琴を調べるやうで、その樂の音の面白さに

【八】

○天地の兩燈―天女の捧げる燈と龍神の捧げる燈。

○日夜の勝劣―日の光と夜の燈火の光との勝ち負け。燈火の光が晝のやうに輝くことをいふ。

出で）。磯打つ波の聲。松風は琴を調め（と上を見上げ）。心耳を澄ます折からに（と聞く心）。天つ御空の雲居かかやき渡り（と右へ廻り）。湖水の面鳴動するは。天燈龍燈の來現かや

【八】

と仕手柱際にて幕を見、作物の中に入りて床几にかゝる。

出端の囃子にて、後ヅレ天女、面連面・黑垂・天冠・鉢卷・襟赤・着附摺箔・長絹・大口・腰帶・扇の裝束にて天燈を持ちて出で、舞臺に入り一畳臺の左に立つ。

早笛にて、後ヅレ龍神、面黑髭・赤頭・輪冠龍戴・金緞鉢卷・襟紺・着附段厚板・法被・半切・腰帶・打杖の裝束にて、龍燈を持ちて出で、橋懸一の松に立ち、

地上歌「天地の兩燈現れて。天地の兩燈現れて（と龍神舞臺に入り）。神前に供ふる御燈の光。山河草木かかやき渡り。日夜の勝劣見えざりけり

と天女・龍神ともに正面に出で作物に向ひ、天燈・龍燈を燈臺の上に置き、龍神は打杖を取りて、

「舞働」

天女も舞働の中途より龍神と共に舞ひ、舞ひ上げて、二人ともに作物に向ひ下に居る。

耳を澄ましてゐると、空の雲が輝き渡り、湖水の面が鳴り轟くが、さては天女の神燈や龍神の神燈が出現するのであらうか」

【八】

後ヅレ天女天燈を捧げて空より、續いて後ヅレ龍神龍燈を捧げて湖面より出現する態で登場。

天女の神燈・龍神の神燈が現れて、神前に供へたその御燈の光で、山も河も草も木も輝き渡り、日の光よりもなほ明るいばかりである。

「舞働」

龍神舞を舞ひ、その途中から天女も加はつて一所に舞ふ。

シテ「かくて夜もはや明方の地、かくて夜もはや明方になれば。おのおの明神に御暇申し（と天女・龍神シテに辭儀をし）。歸れば明神も御聲を上げて。善哉善哉と（シテツレへあしらひ）。感じ給へば天女は天路に又立ち歸れば（天女立ちて幕に入る）。龍神は湖水の。上に翔つて（龍神立ちて仕科）。波を返し。雲を穿ちて天地に別れて飛び去り行けば（龍神幕に入る）。明け行く空も。白髭の（シテ立ち）。明け行く空も白髭の神風。治まる御代とぞ。なりにける

と常座にて小廻りして留拍子を踏む。

○善哉善哉—感歎の聲。

○天地に別れて—天女は天上に、龍神は地下に別れて。

○白髭の—空も白らむを白髭にいひかけた。

からして、夜もはや明方になると、管絃の人々が明神にお暇を申して歸ると、明神も御聲を上げて『實によかつた〳〵』と、御感歎になる。やがて天女も空にたち歸ると、龍神も水の上を翔つて、龍神が波を返せば、天女は雲を穿つて、それ〴〵天上と海底とに別れて飛び去つて、そのうちに夜も白々と明けて行つた。かうして白髭明神の神德によつて、天下は泰平にうち治まる御代となつた。

〔考異〕

諸流〔觀世・寶生〕

【四】地「…の前に、「春…」猶々當社の神祕を懇に申し上げ候へ。…懇に申し上げうずるにて候」

古謡本〔貞享三年本〕

【二】…風歸帆を送る…水天（貞すいくわう）平らかなり…　【四】地「淨瑠璃世界より……われもこの山の主（貞王）となつて

附記

○第九の減劫人壽二萬歳—佛說に、この世界の始まりより終りまでを、成•住•壞•空の四期四劫に分ち、世界が次第に成立するまでの期間を成劫といひ、成立した世界の存續する期間を住劫といふ。その住劫にはまた二十小劫があり、一小劫にはまた增劫と減劫とがあり、人壽八萬歳のものが百歳每に一歳づつ減じて人壽十歳に至るまでを減劫といひ、また人壽十歳から百歳每に一歳づつ增して人壽八萬歳に至るのを增劫といふ。このやうに增減を繰返して、第九回の減劫の、八萬歳から次第に減じて人壽二萬歳に達した時を、第九の減劫人壽二萬歳の時といふ。

○都率天—欲界六天の第四で、須彌山の頂上にあり、その內院には彌勒菩薩がゐて、閻浮提に下生成佛する時を待つてゐるといふ。釋迦も迦葉の預言により、こゝにゐて成佛の時機を待つてゐたのである。

○八相成道—八相は佛がこの世界に出現して一生の間に示す八種の相、降都率天、託胎、出世、出家、降魔、成道、說法、入涅槃をいふ。成道は佛道を正覺することで、八相の一。

○八十年の春の頃—釋尊が八十歳の二月十五日に入滅したことをいふ。但しこの年齢は金光明經の說で、增阿含經及び中阿含經には「年過八十」といひ、方等泥洹經には七十九といひ、胎經及び天台玄義には八十二歳といふ。

○頭北面西右脇臥—釋尊入滅の時の臥法をいふ。後分涅槃に「世尊於二七寶牀一右脇而臥、頭枕二北方一、足指二南方一、面向二西方一、後背二東方一、如來中夜寂然無レ聲、於二是時頃一便般涅槃」と。

○後五百歳—大集月藏經に釋尊入滅後の二千五百年間を、佛敎の盛衰によつて五百年づつに區分した第五の五百年間をいふ。この期間は佛法が最も衰へて鬪諍を事とするといふ。

代主　観

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　京都賀茂の神職、**ワキヅレ**　同從者(二人)、**前ツレ**　同社人、**前シテ**　葛城賀茂の老社人(事代主神靈)、**狂言**　葛城賀茂の者、**後シテ**　事代主神

【所】　大和國　葛城賀茂明神の社前

【時】　四月

【異稱】　「白主」とも書き、「葛城加茂」又は「葛城鴨」ともいつた。

【作者】　能本作者註文に「白主」を、二百十番謡目錄に「葛城鴨」を世阿彌の作とす。言經卿記に文祿四年三月廿七日本曲註釋の事が見えてゐる。

【梗概】　京都賀茂の神職が大和の葛城賀茂明神に參詣すると、祭神事代主神が老翁の姿で現れ、京都と葛城と兩賀茂明神の關係及びその神德を述べ、後に神の姿を顯して、舞を舞ひ、奇特を示し給ふ。

【出典】　京都賀茂の本社が葛城賀茂であるといふのは、勿論俗說である

が、大和國葛城郡には祭神を異にした賀茂社が數社あつて、まづ本曲のシテ事代主神については、神皇正統記卷一に、

八重事代主神、今葛木の鴨にます。

とあり、葛城賀茂を京都賀茂の本社とすることは、事代主神の御兄高日子根命を祀つた高鴨の神を、鴨長明の作といふ四季物語に、

當社(山城賀茂)は大和の國高鴨の神を天武天皇の六年に當る二月の比、此宮に移され、社壇いかめしう立たせおはします。

とあるので、作者はこれらに役小角に呪縛せられた葛城の神をも取合はせて、本曲を作つたのであらう。

【概評】本曲の構造は、脇能に普通な形式を履んだもので、特異な點はないが、この種の祝言の複式夢幻能のワキは多くは當今の勅使としてゐるのに、本曲では劇的關係を厚くする爲に、賀茂の神職としたのは、戲曲として發達した形のやうではあるが、賤しい一老翁から、自分の仕へてゐる明神の緣起を說き聞かされるといふ、滑稽な結果を招いてゐる。しかも、その說明であるクセの一章も、恐らく有力な典據がなくて、能作者の創作したものと見え、極めてたど〳〵しい文體をなしてゐる。上乘の作とは思はれない。

【一】

次第の囃子にて、ワキ賀茂神職、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・給狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキツレ次第「關の戸ささで秋津洲や。關の戸ささで秋津洲や。道ある御代ぞめでたき

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは都賀茂の明神に仕へ申す神職の者なり。又和州葛城の明神は。當社御一體の御事なれども。未だ參詣申さず候程に。唯今和

【一】前段

舞臺は初め京都で、ワキ京都賀茂の神職、ワキヅレ從者を隨へて登場。

神職「日本國中關所の檢べもいらない、御政道の正しい太平の御代で、まことにめでたいことだ」

と、まづ次第で太平の御代を祝ひ、

神職「私は京都賀茂の明神にお仕へしてゐる神職の者です。さて大和葛城の明神は御當社と同じ御神體であらせられますが、私はまだ參詣した事がないので、唯今大和の葛城明神に參詣するのです」

【一】○關の戸ささで—天下が泰平で、旅人を檢べる必要がないから、關所の戸を閉ぢないで、自由に通行させてゐる。

○秋津洲—日本の古名。關の戸の開くを秋にいひかけた。

○道ある御代—政道の正しい御代。

○賀茂の明神—山城國愛宕郡にあり、上下の二社あつて、賀茂山の麓にあるのを上賀茂の社といひ、賀茂別雷命を祀り、糺の森にあるのを下賀茂の社といひ、別雷命の御母玉依姫と外祖父

賀茂建角見命を祀る。〔賀茂〕參照、

○葛城の明神―葛城の神とは普通〔葛城〕にもある一言主神をいふのであるが、こゝでは事代主神を指してゐる。この神を祀つた社は今大和國葛城郡御所町にある。葛城村の高鴨の神は高日子根命で、事代主神ではない。

○當社御一體の御事―事代主命と別雷命とは別であるが、社名が同じであるところから混同したのである。

○治まる雲の果―國の治まるを雲の收まるにいひかけた。雲の收まるも太平の瑞相。雲の果は遙か遠い所をいふ。

○明らけき―帝の御稜威の明らかなことを日の光の明らかなことにいひかけた。

○かかる時代は―日影が山の端に入りかゝるを、斯かる時代にいひかけた。

【三】

○卯の花の白和幣―卯の花が神前に咲いて、白和幣のやうに見えるとの意、白和幣は白い幣帛、

州葛城の明神に參詣仕り候

といひてツレと向合ひ、

ワキ
ワキツレ「道行「四方の國。治まる雲の果までも。治まる雲の果までも。君の御影は明らけき。天つ日影も山の端に。かかる時世は曇りなき。峯もそなたか葛城の。賀茂の宮居に着きにけり賀茂の宮居に着きにけり

ワキ「峯もそなたか」と正面に向きて三四足出でまたもとへ歸りてワキヅレと向合ひ、賀茂に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に和州葛城の賀茂の宮居に着きて候。心靜かに參詣致さばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて、ワキは脇座に、ワキヅレはその次に下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・茶水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて杉幣を持ち、ツレ男、直面・鬘赤・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てゝ橋懸へ出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテ
ツレ「一聲「葛城の。賀茂の神垣時を得て。咲く卯の花

見物人に自己紹介をし、

ワキ・ツレ「一天四海、國の端々までもよく治まつて、帝の御稜威は太陽のやうに明らかなことだ。このやうな太平の大御代にのどかな旅に出て、遠くの山際に見えてゐた葛城の賀茂のお社に着いた」

と、のどかな旅を樂しんでゐるうちに、葛城に着いた態で、舞臺は大和國葛城賀茂明神の社前となる。

【三】

前ジテ事代主神の神靈老社人の姿を裝ひ、幣を手に持つて、ツレ葛城賀茂の社人を作つて登場。

老翁「葛城の賀茂の御神境に、卯の花が今

○鳴らさぬ枝―太平の瑞相。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」

○卯月―四月の雅名。

○賀茂のみあれ―陰曆四月中の日に行はれる山城賀茂の祭をいふ。翌酉の日に行はれるのを葵祭といふ。みあれは御生で、神のお生まれになつた日、轉じて祭日の意。

○小忌衣―大嘗會・新嘗祭などの神事に與かる祭官が裝束の上に着る單の服。

○白妙の―袖の白いのと木綿の白いのと兼ねていふ。

○木綿だたみ―木綿を疊んだもの。幣のこと。

○とりどり―色々。幣を取るといひかけた。

○塵に交はる神心―和光同塵といふ語を和らげたので、神佛が衆生濟度の爲に本來の德光を和らげて、世の塵に交はり、人に近づくこと。老子に「和二其光一同二其塵一」

○誓ひの海―神が衆生に利益を與へ給ふ誓願の廣大なことを海に喩へたのである

の。白和幣

　二人とも正面に向き、

ツレ二句「鳴らさぬ枝も夏木立。シテ・ツレ（向合ひ）「繁り収めて。風もなし

　と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ち、

シテサシ「これは當國葛城や。賀茂の社中を清め申す者なり。シテ・ツレ（向合ひ）「ありがたや頃は卯月の始めとて。賀茂のみあれの時既に。夏も來にけり小忌衣の。袖白妙の木綿だたみ幣とりどりの神祭。御代を守りの。道すぐに。萬歳の末を祈るなり

シテ・ツレ下歌「いざいざ庭を清めん。いざいざ庭を清めん。上歌「もとよりも。塵に交はる神心。塵に交はる神心。和光の影はいやましに。榮え行くなり國々も。豐かに照らす日の本や。千里萬里も治まれる。誓ひの海は、ありがたや誓ひの海はありがたや

を盛りと咲き揃つて、まるで白い幣帛を神にお供へしたやうだ」

社人「夏木立が生ひ茂つて、しかも太平の御代だから、吹く風も枝を鳴らさない、いや實に靜かで、風も吹かないのだ」

　と御代をたゝへて、

老翁「私どもはこの國の葛城賀茂のお社を掃除してゐる者です」

　と見物人に自己紹介をし、

老翁「あゝありがたいことだ。今は四月の始めで、賀茂のお祭の行はれる夏が來た。小忌衣を着て舞を舞ひ、白い木綿の幣を持つて、色々の神祭を行はれるのだ。どうか神樣が大御代を御守護遊ばされて、御政道が正しく、萬歳の後までも帝の御榮え遊ばすやうにお祈りするのだ。……さあお庭を掃除しよう」

　と神前を清めながら、

老翁「神は衆生濟度の思召で、殊更俗塵にお交はりになるのだが、神の御光は愈々輝き榮えて行くのだ。かうして日本の國國を豐かにお照らしになつて、遠い國の端々までも穩かにお治め下さるので、神の廣大な御利益はほんとにありがたいことだ」

【三】

○故ある＝由緒のある。

○龍田初瀬＝龍田は大和國生駒郡にあり、紅葉の名所。初瀬は同國磯城郡にあり、花の名所である。貞享本には「龍田初瀬の花紅葉」とある。

○祈り申すならでは＝お祈り致すことの外には。

○社頭＝社の前にて。

【三】

（一聲の囃子にてシテ・ツレ入替りて、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ツレ立ちてシテに向ひ、）

ツレ「いかにこれなる老人。これは當社はじめて參詣の者なり。このあたりは皆故ある名所なるべし。眺めの名所を教へ候へ

シテ「さん候この葛城の賀茂の宮居。都の賀茂と御一體の御事なれば。都の人こそ知ろし召さるべけれ。その上龍田初瀬の紅葉をば。見ねども歌人の知ろし召すなれば。われらが申すに及ばず。唯君萬歳の御守りと。當社に祈り申すならでは。又他事も候はず。あらめでたの御神拜やな

ツレ「げにげに翁の申す如く。われら本社賀茂の社頭にありながら。當社の事を尋ぬるは。今更なるべき事ならずや

【三】

賀茂の神職はこれを見て、

神職「もうし御老人。自分は初めてこのお社に參詣した者だが、この邊は皆由緒のある名所であらう。この見渡した名所を教へて下さい」

老翁「はい、この葛城の賀茂の宮は都の賀茂と同じ御神體であらせられるのですから、都の人こそよく御存じでございませう。その上、龍田や初瀬の花や紅葉にしましても、これは歌人は見ないでも御存じの所なのですから、私どもが申すまでもありません。たゞ私どもは帝が萬歳の後までも御榮え遊ばすやうに御守護下さいませと、このお社にお祈りするより外に、他念はないのでございます。あなた樣にもよく御參詣になりまして、おめでたうございます」

神職「いかにも老人の申す通り、自分達は本社の賀茂明神の社前に居りながら、その御分身である當社の事を尋ねるのは、今更らしい尋ね事で、變であつたわい」

○影向―神佛が姿を示して出現すること。
○平安城―京都、天下平安を地名にいひかけたのである。
○賀茂の神山―上賀茂の社地。
○糺―下賀茂の社地、名を正すを地名にいひかけた。
○竹の―竹の節に御代をいひかけた序で、意味はない。
○七つの道―東海、東山、山陽、山陰、北陸、南海、西海の七道、日本全國。
○餘所までも―曇りなきを餘所までにいひかけた。
○名は葛城の―大和を離れた京都でも、名に葛城の賀茂の神と申してとの意。

シテ「恐れながらこの御尋ねこそ。少し不審に候へとよ。賀茂の本社と申さん事。忝くも開闢この方の影向の始め。まづ葛城の賀茂なれば。この宮居こそとりわきて。賀茂の本社と申すべけれ
ワキ「げにげにこれは理なり。まづまづ最初の影向は。この葛城の賀茂の神
シテ「その後天下平安城に。現れ給ふ賀茂の神山
ワキ「その神の名を糺の竹の
シテ「御代も治まり七つの道も
ワキ「猶末すぐに
シテ「曇りなき
地上歌「餘所までも。名は葛城の賀茂の神。御代を守りの御威光。普しや普しや四海の波も治まりて。國富み民も豊かなる。

老翁「失禮ですが、今のお詞は少し變でございますよ。賀茂の本社と申せば、忝くも天地開闢よりこの方、最初に御出現遊ばされたのが、この葛城の賀茂ですから、このお社こそ特に賀茂の本社と申すべきでございませう」
神職「なる程、これは尤もだ。まづ最初に御出現なされたのが、この葛城の賀茂の神で……
老翁「その後天下泰平になつて、京都に御出現遊ばされたのが賀茂山の神で……
神職「その神は名も正すといふ語に緣のある糺の森に御鎭座なされたのだ」
老翁「かうして御代が治まつて、日本國中七道の端々までも平穩になりました。そして、葛城とは所の違つた京都でも、神名はやはり葛城と同じく賀茂の神と仰せられ、御代を御守護になる御威光は遍く行き渡つて、一天四海安穩で、國は富み民も榮えてゐるので、誠に御神德の貴いことでございます」

【四】○君は船臣は水―平家物語巻三に「君は船、臣は水。水よく船を浮べ、水又船を覆す。臣よく君を保ち、臣又君を覆す」とあるのを引いた。その原は荀子王制篇にある

○水上―御名の音を重ねていふ。

○御手洗―神社境内の川。

○久方の―天の枕詞。流れの末は久し、久方の天、雨といひつゞけた。

○雨塊を動かさず―太平の兆。前掲王充の論衡から出た。

○高間の山―大和國葛城山脈の高峰で、金剛山の別名。

○胎金兩部の―密教では法門を胎藏界と金剛界の二に分けてゐる。金剛山はその一法門金剛界を顯しこゐるとの意。

○西天―西方の天竺。

○東北の靈峯―神皇正統記巻一に「華嚴經に東北の海中に山あり、金剛山と云ふ

御影ぞ貴かりける御影ぞ貴かりける

シテ「國富み民も豐かなる」と左へ廻りて常座にてワキへ開き、地上歌の終りに眞中へ行き下に居る。ツキも下に居る。ツレは地上歌の初めに笛座前に行きて坐す。

【四】

地クリ「それ君は船臣は水。水よく船を浮かめつつ。臣よく君を。仰ぐとかや

シテサシ「然れば王城の鎭守として。誠に以て御名高き

地「その水上は山陰の。賀茂の御手洗いさぎよき。流れの末は久方の。雨塊を動かさず安く樂しむ時とかや

シテ「ありがたしとも。なかなかに

地「言葉を以ても。述べがたし

（居クセ）

地クセ「然るに葛城や。高間の山と申すは。金剛の峯として。胎金兩部のその一法を現し。神も影向なるとかや。西天佛在世よりは。東北の靈峯

【四】老翁　さて諺にも『君は船臣は水』と申しますが、その水がよく船を浮かべるやうに、臣下がよく帝の御稜威を仰いでゐるのでございます。それで、京都賀茂の神は、帝都の鎭守として誠に名高いお社で、その御守護によつて、あの賀茂山から流れ出る御手洗川の淸らかな流れのやうに、いつまでも世の衰へる時はなく、雨も塊を壞さない安樂な御時世で、ありがたいとも忝いとも、詞では述べられないのでございます。――

ところで、この葛城の高間山と申しますのは、金剛山と申して、胎藏界・金剛界兩部の一法門を現したもので、神もこゝに御垂跡になるのでございます。かの西方天竺に釋尊が御在世の頃から『東北の

とあるは、今の大倭の金剛山の事なりとぞ」とあるのをいふ。
○三國―日本、支那、印度。
○寶の山―金剛山の別名。御代の寶、寶の山といひつづけた。
○百王―代々の帝。
○清涼殿―天子の常の御座所のある御殿。
○長階―清涼殿から紫宸殿に至る廊下。十一月の賀茂臨時祭の日、主上が清涼殿に出御遊ばされ、公卿達を簀子・長階に召して宴を賜ひ、神樂を叡覽になる儀式があつた。それを四月の祭に混同したのである。
○その日のとりどり―葵祭は四月中の酉の日であるから「酉をとり」にいひかけた。
○千早振る―神の枕詞を賀茂の枕詞に轉用した。
○夏引の―みあれの日は夏であるといひかけて、夏引の絲とつづけた。夏引の絲とは夏の頃手引きにとる繭の絲。
○絲毛の花車―絲毛の車は車の屋根を絲で飾つたもので、貴人の物見車。花車の花は文のあやに用ゐたのである。
○廻る日の―廻るは車の縁語。
○今日に葵の―今日に逢ふを葵にいひかけた。
○二葉より―後撰集讀人不

これ。大和の金剛山。三國不二の峯として。御代の寶の山ともこれを名づけたり。抑も葛城の。賀茂の神垣隔てなく王城の鎭守と現れ百王守護の神山や。賀茂の祭とて。忝くも大君の。清涼殿や長階の。出御も絶えぬ年々に。卯月のその日のとりどりの御遊なるとかや

シテ　千早振る。賀茂のみあれや夏引の

地　絲毛の花車廻る日の。今日に葵の二葉よりわがしめ結ひし姫小松の千代をかけて水鳥の。鴨の羽色やしもとゆふ葛城も同じ神山の。一體分身の御代を守り給ふなりこの御代を守り給ふなり

【五】

地　ロンギ　げに葛城の神の代の。げに葛城の神の代の。その道すぐに夕霜の翁はさても誰やらん

シテ「誰ともいはん翁さび。人な咎めそわれこそ

靈峯」といつたのが、即ちこの大和の金剛山で、日本・支那・天竺に雙びのない山ですから、御代の寶であるといふので、寶の山とも名づけられて居ります。さて、この葛城の賀茂の神が所によつてお隔てもなく、京都に於ては京都の鎭守として御出現になり、代々の帝を御守護になるので、その賀茂の祭と申せば、忝くも帝が清涼殿や長階に出御遊ばされて、年々絶えず四月のその祭の日に色々の御遊を遊ばすとの事でございます。

賀茂の祭には、貴い方々も美しい絲毛車に乘つて物見に御出掛けになり、今日の葵祭に會つたことを喜んで、二葉の小さい時から大切にして育てた姫小松が千年の老松となるまでも、いつまでもいつまでも帝が御榮え遊ばすやうに願ふのですが、その京の賀茂の神もこの葛城の神も同じ御神體で、一體分身であらせられるのですから、とも〴〵に御代を御守護になるのでございます」

【五】地謠　葛城の神の御出現以來のことを、實によくいつて聞かせる、この白髮の老人は一體誰であらう」

（翁に向つて聞く。）

シテ　外の者でもない、この老人をお見咎

知の歌―二葉よりわがしめ結ひし撫子の花の盛りを人に折らすな―を借り、撫子を姫小松に轉じた―しめ結ふ」は他人に徒きせないやうに圍ふこと。
○水鳥の―千代をかけて見るを―みづ鳥にいひかけた。
○鴨の―賀茂の神を含めていふ。
○しもとゆふ―葛城の枕詞鴨の羽色や霜といひかけた
○神山の―山に意味はない

【五】
○夕霜の―すぐにいふ、夕霜の、霜のよとつゞけた。霜の翁は白髪の老人をいふ。
○翁さび―「翁さび人な咎めそ」と伊勢物語の歌「翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞ田鶴も鳴くなる」
○事代主―葛城賀茂の祭神事代主命をいふ。父命は大國主命の御子で、父神に勸めて國土を皇孫に獻らしめられた。
○高し―座が高い、
○旅宿―ワキが神職の旅宿をいふ。ワキの遠い旅をしこ參詣したのを慰めようとの意。
○天の戸―天上の御殿。

は。事代主の翁とて御代を守り申すなり
地「そもや事代主と聞く。その名はいかに
シテ「音高し
地「事代主と申すこそ。葛城の神の名なれいざや。神體を現し。旅宿をあがめ申さんとて（シテ立ち）。葛城や高間山の嶺の雲に翔りて天の戸に入らせ給ひけり天の戸に、入らせ給ひけり
と右へ廻りて常座にてひらき靜かに中入。

め下さるな。自分こそは事代主の翁といつて、大御代を守る者です」
神職「一體事代主といはれるのは、どうした名前なのです」
老翁「座が高い。……事代主と申すのが、この葛城の神の名なのだ。さあ眞の神體を現して、遠い所の參詣を慰めよう」
といつて、葛城高間山の雲上を翔つて、天上の御殿にお入りになつた。
前ジテ老翁、昇天の態で退場。

【間】
ワキ「いかに誰かある
ワキヅレ「御前に候
ワキ「所の者を呼びて來り候へ
ワキヅレ「畏つて候（といひて仕手柱際へ出で）
ワキヅレ「所の人の渡り候か
狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、
狂言「所の者と御尋ねある。罷り出でて承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來つて給はり候へ
狂言「畏つて候

○祝はれ—齋はれ、祀られ。

○神は正直の頭に宿り—諺。倭姫命世紀に「日月廻二四州一雖レ照二六合一須レ照二正直頭一」

○和光同塵は—止觀第六に「和光同塵結緣之始、八相成道以論二其終一」佛がこの世に現れるのは、衆生と緣を結ぶ始めであり、成佛するのは、衆生を利益する最大のものであるとの意。

二人とも舞臺の眞中へ出で、

ワキヅレ「所の者を召して參りて候

狂言「所の者御前に候

ワキヅレはもとの座に着く。

ワキ「所の人にて候はば。當社の御謂れ語つて聞かされ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居(すまひ)仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「まづ當社葛城の神と申すは。王城の鎭守と祝はれ。都賀茂の明神と同じ御事と承り及びて候。然れば開闢よりこの方。御影向の始めはこの葛城の賀茂にて。當社が本社にて御座あると申して候。誠に神は正直の頭に宿り。目前にあらたなる子細は。和光同塵は結緣の始め。八相成道は利物の終りを見せ給ふ。總じて神と申すも佛といふも。これ皆水波の隔てにて御座あると申す。誠にこの御山は。金胎兩部のその一。金剛界を現し給ふ故。金剛山とも申し候。さるによつて法基菩薩の御説法の供養の所にて。神蛇大王佛法の守護神となり。天下泰平國土豐かに護り給ふ。この神蛇大王と申すは。そのかみ大唐靈巖寺の僧玄弉三藏渡天の時。流沙川を渡り大般若の妙軸を受け。末世の寶となし給へば。彌〻佛法守護の爲と聞え申し候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。是は都賀茂の明神の神職なるが。當社初めて參詣申す處に。老人と若き男の來られ候程に。則ち言葉をかはして候へば。當社の御謂れ唯今の如く懇に語り。葛城の神はわ

○聊爾なる―粗忽な、失禮な。

【六】
○御聲も同じ松の風―御聲も松風も同じく更け行くとの意。

【七】
○劫初―世界の始まり、佛說に無量の時を劫といふ。
○王城―帝都。

れたりといひもあへず。山上し給ふと見て姿を見失うて候よ
狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。扨は賀茂の明神の神職の御方と仰せ候か。左樣の事とも存ぜず聊爾なる物語仕り面目なく候。誠にこれまでの御參詣を嬉しく思し召し。代主假に現れ給ひ。御言葉をかはし給ひたると存じ候間。暫く御逗留なされ。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候
ワキ「あまりに不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。重ねて奇特を見うずるにて候
狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ
ワキ「賴み候べし
狂言「心得申して候
といひて狂言は引く。

【六】
ワキ ワキツレ 上歌 待謠「心もともに澄む月の。心もともに澄む月の。光さやけき夜神樂の。御聲も同じ松の風。更け行く空ぞ、靜かなる更け行く空ぞ靜かなる

【七】
出端の囃子にて、後ジテ事代主神、面邯鄲男・黑垂・透冠・色紗卷・襟淺黃・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松へ出で、
後ジテ「あらありがたの折からやな。われ劫初よりこの山に住んで。王城を守り御代を崇め。天

【六】 後段
神職 われわれの心までが澄み渡る、いかにも淸らかな月夜に、神樂の御聲も松風の音も次第に更けて行つて、あたりが實に靜かなことだ―

【七】
後ジテ葛城明神登場。
明神 あゝありがたい時だ。自分は世界の初めからこの山に住んで、帝都を護り、帝の御代を崇め、天下を泰平にする爲に、

下泰平の寶の山。葛城の神と現れて。唯今ここに來りたり。あら面白の夜遊やな

地「標結ふ。葛城山に降る雪は

シテ「間なく時なく思ほゆるかな

地、それはみ冬の深雪の空

シテ「これは卯月。卯の花の

地「雪を廻らす舞の袖。ふるき大和舞拍子を揃へて。面白や

と舞臺に入り、

「神舞」

を舞ひ、舞ひ上げて常座に立つて、ワキシテに向ひ、

【八】

地ロンギ「あらありがたやありがたや。天下泰平樂とは。いかなる舞の事やらん

シテ「怨敵の難を遁れて。上下萬民舞ひ遊ぶ

と、次の詞に合せて舞ふこ

地「さて萬秋樂と申すは

この寶の山に葛城の神として垂跡したものので、今こゝに出て來たのである。……おゝ夜の神樂遊びが寶に面白いことだ。「標結ふ葛城山に降る雪は、間なく時なく思ほゆるかな」

（葛城山には雪が絶え間なく降つてゐるが、そのやうに私も絶え間なく君の御事を思つてゐます）

といふ歌があるが、それは冬の雪の容を詠んだものであるが、今は四月卯の花の盛りで、美しい舞袖を飜し、拍子を揃へて、古い大和舞を舞ふのが、實に面白い」

〔神舞〕

叫神が興に乘じ、舞を舞ふ態。

【八】

神職「あゝ實にありがたいことです。して、天下泰平の泰平樂とは、といふ舞の事でございませう」

叫神「怨敵の難を遁れて、上下萬民が喜んで舞ひ遊ぶものだ」

神職「それから萬秋樂と申すのは

○標結ふ葛城山に降る雪は間なく時なく思ほゆるかな―古今集、大歌所御歌で、詞書に「古き大和舞の歌」とある。但し原歌には第三句「降る雪の」とある。

○み冬―みは接頭語で、冬の美稱。

○雪を廻らす―舞姿の美しさを形容した語。

○大和舞―手に榊を持ち、横笛・筝揺などに合せて、八少女の舞ふ舞。もと大和國から起つたもので、朝廷の儀式、諸社の祭に用ゐられた。前掲古今集の詞書によつて出したのである。

【八】

○泰平樂―天下泰平にかけていふ。唐樂の曲名で、漢高祖が楚の項羽と鴻門の地に會した時、楚の項莊が劍舞に託して高祖を殺さうとしたが、漢の樊噲が楯を以て巧にこれを防いだので、高祖は難を遁れて、遂に楚を滅ぼし天下を平定した事を作つたものであるといふ。それで「怨敵の難を遁れ」とつゞけたのである。

○萬秋樂―唐樂の曲名で、見佛聞法樂ともいひ、源平盛衰記に「抑も萬秋樂といふ曲は、本は都率天上の樂なり、是即ち彌勒の内院の

秘密、灌頂の陀羅尼なり、釋迦如來𠮷利の雲上にして彌勒に袈裟を附屬し給ひし時、彼の天の萬秋樂といふ木の下にて、天樂・菩薩この樂を奏して、如來を供養し奉りしかば、萬秋樂と名づけたり」とある。
○都率天—欲界六天の第四で、七寶の宮殿があり、無量の諸天がこれに住し、その内院には彌勒菩薩が住むといふ。
○見佛菩薩—見佛の菩薩といふ意。見佛とは報應の佛身を見ること。
○春鶯囀—唐樂の曲名。
○秋風樂—唐樂の曲名。
○颯々—舞の袖や裳裾の鳴る聲。
○萬歳—樂の名萬歳樂を含めていふ。

シテ「都率天の樂にて見佛菩薩舞ひ給ふ
地「春立つ空の舞には
シテ「春鶯囀を舞ふべし
地「秋來る空の舞には
シテ「秋風樂を舞ふとかや
地「舞に颯々といふ聲は。樂々と響くなり。いつもその聲盡きせぬは。この砌なるべしやな。萬歳の四方の國。道ある御代ぞ、めでたき道ある御代ぞめでたき
と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

明神「これは都率天の樂で、悟りを開いた菩薩の舞はれるものだ」
神職「春になつた頃の舞には、何がふさはしいでせう」
明神「春鶯囀を舞ふのがよい」
神職「秋になつた頃の舞には……」
明神「秋風樂を舞ふのがよからう」
かうして、色々の舞を舞はれる毎に、袖や裳裾のさら／＼と擦れる聲は、樂樂といふやうに聞える。この樂しい聲のいつも絶えないのが、ありがたい今の大御代で、萬歳樂を祝ふ聲が國の四方に滿ちて、御政道の正しい御代は、實にめでたいことである。
（と舞ひ納めて退場。）

〔考　異〕

古謠本　（貞享三年本）

【一】ワキ「抑もこれは……明神に仕へ申す（貞奉る）神職の者なり（貞にて候）……唯今和州（貞に下り）葛城の明神に（貞へ）……道行「四方の國……誰もそなたか（貞に）葛城の……　【二】シテサシ「これは當國……社中を清め申す者なり（貞し其宮つこにて候也）……上歌「もとよりも……日の本や（貞の）……　【三】ワキ「いかにこれなる……眺めの（貞うちの）名所を敎へ（貞給）候へ。シテ「さん候……御一體の御事なれば（貞我等か申さす共）郡の……その上龍田初瀨の（貞花）紅葉をば……神拜やな（貞候）。ワキ「けにげに……賀茂の社頭（貞へん）に……シテ「恐れながらこの御尋ね（貞意）こそ……忝くも（貞ナシ）開闢この方……　【四】地クセ「然るに……西天佛在世（貞所）よりは

【五】地ロンギ「げに葛城の……さても誰やらん（頁人ぞ）。シテ「誰とも（頁か）いはん……

……三國不（頁無）二の峯…… 地「絲毛の花車の……千代を（頁ナシ）かけて……

【七】後ジテ「あらありかたの折からやな（頁や目出度やな）われ劫初（頁こつしよ）より……

【八】シテ「怨敵の難を遁れて（頁〳〵）……

須磨源氏　觀（寶剛）

解說

【能柄】五番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　宮崎社官藤原興範、ワキツレ　同從者（二人）
　前シテ　老樵夫（光源氏の靈）、狂言　須磨の者、
　後シテ　光源氏

【所】攝津國　須磨浦

【時】三月

【作者】能本作者註文に世阿彌の作とあるが、他に古記錄は見當らない。

【梗概】日向國宮崎の社官藤原興範が伊勢參宮の途中、須磨の浦に立寄ると、光源氏の靈が老樵夫の姿で現れ、その一代の略歷を語り、後に眞の姿を現して都率天より降り、妙なる姿で舞を舞ふ。

【出典】源氏物語の須磨・明石の卷を中心として、物語の全般に亘つてゐるから、物語の文の本曲に採り入れた箇所だけを、語釋及び附記に揭げることとする。

【概評】須磨・明石に於ける光源氏を題材としたものには、本曲の外に

〔住吉詣〕があり、それには、源氏が既に京都に召還されて内大臣となり、威勢の盛んであつた時、住吉に詣でて、明石上に再會することを、現在物に脚色したもので、絢爛眼の覺めるやうな曲柄であるが、これは幽靈物として歿後の源氏の靈にその閲歴を述べさせるのであるから、靜寂な趣がある。そして本曲製作の意圖は、この著名な光源氏の閲歴を觀客に知らしめようとする所にあつたのであらうと思ふが、これと相似た目的で作られたものに〔源氏供養〕がある。そして、〔源氏供養〕では物語の概略を傳へようとし、本曲は物語の主人公に就て知らしめようとしたのであつた。兩曲製作の意圖は相似たものであるが、一方のシテは作者紫式部とし、これは物語の主人公光源氏とした爲に、こゝに謠曲作者の男女觀が極めて明確に知られることとなつた。即ち女性の紫式部は物語を作つたが故に墮獄の苦しみを受けて居り、男性の光源氏は、風雅な貴公子であつたが故に、都率天に住み、衆生濟度の爲に天下るといつてゐるのである。このやうに、光源氏が菩薩として崇められてゐるのであるから、本曲は五番目物として取扱つてはゐるものの、大體の構想が神靈をシテとした脇能と同樣で、この點、伊勢物語の主人公在原業平を題材とした曲と酷似してゐるのである。――〔源氏供養〕及び〔住吉詣〕參照。

【一】

前段

舞臺は初め日向國宮崎で、ワキ宮崎の社官藤原興範、ワキヅレの從者を隨へて登場。

興範　遙々と遠い海を渡つて旅に出るのだが、都はどの邊に當るのだらう

と、まづ次第で旅の心持を述べ、

興範　私は日向國宮崎の神主藤原興範といふものです。さて私は田舍住居をしてゐるので、まだ伊勢大神宮に參詣しないか

【一】

次第の囃子にて、ワキ藤原興範、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ　次第「八重の潮路の旅の空。八重の潮路の旅の空。九重いづくなるらん

ワキは地取に正面に向き、

ワキ　抑もこれは日向の國宮崎の社官。藤原の興範とはわが事なり。さてもわれ鄙の住居なるに

【一】

二、八重の潮路―海路の遠いこと。

〇宮崎―日向國宮崎郡下北方村の宮崎神宮をいふ。神武天皇を祀る。

〇藤原の興範―後撰集に大宰大貳として見えてゐる歌人。宮崎の社官としたのは作者の假托である。この人の名は〔檜垣〕にもとられてゐる。

○旅衣—思ひ立つは裁つに、朝霞は麻に、浦々は裏に、遙々は張るにいひかけた、衣の緣語。
○思ひ立ちぬる—立つは思ひ立つと霞の立つと、兩方にかけて用ゐた。
○彌生—三月の雅名。
○淡路—波の泡といひかけた。
○須磨—攝津國武庫郡にある。
○源氏の大將—紫式部の作源氏物語の主人公、桐壺帝の御子で、光源氏の君といひ、才色兼備の貴公子であつたが、朧月夜内侍との關係が顯れて、須磨に配流せられたといふ。「源氏供養」「住吉詣」等參照。
○若木の櫻—源氏物語須磨の巻に「須磨には年かへりて、日長くつれづれなるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて」とある。後世須磨寺の門前にある櫻をこの木であるといひ傳へた。

よつて。未だ伊勢大神宮へ參らず候程に。この度思ひ立ち伊勢參宮と志して候

　といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〔道行〕旅衣。思ひ立ちぬる朝霞。思ひ立ちぬる朝霞。彌生の空も半ばにて。日影のどかに行く舟の。浦々過ぎて遙々と。波の淡路をよそに見て。須磨の浦にも着きにけり須磨の浦にも着きにけり

　ワキ「浦々過ぎて」と正面に向き三四足出でてまたもとにかへりワキヅレと向合ひて須磨に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「やうやう急ぎ候程に。津の國須磨の浦に着きて候。この所は聞き及びたる源氏の大將住み給ひし在所にて候。又承り及びたる若木の櫻をも一見せばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

　といひて脇座へ行き下に居り、ワキヅレはその次に坐す。

ら、今度思ひ立つて、伊勢參宮に出掛けようと思ふのです」

　と、見物人に自己紹介をし、

[illegible]旅を思ひ立つて、朝霞のたちこめた三月の中旬、日影ものどかな海路を船で出かけ、浦々を過ぎて、遙々と遠い所を渡つて行くうちに、淡路島を向ふに見て、須磨の浦に着いた」

　と旅を續けてゐるうちに、舞臺は須磨浦に移る。

[illegible]旅を急いだので、漸く攝津國の須磨の浦に着きました。この所は豫ねて聞いてゐた源氏の大將のお住みになつた所で、又話に聞いてゐた若木の櫻をも見物したいと思ひます」

　といつて、若木の櫻の方へ行く。

【三】　一聲の囃子にて、シテ老樵夫、面笑尉・尉髪・襟淺黄・着附無地熨斗目・紺水衣・腰蓑・腰帶・扇の裝束にて柴を負ひ杖をつきて常座へ出で、

シテ一聲「浮世の業にこりずまの。猶こり果てぬ。鹽木かな。三句「松ならでまた煙と見ゆる。これや眞柴の。影ならん

シテサシ「これは須磨の浦に。旦暮に釣を垂れ。焼かぬ間は鹽木を運び。浮世を渡る者にて候なり。（右の方に向き）「又この須磨の山陰に一木の花の候。（正面に直し）「名に負ふ若木の櫻なるべし。古光源氏の御舊跡も。この所にてありげに候

シテ下歌「われら賤しき身なれども。ありし雨夜の物語〔上歌〕「聞くにも袖を濕して。聞くにも袖を濕して。山の薪の重きにも。思ひ檽を折り添へて。かの古墳ぞと木綿花の。手向の梢折々に心を運ぶばかりなり心を運ぶばかりなり

【三】
○こりずまの—懲りもせずにとの意を須磨にいひかけた語。
○こり果てぬ—懲ると樵るとを兼ねていふ。
○鹽木—鹽を焼く爲の薪。
○松ならで—松は常に煙と詠み合せた歌が多く、松が煙となるのは普通であるがこれは松ではないがとの意に用ゐたのである。
○眞柴—眞は接頭語。
○雨夜の物語—源氏物語帚木の巻に、五月雨の降りつゞいた夜、源氏の君が頭中將・左馬頭・藤式部などと共に、女の品々を批評しあつた事を記してゐるのをいふ。
○思ひ檽を—思ひしくを檽にいひかけた。思ひしくは頻りに思ふ意。
○かの古墳—源氏の君は罪を宥されて歸洛し、こゝで死んではゐない。物語とは違へて作者が假托したのである。
○木綿花の—古墳ぞといふを木綿にいひかけた。木綿花は神に捧げる幣で、手向の序に用ゐたのである。
○折々に—花の梢を折るを折々にいひかけた。

【三】　前ジテ源氏の君の靈、老樵夫の姿を裝ひ、山路から歸る態で、薪を背に負うて登場。

樵夫「世渡りの情ない仕事に懲り懲りしたのだが、といつて、止めてしまふわけにも行かず、やはりいつまでも鹽焼きの薪を伐つてゐることだ。おゝ、また煙が見えるが、あれは松の煙ではなくて、柴を焼いてゐる煙なのであらう」

といつて、見物人に、

樵夫「私は須磨の浦で朝から晩まで釣をしたり鹽を焼いたりして、その隙には鹽を焼く薪を伐り運んで、浮世の暮らしを立ててゐる者です」

と自己紹介をし、

樵夫「又この須磨の山陰に一本花の木がありますが、これが有名な若木の櫻でせう。昔光源氏のお出でになつた御舊跡もこの所のやうです。私どもは賤しい身ですけれど、あの物語に記された雨夜の品定めの話を聞きますと、感涙に袖を濡らすやうな次第で、かうして山の薪を負ふだけでも重いのですが、昔の事の偲ばれるまゝ、薪の上に樒を折り添へ、花の枝を手折つて、源氏のお墓に手向けようと思つて、時々持つて歸るのです。……

〔三〕

○故ある—由緒のある。

○事新し—今更めいてゐる。尋ねるまでもないことだ。

（かの古墳をと見て右の方に向き、二三足出でまたもとへ歸り、上歌詠みて正面に向き、）

シテ「暫く柴をおろし花をも眺めばやと思ひ候

（といひて下に居り柴を下す。）

【三】

ワキ「いかにこれなる翁に尋ぬべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「その身は賤しき山賤なれども。この花に眺め入り家路を忘れたる氣色なり。もしこの花は故ある木にて候か

シテ「賤しき山賤と承り候へども。恐れながらそなたをこそ（と杖をつきて立ち上る）鄙人とは見奉りて候へ。さすがに須磨の若木の櫻を。名木かとのお尋ねは。事新しうこそ候へとよ

ワキ「げにげに須磨の山櫻。名に負ふ若木の花ぞとて。遙々ここに分け入りて

シテ「わざと眺めの御志

暫く柴を下して、花を眺めませう

（と、柴を下し花を眺める態。）

【三】

（興範はこれを見て、）

興範「もうし、御老人にお尋ねしたい」

樵夫「何の御用でございます」

興範「そなたは賤しい樵夫だが、この花に眺め入つて、家に歸るのも忘れてゐる樣子だが、もしやこの花は由緒のある木なのですか」

樵夫「私の事を賤しい樵夫と仰しやるが、失禮ながらあなたこそ田舍人かと存ぜられます。この有名な須磨の若木の櫻を、今更のやうに名木かなどとお尋ねになるのは、餘りにをかしうございます」

興範「いかにも迂濶であつた。自分は須磨の山櫻の、有名な若木の櫻を見たいと思つて、遙々こゝまで來てゐながら……」

樵夫「わざ〳〵御見物とは、風雅なお心で……

○關よりも花にとまるか―須磨の關所に引留められるのではなくて、花の爲に引留められるのか。
○近き後の山里の―須磨の巻に「おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり」
○名をとりどりの―柴までが名物の名を取るとの意をとりどり、さまざまの職業の意にいひかけた。
○心なき―雅趣のない。
【四】
○おこと―そなた。
○空蟬―源氏物語第三巻の名。空蟬は蟬の脱殼であるから、空しきの序に用ゐた。
○桐壺―物語第一巻の名。この巻に源氏の君の母上桐壺の更衣が亡くなられたことを述べてあるので、夕の煙云々といふ。

ワキ「日もはや暮れて須磨の浦の
シテ「さらば里にもお泊りなくて
ワキ「野を分け山に
シテ「來り給ふは
地上歌「關よりも。花にとまるか須磨の浦。花にとまるか須磨の浦。近き後の山里の。柴といふものまで。名をとりどりの業なるに。ただ心なき住居とて人な賤しめ給ひそよ人な賤しめ給ひそ
【四】
ワキ「いかに翁。古この所は光源氏の御舊跡。殊におことは年ふりたる者なれば。源氏の御事物語り候へ
シテ眞中へ行き下に居り、
地クリ「忘れて過ぎし古を語らば袂やしをれなん。われ空蟬の空しき世を案ずるに。桐壺の夕の煙堪へぬ思ひの。涙を添へ

興範「おゝ日もはや暮れたが、今日はこの須磨の浦で……」
樵夫「それでは、里にもお泊りはなされずに……」
興範「野を分けて來た、この山で泊らうと思ふのだ」
樵夫「こゝでお泊りになるとは、須磨の關所で留められるのではなくて、花に引留められなさるのでございますな。こゝは前は濱邊に近く、後は山で、柴といふものまで、何から何まで名物ですが、こゝに住む者どもはどの仕事をしてゐますものも、たゞ心のない者ばかりですけれど、どうかお賤しめになりませずに……」
【四】
興範「老人、この所は昔光源氏のお出でになつた御舊跡だが、殊にそなたは年をとつた人だから、よく知つて居るだらう。源氏の御事を話して下さい」
樵夫「忘れて過して來たが、昔の事を話せば、當時のことが思ひ出されて、涙に袂の濡れることであらう」
（獨言のやうにいつて、また物語を初め、）
樵夫「さうだ、空蟬のやうな果敢ない昔の

○いとどしく蟲の音しげき―桐壺更衣が死なれて、勅使が來た時、更衣の母が詠んだ歌「いとゞしく蟲の音しげき淺茅生に露おき添ふる雲の上人」を引いた。○小萩が下の―桐壺帝が更衣の母に賜つた歌「宮城野の露ふきむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」に據る。宮城野は内裏を指し、小萩は源氏の君を指す。○はごくみ―養育すること。○初冠―元服して初めて衣冠を着ること。桐壺巻に「十二にて御元服し給ふ」○高麗の相人―本曲の末に記す。○帚木の巻―物語の第二巻○中將―末尾に記す。○紅葉の賀の巻―物語の第七巻。この巻に源氏が十八歳の十月十餘日正三位になつたとある。○花の宴―物語第八巻。この巻に、南殿に花の御宴のあつた夜、弘徽殿の廊で、源氏の君が朧月夜の内侍と密かに會つたことを記す。○行方も知らで―同じ巻に源氏が朧月夜内侍と取交はした扇に「世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて」と書かれた

シテサシ「いとどしく蟲の音しげき淺茅生の
地 露けき宿に明け暮らし。小萩が下のさみしさまで。はごくみ給ひし御恵み
地上歌「いとも畏き勅により。十二にて初冠。高麗國の相人の。つけたりし始めより。光源氏と名を呼ばる。帚木の巻に中將。紅葉の賀の巻に正三位に叙せられ。花の宴の春の夜の。行方も知らで入る月の。朧けならぬ契りゆゑ。年二十五と申せしに。津の國須磨の浦海士人の歎きを身に積みて。次の春。播磨の明石の浦傳ひ。問はず語りの夢をさへ。現に語る人もなし。さる程に天下に。奇特の告ありしかば。又都に召し返され。數の外の官を經て
シテ「その後うち續き
地 澪標に内大臣少女の巻に。太政大臣藤の裏葉

事を思ひ出すと、自分は桐壺の更衣が夕べの煙と消え失せられ、悲しみに堪へず、涙ながらに、蟲の音の實に多い、雜草の生ひ茂つた、しめつぽい家に明かし暮らしてゐたのだが、その寂しい思ひをしてゐる子供を、父帝は御恵み深く御養育遊ばして、實にありがたい勅旨によつて、十二で元服をし、高麗國から來た人相見がつけたところから、名を光源氏と呼ばれることとなつた。それから帚木の巻で中將になり、紅葉の賀の巻で正三位に叙せられたが、花見の宴を催された春の夜、前後の分別もなく、朧月夜の内侍と深い契りを結んだ爲に、年廿五の時に攝津國須磨の浦に流されて、深い歎きを身に負ひ、翌年の春、播磨國明石に移つたが、入道が問はず語りに話した夢物語を、誰かに話して聞かせたいと思つても、話相手にすべき人もないのだ。ところが、都で不思議なお告があつたので、又都に召還されて、員外の大納言を經て、その後うち續いて、澪標の巻で内大臣、少女の巻で太政大臣、藤の裏葉の巻で太上天皇となり、このやうに樂しみを極めて、光君といふのです」

に。太上天皇かく樂しみを極めて光君とは申すなり

【五】

地ロンギ「さてや源氏の舊跡の。さてや源氏の舊跡の。わきていづくの程やらん。委しく教へ給へや

シテ「いづくとも。いさ白波のここもとは。皆その跡と夕暮の。月の夜を待ち給ふべし。もしや奇特を御覧ぜん

地「そもや奇特を見んぞとは。何をか待たん月影の

シテ「光源氏の御住家

地「昔は須磨

シテ「今は都率の

地「天に住み給へば月宮の影に天降りこの海に影向あるべし　かやうに申す翁も（と立ち）その品

こ、我知らず昔の源氏になつて話すのであるが、興範はこれに氣がつかず、

【五】

興範「さう／＼、源氏の舊跡は須磨のうちで、どの邊に當るのです。委しく教へて下さい」

樵夫「何處であるか、一向分らない、いやこの邊はすべてその舊跡だといふことです。この月夜をお待ちなさい。或は不思議な靈驗を御覽になるかも知れません」

興範「一體不思議な靈驗を見るといふのは……どうして月夜を待つのです」

樵夫「こゝは光源氏の御住居でしたから……」

興範「昔はこの須磨であつたが……」

樵夫「今は都率天にお住みになるのですから、この月影に、天上から天降つてこの海に御出現になるでせう。いや實をいへば、この老人がその色々の物語を傳へた『源氏物語』の主人公である」

とある歌に據つた。
○朧けならぬ契り―朧月夜内侍との契りをいふ。おぼろけならぬは並々ならぬとの意。源氏が内侍に贈つた歌に「深き月のあはれを知るもいる月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ」
○年二十五―内侍との事が顯れて須磨に配流せられた事をいふ。「すみれ草」の年立によれば、源氏廿六歳の三月末つ方である。
○歎き―歎きのきを木にかけて、積むといふ。
○次の春―源氏須磨配流の翌年三月十三日明石の入道の迎へによつて、明石に移つたと、明石の卷にある。
○問はず語りの夢―本曲の末に記す。
○現に語る人もなし―配所には人らしい人もなく、夢の御告を語るべき人もない。
○天下に奇特の告、數の外の官―末に記す。
○澪標―物語の第十四卷。この卷に源氏廿九歳の二月内大臣になつたとある。
○少女の卷―物語の第二十一卷。この卷に源氏三十三歳の時太政大臣になつたと

品の物語。源氏の巻の名なれや雲隠れしてぞ失せにける。雲隠れして失せにけり

といつて、雲隠れの巻のやうに、雲に隠れて見えなくなつてしまつた。

前ジテ老樵夫退場。

と右へ廻りて常座にて開き静かに中入。

【四】 狂言所の者。常附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。須磨の浦に住居するものにて候。この間はいづ方へも出で申さず候間。今日は浦わへ出で。心を慰め申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれなる御方はいづ方より御出でなされ候へば。この所には休らうて御座候ぞ

ワキ「是は日向の國宮崎の社官に藤原の興範にて候。この所始めて一見の事にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「左様に候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候（といひて舞臺の眞中に坐す）

ワキ「是は思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この所に於て光源氏の御事につき様々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等このあたりに住居仕り候へども。左様の事委しくは存ぜず候が。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ須磨の浦に於ては。若木の櫻と申すは。隠れなき名木にて候。されば歌にも。闇よりも花にとまるか須磨の浦。若木の櫻近き山里と御座候。又光源氏と申したる御方は。御形美しく輝く御裝ひなれば。その頃高麗よりの相人渡り。光君と名づけ申す。その後源氏の姓を蒙り。光源氏と申し

ある。
○藤の裏葉―物語の第三十三巻。この巻に源氏三十九歳の秋太上天皇に準へて御封を賜つたとある。

【五】
○いさ白波の―いさ知らずを白波にいひかけた。
○ここもとは―須磨の巻に「波ただここもとに立ちくる心地して」とあるを借りていふ。
○その跡と夕暮の―その舊跡であるといふを夕暮にいひかけた。
○月影の―月の夜を承けて光の序とする。
○都率の天―須彌山の頂上にあり、七寶の宮殿があつて、彌勒菩薩がその内院に住むといふ。
○月宮の影―天上の宮殿。都率天を承けてこの語を出し、月影の意にかけて用ゐた。
○影向―神佛が姿を示して出現せられること。
○雲隠れ―源氏物語の巻の名。本文はなく、巻の名に源氏の君の薨去を仄めかしてゐる。

【四】

候。又この浦へ御下向の子細は。その頃帝御寵愛に朧月夜の内侍上と申す御方に。源氏忍ばせ給ふ故。その御咎めとて。この浦へ流され給ふ。又紫の上と申して。源氏とりわけ御契り深き御方なるが。この所へ御下向の折節。一入名殘を惜しみ給ひ。互に鏡に向ひ。髪かきなで淚を流し。その時源氏の御歌に。身はかくて流されぬれど君があたり。さらぬ鏡の影は離れじと詠み給へば。紫の上の御返歌に。別れても影だにとまるものならば。鏡を見ても慰まれましと遊ばし。泣く〳〵御別れあり。それより源氏は父帝の御墓前に參り給ひ。その後この所へ御下向あり。三歲が間憂き月日を送り給ふ。さればこの邊はみな名所にて候。又後の山に柴燒く煙を御覽じて。山賤の庵にたけるしばしばも。こととひ來なんこほる里人と詠み給ふ。その後御歸洛ありて。太上天皇までなり給ひ。めでたく榮え給ひたると申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく老人一人來られ候程に。若木の櫻を尋ねて候へば。光源氏の御事。唯今御物語の如く懇に語り。何とやらん由ありけにて。雲隱れして姿を見失うて候よ

狂言「是は奇特なる事を承り候ものかな。このあたりに左樣の心ある老人はなく候間。光源氏の御亡心現れ。昔の樣體を御物語ありたると存じ候。左樣に候はば。暫くこの所に御逗留ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候間。暫く逗留申し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

○身はかくて流されぬれど君があたりさらぬ鏡の影は離れじ—この歌及び次の紫上の返歌、須磨卷に見ゆ。但し原歌「身はかくてさすらへぬとも」「鏡を見ても慰めてまし」とある。

○亡心—亡魂。

といひて狂言は引く。

【六】ワキ さては源氏の大將かりに人間と現じ。われに言葉を交はし給ふか。いざや今宵はここに居て。猶も奇特を拜まんと

ワキツレ上歌（待謠）須磨の浦。野山の月に旅寢して。野山の月に旅寢して。心を澄ます磯枕。波にたぐへて音樂の聞ゆる聲ぞ、ありがたき聞ゆる聲ぞありがたき

【七】出端の囃子にて、後ジテ光源氏、面中將・初冠・金緞鉢卷・襟白・着附赤地縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

後シテサシ『あら面白の海原やな。われ娑婆にありし時は。光源氏といはれ（とツレへ向き）今は都率に歸り。天上の住居なれども。月に詠じて閻浮に下り。所も須磨の浦なれば（と右の方を見）。青海波の遊び舞樂に。引かれて月の夜汐の波

【六】 後段

ワキ藤原興範は狂言所の者から、前の老樵夫は源氏の靈であらうと聞いて、

興範「さては源氏の大將が假に人間となつて現れ、自分に言葉を交はされたのであつたか。さあ今宵はこゝにゐて、なほこの上、不思議な靈驗を拜まう。……

かう思つて、この須磨の浦で月夜の旅寢をして、心を澄ましてゐると、波の音と調子を合はせて、音樂の聲が聞える、實にありがたいことだ」

【七】興範が假寢をしてゐると、後ジテ光源氏の靈、その夢に現れる態で登場。

源氏「あゝ海原の眺めは面白いことだ。自分はこの世にゐた時は光源氏といはれ、今は都率天に歸つて天上の住ひをしてゐるのであるが、この月夜に浮かれ此の世に下つて、この須磨の浦にふさはしい青海波の舞樂を舞ふと、それに誘はれて月夜の波も調子を合はせ、波の花のやうた白衣の袖を飜すと、玉のやうた笛の音が

【六】
○磯枕―海邊に旅寢すること。
○波にたぐへて―波に擬へて、波と調子を合せて。

【七】
○娑婆―この現世をいふ。
○閻浮―閻浮提の略。この世界をいふ。
○青海波―唐樂の曲名で、曲名が海に緣あるのと、紅葉賀の巻に、源氏の君がこの曲を舞つたと記してゐるのとで、こゝに出したのである。
○引かれて―潮の緣語。

○返すなる―波のうち返すと、白衣の袖を飜すと、兼ねていふ。
○笙笛琴箜篌―みな菩薩の手にする樂器で、法華經方便品に「簫・笛・琴・箜篌・琵琶・鐃・銅鈸、如レ是衆妙音盡持以供養」
○孤雲の響―大江定基入道寂照の辭世の句「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」に據る。
○しんしん―刊行會本には淼々（水の動く貌）と書く。もと忞とあつたのを志と謠ひ誤つたのであらう。
【八】○雲となり雨となり―新勅撰集讀人不知の歌「雲となり雨となるてふ中空の夢にも見えよ夜ならずとも」に據る。もと巫山の神女の故事から出た語。「定家」の語釋參照。
○あらたなる―あらたかな
○よそに白波の―よそに知られるを白波にいひかけた
○多生―罪業の多い衆生。

シテ一聲「返すなる。波の花散る白衣の袖
地「玉の笛の音聲澄み渡る
シテ「笙笛琴箜篌。孤雲の響
地「天もうつるや須磨の浦の。荒海の波風。しんしんたり
と舞臺に入り、
〔早舞〕
を舞ひて常座に立つ。ワキシテに向き、
【八】
地ロンギ「雲となり雨となり。夢現とも分かざるに。天より光さす。御影の中にあらたなる。童男來り給ふぞや。さては名にし負ふ。光源氏の尊靈か
シテ「その名もよそに白波の。こゝもとはわが住家。なほも多生を助けんと。都率天より二度こゝに天降る
とこれより謠に合せて仕科。

澄み渡り、笙、笛、琴、箜篌などの音樂が雲上に響いて、天も海に映じ、荒海の波風がどう〳〵と須磨の浦にうち寄することだ」
と興に乘じて、
〔早舞〕
を舞ふ。
【八】
興範「夢だか現だか分らない心持でゐると、天から光がさして、その御影の中からあらたかな童男がお出でになつたぞ。さては有名な光源氏の尊靈であらうか」
源氏「その名も遠く知られたものであるが、こゝは自分のもとの住所だから、罪業の多い衆生を助けたいと思つて、都率天から二度こゝに天降つて來たのだ」

○梵釋四王―梵天、帝釋天及び帝釋天の下にあつて佛法を守護する四王。
○人天―人間のげを、でと讀み誤つたのであらうか。
○山賤へきら―山賤へ綺羅で「芥溜に鶴」と同義の諺か。
○ゆるし色―勅許を經て用ゐる服色。
○青鈍の狩衣―須磨の巻に「山賤めきて、ゆるしの色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫、うちやつれて殊更ゐなかびてもてなし給へるもいみじう、見るにゑまれて清らなり」とある。青鈍は藍鼠の色をいふ。
○たをやか―しなやか。
○青き海の波―樂の青海波の文字を含めていふ。
○驛路の夜―旅寢の夜との意。昔官吏が諸國へ行く時には驛鈴を賜つたのでこれを匂はせて、颯々を承けて鈴を出し、驛路と續けた。

地「あらありがたの御事や。所は須磨の浦なれば
シテ「四方の嵐も吹き落ちて
地「薄雲かかる
シテ「春の空
地「梵釋四王の人天に。降り給ふかと覺えたり。所から山賤へきらといはれし。ゆるし色の綺羅なるに。青鈍の狩衣たをやかに召されて。須磨の嵐に飜し。袂も青き海の波颯々の鈴も驛路の夜は山よりや明けぬらん夜は山よりや明けぬらん

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

興範「あゝありがたいことです。こゝは須磨の浦ですから、それで……」
源氏「四方の嵐が吹き落ちて、薄雲のかゝつてゐる春の空から天降つて來たのである」

まことに、梵天、帝釋天、或は四王が人間界に降りて來られたやうで、この場所柄、『芥溜に鶴』とでもいふやうな、禁色の綺羅びやかなお姿で、青鈍の狩衣をしなやかに召され、その袂を飜して青海波を舞はれると、やがてその舞袖のさら〳〵とする衣擦の音のやうに、宿驛を通り過ぎる驛鈴の音が聞えて來て、夜は山の端から次第に明けて行くのである。

夜が明ければワキの夢も覺めて、後ジテ源氏の霊は消え去る態で退場。

〔考異〕

謠本(觀寶剛)

〔一〕(テ二句)松ならで又煙と見ゆる、これや眞柴の影ならん(寶剛ナシ)

古寫本

元祿以前のもの未だ求め得ない。

附記

○高麗國の相人の―桐壺の巻に、桐壺帝が源氏の君の運勢を高麗國から來朝した相人(人相見)に占はしめ給うた時、相人がその相貌を稱へたことを述べて、「光君といふ名は、高麗人のめで聞えてつけ奉りけるとぞいひ傳へたるとなむ」といふ。

○中將―帚木の巻に「まだ中將などにものし給ひし時は」とあるから、かういつたのであるが、源氏が中將になつたのは、桐壺と帚木との間、即ち十三歳から十六歳までの間で、その年は明記してゐない。

○問はず語りの夢―明石の巻に「去ぬる朔日の日の夢に、さま異なるものの告げ知らすること侍りしかば」といつて、明石入道が迎へに來たことをいふ。「問はず語り」の詞は、同じ巻に、この女(明石上)のありさま問はず語りに聞ゆ」とあるのに據つたのであらう。

○天下に奇特の告―明石の巻に、雷雨の夜、桐壺帝が時の帝朱雀院の御夢に現れて、色々の御告があり、續いて都に様々不吉の事が起つたので、源氏を都に召還し給うたとあるのをいふ。

○數の外の官―定員外の官。明石の巻に、「程なく御位あらたまりて、數より外の權大納言になり給ふ」とあるのをいふ。

墨染櫻（すみぞめざくら）　剛

解說

【能柄】　三番目　複式夢幻能

【人物】　ワキ　上野岑雄、前シテ　里女（櫻の精）、狂言　深草の者、後シテ　墨染櫻の精

【所】　山城國　深草の里

【時】　文德天皇御宇　三月

【作者】　能本作者註文に作者不明として出てゐる外は、古記錄に見當らない。

【梗概】　仁明天皇の崩御を悲しんで出家した上野岑雄が、先帝の深草御陵に詣つて、御寵愛の櫻を眺め、「深草の野邊の櫻し心あらば、この春ばかり墨染に咲け」といふ歌を詠むと、その櫻の精が里女の姿で現れ、今の歌の「この春ばかり」を「この春よりは」と直して下さいと求め、且お僧の佛弟子にして戴きたいと賴んで消え失せる。岑雄はその心を憐んで讀經してゐると、夢現に櫻の精が現れて、櫻の德を稱へ舞を舞ふ、

【出典】この歌は、古今集哀傷歌に、

堀河の太政大臣(藤原基經)みまかりにける時に、深草山にをさめける後によみける

　空蟬はからを見つゝも慰めつ、深草の山煙だに立て　　僧都勝延

　深草の野邊の櫻し心あらば、今年ばかりは墨染に咲け　　上野の峯雄

とあり、大鏡・今昔物語にも基經を傷んだ歌として記してゐるのを、遍昭集には「空蟬は」の歌を「皆人は花の衣になりぬなり」の歌と共に、遍昭が深草の帝(仁明天皇)を傷み奉つた歌として掲げてゐるので、峯雄の歌も亦帝の崩御を傷み奉つた歌と思ひ做して、本曲を作つたのであらう。

【概評】この曲は金剛流にのみ傳へてゐるのであるが、同流でもこの曲柄が天皇の崩御を悼み奉つた曲であるから、殆ど實演しない。現行曲には前後段ともにロンギを省いてゐるので、稍〻意の通じ難いものとなつてゐるが、これでも、前段は先帝奉悼の哀情に溢れて居り、後段のクセに櫻の德を稱へるのも、先帝の御恩護を感激してゐる心持がよく現れてゐて、哀傷の曲としては甚しく拙いものとは思はれない。

【一】後見櫻の立木の作物を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ峯雄、角帽子・着附熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、囃子座の方に向きて、

ワキ次第「色香もさぞな深草の。色香もさぞな深草の。野邊の櫻を尋ねむ

地取に正面に向き、

ワキ「これは舊院に仕へ申しし峯雄がなれる果にて候。まことや良峯も御別れを悲しみ。比叡

【一】前段

舞臺は初め京都で、ワキ上野峯雄登場。

峯雄「深草の野邊の櫻は今花盛りで、さぞ色香の美しいことであらうから、見に行かう」

と次第に旅の目的を述べ、

峯雄「私は先帝仁明天皇にお仕へ申した峯雄が、このやうな姿になつてしまつたのです。さういへば、良峯も先帝との御別れを悲しんで、比叡山で出家したと聞き、

【一】○さぞな深草の―色香もさぞ深からうといひかけて深草とつゞけた。深草は山城國紀伊郡、伏見の東北にある。

○舊院―仁明天皇。嘉祥三年(一五一〇)崩御。寶算四十一。

○峯雄―姓は上野、承和頃の人で、古今集の歌人であるが、委しい閲歷は分らない。

○まことや―ふいと思ひ出した時に發する詞。

山に遁世と聞き。一人に限らぬ思ひの色。深草山に分け入りて。古院の常に叡覽ありし。花をもせめて眺めばやと思ひ候

ワキ下歌「都出づれば日もすでに。竹田の里はこれやらん。上歌「一夜伏見の夢にだに。一夜伏見の夢にだに。思ひ絶えにし別れ路の。末こそ知らね深草の花は昔や慕ふらん花は昔や慕ふらん

「一夜伏見の夢にだに」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸り深草に着きたる心。上歌濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。深草に著きて候。(眞中に出で作物に向き、)われこの御陵に來て見れば。人跡絶えたる木の下は。猶深草の花の色。誰と咎むる氣色もなし。何とく思ひ連ねて候。「深草の。野邊の櫻し心あらばこの春ばかり墨染に咲け。」この歌を短冊に寫し枝につけて歸らばやと思ひ候

といひて脇座に行きかゝる。

深い歎きに沈む者も自分一人に限らないと思ひました。それにつけても、これから深草山に分け入つて、先帝が常に叡覽遊ばされた花を眺めて、せめての事に昔を偲び奉らうと思ふのです」

と、見物人に自己紹介をし、

峯雄「都を出て來ると、早くも日中になつて、竹田の里らしい所を過ぎ、伏見に來たが、堪へ難い悲しみを以てお別れ申しあげた先帝は、その後どう遊ばされた事やら、夢にもお見上げしないが、さぞかし御由緒の深い深草の花は、先帝御在世の頃をお慕ひ申してゐることであらう」

といつてゐるうちに、深草に着いた態で、峯雄は深草となる。

峯雄「道を急いだので、はや深草に着きました。そしてこの御陵にお參りをすると、人跡の絶えた木の下には、昔ながらに美しく花が咲き揃つてゐるが、それを誰も變に思ふ者もないやうだ。……これについて、ふいと歌が思ひ浮かんだ――

「深草の野邊の櫻し心あらば、この春ばかり墨染に咲け」

(深草の野邊の櫻よ、お前にも先帝をお慕ひ申しあげる心掛があるならば自分達と同じやうに諒闇に服して、せめて今年だけは墨染色に咲け)

〇良峯―名は宗貞、桓武天皇の皇孫で、仁明天皇の寵遇を辱うした。天皇崩じ給ふや、哀傷の餘り叡山に上つて出家した。僧正遍昭はその法名で、古今集序に六歌仙の一人に擧げられた。
〇比叡山―山城近江の二國に跨る大山、その山上に傳教大師の創建した延暦寺がある。
〇深草山―思ひの色の深いを地名にいひかけた。深草にある山で、こゝに仁明天皇の御陵がある。
〇古院―舊院に同じ。
〇竹田の里―深草の西にある。日の闌けるを地名にいひかけた。
〇伏見―山城國紀伊郡、京都の南にある。一夜臥すを地名にいひかけた。
〇末こそ知らね深草の―別れ奉つた帝の御行方の知れないを草が深くて道の知られない意にいひかけた。
〇この御陵―深草陵。仁明天皇の御陵。
〇深草の野邊の櫻し心あらばこの春ばかり墨染に咲け―古今集上野岑雄の歌。但し古今集には「今年ばかりは」とある。

【二】

○さはなくて――さうではなくて。

【二】

シテ里女、面曲見・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ〈呼掛〉なうなうあれなる御僧に申すべき事の候

ワキ驚座に立ちて、

ワキ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

シテ「今の詠歌のありがたさに。これまで現れ參りたり

ワキ「不思議やな花を眺むる友かと見れば。さはなくて今の詠歌のありがたきとは。如何なる人にてましますぞ

シテ「この花なくばいかにして。かかる詠歌のましますべき。唯今手向の言の葉にも。「深草の野邊の櫻し心あらば。この春ばかり墨染に

と謠ひながら舞臺に入り、

地上歌　咲けども今は恨めしや。咲けども今は恨

この歌を短册に書き記し、枝につけて歸りませう」

と短册を櫻の枝につけて、立歸らうとする。

【二】

前ジテ櫻の精里女の姿を裝うて登場し

里女「もうしもし、お僧さま」

峯雄「私をお呼びになるのか、何の御用です」

里女「唯今お詠みになつた歌がありがたくて、こゝまで現れて來たのです」

峯雄「これは不思議だ。自分と同じやうに花を眺める人かと思へば、今の歌をありがたいといはれるが、あなたはどういふ方なのです」

里女「この花がなかつたならば、このやうな歌をお詠みにならなかつたでせう。唯今手向の言葉として、――

「深草の野邊の櫻し心あらば、この春ばかり墨染に咲け」

とお詠みになりましたが、仰せの通り墨染色に咲いたところで、今は何の甲斐もない、恨めしいことでございます。いや墨染たいのは、風の吹く間もなく散つてしまふ櫻花ばかりではありません。この

〇浮世を捨衣—浮世を捨つ、衣を着る、君といひつゞけた。
〇薫物—火に焼いてその薫りを衣に移すもの。次の沈香は即ちその一である。
〇沈香ながら切髪の—沈香の木ながらよい香を持ちながら切られることを剃髪にいひかけた。
〇ながら〜果てぬ—髪の長いを命のながらへぬにいひかけた。
〇様替へて—剃髪すること。
【三】
〇發心—菩提心を發すこと、出家すること。
〇行末も久方の—行末も久しきを久方にいひかけ、久方の月を盡きにいひかけた。
〇暇申して—青柳の絲を暇にいひかけた。
〇花曇り—櫻の花の咲く春の頃、空の曇り勝ちであるのをいふ。

めしや。浮世の春のあだ櫻。風吹かぬ間もあるべきか。あぢきなの習ひやな。われも浮世を捨衣。君がためなる薫物の。沈香ながら切髪の。ながらへ果てぬ世の中に。様替へてたび給へわが様かへてたび給へ

【三】

ツレ　さて何故の御發心にて候ぞ

シテ　これは御詠歌故候よ

ツレ　抑も詠歌故とは候

シテ　唯今の御詠歌に。この春ばかりと遊ばしたる。この春ばかりを引きのけて。この春よりはと詠じ給はば。猶行末も久方の。盡きぬ逢瀬の言葉を添へて

地　花はこれまで青柳の。暇申してさらばとて。立つかと見れば薄霞。木の間の月の影くらく花曇りして失せにけり花曇りして失せにけり

シテ中入。

浮世のものは皆櫻と同樣、風をも待たないで亡くなつてしまふのです。ほんとに味氣ない世の中です。私も浮世を捨てて、先帝に御回向申しあげたいのです。どうせいつまでも生き永らへることの出來ない世の中です。どうか私の姿を替へて、出家にして下さいませ」

【三】

峯雄「それは又、どうして出家する心を起されたのです」

里女「それは唯今のお歌によつてでございますよ」

峯雄「して、今の歌の爲だといふのは、どういふわけなのです」

里女「唯今のお歌に『この春ばかり』と仰しやいましたが、その『この春ばかり』をかへて『この春よりは』とお詠み下されば、なほこの後いつまでも、そのありがたいお言葉によつて、墨染色に咲かうと思ひまして……。ではお暇致します」

といつて立つかと思ふと、薄霞に木の間の月影が暗くたつて、花曇りのやうにぼうとして消えてしまつた。

【四】

○成道　成佛。

○烏羽玉の　片敷く袖も褻を烏羽玉にいひかけ、黑の枕詞烏羽玉のを墨の枕詞に轉じて用ゐた。

【五】

○草木國土悉皆成佛　中陰經の一頌四句の偈文に「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」。

○中陰經　佛が一切中陰の衆生を集めて大乘の法を說いたもの。中陰とは人の死んだ後七七日間の[illegible]をいふ。

ワキ「…………

狂言「御逗留にて候はゞ重ねて御用仰せ候へ

ワキ「…………

狂言「心得申して候

　といひて引く。

【四】

ワキ「さてはこの花の精現れて。われに言葉をかはしけるぞや。（待謡）「いざや成道なすべしと。說くや御法の言の葉は。說くや御法の言の葉は。深草野邊の草衣。かたしく袖も烏羽玉の。墨の衣の旅寢かな墨の衣の旅寢かな

【五】

　一聲の囃子にて、後シテ櫻の精、面曲見・白花帽子・着附摺箔・水色長絹・紫大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に出で、

後シテ「あらありがたの御經やなあらありがたの御經やな

シテク「草木國土悉皆成佛　と大小前へ出で、

地「げに賴もしやこの文は。中陰經の妙文

シテ「尊やわれこそ草木國土に。色香を見せて花

後段

【四】

ワキ　墨染に住む深草の里人から、墨染の櫻の精であらうと聞かされて、

學者「さてはこの花の精が現れて、自分に詞を交はしたのであつた。では、成佛させてやらう」

と經文を稱へて、この深草の野邊に片袖を下に敷いて、墨染衣のまゝ旅寢をするのである。

【五】

　[illegible]、その夢に現れた櫻で、

　後シテ櫻の精が登場。

櫻精「あゝありがたい御經でございます。――『草木も國土もすべて成佛す』――實に賴もしいことでございます。この經文は中陰經のありがたいお言葉で、ほんとに尊いことでございます。私はその草木の、色香を誇れて咲く花の、深草野邊の墨染櫻でございますが、お經様この姿を御覽下さいませ。――

○水を生ずる德あり　この出所が分らない。
○花洛―花の都の漢語。洛は支那周代の都洛陽から出た語。
○陽花殿―分らない。登花殿の誤りであらうか。
○月花門―紫宸殿前庭の西校書殿と安福殿との間にある。
○左近の櫻―紫宸殿の左方（東）にあり、右近の橘と對す。
○木向―窠の紋、後木爪といふ。もと御帳の上などにかける帽額にこの紋を染めたところから出た名。主上この木に向はせ給ふ故に木向といふといふのは、附會說である。
○花の新に開けし日は　和漢朗詠集菅原文時の詩句「花新開日初陽潤、鳥老歸時薄暮陰」を引いて、帝の形容に用ゐた。初陽は朝日。

の名の
地「深草野邊の墨染櫻。これ見給へや御僧よ
シテサシ「それ櫻は諸木に勝れ。水を生ずる德あり
地「これによつて火難の恐れをなす事なし。されば帝都を花洛と號し。陽花殿月花門。左近の櫻に至るまで。禁中に移し置かれたり
シテ「主上この木に向はせ給ふ
地「これによつて玉簾に。木向といふ紋を。現すなり
これより謡に合せて舞ふ（舞クセ）
地クセ「かほどめでたき花の德。誰かは仰がざるべき。中にもこの櫻は。舊院の御愛木。花の新に開けし日は。初陽潤ふ御顏も悅ばせおはしまし。鳥の老いて歸る時薄暮くもれる御氣色。無常の嵐吹き來り。花より先に散り給ふ。心なき草木

一體櫻と申すものは、多くの木々に勝れて、水を生ずる德があります。それで、火難の恐れがありません。だから、帝都を花の都と申して、お建物のお名前にも陽花殿とか月花門とか名づけられ、左近の櫻まで、御所の内にお植ゑになつてあります。そして、主上がこの木にお向ひ遊ばすので、玉簾に木向といふ紋をつけられるのでございます。
このやうにめでたい德のある花ですから誰一人仰がない者はありませんが、殊にこの櫻は先帝の御寵愛遊ばされた木で、花の新しく咲いた時には、朝日の潤うたやうな龍顏に、御悅びの色を溢へさせられ、春も暮れて鳥も古巢に歸る頃には、夕暮のやうに御氣色を曇らせ給うたのでございますが、無常の嵐が吹いて來て、花よりも先におかくれ遊ばされたのでございますから、心のない草木と申せども、歎きに沈まずにはゐられません。それだのに、僅かこの春だけ墨染に咲けとお詠

○皆人は花の衣になりぬなり―古今集僧正遍昭が深草の帝（仁明天皇）の諒闇の明けた時詠んだ歌「皆人は花の衣になりぬなり、苔の衣よかわきだにせよ」を引く。○二月の佛の緣―墨染衣を着るときさらぎにいひかけた。佛の緣とは二月十五日釋尊の入滅したことをいふ。

【六】

○花の袂も風吹かぬほどぞ―人々が花やかな裝ひをしてゐるのも、暫くの間で、やがて花の散るやうに死ぬとの意。

も。歎きの色に出でざらん。この春ばかり墨染に咲けとの詠は恥かしや

シテ『皆人は。花の衣になりぬなり

地』苔の袂やせめてなど乾かざらめや雨と降り。嵐にだにも誘はれて日數を過ぐるあだ櫻。浮世の春を隱れ家と。墨染衣二月の。佛の緣をうけつぎて。草木も成佛の。御法ぞ嬉しかりける

【六】

地「深草の

〔舞〕

シテ「深草の。野邊の櫻し。心あらば

地、この春よりは墨染に咲け。この春よりは墨染に咲け

シテ「花の袂も風吹かぬほどぞ

地「雨にも誘はれ

シテ「露にもしをれ

みになつたのを、お恥かしく存じます。『皆人は花の衣になりぬなり、苔の袂よかわきだにせよ』（先帝の諒闇が明けて、世間の人々は花やかな衣を着るやうになつた。自分は墨染を脱がうとも思はないが、それにしても、どうしてこの悲しみの薄らぐ時がないのであらう。いつまでも〳〵お慕ひ申しあげられる）のお歌のやうに、袂の乾くところか、愈〻雨と降りしきり、嵐にさへ誘はれて、僅かの日數を過してゐる果敢ない櫻でございます。そしてその浮世を隱れて墨染衣の身となりましたが、佛緣を結んで、草木も成佛するとの御回向を受けて、ほんとに嬉しうございます」

【六】

〔舞〕

佛緣を結んだことを喜んで舞ふ、

櫻精「――

「深草の野邊の櫻し心あらば、この春よりは墨染に咲け」

美しい姿といつても、無常の風に誘はれるまでの短い間の命で、雨に誘はれ、露にしをれて、果敢なく消えてしまふのです」

といふうちに、墨染櫻の梢にかゝつてゐた霞も雲も夜の明け行くとともに消

地「契り少き花衣。墨染櫻梢に殘る。霞も雲も明け行く空に。霞も雲も明け行く空に。松風ばかりや。音すらむ

と常座にて留拍子を踏みて舞ひ納む。

え失せて、たゞ松風の音だけが淋しく殘るのである。

夜も明ければ、ワキの夢も覺めて、櫻の精は消え失せる態で退場。

〔考異〕

古謠本（觀世流元祿十一年四百番外百番）

【一】ワキ「これは（元深草の）舊院に仕へ申しし峯雄がなれる（元の）果にて候（元なり。我御在位の御時は。朝恩身にあまりしかとも。時代にかはるならひとて。雲井を餘所に都住居も。心とまらぬ此春かな）まことや（元聞けば）良峯（元の少將殿）も（元先帝の）御別れを悲しみ（元給ひて）比叡山に（元て）遁世と……眺めばやと思ひ候（元んと）……上歌「一夜伏見の……深草の花は昔や慕ふらん〳〵（元にかはらず〳〵）。ワキ「急ぎ候程に深草に着きて候（元ナシ）われ御陵に來て（元のあたり近く參りて）見れば（元淺間しや）人跡……咎むる氣色もなし（元く。しん〳〵とある古柳。蘇槐の跡。秋の色あるけしきかな。何となく思ひ連ねて候深草の……この歌を短冊に寫し（元よりたる一首の詠歌。此花の）枝に（元むすびつけて……【二】シテ「ならなら……ワキ「こなたの……何事にて候ぞ（元ナシ）。シテ「今の詠歌の……現れ參りたり（元荒面白の御歌やな。有難の今の御詠歌やな）……不思議やな……今の詠歌のありがたきとは（元短冊計詠め給ふは）……ワキ「（元何短冊を見るこそ花を詠るにて候へとよ）この花なくば（元らでは）いかにして……手向の言の葉（元御詞）にも……地上歌「咲けども……われも浮世を捨衣……わが様かへてたび給へ（元シテロンギ「實や世の中は。何か常なるあだ花の。夢に散まほろしに。別れて跡も花らず。昔よしやおれ中草の。桐の花も恨みなし。誰かありや果つべき。地「僧此春は雲霞。昔深草山の月の影。てらし果ぬぞ悲しき。シテ「扱や帝の御爲に。世を捨人は誰々ぞ。地「良峯の宗貞。其上野の峯雄なり。シテ「よしや良峯。地「又は峯雄にも。シテ「をとるましわれも世を捨衣。地「昔がたみなるたきものよ。蘇か春なからへんかひの。存らへ果ぬ世の中に。何と我はかみつけの。峯雄の御弟子と成べし。様かへてたび給へ。ワキ「是は御にて候へとも。我等は昨日やけふの初發心にて修理に。思ひもよらぬ事にて候。シテ「御は去事に

て候得共。佛も三十成道と申せは。初發心とこそ申へけれ。過去久遠劫より以來。くもりはてぬる胸の月も。靈山會場の曉を待。朽て久敷花の色も。鹿野園の夕に開く。よしや色こそ墨の衣。昨日今日にはよるへからす。たゝ童は愚かなる。女の身として御弟子とならは。其甲斐こそなけれ共。慈悲にそらせ給へや。ワキ「此上は辭退申に及はすとて。盥に水を參らすれは。シテ「嬉しや今こそ望たる。百年のつくもかみ。ワキ「雲と見れはさはなくて。水の底なる俤の。さなから花にて候はいかに。シテ「夫こそ道理。餘所なから深草の。同「野邊の櫻の木下。たらゐの水に花の蔭の。移るこそ理はりなれ。名殘をしのおもかけや。實おとろへの悲しきは。天津乙女の花かつら。斷有轉を値遇の緣。師弟子と成そ不思議なる〳〵〵

【三】ワキ「さて(元唯今は)何故に(元の爲の)御發心……シテ「これは(元さん候唯今の發心は御詠歌……ワキ「唯今の御詠歌に……逢はしたるこの春……詠し給はは(元り。此春計は情なし。この春よりとあそはさは)……盡きぬ答詠(元賴ひ)の言葉を添へて(元ワキ「とくや御法の言の葉は。深草の野邊の櫻し心あらは。此春よりは墨染に咲し。地「花は……

【四】ワキ「さては……言葉をかはしけるぞや。いざや成道……墨の衣の旅寢かな(元か。實や草木こゝろなし。花物いはすといへとも。一佛成道觀見法界。

【五】後シテ「あらありがたの御經やなあらありかたの御經やな(元今一度唱へ給へ。聽聞申さふ。ワキ「不思議やな。ぬしは誰とも知らねども。聲する方にむかひつゝ。一佛成道觀見法界。シテ「扨後句は)。シテクリ(元ワキ「草木國土(元シテ)悉皆成佛。實けに(元ナシ)賴もしや……シテ「鐘やわれこそ……色香を見せて花の名の(元ナシ)。地「(元根をさし其色)深草(元の)墨染櫻これ見給へ「御付よ(元と顯れたり。クリ地「夫色にそみ香にふるゝ類ひ。まち〳〵なりといへとも。花といへは此木に限る事。思へば。櫻の面目なり。……地「これによつて火難(元災)の……されば(元にや)帝都を……左近の櫻に至るまで(元此花の德を)禁中に移し置かれたり(元ナシ)……主上この木に向はせ給ふ(元によつて)。地「これによつて(元ナシ)玉簾に……地クセ「かほど……初陽(元の)潤ふ御顏も(元事を)……老いて歸る時(元は)薄暮くもれる御氣色(元をかなしみ給ひしに)……散り給ふ(元ひぬなんぞ)心なき草木(元といふ)とも……咲けよかし(元歌聽かしや)(元さに花色の袖をかへ。墨染櫻老木とて。元來たる苔衣)……地「苔の衣や(元よ)……嵐にだに(元ナシ)も誘はれて(元ナシ)日數なぐる(元にも散)あだ櫻……佛の緣をうけ……御法(元御弟子と成)そ嬉しかりける(元ロンギ地「實や心なき。岩木と見るにふくはかり。結はぬ夢の世の春を。驚きて捨人の。姿となるぞ不思議なる。シテ「唯是とても御詠歌の。言の葉の。花をかざる。有難の教化哉。同「無心なき木石も。シテ「櫻人と顯れて。同「聲立て花の風。シテ「桃李も物やいはつゝし。同「思ひ出たりいささらは。御弟子となりし悦ひに。舞一手かなでん(元詠歌)青葉を花の夕へとや〳〵墨染櫻なるらん。地「げに深草の

【六】地「この春より……墨染に咲け

（計は墨染咲。〳〵。すみそめに）……地契り（元頼み）少き花（元色）衣（元の）墨染櫻（元の）梢に残る霞も雲も……音すらむ（元て根に歸る花とぞ成にける）

隅田川（すみだがは） 觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 四番目 一段劇能

【人物】 **ワキ** 隅田川渡守、 **ワキツレ** 都の者（旅人）、

シテ 梅若丸の母（狂女）、 **子方** 梅若丸の亡靈

【所】 武藏國 隅田川岸

【時】 三月十五日

【異稱】 「角田川」とも書く、

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作とす。二百十番謠目錄には元雅の作としてゐるが、世子六十以後申樂談儀に、

すみだ河の能に、內にて子もなくて、殊更に面白かるべし、此能は現れたる子にてはなし、亡者也、殊更其本意をたよりにすべしと、世子申されけるに、元雅は得すまじき由を申さる。かやうのことは、して見てよきにつくべし、せずば善惡定めがたし。

とあるから、世阿彌の作に違ひなからう。金春禪竹の五音三曲集哀傷第二、物哀體曲味の例に、地上渡「殘りてもかひあるべきは空しくて」

より「げに目の前の浮世かな」まで」を擧げてゐる。これを現行曲と比べると、「人間うれひの花盛」の「う」が「む」となつてゐるだけで、その外は同じである。古くから賞美せられた曲と見えて、看聞日記に永享四年三月十四日、親元日記に文明十五年三月十二日、親長卿記に長享二年二月十三日、中樂談儀の書入に永正十一年十一月二十八日など、本曲の演ぜられたことが屢〻見えてゐる。言經卿記文祿四年三月三十日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　京都北白河吉田何某の子梅若丸は、人商人にかどわかされて、行方が知れなくなつたので、その母は狂氣になつて跡を追ひ、東國に下り隅田川岸に辿り着いた。ところが、梅若は既にこの地で病死し、今日はその一周忌に當るので、人々が憐んで大念佛を催すのであつた。母はその大念佛の人數を集めてゐる渡守から、この事を聞き、亡き子の塚へ行つて念佛すると、梅若の亡靈が影のやうに現れ出て、母と言葉をかはすのである。

【出典】　向島木母寺の縁起には、梅若丸は吉田少將惟房の子で、五歲の時父を失ひ、七歲の時比叡山に登つたが、十二歲の時かどわかされて東國に下り、隅田川の邊で死んだ、それは貞元元年三月十五日のことで、その翌年母が子の行方を尋ねて來て、里人と共に念佛を唱へわが子の亡靈に會つたと記してゐるが、それは謠曲以後の制作で、本曲はもと他の多くの狂女物と同樣、能作者の創作したもので、この種のものに多く名所を取入れてゐるやうに、本曲も亦伊勢物語第九段の、

昔男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき所もとめにとて往きけり。……なほゆき〳〵て、武藏の國と下總の國との中に、いと大きなる河あり、それを隅田川といふ。その河のほとりに群れゐて「思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかな」とわびあへるに、渡守「はや船に乘れ、日も暮れぬ」といふに、乘りて渡らんとす。皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも、白き鳥の嘴と足と赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥」といふを聞きて、

名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、船擧りて泣きにけり。

とあるのを、主な材料にして、舞臺を隅田川にとつたのである。

【概評】　狂女物は四番目物の著しい一部門で、その狂亂の原因をわが子の行方を失つた爲とするものには、本曲の外に「柏崎」「櫻川」「三

井寺」があるが、いづれも遂には母子再會してゐるのに、本曲の、尋ねる子が既に旅に病死したと構想してゐるのは、謡曲に類例のない純悲劇で、從つて作意が深刻で、觀衆讀者の胸をうつことが深い。全體の推移も極めて滑らかで、「櫻川」などのやうな花やかな趣、重複した嫌ひがなく、全篇しんみりした淋しさに終始してゐて、まことに勝れた作と思はれる。

【一】
○隅田川―東京市の東部を流れて品川灣に入る。
○渡守―人を船に乗せて向岸に渡す船頭。
○この在所―在所は田舍。後世向島木母寺の梅若塚をその舊跡とする。
○大念佛―多勢の人が集つて大聲で南無阿彌陀佛を稱へること。
○僧俗を嫌はず―僧侶でも俗人でも差別なく。
【二】
○末も東の旅衣―行先の遠い東國への旅であるからとの意。
○日も遥々に―衣の縁語紐を日もに、張るを遥々にいひかけた。

【一】後見塚の上に柳をつけたる作物を大小前に出す。名乘笛にて、ワキ渡守、着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又この在所にさる子細あつて。大念佛を申す事の候間。僧俗を嫌はず人數を集め候。その由皆々心得候へ

といひて地謠座前へ行き下に居る。

【二】次第の囃子にて、ワキヅレ旅人、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇・小刀・男笠の裝束にて名乘座へ出で、囃子座の方に向き、

ワキヅレ次第「末も東の旅衣。末も東の旅衣日も遥の心かな

地取に正面に向き笠を脱ぎて、

ワキヅレ「かやうに候者は。都の者にて候。われ東

【一】舞臺は武藏國隅田川の渡場、ワキ渡守登場。

渡守「私は武藏國隅田川の渡守です。今日は舟を急いで、人々を向岸へ渡さうと思ひます。又この村で、ある事情があつて、大念佛といふ事を催され、僧侶と在家との區別なく、多勢の人々を集めて居るのです。皆樣この事を御承知下さい」

こゝ土地の人々にいつて船客を待つてゐる態。

【二】舞臺は變つて、こゝは京都で、ワキヅレ都の男、旅人の姿で登場。

旅人「行先の遠い東國へ旅立をするのだと思ふと、道のりも日數も隨分長々しい心持がする」

とまづ次第に旅の心持を述べ、

旅人「私は都の者ですが、東國に知人があ

に知る人の候程に、かの者を尋ねて唯今罷り下り候

（といひて笠を被り、）

ワキヅレ「道行」雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして。幾關々の道すがら。國々過ぎて行く程に。ここぞ名に負ふ隅田川。渡りに早く着きにけり渡りに早く着きにけり

（「ここぞ名に負ふ」と右の方に向きて二三足出でまたもとへ歸りて隅田川岸に着きたる心。道行濟みて正面に向き笠を脱ぎて、）

ワキヅレ「急ぎ候程に。これははや隅田川の渡りにて候、（脇座の方に向き）又あれを見れば舟が出で候、急ぎ乗らばやと存じ候

（といひてワキに向ひ、）

ワキヅレ「いかに船頭殿舟に乗らうずるにて候

（ワキ立ちて、）

ワキ「なかなかの事召され候へ。まづまづ御出で

るので、その者を尋ねて、唯今東國へ下るのです」

（と見物人に自己紹介をし、）

旅人「後をふりかへると、雲霞のやうにかすかに見える程、遠く山々を越えて來たが、なほ行く道々、幾つもの關を通り、國々を過ぎて行くうちに、有名なこの隅田川の渡場に着いた」

（と旅を續けてゐるうちに、隅田川邊に着いた態で舞臺はもとの隅田川の渡場となる。）

旅人「道を急いだので、こゝかはや隅田川の渡場です。又あそこを見ると、舟が出てゐます。急いで乗りませう」

（と、ワキ渡守の方に向ひ、）

旅人「おい船頭さん、舟に乗りたいのだ」

渡守「承知しました。お乗り下さい。……

○雲霞あと遠山に越えなして―後を顧みると、雲霞のやうに見える程、遠く山を越えて來て。いひ換へれば越えて來た山は遠く雲霞のやうに隔たつてとの意。和漢朗詠集紀齊名の詩句「山遠雲埋二行客跡一、松寒風破二旅人夢一」に據る。

○なかなかの事　然りといふ意の時代詞。

候後の。けしからず物騒に候は何事にて候ぞ

ワキヅレ「さん候都より女物狂の下り候が。是非もなく面白う狂ひ候を見候よ

ワキ「さやうに候はば。暫く舟を留めて。かの物狂を待たうずるにて候。まづかう御座候へ

といひて、ワキヅレも脇座の次へ行き二人とも下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ梅若丸の母、面深井・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・淺黄水衣・無色縫箔腰卷・腰帶の裝束にて女笠を被り水衣の肩をとり笹をかたげて橋懸一の松へ出で、

シテサシ「げにや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行き人に言傳てて。行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に。上の空なる風だにも

地「松に音する。習ひあり

と舞臺に入り、

〔カケリ〕

シテ「眞葛が原の露の世に（と角へ行き）

○けしからず—並々でない

○物騒—もの騒がしいこと

○是非もなく—何の譯もなく。

【三】

○人の親の心は闇にあらねども—後撰集藤原兼輔の歌を引いた。下句「子を思ふ道に迷ひぬるかな」

○白雪の道行き人に—今こそ思ひ知られるを白雪にいひかけ、古今集凡河内躬恒の歌「春來れば雁歸るなり白雲の道行ぶりにことやつてまし」を借りた。下懸では「白雪の道行ぶりに誘はれて」といふ。

○聞くや如何に上の空なる風だにも—新古今集宮内卿の歌を引いた。この下句「松に音する習ひありとは」

○眞葛が原の露の世に—松を承けて、新古今集慈圓の歌「わが戀は松を時雨の染めかねて、眞葛が原に風騷ぐなり」を借り、眞葛が原、原の露、露の世といひつゞけた。

おゝそれより、あなたのお出でになつた後が、馬鹿に物騒がしいが、あれは何事でございます」

旅人「さやう、あれは都から狂女が下つて來たのが、わけもなく面白う物狂ひをするので、皆の人が見てゐるのです」

渡守「それならば暫く舟を留めて、あの物狂ひを待つてゐませう」

【三】

背景は隅田川へ行く街道の態で、シテ梅若丸の母狂亂の姿で登場。

狂女「ほんとにその通りだ。——「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」といふ歌の心持が、今こそ身につまされて、よく思ひ知られるのだ。道を通る人に何と尋ねたならば、わが子の行方が分るであらう。わが子は自分がこのやうに尋ね歩いてゐるのを、どう聞いてゐるのであらう。何の心もない風でさへ、松に吹けば音がするのに、わが子は何故聲を立てゝくれないのであらう」

と狂ひながら街道を進み、

〔カケリ〕に物狂はしい心持を示し、

狂女「この果敢ない浮世に、わが身の不運

地「身を恨みてや。明け暮れん（と左へ廻りて仕手柱先に立ち）

シテ「これは都北白河に。年經て住める女なるが。人商人に誘はれて。行方を聞けば逢坂の。關の東の國遠き。東とかやに下りぬと聞くより心亂れつつ。そなたとばかり。思ひ子の。跡を尋ねて。迷ふなり

地下歌「千里を行くも親心子を忘れぬと聞くものを（と二三足出で）。上歌「もとよりも。契り假なる一つ世の。その中をだに添ひもせで。ここやかしこに親と子の四鳥の別れこれなれや（と見廻し）。尋ぬる心のはてやらん。武藏の國と。下總の中にある隅田川にも、着きにけり

「武藏の國と」と右の方へ向きて二三足出で、「隅田川にも着きにけり」ともとへ歸り、隅田川岸に着きたる心にてワキの

○北白河—京都南禪寺の北から西へ流れて賀茂川に入る川を白河といひ、その北部を北白河といふ。
○思はざる外に—意外なことで。
○人商人—人の子を賣買する者。室町時代にはかういふ惡者が實際にあつた。
○逢坂の關—京都に入る要所、近江國滋賀郡逢坂山にあつた關所。
○思ひ子—寵愛する子。そなたとばかり思ひといひかけた。
○千里を行くも—白氏文集に「親千里行不レ忘レ子」とあるを引いた。
○契り假なる一つ世の—親子の緣は現世一世であるのをいふ。西行の歌に「賴むらん知るべもいさや一つ世の、別れにだにもまどふ心は」
○四鳥の別れ—孔子家語顏回篇に、桓山の鳥の生んだ四羽の子鳥が成長して四海に分れて飛び行く時、母鳥が悲鳴して之を送つたとある故事。白氏文集にも「形離二異類一心則同歸、四鳥分飛、聽レ音旣稱レ有レ信」
○尋ぬる心のはて—思ひ疲れた心の果と、迷ひ下つた

を恨みながら、その日〳〵を過して行かう」

と獨言をいつて、

狂女「私は都の北白河に永年住んでゐる者ですが、意外にも一人子が人商人にかどわかされて、逢坂の關の東の、遠い東國とやらに下つたと聞きましたので、それより心が亂れて、あちらこちらと、可愛いわが子の行方を尋ねて、迷ひ歩いてゐるのです」

と自分の身上を語り、

狂女「——『親心といふものは、千里を距てた遠くへ行つても、子どもの事を忘れないものだ』と聞いてゐたが、それほど愛情の深いものである上、親子の緣はもともと現世限りの假りの契りであるのに、その現世にさへ添ひ遂げることが出來ないので、あちらこちらと、「四鳥の別れ」のやうに、親子別れ別れになつて、子を尋ねる心も疲れ果てた末、東國の涯の、武藏と下總の國境にある隅田川に着いたことだ」

と隅田川の邊に着いた體で、渡守を見て、

道の果とを兼ねていふ。新古今集源通具の歌「武藏野や行けども秋のはてぞなき、如何なる風の末に吹くらむ」に據る。
○武藏の國と下總の―伊勢物語の詞に據つていふ。解說參照。
【四】
○おこと―そなた。
○うたてやな―情ない。
○日も暮れぬ舟に乘れ―伊勢物語の詞に據る。
○かたの如くも―形だけでも。立派な身分の者ではないが、とにかく都の者ではあるのにとの意。
○その言葉―船頭が「名にし負ひたる」と、伊勢物語にある詞を述べたことをいふ。
○業平―阿保親王の第五子で、兄行平と共に在原の姓を賜うた。平安初期の著名な歌人。「雲林院」「杜若」「井筒」「小塩」參照。
○名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと―古今集及び伊勢物語にある業平の歌。「名にし負はば」は都といふ名を持つてゐるならばとの意。
○都鳥―白鷗。

方へ向き。

【四】シテ「なうなうわれをも舟に乘せて給はり候へ

ツレ立ちて、

ワキ「おことはいづくよりいづ方へ下る人ぞ

シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候

ワキ「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。狂はずはこの舟には乘せまじいぞとよ

シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ。『かたの如くも都の者を。舟に乘るなと承るは。隅田川の渡守とも。覺えぬ事な宣ひそよ

ワキ「げにげに都の人とて名にし負ひたるやさしさよ

シテ「なうその言葉はこなたも耳にとまるものを。かの業平もこの渡りにて。『名にし負はば。いざ言問はん都鳥。わが思ふ人は。ありやなし

【四】
狂女「もうしもし、私も舟に乘せて下さいませ」
渡守「そなたは何處から何處へいらつしやるのだ」
狂女「私は都から人を尋ねて下る者です」
渡守「都の人で、しかも狂人ならば、さぞ物狂ひが上手であらう。面白う物狂ひをして見せておくれ。狂はなければ、この舟には乘せられないぞ」
狂女「あゝ情ないことだ。隅田川の渡守ならば、伊勢物語の渡守のやうに『日も暮れた、早く舟に乘れ』といつて下さりさうなものだのに、これでも兎に角都の者ですのに『舟に乘るな』と仰しやるのは、隅田川の渡守とも思はれない、不似合な事を仰しやるな」
渡守「いかにも都の人だけあつて、名にし負ふ優しさだ」
狂女「おう、その言葉こそ私の耳にも留まるのです。あの業平もこの渡場で――『名にし負はゞいざ言問はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと』
（都鳥よ、都といふ名がついてゐるならば、都の事

やと。(右の方を遠く見てワキに向ひ)「なう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ

ワキ「あれこそ沖の鷗候よ

シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ。などこの隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ

ワキ「げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さで

シテ「沖の鷗と夕波の

ワキ「昔にかへる業平も

シテ「ありやなしやと言問ひしも

ワキ「都の人を思ひ妻

シテ「わらはも東に思ひ子の行方を問ふは同じ心の

を知つてゐるだらうから、尋ねるが、わが思ふ人は無事にゐるだらうか、どうであらう)とお詠みになりました。……もうし、船頭さん、あそこに白い鳥が見えますが、都では見馴れない鳥です。あれは何といふのです」

渡守「あれが沖の鷗ですよ」

狂女「あゝつまらない、外の浦でならば、千鳥といはうと、鷗といはうと勝手だが、この隅田川でありながら、何故白い鳥を都鳥とお答へにならないのです」

渡守「いかにもこれは誤つた。名所には住んでゐるが、風雅な心がなくて、都鳥とお答へしないで……」

狂女「沖の鷗といはれるのは……」

渡守「思へば昔業平も……」

狂女「こゝで「ありやなしや」と尋ねられましたが、それも……」

渡守「都の戀しい妻を思つて詠まれたもので……」

狂女「私もこの東國で子どもの行方を尋ねる、その心持は業平と同じで、妻を慕ふのも子を尋ねるのも、戀しいと思ふ心に

○心なくて―風雅な心がなくて。

○夕波の―鷗と言ふを夕に波のかへるを昔にかへるにいひかけた。

○思ひ妻―戀しく思ふ妻。

○都の鳥―都の事を答へない所を見れば、都鳥ではなくて田舍の鳥であるとの意。
○舟競ふ堀江の川の―萬葉集大伴家持の歌「舟競ふ堀江の川の水際に來居つゝ鳴くは都鳥かも」を引いた。舟競ふは舟の往來して競ふこと、堀江は難波の堀江をいふ。
○難波江―今大阪市中を流れる河。
「思へば限りなく―伊勢物語の詞に據る。解說參照。
○舟こぞりて狹くとも―伊勢物語には「舟こぞりて泣きにけり」とあり、「こぞりて」は船中の者が皆悉くの意であるのを、こゝには船中が滿員でとの意に轉じて用ゐた。

ワキ「妻をしのび
シテ「子を尋ぬるも
ワキ「思ひは同じ
シテ「戀路なれば
地上歌「われも又。いざ言問はん都鳥。いざ言問はん都鳥。わが思ひ子は東路に。ありやなしやと。問へども問へども答へぬはうたて都鳥（と脇正面を見渡して）鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟競ふ。堀江の川の水際に。來居つつ鳴くは都鳥（脇座の方へ行きて）それは難波江これは又隅田川の東まで（橋懸一の松へ行きて）思へば限りなく。遠くも來ぬるものかな（正面を遠く見渡して）さりとては渡守舟（と舞臺へ入りて）こぞりて狹くとも（と笹にて形をして）乘せさせ給へ渡守さりとては乘せてたび給へ（とワキへ進み下に居る）

同じだから、私も又――
「われも又いざ言問はん、都鳥わが思ひ子は、東路にありやなしやと」から尋ねても、何とも答へてくれないのが情ない。名は都鳥でも、やはり田舍の鳥だからといってやらうか。さういへば、
――「舟競ふ堀江の川の水際に、來居つゝ鳴くは都鳥かも」（舟の往來して競ふ堀江川の岸邊に來てゐて鳴くのは、あれは都鳥だ）
といふ歌があるが、その都鳥は難波江で、これはまた隅田川であるが、このやうな東國の涯までも、よくもまあ、この遠い遠い所を來たものだ」
（と物狂ひらしくいひ、さて渡守に向って、）
「それは兎もあれ、渡守さん、舟が滿員で狹くても、どうぞ私を乘せて下さい」

【五】
○大事の渡り―危險な渡場
○かまひて―用心して。必ず。

ワキ地上歌の間に右肩を脱ぎ棹を持ち、

【五】ワキ「かかるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ

シテ笠を脱ぎて左手に持ち舟に乗る心にて正面に出で下に居る。

ワキ「この渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜かに召され候へ

ワキ「ワキヅレに」最前の人も舟に召され候へ

ワキヅレ、シテの次へ行きて坐す。ワキその後へ行きて立ち棹をさして舟を漕ぐ心。

ワキヅレ「なうあの向ひの柳の下に。人の多く集まりて候は何事にて候ぞ

ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候

といひ棹を片手に持ちたるまゝにて、

ワキ「語」さても去年三月十五日。しかも今日に相

【五】渡守「このやうな優しい狂女はない。急いで舟にお乘りなさい」

狂女舟に乘る態。

渡守「この渡りは危險な所ですから、よく氣をつけて靜かにして下さい」

ワキヅレの旅人も乘船の態。――この旅人は多勢の船客を代表したものである。渡守は舟を漕いで、これより舞臺は川中の態となる。

旅人「おい、あの向ふの柳の下に人が多勢集まつてゐるのは、何事なのです」

渡守「はい、あれは大念佛です。それにつけてかわいさうな話があります。この舟が向ひへ着くまでの間に、話してお聞かせしませう」

と舟を漕ぎながら語る態で、

渡守「さて去年三月十五日、丁度今日に相

○奥—陸奥。
○違例—病氣。
○なんぼう—いかほど。隨分。甚だ。
○路次—旅の途中。
○由ありげ—由緒がありさうな。立派な家柄の子らしい。
○前世の事—前世からの宿縁。
○たんだ—唯。撥音が中に入つて訛つたのである。
○吉田の何某—木母寺緣起には吉田少將惟房といつてある。補記參照。
○かどはされ—かどはかされ。誘拐せられ。

當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つて奥へ下り候が、この幼き者、未だ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、この川岸にひれふし候をなんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまま路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、樣々に痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時。おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば。われは都北白河に、吉田の何某と申しし人の唯ひとり子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを。人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人

當りますが、人商人が都から年の頃十二三ばかりの幼い子を買取つて、奥州へ下つたのですが、この幼い者はまだしつけない旅の疲れてか、非常な大病にかゝつて、今は一足も動かれないといつて、この川岸に倒れ伏したのですが、世間には隨分無情な者があるものです。この幼い者を途中に棄てゝ、人商人は奥州へ下つたのです。それで、この邊の人々がこの幼い者の姿を見ますと、身分のよい者らしいので、色々と介抱したのですが、前世の宿緣であつたのでせう、たゞ次第次第に弱つて行つて、もはや臨終と思はれた時、『そなたは何處のどういふ人か』と父の名字をも生國をも尋ねますと、——

『自分は都北白河で、吉田何某といつた人の一人子ですが、父には死に別れ、母ばかりにお添ひしてゐましたが、人商人にかどわかされて、このやうになつてしまつたのです。都の人だと、手足の影を見てもなつかしう思はれるのですから、この道傍に埋めて、墓じるしに柳を植ゑ

○逆緣—機緣の反對。偶然の緣。
○由なき—つまらない。
○とうとう—疾く疾くの音便。

の足手影もなつかしう候へば。この道のほとりにつきこめて。しるしに柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し。念佛四五返唱へ終に事終つて候（シテしをる）。なんぼうあはれなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆緣ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が着いて候。とうとう御あがり候へ

ワキヅレ脇座へ行きてワキに向ひ、

ワキヅレ いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて。逆緣ながら念佛を申さうずるにて候（といひて下に居る）

【六】

ワキ いかにこれなる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いであがり候へ。（シテのしをるを見て）あらやさしや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。な

て下さい』と、大人らしい事をいひ、念佛を四五遍唱へて、遂に死んでしまひました。いかにも氣の毒な話です。お見受けしたところ、この船中にも幾人か都の人もお出でになるやうですが、通りがゝりの御緣で、念佛をお唱へになつて、御回向なさいませ。いや下らない長話をしてゐますうちに、船が着きました。早く船からお上りなさいませ」

旅人「いかにも氣の毒なことだ。今日はこの所に逗留して、偶然な因緣ながら、念佛を申しませう」

（といつて他の船客は皆舟から出たが、狂女は渡守の物語の途中から泣き出して、船より下りない。）

【六】

渡守「おい狂女、何故船から下りないのだ。急いでお上りなさい。……（狂女の泣くのに氣がついて）おゝこれは優しいことだ。今の話を聞いて泣いてゐるのだ。れい、早く舟からお上りなさい」

う急いで舟よりあがり候へ
シテ「なう舟人。今の物語はいつの事にて候ぞ
ワキ「去年三月今日の事にて候
シテ「さてその稚兒の年は
ワキ「十二歳
シテ「主の名は
ワキ「梅若丸
シテ「父の名字は
ワキ「吉田の何某
シテ「さてその後は親とても尋ねず
ワキ「親類とても尋ね來ず
シテ「まして母とても尋ねぬよなう
ワキ「思ひもよらぬ事
シテ「なう親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。その幼き者こそ。この物狂が尋ぬる子にて

狂女「もうし船頭さん、今の話は何日の事です」
渡守「去年の三月、今日の日の事です」
狂女「そしてその兒の年は……」
渡守「十二歳」
狂女「その名前は……」
渡守「梅若丸」
狂女「父の名字は……」
渡守「吉田の何某」
狂女「そしてその後は親とても尋ねて來なかつたのでせう」
渡守「親類とても尋ねて來ない」
狂女「まして、母とても尋ねて來ないのでせう」
渡守「勿論、思ひもよらないことだ」
狂女「おゝ、親類とても親とても尋ねて來ないのは、當り前です。その幼い子こそこの氣違ひが尋ねてゐる子どもですよ。

さむらへとよ。なうこれは夢かやあらあさましや候（と笠を捨てて深くしをる）

ワキ「言語道断の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ

といひて棹を捨て、シテを後より抱ふるやうにして三四足作物の側へやり、

ワキ「これこそ亡き人のしるしにて候へよくよく御弔ひ候へ

といひて地諸座前へ行き下に居る。シテ作物の右の方に坐し深く作物を見、

【七】

シテ「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに。今はこの世になき跡の。しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて、生所を去つて東のはての。道の邊の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや（と作物の下を見

あゝ、これは夢であらうか、ほんとにあさましいことです」

渡守「これは意外千萬な事だ。今まではよ所事とばかり思つてゐたのに、さうすると、そなたのお子であつたのか。あゝお氣の毒なことです。その人の墓所をお見せしませう。こちらへお出でなさい」

渡守は作物の塚の前へ狂女を導いて、

渡守「これが亡くなつた人の墓標です。よく御回向なさい」

【七】 狂女は塚の前に立つて、

狂女「今までは、それでも或は逢ふことが出來ようかと心頼みにして、見も知らぬ東國に下つて來たのに、今はこの世に亡き人となつてしまつて、たゞ墓標だけを見るのだ。あゝかわいさうに、旅で死ぬべき宿緣を以て生まれ、わが生れ故郷を離れて、東國の涯の道傍の土となつて、春の草ばかり生ひ茂つたこの土の下にゐるのであらうか。それにしても、どうか

【七】

○無慙や―痛はしや。ふびんや。

○死の緣―委しくは「死の緣無量」といひ、人は何處でどうして死ぬやら分らぬこと。旅で死ぬ因緣をいふ。

○道の邊の土となり―白樂天古墳の詩「古墳何代人、不レ知二姓與一レ名、化二作路傍土一、年々春草生」に據る。

地「さりとては人々この土を（とワキの方を見廻し）。返して今一度。この世の姿を母に見させ給へや（としをる）

皆様、この土を掘り返して、もう一度この世にあつた時の姿を、この母に見せて下さいませ。——

地上歌「残りても。かひあるべきは空しくて。あるはかひなき帚木の。見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習ひ。人間憂ひの花盛り。無常の嵐音添ひ。生死長夜の、月の影不定の。雲覆へりげに目の前の、浮世かな

げに目の前の浮世かな

この世に生き殘つても生き甲斐のある幼い子は早く死んでしまつて、生き甲斐もない母が生き殘つて、亡き子の面影が見えつ隠れつ、眼の前にちらつくのだ。まことに老少不定は世の習ひで、人間には憂ひが多く、盛りの花が嵐に散らされるやうに果敢ないもので、月が雲に掩はれるやうに、人の命は不定なものだといふことを、今眼の前に見せつけられたのだ。あゝ情ない浮世だ」

【八】（ワキ鉦と撞木を持ちて立ち、）

ワキ「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。ただ念佛を御申し候ひて。後世を御弔ひ候へ。（正面に向き、）既に月出で川風も。はや更け過ぐる夜念佛の。時節なればと面々に。鉦鼓を鳴らしすすむれば、（と鉦を打ちてシテへ向き）

【八】

渡守「今は何とお歎きになつても致し方のないことです。たゞ念佛を唱へて、後世をお弔ひなさい。……おう、もはや月が出て川風も寒く、夜が更けて、夜念佛を唱へるによい時刻ですから」

と、皆の人々が打鉦を鳴らして、狂女に念佛を勸めると、母の狂女は餘りの悲しさに念佛さへ申さないで、唯倒れ

○殘りてもかひあるべきは—生き殘つてもこの世の役に立つ生き甲斐のある子は先立つて死にとの意。

○帚木の見えつ隠れつ—母を帚木にいひかけ、新古今集坂上是則の歌「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな」に據り、見えつ隠れつとつゞけた。

○定めなき世—面影の定かに見えぬことを老少不定の意にいひかけた。

○人間憂ひの花盛り—人間に憂ひの多いことを花の盛りに喩へ、憂ひが多くて果敢ないことを花の嵐に誘はれて散ることに喩へた。

○生死長夜—生死の迷ひを長い夜に喩へていふ。唯識論に「未レ得二眞覺一、常處二夢中一、故佛說爲二生死長夜一」

○不定の雲—無常の嵐に對し、老少不定を雲に喩へた。

【八】○鉦鼓—平皿に似た、からかね製の鉦で、念佛の時に叩くもの。

シテ「母は餘りの悲しさに。念佛をさへ申さずして。唯ひれふして泣きゐたり（としをる）
ワキ「うたてやな餘の人多くましますとも。母の弔ひ給はんをこそ。亡者も喜び給ふべけれと。『鉦鼓を母に參らすれば

（とシテの前へ出で鉦と撞木を渡して地謡座前に歸る。）

シテ「わが子の爲と聞けばげに。この身も鳧鐘を取りあげて（と鉦・撞木を持ちて立上り）
ワキ「歎きを止め聲澄むや
シテ『月の夜念佛もろともに
ワキ『心は西へと一すぢに

（とワキ・シテともに作物に向ひ合掌して、）

シテワキ「南無や西方極樂世界。三十六萬億。同號同名阿彌陀佛
地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。（とシテ鉦をうつ）

伏して泣いてゐた。

渡守「おゝ氣の毒なことだ。外の人が多勢念佛せられるよりも、母御のお弔ひの方が、亡者はお喜びにならうから」

と打鉦を母狂女に與へると、

狂女「わが子の爲めと伺へば、誠に御尤もで……」

と、狂女自身も打鉦を手に取り上げて、泣くのを止め、聲を澄まして、月夜の夜念佛に、皆の者と一所に聲を揃へて、ひたすら西方淨土を望み、

狂女・渡守「一度唱へる念佛に三十六萬億遍唱へると同じ功德がありまして、どうか西方極樂世界へお導き下さいますやうに」

といふ意味の經文を唱へ、

一同「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

○鳧鐘―鐘。こゝでは鉦鼓をいふ。
○月の夜念佛もろともに―月の夜、夜念佛を稱へて、ひたすら月の入る方角の西方極樂を思ふ意。
○西方極樂世界―阿彌陀經に「從レ是西方、過二十萬億佛土一、有二世界一、名曰二極樂一」
○三十六萬億同號同名阿彌陀佛―一聲の念佛で三十六萬億遍念佛を唱へると同じ功德を生ぜしめるとの經文。龍舒淨土文卷四に「釋迦佛在世時、有二一貧婆一、人用二穀一斗一記レ數、念二阿彌陀佛一、願レ生二西方一、佛云、我別有二方法一、令三汝念レ佛一聲得二多穀之數一、乃教以レ念二南謨西方極樂世界三十六萬億一十一萬九千五百同名同號阿彌陀佛一」（拾葉抄所引）

シテ「隅田河原の、波風も聲立て添へて（と脇正面を見渡し）

ツレもとの座に歸る、

地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛（シテ鉦をうつ）

シテ「名にし負はば都鳥も音を添へて（と正面を見）

子方梅若丸の霊、黑頭・黑鉢卷・襟白・着附白綾・白水衣・腰帶の裝束にて作物の中にあり、地謠と聲を合せて、

子方地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

シテ子方の聲を聞きて鉦をうち止め、作物へ二三足進み、

【九】

シテ「なうなう今の念佛のうちに、正しくわが子の聲の聞え候、この塚の内にてありげに候よ（とワキへ向く）

ワキ「われ等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。母御一人御申し候へ

シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛（と塚に向ひ下に居て鉦をうつ）

狂女「おゝ、この隅田川の波風も聲を添へて念佛を唱へてくれる」

一同「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

狂女「都といふ名に縁のある、都鳥も聲を揃へてくれる」

一同「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

作物の塚の中から、子方梅若丸の亡霊が同じく「南無阿彌陀佛」と唱へる。狂女はこれを聞きつけて

【九】

狂女「もうし今の念佛のうちに、確かにわが子の聲が聞えました。この塚のうちらしいのです」

渡守「私たちもそのやうに聞きました。それではこちらの者どもの念佛を止めませう。母御一人でお唱へなされ」

狂女「も一度あの聲が聞きたいものです。南無阿彌陀佛」

【九】

○今一聲こそ聞かまほしけれ　拾遺集藤原公忠の歌「行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに」の詞を借りた。

子方「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と

地「聲の内より。幻に見えければ

と子方作物より出で脇座へ行きて立つ。シテ子方を見て、

シテ「あれはわが子か

子方「母にてましますかと（シテへ向き）

地「互に手に手を取り交はせば又（シテ鉦を放して立ち子方のそばへ行き抱きとめんとす。子方は右へ左へシテを外し）。消え消えとなり行けば（子方作物に走入る。シテこれを茫然として見）いよいよ思ひはます鏡（とシテ二三足下りにしをり）。面影も幻も（シテ正面を見廻す。子方作物より出で脇正面に立つ）。見えつ隱れつするほどに東雲の空も（シテ子方を抱かんと近づくと子方拔けて作物に入る、シテ膝をつき）。ほのぼのと明け行けば跡絶えて（と立ちて東を見）。わが子と見えしは塚の上の（と作物を見上げ）。草茫々として唯。しるしばかりの淺茅が原となるこそ

梅若「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

と、わが子の聲がして、その姿がまぼろしに見えたので、

狂女「おゝあれはわが子か」

梅若「お母さまですか」

と梅若丸は塚より出る。

母子互に手に手を取り合はすと、また子の姿は消え消えになつて行くので、母の思ひは愈〻增すばかりで、かうしてゐるうちに、東の空もほのぼのと明けて行くと、亡靈の姿は全く消え失せて、今までわが子と見えてゐたのは、塚の上の草で、今はたゞ草の茫々と生えた墓標があるだけの草原となるのは、かなしいことである。

梅若丸の亡靈は消え失せる態で塚の中に入る。

○ます鏡―思ひを增すを眞澄鏡にいひかけ、鏡の緣で面影と續けた。

○しるしばかり―墓標ばかり。

○淺茅が原―茅の生えた野原。

あはれなりけれなるこそあはれなりけれ

と正面に直しこしをりながら留む。

考異

諸流（五流）

【一】ワキ「これは武藏の國……今日は舟を急ぎ……その由皆々心得候へ（春喜この川は大事の渡りにて候程に。番にをつて舟を渡し候。今日は某が番にて候間。舟を渡さばやと存じ候。剛さてもこの渡りは。武藏下總兩國の境に落つる川にて候。この間の雨に水かさに見えて候程に。旅人の一人二人にては渡し申すまじく候。人々を相待ち渡さばやと存じ候）　【二】ワキツレ「かやうに候者は都の者にて……罷り下り候（春、剛喜も略同じ、是は東國方の商人にて候。われこの程は都に候ひて。商ひ悉く成就し。唯今本國に下り候）

この外、五流の間、詞の出入が少くない。

古謡本（光悦本）

【一】ワキ「これは武藏の國……さる子細あつて（光の候て）　【二】ワキ「なかなかの事……けしからず物騒に（光さはかしく）候は……　【五】ワキ「この渡りは……かまひ（光へ）て……　ワキ「さん候あれは……この舟の向ひへ着き候はん程に（光ナシ）語つて……　【六】ワキ「なら（光いかに）今の物語は……　ワキ「（光あふ）去年三月……ワキ「言語道斷の事……かの人の墓所を見せ申し候べし此方へ御出で候へ（光ナシ）　【七】シテ「今までは……あるらめや（光ナシ）　【九】シテ「ならなら今の念佛のうちに（光聲は）正しくわが子の聲の聞え（光にて）候……

住吉詣　觀（剛　喜）

解説

【能柄】三・四番目　一段劇能

【人物】ワキ　住吉神主菊園何某、狂言　同從者、ツレ　光源氏、子方　同隨身（二人）、子方　同童隨身、ツレ　同臣惟光、ツレ　同從臣（三人）、シテ　明石上、ツレ　同侍女（二人）

【所】攝津國　住吉

【時】九月

【作者】作者及び演能に關する古記錄は見當らない。源氏物の謠曲中、制作の新しいものであらう。

【梗概】今は世に時めく光源氏が、須磨配流中住吉明神に立願した願果しの爲に、住吉に詣でると、源氏が配流の時契りを結んだ明石上がやはり住吉詣の爲に明石潟から舟を漕ぎ寄せて來たのに出會ひ、酒宴を催し舞を舞ひ、暫しの間互に語り合つて、やがて別れる。

【出典】この事は、源氏物語澪標の卷に、

その秋（源氏廿七歳）住吉に詣で給ふ。願ども果し給ふべければ、いかめかしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人われもわれもと仕う奉り給ふ。折しもかの明石の人年ごとの例の事にて仕うまつるを、去年今年障ることありて、怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり。船にて詣でたり。

と書き出して、光源氏と明石上とがここに偶然再會して、歌を贈答した由記してゐるのに據つたもので、文章も原文に従つてゐる所が少くない。その著しいものは、「語釋」に擧げることとする。

【概評】源氏物の現行曲には、本曲の外に〔半蔀〕〔夕顔〕〔葵上〕〔野宮〕〔須磨源氏〕〔玉鬘〕〔源氏供養〕があるが、そのうち劇能の〔葵上〕が凄艶な曲柄である外、他はいづれも複式夢幻能の典雅優麗な曲柄であるが、本曲は劇能として、現行曲全體を通じて、最も華麗な、燦爛眩いばかりの曲柄である。第一に普通一曲の登場人物は四五人を出でないが、本曲の登場人物は十人を超えてゐる。しかもその主要人物は平安貴公子の代表者として作られた光源氏とその愛人とであり、第二に謠曲作者は多くは戀愛を否定してゐるのに、本曲は相愛男女の再會した喜びを主題として居るなど、普通曲とは甚だ類を異にしてゐる。しかしこの事はやがて簡素な能舞臺との不調和を來し、十分な舞臺效果を奏し得ないばかりではなく、稍もすると淺薄な感じを殘させる憾みがないでもない。

【一】舞臺は攝津國住吉。ツレ住吉神主、狂言の從者を隨へて登場。

神主　私は攝津國住吉の神主の菊園何某です。さて、この頃都に於て聲望の他に比類のない光源氏が、先年御願をお立てになつたことがあるので、その願果しの爲に、當社へ御參詣になると仰せ出されたから、社人の者ともを呼び出して、境内を掃き清め、その用意をするやうにいひ

【一】名乘笛にてツレ住吉神主、風折烏帽子、着附厚板・縷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて名乘座へ出で、狂言從者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて太刀を持ちツレに隨ひ、

ツレ　これは攝州住吉の神主。菊園の何某にて候。さてもこの頃都に於て隱れ雙びなき光源氏、さる宿願の子細あつて、當社御參詣と仰せ出ださされ候程に。社人どもを召し出だし社内をも清め。

【一】○住吉―攝津國東成郡住吉に鎭座の住吉神社。
○菊園の何某―假作の人物。但し菊園の姓は住吉神主七家の一である津守氏の一支族にあるので、これを借りたのであらう。
○光源氏―紫式部の作つた源氏物語の主人公。委しくは〔須磨源氏〕參照。
○さる宿願の子細―源氏は罪を得て須磨明石に謫居したが、後免されて都に歸り、内大臣に上つたので、願果

その心得をなすべき由申しつけばやと存じ候

といひて狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言「御前に候

ワキ「光源氏當社へ御參りにてある間。社内をも淸め皆々その心得をなし候へと固く申しつけ候へ

狂言「畏つて候

ワキ後見座にくつろぎ、狂言は名乘座に出でて、

狂言「皆々承り候へ。都より光源氏當社へ御參詣にて候間。社人の面々罷り出で社内をも淸められ候へ。その分心得候へ／＼

といひて引く。

【三】

後見車の作物を正面先に出す。

一聲の囃子にて、子方隨身二人、初冠緌・襟赤・着附厚板・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束にて弓矢を持ち、ツレ光源氏、初冠・襟白・着附縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帶・扇の裝束、子方童隨身、喝食鬘・金製元結・襟赤・着附縫箔・童長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて太刀を持ち、ツレ立衆二三人、風折烏帽子・着附厚板・繧狩衣・大口・腰帶・扇の裝束、ツレ惟光、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り、源氏は車の中に入りて、

つけようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の概略を述べ、狂言の從者に準備をいひつける。

【三】舞臺は京都で、ツレ光源氏、ツレ惟光・子方隨身等を從へて登場。

しの爲に住吉に詣でたことをいふ。時に年廿七。

○いかに誰かある—このワキ詞及び次の「光源氏當社へ」云々のワキ詞、高安流に據る。

【二】

○小車の轅も續く—交通の頻繁なことをいふ。小車の小は接頭語。轅は車の前に長く出した材。

○直に治まる—路の眞直なことを政道の正しいことにかけていふ。

○頼みをかけし—罪が免されて歸洛することが出來るやうにと祈願をかけた。

○旅衣—思ひ立つ(裁つ)、薄きは衣の緣語。

○薄き日影も―秋の日の光の弱いことをいふ。○白鳥の―秋の日の白らむを白鳥にいひかけ、鳥の字を重ねて鳥羽を呼び起す。○鳥羽の戀塚―京都西南の郊外、下鳥羽村にあり。遠藤盛遠（文覺）に殺された袈裟御前の首を埋めた塚であるといふ。○秋の山―下鳥羽にある。○山崎―山城國乙訓郡、攝津との國境にある。月影を隔てる山を山崎にいひかけた。○關戸の宿―山崎の西。○拂はぬ塵の―芥川の序詞。○芥川―攝津國三島郡芥川村を過ぎる川。○猪名―攝津國河邊郡猪名川畔の地をいふ。新古今集高倉院御歌に「―薄霧のたちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり―」○村紅葉―群がる紅葉。○交野―河内國北河内郡にあり、昔の遊獵地で、又櫻の名所であつた。○春見し花の―それならん春こゝに來て一日狩をして遊んだ時に眺めた櫻が今はこのやうに紅葉したのであらうとの意。○渡邊―今大阪市天滿橋のあたり。昔難波の船津であつた所。○大江の岸―渡邊の南につ

惟光立衆「一聲」小車の。轅も續く都路の。直に治まる。時世かな

惟光「サシ」抑もこれは譽れ世に超え威光曇らぬ。光源氏にておはします。さてもこの君頼みをかけし。住吉の神に所願を滿てんと。

惟光立衆『今日思ひ立つ旅衣。薄き日影も白鳥の。鳥羽の戀塚秋の山。過ぐればいとど都の月の。面影隔つる山崎や。關戸の宿も。移り來ぬ

惟光立衆「下歌」拂はぬ塵の芥川。猪名の笹原分け過ぎて。

「上歌」見渡せば。薄霧まがふそなたより。薄霧まがふそなたより。ほの見えそむる村紅葉。これや交野に狩り暮れて春見し花のそれならん。猶行く先は渡邊や。大江の岸に寄る波も。音立ち變へて住吉の。浦わになるも程ぞなき。浦わになるも程ぞなき

一同「都路には車が絡繹とうち續いて、天下泰平、まことにありがたい御治世だ」

ト、まづ天下の泰平を稱へ、

惟光「抑もこゝにお出でになるのは、御聲望といひ御威光といひ、天下に雙ぶもののない、光源氏に渡らせられるのだ。さてこの君が御願をおかけになつた住吉明神に、御願果しに今日お出かけになるのだ」

ト、源氏を紹介して、

一同「今日旅を思ひ立つて、薄い秋の日ざしを浴びながら、鳥羽の戀塚や秋の山を過ぎ、はや都より程遠い山崎や關戸の宿をも通り過ぎ、芥川や猪名の笹原を通つて、遙かあなたを見渡すと、薄霧にとり包まれた中から、所々紅葉した梢がほの見える。さうだ、あそこがこの春狩りをして遊び暮らした交野で、あの時眺めた櫻が、今はこのやうに紅葉したのであらう。などと思ひながら、なほ旅を進めて、渡邊や大江の岸を通つて、打ち寄せる波の音もほかとはちがつて、澄み渡つたあの住吉の浦近くまで來た」

ト、旅の景趣を語り合つてゐるうちに、住吉に着いた態で、舞臺は住吉となる。源氏は神を拜する態で、

いた所。
○青立ち鳴って—波の音が響って澄むを住吉にいひかけた。

【三】
○潔き—清い。
○瑞籬の—波の縁語水を久しきの枕詞「瑞籬の」にいひかけた。
○久しき御代を—伊勢物語に見えた住吉明神の御詠「むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」を借りた。
○和光同塵は—摩訶止觀に「和光同塵結縁之初、八相成道以論二其終一」とあるを引いた。佛菩薩がその徳光を和らげて世塵に交はるのは衆生と縁を結ぶ始で、佛道を成就して衆生を利益するのは、その功徳の終であるとの意。八相とは佛がこの世に現れて變移する八種の相、委しくは[自趾]の語釋にいふ。
○はてしなき—利物の果—衆生を利益するといふ結果—を果しなきにいひかけた。

【四】
○祝詞—神に奏する詞、

「浦わになるも」と謡ひながら一同脇座の方へ行き、源氏は脇座にて床几にかゝり、隨身・童隨身・立衆・惟光の順にてその次に並び坐す。

【三】
源氏サシ「聞きしに越えていよいよありがたき。神の誓ひも潔き。浦わの波の瑞籬の。久しき御代を守り給へ
地上歌「日の本の。神の誓ひはおしなめて。神の誓ひはおしなめて（源氏立ちて眞中へ出で）和光同塵は。結縁の御始め。八相成道は利物のはてしなきまで國富み（と下に居て正面に辭儀し）民を憐む御心を誰かは仰がざるべき誰かは仰がざるべき（と脇座へ歸り床几にかゝる）

【四】
ワキ仕手柱際へ出で下に居て惟光に向ひ、
ワキ「唯今の御參詣めでたう候
惟光「さあらば祝詞を參らせられ候へ
ワキ後見より幣を受取り脇正面の中程に坐して、

【三】
源氏「人に聞き傳へたよりも、更に更にありがたい神樣だ。どうか御代の長久をお守り下さいますやうに。……ほんとに、わが日本の神々は、どなたも皆、この國土に御垂跡遊ばされて、衆生と緣を結び、それより所謂八相成道の終りまで、絶えず衆生を利益せられ、その結果國の隅々まで富み榮えるので、このやうに民をお憐み下さる、ありがたい御慈悲を感謝しないものはないのだ」
と神を禮讃する。

【四】
神主、惟光の前に出て、
神主「唯今はようこそ御參詣遊ばされて、おめでたう存じます」
惟光「それでは、祝詞をあげて下さい」

○すずしめ—涼しくする。慰める。
○八少女—神樂を奏する八人の舞姫。
○神樂男—笛・鼓で神樂を囃す役人。
○颯々—風の音を鈴の音に轉用した。
○ていとう—波の音を鼓の音に轉用したのである。
○榊葉—神樂の曲名。
○幾久方の—幾久しきを天の枕詞久方のにいひかけた。
○天地開闢—この下に「—以來」といふ意が含まれてゐる。
○皆令滿足—一切の所願を滿足せしめる意。
○來し方の御願に—滯標の卷に「まことに神の喜び給ふべきことをつくして、來し方の御願にもうち添へ、ありがたきまで遊びのゝしりあかし給ふ」
○河原の大臣の御例—河原の大臣は嵯峨天皇の皇子左大臣源融をいふ。「融」參照。滯標の卷に「河原の大臣の御例をまねびて童隨身をたまはり給ひける」
○内裏より賜はれる—朝廷から特に賜はつた。
○童隨身—隨身は弓矢を帶びて隨從する武官で、貴人護衞の爲に朝廷から賜はつた武官。童子の隨身はその本意を離れて、風流優美を添

ワキ（祝詞）『いでいで祝詞を申さんと。神主御幣を捧げつつ。既に祝詞を申しけり（と幣をふり）。謹上再拜（と拜し）。敬つて白す神慮をすずしめの神樂。八人の八少女。五人の神樂男。颯々の鈴の音。ていとうの鼓の聲々に。謠ふ榊葉の神歌。幾久方の天地開闢。泰平諸人快樂。福壽圓滿に守らしめ給へや。抑も立つる所の諸願成就皆令滿足。ありがたや

と祝詞を謠ひて次の地上歌に立ち惟光の次に坐す。

地上歌「來し方の。御願に猶もうち添へて。御願に猶もうち添へて。さもありがたき神慮の。納受もかくやと感涙肝に銘じけり（ワキ源氏に辭儀）。いよいよ悦びの御盃。神主に賜びければ。折節御供に河原の。大臣の御例とて。内裏より賜はれる。童隨身その時に。お酌に立ちて慰めの。今様

神主「では早速祝詞をあげませう」と、神主は御幣を捧げて、はや祝詞を申した。——

『謹んで神前に禮拜して申しあげます。これから神をお慰め申しあげる爲に神樂を奉り、八人の舞姫で舞を舞ひ、五人の男で神樂の囃子を勤め、さらさらと鈴を鳴らし、とうとうと鼓をうち、榊葉の神歌を謠ひあげます。どうか天地開闢よりこの方、なほ幾千年の後までも天下泰平で、すべての人々が喜び樂しみ、圓滿な福壽を得ますやうお守り下さいませ。わけても、この度立てました諸願が成就致し、一切のことが十分に滿足致しまして、ありがたうございます』

と、祝詞を奏し終る。

かうして以前に立てた御願の成就した御禮の舞樂を奏した上に、なほ現在未來の爲に、數々の舞樂を添へて奏する樣は、まことにありがたい尊いことで、さぞ神も御聞き入れになることであらうと、一同ありがた涙をこぼしたのであつた。

源氏が愈〻喜んで、御盃を神主に與へ

…る科としたものである。
○今様—中古から鎌倉時代にかけて流行した謡ひ物で、七五調四句のものが多い。
○朗詠—中古行はれた一種の謡ひ物で、漢詩の二句又は和歌に節をつけて謡つた。
【五】○一樹の蔭や一河の水皆これ他生の縁—今様の歌詞。「千手」にこれと同文を載す。
○白拍子—もと素拍子の謂で、樂器に合せないで謡つたもの。今様の謡ひ方の一種と見るべきものであらう。
○われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらん—伊勢物語に「昔帝住吉に行幸し給ひけり」と詞書して見えた歌。(「高砂」参照)
○いよいよ廻る—舞の袂のめぐるを盃のめぐるにいひかけた。
○盃の—月を含めた。
○有明に—遊びあかして夜明となつた意。
○ほのぼの明くる—舟の帆をほのぼのにいひかけた。
○浦より遠の—新後拾遺集津守國冬の歌「朗々に見ればこそあれ住吉の浦より遠の淡路島山」を引いた。

朗詠す

（折節御供にと童隨身の子方扇を開きて立ち源氏とワキに酌をして仕手柱先に立ち、

【五】

子方「一樹の蔭や。一河の水

地「皆これ他生の縁といふ。白拍子をぞ奏でける

（ワキこの間に切戸より入る）

中舞（破掛り）

（童隨身中舞三段を舞ひ、なほ次の謡に合せて舞ふ）

子方「われ見ても。久しくなりぬ。住吉の

地「岸の。姫松。幾代經ぬらん

地上歌「千代萬代の舞の袂。千代萬代の舞の袂。いよいよ廻る。盃の。有明になる。沖つ舟のほのぼの明くる住吉の（と童一の松に出で幕に向き招き扇をして）浦より遠の淡路島。あはれはてなき、ながめかな あはれはてなきながめかな

（と童隨身は舞ひ上げてもとの座に坐す。後見屋臺柵を橋懸に出す。）

られると、その時御供として、河原左大臣の御例に倣つて、御所から賜はつた童隨身が、お前に立つて座興を添へる爲に今様や朗詠を謡ふ。

【五】

隨身「——

『同じ木蔭の雨宿り、同じ流れの水を飲む、ほんの僅かな關係も、皆前世からの縁である』

といふ白拍子を謡つて、

〔中舞〕

を舞ひ、

隨身「——

『われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾代經ぬらん』

（住吉の岸の姫松は、自分が始めて見た時から今日までだけでも、随分長い年月になるが、その始め一見た時から既に老松であつたのだから、この松の生まれた時から今日まで、どの位長い年月を經てあることであらう）

といふ歌を謡ふ。

このやうに千代八千代を壽ぐ舞を舞ひ酒盛は愈々興を加へて、盃のめぐりめぐるうちに、はや夜も明け方になつて、ほのぼのと沖の白帆の見える、住吉の浦から遠く淡路島を見渡した、廣々とした眺めは實に心よいものである。

【六】一聲の囃子にて、シテ明石上、面若女・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束、ツレ侍女二人、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、ツレ・シテ・ツレの順にて舟に乘り、後のツレ棹を持ち、

シテツレ一聲「明石潟。月待つ方に行く舟の。波靜かなる。浦傳ひ

地上歌「舟出せし。後の山の山颪。後の山の山颪。關吹き越えて行く程に。須磨の浦わもいつしかに跡の名殘もおしてるや。難波入江に寄するなる。波はさながら白雪の。津守の浦に着きにけり津守の浦に着きにけり

【七】前のツレ侍女舞臺に向ひて、

侍女「松原の深緑なる木陰より。花紅葉を散らせる如くなる。色の衣々數々に。ののしりて詣づる人影は。如何なる人にてあるやらん

この間に惟光立ちて仕手柱先へ出て舟に向ひ、

惟光「これは都に光君。過ぎにし須磨の御願はた

【六】橋懸は明石から住吉へ渡る沖で、シテ明石上、ツレ侍女を隨へ、舟に乘つてゐる態で、橋懸へ出て

明石侍女「明石潟から月の出る東の方へ、波の靜かな浦傳ひに、舟出して行くことだ」

といつて、舟は進んで行く態で、

明石侍女「舟を漕ぎ出て、後の山から吹き下す山颪の風に吹き送られて行くうちに、いつの間にか須磨の浦も通り過ぎて、難波の入江に打ち寄せる波が白雪のやうに見える住吉の浦に着いた」

といつてゐるうちに明石上の一行も住吉浦に着いた態。

【七】侍女は光源氏の方を見て、

侍女「あの松原の、深緑の木陰から、花や紅葉を散らしたやうに、色々美しい衣を着飾つて、多勢で參詣なさるのは、あれはどういふ方なのでせう」

惟光「これは都に名高い光君が、以前須磨でお立てになつた御願はたしの爲に御參

○あはれ—淡路と音を重ねた。

【六】○明石潟—播磨國にあり、須磨の西に當る。光源氏は須磨配流の時この地に來て明石上と契を結んだ。
○月待つ方—月の出る東方住吉は明石から、明石海峽大阪灣を隔て東方にある。
○浦傳ひ—明石から住吉へ海岸傳ひに漕ぎ行くのである。
○後の山—須磨寺の後にある山。漕ぎ行く船の後から山おろしの順風が吹き送るといふ意を含めて用ゐた。
○關吹き越えに—續古今集在原行平の歌「旅人の袂すずしくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」を引いた。關は須磨關を指す。
○おしてるや—難波の枕詞名殘も惜しといひかけた。
○津守の浦—住吉の浦。白雪の積るといひかけた。

【七】○松原の深緑なる—澪標の巻に「松原の深緑なる中に、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣の濃き薄き數を知らず」とあるに據つた。
○ののしる—大きな聲を立てること。
○都に光君—都に光るを人

名の光君にいひかけた。
○心も上の空の—心の落ちつかぬこと。空の縁で、月日と續けた。
○月日こそあれ今日この頃—他に月日は多いのに、光源氏の參詣せられた同じ日の今日といふ意。
○白露の—詣で來んとは知らずを白露にいひかけ、露より、露の玉、玉襷、襷かけ、かけも離れぬといひ續けた。
○かけも離れぬ—前世からの離れ難い因緣。
○なかなかに—却つて。
○この有樣—このやつれた姿。
○浦波の—歸るの序詞に用ゐた。
○歸らば中空に—既に供の人に見つけられた後、今更かくれ歸るのも中途半端などつちつかずの事であるとの意。澪標の卷に「歸らむにも中害なり。今日は難波に船さしとめて、祓をだにせむとて漕ぎ渡りぬ」
○祓へだに白波の—祓へだにして行かんをしら波にいひかけた。
【八】○忍ぶもぢずり—船中に默ぶを忍ぶもぢずりにいひか

しに。詣で給ふといさ知らぬ。人もありける不思議さよ

シテ「あら恥かしや光君と。聞くより胸うち騒ぎつつ。いとど心も上の空の

惟光「月日こそあれ今日この頃。詣で來んとは

シテ「白露の

地上歌「玉襷。かけも離れぬ宿世とは。かけも離れぬ宿世とは（惟光もとの座に坐する）思ひながらもなかなかに。この有樣をよその見る目も恥かしや。さりとては浦波の。歸らば中空に。ならんも憂しやよしさらば。難波の潟に舟とめて。祓へだに白波の。入江に舟をさし寄する

【八】

シテを先にして一同舟より出で、シテは常座に立ち、ツレ二人は後見座に下に居る。後見舟を引く。

源氏シテに向ひ、

地ロンギ「不思議やな。ありし明石の浦波の。立ち

詣になつたのであるのに、それをさうとも知らない人のあるのは、不思議なことだ」

明石「あゝ恥かしい、光君と聞くや胸が騒いで、心も落ちつかないことだ。……ほかに月日も多いのに、擇りに擇つて、光君の御參詣になつた今日參詣しようとは、ほんとに思ひもかけないことで、これも前世からの免れ難い宿緣であらうとは思ひながらも、このやつれた姿を外目ながらも見られようかと思へば、却つて恥かしい。……といつて、今更隠れ歸るのもどつちつかずの變なもので、ほんとに困つたことだ。えゝまゝよ、難波潟に舟をとめて、祓でも致しませう」

と獨言をいつて、

波のうち寄せる入江に舟をさし寄せる

【八】

源氏はこれを見て、

源氏「これは不思議だ。以前ゐたことのある明石の方から漕いで來た舟が、歸るで

け、源融の歌「陸奥の忍ぶもぢずり誰ゆゑにみだれむと思ふわれならなくに」に據り、誰やらんと續けた。
○よその調めの―明石の卷に、光源氏の京に歸る前、明石上が琴を彈いて別れを惜しみ「なほざりにたのめおくめるひとことをつきせぬ音にやかけて忍ばん」と詠み、光源氏が「逢ふまでのかたみにちぎる中の緒の調はことにかはらざらなむ」と答へた。この音違はぬさきに必ずあひ見むと頼めたまふめり」とあるに據る。
○頼め―約束。
○住吉の岸に生ふて草―古今集紀貫之の歌に「道知らば摘みにも行かむ住の江の岸におふてふ戀忘れ草」
○忘れ草生ふとだに―伊勢物語の歌「忘れ草生ふとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし」
○かね言―約束した言。
○惟光―光源氏の乳母子で常に源氏に隨從した。
○傅―惟光を指す。
○面はゆながら―恥かしながら。
○移り舞―他人の舞に眞似て舞ふ舞。

も歸らぬ面影の。それかあらぬか舟影の忍ぶもぢずり誰やらん

シテ『誰ぞとは。よその調めの中の緒の。その音違はず逢ひ見んの。頼めを早く住吉の。岸に生ふてふ草ならん（と少し前に出て下に居る）

源氏「忘れ草。忘れ草。生ふとだに聞くものならば。そのかね言もあらじかし

地「げになほざりに頼め置く。その一言も今ははや

源氏「ありし契りの緣しあらば

地「やがての逢瀬も程あらじの。心は互に。變らぬ影も盃の。度重なれば惟光も

（心は互に」と惟光扇を開きて立ち源氏に酌をし、

惟光「傅御酌をとりどりの

（と言ひながらシテに酌をしてもとの座に歸り坐す。）

地「醉に引かるる戯れの舞。面はゆながらも移り

もなく歸らないでもない樣で、舟かげに隱れてゐるのは誰であらう」

明石「誰であらうなどと外々しく仰せになるところを見ますと、お別れしました時、琴の緒の音色の變らないうちに逢はうとお約束遊ばした、そのお言葉を住吉の岸に生える草のやうに、はやお忘れになつたのでございませう」

源氏「はあ、住吉の忘れ草か、いや忘れるといふやうな心があるならば、最初からそのやうな約束もしなかつたたらう」

明石「ほんとに氣休めに仰せになつたお約束のお言葉も、今は早や……」

源氏「以前に結んだ契りを忘れないでくれれば、やがてまた逢ふことも遠くはあるまい。お互に心變りはしないのだから……」

と、はや酒宴が始まつて、盃も度重なると、惟光も

惟光「私がお酌を致しませう」

と酌をし、源氏も酒の醉に誘はれて、座興の舞を舞ふと、明石上も

明石「お恥かしながら、私も眞似して舞ひ

舞（トシテ立ち）

［序舞］ を舞ひて仕手柱際に立ち、

【九】

シテ『身をづくし。戀ふるしるしに。ここまでも

地「廻り。あひける。縁は深しな

シテ『數ならで。なにはの事も。かひなきに。なに

身をづくし。思ひ初めけん。互の心を夕汐滿ち

來て（トシテ源氏向合ひ）

地「入江の田鶴も。聲惜しまぬほどあはれなる折

から。人目も包まず逢ひ見まほしくは（シテ眞中へ

出で、源氏に禮儀し）思へども（シテ立ち）はや漕ぎ離れて

（橋懸へ行きツレ侍女も立ちて後に從ひ）。行く袖の露けさも

昔に似たる旅衣（源氏立ち）。田蓑の島も。遠ざかる

ままに（シテ・ツレ侍女幕に入る）。名殘もうしの。車に召

されてのぼれば下るや。稲舟の。舟影もほのぼ

ませう」

［序舞］を舞ひ、

【九】

明石「――」

『身をづくし戀ふるしるしにここまでも
めぐりあひける縁は深しな』

（身を死ぬるばかり戀ひ慕んだ甲斐があつて、かういふ所、ここで會ふことの出來たのは、ほんとに深い縁であつた）

『數ならでなにはの事もかひなきに、なに身をづくし思ひ初めけん』

（私のやうな人數にも入らない賤しい身は、何事につけても思ふ甲斐もないのに、どうして死ぬるばかり苦しい戀を思ひ初めたのであらう）

と謠ひ、

互に心を語りあつてゐるうちに、はや夕暮、汐が滿ちて來て、入江の鶴が聲も惜しまず鳴くにつけても、一層情趣が深められ、人目をも忘れて逢ひたく思つたが、名殘を惜しみながらも明石上の舟は岸を漕ぎ離れて行つたので、源氏も別れの涙に袖を濡らして、昔須磨に旅をせられた時と相似た哀愁を覺えられたが、はや舟は田蓑の島よりもなほ遠く漕いで行つたので、つらい名殘を惜しみながらも、牛車に乗つて都

【九】○身をづくし戀ふるしるしにここまでも廻りあひける縁は深しな―澪標の巻に、源氏が住吉で明石上に會つた時に詠んだ歌。「身を盡くし」に澪標をいひかけた。○數ならでなにはの事もかひなきになに身をづくし思ひ初めけん―澪標の巻に見えた、前の歌に對する明石上の返歌。但し原歌第四句「など身をつくし」とある。「何は」には「難波」を含めた。○夕汐滿ち來て―心をいふを夕にいひかけた。以下澪標の巻に「夕汐滿ち來て、入江の田鶴も聲惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人めもつつまずあひ見まほしくさへおぼさる」とあるに據る。○露けさも―澪標の巻、源氏の歌「露けさの昔に似たる旅衣、田蓑の島のなにはかくれず」を引いた。田蓑島は今の天王寺の西北方にあつた。○うしの車―名殘も憂しを牛にいひかけた。○のぼれば下る―古今集東歌「最上川上れば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」を引き、源氏は京に上り、明石上は國に下る

のと明石の浦わの舟をし思ひの。別れかな

「車に召されて」と隨身を先に立てて源氏仕手柱際へ出で、「舟影も」と橋懸を遠く見てシテを見送り、直して留む。

に歸られ、明石上の舟は次第々々に明石浦へ漕ぎ近づいて、互に名殘惜しい別れをせられたのである。

意に用ゐた。〇ほのぼのと―古今集柿本人麻呂の歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれ行く舟をしぞ思ふ」に據る。

〔考　異〕

諸　流　（觀剛喜）

【三】惟光サシ「抑も（剛喜ナシ）これは（剛喜今上桐壺の御宇に）譽れ世に越え……　【五】子方「われ見ても久しく……　地「岸の姫松幾代經ぬらん（喜ナシ）

古諸本　（元祿二年本）

【一】ワキ「（元抑）これは攝州……宿願の子細あつて（元有により）……　社内をも淸め（元皆々）その心得をなすべき由（元かたく）……

【二】惟光サシ「抑も（元ナシ）これは（元今上桐壺の御宇に）譽れ世に……　【四】ワキ「唯今の御參詣めでたう候（元ナシ）……　ワキ「いでいで……天地開闢（元ナシ）泰平……　【七】侍女「松原の……色（元うへ）の衣々數々に……　惟光「これは都に光君過ぎにし須磨（元内のおとゝ）の御願……　【八】地ロンギ「不思議やなありし明石の浦波の（元ノヽ）……

誓願寺（せいぐわんじ）　觀（寶　春　剛　喜）

解　説

【能柄】三番目　劇的夢幻能

【人物】**ワキ**　一遍上人、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　里女（和泉式部の靈）、**狂言**　小川表の者、**後シテ**　和泉式部（歌舞菩薩）

【所】京都　誓願寺

【時】鎌倉中期　（三月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月十日、親元日記に翌六年二月二十八日、蔭涼軒日錄に同六年九月二十七日、本曲を演じたこと、言繼卿記に文祿四年三月廿七日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】一遍上人が熊野權現の靈夢を蒙つて、六十萬人決定往生の御札を弘める爲に、京都誓願寺へ來ると、和泉式部の亡靈が現れて、誓願寺の額を六字の名號に書きかへてくれと頼み、後に歌舞菩薩となつて現れ、歌舞を演ずる。

【出典】一遍上人が和泉式部の亡靈に會つたことは、一遍上人譜略に、

同(弘安)七甲申。同(一遍上人)四十六歳。……又移二誓願寺一賦二算化益一、時和泉式部之亡魂現來、受二十念金札一解二脫流轉一、此時誓願寺之額、改二六字名號一、委如二彼寺緣起一。

とあり、洛陽誓願寺緣起(續群書類從卷七百八十三)に、

一遍上人字は智心、伊豫の國河野七郎通廣が二男なり。……本宮澄誠殿(紀州熊野)へ詣で、仰では本地の悲願をたのみ、俯しては和光の擁護をもとめ、七日七夜一心念佛して法施精誠を盡し、神慮の感應を祈りける。滿屋の曉に至つて打まどろまれしに、神殿の戶びらおのづからひらき、白髮の山伏長頭巾をかけ、堂々として高臺にうつり給ふ。……高臺の山伏頓て上人の面前に來りすゝみ告給ひけるは我は是西方淨土の敎主なり。……上人念佛弘通の志ふかく、我意に稱ひ我化をたすく、實に末法導師念佛の知識也、是よりいそぎ洛陽誓願寺に詣で、有緣無緣をえらばず、普く念佛の符を授け、自他同生の悲願をみつべしとて四句の偈を演(のべ)給へり。

六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上上妙好華

……此は建治二年の春なり。旣に當寺へ參籠有て、六時の淨業をはげみ、一心に念佛し、諸人に名號の符をあたへて念佛をすゝめられしに、自行化他たうとかりけるさま也、しかのみならず都鄙遠近を論ぜず、道俗男女をわかたず、肩をならべ踵をついで、日夜に群集し、念佛の符を請け、往生淨土の結緣をぞなし侍りぬ。或日參詣群集の中より、優なる女人上人のまへにすゝみ申けるは、「授給ふ符を見侍るに、六十萬人決定往生とあり、然らば其外の衆生は攝取の利益に漏べきや」上人のたまわく、「彌陀の悲心無盡にして、横には十方を究め、竪には三世を盡し、善惡一切の凡夫乃至三途重苦の衆生迄、普く濟ひます廣大無邊の誓願なれば、いかで六十萬人に限るべき、但此身(符カ)の文は、神託の四句の偈一字づつをつんで、證明の爲に題するのみ也、たゞすべからく決定の信をいたして、他念なくねんぶつし給はゞ、佛の本願にかなひ往生いと速ならん」と示し給へば、女房歡喜の涙を流し、「扨は我(等)如き罪深き女人まで往生更にうたがひなし、有がたき御利益」とて、上人に掌を合せ念佛しけるが、やゝ有て又申けるは、「當寺の正面に誓願寺の額あり、此外に上人手づから六字の名號を書添させ給へ、是私の好に非ず、忝も本尊の御告也」とぞ。上人きとくのおもひをなし「扨女房はいづくの人にて名はいかに」と詰侍るに、女房の曰、「あれに見へさふらふ御堂は八曼陀羅と號し、又御堂の關白御建立たれば小御堂とも稱す、是我往生せし室なり」といひ捨て、いづちともなくうせ侍りぬ。

上人抑は只今の女人は過にし和泉式部如來の御使として淨土より應現せるよと感得し、御告といふにまかせて六字の名號を拜書し、御堂上にのぼせ、寺額に相ならべて至心に敬禮し、念佛刻うつされしに、倏ち異香堂に薫じ、瑞雲檐に靉き、除々たる樂音の中、奇光照し來る方をみれば、金影(容カ)のみだ雲中に立給ひ、菩薩聖衆前後を圍繞し、和泉式部も共に相從て影現せり。參詣の諸人五體を地になげ、歡喜讃歎の袂をうるをさずといふ事なし。……

とある。本曲は即ちこれに據つたものであらうか。但しこの緣起には嘉吉二年八月の事まで記してゐるから、本曲演能の古記錄寛正五年よりは古いが、その作者と信ぜられてゐる世阿彌の佐渡配流以後のものである。然らば本曲は世阿彌歿後の作であらうか、或はこの緣起よりも古く同趣のものがあつて、夙くそれに據つて作つたものであらうか。正安元年奥書の一遍聖繪(一遍上人六條緣起)には、一遍の樣々の奇特を記してゐるが、誓願寺のことは見當らない。

【評】 脚色の形式は複式夢幻能の常型を履んだもので、特にいふべきほどのことはないが、その內容、シテ和泉式部の取扱ひ方について、特異なものがある。一體謠曲作者の見解によれば、女性は三障五從の罪業深いもので、わが國第一の文學者といふべき紫式部さへ、死後墮獄の苦を受けてゐるのである。そしてこれらの不幸な女性は計らずもその古跡を通り合せた旅僧の回向を受けて、初めて成佛するものと考へてゐるのであるが、本曲の前ジテ和泉式部は最初から墮獄の苦を訴へてゐない。僅かに「六十萬人決定往生」の文字に不安を感じただけで、この不安の解けた後には、寺の額を六字の名號にしてほしいと望み、これを御本尊の御告であるとさへいつて居る。即ち和泉式部を最初から成佛したものとして取扱つてゐるのであつて、このやうな能作者としては極めて大膽な取扱を敢てしたのは、この原據に誓願寺緣起のやうなものがあつたので、この原據に忠實に從つた爲でなからうか。然し劇としての效果から見ると、一遍上人のやうな高僧の奇特を說くにあたつて、その相手として既に成佛した女性を引出して、相對立せしめたことは、巧妙な手法ではなかつたと思ふ。

【一】 次第の囃子にて、ワキ一遍上人、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて紙札二枚懷中し、ワキヅレ從僧二人、ワキ同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第 教への道も一聲の。教への道も一聲の。

【一】 前段

舞臺は初め紀伊國熊野へ、ワキ一遍上人、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

一遍 教への道もたゞ一筋である念佛淨土

【一】 教への道も一聲の一教への道もたゞ一筋であるといふ意を、一聲の念佛にかけていふ。一聲の念佛とは、たゞ南無阿彌陀佛と名號を稱へるだけで成佛するといい

御法を四方に弘めん

地取にツキは正面に向き、

ツキ「これは念佛の行者一遍と申す聖にて候。われこの度三熊野に參り。一七日參籠申し。證誠殿に通夜申して候へば。あらたに靈夢を蒙りて候。六十萬人決定往生の御札を。遍く國土に弘めよとの靈夢に任せ。まづ都へと志して候

といひてツキヅレと向合ひ、

ツキ二人 道行「彌陀頼む。願ひも三つの御山を。願ひも三つの御山を。今日立ち出づる旅衣紀の關守が手束弓。出で入る日數重なりて。時もこそあれ春の頃。花の都に着きにけり花の都に着きにけり

ツキ「出で入る日數」と正面に向きて三四足出でまたもとへ歸りツキヅレと向合ひて都に着きたる心。道行濟みてツキは正面に向き、

ツキ「急ぎ候程に。これははや都誓願寺に着きて

の宗旨を四方に弘布しよう」

とまづ次第に自分の心持を述べ、

一遍「私は念佛宗を修行してゐる、一遍といふ僧です。私は今度熊野三社に參詣して、一七日お籠りをし、本宮證誠殿に通夜をしてゐると、あらたかな靈夢を見たのです。それは『六十萬人決定往生』といふ御札を遍く全國に弘めよとの夢のお告なので、この御靈夢によつて、まづ都に上らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

一遍「阿彌陀如來にお縋り申す祈願も、無事に果して、今日熊野のお山を出立し、紀の關を越えて、幾日も幾日も旅を續けてゐるうちに、折も折、都合よく春の頃に、花の都に着いた」

といつてゐるうちに、旅は進んだ態で、舞臺は京都誓願寺となる。

一遍「道を急いだので、もはや都の誓願寺

ふ教。

○一遍―伊豫の人、河野七郎通廣の子で、俗名を通秀といつたが、出家して知眞といひ、念佛宗を修めて、新に時宗を開き、諸國を遍歷教化して、正應二年八月五十一歲で寂した。

○三熊野―紀伊國東牟婁郡の熊野權現、新宮、本宮、那智の三社を合せて三熊野といふ。

○一七日參籠―一遍上人が熊野に參籠したのは、建治三年三月のことであつた。

○證誠殿―熊野本宮をいふ。もとこの祭神を本地阿彌陀如來、證誠大菩薩の垂迹せられたものであるといつてゐた。

○決定往生の御札―迷ふ所なく極樂往生するといふ御札。熊野權現から感得した四句の頌を書いた札で、その頌は後に本文に出てくる。

○願ひも三つの―願ひも滿つを三つの御山にいひかけた。三つの御山は熊野三社のこと。

○紀の關守が手束弓―旅衣の緣語着を紀にいひかけ、弓の射るを入るにいひかけ

こ、出で入る日數の序に用ゐた。紀の關は紀伊から和泉へ越える關。手束弓は手に持つ弓で、今鏡の歌に「あさもよい紀の關守が手束弓ゆるす時なくまづゑめる君」

○出で入る日數—旅で暮らす日數の重なつたことをいふ。

○時もこそあれ—折よくも

○誓願寺—もと天智天皇の勅願で、大和にあつたのを、桓武天皇の御時、山城の深草に移され、後に一條元普門寺所に移された。本曲の頃はここにあつたのであるが、また秀吉の時に、今の二條京極に移された。大和時代は三論宗であつたが、京都に移されてから淨土宗となつた。

○告—熊野權現の靈夢をいふ。

○袖を連ね踵をついで—參詣人の絶え間なく續く形容

○念佛三昧の道場—專心念佛ばかりする寺。三昧は心を一所に住して他に動かない意。

【三】

○花の衣—洛は名に負ふ花の都といひかけて、花の衣と轉じた。

○心は空に黑染の—心に空にいひかけ、黑染といひかけて

候（ツレに向ひ）告に任せて札を弘めばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き、ワキは床几にかゝり、ワキヅレはその次に下に居り、

ワキ「ありがたやげに佛法の力とて。貴賤群集の色々に。袖を連ね踵をついで。知るも知らぬもおしなめて。念佛三昧の道場に。出で入る人のありがたさよ

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ里女、面増・鬘・鬘帯・摺箔・唐織着流・數珠の裝束にて常座へ出で、

シテサシ「所は名に負ふ洛陽の。花の衣の今更に。心は空に黑染の

ワキ「夕の鐘の聲々に稱名の御法

シテ「鳬鐘の響

ワキ「聽衆の人音

シテ「軒の松風

に着きました。御靈夢に從ひ、このお札を弘めませう」

といつて、寺を巡り、

一遍「ありがたいことだ。實に佛法の力は格別なもので、貴い人も賤しい者も、それぞれ着物を着飾つて、陸續としてこの念佛宗の寺に參詣し、誰も彼も皆、專心念佛してゐることだ。實にありがたいことだ」

【三】

シテ和泉式部の靈、里女の姿をして登場。

里女「こゝは名も花の都ではあるが、今更花の衣を着ようといふ氣持はしない、ただ心を澄まして、墨染衣を身に纏ひ、佛道を修めませう」

一遍「夕暮の鐘は響き渡り、念佛を稱へる聲は夥しいことだ」

里女「おゝありがたい鐘の音……」

一遍「參詣人の夥しい人音……」

里女「軒には松風の音が致します」

花の衣に對して墨染といひ他の人々は花衣を着飾つてゐるが、自分は墨染衣を纏うて佛道を修めるといふ意に用ゐ、更に墨染のを夕の枕詞としたのである。
○鳧鐘—鐘のこと。
○心は誰も一聲の—彌陀を頼む心は誰も同一であるといふ意を、一聲の念佛にいひかけた。
○うちに生まるる—一聲の念佛の内に極樂の蓮華の上に生まれるといひかけて、和歌の句に轉じた。
○蓮葉の濁りにしまぬ—古今集僧正遍昭の歌「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」の詞を借りて「なに疑ひの」とつゞけた。
○なに疑ひのあるべき—地謠のうち、こゝまではワキの詞として解すべきである
○漏らさぬ誓ひ目のあたり—念佛する者は一人も殘らず極樂に往生せしめるといふ佛の御誓ひを目前に見られるのが悅ばしいとの意。
○保たん—大切に持つてゐよう。この地謠はシテの科白として解釋すべきものである。

【三】

ワキ「おのれおのれと
シテ「かはれども
地上歌「彌陀頼む。心は誰も一聲の。心は誰も一聲の。うちに生まるる蓮葉の。濁りにしまぬ心もてなに疑ひのあるべき（ワキ懐より紙札を出し）。ありがたやこの教へ漏らさぬ誓ひ目のあたり（シテワキの前に出で札を戴き）。受け悦ぶや上人の御札をいざや保たん御札をいざや保たん

（とシテ舞臺の眞中へ行き下に居り、札を見てワキに向ひ、）

【三】

シテ「いかに上人に申すべき事の候
ワキ「何事にて候ぞ
シテ「この御札を見奉れば。六十萬人決定往生とあり。さてさて六十萬人より外は往生に漏れ候べきやらん。返す返すも不審にこそ候へ
ワキ「げによく御不審候ものかな。これは三熊野

一遍「さうだ、鐘の響、人の聲、松風の音、物それぞれ違ひはあるが、誰でも彼でも、阿彌陀如來にお縋り申して、たゞ一筋に念佛すれば、極樂の蓮華臺に生まれることは、決して疑ひないのです」

（と一遍上人懐からお札を出して里女に與へる。里女はこれを戴いて、）

里女「あゝありがたいことでございます。誰をも漏らさず極樂へお迎へ下さるといふ御誓願を目前に戴いて、ほんとに悅ばしうございます。それでは、上人様のお札を永く頂戴いたします」

【三】

（里女はこのお札を見て、）

里女「申し、上人様にお伺ひいたします」
一遍「何です」
里女「このお札を拜見しますと『六十萬人決定往生』とございますが、すると、六十萬人以外の者は極樂往生の中に這入れないのでございませうか、實に不審に思はれますが」
一遍「なる程、よく御不審なされた。これ

○四句の文の上の字―六十萬人とは人の數を制限した意ではなく、四句頌の各句の上の字、六、十、萬、人の字を取つたのであるといふ意。
○愚痴―至つて愚かなこと
○六字名號一遍法―以下四句頌の文意、本曲の末に記す。
○春の夜の―不審の晴るを春にいひかけた。
○光明遍照十方世界―彌陀の光明があらゆる世界に遍く行きわたるといふ意。十方は方角の八方及び上下をいふ。觀無量壽經に「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」

の御夢想に四句の文あり。その四句の文の上の字をとりて。證文の爲に書きつけたり。唯決定往生南無阿彌陀佛と。この文ばかり御頼み候へ

シテ さてさて四句の文とやらんは。如何なる事にてあるやらん。愚痴のわれ等に示し給へ

ワキ いでいで語つて聞かせ申さん。六字名號一遍法。十界依正一遍體。萬行離念一遍證。人中上々妙好華。この四句の文の上の字なれば。六十萬人とは書きたるなり

シテ 今こそ不審春の夜の。闇をも照らす彌陀の教へ

ワキ 光明遍照十方世界に。漏るる方なき御法なるを。僅かに六十萬人と。人數をいかで定むべき

シテ「さては嬉しや心得たり。この御札の六十萬

は三熊野の御夢想に四句の文を賜はつたのです。それで、その四句の文の上の字をとつて、證據の爲に書きつけたわけです。だから、たゞ『決定往生南無阿彌陀佛』といふ文だけを御信仰になればよいのです」

里女「して、その四句の文とやらは、どういふことでございませう。愚かな私共の爲に、お教へ下さいませ」

一遍「それでは聞かせてあげよう。それは『六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華』

（南無阿彌陀佛と六字の名號を稱へることが、すべての人をして成佛せしめる法で、あらゆる世界の物心萬有はすべて、その本體は阿彌陀佛なのである。それで、念佛一遍の法によれば、すべての行業に全く妄念を離れて、ひたすら阿彌陀佛と一體であることを證悟することが出來るのであつて、從つて念佛修行する者は、人間の中で最も勝れた、譬へば花の中の蓮華のやうなものである）

といふので、この四句の上の字をとつたのであるから『六十萬人』と書いたのです」

里女「今は不審が晴れまして、ありがたい阿彌陀如來の御教を受けて、春の夜の闇を照らされるやうな思ひがいたします」

一遍「全くその通りで『彌陀の光明は遍く十方世界を照らす』といはれて、誰も彼もその慈悲から洩れることのないありがたい御教であるのに、僅か六十萬人と人數を限定する筈はありません」

○稱ふれば佛もわれもなかりけり—語錄に出てゐる一遍上人の歌で、下句は「南無阿彌陀佛の聲ばかりして」—

○至誠心深心廻向發願—至誠心とは妄念を離れた眞實心、深心とは深く彌陀の本願を信ずる心、廻向發願心とは善根を重ねて淨土に生まれようと願ふ心、これを淨土の三心といふ。觀無量壽經に「若有衆生、願生彼國者、發三種心、卽便往生、何等爲三、一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者必生彼國」

○十聲一聲數分かで—念佛を十度稱へるものも一度しか稱へないものも差別なく

○うつろひて—映つて。

人。その人數をばうち捨てて

ワキ「決定往生南無阿彌陀佛と

シテ「ただ一筋に念ずならば

ワキ「それこそ卽ち決定する

シテ・ワキ「往生なれや何事も。皆うち捨てて南無阿彌陀佛と

地上歌「稱ふれば。佛もわれもなかりけり（シテ札を袂に入れ）。佛もわれもなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり。至誠心深心廻向。發願の鐘の聲耳に染みてありがたや（と南を伏せて聞く心）。まことに妙なるこの敎へ。十聲一聲數分かで。悟りをも迷ひをも迎へ給ふぞありがたき。さる程に。夕陽雲にうつろひて。西にかげろふ夕月の夜の念佛を急がん夜念佛をいざや急がん

とシテ立ちて仕手柱際へ行き、

里女「あゝ嬉しいことでございます。それでよく分りました。この御札に書かれた『六十萬人』といふ人數には拘泥しないで……」

一遍「たゞ決定往生南無阿彌陀佛と……」

里女「たゞ專心念じますれば……」

一遍「それこそ間違ひなく、迷ひを離れて……」

里女「往生が出來るのでございますね。何事も皆うち捨てて、たゞ南無阿彌陀佛と稱へれば、佛とわれ、われと佛の差別もなくなるのでございます。あゝ唯今も、南無阿彌陀佛と稱へる聲ばかり、至誠心、深心、廻向發願心を起させる鐘の聲ばかり、耳に染みて、實にありがたいことでございます。ほんとに、このあらたかな御敎は念佛を一度稱へるものも十度稱へるものも、悟つたものも迷ふものも、皆差別なく極樂へお迎へ下さる。ほんとにありがたいことでございます。……おゝ、かう申してゐるうちに、はや夕日が雲に映つて、西の方に夕月が見え出しました。さあ急いで夜念佛を致しませう。」

時は次第に移つて行く。

【四】○五障の雲の―五障とは法華經に記された、梵天王、帝釋、魔王、轉輪王、佛となることの出來ない、女の五つの障害をいふ。雲は月を蔽ふものであるから、この障害を雲に喩へたのである。
○かかる身―雲の蔽ひかかるを斯かる身にいひかけた。
○二世―現世と後世と。
○安樂の國―極樂淨土をいふ。
○始めて彌陀の―始めて見るを彌陀にいひかけた。
○涼しき道―淨土の和譯。
○利益無量罪―念佛の功德利益は無量の罪をも滅すといふ意。
○餘經の後の世―末世になつて、他の一切の經文が滅しきつた後も、阿彌陀經だけは殘るといふ意。無量壽經に「當來之世、經道滅盡、我以慈悲哀愍、特留此經」
○八萬諸聖教―釋迦一代の說教八萬四千の法門は皆彌陀の一佛に歸するといふ意。拾葉抄に、この出典として「三世十方諸佛、彌陀一佛、一切諸聖教、陀字八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛」といふ文を擧げ「或は曰く、此文のこ

【四】地ロンギ はや更け行くや夜念佛の。聽衆の眠り覺まさんと。鐘うち鳴らし念佛す

シテ「ありがたや五障の雲のかかる身を。助け給はばこの世より。二世安樂の國にはや生まれ行かんぞ嬉しき

地 げに安樂の國なれや。安く生まるる蓮葉の臺の緣ぞまことなる

シテ「ありがたや。ありがたや。さぞな始めて彌陀の國。涼しき道ぞ頼もしき

地 頼みぞまことこの教へ。或は利益無量罪

シテ『又は餘經の後の世も

地 彌陀一教と

シテ『聞くものを

地 ありがたやありがたや。八萬諸聖教皆是阿彌陀佛なるべし。この御本尊も上人も唯同じ御誓

【四】一遍「もはや夜も更けてきた。夜念佛に來た參詣人達の眠りをさまさう」

と一遍上人は鉦を鳴らして念佛する。

里女「あゝありがたうございます。この五障の罪業深い身をお助け下さいますと、この世ながら、來世へかけての極樂世界にすぐ行かれることと、ほんとに嬉しうございます」

一遍「さうです、この世ながらの極樂世界です。念佛の緣によつて、確かにたやすく極樂の蓮華臺に生まれることが出來るのです」

里女「あゝありがたい、實にありがたいことでございます。始めて見る彌陀の國はどんなに樂しい所であらうと頼もしく思はれます」

一遍「さうです。ほんとにこの御教は頼もしいものです。たとへどのやうな罪を犯した者でもお救ひ下さる御教で……」

里女「また他の御經がすべて滅んでしまつた末世に於ても……」

一遍「たゞ彌陀の教だけは殘るのです」

里女「さう伺ひますと、ほんとにありがたいことでございます。釋尊一代の御說教八萬四千の法門も、皆阿彌陀佛に歸するのでございませう。この寺の御本尊阿彌

と了譽の二藏義に平等覺經にありと、今此經を見るに、彼の文更になし。又實惠の摧邪興正集に秘密神呪經にありと、今尋ぬるに、此神呪經と題せる經もこれなしこの如く經文にこれなしと雖も、淨土三部經の取意を以つて、祖師たちの釋し給ふと見えたり」といつてゐる。

○唯同じ御誓願寺―この寺の本尊阿彌陀如來も一遍上人も、ともに衆生を淨土に導かうとの御誓願であるといふ意を寺の名にいひかけた。

【五】

○和泉式部―大江雅致の女和泉守橘道貞の妻となり、小式部を生んだが、後に上東門院に仕へて奔放な戀に遊んだ、多感多情の歌人。小式部に先立たれて尼となり、誓願寺に住んで專念と號し、長和三年に死んだ。その墓は誓願寺の南隣誠心院にあつたといふ。和泉式部の亡靈の現れたのは、一遍上人年譜略によれば、弘安七年、上人四十六歳の時、誓願寺縁起によれば建治二年の春であつた。

願寺ぞと。佛と上人を一體に拜み申すなり

と眞中へ行き下に居てワキへ合掌。直して、

【五】

シテ「いかに上人に申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ

シテ「誓願寺と打ちたる額を除け。上人の御手跡にて。六字の名號になして給はり候へ

ワキ「これは不思議なる事を承り候ものかな。昔より誓願寺と打ちたる額を除け。六字の名號になすべき事。思ひもよらぬ事にて候

シテ「いやこれも御本尊の御告と思し召せ

ワキ「そも御本尊の御告とは。御身はいづくに住む人ぞ

シテ「わらはが住家はあの石塔にて候「と橋懸の方を見やる」

ワキ「不思議やなあの石塔は。和泉式部の御墓と

陀如來も、お上人樣も、同じやうに衆生を淨土に導かうと御誓願遊ばすのでございますから、私どもは上人樣を佛と御一體と思つてお拜み申すのでございます」

と合掌し、

【五】

里女「もうし、上人樣に申しあげます」

一遍「何です」

里女「あの『誓願寺』と書いた額をのけて、上人樣の御筆で、六字の名號にお書き換へ下さいませ」

一遍「これは不思議なことをいはれる。昔から『誓願寺』と書いてある額を取除けて六字の名號に書きかへよとは、思ひも寄らぬ事です」

里女「いやこれもこの寺の御本尊のお告と思し召し下さい」

一遍「一體御本尊のお告などと仰しやるあなたは、どこに住む方なのです」

里女「私の住家はあの石塔です」

一遍「これは不思議だ、あの石塔は和泉式

こそ聞きつるに、御住家とは不審なり

シテ「さのみな不審し給ひそよ。われも昔はこの寺に値遇のあればすむ水の。春にも秋や通ふらし

地「掬ぶ泉のみづから、名を流さんも恥かしや。よしそれとても上人よ。わが僞りはなき跡に、と（シテ立ち、）和泉式部はわれぞとて。石塔の石の火の、光とともに、失せにけり光とともに失せにけり

ト石ノ廻りて常座にて正面にひらき、静かに中入。

部のお墓だと聞いてゐましたのに、それがあなたのお住居だとは、實に變です」

里女「いえそのやうに御不審になることはございません。私も昔はこの寺に縁故のある者ですから、自然この石塔にも住むこととなつたのでございませう。その私の名を申すのはお恥かしいことですが……いえ構ひません、上人様、私はほんとは亡くなつた和泉式部なのです」

といつて、石火のやうに忽ちに石塔の中に消えてしまつた。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・小刀・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。小川表に住居する者にて候。こゝに念佛の行者一遍上人この誓願寺へ御出であつて。六十萬人決定往生の御札を弘め給ふ。それにつき夜前小川表の面々へ不思議なる御告御座候。その子細は。昔より誓願寺と打つたる額をのけ。上人の御手跡にて六字の名號になし申せとの御事にて候。この由上人に申さばやと存ずる。（眞中へ出で下に居てワキに向ひ）今日は遅なはり申して候

ワキ「御參りありがたう候。何とて今日は遅られ候ぞ

狂言「尤も早々參り御手水をも上げ申さうずるを。叶はぬ用の事にて遅なはり申して候

○値遇—出逢ふこと。ここでは縁故のあるものといふ意。

○すむ水の—住むを澄むにいひかけた。

○春にも秋や通ふらし—「春」は昔を詠つたもので、もとは「水の音にも秋や通ふらし」と言つたのであらう。即ち、新千載集中務の歌「下くぐる水に秋こそ通ふらし掬ぶ泉の手さへ涼しき」を引いて、泉に式部の名和泉を通はせたのである。

○掬ぶ泉のみづから—泉の水をみづからにいひかけた。掬ぶは手で水を汲むこと。

○なき跡の—僞りの「無き」を「亡き」にいひかけた。

○石の火の—人生のはかない事を言つて電光石火といふので、石塔に通はせて、石火の消えるやうに忽ちに消え失せたといふ意に用ゐた。

【間】

○夜前—昨夜

ワキ「げに〳〵尤もにて候。拙かたがたに尋ねたき事の候。思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所に於て和泉式部の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの所には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候が。凡そ承りたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に當寺誓願寺と申すは。忝くも天智天皇の御願にて御座候。卽ち御本尊は慈悲萬行春日の御作と申し候。その故は天智のすべらぎ西方淨土の阿彌陀如來を拜みたきと思し召し。天道へ御祈誓候處に。ある時一人の女天降り。生身の阿彌陀如來を拜みたく思し召さば。賢問芥子國(稽文子稽主動)佛師に佛を作らせ給はば。生身の阿彌陀如來なるべしと御申し候間。二人の佛師作り候處に。夜な〳〵春日大明神現れ給ひ。一人の佛師に紛れ造り給ふにより。春日の御作と申し候。誠に殊勝なる御事にて。極樂世界九品淨土と申すもこの佛の御前にはしかじとの御事にて候。又和泉式部と申すは。生國は因幡の國の人にて上東門院に仕へ給ふが。和泉式部思し召すやうは。女は五障三從の罪深き者なればとて。この誓願寺へ日夜朝暮御參りあり。終に往生の素懷を遂げ。歌舞の菩薩と現れ給ふ。卽ち是なるは和泉式部の御しるしにて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候か。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく女性一人參られ。四句の文の謂れ懇に聽聞申され。この誓願寺と打つたる額をのけ。愚僧が手跡を以て六字の名號になせと申され候程に。思ひもよらぬ由申して候へば。御本尊の御告なる由申され。和泉式部はかれなりといひもあへず。あれなる石塔のほとりにて姿を見失つて候よ

狂言「これは奇特なる事を御申し候ものかな。さては小川表の面々へ御告も同じ事にて候間。急ぎ六字

〇御しるし—御墓。

【六】(二)佛說―前ジテ亡靈の言をワキは佛の御詞と解したのである。

(三)あらたさ―あらたかさに同じ。

の名號に御なしあれかしと存じ候

ワキ「何と小川の面々もその如くなる御告と候や

狂言「なか／＼の事にて候

ワキ「近頃奇特なる御事にて候。この上は御告に任せ愚僧が手跡を以て六字の名號になし申さうずるにて候。この由小川の面々へ相觸れ候へ

狂言「心得申して候。(名乘座に立ちて)皆々承り候へ。昔より誓願寺と打つたる額をのけ。一遍上人の御手跡にて六字の名號になされ候間。皆々參られ候へ。その分心得候へ／＼。(ワキの前に出で下に居て)相觸れ申して候

ワキ「一段にて候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ「佛說に任せ誓願寺と打ちたる額を除け。六字の名號を書きつけて。佛前に移し奉れば

ワキ(上歌、待謠)不思議や異香薰じつつ。不思議や異香薰じつつ。花降り下り音樂の聲する事のあらたさよ。(ワキ正面の方に向き)これにつけても稱名の。心一つを賴みつつ。鐘うち鳴らし同音に

ワキ床几をはなれ下に居て合掌、

ワキ「南無阿彌陀佛彌陀如來

といひて直す。

【六】

後　段

(一)佛のお詞に從つて、誓願寺と書いた額を取除け、六字の名號を書きつけて、佛前にお移し申すと、不思議にも、妙なる香が薰り滿ち、天から花が降り下り、音樂の聲が聞えてくる、實にあらたかなことだ。これにつけても、愈〻專心念佛を旨として、鉦をうち鳴らし、皆の者と一所に稱名しませう。――南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛(二)――

(二)念佛する。

【七】

○夢の世に和泉式部—夢の世に出づを和泉にいひかけた。

○佛果—成佛の果報。

○歌舞の菩薩—天樂を奏し歌舞して、如來を讃歎し、又極樂往生の人を歡樂せしめる菩薩。

○二十五菩薩—本曲の末に記す。

○聖衆—菩薩に同じ。

○みのり—御法ではなく、御乘りで、菩薩の乘物、紫雲をいつたのであらう。

○紫雲—極樂の雲。

○夕日影—極樂淨土は西方であるから、夕日影を出し、その縁で常の燈火と續けた。

【八】

○抑も當寺誓願寺—以下「この誓願寺を拜むなり」まで、誓願寺の曲舞で、和泉式部が佛德を稱へて謠ふのである。

○天智天皇の御願—誓願寺はもと大和にあり、天智天皇の御本願で、開基は惠隱僧都。

○慈悲萬行—春日明神の[illegible]、委しくは「春日[illegible]」にいふ。

○水波の隔て—神といひ佛といひ、名はちがつても、實は同じであるといふ意。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ和泉式部、面増・黒垂・天冠・襟白・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて常座に立ち、

後ジテサシ「あらありがたの額の名號やな。末世の衆生濟度のため。佛の御名を現して。佛前にうつすありがたさよ。われも假なる夢の世に。和泉式部といはれし身の。佛果を得るや極樂の歌舞の菩薩となりたるなり。二十五の

地「菩薩聖衆のみのりには。紫雲たなびく夕日影

シテ「常の燈火。影淸く

地「さながらここぞ極樂世界に（と右へ廻り）。生まれけるかとありがたさよ（と大小前にて合掌）

【八】

地クリ「抑も當寺誓願寺と申し奉るは。天智天皇の御願。御本尊は慈悲萬行の大菩薩。春日の明神の御作とかや

シテサシ「神といひ佛といひ。唯これ水波の隔てな

【七】

後ジテ和泉式部の亡靈、歌舞菩薩となつて登場。

式部「額にお書きになつた六字の名號、實にありがいことです。末世の衆生を濟度する爲に、阿彌陀佛の御名を記して、佛前にお懸け下さつて、ほんとにありがたうございます。私も夢のやうなこの世にゐた時は、和泉式部といはれた者ですが、今は成佛して、極樂の歌舞の菩薩となつたのです。二十五菩薩の御乘物としては、西方の空に紫雲がたなびきますが、今この寺の常夜燈の淸らかな御影が丁度そのやうで、こゝが極樂世界であるかと思はれて、ほんとにありがたいことです」

（合掌して、次のやうな誓願寺曲舞を謠ふ。）

【八】

式部「——」抑もこの誓願寺といふ寺は、天智天皇の御本願によつて建てられたもので、御本尊は本地慈悲萬行大菩薩の春日明神がお作りになつたものであるといふことである。元來神といひ佛といつて、御名は變つてゐても、それは水と波との差異のやうなもので、實は同一體である

○和光―佛が光を和らげて神と現れること。
○一體分身―神も佛も同一體であるといふ意。春日明神が阿彌陀佛を作られたことについていふのである。
○來迎引攝―彌陀四十八願の第十九願で、衆生臨終の時佛菩薩が來て淨土へ迎へ取るのを來迎といひ、佛が手を以て衆生を淨土へ引き導くのを引攝といふ。
○笙歌遙かに聞ゆ―十訓抄に記された、大江定基入道寂照の詩「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」を引く。孤雲は紫雲、笙歌は歌舞音曲の音樂。落日前は西方淨土の喩。
○昔在靈山の―南岳大師の文と傳へた「昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體」を和らげたのである。この文は[illegible]にも見ゆ。
○悲願―慈悲深い誓願。
○若我成佛―無量壽經の彌陀の四十八願に「設我得佛」とあるのを、[illegible]大師が若我成佛と釋したもので、こゝでは彌陀の誓願といふ意。
○わが力には―自力では成佛出來ないもの、他力によつて往生を得るといふ。

り

地「然るに和光の影廣く。一體分身現れて衆生濟度の御本尊たり

シテ「されば毎日一度は

地「西方淨土に通ひ給ひて。來迎引攝の。誓ひを現しおはします

（これより謡に合せて舞ふ「舞クセ」）

地クセ「笙歌。遙かに聞ゆ。孤雲の上なれや。聖衆來迎す。落日の前とかや。昔在靈山の御名は法華一佛。今西方の彌陀如來。慈眼視衆生現れて。娑婆示現觀世音。三世利益同一體ありがたや我等が爲の悲願なり

シテ「若我成佛の。光を受くる世の人の

地「わが力には往き難き。御法の御舟の水馴棹さゝでも渡る彼の岸に。至り至りて樂しみを極む

が、衆生と緣を結ぶ爲に、その德光を和らげて、一つの體を色々の身に分けて現れ給ふのであつて、この寺にもまた衆生濟度の爲め御本尊となつて、お現れになつたのである。それで、この御本尊は毎日一度は西方淨土にお通ひになつて、衆生を極樂へ迎へ導くといふ御本願を御實現になるのである。

この來迎の樣は、詩に――

『笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前』

（遠く紫雲の上から妙なる音樂の聲が聞え、夕日の傾く西方淨土から菩薩衆がお迎へ下さる）

とか詠まれてゐるのである。さてこの御佛は、昔靈鷲山で説法せられた時の名は法華といひ、今西方淨土では阿彌陀如來といひ、衆生に慈悲を施す爲に、この娑婆に現れては觀世音といひ、名は所と時とによつて變るが、その利益は過去・現在未來の三世に亘つて變りがないと、われら衆生の爲に慈悲深い御誓願をお立てになつた、實にありがたいことである。

かうして、彌陀如來の慈悲を受ける衆生は、自力では往けない極樂へ、何の苦勞もなく他力で渡ることが出來て、樂しみ

意。
○彼の岸―極樂。
○樂しみを極むる國―極樂を和らげていつた。
○十惡―殺生、偸盗、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴。
○八邪―邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪命、邪定、邪精進、邪念。
○月の西方も―月の入る方角の西方淨土。
○ここを去る事―觀無量壽經に「汝知不、阿彌陀佛去レ此不レ遠」
○唯心の淨土―淨土はたゞ心の中にあるといふ意。「栢埼」にも―己心の彌陀如來唯心の淨土―
○佛事をなせる―曲舞など謠つて佛の供養をする意。
【九】○ひとりなほ佛の御名を尋ね見んおのおの歸る法の場人。一遍上人の詠歌であらうか、出所は分らない。この歌「實盛」にも見ゆ。

る國の道なれや。十惡八邪の迷ひの雲も空晴れ。眞如の月の西方も。ここを去る事遠からず。唯心の淨土とはこの誓願寺を拜むなり

と舞ひ上げて仕手柱際に立ち、

シテ「歌舞の菩薩も。さまざまの
地「佛事をなせる。心かな

〔序舞〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

【九】

シテワリ「ひとりなほ。佛の御名を。尋ね見ん
地「おのおの歸る法の場人。法の場人法の場人の
シテ「げにも妙なる稱名の數々
地「虛空に響くは
シテ「音樂の聲
地「異香薰じて
シテ「花降る雪の
地「袖をかへすや返す返すも。貴き上人の利益

を極め得るのである。このやうに悟れば、十惡八邪の迷ひも晴れ、かの西方淨土も遠くに求めるまでもない、わが心の中に淨土があるのである。さういふ心持で、この誓願寺を拜むのである」――

と謠ひ納める。

かうして、歌舞の菩薩も色々と佛供養の心持を現したのである。

〔序舞〕

和泉式部、なほ舞を舞つて、佛を讃め、

【九】

式部「――

『ひとりなほ佛の御名を尋ね見ん、おのおの歸る法の場人』

（參詣の人々は皆寺から退散したが、自分はなほ殘つて、念佛しよう）と謠ふ。

このやうに、寺にはありがたい稱名の聲が夥しく、空には音樂の聲が響き渡り、妙なる香が薰り滿ち、花が雪のやうに降り下り、美しい舞を繰り返して舞ふ。そして――

「これといふのも、全く貴い上人の御

かなと。菩薩聖衆は。面々に。御堂に打てる。六字の額を。皆一同に。禮し給ふは。あらたなりける。奇瑞かな

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

利益によるのだ」と、菩薩達が皆御堂にかけた六字の名號の額を禮拜せられるのは、實にあらたかでめでたいことである。

〔考異〕

諸本（五流）

【一】……これは念佛の行者……われこの度三熊野の……まづ都へと志して候（下懸三熊野證誠殿に一七日參籠申して候へば。神託に四句の文を給はりて候程に。國土に弘めん爲。唯今都へ上り候）

古謡本（光悦本）

【二】……これは念佛の行者……決定往生の御（光ナシ）札を遍く（光ナシ）國土に……都へと志し（光急）候……ワキ「急ぎ候程に（光間）これははや（光ナシ）」

【五】……不思議やな……御墓とこそ聞きつる（光し）に……シテさのみな不審し給ひそ（光と）よ……

【八】……然るに光れば和光の影……

〔附記〕

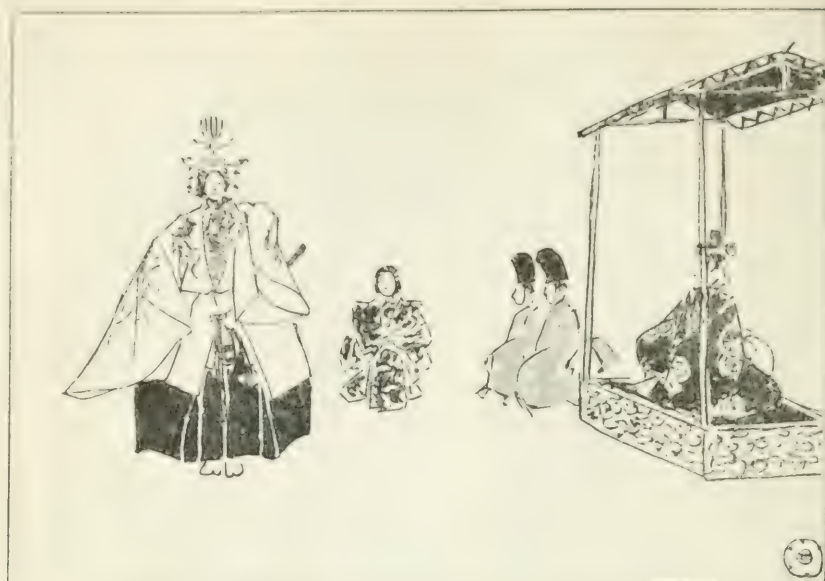
六字名號一遍法　南無阿彌陀佛と六字の名號を稱へることが、すべての人をして成佛せしめる法であるとの意。六字名號とは南無阿彌陀佛、一遍とはすべてに行き亘ること。一遍上人語錄に「南無阿彌陀佛の六字の外にわが身心なく、一切衆生にあまねくして、名號これ一遍なり」

十界依正一遍體　一切衆生の所依たる土地衣服等、また一切衆生の身體精神、あらゆる世界の物心萬有は、その本體はすべて阿彌陀佛であるとの意。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の迷界、聲聞、緣覺、菩薩、佛の悟界を總べていふ。依正とは依報、正報の二で、依報とは土地衣服其他衆生の所依、正報とは衆生の身體精神をいふ。體は本體で、阿彌陀佛を指す。一遍上人語錄に「よ

ろづ生とし生けるもの、山河草木ふく風たつ浪までも、念佛ならずといふことなし」

○萬行離念一遍證―念佛一遍の法によれば、すべての行業に全く妄念を離れ、ひたすら阿彌陀佛と一體であることを證得悟了すといふ意。萬行とはすべての行業、離念とは妄念を離れること、證とはさとること。

○人中上上妙好華―念佛修行をする者は、人間の中で最も勝れた、譬へば蓮華のやうなものであるといふ意。妙好華は芬陀利華の漢譯で、蓮華のこと。觀無量壽經に「若念佛者當レ知、此人是人中芬陀利華」

○二十五の菩薩―十往生經に「若有二衆生一、念二阿彌陀佛一、願二往生一者、彼佛卽遣二二十五菩薩一、擁二護行者一」選擇決疑抄に「二十五菩薩、觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、師子吼、陀羅尼、虛空藏、德藏、寶藏、金藏、金剛藏、光明王、山海慧、華嚴王、珠寶王、月光王、日照王、三昧王、定自在王、大自在王、白象王、大威德王、無邊身」

西王母（さいわうぼ）　觀(寶 春 剛 喜)

解　説

【能柄】　脇能　複式劇能

【人物】　狂言　周穆王の臣　ワキ　支那帝王、ワキツレ　同侍女、臣下(二人)、前シテ　女(西王母)、前ツレ　同侍女、後シテ　西王母、後ツレ　同侍女

【所】　支那　帝王宮殿

【時】　(三月)

【作者】　能本作者註文に金春禪竹の作とあるが、この外に古記録は見當らない。

【梗概】　支那皇帝の仁政をたゝへて、西王母といふ仙女が天降り、三千年に一度花咲き實を結ぶといふ仙桃を君に捧げ、舞を舞つて、御代を祝ふ。

【出典】　西王母の事は、穆天子傳を始めとして、武帝内傳・漢武故事・列仙傳などに記された、支那傳説中著名たものの一で、わが國の文藝にも、唐物語に、

この御時（漢武帝）に當りて、東方朔といふ人、仙宮より罪を犯して暫らく人間に下されたりける。……かゝる程に、宮の内に色黄なる雀の、例の鳥にも似ず、怪しきさましたる飛び遊びけるを、帝「日頃かゝる鳥見えず、いかなることにか」と問ひ給ふに、東方朔が「申しけく、「君長生不死の道を好み給ふにより、御志にめでて、西王母と申す仙女參りて遊び奉らむと告げ知らするよしの使たり」と聞えさするに、帝嬉しく思して、「いかなる有様にてその人を待つべきぞ」と宣はするに、「宮の中靜かにて、庭の面を清め香をたき、様のゆかを設け給ふべし」と申しけり。かくてたのめし程にもなりぬれば、帝御心すみて、ゆかのもとに東方朔を隱し置きて、人知れず今や今やと待たせ給ふに、秋八月ばかりの月の光くまなき夜、かうばしき風うち吹きて、晴の空のどかなるに紫の雲一村たなびきけり。そのなかよりこの世ならず目もあやなる人百人ばかりおり降れり。そのうちにあるじと覺しき人、帝にあひ奉りて様々の事どもあな聞えさす。やゝ久しくなる程に、この人桃七つを取り出して、その三つをば帝に奉らせ給へり。これを御口にふれ給ひけるより、御身も輕く御心地も涼しくならせ給ひて、空にも飛び昇りぬべく、生死の罪障も解けぬべくや思しけむ。……夜やうやう明がたになる程に、「その御ゆかの下に隱れ居て侍りける東方朔は仙宮の人なり。然れどもその三千とせに一度なる桃を三度まで盗める罪によりて、暫らく人間に下されたる科をあがなひて後は、又天上に還りきたるべきたり」とのたまひて、紫の雲立ちかへりゆきしより、御心は空にあくがれにけり。

と傳へてゐる。本曲は即ちこの傳説を主材として祝言の曲を作つたのである。

【總評】 祝言物で、内容は極めて簡單であるが、西王母傳説の中心點だけを捉へて、餘事に亘つてゐないこと、殊に類曲〔東方朔〕などのやうに、傳説を附會してゐないことは、この曲の秀れた點である。たゞ前後ツレの變化の乏しいのは、本曲の缺點であらう。脇能の形式について、序段が普通のワキ次第・名乘・道行とはちがつて、狂言口開、來序ワキサシ・地となつてゐるのは、〔咸陽宮〕〔皇帝〕など唐事物に屢〻用ゐられた一種の異型であるが、その他には別段變つた點はない。類曲〔東方朔〕參照。

【型】

【型】 後見一畳臺を脇座に据ゑ、その上に宮殿の大屋臺作物を置く。
狂言官人、官人頭巾・着附厚板・側次・括袴・腰帯・扇の装束にて名乘座に出て、
狂言口開「抑〻これは周の穆王に仕へ奉る官人にて候。この君賢王にてましますにより、吹く風枝を

百官卿相雲客や。千戸萬戸の旗を靡かし鉾を横たへ。四方の門邊にむらがりて。市をなし金銀珠玉。光を交へ。光明赫奕として日夜の勝劣見えざりけり。かかるためしは喜見城。その樂しみも、如何ならんその樂しみも如何ならん

【三】

一聲の囃子にて、シテ女、面増・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流の裝束、ツレ侍女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、二人とも桃花の枝をかたげて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ ツレ 一聲 桃李もの言はず。下おのづから市をなし。貴賤交はり。隙もなし

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ 面白や四季折々の時を得て。草木國土おのづから。シテ ツレ（向合ひて）皆これ眞如の花の色香。妙なる法の三つの心。潤ふ時や至りけん。三千年に咲く。花心の。折知る條の。かざしとかや

シテ ツレ 下歌 いざや君に捧げんいざいざ君に捧げん。

夜もあたり眩いばかりで、晝夜の差別もつかない勢ひである。これを例へれば、かの天上の喜見城がこのやうであらうかと忍ばれるやうな、いかにも樂しい有樣なのである」

（と君德をたゝへる。）

【三】

（シテ西王母、女姿で、ツレ侍女を伴ひ、桃の枝を持つて登場。）

女「桃や李は物を言はないが、その花の美しさに誘はれて、人が集まつて來て、自然と樹下に小路が出來るものであるが、今この都も、人々が高い君德を慕つて、貴い人も賤い者も集まつて來て、隙間もない有樣だ」

（と御代をたゝへ、）

女「ほんとに樂しいことだ。非情の草木も四季折々、その時期になると、美しい花の咲くものであるが、殊に今は妙法華のありがたい御教の行渡る時が來たものと見えて、三千年に一度咲くといふ仙桃も、今のめでたい時機を知つて咲き出て、君のかざしに供へようとしてゐるのだ。さあこのめでたい桃をわが君に捧げませう、

を領する諸侯）萬戸侯（萬戸を領する諸侯）の略で、大小の諸侯が君德を慕つて都に集まることをいふ。

○鉾を横たへ―鉾を伏せて敵對しない意を示すこと。

○四方の門邊―都の四門。

○日夜の勝劣―夜も晝のやうに輝いて、晝夜の差別がない。

○喜見城―忉利天、帝釋天王の宮城で、佛教で想像した天上の樂園。

【三】○桃李もの言はず―史記李廣傳の贊「桃李不言、下自成蹊」を引き、蹊（みち）を市にかへた。

○眞如の花―こゝでは勝れて美しい花の意。

○妙なる法―上の眞如の花を承けて、妙、法、花と、法華經の名を隱したのである。

○三つの心―法の滿つを三つにいひかけた。三心とは普通、至誠心・深心・廻向發願心をいふが、こゝでは妙法花の三字を指したのではなからうか。

○三千年に咲く花―仙桃の花、委しくは解說にいふ。

○折知る花のかざし―仙桃がめでたい折を知つて、咲

上歌「すめらぎの。その御心はあまねくて。その御心はあまねくて。隙行く駒の法の道。千里の外まで上もなき道に至りて明らけき。靈山會場の法の場。廣き教への誠ある。君君たれば誰とても。いさみある世の、心かないさみある世の心かな

（「いさみある世の」と謡ひながら入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。シテ桃花を兩手に捧げてワキに向ひ、）

【三】

シテ「いかに奏聞申すべき事の候

ワキ「奏聞とは如何なる者ぞ

シテ「これは三千年に花咲き實なる桃花なるが。今この御代に至り花咲く事。ただこの君の御威徳なれば。仰ぎて捧げ參らせ候

ワキ「そも三千年に花咲くとは。いかさまこれは聞き及びし。その西王母の園の桃か

シテ「なかなかにそれとも今はもの言はじ

を出て、春のかざしに供へるといふ意。「かざし」は四季折々の花を手折つて、冠又は髪に挿して飾りとすること。

○すめらぎ—天子。

○隙行く駒—莊子に「人生天地之間、若白駒之過隙」とあり、時間の極めて短い喩に用ゐられる語であるが、こゝでは、君の惠みの隙間もなく行き渡る意に轉用した。

○法の道—駒の縁語「乘り」を法にいひかけた。君徳の廣大な喩に佛法を引いたのである。

○上もなき道—無上道、佛の悟りをいふ。觀無量壽經に「我建超世願、必至無上道」

○靈山會場—釋迦が妙法華を說いた靈鷲山の衆會をいふ。

○廣き教への誠ある—釋迦說法の廣い教への如く誠ある君である。

○君君たれば—君が賢君であるから。「論語」に「君君、臣臣」

【三】

○西王母—支那傳說の仙女。委しくは解說にいふ。

わが大君の御惠みは普く隙間もなく行き渡つてゐて、これを例へれば、佛法が遠く千里の外までも弘布して、明かな悟りの道に入ることが出來るやうになつた、かの靈鷲山上に於ける釋迦如來の御教、あの廣大な御教のやうに、わが君は御仁徳の高い君なのであるから、誰も彼も喜び勇んで、悅服してゐることだ。

（といつて宮殿に近づき、）

【三】

女「恐れながら奏上致したいことがございます。

王「奏上したいと申すのは、何者だ。

女「こゝに持つて參りましたものは、三千年に一度花が咲いて實がなると申す桃花でございますが、今わが君の大御代になつて、この花の咲きます事は、全くわが君の御威徳によるものと存ぜられ、まことにありがたい事に存じ、獻上致したいと思つて、持つて參つたのでございます」

王「一體三千年に一度咲く花といふのは……。なるほど、それは噂に聞いた西王母の園の桃であるのか。

女「はい、いえ、何の花であるとも今は物を言はない……。

○桃李もの言はず―和漢朗詠集菅三品の詩句「桃李不レ言春幾暮、煙霞無レ跡昔誰栖」を引いた。
○三千年になるてふ桃の―拾遺集凡河内躬恒の歌「三千年になるてふ桃の今年より花咲く春に逢ひにけるかな」を引いた。
○四方の惠み―四方に行き渡つた惠み。
○千々の種―國土の千代に榮える始めであるといふ意の千に對して百と同音の桃を出し、種に對して花を出した。

【四】
○久方の―天の枕詞。
○天つ少女―天女。西王母を指す。
○疑ひの心な置きそ――置き」は露の緣語。
○露の間に宿るか袖の―新古今集藤原雅經の歌「拂ひかねさこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに」の詞を借り「心な置きそ」を承けて「露」を出し「月の影」より「雲の上」と續けたのである。
○雲の上までその惠み―天子の廣大な仁德が天上の仙界にまで及んだといふ。

ワキ「さればこそそれぞ殊更名に負ふ花の
シテ「桃李もの言はず
ワキ「春いくばくの年月を
シテ「送り迎へて
ワキ「この春は
地上歌「三千年に、なるてふ桃の今年より（ツレ笛座の上へ行きて坐す）。なるてふ桃の今年より。花咲く春に逢ふことも。唯これ君の四方の惠み。あつき國土の千々の種桃花の色ぞ妙なる

シテ仕手柱際へ行き桃枝を後見に渡して扇を手に持つ。

【四】
地ロンギ「さては不思議や久方の。天つ少女のまのあたり。姿を見るぞ不思議なる
シテ「疑ひの。心な置きそ露の間に。宿るか袖の月の影。雲の上までその惠み（上を見）。あまねき色にうつり來ぬ（ワキへ開き）

王「うむ、『物言はぬ花』――やはりさうであつた。それこそ殊に有名な花で……」
女「――『桃李は物を言はないで、幾年かの春が過ぎ去つた』と、詩に詠まれましたやうに、永い年月を花も咲かないで過して來ましたが、今年の春は――
『三千年になるてふ桃の今年より、花咲く春に逢ひにけるかな』
と詠まれましたやうに、三千年目の花の咲き出でましたのも、全くわが君の四方に行き渡つた御惠みの厚い結果でありまして、この國土の千代に榮える始めとして、このやうにめでたい桃の花が咲いたのでございます」

といつて王に桃の枝を捧げる。

【四】
王「さては、實に不思議な、天女の姿を目前に見たのであるか、實に不思議なことだ」
女「決してお疑ひになることはございません。わが君の廣大な御仁德が、月の照る天上界へまで行き及びましたので、そのありがたさに天下つてきたのです。

地『うつろふものは世の中の。人の心の花ならぬ

（角へ行き）

シテ 身は天上の（左へ廻りて正面へ出で）

地「樂しみに。明けぬ暮れぬと送り迎ふ年は經れど限りもなき。身の程も隔てなく。眞はわれこそ西王母の（ワキへ開き）。分身よまづ歸りて花の實をもあらはさんと。天にぞ上りける天にぞ上り給ひける

と常座にて正面にひらき靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。

私は人間界ならぬ天上の者で、明け暮れ樂しみの中に月日を送り迎へて、いかほど年月がたつても、壽命の盡きることのない、老幼の差別もないもので、實は私が西王母の化現たのです。一まづ歸つて、眞の天女の姿を現し、桃の實をも捧げませう」

といつて、天上に上つておしまひになつた。

○うつろふものは—「うつり」の音を重ねて、古今集小野小町の歌「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」を引き「身」の序詞とした。

○身は—花ならぬ實を身にいひかけ、上の句を身の序詞としたのである。

○明けぬ暮れぬ—續後撰集藤原經家の歌「何となく明けぬ暮れぬとさすらへてさもいたづらに行く月日かな」を借りた。

○限りもなき身の程も—壽命が無限で、老幼の差別がない。

○分身—化現。

○花の實—實に身（美しい天女の眞の姿）をいひかけた。

【間】

【間】 前の狂言官人また名乘座へ出で、

狂言「扨も扨もめでたき御事かな。君この殿へ行幸あつて。御遊さまぐある所に。女性一人參內されこ。いかにも見事なる桃の花を持ちて參り。君に捧げものと申し上ぐる。その子細は。三千年に一度片枝に花咲き片枝に實なる西王母の園の桃。この春に當り花咲き實なり候間。まづ花を捧げ申すない。重ねて桃の實を捧げ申さんとの御事なり。總じてこの桃を一つ服すれば。三千年の齡を保つといへり。東方朔は三つまで服せられ九千歲保たるゝ。この君も服し給はば御壽命は三千歲。又その內にこの桃出來すべし。然れば萬々歲の御壽命疑ひなく候。誠に我等如きの者までも。かの桃を見たる分にても。壽命は永く保つべきと存じ候。さればば王母の參內をたゞは何とて御待ちあるべき

○いさめん—勵まさう。浮き立たせよう。

【五】

○絲竹呂律—高低さまざまの音樂。絲は絃樂、竹は管樂、呂は低い樂音、律は高い樂音。

○雲の通ひ路心せよ—空吹く風よ、天女の通ふ雲路に氣をつけて、天女の姿を隠さないやうにせよといふ意。古今集僧正遍昭の歌「天つ風雲の通路吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめん」に據つたのである。

【六】

○天仙理王—天上仙界を理治する王といふ意であらう西王母を指す。

○迦陵頻伽—極樂に住むといふ聲の美しい鳥の名。

○袖の羽風—鳥の翼を衣の袖に見立て、又天の羽衣に見立てたのである。

ざらん舞樂を奏し彌〻王母の心をいさめん爲。孔雀鳳凰迦陵頻伽三足の青鳥までも勇み悦び。参内申すやうにとの御事なり。管絃の役者はとうとう参られ候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【五】

ツレ上歌（待謠）「絲竹呂律の聲々に。絲竹呂律の聲に。調めをなして音樂の。聲澄み渡る天つ風。雲の通ひ路、心せよ雲の通ひ路心せよ

【六】

下端の囃子にて、後ジテ西王母、面増・鬘・鬘帯・鳳凰天冠・襟白赤・着附摺箔・紫舞衣・緋大口・腰帯・扇・太刀の装束、後ヅレ侍女、面連面・鬘・鬘帯・襟赤・着附摺箔・唐織着流・側次・扇の装束にて桃實を盤に盛りて持ちて橋懸に出で、シテ一の松、ツレ三の松に立ち、

地「面白や。面白や。かかる天仙理王の。來臨なればば數々の（シテ常座ツレ一の松へ出で）。孔雀鳳凰迦陵頻伽（シテ右の方を見廻し）。飛び廻り聲々に（正面を見渡し）。立ち舞ふや袖の羽風天つ空の衣ならん天の衣なるらん

後ジテ「色々の捧げもの（とワキへ向き）

【五】

「管絃を或は高く或は低く、美しい調にととのへて奏する聲が、空に澄み渡つて聞える。どうぞ空吹く風も、天女の天降る雲路に氣をつけて、天女の姿を隠さないやうにしてくれい」

○西王母の天降るのを待つてゐる。

【六】

後ジテ西王母、後ヅレ侍女に桃實を盤に盛つて持たせて登場。

「誠に面白いことである。このやうな天上仙界の王たる西王母が來臨せられるのであるから、孔雀、鳳凰、迦陵頻伽など、數多のめでたい鳥が、美しい聲で鳴きながら空に飛びまわり、たち舞ふ様は、實に面白いことで、あの鳥の翼がそのまゝ天羽衣のやうである。」

○西王母は王に向け、

王「色々の物を捧げます」

地「色々の捧げものの中に妙に見えたるは西王母のその姿（角へ行き右へ廻り）光庭宇をかかやかし。紅錦の御衣を着し（眞中へ出で）

シテ「剱を腰に提げ（と太刀を見

地「剱を腰に提げ。晨纓の冠を着（扇にて頭をさし）、玉觴に盛れる桃を侍女が手より取りかはし

（と仕手柱際へ行きてツレより桃實の盤を受取り、（ツレは盤をシテに渡して地謡座前へ行きて下に居る）

シテ「君に捧ぐる桃實の

（とワキの前へ行き下に居て盤を一畳臺の上に置き、

地「花の盃。とりあへず（と立ちて仕手柱際へ出で）

［中舞］

（を舞ひ、なほ次の謡に合せて舞ふ。

【七】

地「花も醉へるや盃の。花も醉へるや盃の。手まづ遮る曲水の宴かや御溝の水に。戯れ戯るる。手弱女の。袖も裳裾もたなびきたなびく。雲の

といつて、色々の捧げ物をするその中で、殊に勝れて立派に見えたのは、西王母自身の姿で、その光は禁庭に輝き渡り、身には紅錦の御衣を着、腰には劔をさげ、頭には晨纓の冠を着て、玉盤に盛つた桃を侍女の手から受取つて

王母「これがわが君に捧げる桃でございます」

と王に渡して、

花を浮かべた盃で、酒宴が催されるや、類ひもない樂しさに、はや、醉ひもまわつて、

［中舞］

西王母が舞を舞ひ、

【七】

かくて、人も醉へば、花も醉ふばかりの酒宴は、これこそ曲水の宴そのまゝで、美しい女性が袖も裳裾も靡して、禁庭の御溝に戯れ舞ふうちに、やがて、かの孔雀、鳳凰などの鳥が春風にそよ

○庭宇—皇庭。禁庭を指した。

○晨纓の冠—鷹の羽で飾つた冠。武帝内傳に「西王母戴二太眞晨嬰之冠一」

○玉觴—玉の盃。こゝでは玉盤の意。

○花の盃—花を浮べて飲む盃。夫木抄藤原爲家が曲水宴を詠んだ歌に「めぐりくる三月も久し三千年になるてふ桃の花の盃」とあるを引いた。

○とりあへず—盃を取るや直ちにといふ意。

【七】○手まづ遮る—和漢朗詠集菅原雅規曲水宴を詠んだ詩句「巖レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」を引いた。

○曲水の宴—昔三月上巳の日、流水のそばで、詩を作り酒を飲んだ宴。

○御溝—禁庭を流れる川。

○手弱女—やさしい女。

○雲の花鳥—雲に花鳥の模

様を織つた衣をいふ。それを孔雀などの鳥にいひかけて、雲路にうつると續けた。

花鳥。春風に和しつつ雲路に移れば王母も伴ひ攀ぢ上る。王母も伴ひ上るや天路の。行方も知らずぞ。なりにける

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

そよと送られて、空に上つて行くと、西王母も一所に天上に上つて行つて、行方も知れず見えなくなつてしまつた。

〔考異〕

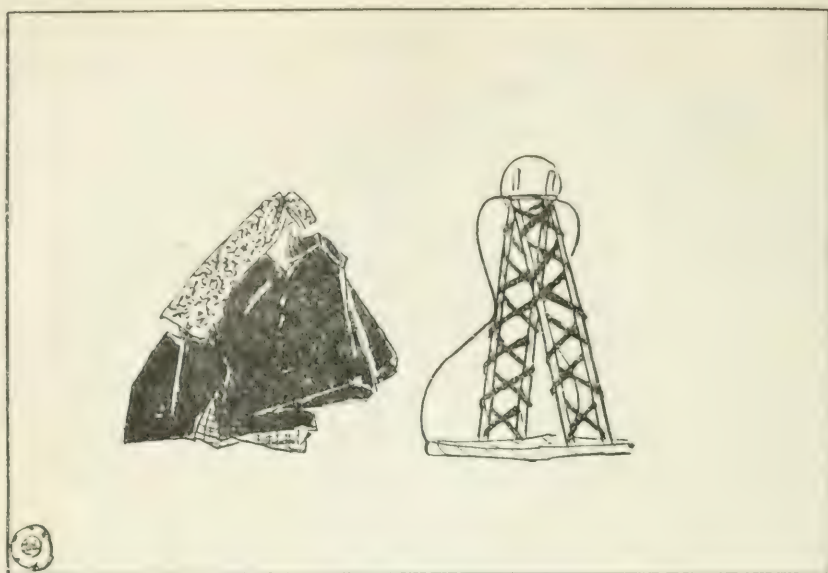
諸流（五流）

【五】ワキ「（下懸これは不思議の事なりと。その西王母の眞の姿を。もしや顯し給ふぞと）絲竹呂律の聲々に……

古諸本（光悦本）

【六】地「面白や……來臨なれば數々の（光に）孔雀……

昭君 観（寶春剛喜）

解説

【能柄】 五番目　夢幻的劇能

【人物】 **ワキ** かうほの里人、**前シテ** 昭君の父白桃、**ツレ**(**前後**) 同母王母、**狂言** 所の者、**後子方** 王昭君の幽靈、**後シテ** 呼韓邪單于の靈

【所】 支那　かうほの里

【時】 前漢　（三月又は十月）

【異稱】 「照君」とも書く。「王昭君」ともいつた。

【作者】 能本作者註文に世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に、

かの昭君の黛は、翠の色に匂ひしも、春やくるらん絲柳の、の文字、柳にて切りて、の思ひ亂るゝといふべし。

といつてゐるのは、本曲についての注意であらう。金春禪竹の歌舞髓腦記にも、「王照君」を閑花風、幽體として擧げ、

山人の折袖にほふきくの露、うちはらふにも千世はへぬべし、

又此こゝろ

みちのへの野はらの柳もえにけり、あはれむかしのけぶりくらべや

此風姿、殊に祖父曲の一流を殘す、一姿一言一踏の妙所あり。

と記してゐる。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十四日、中樂談儀の後人加筆に、永正十一年十月廿八日本曲を演じたこと、言經卿記に文祿四年三月廿九日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】支那漢王の時、胡國と和平を結ぶ爲に、三千人の寵姬の中から、繪姿の最も劣つたものが、胡國の王呼韓邪單于に贈られることとなり、王昭君がその選に當つて、胡に赴いたので、その親白桃・王母は歎いて、形見の柳の木を鏡に映して、娘の幻を待つてゐると、王昭君と單于の亡靈が現れた。二人の中、單于の靈は鬼のやうな恐ろしい姿であつたので、鏡に映る自分の姿に愧ぢて立ち歸り、德の高い昭君は妙なる姿を示した。

【出典】この事は後漢書漢元帝の條に見え、わが文藝では今昔物語卷十「漢元帝后王照君行二胡國一語」に、

今は昔、震旦の漢の元帝の代に、……胡國の者共都に參たる事有けり。此れは夷の樣なる者共也けり。……一人の賢き大臣有て、此の事を思得て申ける樣「此の胡國の者共の來れるは、國の爲に極て不ㇾ宜ぬ事也。然れば構へて此等を本國に返し遣む事は、此の宮の內に徒に多く有る女の形劣れらむを一人彼の胡國の者に可ㇾ給き也。然らば定めて喜むで返なむ。更に此れに過たる事不ㇾ有じ」と。天皇此の事を聞給て、然もと思給ければ、自ら此等を見て、其の人をと定め可ㇾ給けれども、此の女人共の多かれば、思ひ煩ひ給ふに、思ひ得給ふ樣、數の繪師を召て、此の女人共を見せて、其の形を繪に令ㇾ書めて、其れを見て、劣れらむを胡國の者に與へむと思ひ得給て、繪師共を召て、彼の女人共を見せて、其の形共を繪に書て持參れと仰せ給ければ、繪師共此れを書けるに、此の女人共夷の具と成て遙に不ㇾ知ぬ國へ行なむずる事を歎き悲て、各我も我もと、繪師に或は金銀を與へ或は餘の諸の財を施ければ、繪師共此れに耽て、醜形をも吉く書成して持參たりければ、其の中に王照君と云ふ女人有り。形美麗なる事餘の女に勝たりければ、王照君は我が形の美なるを憑て、繪師に財を不ㇾ與ざりければ、本の形の如くにも不ㇾ書ずして糸と賤氣に書て持て參りければ、此の人を可ㇾ給べしと被ㇾ定にけり。天皇怪び思給て、召て此れを見給ふに、王照君光を放つが如くに實に微妙し、此れは玉の如く也、餘の女人は皆土の如く也ければ、天皇驚き給て、此れを夷に給はむ事を歎き給ける程に、日來を經けるに、夷は王照君をなむ可ㇾ給きと自然ら聞て、宮に參て、其の由を申ければ、亦改め被ㇾ定る事無くて、遂に王照君を胡國の者に給てければ、王照君を馬に乘せて胡國へ將行にけり。王照君泣き悲むと

云へとも更に甲斐無かりけり。亦天皇も王昭君を戀ひ悲み給て、思ひの餘りに、彼の王昭君が居たりける所に行て見給ければ、春の柳風に靡き鶯徒々に鳴き、秋は木の葉庭に積りて檐の(しのぶ)隙無くて、物哀なる事云はむ方無かりければ、彌よ戀ひ悲び給けり。彼の胡國の人は王昭君を給はりて喜むで、琵琶を彈き諸の樂を調てぞ將行ける。

とあり、倭漢朗詠抄上卷にも略これと同様のことを記し、唐物語・曾我物語卷二にもその大要を記してゐる。本曲は多分今昔物語に據つたものであらう。

【評】本曲のやうな夢幻的劇作法がワキの實在人とシテの亡靈とを劇的に密接に關係せしめた曲には、脚色に無理があつて失敗に終つたもの多いのであるが、本曲はワキを劇的地位の輕い里人として、前ジテの實在人と後ジテの亡靈とを劇的に結びつける方法をとつた。即ち前ジテ白桃がわが子を追懷してゐると、後ジテ白桃の娘昭君の亡靈が現れるといふ方法で、この關係は極めて自然に滑らかに出來てゐる。殊に前段の父母が亡子を追懷するに當つて、恐らくは今昔物語の「春の柳風に靡き」の句に暗示を得て、形見の柳を出し、更に鏡をかけてその影を映させようとしたこと、後段に美しい昭君の外に鬼のやうな恐ろしい單于の靈を出して、兩者を對照せしめたことなど尋常の手法とはいはれない。たゞ實在人である前ジテを中入させて、亡靈の後ジテと替らせてゐることは、複式能のシテが前後同一人であるといふ一般の通則に反してゐる爲に、たとへ前ヅレの王母を後段まで居殘してゐるとはいへ、老父の前ジテだけを退場させて、母の前ヅレを殘した爲に、一層奇異な感を起させてゐる。これは、シテ、ツレ、ワキといふ役割の型に自由な内容を盛らうとして失敗した好例であらう。

前段

【一】(舞臺は唐土かうほの里。ワキかうほの里人登場。)里人「私は支那のかうほの里に住んでゐる者です。さてこの所に白桃と王母といふ夫婦の者が居りますが、一人の娘を持つて、その名を昭君と呼んでゐました。やがて帝に召されて、この上もない御寵愛

【一】名乘笛にて、ワキ里人、着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出て、

ワキ「これは唐土かうほの里に住居する者にて候。さてもこの所に白桃王母と申す夫婦の候が。一人の息女を持つ。その名を昭君と名づく。帝

【一】○かうほの里—分らない。或は謠曲作者の假作か。○白桃王母—白桃が父、王母が母。但し諸書に王昭君は齊國王穰の女とあり、白桃王母としたのは、謠曲作者の假作であらう。○昭君—字は嬙(又は牆に作る)。前漢の元帝の宮女で、

匈奴に賜られ、呼韓邪單于の妻となつた。委しくは解說にいふ。
○胡國―支那北方の蕃國、匈奴をいふ。

【二】

○散りかかる花の―拾遺集紀貫之の歌「櫻散る木の下風は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける」を借り、王昭君の身上を散りかゝる花に喩へて歎くのである。

に召されて御寵愛限りなかりし處に。さる子細あつて胡國へ遷されて候。夫婦の人の歎きただ世の常ならず。近所の事にて候程に。立ち越え訪はばやと思ひ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ白桃、面阿古父尉・尉髮・襟淺黃・着附小格子・茶緋水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ王母、面姥・姥髮・鬘帶・襟朽葉色・着附摺箔・淺黃縷水衣・無色唐織着流の裝束にて二人とも箒を持ちて橋懸に出で、ツレは一の松に、シテは三の松に立ちて向合ひ、

（シテ ツレ）一聲〽散りかかる。花の木蔭に立ち寄れば。空に知られぬ。雪ぞ降る

といひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、正面に向き、

シテ〽サシ これは唐土かうほの里に住居する。（シテ ツレ 向合ひ）〽白桃王母と申す。夫婦の者にて候なり（と正面に向き）

ツレ〽かほどに賤しき身なれども。美名をあらは

を戴いてゐましたが、ある事情があつて、胡國へ送られたので、夫婦の者は非常に歎き悲しんでゐるのです。私はその近所のことですから、これから行つて見舞つてやらうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の概略を述べ、白桃の宅へ行く態。

【二】

橋懸は白桃の宅の態で、シテ白桃、ツレ王母登場。

（夫婦）散りかゝる花の木蔭に立ち寄ると、落花が散り亂れて、空では知らない、木から降る雪のやうだ。いや木の花よりも、わが子があのやうに散り果てはしたいかと案じられることだ―

と、まづ夫婦の心持を述べ、

（白桃）私どもは支那のかうほの里に住む、白桃・王母と申す夫婦の者です」

と見物人に自己紹介をし、

（王母）私どもはこのやうに賤しい身ではあ

○娘―同行會本には「息女」とある。○帝都に召され―帝に召されたことをいふ。○明妃―古今樂録に「王明君、本名昭君、以觸文帝諱、故晉人謂之明君」○いみじき身―勝れて榮花な身の上。○前世の宿縁―前世の[illegible]宿縁。○漢宮萬里の外―和漢朗詠集大江朝綱の王昭君を詠んだ詩句「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸」を引いた。○供奉の官人―王昭君を迎へて歸る胡國の官吏をいふ。この事今昔物語に出てゐる。○絃管―管絃に同じ。○この時より―馬上に琵琶を彈くことがこの時に始まるといふのは、謠曲作者の獨斷であらう。○畫圖にうつせる面影―畫に描いた王昭君の姿は、實物よりも遙かに醜いものであつたが、今は悲歎の爲め、その繪姿のやうにやつれてゐるであらうとの意。○綠の色に―黛に[illegible]いふ。―和漢朗詠集白樂天の詩句に「昭君村柳翠於眉」○春や繰るらん―柳の[illegible]春を出し、春の[illegible]

す娘あり。シテ〔向合ひて〕昭君とかれを名づけつつ。容顏人に勝れたり。されば帝都に召されて後。明妃とその名を改めて。天子に見えおはします〔と正面に向きて〕

シテ「かほどいみじき身なれども。猶も前世の宿縁。離れやらざる故やらん。ツレ〔向合ひて〕諸人の中に選はれて。胡國の民に遷され。漢宮萬里の外にして。見馴れぬ方の旅の空。思ひやるこそ悲しけれ〔としをりて正面に向きて〕

シテ「されども供奉の官人ども。旅行の道の慰めに。絃管の數を奏しつつ。ツレ〔向合ひて〕馬上に琵琶を彈く事もこの時よりと聞くものを

下歌「畫圖にうつせる面影も今こそ思ひ知られたれ〔としをり〕。上歌「かの昭君の黛は。かの昭君の黛は。綠の色に匂ひしも。春や繰るらん絲柳

りますが、美人として名高い娘を持つて育てゝゐましたが、容色が世に勝れて美しかつたので、都に召し出され、その後名を明妃と改めて、帝のお側にお仕へするやうになつたのです」

白桃「そのやうな仕合な身上とになつたが、やはり前世の宿業が拙かつた爲か、多くの女官の中から特にこの子が選び出されて、胡國に送られることとなり、都から萬里を距つた遠い所へ、馴れぬ旅をした、そのつらさを思ひやると、ほんとに悲しいことだ。——」

それでも、御供の役人達に旅のつらさを慰める爲に色々の音樂を奏し、かの馬上で琵琶を彈く事も、この時から始まつたのだといふことだが、それにしてもさぞ苦しかつたであらうと、あの畫に描いた醜い姿が、この時こそほんとの姿通りであつたゞらうと察せられるのだ。あの昭君の顏ばせには、柳の絲のやうに美しかつたものをと思ふと、私どもはたゞ悲しみに思ひ亂れるの外にはないのだ。でも致し

の思ひ亂るる折ごとに。風もろともに立ち寄りて木蔭の塵を拂はん木蔭の塵を拂はん

（二人とも正面に向き、）

【三】シテ『いざいざ庭を淸めんと。おほぢは箒を携へたり

ツレ『げにや心も昔の春。老の姿もささがにの。いと苦しとは思へども。風結ぶ涙の袖の玉だすき。かかる思ひも子故なり

シテ『ただ世の常の賤の男と。人もや見るらん恥かしや

ツレ『日は山の端に入相の（と西の方を見）

シテ「かねて知らする夕嵐

ツレ『袖寒しとは思へども

シテ『子の爲なれば（ツレと向合ひ）

ツレ『寒からず

方がない、あの柳の枝を亂す風と一緒に、木蔭へ行つて塵を掃除しよう」

（と夫婦で愚痴をいひながら、舞臺に入る。舞臺は庭前の態である。）

【三】白桃「さあ、庭を掃除しよう」と、白桃は箒を手に持つ。

王母「ほんに、心の樂しかつたのは遠い昔のことで、今は悲しみに姿まで老い朽ちて、ほんとに心苦しいことですが、このやうに涙に濡れ暮らすのも、子を思へばこそです」

白桃「それだのに、かうして庭掃きをしてゐると、人はたゞ世間並の賤しい男と思ふことだらう。恥かしいことだ」

王母「おやはや日は山の端に入つて、入相の鐘が響きます」

白桃「さうだ、悲しみを知らせるやうに夕嵐が吹くわ」

王母「夕風でうすら寒くは思ひますが……」

白桃「わが子の爲と思へば……」

王母「寒いとも思はれません」

（とあたりを見て、）

、繰る、にいひかけ、絲柳を呼び出した。〇思ひ亂るる—絲柳が風に吹き亂れる意を、悲しみに心の亂れる意にいひかけた。〇風もろともに—風が吹き掃ふやうに、自分も風と一緒に塵を拂はうとの意。

【三】〇おほぢ—祖父。老人の意。〇心も昔の春—心の若やかであつたのは、既に遠い昔のことで。新後撰集藤原基忠の歌に「あはれにも昔の春のおもかげを身さへ老木の花に見るかな」〇ささがにの—蜘蛛の枕詞を蜘蛛の意に用ゐ、蜘蛛の、絲、をいと苦しにいひかけた。〇風結ぶ涙の袖の—風が袖に結ぶ涙の露の玉といふ意で、袖の玉、玉襷、襷かゝる、かゝる思ひといひつゞけた。〇入相の—日は山の端に、入り、を入相に、入相の、鐘、をかねてにいひかけた。

拂ひもあへぬ―塵を拂ふ露を拂ふとを兼ねていふ。

袖に宿さん―落葉を袖に宿すと涙を袖に宿すとを兼ねた。

○それかと見ればさもあらで―袖の涙の露に宿る月影を見て、わが子の面影がうつるかと、よく見れば、涙の散り落ちるとともに月影も砕けてしまつて、わが子の面影は見られない。

○小篠の上の玉霰―露に對して霰を出した。小篠の上に落ちる霰の音も、老の耳にははつきりと聞えない。まして遠い所にゐるわが子の便りは、一向に分らないといふ意

【四】

二人次第「落葉の積る木蔭にや嵐も、塵となりぬらん（二人掃く形をし）

地「落葉の積る木蔭にや、落葉の積る、木蔭にや嵐も、塵となりぬらん（と上を見）

地上歌「げに世の中に憂き事の。げに世の中に憂き事の。心にかかる塵の身は。拂ひもあへぬ袖の露。涙の數や積るらん（と袖を見こしをり）風に散り（下を見）。水には浮かむ落葉をも（下を見）しばし袖に宿さん（と面伏せ）下歌「涙の露の月の影。涙の露の月の影。それかと見ればさもあらで。小篠の上の玉霰音もさだかに聞えず

涙の露の月の影」とシテ・ツレ入替り、二人とも箒をすて、ツレは脇正面に、シテは眞中に竝びて下に居り、

シテ「あまりに苦しう候程に。休まばやと思ひ候

【四】

ワキ立ちて、

ワキ「いかにこの家の内に白桃の渡り候か

夫婦「おゝ、このやうに落葉の積つた木蔭では、塵を吹き寄せる嵐までが塵となつてしまふであらう。――

ほんとに、世の中の情ない事ばかり氣になる自分達は、袖にかゝる塵さへ拂ふ元氣がなく、たゞ袖を濡らす涙が愈〻積もるばかりだ。さうだ、風に散る落葉、水に浮かぶ落葉、まゝよ、暫らく積もるに任かせて置かう。

かうして泣く涙の露に月影が宿るから、わが子の面影も宿るかと思へば、それどころか、涙に宿つた月影までが消えてしまふ。小篠の上をうつ玉霰の音、それさへ老の耳には聞えにくいのだから、遠い娘の便りなどは一向に聞えて來たいのだ」

さう歎き、

白桃「あまり苦しいから、少し休みませう」

と夫婦は休息の態。

【四】

ワキ里人は白桃の宅へ來た態で、

里人「もうし、この家のうちに白桃はお出でですか」

（御訪ひ　御見舞）

シテ「誰にて御入り候ぞ

ワキ「いや某が參りて候

シテ「こなたへ御出で候へ

ワキ下に居て、

ワキ「いかに申し候。さても昭君の御事御心中察し申して候

シテ「御訪ひありがたう候

ワキ「また申すべき事の候。この柳の木の下を立ち去らずして淸め給ふは。何と申したる御事にて候ぞ

シテ「昭君胡國へ遷されし時。この柳を植ゑ置き。われ胡國にて空しくならば。この柳も枯れうずると申しつるが。（正面を見て）御覽候へはや片枝の枯れて候（としをる）

ワキ『げにげに御歎き尤もにて候。さてさて昭君

白桃「どなたです」

里人「いや私が來たのです」

白桃「こちらへお入り下さい」

里人は中へ入つた態で、

里人「何は兎もあれ、昭君の御事でさぞお歎きの事と、御心中をお察しします」

白桃「お見舞下さつて、ありがたう」

里人「一寸お尋ねしますが、あなた方が始終この柳の樹蔭にゐて掃除して居られるのは、どういふわけなのです」

白桃「昭君か胡國に遣られた時に、この柳の木を植ゑて置いて、私が胡國で死んだならば、この柳も枯れませうと申しましたが、御覽下さい、もはや片枝が枯れたのです」

里人「なるほど、お歎きも御尤もです。と

○天下を治めし始めなり—漢國と胡國との戰亂を治め國家をとゝのへて、天下を太平にする動機となつた。その事情は次に述べてゐる。○こはうして—闘强であつて。
○從ふ事—これを平定すること。
○漢王—漢の元帝。
○好色高位の姿—容貌の美しくて氣品の高い姿といふ意。同行會本には「紅色紅衣」の字をあて、花やかな美しい姿といふ意に解してゐる。
○賢聖の障子—わが國の內裏紫宸殿にある襖障子の名これを支那の故事のやうに取扱したのである。委しくは圖記に揭げる。
○似せ繪—似顔肖像。賢聖障子の例に似せてを「似せ繪」にいひかけたのである。
○中に劣れる樣—三千人の中で最も容色の劣つたものがあれば、

は何しに胡國へは遷され給ひ候ぞ
シテクリ『さても昭君胡國に遷されし。その古を尋ぬるに
地『天下を治めし。始めなり
シテサシ『然れば胡國の軍こはうして。從ふ事期しがたし
地『されば左に和睦して。そのしるし一つなからんやとて。美人を一人遣はすべき御約束のありしに
（居クセ）
地クセ『そも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。いづれをわくる方もなし。諸々の宮女の。好色高位の姿を。賢聖の障子に似せ繪にこれをあらはし。中に劣れる樣あらば。則ちかれを選みて。胡王の爲に遣はし。天下の運を鎭めんと。綸言なら

ころで、昭君はどうして胡國へお送られになつたのです」
自樵「そのことですが、昭君が胡國に送られるやうになつたそのもとは、天下を太平にする爲なのです。と申すのは、これまで胡國の軍が強くて、到底これを服從させる見込がありません。それで、わが國と胡國と和睦することとなつたのですが、何かその證がなければならないといふので、美人を一人お遣はしになる御約束が出來たのです。——

さて、漢王の仰せには、三千人の宮女皆寵愛してゐるのであつて、誰を嫌してよいと、分け距てをすることが出來ない。それで、すべての宮女の美しい氣高い姿を賢聖の障子のやうに似顔を描かせて、その中で見劣りのする姿があつたならば、それを選び出して胡王に遣はし、それによつて天下を平和にしようと、かう仰せ

せ給へば。數々の宮女達。これを如何にと悲しみ。繪かける人を語らひ。皆賂を贈りつつ。御約束のありし故

シテ「されば寫せるその姿

地、いづれを見るも妙にして。柳髮風にたをやかに。桃顏露を含んで色猶深き姿なり。中にも昭君は。竝ぶ方なき美人にて。帝の覺えたりしなり。それを賴める故やらんただうち解けてありしに。畫圖に寫せる面影の。あまり賤しく見えしかば。さこそは寵愛。甚しと申せども。君子に私の。言葉なしとや思しけん。力なくして昭君を胡國に送り遣はさる

（後見この間に鏡臺を仕手柱際に持ち出す）

【五】

シテ「昔桃葉といひし人。仙女と契り淺からざりしに。仙女空しくなりて後。桃の花を鏡に映せ

になつたので、多くの宮女達は、これは困つたことだと悲しんで、繪を描く人に賴み込んで、皆賄賂を贈つて、美しく描いて貰ふやうに約束せられたので、それで描きあげた繪姿は、どれを見ても皆立派なもので、その髮は風になぶられる柳の、やうにしなやかで、その顏は露を含んだ桃のやうに風情があつて、いかにも勝れて美しい姿であつたのです。これら多くの宮女の中でも、昭君は竝ぶ者もない美人で、帝も深く御寵愛遊ばされたのです。ところが、昭君はこれを賴みにした爲か、この事を氣にもかけず、油斷して、繪師にも賴まないでゐますと、繪に描かれた姿が餘りに見憎かつたので、帝も深く御寵愛遊ばしてお出でになつたのではあるが、『君子の詞に私なし』今更取消すことも出來ないと思し召したものと見え、是非なく昭君を胡國へお送りになつたのです」

（歌つて、王母に向ひ、）

【五】

白桃「昔桃葉といつた人は仙女と深い契りを結んだが、仙女の亡くなつた後、桃の花を鏡に映すと、仙女の姿が見えたといふ

○語らひ—說き入れること畫師に賴み込んで。

○御約束—美しい姿に描くやうに宮女達と畫師との間に約束があつた。

○柳髮風にたをやかに—髮は風になぶられる柳の絲のやうにしなやかであり、顏は露に濡れた桃の花のやうに美しい。

○覺え—寵愛。

○それを賴める—自分の美貌を恃みにする。

○うち解けて—心にかけず油斷して。

○君子に私の言葉なし—史記、晉世家に「史佚曰、天子無二戲言一」

【五】

○桃葉—この故事の出所は分らない。

○いざさせ給へ―「さあ、かうしなさい」と、ある動作を勸める詞。
○しんやう―分らない。
○ます鏡―眞澄鏡、明らかな鏡。
○とけつ―分らない。
○年を經て花の鏡となる水は―古今集伊勢の歌「年を經て花の鏡となる水は散りかゝるをや曇るといふらむ」を引き、戀しい人の姿の鏡に映つたのは昔の話で今は戀しい思ひの爲に、鏡は愈〻曇るであらうといふ意に轉じ用ゐた。
○いとどます鏡―思ひはいとど增すを眞澄にいひかけた。

ば、則ち仙女の姿見えけるとなり。この柳もさながら昭君の姿、（ツレへ向き）いざさせ給へ鏡に映して影を見ん

とシテ、ツレ二人立ち、

ツレ「それは仙女の姿なり。いかでこれには喩ふべき

シテ「いやそれのみならず鏡には。戀しき人の映るなり

ツレ「夢の姿を映ししは

シテ「しんやうが持ちします鏡

ツレ「古里を鏡に映ししは

シテ「とけつといひし旅人なり

ツレ「それは昔に年を經て

シテ「花の鏡となる水は

地「散りかかる花や曇るらん思ひはいとどます

ことだ。この柳も全く昭君の形見だから、さあ鏡を出して、昭君の姿を鏡に映して見よう」

王母「鏡に映つたのは仙女の姿です。それとこれと同じに見ることは出來ません」

白桃「いや仙女だけではない、鏡には戀しい人の影の映るものなのだ」

王母「さういへば、夢の姿を映したのは……」

白桃「しんやうの持つた眞澄鏡であつた」

王母「故鄕を鏡に映しましたのは……」

白桃「とけつといつた旅人であつた」

王母「しかし、それらはずつと古い昔の話で……」

白桃「さうだ、今は散りかゝる花を見ても、

鏡。もしも姿を見るやと。鏡に向つて泣きゐたり鏡に向つて泣きゐたり

「散りかかる花や」とツレ地謠座前に行きて下に居り、シテは鏡臺を正面先に持ち出して置き「もしも姿を見るや」と鏡を見てたら〳〵と下り下に居てしをる。

昭君の身上が案ぜられて、悲しい思ひに鏡も曇るばかりだが、もしや姿の見えることがあるかも知れない」と、夫婦は鏡に向つて泣いてゐた。

【間】

ワキ「いかに誰かある

狂言所の者、肩附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にてワキの前に出で、

狂言「御前に候

ワキ「老人を内へ伴ひ候へ

狂言「畏つて候

といひてシテを後よりかゝへて、

狂言「さらば御立ち候へ

と橋懸へ連れ行きながら、

狂言「さても昭君の御事方々の歎き。心中のほど察し申し候さりながら。我等も共に力を添へ丹誠して清め候間。柳の枯れ果つることもなく候程に。まづ〳〵心を靜めゆるりと御くつろぎ候へや

シテ靜かに幕に入る。(ツレは居殘る)狂言見送りて名乘座へ歸り、

狂言「さても〳〵憐れなる御事かな。夫婦の歎き悲しみ候その子細と申すは。遠くの夷との戰にて、まづ漢家の憂へを歎かはしく思し召され。謀をめぐらし一人の美人の胡國へ移され。緣を結ばせ民の憂へを救はんとの御事なれば。夷の喜び斜ならず。然れば三千人の官女達いづれも御寵愛とは申せども。いかにも勝れたる美人を惜しませ給ひ。中に劣れるさまあらば。かれを選みて遣はさるべきと

【間】

◎この間語、和泉流に據る

○丹誠して—心を盡し骨を折つて。

○漢家—漢國、支那。

○從類―一族、

【六】

〔圖書〕円行寺本には「圖書」とある、

て。賢聖の障子に似せ繪に寫すべしと綸言ありしかば、あまたの宮女達これを歎き。密かに畫師に賄賂を遣はされ色々御約束ありしかば。その姿いづれも妙にして色深き樣なりし處に。昭君は後宮第一の美人。殊に帝の御覺えあるものを。さやうの事をも致さず候處に。昭君のうつし畫はさながら花山の摩者の如くにて。その樣賤しく見え候程に。帝これを叡覽あつて。この賤しき樣なるを胡國へ遣はせと綸言なされ候。その後帝昭君を召されしに。畫生の沙汰に任せつつ胡國に遣はし候と申ししかば。帝大に驚かせられ。畫生を召し捕へその從類を悉く刑罰に行はれ候。然ればかの昭君は遠く赴き候時。ここに名殘を御惜しみあり。卽ち柳を植ゑおかれ胡國に存命せばこの柳榮ふべし。もし又空しくなり候はば絲の柳も枯れぬべしと。かやうに誓ひて立ち去られ候處に。この程かの柳絲の色もたく見え候程に。夫婦の者これを歎き悲しみ。柳の木陰をも去らず丹誠して清め候由承り候間。我等も老人夫婦を痛はり申さばやと存じ候間。いづれもよくよくいたはり心を添へて給はり候へ。構へてその分心得候へ〳〵

といひて引く、

【六】

後子方昭君、天冠・色鉢卷・襟赤・箔附摺箔・紫長絹・緋大口・唐織壺折・扇の裝束にて橋懸一の松へ出で、

後子方「これは胡國に遷されし。王昭君の幽魂なり。さても父母別れを悲しみ。春の柳の木のもとに。泣き悲しみ給ふ痛はしさよ（トしをり）。急ぎ鏡に影を映し。父母に姿を見え申さん（ト舞臺に入り）

【六】　後段

後子方王昭君の靈、鏡に現れる心で登場。

昭君「私は胡國に遣られた王昭君の幽靈ですが、両親が私に別れたことを悲しんで、春の柳の木のもとで泣き悲しんでいらっしゃるのが、お氣の毒でたまりません。急いで鏡に影を映して、姿をお見せしませう。――

子方一聲「春の夜の。朧月夜にあらはれて

地「曇りながらも。影見えん

と脇座の前へ行き床几にかゝる。

【七】

早笛にて、後ジテ呼韓邪單于、面小癋見・黒頭・唐冠・黒鉢卷・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて舞臺へ驅け出で鏡に向ひ眞中に平座す。ツレ母これを見て、

ツレ『恐ろしや鬼とやいはん面影の。身の毛もよだつばかりなり。如何なる人にてましませば。鏡に映り給ふらん

後ジテ「これは胡國の夷の大將。呼韓邪單于が。幽靈なり

ツレ「胡國の夷は人間なり。今見る姿は人ならず。目には見ねども音に聞く。冥途の鬼か恐ろしや

子方「呼韓邪「單于も空しくなる。同じく昭君が父

地「母に。對面の爲に來りたり

春の夜の朧月夜を幸ひに、おぼろながらもこの姿をお見せしませう」

と鏡の前に立つ。

【七】

後ジテ呼韓邪單于の幽靈登場。ツレ王母その姿の鏡に映るのを見て、

王母「おゝ恐ろしい、鬼とでもいふのであらうか、あの姿を見ては、身の毛もよだつばかりだ。どういふお方なれば、このやうに鏡におうつりになるのでせう」

單于「自分は胡國の蕃人の大將の呼韓邪單于の幽靈だ」

王母「胡國の蕃人といつても、同じ人間たのに、今この鏡に見える姿は人間ではない、見たことはないが、噂に聞いた、地獄の鬼のやうだ。あゝ恐ろしい」

單于「呼韓邪單于も亡くなつたのだが、昭君と同じやうに、その兩親に對面しようと思つて來たのです」

【七】

○呼韓邪單于―胡國の王。王昭君を貰ひ受けた匈奴の主。

○冥途の鬼―地獄で罪人を呵責する獄卒をいふ。

○よしなかりける―来なくともよいものを無用な、
○心に知らぬ―自分には氣のつかない。
○氣疎い―もの凄い、恐ろしい。
○荆棘を戴く髪―いばらのやうに亂れ亂れてゐる髪。
○主を離れて―髪がからだに添はないで、逆立ちしてゐること。
○元結更にたまらねば―元結で髪を結ぶことも出來ないので。
○さねかづら―五味子又は南五味子といふ蔓草。
○耳には鎖―胡國の風俗である、耳飾りの金具を恐ろしげに鎖といつたのである。

ツレ「よしなかりける對面かな。姿を見るも恐ろしや

シテ「そも恐るべき謂れは如何に

ツレ「心に知らぬわが姿、鏡に寄りて見給へとよ

シテ「いでいで鏡に影を映さん（と立ち）。眞に氣疎き姿かと（兩袖を見）。鏡に立ち寄りよくよく見れば（と鏡を見）。恐れ給ふもあら道理や

（とたらたらと下り、これより詞に合せて仕科、）

地「荆棘を戴く髪筋は。荆棘を戴く髪筋は

シテ「主を離れて空に立ち

地「元結更にたまらねば

シテ「さねかづらにて結びさげ

地「耳には鎖を下げたれば

シテ「鬼神と見給ふ

王女「對面しようとは、それは御無用のことでした。姿を見ても恐ろしい」

單于「一體そのやうに恐ろしいといふわけは、どうしたことなのだ」

王女「御自分には自分の姿に氣がつかないのでせう。鏡に寄つて御覽なさい」

單于「では、鏡に姿を映して見よう。ほんとに恐ろしい姿かどうか」

と鏡に立ち寄つて、

單于「おゝ鏡に立ち寄つてよく見ると、これは恐れられるのも道理だ。いばらのやうに亂れた髮の毛は、からだには添はないで、逆立ちに生え、元結ではとても結ぶことが出來ないので、蔓草で結びさげ、耳にはまた鎖を下げてゐるので、鬼神と御覽になるのも尤もだ。おゝ恥かしい姿だ。鏡に寄り添うて、立つて見ても坐つて見ても、鬼とは見えるが、人間とは見えない、わが身ながらわが身とも思はれない。われながら恐ろしい顔つきだ、あゝ面目もないことだ」

といつて立ち歸つた。

地「姿も恥かし鏡に寄り添ひ立つても居ても。鬼とは見れども人とは見えず。その身かあらぬかわれならば。恐ろしかりける顔つきかな面目なしとて。立ち歸る

と大小前にて袖をかづき下に居る。

【八】

地（キリ）「ただ昭君の黛は（シテ立ち）。ただ昭君の黛は。柳の色に異ならず。罪をあらはす淨玻璃は（と鏡に向ひて開き）。それも隱れはよもあらじ。花かと見えて曇る日は（正面より左へ廻り）。上の空なる物思ひ。影もほのかに三日月の。曇らぬ人の心こそ。誠を寫す鏡なれ誠を寫す鏡なれ

と仕手柱際にて留拍子を踏みて幕に入り、昭君、王母つゞいて入る。

○その身かあらぬか―わが身ながら、わが身とも思はれない意。
○われならば―「われながら」を謠ひ誤つたのである。元祿本及び觀世以外四流とも「われながら」とある。

【八】○淨玻璃―淨玻璃鏡の略。地獄の閻魔の廳にあつて、亡者の生前の善惡の所業をありのまゝに映し出す鏡。このやうな鏡に映しても、國交を保つ爲に一身を犧牲にした昭君の姿は、美しく映るにちがひないといふ意。
○花かと見えて―王昭君の姿が花のやうに見えるといつて、「花曇り」といひ慣らはした語を借りて、花を承けて「曇る日」とつゞけたのである。
○曇る日は―子を思ふ涙に曇ることを含めていふ。
○上の空なる物思ひ―以下の語釋、附記に掲げる。

【八】これに反して、昭君の黛は柳の色のやうに美しくて、あの生前の罪業を映し出す閻魔廳の淨玻璃鏡でも、この美しさはよもや隱れまいと思はれる花のやうな姿で、子を思ふ歎きに目も曇つて、落ちつきのない物思ひに沈んでゐる白桃王母に、ほのかな姿を見せた、この三日月のやうな美しい昭君の心は、これを寫す鏡よりもなほ尊いものであつた。

〔考異〕

諸流（五流）

五流の間、著しい相異はない。

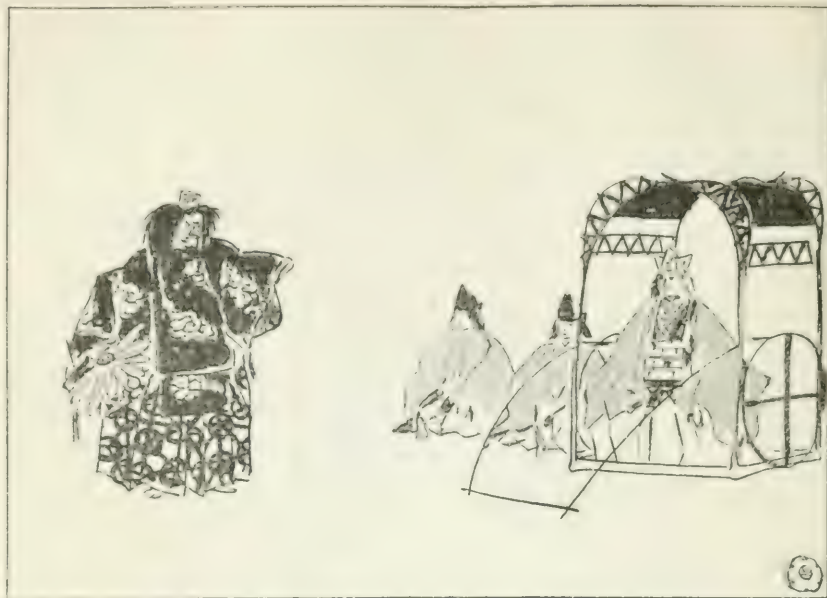
古活本　（元祿八年本）

【二】ワキ「されども供奉の……旅行（泊）の道の慰めに　【三】シテ「いざいざ庭を……箒を携へたり（おつ取り持ち玉体を遂しと待ちゐたり）」シテ「たゞ世の常の賤の男と、庭掃と……地上歌「げに世の中に……風に散り（落ち）水には浮かぶ落葉をも（花紅葉）……それかと見（す）れば　【四】地「いづれを見るも妙にして……胡國に送り（の民に）違はさる　【五】地「散りかかる花や……鏡（ゐんとん）に向つて泣きゐたり　【六】子方「一聲　春の夜の朧月夜にあらはれて（身をなして）　【七】後シテ「これは胡國の……呼韓邪單于（韓邪將）が幽靈なり……「呼韓邪單于（韓邪將）も空しく……シテ「いでいで鏡に影を寫さん（し）……地「姿も恥かし……われならば（ながら）恐ろしかりける。

附　記

○賢聖の障子—古、内裏の紫宸殿にあつた、東西各四間に支那の聖賢の像を描かれた襖障子の名。古今著聞集十一に「南殿の賢聖の障子は、寛平（宇多帝）の御時始めてかゝれけるなり。その名臣といふは、馬周・房玄齡・杜如晦・魏徵（自東）、諸葛亮・蘧伯玉・張良・第五倫（同二）、管仲・鄧禹・子產・蕭何（同三）、伊尹・傅說・太公望・仲山甫（同四）、李勣・虞世南・杜預・張華（自西四）、羊祜・揚雄・陳寔・班固（同三）、桓榮・鄭玄・蘇武・倪寬（同二）、董仲舒・文翁・賈誼・叔孫通（自西二）等なり。この人々の影をかゝれけり」とある。
○上の空なる物思ひ—とりとめもない物思ひに沈むこと。物思ひの爲に心地の落ちつかぬこと。
○三日月の—王昭君の姿をほのかに見るを三日月にいひかけ、月を承けて「曇らぬ」と續けた。
○曇らぬ人—德の高い王昭君。
○貌を寫す鏡なれ—影をうつす鏡よりは、貌を寫す人の心の方が貴いといふ意。前に鏡の故事を出し、また茲に鏡を以て文を結んだのは、唐物語昭君の記事に「うき世ぞとかつは知る知るはかなくも鏡の影をたのみけるかな」とある歌を胸に置いて綴つたのであらう。

善界 觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】五番目　複式劇能

【人物】前シテ　善界坊（山伏姿）、前ツレ　太郎坊、狂言　比叡山飯室の能力、ワキ　比叡山の僧、ワキツレ　同從僧（二人）、後シテ　善界坊（天狗姿）

【所】第一段　山城國愛宕山　第二段　同比叡山麓

【時】（無季）

【異稱】寶生・金春・喜多の三流では「是界」と書き、金剛流では「是我意」と書く、古くは「是害」とも書いた。

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに竹田法印宗盛の作とす。言繼卿記天文十七年二月十六日に演能のこと、言經卿記文祿四年四月三日に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】支那の天狗の首領善界坊は、自國の慢心の輩を皆魔道に誘ひ入れたので、勢ひに乘じて日本に渡り、佛法の妨げをしようと思つて、愛宕山に太郎坊を訪れ、その案内でわが天台山比叡に赴いた。比叡の

僧は勅命によつて禁裡に參る途中、天地が震動して、雲の中から邪法を唱へる聲がしたので、不動明王を念じて惡魔を降伏しようとした。善界坊はこれと爭つて打勝たうとしたが、不動明王が童子・諸天を先驅として現れた上に、山王・男山・北野等の諸神が出現し給うたので、これに抗する術もなく、飛行の翅も地に落ち、「再び日本に狙らひ寄らない」と誓つて逃げ去る。

【出典】 これは今昔物語卷二十「震旦天狗智羅永壽渡二此朝一語第二」に、

今は昔、震旦に强き天狗有けり、智羅永壽といふ。此の國に渡にけり。此の國の天狗に尋ね會て語て云く、「我が國には止事無き德行の僧共數有れども、我等が進退に懸らぬ者はなし。然れば此の國に渡て、修驗の僧共有りと聞くに、其等に會て一度力競せむと思ふは何が可レ有き」と。此の國の天狗此れを聞て、極て喜と思て答て云く、「……近來可レ凌き者共有り敎へ申さむ、己が後に立て御せ」と云て、行く後に立て、震旦の天狗も飛び行く。比叡の山の大嶽の石率都婆の許に飛び登て、震旦の天狗も此天狗も道邊に竝居ぬ……。

かくて、僧を待ち受けてゐると、餘慶律師が山の千壽院から内の御修法行ひに下り、次で飯室の深禪僧正が下つたが、恐ろしくて近づき得ず、次に下つて來た山の座主橫川の慈惠大僧正の小童部に搦め取られ、「汝は何者だ」と訊問せられて、

震旦より罷渡たる天狗也。渡給はむ人見奉らむと此に候ひつるに、初め渡給ひつる餘慶律師と申人は、火界の呪を滿て通給ひつれば、輿の上大に燃ゆる火にて見えつれば、其をば何かはせむと爲る、己れ燒けぬべかりつれば、逃て罷去にき。次に渡り給ひつる飯室の僧正は、不動の眞言を讀て御しつれば、制多迦童子の鐵の杖を持て副て渡り給はむには、誰か可二出會一きぞ、然ば深く罷り隱れにき。今度渡り給ふ座主の御房は、前々の如く猛き早き眞言も不二滿給一ず、只止觀と云ふ文を心に案じて登り給ひつれば、猛く怖しき事も無く、深くも不レ隱して、傍に罷寄て候つる程に、此く被レ搦れ奉て、悲き目を見給へる也。

といひ、散々に踏みひしがれて、僅かに危い命を助けられ震旦に立ち歸つたとあるに據つたのであらうか。——同卷「天竺天狗聞二海水音一渡二此朝一語」にも天狗が比叡山へ渡つて來て、法力に怖れ歸つたことを記して居る。——但し善界の名は阿多古山緣起に「唐土善界、日本太郞坊、各將二其眷屬一、現二大杉之上一」とあるのを採つたのであらう。

【概評】 異國の天狗が佛法を妨げ神國を侵さうとして失敗するのであるから、謠曲作者らしい尊い思想の下に脚色したもので、殊に「明王諸天はさて置きぬ」といつて、山王・男山等の神力を重視してゐるのは、わが神國たる國粹に留意したものと認められるのであるが、脚色の效果から見ると、皇國の尊嚴を示す點に於て「白樂天」の如くに莊重ではなく、僧侶の行德を描く點に於て「車僧」の如く

に關係がない。殊にツレ太郎坊が日本に住みながら異國のものに與みしてゐるのは、作者の企圖した第一の要件を混亂させて居り、クセに天狗が夙く失敗を豫遣つて居ること、ツキが著しい活躍を見せてゐないことは、第二の要件を稀薄ならしめてゐるのである。

第一段

【一】

次第の囃子にて、シテ善界坊、直面・兜巾・篠懸・褚絹・着附無色厚板・紺水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠・小刀の裝束にて常座に出で囃子座の方に向き、

シテ次第「雲路を凌ぐ旅の空。雲路を凌ぐ旅の空出づる日の本を尋ねん

地取に正面に向き、

シテ「これは大唐の天狗の首領善界坊にて候。さてもわが國に於て、育王山青龍寺。般若臺に至るまで。少しも慢心の輩をば。皆わが道に誘引せずといふ事なし。まことや日本は。粟散邊地の小國なれども神國として。佛法今に盛んなる由承り及び候間。急ぎ日本に渡り。佛法をも妨げばやと存じ候

シテ言行「名にし負ふ、豐葦原の國つ神。豐葦原の

笛臺は初め支那で、シテ善界坊、山伏姿で登場。

善界「雲のかなた、遠く距つた日本の國へ飛行して行かう」

と次第に旅の目的を述べ、

善界「自分は支那の天狗の大將の善界坊です。さてわが支那の國に於ては、佛法の靈地といはれた阿育王山や青龍寺、又は般若臺に至るまで、少しでも高慢の心のある者は殘らず、わが天狗道に誘ひ入れてしまつたのだ。ところが、日本は邊鄙な所にある粟粒ほどの小國だが、神國である爲に、佛法が今以て盛んだといふ事を聞いたから、これから急いで日本に渡り、佛法の妨げをしてやらうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

善界「かの有名な日本の國は、諸冊の二神

【一】

○雲路を凌ぐ―善界坊は天狗で雲中を飛行するから、かういつた。

○善界坊―大將の說話は今昔物語から出てゐるが、この名は阿多古山緣起に「唐土善界、日本太郎坊、各將二其眷屬一現二大杉之上一」とあるに據つたのであらう。

○育王山―阿育王山の略。支那浙江省寧波府にあり、その廣利寺―名阿育王寺は禪宗五山の一。

○青龍寺―支那長安にあり弘法大師の師惠果阿闍梨の住んだ寺。

○般若臺―支那江西省廬山にあり、廬山記に「慧遠法師與二廬山一時名德十八賢士等、立二般若臺、於レ同修淨土一」とある。慧遠のことは二六〇を參照。

○少しも―少しでも。

○慢心の輩―わが増長我慢心から佛法に歸依しない者

○わが道―天狗道。

○粟散邊地―もと仁王經に轉輪王以外の小國王を粟散

國つ神。青海原にさしおろす。天の瓊矛の、露なれや秋津洲根の朝ぼらけ。そなたもしるく浮かむ日の。神の御國は、これかとよ神の御國はこれかとよ

「そなたもしるく」と右の方に向きて二三足出でまたもとへ歸りて日本に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

シテ「急ぎ候程に。これははや日本の地に着きて候。まづ承り及びたる愛宕山に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと存じ候

といひて橋懸一の松へ行き正面を見て、

シテ「これははや愛宕山にてありげに候。山の姿木の木立。これこそ我等が住むべき所にて候へ

【三】

幕に向ひ、

シテ「いかに案内申し候

ツレ太郎坊、直面・兜巾・篠懸・模様・著附大格子・繪水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠・小刀の裝束にて幕より出でながら、

ツレ「誰にて渡り候ぞ

が天の浮橋に立つて、天の瓊矛で海を掻きまはされた潮の雫から出來た國だが、この夜明、朝日の出る方角によつて、あの方が神國の日本だといふことがよく分る」

と旅の様を述べてゐるうちに日本に着いた態で、舞臺は日本となる。

善界「急いで來たので、はや日本の地に着いた。まづ噂に聞いてゐた愛宕山へ行つて、太郎坊を尋ねようと思ふ」

善界は愛宕山に着いた態で、舞臺は山城國愛宕山となる。

善界「これははや愛宕山のやうだ。山の姿といひ、梢の様子といひ、われら天狗が住むのによい所だ」

【三】

太郎坊の庵室へ來た態で、

善界「御免下さい」

ツレ太郎坊登場、

太郎「どなたです」

王と名づけ、小國の數多あることを粟粒の散つた様に喩へた語から出たもので、日本をもその一として、平家物語にも「さすがわが朝は粟散邊土の境」といつてゐる。
○豐葦原―日本の古名。古事記に「豐葦原千五百秋瑞穗之地」とある。
○國つ神―こゝでは日本国創成の神、伊弉諾・伊弉冊の二神を指す。
○青海原にさしおろす―古事記・日本書紀に諾冊の二神が天の浮橋に立つて、天の瓊矛を下し海原をかき廻してお引きあげになると、その矛の先から滴り落ちた潮が凝り固まつて、おのころ島となつたとあるをいふ〔天の瓊矛〕瓊は玉で美稱。謠曲では「とぼこ」と讀んでゐる。
○秋津洲根―日本の異名。神武紀に「三十有一年夏四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登二腋上嗛間丘一、而廻二見國狀一曰……猶如二蜻蛉之臀呫一焉、由レ是始有二秋津洲之號一」
○そなたもしるく―「しるく」は著しく、はつきりといふ意。朝日で日本の方角がはつきり分るとの意。

○愛宕山＝山城國葛野郡にあり、太郎坊はこの山に住む大天狗の名。「車僧」參照。

【三】○申し談ず＝相談する。

○自他の本意＝善界坊と太郎坊と、我々の目的。

シテ「これは大唐の天狗の首領善界坊にて候が。これまで遙々參りて候

ツレ「さては承り及びたる善界坊にて渡り候か。御目にかかり申し談ずべき子細の候ひて。これまづ某が庵室へ御入り候へ

シテ・ツレ入替り、ツレ先に立ちて舞臺に入り、ツレは脇座、シテは大小前に平坐して、

ツレ「さて唯今は何の爲に御出でにて候ぞ

シテ「さん候唯今參ること餘の儀にあらず。わが國に於て。育王山青龍寺。般若臺に至るまで。少しも慢心の輩をば。皆わが道に誘引せずといふ事なし。まことや日本は。小國なれども神國として。佛法今に盛んなる由承り候間。少し心にかかり。遙々これまで參りて候。同じくは御心を一つにして。自他の本意を達し給へ

ツレ「さてはやさしくも思し召し立ち候ものか

善界「自分は支那の天狗の大將の善界坊ですが、お目にかゝつて御相談したい事があつて、こゝまで遙々參つたのです」

太郎「それでは、あなたが噂に聞き及んだ善界坊たのですか。まづ手前の庵室へお入り下さい」

舞臺が太郎坊の庵室といふ心で、二人とも舞臺に入つて坐り、

太郎「さて唯今は何の御用でお出でなされたのです」

善界「唯今參つたのは外の用でもござらぬ。わが支那に於ては、阿育王山や青龍寺乃至般若臺に至るまで、少しでも高慢の心を持つた者は殘らず、わが天狗道に誘ひ入れたが、この日本は小國とはいへ、神國で、佛法が今に盛んだといふ事を聞き及び、少し心にかゝつたので、遙々これまで來たのです。成るべくは、心を一つにして、御同樣天狗道の目的を達して貰ひたいと思ふのです」

太郎「それは結構なことをお企てになつた

○比叡山―京都の東北にあり、傳教大師の創建した延暦寺のある山。
○天台山―本曲の末に記す。
○權實二教―同じく末に記す。
○密宗―法身・如來身・口意身の三祕密を說く眞言宗。傳教大師は支那で眞言宗をも學んで來た。
○顯密兼學―末に記す。
○蟷螂が斧―力の及ばないことを企てゝ身を亡ぼす喩。文選の「欲下以二蟷螂之斧一禦中隆車之隧上」から出た語。
○猿猴が月―前と同じ喩。僧祇律に記された寓話で、「佛告二諸比丘一、過去世時波羅奈城、有二五百獼猴一、見二樹下有一レ井、井中見レ月、共執二樹枝一、手尾相接入レ井取レ月、枝折一齊死」
○我慢―佛戒の七慢の一で自ら高ぶつて他を輕蔑すること。
○增上慢―七慢の一で、未だ得ないものを既に得た如くに誇る心。
○大聖―こゝでは惡魔の降伏を司る不動明王をさす。

な。それわが國は天地開闢よりこの方。まづ以て神國たり。されば佛法今に盛んなり。まづまづ間近き比叡山（と正面を見て）。あれこそ日本の天台山候よ。『心のままに窺ひ給へ

シテ『さてはいよいよ便りあり。それ天台の佛法は。權實二教に分ち

ツレ『又密宗の奧儀を傳へ

シテ『顯密兼學の所なるを

ツレ『我等如きの類ひとして

ツテ『たやすく窺ひ

ツレ『給はん事

地『蟷螂が斧とかや猿猴が月に相同じ。かくは知れどもさすが猶。我慢增上慢心の。便りを得んと思ふにも。大聖の威力をいよいよ案じ、連ねたり

ものだ。わが日本は天地開闢よりこの方、ずつと神國なので、佛法が今に盛んなのです。第一この近くの比叡山、あれが日本の天台山なのです。思ふ存分お狙ひなされ」

善界「それでは愈〻都合がよい。あの天台宗の教旨といふものは、佛經を方便教と眞實教との二つに區別して、眞實教を說いてゐるが……」

太郎「こゝでは又眞言祕密の奧儀をも傳へてゐるので……」

善界「顯密の兩教を兼修してゐる所だと……」

太郎「このやうな尊い宗旨だから、我々天狗の分際で、容易に狙ひ寄らうとするのは、全く身に及ばぬ企てで、譬へば蟷螂があの小さな手で大きな車の墜ちるのを禦ぎ、猿が水の中の月を捉へようとして死ぬのと同じではござらぬか」

善界「自分もそれを知らぬではないが、やはり我慢增上慢の心から、旨い具合に行かうかとも思ふのだ。たゞ大聖不動明王の惡魔降伏の威力には弱るのだ」

とこれに對抗する工夫を思ひ凝らした

【三】○明王の誓約まちまちなり—五大尊それぞれ、特殊の誓によつて衆生利益の誓約を立てゝ居らるるが、その中で不動明王の誓約は。○餘尊—五大尊の主尊不動明王以外の他の四尊、降三世明王、軍荼利夜叉明王、大威德明王、金剛夜叉明王をいふ。○火生三昧—末に記す。○忿怒の相—同じく末に記す。○凝念不動の理—一念を凝らして動かないこと。○但住衆生心想之中—畢無動搖に「是大明王無所居、但住衆生心想之中」。○悲願—慈悲深い誓願。○輪廻の—迷ひの爲に種々の世界を經めぐる事。魔境もその一。○魔境—天狗界。○見佛聞法—親しく佛の姿を見、佛法の敎を聞くこと。○結縁の功—見佛聞法の因縁を結んだ功德。○三悪道—地獄道、餓鬼道、畜生道。○鬼畜—畜生—天狗の事をいふ。○般若の智水—般若は梵語で、智慧と譯す。佛智を水に喩へていつたのである。

【三】地クリ「それ明王の誓約まちまちなりと雖も。その利益餘尊に越え。正しく火生三昧に入り給ひて一切の魔軍を焚燒せり

上ゲ 外には忿怒の相を現ずといへども

地 内心慈悲の御恵み。凝念不動の理を顯し。但住衆生心想之中。げにありがたき。悲願かな

〔居ゲセ〕

地ゲセ 然りとはいへども。輪廻の道を去りやらで。魔境に沈むその歎き。思ひ知らずやわれながら。過去遠々の間に。さすが見佛聞法の。その結縁の功により。三悪道を出でながら。なほも鬼畜の身をかりて。いとど佛敵法敵となれる悲しさよ。今この事を歎かずは。未來永々を經るとても。いつか般若の智水を得て。火生三昧の。焔を遁れはつべき

【三】善界「一體、五大明王の働きにはそれぞれ違ひがあるのだが、その中でも、首尊不動明王の利益は餘の明王とは格段の違ひがあつて、身を火中に入れて世界を照らし、その火を以て一切の惡魔を燒き亡ぼされるのだ。そして、外形は恐ろしい怒つた姿をして居られるが、内心は慈悲の惠みが深く、不變不動の態度を執つて、一切衆生の心の中に住むといふ、實にありがたい誓ひを立てて居られるのだ。——

自分だとて、迷ひの世界を離れることが出來ず、惡魔の世界に墮ちてしまつた悲しさを思はぬではない。これまでの永い過去に於ては、人並に親しく佛の御姿を拜み、佛法を聞いたこともあるのだ。この因縁を結んだ功德によつて、三惡道をも遁れ出たのだが、やはり天狗の身となつて、佛法の仇敵となるのは悲しいことだ。今この悲しみに悟りを開かなければ、未來永劫佛智を得ることが出來ず、火焔の中の苦しみを遁れることが出來ないのだ。——

○世の中は夢か現か―古今集讀人知らずの歌「世の中は夢か現か現とも夢とも知らずありてなければ」を引き、いさや知らずを白雲にいひかけ、雲の縁でかゝると續けた。
○我慢の旗矛―旗矛は先に旗を結びつけた矛。我慢の高いことを喩へていふ。太平記卷二に「久しく山門滿濤の風に隨はば、上慢のはたぼこ高うして、遂に天魔の掌握の中に落ちぬべし」
○行者―佛道を修行する者
○降魔の利劍―惡魔を降伏する利劍。不動明王の手に執る劍。
【四】
○しるべ―案内。
○今ぞ愛宕の―法の仇を愛宕にいひかけた。
○高雄山―山城國葛野にあり、名高きといひかけた。
○横川―比叡山三塔の一。
○如意が嶽―京都東山三十六峯の首峯。
○鷲のお山―比叡山を天竺の靈鷲山になぞらへていふ

シテ「世の中は。夢か現か現とも
地「夢ともいさや白雲の。かかる迷ひを飜し歸服せんとは思はずして。いよいよ我慢の旗矛の。靡きもやらで徒らに。行者の床を窺ひて。降魔の利劍を待つこそはかなかりけれ
【四】
ツレロンギ「かくては時刻移りなん。いざ諸共に立ち出でて。比叡の山邊のしるべせん
と二人とも立ち、シテは常座へ行き、
シテ「法の爲。今ぞ愛宕の山の名に。賴みを懸けて思ひ立つ雲の。棧道うち渡り
地「わが名やよそに高雄山。東を見れば大比叡や
シテ「横川の杉の梢より（脇座の上を見上げ）
地「南に續く。如意が嶽鷲のお山の。雲や霞も嵐と共に、失せにけり嵐と共に失せにけり
と右に廻りて仕手柱際にて正面に開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて幕に入る。

あゝこの世の中は夢といふものか、現といふものか、夢とも現とも分らない、このやうな迷ひを離れて佛法に從はうとは思はないで、愈〻我慢の心が高く、徒らに修行者を狙つて、結局不動明王の降魔の利劍に斬り伏せられるのは、つまらないことだ」
【四】
太郎「そんな愚痴をいつてゐては時刻が過ぎてしまふ。さあ一緒に出掛けて、比叡山を案内しよう」
善界「さうだ、今こそ佛法の仇敵となる決心をして愛宕山を出立し、雲に乘つて出掛けよう」
（二人は雲に乘つて飛行し、）
太郎「これが有名な高雄山で、東に見えるのが比叡山だ」
善界「あの横川の杉の梢から南に續いて見えるのが如意が嶽か」
といつてゐるうちに、比叡山のあたりで、雲霞に紛れて見えなくなつてしまつた。

【四】
○卷數—願主の爲に讀誦した經卷の名目、度數を記して、木の枝などにつけた文書。
○同心—贊成し協力すること。
○越度—過失、失策。
○深しい事はあるまい—大したことはあるまい。

【五】

【四】　亂序の囃子にて、狂言能力、能力頭巾・着附縞熨斗目・縷水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて名乘座に立ち、
狂言「かやうに候者は。比叡山飯室の坊に仕へ申す能力にて候。唯今これへ出づる事餘の儀にあらず。大唐の天狗の首領善界坊と申す者日本へ渡り候。その故は。日本は小國なれども神國にて。佛法繁昌の國と聞き。妨げをなさんとてこの地に來り。まづ愛宕山へ參り山の淺杉の木立を見て。我等如きの住むべき所。これに上越してあるまじくと褒め。太郎坊に出合ひ。善界坊申すやうは。われ育王山青龍寺般若臺に至るまで。皆わが道に誘引せずといふ事なし。太郎坊は日本に至りながら何とて心の儘に計らひ給はぬぞ。同じくは御心を一つにして力を添へて給はれとありしかば。太郎坊の仰せには。尤もにて候さりながら。日本は小國なれども神國にて。左樣の事思ひもよらず候。しかし遙々御出での事の爲同心申さう。まづあれに見えたるは比叡山と申して。顯密兼學の御山なり。先々あれへ御出であつて。心の儘に計らひて御覽候へとて。さつと退參申されしかば。それより善界坊都にて色々惡事をなし申す間。僧正へ物使あつて。急ぎ御出であつて御祈禱あれかしとの御事なり。僧正も御車を早め給へども。少しも早くこの卷數を持つて參れとの御事にて候間。是より都に參る。まづ急いで參らう。(舞臺を大廻りしながら)誠に善界坊は何といはれうとも。太郎坊が同心申さるゝは。ちと越度かと存ずる。(もとの座に戻りて)なう恐ろしや旋風が吹いて通つたれば。身の毛がよだつて一足も行かれぬ。是も善界坊が業であらう。深しい事はあるまい。押し切つて參らう。いや〱某が分として善界坊とねぢ合うても叶ふまい。是より罷り歸らう。若しお尋ねもあるならば。魔の業で行先が眞暗になり。一足も行かれ申さず候間。是より罷り歸りたる由御申しあつて給はり候へ。その分心得候へ〱

といひて引く。

【五】　後見脇座に車の作物を出す。

【五】　第二段

○勅を受け―今昔物語に「餘慶律師、山の千壽院より腰輿に乗りて、内の修法行ひに下り給ふを、天狗見て深く恐れて隠れたり」とある。解説参照。
○わが立つ杣―比叡山をいふ。傳教大師が根本中堂を建立した時の歌に「阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ」新古今集に見ゆ。
○大内山―内裏。
○さがり松―愛宕郡一乗寺村にある。「生田敦盛」参照。
○吹きしをり―吹く風に木の枝のたはむこと。

【六】
○物々しや―仰山な。大層らしい。相手を嘲つていふ語。

一聲の囃子にて、後ワキ比叡山僧、金入角帽子・着附厚板・水衣・白大口・掛絡・腰帯・扇・數珠の装束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附厚板・縷水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の装束にて舞臺に入り、ワキは車の内に立ち、ワキヅレはその左右に立ち、

ワキ ワキヅレ 一聲「勅を受け。わが立つ杣を出でながら。急ぐも同じ名に高き。大内山の。道ならん
ワキ「かくてやうやう大比叡を。下りつつ行けば不思議やな。あれに見えたるさがり松の
地上歌「梢の嵐吹きしをり。梢の嵐吹きしをり。雲となり雨となる。山河草木震動し。天に輝く稲光。大地に響く雷は。肝魂を暗まかす。こはそも何の、ゆゑやらんこはそも何のゆゑやらん

【六】
大癋の囃子にて、後ジテ善界坊、面大癋見・赤頭・大兜巾・金襴鉢巻・襟紺・着附段厚板・狩衣・半切・腰帯・羽團扇の装束にて橋懸一の松に出で、
後ジテ「抑もこれは。大唐の天狗の首領。善界坊とは。わが事なり。あら物々しやいかに御坊（トワ

舞臺は比叡山麓で、ワキ比叡山の僧がワキヅレ從僧を随へて登場。
僧「勅命を拝して、わが比叡山を出立し、急いで禁裡へ参らう」
僧「かうして、漸く比叡山を下りて來たが、これは不思議だ。あの下り松の梢が嵐に吹きたわんで、雲が出て雨が降り出し、山も河も草木も皆震動して、天には電光が輝き、地には雷が響いて、魂も暗くなるばかりだ。これは一體どうしたわけだらう」

【六】
後ジテ善界坊、天狗の姿で現れて登場。
善界「自分は支那の天狗の統領善界坊だ」と名乗つて僧に向ひ、
善界「何を仰山らしい。

○觀念―悟りを開く爲に心靜かに考へること。
○若作障碍―出所不明。拾葉抄に「若し障碍をなさば即ち一佛、魔の境ありと認識するなり」言ふ心は觀念の時、若し魔來りて障をなす、其魔境にも一佛を具す、魔佛異る事なく、何ぞ魔を怖れん耶、これを魔佛一如の觀と名づく」云々と註してゐるが、こゝでは善界坊の詞であるから、それとは逆に後の句―悟りの道やそのまゝに魔道の巷となり鈍らん―と同様な、天狗に有利な意として見なければ通じない。
○欲界―三界の一「婬欲・食欲・睡眠欲の强い有情の住む世界。
【七】
○魔佛一如―魔と佛とは兩極端のものであるが、それも本性は眞如平等で一體不二であるとの意。止觀八に「魔界如、佛界如、一如無二、平等一相、」淨名經に、魔界佛界一如」
○凡聖不二―前句と同様の意、寶藏論に「凡聖不二、一切圓滿」
○自性淸淨―本性は淸淨實相で、常住[illegible]動くことのないの意不動明王であると

キを見込み〳〵　今更何の觀念をかなせる。それ若作障碍即有一佛。魔境と說けり
（と云ひながら舞臺に入り常座に立ちてツキに向ひ、
シテ「あら。痛はしや。欲界の。内に生まるる輩は
（と角へ行き）
地「悟りの道やそのままに。魔道の巷と。なりぬらん（と左へ廻りて常座へ歸り）
【七】
地上歌「不思議や雲の。うちよりも。不思議や雲の。うちよりも。邪法を唱ふる聲すなり。もとより魔佛一如にして。凡聖不二なり。自性淸淨天然動きなき。これを不動と名づけたり
（イロヘ）
シテツキをうち敗らんとする心。イロヘの終りにツキの側へ行き、車の轅に手を掛く。ツキ數珠をすりて、
ワキ「聽我說者得大智慧。吽多羅吒干滿
シテ崩られてたら〳〵と後へさがりて平坐。
地「その時御聲の下よりも。その時御聲の下より

今更佛道修行をして何の益があるものか。惡魔を拂はうと佛へ願ったところで、實は魔道に墮ちてしまふのだぞ。――」
氣の毒だが、この欲界に生まれた凡夫は、悟りの道に入らうとしても、すぐ魔道に入ってしまふのだ」
【七】
僧「これは不思議だ、雲の中から惡魔の呪ひの聲が聞える。しかし悟った者には、惡魔も佛も、凡夫も聖人も、平等眞如の同一體なのだ。いかなるものの前にも、淸淨の心を以て泰然として動くことのないのが、不動明王の御誓願だ」
〔イロヘ〕
に善界坊、僧を天狗道に誘い入れようとする。
僧――「わが說を聽く者は大智慧を得ん南無大聖不動明王」――」
かうして、僧が讀經するや否や、不動

も。明王現れ出で給へば（シテを見）。矜迦羅制多迦十二天。おのおの降魔の力を合はせて。御先を拂つて。おはします

シテ「おのおの降魔の力を」に立上り、

〔舞働〕

に不動降魔力に打勝たんとする様を示して常座に立ち、

【八】

シテ「明王諸天は。さて置きぬ

地『明王諸天は。さて置きぬ。東風吹く風に。東を見れば（と脇座の上を見やり）

シテ『山王權現

地『南に男山。西に松の尾北野や賀茂の。山風神風吹き拂へば（舞臺を大廻りし）。さしもに飛行の翅も地に落ち力も槻弓の八洲の波の（平坐して兩手を突き）立ち去ると見えしが又飛び來り（立上りて橋懸へ行きまた舞臺へ戻り）。さるにても。かほどに妙なる。佛力神力今より後は。來るまじと（下に居て兩手を突

明王が出現ましますと、矜迦羅童子・制多迦童子及び十二天が皆現れ出て、不動明王の御先驅をなし、惡魔降伏の力を合はせられる。

〔舞働〕

に善界坊、不動明王に對抗しようとする様を示し

【八】

善界「不動明王や諸天はまだ恐ろしさも少いが、風の吹く東の方を見ると、恐ろしや山王權現が出現されたぞ」

なほ、南から男山八幡、西から松尾明神、北から北野天神や賀茂明神が山風神風を吹き拂つて出現ましましたので、あれほど飛行自在であつた天狗の翅も地に落ち、力も盡きて、善界は日本を立ち去らうとしたが、また飛び歸り、

善界「これほど尊い佛力神力に對して、今後は決して狙ひ寄りは致しません」

の意。

○聽我說者得大智慧―不動明王の四弘願の第三で、「わが說を聽く者は大智慧を得ん」と訓讀す。〔安達原〕參照。

○吽多羅吒干滿―不動明王陀羅尼呪の結句。

○矜迦羅・制多迦―不動明王の前に立つ二童子で、智慧と福德の二使者である。

○十二天―東方帝釋天、南方焔摩天、西方水天、北方毘沙門天、西南方羅刹天、西北方風天、東南方火天、東北方伊舍那天、上方梵天、下方地天及び日天・月天の以上十二の天部をいふ。

【八】

○山王權現―比叡山の守護神日枝神社。近江國滋賀郡坂本村にある。

○男山―山城國綴喜郡男山の八幡宮。

○松の尾―同葛野郡松尾村の松尾神社。

○北野―京都の北野天滿宮。

○賀茂―愛宕郡の上下兩賀茂神社。

○槻弓―力も盡きを槻弓に弓の矢を八洲に、波の立つを立ち歸るにいひかけた。

といふ聲を空に殘して、その姿は雲の中に入つてしまつた。

〔地〕いふ聲ばかりは虚空に殘り、いふ聲ばかり。虚空に殘つて、姿は雲路に、入りにけり

いふ聲ばかりは と立上り、舞臺を大廻りして橋懸へ行き、飛び廻り團扇を後へ投げ袖を被ぎて下に居り、直して留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流　五流

五流の間、詞の出入はあるが、著しい相異はない。

古名本　（光悦本）

【一】ワキ「これは（光かやうに候者）は大唐の天狗の……盛んなる由承り及び（光ナシ）候間急ぎ（光程に此度）日本に渡り……妨げばやと存じ思ひ立て）候……ワキ急ぎ候程に……日本の地に着きて（光とおぼえ）候まづ承り及びたる（光て）候愛宕山に立ち越え（光ゆき）太郎坊に案内を申さ（光あは）ばやと存じ候。これははや愛宕山にてありげに（光此邊とおぼえ）候山の姿木（光々）の木立……【二】シテ「いかに（光此庵室の内へ）案内申し候。ツレ「誰にて渡り候（光案内とはそもいかなる者）ぞ。シテ「これは……善界坊にて候が……遙々參りて候（光と申者にて候。承及候太郎坊は是に御座候か）。ツレ「さては承り及びたる（光ナシ）善界坊にて渡り（光御座）候かまづ某が庵室へ……ワキ「唯今は（光ナシ）何の爲に御出で候ぞ（光先こなたへ御入候へ）。シテ「さん候（光ナシ）唯今參る事……わが國（光震旦）に於て（光は）宕山太郎坊に至るまで（光ナシ）少しも……日本は小國なれども神國として（光ナシ）佛法今に（光ナシ）盛んなる由承り候間少し心に……これまで參りて候（光參候程に。さまたけ申さんために。はる／＼おもひたちたる也）同じくは御心（光さし）を……ツレ「さてはやさしくも（光此ところに）遙々思し召し立ち候ものかな（光かや）……まづ以て神國なりされば（光ナシ）佛法……

附記

〔一〕天台山—支那浙江省にあり、隋の智者大師がこの山で一宗を開き天台宗と稱した。傳教大師入唐して、この宗を承け傳へ、比叡山に

その宗寺を創建したので、比叡山を日本の天台山といふ。〔兼平〕參照。

○權實二教—一時の爲にする方便教と、究竟不變の眞實教。天台宗では法華經を唯一の眞實教とし、その他の諸經を方便權教としてゐる。

○顯密兼學の所—眞言宗では、釋迦の教を顯密の二教に分ち、陀羅尼藏を說く眞言祕密の法を密教といつてその宗の本旨とし、これを說かない天台華嚴淨土等の教を顯教といふ。延曆寺は天台眞言の二宗を兼修してゐる。

○火生三昧—不動明王は火の中にあつて一切の魔障を燒き、大智火を生ぜしめらるをいふ。聖無動尊陀羅尼經に「金剛手菩薩入ニ火生三昧一、其光普照ニ無邊世界一、火焰熾盛焚ニ燒諸障一、內外魔軍恐怖馳走」

○忿怒の相　同經に「雖レ破ニ魔軍一、後與ニ法華一、雖レ現ニ忿怒一、內心慈悲」

關寺小町　觀（寶 春 剛 喜）

解 説

【能柄】三番目　一段劇能

【人物】子方　稚兒、ワキ　關寺住僧、ワキツレ　同從僧（二・三人）、シテ　小野小町

【所】近江國　關寺

【時】平安朝初期　七月七日

【作者】世阿彌の音曲聲出口傳に「小町」と題して本曲の詞章を掲げて居り、能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作としてゐる。世阿彌の作に相違なからう。

【梗概】ある年の七月七日、近江國關寺の住僧が稚兒を伴つて、この山陰に住む老女の許へ歌物語を聞きに行つた。老女は僧に請はれるまゝ、歌物語を初めた。そしてその詞の末から、彼女が小野小町であることが分つた。小町はわが詠歌を引いて昔の榮華を忍び今の落魄を歎いた。その間に時も過ぎたので、稚兒に誘はれて、寺の七夕祭に臨み、稚兒の舞に引かれて、自分も舞を舞つた。そして明方わが庵にたち歸る。

【出典】小野小町が老後落魄したといふ傳說は玉造小町子壯衰書の說話をこの小町の事に取做して發生し展開して行つたものと思はれるのであるが——この事に就ては「卒都婆小町」の解說に述べる——、小町が近江の關寺に侘住居をしたといふ事は、伊勢物語愚見抄に、

小野小町大江惟章が妻になりて筑紫へ下りけるが、後に尼になりて近江の國關寺のあたりにありける。

鴨鶩記にも、

……いくばくの人の心を惱ましゝといへども、衰へぬれば鄙にさすらひ都にさまよひ、はては關寺の邊に庵を結びて、野邊の若草に命をさゝへ、憂き住居をせしを、智證大師御覽じましまして、寺にて七日の御說法ありとて召されしに、身の有樣を恥ぢて參らざりし時、御使たび／＼なりしかば、召す事はおののやけばとわびけんも、誠にあはれに覺えたり。

とある。尤もこの二書は一條兼良の著と傳へられてゐるもので、本曲制作以後のものであるが、世阿彌の當時既にこの種の傳說が行はれてゐて、作者はこれを本とし、七夕祭を背景として、老の歌物語をすることを創案したのであらう。

【概評】本曲は老衰落魄した小町を主人公としてゐるのであるから、終始哀愁の漂うてゐるのは當然であるが、「卒都婆小町」のやうに、いかに憔悴したとはいへ、世を怨み人を戀ふる餘り狂亂するほどではなく、むしろその昔雙びなき才媛であつた盛んな樣を偲ばせるに十分な典雅な趣を具へてゐる。まづその時が七月七日の祭であることが、もの淋しい雅びやかさを想はせるに適はしい。シテの相手としてワキ僧の外に子方の美しい稚兒を出したことも、舞臺を優しく美しくしてゐる。ワキ・シテ掛合の初め、シテの素性の明らかでないことは、他の多くの複式能と同樣であるが、ワキからその素性を確められた時、わざとらしい隱し立てをしないのは、素直で應揚な感じがしてよい。クセの思ひ出の昔話も「鸚鵡小町」のやうな啓蒙的な說示的なものでなくて、しとやかなゆかしさがある。終りの序の舞も童舞の興に乘じて演ずるのであるから、他の多くの曲に見られるやうな無理な不自然さがなくてよい。小町物としても、謠曲全體を通じても傑れた作であると思ふ。

【一】

【一】後見藁屋の作物を大小前に出す。引廻をかけて、シテはその中に居る。
次第の囃子にて、子方稚兒、[illegible]元結・襟赤・着附厚板・紫長絹・

【一】舞臺は初め近江國關寺の僧庵で、ワキ僧、ワキツレ從僧と共に子方稚兒を伴つて登場。

○待ち得て―牽牛織女の二星が一年に一度七月七日の夜天の川で逢ふといふ故事により、その秋を待ち得てといふ。

○星の祭―牽牛織女の二星を祭る七夕祭、乞巧奠ともいふ。この祭はもと唐より起つたものであるが、古くわが國にも傳へられ、七月七日の夜、庭前に机を置き色々の物を供へ、盥に水を入れて大空の星を映し、又五色の絲を竹にかけて願望の成就を祈つた。

○關寺―近江國逢坂關の傍にあつた。

「颯々たる涼風と―和漢朗詠集白樂天の詩句「蕭颯涼風與二衰鬢一、誰教二計會一一時秋一」を借り、一時に來ると續けた。

色大口・腰帯・扇の裝束、ワキ關寺住僧、角帽子・着附小格子・紫水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・絓水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束にて、子方を先に立てて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ次第「待ち得て今ぞ秋に逢ふ。待ち得て今ぞ秋に逢ふ星の祭を急がん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは江州關寺の住僧にて候。今日は七月七日にて候程に。七夕の祭を執り行ひ候。(目附柱へ向き)又この山陰に老女の庵を結びて候が。歌道を極めたる由申し候程に。(正面に直し)幼き人々を伴ひ申し。かの老女の物語をも承らばやと存じ候

といひて子方と向合ひ、

ワキ・ワキヅレサシ『颯々たる涼風と衰鬢と。一時に來る初秋の。七日の夕にはやなりぬ

ワキは正面に向き、

僧「待ちに待つてゐた七月七日も愈〻今日となつたから、急いで七夕祭をしよう」

と次第を謡ひ、さて見物人に向つて、

僧「私は近江國關寺の住僧です。今日は七月七日だから、七夕祭を致します。またこの山陰の庵に老女が住んでゐますが、歌道の事に委しいといふ話なので、稚兒達を連れて、その老女の話を聞かうと思ふのです」

と自己紹介をし、

僧「さら〳〵と涼しい風が吹いて來て、急に秋らしくなり、はや七月七日の夕となつた。――

ワキ「今日七夕の手向とて。絲竹呂律の色々に

ワキヅレ「ことを盡して

ワキ「敷島の

子方と向合ひて、

ワキ ワキヅレ 上歌「道を願ひの絲はへて。道を願ひの絲はへて。織るや錦のはた薄。花をも添へて秋草の露の玉琴かきならす。松風までも折からの。手向に叶ふ、夕かな手向に叶ふ夕かな

「松風までも折からの」とワキは正面に向ひきて三四足出でまたもとへ歸りて庵に着きたる心。上歌濟みて正面に向き、

ワキ「これははや庵のあたりに着きて候。かの老女を訪はばやと存じ候

ワキヅレ「心得申し候

ワキ（子方に）「まづかう御座候へ

【三】

といひて子方以下脇座へ行き順次竝びて下に居る。後見作物の引廻を下すと、藁屋には短册をかけ、その中にシテ小野小町、面姥面・姥鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・無色唐織壺折・縫箔腰卷・扇の裝束にて下に居り、

○絲竹呂律―絲は絃樂、竹は管樂、呂は低い樂音、律は高い樂音、合せて音樂の總稱。

○敷島の道―和歌。

○願ひの絲―前揭の五色の絲をいふ。和漢朗詠集白樂天の詩句に「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多」公事根源にも「竿の端に五色の絲をかけ、一事を祈るに、三年のうちに必ずかなふといへり。この故に乞巧と申すなり」

○はへて―延ばして。

○はた薄―薄の名。錦の機といひかけた。

○玉琴―露の玉といひかけた。秋草も琴も星祭に供へるもの。

○松風までも―拾遺集齋宮女御の歌に「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけん」

【二】

今日は牽牛織女の星祭をして、その手向に色々の音樂を催し、また和歌が達者に詠めるやうにと祈つて、五色の絲を竹にかけて飾り、その外薄や秋の草花を供へて、琴を彈くと、その音につれて、松風までが手向の音樂を奏でるやうだ」

といつてゐるうちに、老女の庵室に着いた心で、舞臺は小町の庵室となる。

【三】

シテ小野小町、作物の庵の中に居て、

○一鉢―鉢は僧の食物を入れる器、こゝでは乞食の食器をいふ。
○草衣―粗末な着物。
○おぎぬふ―補ふの訛り。
○便りあり―世阿彌の音曲聲出口傳には「たよりなし」とある。光悦本以降書ひ謬つたのである。
○花は雨の―百聯抄解所收の詩句「花因二雨過一紅將レ老、柳被二風欺一綠漸低」を引いた。色は次第に深くなつて、雨の降り風の吹く毎に、花の色はあせ、柳の緑は濃くなるとの意。人の老い行くのに喩へたのである。
○人更に若きことなし―和漢朗詠集小野篁の詩句に「人無二更少一時須レ惜、年不二常春一酒莫レ空」
○老の鶯の―鶯には老はといひ、この、老鶯に轉じた。

【三】

○埋木の人知れぬ―古今集序に「色好みの家に埋木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花薄穂に出だすべきことにもあらずなりにたり」とあるを引いた。埋木の人知れずの序、花薄は穂に出だすの序。

シテサシ「朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず。草衣夕の膚を隱さゞれども。おぎぬふに便りあり。花は雨の過ぐるによつて紅まさに老いたり。柳は風に欺かれて緑漸く垂れり。人更に若きことなし。終には老の鶯の。百囀りの春は來れども、昔に歸る秋はなし。あら來し方戀しやあら來し方戀しや（としをる）

【三】

ワキ、シテ謠のうちに立ち、子方を伴ひて作物の前に出で、シテに向ひ下に居て、

ワキ「いかに老女に申すべき事の候。これは關寺に住む者にて候。この寺の稚兒達歌を御稽古にて候が。老女の御事を聞き給ひ。歌を詠むべき樣をも問ひ申し。又御物語をも承らん爲に。稚兒達もこれまで御出でにて候

シテ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。埋木の人知れぬ事となり。花薄穂に出だすべき

小町「一椀の飯をも食べられなくても、誰も惠んでくれるものはなく、粗末な着物で身を包み隱すことが出來なくても、これを繕ふ術もない。雨の降る毎に、風の吹く毎に、花は紅の色が褪せて行き、柳の緑は次第に色濃くなつて行く。そして人の若さは次第に過ぎ去つて行くのだ。季節には、また鶯の盛んに囀る春が返つてくるが、人の年齢は一度去れば二度と歸つて來ないのだ。あゝ過ぎし昔が戀しい懷しい」

と獨言をいふ。

【三】

僧は小町の庵室の前に來て、

僧「もうしお婆さま、私は關寺に住む者ですが、あなたにお話がしたいのです。實はこの寺の稚兒達が和歌を稽古して居られるのですが、お婆さまのお噂を聞かれて、和歌を詠む道をも尋ね、又色々お話をも伺ひたいといふので、稚兒達もこゝへお連れして來たのです」

小町「これは意外な事を仰しやる。私はもはや埋木のやうな人知れぬ身となつて、何も申し上げる言葉はございません。た

○心を種として—同序「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」を引いた。
○その風—歌の姿。
○難波津の歌を以て—「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の歌を指す。古今集序に「難波津の歌は帝のおほん始なり。淺香山の言の葉は采女のたはぶれよりよみて、この二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしける」
○それ歌は神代より—古今集序に「この歌天地の開け始まりける時より出で來にけり。……千早ぶる神代には歌の文字も定まらずすなほにして、ことの心分きがたかりけらし」とあるを引いた。
○めでたかりし世繼—めでたい天子の御即位。古今集序、「難波津の歌の古註に「おほさゝきのみかどの難波津にて皇子と聞えける時、東宮を互に讓りて位に即き給はで、三年になりにければ、王仁といふ人いぶかり思ひて詠み奉りける歌」とあるをいふ。
○淺香山の歌—「淺香山か

にしもあらず。心を種として言葉の花色香に染まば。などかその風を得ざらん。優しくも幼き人人の御心に好き給ふものかな

ワキ「まづまづ普く人の翫び候は。難波津の歌を以て。手習ふ人の始めにもすべき由聞え候よなう

シテ「それ歌は神代より始まれども。文字の數定まらずして。事の心分き難かりけらし。今人の代となりて。めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて。難波津の歌を翫び候

ワキ「又淺香山の歌は。王の御心を和らげし故に。これ亦めでたき詠歌よなう

シテ「げによく心得給ひたり。この二歌を父母として

ワキ「手習ふ人の始めとなりて

だ風雅な心で歌の題を案め、言葉の綾を考へて詠めば、歌の姿の整はない筈はないのでございます。……まあこのやうな幼い方々が歌がお好きだとは、ほんとにお優しい事です」

僧「いや色々お尋ねしたいのですが、まづ世間一般に愛誦してゐるのは、『難波津に咲くやこの花冬ごもり、今は春べと咲くやこの花』といふ歌で、これは手習ひをする人の手ほどきにもするといふ事ですな」

小町「一體和歌は神代から始まつたものですが、その時代のものは字數もはつきりとは定まらず、意味の分りにくいものでございます。その後、人代になつてからの歌で、今お話の『難波津の』の歌は、おめでたい仁徳天皇の御即位をお詠みした歌であるといふので、世間で愛誦してゐるのでございます」

僧「それから『淺香山かげさへ見ゆる山の井の、淺き心はわが思はなくに』の歌は、葛城の王の不機嫌な御心をお和らげしたのだから、これもめでたい歌なのですね」

小町「おゝよく御存じですこと。この二つの歌は歌の父母として……」

僧「手習ひをする人の手ほどきとなり……」

げさへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」の歌をいふ。

○王の御心を和らげ―古今集序の古註に「葛城のおほきみを陸奥へ遣はしたりけるに、國のつかさことおろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさましかりければ、釆女なりける女のかはらけとりて詠めるなり。これにぞおほぎみの心とけにける」とあるをいふ。

○近江の濱の―好ける心に合ふを近江にいひかけた。

○さざ波や―近江の枕詞であるのを、こゝには轉倒して出した。

○濱の眞砂は盡くるとも―古今集序に「濱の眞砂の數多く積りぬれば」又同序たとへ歌の例に「わが戀はよむとも盡きじ荒磯海の濱の眞砂はよみ盡すとも」

□青柳の絲絶えず―古今集序に「たとひ時移り事去り、樂しび悲しび行きかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の絲絶えず、松の葉の散り失せずして、正木の葛長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまれらば、歌のさまをも知り」とあるを順序をかへて引いた。

シテ「高き賤しき人をも分かず

ワキ「都鄙遠國の鄙人や

シテ「われ等如きの庶人までも

ワキ「好ける心に

シテ「近江の海の

地上歌「ささ波や。濱の眞砂は盡くるとも。濱の眞砂は盡くるとも。詠む言の葉はよも盡きじ。青柳の絲絶えず。松の葉の散り失せぬ。種は心と思し召せ。たとひ時移り事去るとも。この歌の文字あらば鳥の跡も盡きせじや鳥の跡も盡きせじ

濱の眞砂は盡くるとも―とワキは子方を伴ひてもとの座に歸り下に居る。

【四】

ワキ「ありがたう候。古き歌人の言葉多しといへども。女の歌は稀なるに。老女の御事例少うこ

小町「身分の高下に拘らず、また所の遠近都鄙の區別なく、私どものやうな田舍の平民も、好きなまゝに歌を詠みますやうなわけで、濱の眞砂は盡きても、この世に詠歌の盡きる時はないのでございます。誠にいついつまでも消え絶えることのないものは、風雅の心でございますよ。たとへどれほど時が經つても、この歌の文字さへあれば、その名は消えることはないのでございます」

【四】

僧「お話を伺つて誠にありがたうございました。昔から歌人は隨分多いけれど、女の歌人は少いものですのに、あなたのやうに女で、そのやうに詳しい方は實に珍しい事です。さういへば、――「わが背子が來べき宵なりさゝがにの、

【四】
○わが背子が來べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも―古今集巻十四に見え、序の古註にも載す。日本書紀允恭紀に天皇藤原の宮に幸して、衣通姫の様子を竊はせ給ふと姫はそれを知らないで、この歌を詠まれたと記してゐる。紀には下句「蜘蛛のおこなひ今宵しるしも」とある。
○衣通姫―允恭天皇の皇后の御妹、名は弟姫。履天皇に召されたけれども、姉皇后を憚つて從ひ奉らなかつたが、遂に召されて、藤原の宮に、後河内の國茅渟の宮に置かれた方。允恭紀に「容姿絶妙無比、其艶色徹衣而晃之。是以時人號曰衣通郎姫也」と。
○衣通姫の流―古今集序に「小野小町は古の衣通姫の流なり」
○小野小町―平安初期の女流歌人。傳記は詳かでない。小野氏系圖には「出羽守良實、小野篁二男、大内記石見守俊生弟也……有女二人、妹名小町、歌人也」とある。「卒都婆小町」參照。

そ候へ。わが背子が來べき宵なりささがにの。蜘蛛の振舞かねてしるしも。これは女の歌候か
シテ「これは古衣通姫の御歌なり。衣通姫とは允恭天皇の后にてまします。形の如くわれ等もその流をこそ學び候へ
ワキ「さては衣通姫の流を學び給ふかや。近年聞えたる小野の小町こそ。衣通姫の流とは承れ。わびぬれば身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。これは小町の歌候な
シテ「これは大江の惟章が心變りせし程に。世の中もの憂かりしに。文屋の康秀が三河の守になりて下りし時。田舍にて心をも慰めよかしと。われを誘ひし程に詠みし歌なり。「忘れて年を經しものを。聞けば涙の古事の又思はるる悲しさよ「とりをる」

蜘蛛のふるまひかねてしるしも』
(今宵はわが夫がきつと見えるに違ひない、蜘蛛の様子を見れば、それがはつきり分る)
といふ歌は、女の歌でしたか知ら」
小町「これは古の衣通姫の御歌です。衣通姫と申すのは、允恭天皇の御后に渡らせられるのでございます。私も拙いながらその流儀を學んでゐるのでございます」
僧「それでは、あなたも衣通姫の流儀をお學びなさるのですか。近頃評判の小野小町は衣通姫の流儀だと聞いてゐました。『わびぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ』
(この世がいかにも暮らしにくいので、浮草のやうな身になつて、誰でも誘つてくれる人があれば、その人について、どこへでも往かうと思ふ)
といふ歌、この歌は小町の歌でしたな」
小町「これは夫の大江惟章が心變りしたので、世の中を情なく思つてゐたところへ、文屋康秀が三河守となつて任國へ下る時「田舍へ來て心を慰めたらばよからう」と、かう私を誘つた時に詠んだ歌です。そのやうな事はすつかり忘れて年月を送つてゐましたのに、今更そのやうな話を聞かされると、昔の事が思ひ出されて悲しうございます」

○わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ—古今集に「文屋康秀が三河の掾になりて縣見にはえ出でたゝじやといひやりける返事によめる」と詞書して出した小町の歌。
○大江の惟章—大江氏系圖に、「平城天皇五世の孫、千古の子、内匠頭從五位下維明」とある。古今著聞抄に「色見えで」の歌を掌げて、「この歌は大江惟章が妻となりしに、心かはりして藤原賀行が聟になりける時によめるなり」とある。
○文屋康秀—平安初期の歌人、字は文琳、三河掾、山城大掾などの卑官で一生を不遇に終つた人。
○涙の古事の—涙の降るを古事にいひかけた。
○色見えで—古今集小野小町の歌「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」
【五】
○包めども袖にたまらぬ白玉は—古今集安倍清行の歌下句「人を見ぬ目の涙なりけり」
○涙の雨古事の—涙の雨降る、古事を思ひ、思ひ草、

ツレ「不思議やなわびぬればの歌は。わが詠みたりしと承る。又衣通姫の流と聞えつるも小町なり。げに年月を考ふるに。老女は百に及ぶといへば。たとひ小町のながらふるとも。未だこの世にあるべきなれば。今は疑ふ所もなく。御身は小町の果ぞとよ。さのみな包み給ひそとよ

シテ「いや小町とは恥かしや。色見えでとこそ詠みしものを

地上歌「うつろふものは世の中の。人の心の花や見ゆる。恥かしやわびぬれば。身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらば今も。いなんとぞ思ふ恥かしや（としをる）

【五】

地クリ『げにや包めども。袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙の雨。古事のみを思ひ草の。花萎れたる身の果までなに白露の名殘ならん

僧（獨言のやうに）「これは不思議だ。「わびぬれば」の歌を自分が詠んだ歌だといはれるし、又衣通姫の流儀といふのは小町の事であるし、……さうだ、年月を繰つて考へると、この老女は百歳以上だといふ事だから、小町が生きてゐるとすれば、まだそれ以上の年にはならないで、この世に存生してゐる筈だから、これは確かにさうだ。（小町に向って）あなたは小町の果でせう、さうお隱しなさるな」

小町「いえ／＼小町と仰しやつてはお恥かしい。『色見えで』と、人の心は外に見えないものだと、歌にも詠みましたものを、この永い年月を經た今日、私だといふ御推察がついたとは、ほんとにお恥かしい。唯今もこのやうに情ない暮らしをして、浮草のやうに、誘つてくれる人があれば、それに連れられて行かうと思つてゐる、お恥かしい身の上でございます」

【五】

小町「あの安倍清行が——

『包めども袖にたまらぬ白玉は、人を見ぬ目の涙なりけり』
（あなたにお會いすることの出來ない悲しさに、いくら我慢しても涙が出てしやうがありません）
といふ歌を贈られたことなど、昔の事を

シテサシ「思ひつつ寢ればや人の見えつらんと

地『詠みしも今は身の上に。ながらへ來ぬる年月を。送り迎へて春秋の。露往き霜來つて草葉變じ蟲の音も枯れたり

シテ「生命既に限りとなつて

地、唯。槿花一日の。榮に同じ

（居クセ）

地クセ「あるはなく。なきは數添ふ世の中に。あはれいづれの。日まで歎かんと。詠ぜし事もわれながら。いつまで草の花散じ。葉落ちても殘りけるは露の命なりけるぞ。戀しの昔や忍ばしの古の身やと。思ひし時だにも。又古事になり行く身の。せめて今は又。初めの老ぞ戀しき。あはれげに古は。一夜とまりし宿までも。瑇瑁を飾り。垣に金花を懸け。戸には水晶を連ねつつ。鸞

思ひ出すばかりで、わが身はやつれ衰へてしまつて、昔の名殘はどこにもなくなつたのでございます。私は――

『思ひつつ寢ればや人の見えつらん、夢と知りせば覺めざらましを』

（戀人を心に思つたまゝ寢たので、夢でその人に會つたのであらう、これが夢だと氣がついたならば、いつまでも覺めずにゐたかつたのに）

とも詠みましたが、わが身はいつまでも夢と消えないで、長い年月生き永らへ、次第に秋の蟲が露霜に當つて鳴き衰へて行くやうに衰へて行つて、今はもはや命も盡きようとしてゐます。ほんとに『槿花一日の榮』といはれた通り、人生は果敢ないものでございます」

小町「私はまた――

『あるはなく無きは數添ふ世の中に、あはれいづれの日まで歎かん』

（達者でゐた人も死んで行き、次第にこの世を去る人はかり增して行く果敢ない浮世を、いつまで人の死を歎いて居られよう。やがて自分自身が死ななければならないのだ）

とも詠んだのでございますが、このやうにやつれ衰へて、いつまで露の命を永らへて居ることでございませう。以前は、あゝ昔が戀しい懷しいと思つてゐましたが、さう思つた時代も今は昔の思ひ出と

草の花、花萎れ、しをれたる身、何知らん、白露のといひかけて續けた。

○思ひつつ寢ればや人の見えつらむ―古今集小野小町の歌。下句「夢と知りせば覺めざらましを」

○露往き霜來つて―文選吳都賦に「露往霜來日月其除」身の終りの近いことを喩へた、

○槿花一日の榮―盛りの短い喩。和漢朗詠集白樂天の詩句に「松樹千年終是朽、槿花一日自爲レ榮」槿花はむくげの花。

○あるはなくなきは數添ふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん―新古今集に出てゐる小町の歌。

○いつまで草―壁に生える蔦。いつまでぞといひかけた、

○瑇瑁を飾り―瑇瑁は鼈甲玉造小町子壯衰書に「家裝二瑇瑁一」

○垣に金花を懸け―同書に「垣畫二丹青一」

○戸には水晶を連ね―同書に「戸簾二水精一」水精は水晶の古字。

○鸞輿鳳車―鸞輿は天子の御輿、鳳車はそれに從屬する臣下の車。それらを飾つ

たまを玉衣にいひかけて、衣の序とした。
○玉衣―美しい衣。
○敷妙の―枕の枕詞。
○枕づく―妻屋の枕詞。萬葉集に「家に行きていかにあがせむ枕づくつまやさぶしも思ほゆべしも」
○妻屋―夫婦の住む室。
○埴生のこや―埴生の小屋、「賤しい家」を是やにいひかけた。
○諸行無常―平家物語冒頭の句「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり」を借りた。諸行無常は涅槃經四句偈の初句で、萬物皆變り易いものであるとの意。
○老耳には益もなし―老人の耳には遠くて聞えないから、佛法を示す鐘の聲も無益である。
○逢坂の山―近江山城の國境にある山。
○是生滅法―涅槃經四句偈に「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」
○飛花落葉の折々―歌の好題目となるべき折々。古今集序に「春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木葉の落つるを聞き……歌にのみぞ心を慰めける」

輿屬車の玉衣の色を飾りて敷妙の。枕づく。妻屋の内にしては。花の錦の褥の起き臥しなりし身なれども。今は埴生のこや玉を敷きし床ならん

シテ「關寺の鐘の聲

地「諸行無常と聞くなれども老耳には益もなし。逢坂の山風の。是生滅法の理をも得ばこそ。飛花落葉の折々は。好ける道とて草の戸に（短冊を一枚手に取り）。硯をならしつつ筆を染めて藻鹽草（扇を筆の心にて短冊に歌を書き）。書くや言の葉の枯れ枯れにあはれなるやうにて強からず強からぬは女の歌なれば（短冊を眺め）。いとどしく老の身の弱り行くはてぞ悲しき（しをる）

【六】　子方ツキに向ひ、

子方「いかに申し候。七夕の祭遲なはり候。老女を

なつて、その頃が今ではまた懷しいものとなつたのでございます。思ひ出せば、昔若盛りであつた頃は、ほんの一晩泊りの假りの宿でも、室を龜甲で飾り、垣には美しい花をかけ、戸には水晶を連ね、身には玉のやうな美しい着物を着飾り、寢室には錦の褥を敷いて暮らしたものでございますが、今はこのやうな粗末な小屋を玉床のやうに思はなければならぬこととなりました。

おゝ關寺の鐘が響いてゐます。あの鐘の音に人生の無常を示されるのでございませうが、老いぼれた私には、その示しも何の益にも立ちません。あの逢坂山から吹き來る風の音に、生類必滅の理を悟るべきでございませうが、それも私には出來ません。たゞ好きなまゝに、花の散り葉の落ちるのを見て、歌題をもとめ、硯を磨り筆を染めて、歌を書きつけるのでございますが、心には深く感じても、文字の力は弱々しい女歌で、このやうに老い衰へたのが悲しうございます」

【六】　子方稚兒、住僧に向ひ、

稚兒「お僧さま、七夕の祭が遲なはります

も伴ひ御申し候へ

ワキ「然るべう候

ワキ前へ出てシテに向ひ下に居て、

ワキ「いかに老女。七夕の祭を御出であつて御覧候へ

シテ「いやいや老女が事は憚りにて候程に。思ひもよらず候（短册を下に置く）

ワキ「何の苦しう候べき。唯々御出で候へとよ

とワキ作物の側へ行きシテを立たせるやうにす。

地上歌「七夕の。織る絲竹の手向草。幾年經てかかげろふの（シテワキに扶けられ杖を持ちて作物を出で）。小野の小町の、百年に及ぶや天つ星合の雲の（シテは常座へ行きワキはもとの座に歸る）。上人に馴れ馴れし。袖も今は麻衣の。あさましや痛はしや目もあてられぬ有樣（ワキしをる）。とても今宵は七夕の（子方立ちてシテに酌をする）。とても今宵は七夕の。手向の數も色

から、あの老女を連れて、早く歸りませう」

僧「御老女、寺へ來て、七夕祭を御覧下さい」

小町「いや／＼私のやうな者が出ては、御無禮ですから、それは存じもよらぬことでございます」

僧「何の御遠慮がいりませう。さあお出でなさい」

そこで、僧が小町を寺へ連れて歸った態で、舞臺は七夕祭をしてゐる寺の庭前となる。

ここ關寺では七夕祭で、五色の絲を竹にかけ、管絃を奏して、二星に手向けるのであるが、伴はれて來た小野小町は、百歳にも達しようとする姥となつて、陽炎のやうに痩せ衰へてゐる。思へばこの人も、昔は宮中の星祭にも、殿上人と馴れ親んで、花やかな姿であつたが、今はあさましい粗末な着物を着て、目もあてられない程氣の毒な有樣である。

さて今宵は七夕星への手向けだといふ

○硯をならしつつ—墨を磨つて。

○藻鹽草—鹽をとる海草。「草を搔き集む」を「物を書く」にいひかけた。

○あはれなるやうにて—古今集序に小町を評して「小野小町は古の衣通姫の流なり、あはれなるやうにて强からず、いはばよき女のなやめる所あるに似たり。强からぬは女の歌なればなるべし」

【六】

○憚り—他の人々に遠慮せられる、失禮であるとの意。

○織る絲竹の—織女の織る絲を管絃の絲竹にいひかけた。

○かげろふの小野—陽炎の如く痩せ衰へる意を大和國吉野山中の地名蜻蛉の小野にいひかけ、小野小町と續けた。

○天つ星合—星合は牽牛織女二星の逢ふ事。百年に及ぶ尼を天にいひかけ、星合の雲を雲の上人にいひかけた。

○麻衣—粗末な着物。麻衣、淺ましと同じ音を重ねた。

○絲竹に懸けて—願ひの絲を竹に懸けるを音樂の絲竹にいひかけ、絲竹に懸けてを明方にかけてにいひかけ明方まで酒宴を續けるといふ意に用ゐた。
○雪を受けたる—廻らす盃を廻雪の袖にいひかけた。廻雪は舞容を賞する語で、張衡觀舞賦に「擬似飛雪、袖如廻雪」
○呉竹の—代々の枕詞。古今集序に「呉竹の代々に聞え」
○萬歳樂—雅樂の曲名。
【七】
○豐の明—朝廷にて新嘗祭の翌日百官に賜はる御宴。
○五節の舞—豐明の節會に五人の舞姫の奏する舞。
○五度返しし—本朝月令に「天皇（天武）吉野の宮におはしし時、日暮琴彈き給ふに、雲氣に起りて、神女髣髴として曲に應じて舞ひ、袖を擧ぐること五度なりき、故にこれを五節といふ」
○狂人走れば—徒然草に「狂人の眞似とて大路を走らば則ち狂人なり、惡人の眞似とて人を殺さば惡人なり」

色の。或は絲竹に懸けて廻らす盃の。雪を受けたる。童舞の袖ぞ面白き
地「星祭るなり呉竹の
シテ「代々を經て住む。行く末の
地「幾久しさぞ。萬歳樂
と子方大小前へ出て、
〔舞〕
舞ひてもとの座に歸る。
【七】
シテ「あら面白の唯今の舞の袖やな。昔豐の明の五節の舞姫の袖をこそ五度返ししが。これはまた七夕の手向の袖ならば。「七返しにてやあるべき。「狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて。「狂人こそ走り候へ
と杖を持ちて立ち上り、
シテ「百年は
〔序舞〕

ので、色々の催しをし、管絃の樂を奏し、明方まで酒宴が續けれたのであるが、中にも面白いのは、舞姿の美しい稚兒の舞で、星祭につけても、幾久しい榮えを祈つて、萬歳樂を舞ふのである。
〔舞〕
稚兒、舞を舞ふ。
【七】
小町「唯今の稚兒の舞はほんとに面白うございました。昔豐明の節會の五節の舞には、舞姫が五度繰返して舞ひましたが、今日は七夕の手向の舞だから、七度舞ふのが本意でございませう。『狂人走れば不狂人も走る』といふ語がありますが、私も唯今の稚兒の舞に誘はれて、柄にもない氣違ひじみた沙汰ですけれど、一つ舞つてお見せしませう」
（と謠つて）
小町「——『百年は花に宿りし胡蝶の舞』
〔序舞〕
を舞ひ、

○百年は花に宿りし―堀川百首大江匡房の歌「百年は花に宿りて過してきこの世は蝶の夢にぞありける」を引いた。
○胡蝶の舞―壹越調の高麗樂「胡蝶樂」に寄せて綴つた。
○さす袖―舞のさす手をいふ。枝をさすといひかけた。
○手忘れ―忘れ。手は接頭語。
○ただよふ波の―たゞよふ波の如くで。
○昔に返す―花やかであつた昔をとり返す。
○初秋の短夜―續古今集大江匡房の歌に「天の川まだ初秋の短夜をなど七夕の契りそめけむ」
○あさま―朝間、明方になる意に「物のあからさまに、あらはになる意を兼ねた。
○羽束師の森―山城國乙訓郡にある。恥かしといひかけた。

シテワカ『百年は。花に宿りし。胡蝶の舞
地「あはれなりあはれなり。老木の花の枝
シテ「さす袖も手忘れ
地「裳裾も足弱く
シテ『ただよふ波の
地「立ち舞ふ袂は飜せども。昔に返す袖はあらばこそ（と作物の前へ行き）
シテ『あら戀しの古やな（下に居てしをる）
地「さる程に初秋の短夜。はや明方の。關寺の鐘
シテ「鳥も頻りに
地「告げ渡る東雲の。あさまにもならば
シテ「羽束師の森の
地「羽束師の森の木隠れもよもあらじ。暇申して歸るとて杖に縋りてよろよろと。もとの藁屋に歸りけり。百年の姥と聞えしは小町が果の名

小町「あゝ情ないことに、年をとつて舞の手も忘れ、足もともよろめいて、舞も出來ません。あゝ返らぬ昔が戀しい」

小町「おや、初秋の短夜で、はや明方になつて、關寺の鐘が鳴り響き、鳥も頻りに鳴き出して來ました。夜が明けて、あたりが明るくなつては、この恥かしい姿を隱すことも出來ますまい。お暇して歸ります」

と、杖に縋つて、よろ／＼としながら、もとの藁屋に歸つた。かの「百年の姥」といはれたのは、この小町のなれの果ての名であつたのである。

なりけり小町が果の名なりけり

「羽束師の森の」と杖を力にして立上り、「もとの藁屋に」と

作物の中に入り、下に居りしをりて留む。

「考 異」

諸 流 （五 流）

五流の間、著しい相異はない。

古名本 （光悦本）

【一】シテ これは江州関寺の……七月七日にて候程に（光皆々講堂の庭にいでて）七夕の祭を……庵を結びて候が歌道を極め（光歌の道をいり）とる由……幼き人を（光たち）を伴ひ……　【三】ワキ いかに老女に……（光此）関寺に住む者にて候この寺の稚児達歌を御稽古にて候（光ナシ）が老女の御事を聞き（光をよび）給ひ（光て）……稚児達もこれまで（光へ）御出で……　シテ（光中々の事）それ歌は神代より……

……　【四】ワキ ありがたう候（光ナシ）古き歌人の言葉……　シテ これは古……后にてまします（光我等も）形の如くわれらも（光ナシ）その流を……　【五】シテ （光實にや）思ひつつ寝ればや……　【六】ワキ（光然るへう候）いかに老女七夕の祭（光たむけのあそひ）を御出であつ（光候）て御覧候へ……　シテ 何の苦しう候べき（光くるしからぬ事）唯々御出で候へとよ（光ナシ）……　地 幾久しさぞ（光も）萬歳楽……　【七】シテ あら面白の唯今の（光童）舞の……

闇

世阿彌の音曲聲出口傳に【一】のシテサシ一章を引いてあるが「便りあり」が「便りなし」とある外、觀世現行曲と同文である。

關原與市　喜

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】シテ　源牛若、ツレ　同從者、狂言　早打(與市の從者)、ワキ　關原與市、ワキツレ　同從兵(四五人)、トモ　同太刀持

【所】美濃國　山中

【時】平家時代　春(三月)

【作者】作者についての記録もなく、演能の古記録も見當らないが、文安田樂記に文安三年三月十八日田樂能の四番目に「關原與一能」があり、小兒三人に沙汰、三人催愛兒人與一華とあるから、もと田樂能に演せられてゐたものを、申樂能に採り入れたものであらう。

【梗概】源牛若が鞍馬山を出て關東に下る途中、關原與市に馬のはねをかけられたのを憤つて、これを斬り伏せ、その馬を奪つて關東へ下るといふ筋で、判官物の謠曲として、「鞍馬天狗」の後を受け、「烏帽子折」の前へ來る曲柄である。

【出典】この事は軍記物のいづれにも見えてゐない。たゞ幸若舞曲の「鞍馬出」に、牛若丸奧州下向の途中、近江國松坂で、平家の郎黨關原與市の大番の爲に上洛するのに出會ひ、與市が馬の蹴上で牛若の直垂を汚したので、牛若がこれを咎めると、與市は却つて部下に命じて狼藉をしかけたので、牛若はこれを打擲して立去つたと、略謠曲と同樣の事を記してゐるが、制作の前後は分らない。

【概評】前揭文安田樂記に稚兒に演せしめたとあるやうに、今の能樂に於ても少年の演ずるものとせられ、少年牛若をシテとした可憐な曲で、脚色も單純である。シテ次第・名乘・道行、ワキ一聲・名乘・道行、兩者甚だ相似たものであるが、咎めるほどのこともあるまい。

【一】

次第の囃子にて、シテ牛若、直面・襟樺・着附唐織・長絹・白大口・小刀・腰帶・扇・笠の裝束、ツレ從者、着附熨斗目・水衣・小刀・扇（太刀を持つ）の裝束にて舞臺に入り、

シテ
ツレ　次第「身は定めなきうたかたの、身は定めなきうたかたの消えぬぞ恨みなりける

シテ「これは義朝の末の子。牛若とはわが事なり。さてもこの度平家の榮え。安藝の守清盛が子供。一寺の賞翫他山の覺え。立ち交はるも口惜しければ

「東とかやに下らんと忍びて出づる鞍馬寺。心づくしの春の夜の。心づくしの春の夜の。行

【一】

舞臺は初め山城國鞍馬山で、シテ源牛若、ツレ從者を隨へて登場。

牛若等「自分達は落ちつく所もない、宛も水の泡のやうな身の上で、このやうな生き甲斐のない命を永らへてゐるよりは、寧ろ水の泡のやうに早く消え失せた方がまして、生きてゐる方が死ぬよりもなほ恨めしい」

（次第に自分の心持を述べ、）

牛若「自分は源賴朝の末子牛若である。さて今の世は平家の盛りで、安藝守淸盛の子ども達が、鞍馬寺は勿論のこと、どの寺々でも寵愛されてゐるので、さういふ仲間に立ち交はるのも口惜しいから、關東とやらへ下らうと思ふのだ」

（見物人に自己紹介をし、）

牛若「鞍馬寺を忍び出て、何がなくても人の心を動かし易いこの春の朧月夜に、深

【一】

○うたかた―水の泡。

○消えぬぞ恨み―泡沫のやうな生き甲斐のない身でありながら、死なないで生き殘つてゐるのは、むしろ死ぬよりも恨めしいとの意。牛若の身上を歎いたのである。

○義朝―左馬頭。源氏の嫡流として、平家の淸盛と勢ひを爭つたが、平治亂に敗れて死んだ。

○牛若―源義經の童名。委しくは「鞍馬天狗」「烏帽子折」にいふ。

○安藝の守淸盛―平淸盛は久安二年に安藝守となつた。

○一寺の賞翫他山の覺え―平家の稚兒達は鞍馬寺中でも又他の寺でも寵愛せらるるとの意。「鞍馬天狗」に「當今の稚兒達は平家の一門、中にも安藝守淸盛の子どもたるにより、一寺の賞翫他

山の覺え、時の花たり」
○立ち交はるも口惜し―その下家の樣兒の中に交はつてゐるのも殘念である。
○鞍馬寺―山城國愛宕郡鞍馬山にある寺。牛若はこの寺に預けられてゐた。
○心づくしの春の夜の―牛若が心を盡すことと、春の夜の朧月の人の心を盡させることとを兼ねていふ。
○消えぬ限りは―旅衣を着、るを消えぬにいひかけた。
○野山を分けて美濃―野山を分けて見るを美濃にいひかけた。
○山中―美濃國不破郡。今關原村の大字。不破山の中といふ意から出た地名。
○關原與市―幸若舞曲「鞍馬出」には「美濃の國住人關原の與市、大番をうけとつて、夜を日についで上りしが、その夜は大津にとまり、松坂のあたりにて牛若君に參りあふ」とある。
○中川の莊―美濃國安八郡中川村。
○入部―領地に入ること。
○早打―馬を驅けてくる急ぎの使。

方も知らぬ旅衣消えぬ限りは白雲の。野山を分けて美濃の國山中に早く着きにけり山中に早く着きにけり

ツレ「御急ぎ候程に。これははや美濃の國山中と申す在所に御着きにて候。これより東へは未だ程遠く候程に。御心靜かに御下向あれかしと存じ候

シテ「げにこれは尤もなり。さらば心靜かに下らうずるにて候

狂言早打、着附縞熨斗目・狂言上下・扇の裝束にて出で、

狂言「かやうに候者は。關原與市の御内に仕へ申す者にて候。さる程に賴うだる人賴朝公より美濃の國山中の莊を賜はり。唯今入部にて候間。皆々その分心得候へく

といひて退場。

ツレ「唯今の早打をよくよく聞き候へば。關原與市が美濃の國中川の莊を賜はりて。唯今入部

い物思ひをしながら、行先の目あてもない旅路にさすらひ、いつどうなることやら知られない身上て、野山を分けて行くうちに、はや美濃國山中に着いた」

（旅の感慨を洩らしてゐるうちに、旅程が進んだ態で、舞臺は美濃國山中となる。）

従者「道をお急ぎになつたので、はや美濃國山中といふ所にお着きになつたのです。これから關東へはまだ大分遠うございますから、ゆるゆるとお下りになるがよろしいと存じます」

牛若「いかにも尤もだ。それではゆるゆると下ることにしよう」

（一同休息してゐると、狂言早打が登場して、關原與市がこゝへ來ると知らせる。）

従者「今の早打の詞をよく聞いてゐると、關原與市が美濃國中川の莊を賜はつて、今領地入りをするといふのだ。これは大

○一大事—重大なこと。

【二】

○山風の聲吹き立てて—關原與市の入部する樣の威勢のよい形容。

○音は嵐の—音は荒しを嵐にいひかけた。

仕ると申すか。これは一大事の御事にて候。この由をわが君へ申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。關原與市美濃の國中川の莊を賜はりて。唯今入部仕ると申し候間。よくよく御忍びあれかしと存じ候

シテ「さあらば深く忍ばうずるにてあるぞ此方へ來り候へ

【二】

一聲の囃子にて、ワキ關原與市、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・法被・白大口・腰帶・太刀の裝束、ワキヅレ(立衆)與市の從兵四五人、白鉢巻・着附厚板・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束、内一人、トモ(太刀持)太刀を持ちて出で、

ワキ、立衆「山風の。聲吹き立てて行く道の。音は嵐の。花の雪

ワキ「抑もこれは關原與市とはわが事なり。さてもこの度美濃の國中川の莊を賜はり。唯今入部仕り候處に。かの在所に柵を引き。城郭を構

變だ。この事をわが君に申しあげよう」

と牛若に向ひ、

從者「申しあげます。關原與市が美濃國中川の莊を賜はつて、今領地入りをするといふ事でございますから、よくお隱れになる方がよろしいと存じます」

牛若「それでは、よく隱れよう。こちらへお出で」

といつて、忍んでゐる態。

【二】

舞臺は美濃國關が原の態で、ワキ關原與市、ワキヅレ從兵、トモ太刀持を隨へて登場。

與市等「自分達の通つて來る道々には、山風が大きな音を立てて吹きまくり、花が吹雪のやうに飛び散ることだ。いや實にすばらしい勢ひだ」

と自分の盛んな勢ひを述べ、

與市「自分は關原與市である。さて今度美濃國中川の莊を戴いて、今領地入りをしようと思ふと、その中川に柵を引廻し、城郭を構へて、自分を入れまいとしてゐ

へる由申し候間。手勢七十騎にて唯今かの在所へさしかけ候。さても當國中川の。その城郭を落さんと

立衆 まだ夜深きに關原の。まだ夜深きに關原の。山の岩角踏みならし。駒うちつゞく武士の猛き心をしるべにて。急ぎて行けば程もなく山中に早く着きにけり山中に早く着きにけり

ワキ「急ぎ候程に。これははや山中と申す在所にて候。いかに誰かある

トモ「御前に候

ワキ「未だ中川へは程遠く候間。人馬に息をつがせ候へ

トモ「畏つて候

【三】

シテ「不思議や見れば侍なるが。旅の衣に馬の蹴上を懸くる事。存外なる振舞なり。いかに與市。

○手勢―部下の軍勢。
○關原―美濃國不破郡。
○岩角踏みならし―拾遺集大貳高遠の歌「逢坂の關の岩角ふみならし山立ち出づる霧原の駒」を借りた。
○猛き心をしるべにて―勇猛な心を力として進み行くこと。
○息をつがせ―休ませる。

【三】
○馬の蹴上―馬が足で蹴つた泥。はね。
○存外なる―慮外な。失禮な。

るとの事であるから、部下の軍勢七十騎で、これからあの所へ出かけるのだ」

（と自己紹介をして、）

與市等「この美濃國中川の城郭を陷入れようと思つて、まだ夜の暗いうちに、關原を出で立ち、山の岩角を踏み鳴らし、馬を續かせて、何よりも勇猛心を力として、急いで行くうちに、間もなく山中に着いた」

（と勇ましい勢ひで山中に着いた態。）

與市「道を急いだので、こゝがはや山中という所だ。誰かゐないか」

太刀「はい、お前に居ります」

與市「まだ中川までは、大分道が遠いから、こゝで人馬に一息休ませたがよからう」

太刀「畏りました」

【三】

（牛若は與市の馬にはねをかけられた態で、）

牛若「これは怪しからぬ。見れば向ふも武士であるのに、人の旅の着物に馬のはねをかけるとは無禮な振舞だ」（與市に向つて）こ

○その馬乘り得ずは—人にはねをかけず尋常に馬に乘ることが出來ないならば。
○冠者—元服して冠をつけた、まだ年の少い者。
○軍の血祭—出陣の時、人を殺して軍神を祭ること。
○下知—命令。
○究竟—この上もなく勝れた。
○切先—刀の刄先。
○太刀拔きそばめ—太刀を拔いて脇に引寄せ。
○弓手—左の手。
○馬手—右の手。
○蝶鳥稻妻石の火—蝶鳥は活動の敏捷な喩。稻妻石の火は時間の極めて早い喩。
○見あへぬ程に—見る事も出來ない程早く。

その馬乘り得ずは下りて下人に引かせ候へ
トセ　いかに申し上げ候。あれなる冠者の申し候は。與市殿馬乘り得ずは下りて下人に引かせよと申し候
ツキ　何と申すぞ。近頃にくき事を申すものかな。急ぎその冠者討ち取つて。今日の軍の血祭にせよと。與市が下知に從ひて
地　究竟の兵七十餘騎。究竟の兵七十餘騎切先を揃へて切つてかかれば牛若少しも騷がずして
シテ　しづしづと太刀拔きそばめ
地　しづしづと太刀拔きそばめ。敵を手近く待ちかくれば。われもわれもとかかる敵を弓手にうち伏せ馬手に切り伏せ蝶鳥稻妻石の火の。見あへぬ程に切り給へば。嵐に木の葉の散るが如く。大勢は亂れ散つて。四方へばつとぞ逃げたりけ

れ與市。そのやうに馬を乘りこなすことが出來ないなら、下りて、馬を下人に引かせて行くがよからう」
太刀「（太刀持は牛若の詞を聞いて與市に向ひ、）申しあげます。あの若者が『與市殿、馬を乘りこなすことが出來ないなら、下りて、下人に引かせろ』と、かう申します」
與市「何といふ、實に憎い事をいふ奴だ。すぐその若者を討取つて、今日の軍の血祭にしろ」
と與市が命令を下すと、これに從つて、いかにも力強い武士が七十餘騎、刀の刄先を揃へて牛若に斬つてかゝつたが、牛若は少しもあわてないで、落ちついて太刀を拔いて脇に引寄せ、敵の手近く寄り來るのを待つてゐると、敵の軍勢は我も我もと斬つてかゝる。牛若はこれを左手でうち伏せ、右手で斬り伏せ、蝶や鳥のやうにすばしこく働いて、稻妻や石の火のやうに瞬くうちに、見てゐる隙もなく斬りふせるので、敵は嵐に木葉の散るやうに亂れ散つて、四方へぱつと逃げた。

る

〔イロ八〕

地「四方へばつとぞ逃げたりける。その時與市は怒りをなして。その時與市は怒りをなして。ものものしあれ程の小姓ひとりを手並にいかで洩らすべきと。駒驅け寄せてえいやとうつ太刀を。飛び違ひ切り落し駒引き寄せて。ゆらりとうち乘り太刀さしかざし。われは知らずや源の牛若と。名乘りののしり美濃の中道。東路さしてぞ下りける

〔イロ八〕

に牛若は勇ましい武者振を示す。

その時與市は憤つて、

與市「何を仰山らしい。あれ位の青二才一人を、この腕前で討ち洩らすことがあるものか」

と馬を驅け寄せて、えいやと太刀を打ち下すと、牛若は飛び違つて與市の太刀を斬り落し、與市の馬を引寄せて、ゆらりとうち乘り、太刀をかざして、

牛若「自分を知らないのか、源の牛若であるぞ」

と大聲に名乘つて、美濃から關東へさして下つて行つた。

○ものものし—仰山らしい大層らしい。
○小姓—小冠者。青二歳。
○手並にいかで—自分の腕前を以て、討ち洩らす筈がない。
○われは—我をばの意。
○美濃の中道—中道は道中に同じ。

〔考　異〕

古謡本（觀世流貞享三年本）

【一】シテ「これは義朝の末の子……立ち交はるも口惜しければ（貞はいかりなれは）…………ツレ「御急ぎ候程に（貞間）これはは美濃の國（貞ナシ）……在所に御着き（貞ナシ）にて候……東へは未だ（貞ナシ）……御下向（貞下り）あれかし……シテ「げにこれは尤もなり（貞ナシ）……ツレ「唯今の早打をよくよく聞き候へば（貞えいなにと申す）關原の……中川の莊を（貞公方より）賜はりて……中川の莊を（貞公方より）賜はりて唯今……　【二】ツレ「抑もこれは……ここもこの度（貞ナシ）美濃の國中川の莊を（貞公方より）賜はり唯今（貞今日）……かの

(貞ナシ)在所に……(貞唯今)手勢七十餘騎にて(貞を以て)唯今(貞ナシ)……ワキ(貞トモ)「(貞御)急ぎ候程に(貞間)……いかに誰かある。トモ「御前に候　ワキ「(貞ナシ)未だ(貞是より)中川へは……息をつがせ候へ(貞心しつかに御入部あれかしと存候)。トモ「畏つて候(貞ワキ「さらば人馬に息をつかせうするにて候)　【三】シテ「不思議や……存外なる(貞あまりの)振舞……その(貞ナシ)馬乘り得ずは……トモ「いかに……冠者の申し候(貞事に)は……ワキ「何と申すぞ近頃にくき事を申すものかな(貞ナシ)……

殺生石

觀(寶春剛喜)

解説

【能柄】四・五番目　複式劇能

【人物】ワキ　玄翁、狂言　能力、前シテ　里女(殺生石魂)、後シテ　殺生石魂(野干姿)

【所】下野國　那須野

【時】室町初期　(九月)

【作者】能本作者註文には作者不明とし、二百十番謡目錄には日吉安清の作とす。實隆公記に文龜三年八月十九日室町殿小御所に本曲を演じたこと、言經卿記に文祿四年三月廿八日註釋したことが見えてゐる。

【梗概】玄翁といふ道人が陸奥から都へ上る途次、那須野まで來て、空飛ぶ鳥が石の上に落ちるのを見て驚いてゐると、一人の里女が出て來て、これは殺生石といつて人畜を害するのだから近づくなと留める。玄翁がその謂れを尋ねると、これは玉藻前の執心が石となつたもので、その玉藻前は鳥羽院の上童となつて、院を害し奉らうとしたが、安倍泰成の占卜によつて見破られ、化生の本體を現して那須野の草の露と消えた。自分はその石魂である」といつて消え失せる。玄翁はこの石魂の爲に供養をし引導を與へると、かの殺生石は二つに割れて、石魂は野干の姿で現れ、京都で追はれて後、この那須野に隠れてゐたところ、勅命を受けた三浦介・上總介に追ひ立てら

れて、終に射殺され、それ以來殺生石となつて、人畜を害して來たが、今ありがたい供養を受けたのだから、以後は惡事をしない、と誓つて消え失せる。

【出典】この原據と見るべき出典は未だ見出さない。たゞ文安元年序文の下學集、犬追物の條に、

昔西域有二班足王一、其夫人惡虐過レ人、勸レ王取二千人之首一、其後出二生支那國一、爲二周幽王后一、其名曰二褒姒一、滅レ國惑レ人、死後出二生于日本一、近衛院御宇號二玉藻前一、傷レ人無レ極、後化成二白狐一、害レ人惟多、時俗欲レ驅レ之、先追二走犬一、以試二其騎射一、白狐知レ之化而成レ石、飛禽走獸當二其殺氣一者、莫レ不二立斃一、故謂二之殺生石一、于レ今在二下野那須野原一也、犬追物者始二于茲一矣、但聽二之古老之口號一、雖レ不レ知二本說一、且載レ之而已。

又、臥雲日件錄、享德二年二月廿五日の條に、

林光院主彦山來話次、及二射狗事一、出曰、鳥羽院御宇、忽有二美女一、不レ知二所出一、名曰二玉藻前一、然爲二帝所一レ寵、能知二天竺唐土之事一、詰レ之、爾後帝不豫、卜レ之則此女所レ使レ然也、遂嗔レ之、女變成レ狐逃去、此狐在二下野州那須野中一、將レ驅レ之、然捷疾不レ可二捕得一、先命二武士一、騎馬射狗、以習二射狗一、然后上總介者射而殺レ之、尾有二雙針一、上總與二之賴朝一、賴朝得レ之、遂定二天下一、上總介亦源家之士也、月今射狗、本二於此一云、又曰此狐乃周褒姒所レ化也、

と記してゐる所を見れば、當時人口に膾炙した傳說であつたに違ひない。そして、この傳說の發生した經路については、本朝高僧傳の源翁(玄翁)傳に、玄翁が殺生石に偈を與へて成佛せしめたことを記して(その文は語釋に揭ぐ)、その末に、

余按ずるに、殺生石の事は、他書に見えず。或は謂ふ破竈の類なりと。想ふに好事の者破竈墮に擬へて吉を爲しならん

といつてゐる。この破竈墮の故事は、傳燈錄等に見えてゐるもので、支那の僧が嵩山塢に行つたところ、附近の者が竈を祭つて祟めてゐるのを憐しみ、杖を以て竈を三下し、「咦是合成、神從何來」と唱へると、竈は忽ち墮落し、竈神が青衣の人と化して、僧に得脫の喜びを述へたといふのであつて、殺生石の來歷とは別途のものであるが、玄翁の事は或はこの說話から出たものであらうか。

【概評】わが國の著名な興味ある傳說に謠曲から出たものが多い。殺生石・玄翁の事も亦その著しいものの一で、このやうな傳說を文學化し戲曲化して後世に傳へた、謠曲作者の功を多としなければならない。さて、一篇の謠曲として出來上つた本文を見ると、この傳說の敍述については、その爲に前段にもその一章を設けてゐるばかりでなく、後段にも詳しく前後の事件を語つて、遺漏なきを期してゐる

いづくとも定めなき。うき世の旅に迷ひ行く。心の奧を白河の。結びこめたる下野や。那須野の原に着きにけり那須野の原に着きにけり

「結びこめたる下野や」と右の方に向きて二三足出で、また もとへ歸りて那須野に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや那須野の原に着きて候

狂言「御急ぎ候程に。那須野の原に御着きにて候

ワキ脇座へ行く。狂言作物を見て、

狂言「あら落ちるわ〳〵

ワキ「何事を申すぞ

狂言「さん候あの石の上に飛鳥が落ち申し候間。不審に存じ候

ワキ(作物へ向き)「げにこれは不思議なる事にて候。立ち寄り見うずるにて候

狂言「急いで御覽候へ。(幕に向き)いや何事やら申し候

といひてワキの次に着く。

【三】

シテ里女、面增・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて、幕より出でながら、

シテ「呼掛」なうその石の邊へな立ち寄らせ給ひそ

ワキシテに向く、

いふあてもなく、行脚して歩いて、今奧州白河を出て、下野國の那須野の原に着いた」

といつてゐるうちに、那須野に着いた態で、舞臺は那須野となる。

【二】

舞臺には殺生石があり、ワキと能力とはその上から鳥の落ちてくるのを見て驚いてゐると、シテ殺生石の石精、里女の姿で登場。

「もうし、その石の傍へはお寄りなさいますな」

といひながら進んでくる。

世」

○一見所—一見識。

○拂子—獸毛又は麻等を束ね柄を附けたもので、もと蚊虻を拂ふ具。導師の標とする。拂塵ともいふ。

○世上に眼をさらす—世の狀態を觀察し、遊歷化導すること。

○冬夏—夏九十日間禁足して佛法修行するを夏安居又は單に夏といひ、冬九十日安居するのを冬夏といふ。

○心の奧を白河の—心の奧を陸奧の奧に、奧を知らぬを白河に、河の水を掬ぶを結ぶ霜に、霜を下野にいひかけて、次第にいひ續けた。

○那須野—下野國那須郡の平野。

【二】

(一)求め給へる命―わざ〳〵求めて死地に入ること。
(二)鳥羽の院―鳥羽法皇。
(三)上童―宮中に召し使はれ昇殿を許された童女。
(四)玉藻の前―鳥羽法皇の寵を賜はつたといふ傳説上の美人。玉藻前が怪異をなした年代を、臥雲日件錄には鳥羽院の御宇とし、下學集には近衛院御宇(鳥羽法皇院政)とし、神皇正統錄には、久壽二年の事としてゐる。
(五)殿上の交はり―宮居奧深く參入した身分の高い人。

ツキ「そもこの石の邊へ寄るまじき謂れの候か

シテ舞臺へ進みながら、

シテ「それは那須野の殺生石とて。人間は申すに及ばず。鳥類畜類までもさはるに命なし。かく恐ろしき殺生石とも。知ろし召されでお僧たちは。求め給へる命かな。そこ立ち退き給へ

ツキ「さてこの石は何故かく殺生をば致すやらん

シテ「昔鳥羽の院の上童に。玉藻の前と申しし人の。執心の石となりたるなり

ツキ「不思議なりとよ玉藻の前は。殿上の交はりたりし身の。この遠國に。魂を。とどめし事は何故ぞ

シテ「それも謂れのあればこそ。昔より申しならはすらめ

玄翁「この石の傍へ寄るなといはれるのには、何か譯があるのですか」

女「それは那須野の殺生石と申して、人間は勿論のこと、鳥獸まで、これに觸れれば命を失ふのでございます。そのやうな恐ろしい殺生石だとも御存知なくて、お近づきになるのは、求めて死地にお入りになるやうなものです。そこをお退きなさいませ」

玄翁「して、この石は何故このやうに殺生をするのでせう」

女「それは昔鳥羽院にお仕へした女官の玉藻前と申す人の執心が石となつたのでございます」

玄翁「不思議なことをいはれる。玉藻前は御所にお仕へして貴人と交はつてゐたと申すのに、どうしてこのやうな遠國に魂を殘したのです」

女「それには譯のあることで、昔からいひ傳へて居ることがあるのでございませう」

ワキ「御身の風情言葉の末。謂れを知らぬ事あらじ

シテ「いや委しくはいさ白露の玉藻の前と

ワキ「聞きし昔は都住居

シテ「今魂はあまざかる

ワキ『鄙に殘りて惡念の

シテ『猶もあらはすこの野邊の

ワキ「往來の人に

シテ「あたを今

地上歌「那須野の原に立つ石の。那須野の原に立つ石の。苔に朽ちにし跡までも。執心を殘し來て。又立ち歸る草の原。物凄しき秋風の。梟松桂の枝に鳴きつれ狐蘭菊の花に隠れ住む。この原の時しも物凄き秋の夕かな

シテ舞臺の眞中へ行き下に居る。

〇いさ白露の—いさ知らずを白露に、露の玉を玉藻にいひかけた。

〇あまざかる—鄙の枕詞。魂の遠く離れた事をも含めてゐる。

〇那須野の原に—仇をなす、を地名にいひかけた。

〇梟松桂の—秋風の吹く、を梟にいひかけ、白樂天の凶宅の詩句「梟鳴ニ松桂枝一、狐藏ニ蘭菊叢一」を引いて、那須野の物凄い叙景とした。

玄翁「そなたの姿樣子といひ、言葉つきといひ、その譯を知られないことはありますまい」

女「いえ委しい事は存じませんが、玉藻前といふ人は……」

玄翁「昔は都住ひをしてゐたのですが……」

女「今は亡魂をこの田舍に殘して、その惡念が現れて、この那須野の原を往來する人に仇をなす殺生石となり、石に苔の生えた後までも執心が離れないのでございます。——

そして、秋風の吹く夕暮などは、梟が松や桂の枝に鳴き、狐が蘭や菊の花に隠れてゐて、このあたりはほんとに物凄い有樣でございます」

【三】
○出生出世―氏素性及び經歷。
○白雲の―誰とも知らぬを白雲にいひかけ、雲の上人と續けた。
○紅色―化粧。光悦本には容色とある。
○經論―經は佛の説いた教義を記した書、論は菩薩が經文の教義を論議註釋した書。法華經・般若經、起信論・倶舍論など。
○聖教―こゝでは佛の教ではなく、儒教の教をいふ。
○玉藻―玉はもと美稱であるが、底の玉藻も光見えけり（夫木抄廿八）など詠まれてゐるので、玉藻を光藻の意に解して、この名をつけられたのであらう。
○清涼殿―紫宸殿の西にある、禁裏の主要な殿舍。

【三】地クリ「抑もこの玉藻の前と申すは。出生出世定まらずして。いづくの誰とも白雲の。上人たりし身なりしに

シテサシ「然れば紅色を事とし

地「容顏美麗なりしかば。帝の叡慮淺からず

シテ「ある時玉藻の前が智慧をはかり給ふに。一事とどこほる事なし

地「經論聖教和漢の才。詩歌管絃に至るまで。問ふに答への暗からず

シテ「心底曇り。なければとて

地「玉藻の前とぞ。召されける

〔居クセ〕

地クセ「ある時帝は。清涼殿に御出なり。月卿雲客の。堪能なるを召し集め。管絃の御遊ありしに。頃は秋の末。月まだ遲き宵の空の雲のけしき凄

【三】女「一體この玉藻前といふ人は、氏素性も經歷も何も分らない人なのですが、どうしてか奧深い宮中の人となりましたもので、絶えず化粧を凝らし、容色が美しかつたので、天子の御寵愛が深かつたのでございます。――

ある時この玉藻前の智慧をお試しになりましたところ、何一つ知らぬ事がなく、佛教や儒教など和漢の學問は勿論、文學音樂に至るまで、御尋ねに對してお答への出來ないものがない、いかにも隅から隅まで明るいものだといふので、玉藻前とお名づけになつたのでございます。―

ところが又ある時、天子が清涼殿に出御になつて、公卿殿上人の音樂の上手をお集めになり、管絃の御遊をお催しになつたことがございます。それは秋の末で、月のまだ出ない宵暗の時で、あたりの氣

○大内—内裏、御所。
○畫圖の屏風—清涼殿の東南隅に立てられた四季の畫の御屏風。
○萩の戸—清涼殿の北、弘徽殿と藤壺との間にある御室の名。
○闇の夜の錦—立派なものが暗くて見えない意。
○御惱—御病氣。
○安倍の泰成—晴明七世の孫、泰長の孫で泰時の子であると。
○勘狀—占ひ考へた事を記して奏る書面。
○化生—變化。本體を變へて假の姿となること。
○調伏—怨敵惡魔を降伏除滅する祈禱。
○化生を本の身に—美女の姿をもとの狐に變ずること
【四】

しく。うちしぐれ吹く風に。御殿のともし消えにけり。雲の上人立ち騷ぎ。松明とくと進むれば。玉藻の前が身より。光を放ちて。清涼殿を照らしければ。光大内に充ち滿ちて畫圖の屏風萩の戸闇の夜の錦なりしかど。光にかかやきて。偏に月の如くなり

シテ 帝それよりも。御惱とならせ給ひしかば

地 安倍の泰成占つて。勘狀に申すやう。これはひとへに玉藻の前が所爲なりや。王法を傾けんと。化生して來りたり調伏の祭あるべしと。奏すれば忽ちに。叡慮もかはり引きかへて。玉藻化生を本の身に。那須野の草の露と。消えし跡はこれなり

【四】

ワキ かやうに委しく語り給ふ。御身は如何なる人やらん

色がもの凄くなり、時雨につれて風が吹くと、御殿の燈火が消えてしまひました。殿上人達が大騷ぎをして、松明を早く持つて參れといつてゐますと、玉藻前のからだから、光を放つて、清涼殿を照らしましたので、その光が御所一面を照らして、今まで結構な四季の御屏風や萩の戸たども暗くて見えなかつたものが光り輝いて、全く月のやうであつたのでございます。

ところがそれ以來、天子は御病氣におなり遊ばしたので、安倍泰成が占つて、その判斷狀に申しあげますには、「これは全く玉藻前の仕業でございます。わが王法を傾け亡ぼさうとして化けて來たのでございます。惡魔退治の御祈禱を遊ばすがよろしうございます」と奏上しましたので、天子の御心もこれまでとはうつて變り、從つて玉藻前もこれまで化けてゐたのが本の狐の姿になつて、那須野の原に消えてしまひました。これがその遺跡でございます」

【四】

玄翁「このやうに委しくお話し下さるあなたは、一體どういふお方なのです」

シテ「今は何をか包むべき。その古は玉藻の前。今は那須野の殺生石。その石魂にて候なり

ワキ「げにや餘りの惡念は。却つて善心となるべし。然らば衣鉢を授くべし。同じくは本體を。『二度あらはし給ふべし

シテ「あら恥かしやわが姿。『晝は淺間の夕煙の（居立ち）

地上歌「立ちかへり夜になりて。立ちかへり夜になりて（シ立ち一常座へ行き）。懺悔の姿現さんと（ワキへ向き）。夕闇の夜の空なれど（脇正面を見渡して）この夜はあかし燈火の。わが影なりと思し召し。恐れ給はで待ち給へと石に隠れ、失せにけりや石に隠れ失せにけり

シテ作物の中に入る。

女「今は何を隠しませう、私は昔の玉藻の前、今は那須野の殺生石の石魂なのです」

玄翁「なるほどさうであつたのか。しかし強い悪心は却つて善心に立ち返り易いものだ。それでは引導を授けてあげよう。なるべくはその本體をお顯しなさい」

女「おゝお恥かしい、明るい晝にはこのあさましい姿をお目にかけることは出來ません。夜になりましたら、また出て來て、懺悔の爲に本體をお見せ致しませう。この夕闇の空が明るくなりましたら、それは私の影だと思つて、恐れないでお待ち下さい」

といつて、石に隠れてしまつた。

○衣鉢―佛家の法統を傳へる印として、師の袈裟と鉢（食器）とを授けるをいふ。こゝでは引導の意。

○晝は淺間の―晝間は狐の本體を現すのがあさましいとの意を地名の淺間にいひかけ、淺間山は信濃國の噴火山であるから、煙といつて立ちかへりと續け、また晝朝の縁で、夕・夜の文字を用ひた。

○懺悔―過去の罪業を恥ぢて悔い改めること。

【四】

【四】　狂言拂子を擔げて仕手柱際へ出で、

狂言「扨も〳〵不思議なる事かな。唯今の女性はいづくともなく來り。玄翁へ何やら申して候が。又

行方知らずなり申して候

舞臺の眞中へ出でワキに向ひ下に居り、拂子を下に置きて、

狂言「いかに申し候。唯今の女性はいづくともなく來り。又行方知らずなり申して候が。近頃不思議なる事にては候はぬか

ワキ「げに〳〵汝の申す如く。唯今の女性は何とやらん物凄しく見えて候。それにつき汝はこざかしき者にてある間。玉藻の前の事語つて聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。左樣の事は玄翁こそ御存じあるべきに。我等へお尋ねある御慰みにてあらうずると存じ候間。承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

狂言「さる程に玉藻の前と申すは。もとより狐の化けたる容色なれば。翠黛紅顔生まれながらの相にして。瓊粉金膏の假なる色を事ともせず。楊桃の春の痛める粧ひ。翠柳の風を含む形を天子叡覽あつて。三千の寵愛一身にありしかば。日夜御側を離ち給はず。御祕藏にて御座ありたると申す。ある時帝に御歌合ありて。管絃濟み。俄かに大風吹き來り。玉殿に燈火一燈もなく。五更の夜を照らすべき螢もなく。暗夜に迷ひ給ふ時。玉藻の前が身より光を出し。宮中を照らす事日の如く輝きければ。帝その光を叡覽ありてより。御惱とならせ給ふ間。貴僧高僧を請じ。御祈禱あれどもそのしるし更になし。安倍泰成を召して占はせ御覽あるに。卜方(うらかた)に引合はせ申すやう。これは玉藻の前の所爲なりとて。壇に五色の幣帛を立て。肝膽を碎き祈りければ。その儘化けを現し大なる狐となり。下野の國那須野の原へ落ちて行く。國内通の者なれば。凡にしては叶はじとて。三浦介上總介兩人に仰せつけらるる。兩介仰せ承り。那須野の原へ下着して。草を分けて狩りければ。大なる狐の現るゝを。そのまゝ射とめたると申す。さればその執心大石となりてこの野に殘り。人間は申すに及ばず。鳥類畜類までもかの石の勢ひに當つて。命を失ふと申す。こゝは那須野の原にて候へば。そ

○こざかしき—小賢い、氣のきいた。

○翠黛紅顔生まれながら—太平記卷三十七、楊國忠事に、楊貴妃の事を敍して「紅顏翠黛は元來天の生(な)せる質(かたち)なれば、何ぞ必ずしも瓊粉金膏の假なる色を事とせん」。生まれながらにして美しいので、立派な白粉や脂膏を塗る必要がないといふ意。

○三千の寵愛—多くの后妃の中で、たゞ一人御寵愛を專らにするといふ意。長恨歌の句。

の石の魂にて候べし。左樣に候はば。一喝喝し衣鉢を授けて御通り候へ

ワキ「ここなかしく語り候ものかな。唯今の女性は疑ひもなき玉藻の前の執心。法味に逢はん爲現れたると存じ候間。石面に向ひ喝して通らうずるにて候。急ぎ拂子を上げ候へ

狂言「さあらば御拂子を參らせうずるにて候。これにて一喝喝して御通り候へ。我等も心經を讀みてなりとも。力を添へ申さうずるにて候

といひて拂子をワキに渡し狂言座に着く。

ワキ拂子を持ちて作物の前に出で、

【五】

ワキ(ノット)「木石心なしとは申せども。草木國土悉皆成佛と聞く時は。もとより佛體具足せり。況んや衣鉢を授くるならば。成佛疑ひあるべからずと。花を手向け燒香し。石面に向つて佛事をなす。汝元來殺生石問ふ石靈。いづれの所より來り。今生かくの如くなる。急々に去れ去れ(拂子を振り)。自今以後汝を成佛せしめ。佛體眞如の善心となさん。攝取せよ

【六】

出端の囃子にて、後ジテ野干、作物の中にて、

後ジテ「石に精あり。水に音あり。風は大虛にわた

【五】 後段

玄翁、殺生石の前に出て、

玄翁「石や木には心がないといふものの、經文にも『草木も國土もすべて成佛する』と說かれてあるのだから、すべてのものがみな佛となるべき本性を具へてゐるのだ。ましてここに引導を渡したならば、石魂の成佛しない筈はない」

といつて、花を手向け燒香をして、殺生石に對して供養をし、

玄翁「汝、殺生石の靈に尋ねるが、汝は元來何處から來て、このやうなものとなつたのだ。すぐさま執心を去れ。今より汝を成佛せしめ、誠の佛たる善心にたち歸らせてやらう。極樂往生せよ」

と偈を與へる。

【六】

後ジテ殺生石魂は石の姿のままで、

石魂「水に音があり、風の空を走るが如く、

○心經—般若心經。

【五】

○木石心なし—白氏文集に「非二木石一皆有レ情」

○草木國土悉皆成佛—佛家の常に用ゐる偈文「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」を引いた。

○佛體具足せり—萬物すべて成佛すべき本性を備へてゐるとの意。

○汝元來殺生石—以下玄翁が殺生石に引導を渡す詞。海藏寺開山傳には「汝既にこれ石靈、何れの處よりか來る、性いづくに向つて收る。」偈を題して曰く、法々塵々端的底、本來面目未二曾藏一、現成公案大難事、異類中行任二度量一」としてゐる。

○佛體眞如—眞實にして變化することのない佛體。

○攝取—極樂へ迎へ取ることで、ここでは成佛せよとの意。

【六】

○石に精あり—風は大虛にわたる—まで成語であらうが、出典は分らない。

る

地「像を今ぞ現す石の。二つに割るれば石魂忽ち
現れ出でたり。恐ろしや

作物は二つに割れ、シテ野干は面小飛出・赤頭・赤地金襴鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて床几にかゝり居る。

ワキ「不思議やなこの石二つに割れ。光の内をよく見れば。野干の形はありながら。さも不思議なる仁體なり

シテ「今は何をか包むべき。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后褒姒と現じ。わが朝にては鳥羽の院の。玉藻の前とは。なりたるなり。われ王法を傾けんと。假に優女の形となり。玉體に近づき奉れば御惱となる。既に御命を取らんと。悦びをなしし處に。安倍の泰成。「調伏の祭を始め。壇に五色の幣帛を立て。玉藻

石にも精魂があるのだ。今その姿を現して見せる」

といふや否や、殺生石は二つに割れて、中から恐ろしい石魂の姿が現れた。

後ジテ狐の姿で石の中から現れ出る。

玄翁「これは不思議だ。この石が二つに割れて、光を放つて現れ出たものを見れば、狐の姿をしてゐるが、實に變な人相のものだ」

石魂「今は何を隱さう。自分は天竺では班足太子の祭つた塚の神となり、支那では周幽王の后褒姒となつて現れ、わが日本では、鳥羽院の御代の玉藻前となつたものである。自分は王道を傾けようと企て、假に美女の姿となつて、玉體に近づき奉ると、帝は御病氣に罹らせ給うた。それで、今にも御命を取らうと悦んでゐたところ、安倍泰成が魔障降伏の祈禱を始め、祭壇に五色の幣帛を立て、玉藻前に御幣を持たせて、必死になつて祈つたので、すぐ身體中が苦しくなつたから、幣

○野干　狐の異名。
○班足太子―仁王經護國品に見えた惡人。曾我物語卷七「班足王の事」に「仁王經の文をば御覽じ候はずや。昔天竺に帝一人おはします。名をば班足王と申す。外道羅陀の教訓につきて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、其の位を奪ひ大王にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に押し寄せ〳〵搦め捕り、既に九百九十九人の王をとり……」とある。
○褒姒　周幽王の寵姫。幽王褒姒を溺愛して國政を忘れ遂に國を亡ぼした事、史記等に見ゆ。平家物語卷二「烽火の事」に「周の幽王、褒姒といふ最愛の后をもち給へり。……さてこの后野干となりて走り失せけるぞ怖しき」

○肝膽を碎き―必死になり

○五體―からだ。五とは、筋・脈・肉・骨・皮の稱、又は頭・頸・胸・手・足の稱、又は頭・兩手・兩足の稱であるといふ。

【七】

○三浦の介上總の介―海藏寺開山傳に「帝三浦介義明千葉介常胤上總介廣常に詔してその狐を下野の國那須野に殲たしむ」と記す。

○犬追物―騎馬で犬を追ひまはせてこれを射る法。武藝の練習を兼ねた遊びである。

に御幣を持たせつつ、肝膽を碎き祈りしかば地やがて五體を苦しめて。やがて五體を苦しめて幣帛をおつとり飛ぶ空の（と臺を飛び下り）。雲居を翔り海山を越えてこの野に隱れ住む（と常座に出づ）

【七】

シテ「その後勅使立つて　これより謡に合せて仕科。

地「その後勅使立つて。三浦の介。上總の介兩人に。綸旨をなされつつ。那須野の化生のものを。退治せよとの勅を受けて。野干は犬に似たれば犬にて稽古。あるべしとて百日犬をぞ射たりけるこれ犬追物の始めとかや

シテ「兩介は狩裝束にて

地「兩介は狩裝束にて數萬騎那須野を取りこめて草を分つて狩りけるに。身を何と那須野の原

帛をとつて空へ飛び上り、雲を翔り海や山を越えて、この那須野に隱れ住んでゐたのだ」

【七】

石魂「ところが、勅使が立つて、三浦介・上總介兩人に、那須野の化生の者を退治せよと仰せ下された。兩人は勅命を畏み奉り、『玉藻前は狐に化けたといふが、狐は犬に似たものであるから、これを討つには犬で稽古するがよい』といつて、百日の間犬を射て練習した。これが犬追物の起原だといふことだ。――それから、三浦介・上總介の兩人は、狩裝束をして數萬騎を率ゐて那須野を取圍み、草を分けて狩り盡したので、どう隱れる術もたく現れ出たところを、狩人に

に。現れ出でしを狩人の。追つつまくつつさくりにつけて。矢の下に。射伏せられて（扇にて射當てられた形をして平坐）。即時に命を徒らに。那須野の原の。露と消えても猶執心は（立ちて臺へ上り）。この野に殘つて。殺生石となつて人をとること多年なれども今逢ひ難き。御法を受けて。この後惡事を致すこと。あるべからずと御僧に（とワキの前へ行き兩手をつき）。約束かたき。石となつて（立上り）。約束かたき石となつて。鬼神の姿は失せにけり

臺へ飛び上りて袖留をし、終つて幕に入る。

追ひまくり追ひ立てられて、さくり（溝）の所で遂に矢に射伏せられ、忽ちに命を失つたのである。しかし、かうして那須野の原に死んだ後も、やはり執心が殘つて殺生石となり、多年の間人を殺してゐたが、今ありがたい供養を受けたのだから、この後は決して惡事を致しません」と、玄翁に向つて石の如き堅い約束をなし、身はもとの石となつて、その鬼神の姿はなくなつてしまつた。

○さくり—犬追物など騎射の時、馬を驅けさける爲に、馬場に掘つた溝。

○那須野の原の—命を徒らになすを地名にいひかけた。

○逢ひ難き御法—容易に受けられない引導を得てといふ意。平家物語に「人身は得難く、佛敎には逢ひ難し」

○約束かたき—約束の確かなことを石の硬いことにいひかけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

五流の間、著しい差異はない。

古諸本（光悦本）

【二】シテ「なう（光〳〵あれなる御僧）その石に……　シテ「それは那須野（光のはら）の殺生石……　ワキ「御身の風情言葉の末。謂れ（光負）を知らぬ……　ワキ「石に殘りて惡念の（光を）　【三】（光ワキ「さらばたまものまへの御事懇に御物語り候へ）地クリ「抑もこの……　シテサシ「然れば紅（光容）色を事とし……　【六】ワキ「不思議やな……野干の形はありながらさも不思義なる（光おそろしき）人體なり

攝待　觀（寶剛喜）

解說

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　狂言　佐藤館の從者、ツレ　源義經、ワキ　辨慶、ツレ　増尾兼房、ツレ　鷲尾十郎、ツレ　外同行山伏（八人）、子方　繼信の子鶴若、シテ　佐藤繼信の母

【所】　岩代國　佐藤館

【時】　鎌倉初期（三月）

【作者】　能本作者註文には作者不明とし、二百十番謠目録には宮増の作とす。親元日記に文明十五年三月十二日演能の事が見えてゐる。

【梗概】　佐藤繼信の母が山伏攝待をして、義經の一行を待ち受けてゐると、義經等主從十二人はさあらぬ態を裝うて、こゝへ立ち寄つた。そして辨慶等は初めは義經の一行であることを隱し立てたが、樹尾が彼等の名を指し當てたので、その實を告げ、樹尾の請によつて、辨慶は繼信が八島の戰に義經の身代りとたつたこと、弟忠信が兄の敵を討つ

たことを語つて聞かせた。母尼は今は亡きわが子を偲びながら、一行の爲に酒を勸めると、繼信の遺子鶴若がわが父の爲に給仕する心組で終夜酌をして廻つた。やがて一行が立ち出ると、鶴若はその御供をしたいとせがんだが、皆に慰めすかされて、涙ながらに一行を見送る。

【出典】 この山伏攝待の事は、平家物語諸本には見えないが、義經記卷八「次信兄弟御弔の事」に、

判官殿高館へ移らせ給ひて後、佐藤莊司が後家の許へも、折々御使つかはされ憐み給ふ。人々奇異の思ひをなす。ある時武藏を召して仰せられけるは、次信忠信が跡を弔はせ給ふべき由仰せられける。……孫ども後家ども引具して參る。御志の餘りに、御自筆にも法華經遊ばされ弔はせ給ふ。ありがたき例には人々申しあへり。

といひ、更に兄弟の母の所望により、兄弟の子を義信・義忠と名乘らせた由を記してゐる。（義經記の異本判官物語にはこの事件を記してゐない）。幸若舞曲の「八島」は本曲と相近いもので、義經が奧州へ下向の途中、計らずも佐藤の館に泊つて、母の所望により、辨慶が兄弟最期の樣を語つて聞かせる、と記してゐるのであるが、兩者制作の前後が確かでなく、從つて孰れが他に影響したものか分らない。本曲の挿話、辨慶の軍物語は、平家物語卷十一「嗣信最後の事」（源平盛衰記では卷四十二「源平侍共の軍付繼信盛政孝養の事」）に據つたもので、平家物語には次のやうに記してゐる。

能登殿獵軍は樣あるものぞとて、……中にも源氏の大將軍九郎義經を唯一矢に射落さんとねらはれけれども、源氏の方にも心得て、伊勢三郎義盛、奧州の佐藤三郎兵衞嗣信、同じき四郎兵衞忠信、江田源三、熊井太郎、武藏坊辨慶などいふ一騎當千の兵ども、馬の頭を一面に立て竝べて、大將軍の矢面に馳せ塞がりければ、能登殿も力及び給はず。能登殿「そこのき候へ、矢面の雜人原」とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも眞先に進んだる奧州の佐藤三郎兵衞嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へつと射拔かれて、暫しもたまらず、馬より倒にどうと落つ。能登殿の童に菊王丸といふ大力の剛の者、萠黃縅の腹卷に三枚兜の緒をしめ、打物の鞘を外いて嗣信が首を取らんと飛んでかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじと、よつぴいてひやうと放つ。菊王丸が草摺の外れを、あたたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登殿是を見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸を摑んで、船へからりと投げ入れ給ふ。敵に首を取られねども、痛手なれば死ににけり。

【餘評】 本曲は「安宅」とともに現行曲中の人數物で、シテが老女で所作の少い大曲とせられてゐる。諸曲中分量の最も多い、儞かかりの

部分よりも只詞の多い、極めて劇的な脚色であるが、しかし、劇能に通暁な、舞臺面の混雜がたく、文段の推移も甚だ滑らかである。殊にその内容は、老尼の子を思ふ至情、鶴若の父を慕ふ哀情、繼信忠信の主に對する忠烈、義經の臣を思ふ恩情、すべて武士道として望ましい大切な德行を網羅してゐる、まことに感激の深い曲である。

【序】

【序】 狂言佐藤館の從者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。佐藤の御内に仕へ申す者にて候。こゝに山伏攝待の高札を打ち申せとの御事にて候間。急ぎ高札を打ち申さばやと存ずる。（高札を打つ形をして）一段とよい。皆々承り候へ。唯今高札を打ち申して候間。山伏達の御通りあらばこなたへ申し候へ。構へてその分心得候へく

といひて狂言座に着く。

【一】 次第の囃子にて、ツレ源義經、兜巾・篠懸・襟淺黃・着附厚板・縞水衣・白大口・腰帶・小刀・扇・刺高數珠の裝束、ワキ辨慶、ツレ增尾兼房・鷲尾十郎以下同行山伏十人、いづれも義經と同樣の裝束（襟はワキ花色、ツレ朽葉）の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ山伏一同 次第「旅の衣は篠懸の。旅の衣は、篠懸の露けき袖やしをるらん

ワキ山伏一同 上歌「子に臥し寅に起き馴れて。子に臥し寅に起き馴れて雲居の月を峯の雪。その松島に參らんと、東路さして、急ぎけり東路さして急ぎ

【序】

【一】 舞臺は奥州佐藤の館で、まづ狂言館の從者が出て山伏接待のことを述べる。

その次が普通の序曲となり、奥州街道の態で、ツレ源義經、ワキ辨慶、ツレ增尾兼房、同鷲尾十郎等、主從十二人山伏姿で登場。

一同「山伏の篠懸衣を着て旅に出たが、道中さぞ辛いことで、露で袖まで濡らすことであらう」

と次第に旅の心持を述べ、

一同「毎日々々夜遲く寢て、朝は未明に起き、まだ空に入り殘つてゐる月を見たから、雪深い山越えをして、松島へ參らうと思ひ、東の旅を急いでゐることだ」

【一】

○旅の衣は―この次第は〔安宅〕と同文である。

○篠懸―山伏の着る上衣。麻で作り菊綴の紋を着く。深山の露を拂ふ爲のもの。

○子に臥し寅に起き―子は今の午後十二時、寅は午前四時。

○雲居の月を峯の雪―未明に起きて空の月を見るといふのを峯にいひかけ、雪を踏んで山越えをするといふ意に用ゐた。

○松島―陸前國宮城郡にあり日本三景の一。雪の緣で松島を呼び出したのである

千載集顯昭法師の歌に「波間より見えし氣色ぞ變りぬる雪降りにけり松の浦島」

○高札―高く掲げた立札。

○佐藤の館―繼信・忠信の家で、岩代國信夫郡飯坂にその遺跡がある。或は羽前國南置賜郡花澤であるともいふ。
○山伏攝待―攝待は接待と同じ意。山伏(修驗道の行者)を饗應すること。
○憚りにて候―落人の身であるから、縁故ある者の家に立ち寄るのは危險であるとの意。

けり

ワキ「その松島に參らんと」と正面に向きて三四足出でまたもとへ歸りて奥州に着きたる心。上歌濟みて、ワキ、一のツレ兼房に向ひ、

ワキ「いかに申し候。まづこの所に御休みあらうずるにて候

兼房「承り候。(目附柱の方を見て)や。これに高札の立つて候御覧候へ

ワキ、兼房と同じ方を見て、

ワキ「何々佐藤の館に於て。山伏攝待と候。やがて御着き候へ(と兼房へ向く)

兼房「佐藤の館に於て山伏攝待の事は。われ等が望む所なれども。佐藤の館が憚りにて候程に。御通りあれかしと存じ候

ワキ「これは仰せにて候へども。唯知らぬやうにて御着きあらうずるにて候(と義經へ向く)

義經は脇座へ行き、兼房以下順次見て座より大小前へかけて

といつてゐるうちに、一同佐藤の館の前に着いた態。

辨慶(兼房に向ひ)「增尾殿、わが君は一先つこの所にお休み遊ばされたらよからうと思ふが……」

兼房「それがよいでせう。(門前の高札を見て)やあ、これに高札が立つてある、御覧なされい」

辨慶(高札を見て)「何と書いてある、「佐藤の館に於て山伏に饗應する」と書いてあるわ。早速參らう」

兼房「いや、佐藤の館で山伏に饗應するといふのは、自分達にとつて嬉しいことではあるが、このやうな落人の身では、縁故のある館へ立ち寄るのは危險だから、これには寄らないで、通り過した方がよからうと思ふが……」

辨慶「それも尤もだが、唯知らぬ振りをして、御出でになればよからう」

ここで一同佐藤の館に立寄る。

〔[illegible]〕お救れ、一夜の宿を」この狂言あ[illegible]のワキ詞、春藤流に據る。

【三】

〈一〉御前に候」この狂言詞及び次の「十二人御着きにて候」、[illegible]下にもある。

弓形に立ち並び、ワキはその中央に立つ。狂言名乗座へ出で、

狂言「いや山伏達の御着きにて候。急いで請じ申さう。（ワキに向ひ）いかに客僧達、遙々の所さぞかしおしんどうにて候べし

ワキ「一夜の宿を所望申し候

狂言「お幾人御出で候ぞ

ワキ「十二人候

狂言「暫く御待ち候へその山中さうすゐにて候

ワキ「心得申して候

【三】

義経床几にかゝり、ワキ・ツレ一同下に居る。

子方鶴若、襟赤・着附厚板・掛素袍・白大口・小刀・扇の装束にて幕より出でながら、

子方　いかに誰かある

狂言一の松へ出で、

狂言「御前に候

子方　三の松にて、山伏達は幾人御着きあるぞ

狂言「十二人御着きにて候

子方　まづまづ出でて對面申し候べし

狂言「御もつともにて候

狂言と入替りて子方常座へ出で下に居る。（狂言は切戸より入る）ワキ子方を見て、

【三】

子方鶴若登場して、

鶴若　誰かゐないか

狂言宅者、鶴若の前へ出で、

従者「お前に居ります」

鶴若「山伏達は幾人お着きになつた

従者「十二人お着きになりました」

鶴若「では、まづ出て對面しよう

鶴若従者と入替つて前へ出る。弁慶これを見て、

○佐藤繼信―名は三郎。委しくは後に出づ。
○御內―御家の內。
○判官―檢非違使尉。義經をさしていふ。
○八島―讃岐國高松市の東にあり、今屋島と書く。昔源平激戰の地。後に委しく出づ。
○奥―陸奥。廣く奥州をいふ。
○祖母―繼信の母。藤原清衡の末子亘理十郎清綱の女
○粗忽―そそつかしいこと

ワキ「これなる幼き人は誰が御子息にて渡り候ぞ
子方「これは佐藤繼信が子にて候
ワキ「さて繼信殿は御內に御座候か
子方「判官殿の御供申し。八島の合戰に討たれて候
ワキ「さてこの攝待は如何なる人の御企てにて候ぞ
子方「判官殿十二人の山伏となり。奥へ御下りの由承り候程に。祖母にて候者この攝待を始めて候。見申せば方々こそ十二人御入り候へ。もし判官殿にては御座なく候か
ワキ「暫く候。かかる粗忽なる事を承り候ものかな。先々御內へ御入り候へ
（子方立ちて後見座にくつろぐ。ワキ立ちて名乘座に出で、

辨慶「この幼い人はどなたの御子息です」
鶴若「私は佐藤繼信の子です」
辨慶「して、繼信殿はお內にお出てか」
鶴若「判官殿のお供をして、八島の合戰に討死しました」
辨慶「では、この接待はどなたのお催しです」
鶴若「判官殿が主從十二人で山伏姿となり陸奥へお下りになるといふ事を聞きましたので、祖母がこの接待を始めたのです。お見受けするのに、あなた方は丁度十二人お出てになるか、もしや判官殿ではございませんか」
辨慶「一寸お待ちなさい。これはまたそそつかしい事をいふ人だ。まあ兎に角家の中へお入りなさい」
（鶴若を館の內へ入れて、

ツレ「さればこそ御大事にて候。（眞中へ出て義經に辭儀して）恐れながら御座を替へられ。皆々の中にうち交り御座候へかしと存じ候

判官「げにこれは尤もにて候

義經は立ちて三人目のツレの次に坐し、ツキはもとの座につく。

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ繼信の母、面姥・姥鬘。花帽子・襟白・着附摺箔・無色唐織着流・数珠の裝束にて橋懸三の松へ出て、

シテ「いかに鶴若

子方立ちて一の松へ出て、

子方「何事にて候ぞ

シテ「山伏達は幾人御着きあるぞ

子方「十二人御着き候

シテ「かしましかしまし

正面に向き、

シテ一聲「舊里を出でし鶴の子の、松に歸らぬ。寂しさよ（としをる）

○大事—危いこと

○御座—御坐席。

【三】

○鶴若—繼信の子。義經記卷八に、義經が繼信の子を三郎義信、忠信の子を四郎義忠と名づけたと記す。

○舊里を出でし鶴の子の—和漢朗詠集都良香の句に「鶴歸二舊里一丁令威詞可レ聽」とあり、遼東の人丁令威が山に入つて仙術を學び千年の後鶴になつて家に歸つたといふ故事があるので、この詞を借りて、繼信忠信が古里を出たまゝ戰死して歸つて來ない意に用ゐた。

辨慶「これは危險な事だ（と獨言をいつて、判官に向ひ）恐れながら御席をお替へになつて、皆の中へお交りなさいますやうにと存じます」

判官「いかにも、これは尤もだ」

と一行の中へ割り入る。

【三】

シテ繼信の母老尼登場して、

老尼「鶴若よ」

鶴若「何でございます」

老尼「山伏達は幾人お着きになつた」

鶴若「十二人お着きです」

老尼「おゝ聲が高い（と鶴若を制し）。故郷を出たきりで、いくら待つても、わが子の歸つて來ないのが寂しい」

と獨言をいひながら判官等の前へ出で、

子方シテの袖をとりて共に舞臺に入り眞中に坐す。シテワキへ向き、

シテ「げにや憚りある身として。御前に參りてさむらへば。且は亡き人の名をも朽たし。又は子どもの古の恥をも。顯すにてはさむらへども。餘りに御懷しき心ばかりにて。御前に參りて候なり。これは故佐藤莊司が後家。繼信忠信が母にて候。げにや親子恩愛の別れの餘りには。包むべき人目をも知らず。又は憂き身の恥をも顯すにては候へどもさりながら。この攝待と申すに。現世の祈りの爲にもあらず。後生善所とも思はず。嫡子繼信は八島にて討たれ。弟忠信は都にて失せけるとばかりにて。委しき事をも知らずして。ひとり悲しむ身を知る雨の。晴れぬ心や慰むと。この攝待を始めて候。札を立ててよりこの方。一日に五人三人。乃至一人二人。

○松に歸らぬ—鶴の縁で松を出し、松に待つをいひかけた。
○憚りある身—尼姿を遠慮したのである。
○亡き人—亡き夫をさす。
○名をも朽たし—名を汚し
○佐藤莊司—名は元治、繼信兄弟の父。陸奥國伊達信夫莊を領して、信夫莊司ともいつた。
○繼信—佐藤元治の嫡子で三郎兵衞といつた。義經に隨つて轉戰し、八島の戰に討死した。
○忠信—繼信の弟で、四郎兵衞といつた。文治元年義經の吉野山を落ちた時、身代りとなつて戰ひ、翌年京都で糟谷有季の兵に圍まれて自殺した。「忠信」「吉野靜」參照。
○現世の祈り—現在の身の安穩を祈ること。
○後生善所—死んだ後極樂淨土に往生すること。
○身を知る雨—涙。古今集、在原業平の歌「數々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」の詞を借りた。

（老尼）このやうな人前を遠慮したければならない老尼の身で、わが君の御前に出ますのは、亡き夫の名を汚すこととなり、又子供達に對しても、死んだ後の恥を出すことにもなるのでございますが、餘りにお懷しう存ぜられますので、御前に參つたのでございます。私は佐藤莊司の後家で、繼信忠信の母でございます。誠に親子死別の悲しさの餘り、人前を憚ることも忘れ、身の恥を顯すやうなことを致すのでございます。しかし、この接待と申しますのは、私の現在の幸福を祈る爲でもなく、又死んだ後極樂往生がしたいからでもございません。嫡子の繼信は八島で討たれ、次男の忠信は都で死んだとだけ聞きまして、委しい事も存じませんので、獨り悲しい思ひをして、涙の晴れる時もないので、心慰みにもと思つて、この接待を始めたのでございます。そして、接待の高札を立てましてより以來、一日に五人三人或は一人二人、山伏の見えない日はございませんが、十二人打揃つてお出になつたのは、今度が始めて

○いづれがそにて—どれが それで[illegible]。

○そと—そつと。

○利生—利益。

○親子よりも—親子の契りは一世、主從の契りは三世といひ慣はした諺による。

○數ならぬ身には—詞花集出羽辨の歌「忍ぶるも苦しかりけり數ならぬ身には涙のなからましかば」を引いた。

絶ゆる事はましまさねども。十二人はこれが始めにて候。いづれかわが君ぞ（とツレを見廻し）。いづれがそにてましますぞ夜も更けたり。人の知るべき事にもあらず。この姥が耳にそと御教へ候はば。この攝待の利生にて

〔下歌〕空しくなりし兄弟を二度見ると、思ふべし二度見ると思ふべし

〔上歌〕親子よりも主從は親子よりも主從は。深き契りの中なれば。さこそわが君も。あはれと思し召すらめ（とツレを見渡し）。殊更御爲に。命を捨てし郎黨の。一人は母一人は子なり（子方へ向きつつ）などや弔ひの。御詞をも出だされぬ（ワキへ向きつつ）。かほど數ならぬ。身には思ひのなかれかし。あら恨めしの浮世やあら恨めしの浮世や（[illegible]）

【四】

ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな、

でございます。どなたがわが君に渡らせられますか、もはや夜も更けまして、人の知る筈もございません。この姥の耳にそつとお教へ下さいますれば、それこそ攝待をしました利益で、亡くなつた兄弟が生き返つて來たやうに思ふことでございます。

—親子よりも主從の方が緣が深いものだと申しますから、わが君にも嘸可哀さうとお思ひ下さることでございませう。殊にここに居ります二人は、わが君の爲に命を捨てました者の母と子とでございます。それだのに、何故憐みのお言葉さへ下さらぬのでございます。このやうなつまらない身には、せめて歎きの種がないやうにと思ふのでございます。あゝ恨めしい、この世が恨めしうございます。

【四】

辨慶「これは意外なことをいはれるもの

われ等如きの山伏の。五人三人行き連れ行き連れ通り候が。今夜この攝待に十二人着きたればとて。判官殿とはかかる粗忽なることを承り候ものかなさりながら。繼信忠信の母にてましまさば。判官殿の御内の人の名字をば御存じ候べし。そなたより名をさして承り候べし

だ。自分達山伏は五人三人と遂々連れ立つて旅を致すもので、今夜この接待に十二人着いたとて、何の不思議もありません。それだのに、「十二人だから」といつて、判官殿と定められるのは、それは餘り輕卒なお言葉といふものです。しかし、繼信忠信の母御ならば、判官殿の御内の人の名字を御存じでせう。あなたの方から名をさしていつて御覽なさい」

シテ「仰せの如くわが子は御内にありし者なれば。大方は推量申すとも。さのみはよも違ひ候はじ

老尼「仰せの通り、私の子は判官殿の御内の者でございますから、大體は推量で申しても、さほど間違ひはございますまい」

兼房「かやうに物申す山伏をばどこ山伏と御覽じて候ぞ

兼房「では、かういふ私などこの山伏だとお思ひになる」

シテ兼房をよく見て、

シテ「まづ唯今物仰せられつる客僧は。この御供の中にては一の老體にて御入り候な。いでこの御供の中に年寄りたる人は誰ぞ。や。今思ひ出

老尼「まづ唯今物を仰しやつた方は、この御供の中では一番御老體でございますな。はて、この御供の中で年寄つた人と申せば、どなたでせう。おゝ思ひ出した、判官殿の御傅の增尾十郎權頭兼房殿で

○一の老體―一番の年長者。義經記卷七に兼房のことを記して「老の方の御めのと十郎權頭兼房、白き直垂に褐の袴を着て、白髪まじりの髻引き亂し……六十三になりにけるまゝにときんの山伏にぞなりにける」

○判官殿の御傳―義經記によれば義經の北方の傳で、卷七に「二の人（北方）は久我大臣殿の姫君……その後は乳母の十郎權の頭より外に頼む方ましまさず」

○羽黒山―羽前國東田川郡にあり、山伏修行の道場。義經記卷七、辨慶が義經に語る詞に「越後の國直江津は北陸道の中途にて候へば、それより此方にては羽黒山伏の熊野へ參り下向するぞと申すべし、それより後方にては熊野山伏の羽黒に參ると申すべき」

○この姥はもと播磨の者―莊司の妻は高衡の孫で播磨の者といふのは何に據つたのか分らない。

○鵯越―攝津國鐵枴嶺の中腹から一の谷の背後に出る危險な間道。

○鷲尾の十郎―平家物語卷九に、義經が辨慶をして一老獵師に山の案内を求めた時、熊王とて生年十八歳になりける小冠者を添ふる。やがて髻取り上げさせ給ひて、父をば鷲尾の莊司武久といふ間、是をば鷲尾の三郎義久と名乘らせて、一の谷の先陣せさせ、案内者にこそ具せ

たしたり。判官殿の御傳、増尾の十郎權の頭。兼房山伏にてましますな。（三のツレを見て）又あれなる山伏はどこ山伏にて御渡り候ぞ

鷲尾　これは出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候

シテ　いやこれは播磨の人の聲にて候。それを如何にと申すに、この姥はもと播磨の者。十三の年繼母を恨み都に上り。故莊司殿と契り。繼信忠信をまうけ。今かく憂きめを見候へば。唯恨めしうこそ候へ。さればわが國の人の聲なれば、などかは知らで候べき。いでこの御供の中に播磨の人は誰そ。これも思ひ出だして候。判官殿鵯越とやらんを通り給ひし時。狩人の姿にて參りあひ。そのまま名字賜はり。今までも御供と聞えし。鷲尾の十郎山伏にて御渡り候な

ざいませうがな。（鷲尾を見て）又あれに居られる山伏はどこの山伏でせうな」

鷲尾「これは出羽の羽黒山から參つた客僧です」

老尼「いや〳〵これは播磨の人の聲でございます。何故と申しますに、この姥はもとは播磨の者でございまして、十三の年繼母を恨んで都に上り、故莊司殿と契り、繼信忠信の子をまうけましたが、今このやうな憂き目を見て、恨めしう思つて居ります。それで、私の國の人の聲でございますから、知らない筈がありません。さて、この御供の中で播磨の人はとなたであらう。おゝこれも思ひ出しました。判官殿が鵯越とかをお通りになつた時、狩人の姿で見參し、そのまゝ名字を賜はつて今日までお供をして居られると聞いてゐる、鷲尾十郎殿でございませうがな」

ワキ「さてかう申す山伏をばどこ山伏と知ろしめされ候ぞ

シテ「この御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば。又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候も何とやらん物々しく見え給ひて候。あつぱれこれは西塔山伏ごさめれ。それならばもとは近江の人。三塔一の遊僧。今はまたわが君の、一人當千の武士よなう

地「武士も。物のあはれは知るものを。などされ.ばあまりに御心強くましますぞ。あかさせ給へ人々と餘所目も知らず、泣きゐたり人目も知らず泣きゐたり(しをる)

【五】

子方(シテに)「かく心もなき人々に。さのみ詞を盡し給はんより、今ははや御内へ御入り候へ

判官(子方に)「暫く候。まこと繼信の御子ならば。判

弁慶「それでは、かういふ山伏を何處の山伏だとお思ひになります」

老尼「このお聲は聞き分けるのが、實にむづかしうございます。都の人の聲のやうでもあれば、又近江の人の聲にも似て居られ、物を仰しやる様子も何となく物物しう見上げられます。さうだ、この方こそ比叡山西塔の辨慶殿でございませう。さうだとすれば、もとは近江の人で、比叡山第一の遊藝達者のお僧であり、今はわが君のお側離れぬ一騎當千の勇ましい方でございませうがな。

力の強い武士でも、物のあはれは知つてゐるものでございますのに、何故そのやうにお情がないのでございます。どうぞほんとの事を仰しやつて下さいませ」

と老尼は人の見る目も憚らずに泣いてゐた。

【五】

鶴若(老尼に向ひ)「このやうな情のない人々にそのやうに言葉を盡して仰しやつても無駄ですから、もう内へお入りなさいませ

判官「いや暫くお待ちなさい。そなたがほ

られけれ」とある。盛衰記にも鷲尾三郎經春とあり、十郎と記したものは見當らない。

○西塔山伏—武藏坊辨慶を指す。西塔は比叡山三塔の一。三塔とは東塔・西塔・横川の三僧房をいふ。

○三塔一の遊僧—比叡山第一の遊藝に勝れた僧。他流には惡僧とある。遊僧とは延年舞に於ける藝僧をいふ

○御心強く—情がない。

○あかさせ給へ—うち明け給へ。

【五】

つきにて……それに二……

〔二〕父給へ―父をたまへ、―
〔三〕岩木を結ばぬ―無情な木石から出来たものでない。源平盛衰記巻七に「車の前後に候ひける武士共も、さすが岩木を結ばねば、各袖をぞ濡らしける」白氏文集に「非二木石一皆有レ情」
〔四〕梅檀は二葉より―英俊の人は幼時から他に勝れてゐるといふ譬。觀佛三昧經に「栴檀根芽漸生長、纔欲レ成樹、香氣昌盛」平家物語に「栴檀は二葉より芳し」とこと見えたり
【六】
〔五〕御座を直し―もとの御座へお直りなされませ、

官殿と思しきをさし給ひ候へ
子方「承りて候とて、十二人の山伏の、皆御顔を見渡して（ツレを見廻し）。これこそそにておはしませ
（子方判官に向く）
判官「さてそにてあるべきとは何故に仰せ候ぞ
子方「いやいかに包ませ給ふとも。人にかはれる御粧ひ、疑ひもなきわが君よ
地「父給へならうとて走りよれば（子方判官へ走り寄る）、岩木を結ばぬ義経なれば泣く泣く膝に抱きとる（判官子方の肩に手をかけ）。げにや梅檀は。二葉よりこそ匂ふなれ（子方立ちてもとの座に着く）。まことに繼信が子なりけりと。餘所の見る目まで皆涙をぞ流しける

【六】
（ツレ一同しをる。ワキシテに向ひ、）
ワキ「今は何をか隠し申すべき。わが君にて御座候（判官に辭儀して）この上は御座を直され候へ

んとに繼信の御子ならば、どれが判官殿か分るであらう、指して御覽―
鶴若 畏りました―
といつて、鶴若は十二人の山伏の顔を見渡して、
鶴若 こなたが判官殿でございます。（と判官の方を指す）
判官 では、どうして判官殿だといはれるのだ
鶴若 いや如何にお隠しになつても、外の人とは違つた氣高い御様子、確かにわが君でございます。どうぞ父を返して下さい―
と、判官の側へ走り寄つたので、判官は木石で出來た人ではない、情愛の深い人なので、泣く泣く鶴若を膝に抱き寄せた。同行の山伏達も「いかにも流石に、栴檀は二葉の時から香が高い、といふ通りだ。流石繼信の子だ」と皆涙を流した。

【六】
弁慶 今は何を隠さう、そなたのいふ通り、わが君に渡らせられるのだ（判官に向ひ）今は何の御氣遣ひもございません、もとの

御席へお直りなさいませ」

判官脇座へ行き床几にかゝる。ワキは笛座の前に坐し、シテに向ひ、

判官、上席に坐る。

ワキ　老尼も近う御參りあつて御目にかかり申され候へ

辨慶（老尼に）「老尼も近う參つて、お目にかかられるがよからう」

シテ二三足前に出で判官に向ひ合掌して、

シテ　あらありがたや候。（ワキに向ひ）わが君を拜み參らするにつけて。子どもの事こそ思ひ出でられて候へ

老尼　ありがたうございます（と判官を拜んで、辨慶に向ひ）わが君を拜み得ましたにつけて、子どもの事が思ひ出されるのでございます」

ワキ　げにげに尤もにて候

辨慶　それは御尤もです」

シテ判官に向ひ、

シテ　いかに申し上げ候。繼信が八島にての最期の有樣。剛なりとも申し。又不覺なりとも申す。いづれか眞にて候やらん承りたく候

老尼（判官に）「申し上げます。繼信が八島で死にました時の態度が、剛勇であつたとも、又反對に卑怯であつたとも申しますが、どちらがほんとでございませう、お伺ひ致したうございます」

判官　いかに辨慶

判官　辨慶」

ワキ　御前に候

辨慶　お前に居ります」

判官　繼信が八島にての最期の樣を。委しく語つ

判官　繼信が八島で討死した樣を、委しく

○不覺―卑怯未練なこと。

○辨慶―もと比叡山の僧で牛若丸と主從の契約を結び爾來義經のお側を離れぬ剛勇智謀の臣となつた。「橋辨慶」「安宅」參照。

て老尼に聞かせ候へ

ツレ「畏つて候。（シテに向ひ）御諚と申し所望といひ。懇に語つて聞かせ申し候べし。御前近う御參り候へ

（シテ正面に向きツレの語を聞く）

ツレ「語」さても八島の合戰。今はかうよと見えしに。門脇殿の二男能登の守教經と名乘つて。小船にとり乘り磯間近く漕ぎ寄せ。いかに源氏の大將源九郎義經に。矢一筋參らせん受けて見給へとののしる。かう申す各々を初めとして。皆御矢面に立たんとせしが。何とやらん心遲れたりし處に。繼信は心勝りの剛の人にて。お馬の前にかけ塞がつて。義經これにありやとてにつこと笑ひて控へたり。さてその時に教經は。彎き設けたる弓なれば。矢坪を指してひやうと放つ。

○今はかうよ―今は最後である。
○門脇殿―清盛の弟教盛。六波羅の總門の脇に住んでゐたので門脇殿といつた。
○能登の守教經―兄は通盛。東鑑には一の谷で討死したとあるが、平家物語には壇の浦で入水したやうに記してゐる。以下平家物語の文に據つた。解說參照。
○かう申す各々―各々は我我の意。
○矢面―矢の來る正面。
○心遲れ―氣遲れする。
○義經これにありや―やは感動詞。
○矢坪―矢を射んとするねらひ場所、的。

老尼に聞かせてやれ」

錦戸「畏りました。（老尼に）わが君のお詞でもあり、又そなたのお望みでもあるから、委しく話して聞かせませう。お前近うお出でなさい」（ト老尼を近く呼び寄せ）

錦戸「さて、八島の合戰に、今は戰も終りだと思はれた時に、敵の一人の大將が「門脇殿教盛の二男能登守教經」と名乘つて、小舟に乘つて、磯近くへ漕ぎ寄せ、「おうい源氏の大將源九郎義經に矢を一本參らせよう。見事受けて見られよ」と大聲を立てた。その時、かう申す我々を初めとして皆、矢面に立つてわが君を防がうとは思つたが、何となく氣遲れ致したところ、繼信は心の勝れた剛勇の者なので、わが君の馬前に驅けつけ、矢面を塞いで「義經はこゝにゐるのだぞ」と、につこり笑つて立つたのです。――

さてその時に、教經は十分にひき絞つた弓なので、的を誤らずひやうと放つた。鎧一文字に、繼信の着てゐた鎧の胸板か

○鎧の胸板—鎧の胸にあたる一の板。
○押しつけ—鎧の背の所と革の所を横に通した板。
○揚卷—鎧の逆板につける揚卷結びの組紐。
○かけずたまらず—こだはりなく、滯りなく。
○着背長—鎧の一種、普通の鎧よりは草摺の長いもので、大將の着る料とす。
○草摺—鎧の腰のまはりに垂れたもの。
○大事の手—命にかゝはる重傷。
○たんだ—唯。
○なんぼう—何程、甚だ。

【七】
○日の下—天下。
○菊王丸—平家物語卷十一に「この童と申すは、元は越前の三位通盛の卿の童なりしが、三位討たれ給ひて後、弟の能登殿にぞ使はれける、生年十八歲とぞ聞えし。」

過たず繼信が着たりける。鎧の胸板押しつけ揚卷。かけずたまらずつつと射通し。後に控へ給ふわが君の。御着背長の草摺にはつたと射留む。さてその時に繼信は。馬の上にて乘り直らん乘り直らんとせしかども。大事の手なれば堪へずして。馬より下にどうと落つ。やがてわが君お馬を寄せ。繼信を陣の後に舁かせ。いかに繼信。いかにいかにと宣へども。たんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候

【七】

シテ「さてその時に弟の忠信は候はざりけるか

ワキ「あら愚かや忠信は。日の下に於て隱れましまさず。能登殿の童菊王丸。繼信が首を目がけ。渚の方に走り渡るを。忠信引いて放つ矢に。菊王が眞中射通されかつぱと轉べば。教經船より

ら押付を通して揚卷まで、ずつと射通し、後に控へて居られたわが君の御鎧の草摺に當つて射留まつたのです。——

その時繼信はなほも馬上に乘り直らうとしたが、命にかゝはる重傷を負うたので、遂に堪へられず、馬からどうと落ちた。わが君はすぐさまお馬を寄せられ、繼信を陣の後に舁ぎ入れ、どう致した、繼信、氣を確かに持て」と仰せられたが、次第に弱つて行つて、終に空しくなられたのです。繼信の剛勇にひき比べ、われら助けることも得せず、誠に面目もない次第です。」

【七】

老尼「その時弟の忠信はゐなかつたのですか」

弁慶「お尋ねまでもないこと、勿論忠信の剛勇は天下に隱れのない事です。その時、能登守の侍童の菊王丸が繼信の首を目がけて、岸邊に走つて來たのを、忠信が弓を引いて放つと、その矢に菊王丸は身體の眞中を射通され、かつぱと轉んだ。教

○わだがみ―髻の、押しつけの上にあつて髻根を結へ釣りあげてある部分。

○秘蔵に思せし―非常に大事に思つて居られた。

○思ひは同じ思ひ―敵も味方も悲しい思ひをしてゐるのは同じである。

○笈―山伏が物を入れて肩に負ふ箱。

飛んで下り、菊王がわだがみ掴んで、遥かの船に投げ入れ給へば、程なく船にて空しくなる。眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ取つて候へ

シテ「さては敵も大将に、事へ申しし御童

ワキ「継信は又わが君の、秘蔵に思せし御内の人

シテ「かれは平家の船の内

ワキ「こなたは源氏の陸の陣

シテ「かれも主従

ワキ「これも主従

シテ「思ひは同じ思ひなれば

ワキ「餘所の歎きを思ひ合はせて。御慰みも候へとよ

シテ「それは仰せまでもさむらはず。御身代りに立ち参らする上は。今世後世の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し。御笈をも肩に懸

経は舟から飛んで下り、菊王丸のわだがみを掴んで、遥か向ふの船に投げ入れられたので、菊王も間もなく船で死んだ。かうして弟の忠信が兄の敵を眼の前に討ち取つたのです」

老尼「それでは、敵も大将に事へた御童であつたのでございますね」

弁慶「継信は又わが君が御大事に思し召した御内人です」

老尼「敵の平家は船の内で……」

弁慶「味方の源氏は陸に陣をしき……」

老尼「敵も主従であり……」

弁慶「味方も主従でした」

老尼「成程、敵も味方も同じ思ひを致したのでございますな」

弁慶「だから、他の歎きをお思ひ合はせて、お慰めなさるやうにと思ふのです」

老尼「それは仰せまでもございません。わが君の御身代りにお立ちしたものならば、この上もない名誉でございます。それでも、せめて一人だけでも、今度のお供を致して、君の御笈をも肩にかけ、こ

け。この御座敷にあるならば
地「十二人の山伏の。十三人も連なりて唯今見ると思はばいかがは嬉しかるべき（しをる）

ワキ立ちて最後のツレの次（名乗座）へ行き下に居る。

（居クセ）

地クセ「その時義經。老尼に語り給ふやう。八島にて繼信今はかうよと見えし時。思ふ事あらば。委しく言ひ置けと。くれぐれ尋ね問ひしに。繼信その時に。息の下より申すやう。弓矢取る身の。御身代りに立つ事二世の願ひや三世の御恩を少し報謝する。命の輕き身は。露塵何か惜しからん。さりながら古里に。八旬に及ぶ母と十に餘るわらんべ。これらが事の不便さぞ。少し心にかかる雲の月に覆ひて光も暗くなる如く。そのまくれくれと。終に空しくなりにけり
判官かやうに郎黨を討たせつつ

○二世の願ひ—現世安穩、後生善所の願ひ。
○三世の御恩—過去現在未來に渉る君恩。
○八旬—八十。
○不便—氣の毒。繼信が末期には母や子の事を思ふ由平家物語等には見えない。
○心にかかる雲の—かゝる雲といひかけた。
○くれくれ—月の暗くなると、氣を失ふとを兼ねていふ。

の御席に居りましたならば、そして、十二人の山伏が十三人も連れ立つて、このやうに見る事が出來たならば、どんなにか嬉しいことでございませう」

その時義經が老尼に語られるには、判官「八島に於て、繼信が今は最期と思はれた時『思ふ事があるならば、何なりと委しく言つて置け』と、くれ〴〵尋ねたところ、繼信は息も絶え〳〵の中で申すには『武士として身を立てました者が、わが君の御身代りに立つ事の出來たのは後生の願ひも叶ふやうに思はれ、深い君恩も少しはお報い出來たやうに思はれ、本望に存じます。この輕い命の亡くなるのは、少しも惜しいと思ひません。たゞ故郷に八十になる母と十ばかりの子どもが居りますが、それらの者が可哀想で、この事が少し心にかゝります』と申すうちに、月に雲のかゝつたやうに氣も暗くなつて、遂に死んでしまつたのだ。このやうにわが家來を討死させ、苦心をして忠勤を勵んだのだが、その功にに、

○手を碎き—色々手段を盡し、

【八】

○月の盃—盃の形を月に譬へた成語。知らずしてあり、を有明の月といひかけ、月から盃を呼び起した。

○汲みて知る—酒を酌むと心を汲むと兼ねて用ゐた。

○涙とともに受けて—盃を受けると、涙を浮べてゐると。

○座敷にも直らで—自分の席にもつかないで、

地「自ら手を碎き。忠勤まこと曇らずは。終に治まる世に出でて。繼信忠信が。子孫を尋ね出だして。命の恩を報ぜんと。思ひし事も空しく。われさへかかる姿にて。その名をだにも名乘り得ぬ憂き身の果ぞ悲しき

【八】

シテ「母は思ひに堪へかねて。更くるも知らず有明の。月の盃取り出だしお酌にこそ參りけれ

と言ひながら前の心にて扇を開き二三足前へ出で判官に向ひ下に居る。

判官「げにや心を汲みて知る。人の情の盃を。涙とともに受けて持つ

判官盃を受くる心にてシテに向く、

子方「鶴若酌に立ち代り。別れし父の御前にて給仕すると思ひなして

と言ひながら立ち判官以下ツレ一同に酌をす。シテ扇を疊みてもとの座に歸り下に居る。

地「十二人の山伏の。終夜の酌を取り廻り。座敷

終に治まる世になれば、わが身も榮えるであらうから、その時には、繼信忠信の子孫を尋ね出して、命の恩を報じたいと思つてゐたのだが、それも無になつて、わが身さへこのやうな姿となり、その名をさへ名乘ることの出來ない辛い身の上となつたのが悲しい」

【八】

老尼は悲しさに堪へかねて、夜の更けるのも知らず、盃を取り出して、お酌をする。

判官「誠にその情深い好意を嬉しく思ふ」と涙ながらに盃を受ける。

鶴若は老尼と立ち代つて、死別した父の御前で給仕をするやうな心持で、夜通し十二人の山伏のお酌をして廻り、自分の席にも着かないで、甲斐々々しく立ち働いてゐる様は、父に見せたいやうであつた。

【九】
○靫―矢を入れて背負ふ具
○參らせよ―くれよ。從者に對していふ詞。
○兜巾―山伏の頭に戴くもの。

にも直らで進み勇める有様を。父に見せばやと
ぞ思ふ

子方酌し終りてもとの座に歸り下に居る、

地「さる程に。夜もほのぼのと明け行けば。夜も
ほのぼのと明け行けば（ツレ判官に辭儀）。暇申して
さらばとてはやこの宿を立ち出づる

判官以下一同立ち上る。子方立ち仕手柱際にて幕に向ひ、

【九】子方「いかに誰かある馬に鞍置き。弓靫參らせよ。
君の御供申さうずるに

シテ子方へ向き立ち上りながら、

シテ「そも御供とは何事ぞ
子方「君の御供してこそ。親の敵にも逢ふべけ
れ
シテ「それは弓矢の御供なり。これは修行の山伏
道に。何の敵のあるべきぞ
子方「さあらば思ひ出だしたり。小さき兜巾篠懸

かうしてゐるうちに、夜もほの〲と明けて行つたので、判官等は「それではお暇申す」といつて出發する。

これを見て、鶴若は立上り、

【九】
鶴若「誰かゐないか。馬に鞍を置き、弓や靫を持つて來い。わが君の御供をして參るから」
老尼「お供とは、一體何のことをいふのだ」
鶴若「わが君の御供をしてこそ、親の敵にも逢ふことが出來るのでございますもの」
老尼「それは軍の御供をする時のことだ。これは山伏修行のお旅であるのに、どうして敵に逢ふことが出來ようぞ」
鶴若「それでは分りました。小さい兜巾と

〇まことさらか—實にて候かの訛り。
〇なかなか—然り—といふ意の時代語。
〇すかされ—賺され—慰められること。

を、とく拵へてたび給へ　山伏道の御供せん
ワキ「辨慶涙を押へつつ、（子方に向ひ）いかに申さん
鶴若殿、まことに御供ありたくは。今日は道具を
拵へ給へ。明日は迎ひに參るべし
子方「まことさうか
ツレ「なかなかに
宿房「われも迎ひに參るべし
ツレ「われも迎ひに參らんと
地「面々聲々にすかされて。いとけなき身の悲し
さは（子方シテの側へ行き共に下に居り）。まことぞと心得
て、少し詞の弱りたる、折を得て客僧は、泣く泣
く宿を出でければ
「折を得て客僧は」と判官以下一同橋懸へ行き幕に入る。子
方立ちて名乘座へ行く。
シテ「老尼は鶴若を抱き入れ
シテ・ツレも立ち一子方と共に橋懸の方を見送り、

篠懸とを早く拵へて下さい、山伏修行の
お供をしませう」
辨慶はこのいぢらしい樣を見て、流れ
出る涙を抑へながら、
辨慶「ねい鶴若殿、ほんとにお供がしたい
ならば、今日は道具をお拵へなされ、明
日迎へに參りませう」
鶴若「ほんとですか」
辨慶「ほんとですとも」
宿房「私も迎へに參らう」
同行「私達も迎へに參らう」
と一同の者にあやされて、鶴若は幼い
身の悲しさに、この詞をほんとだと思
つて、少しいひ張るのが弱つた。その
隙に判官等一同は泣く泣く、宿を出立し
たので、老尼は鶴若を抱いて家へ引き
入れた。

これから出立して行く人の方には、慰む術もあらうが、跡に殘された二人は、たゞ涙にくれることであらう。

地「行くは慰む方もあり。とまるや涙なるらんと
まるや涙なるらん

「とまるや涙なるらん」とシテは下に居り、子方は立ちたるまゝにてしをり、謡終りて幕に入る。

○行くは慰む方もあり―この句「蟬丸」にもある。當時行はれた諺であらう。

〔考　異〕

諸　流　（觀寶剛喜）

本曲は諸流の間、詞の出入が甚しい。その中、寶生との差が最も著しく、剛喜の二流は寶生に稍近いから、觀・寶の著しい相異を指摘すれば、

【序】狂言「かやうに候者は……心得候へ〳〵（寶男「かやうに候者は佐藤の御内に仕へ申す者にて候。さてもさる子細候ひて山伏攝待を御企て候間、今日も山伏達の御通り候はゞ、罷り出で留め申さばやと存じ候） 【一】ワキ「いかに申し候……寶男「承り候……ワキ「心得申候（寶この所に皆々御休み候へ。や。これに高札の候讀まばやと存じ候。何々佐藤の館に於て山伏攝待。これは一大事の御事にて候。さて何と候べき。寶男「攝待はとる事にて候へども。佐藤の館が如何にて候。ワキ「げにげに佐藤の館が如何にて候ぞりながら。攝待とある札を見ながら直に御通り候はゞ、中々人もあやしめ候べし。たださらぬ由にて御泊まりあれかしと存じ候。判官「兎も角も御はからひ候へ。ワキ「畏つて候。さあらば貝を立てうずるにて候。男「貝が鳴り候。山伏達の御着きにてありげに候。罷り出で門へ入れ申さう。や。これは怪しからず大勢御着きにて候。皆々から御座あらうずるにて候。ワキ「心得申し候。男「まづ〳〵山伏達の御着きの由を主に申さうずるにて候） 【六】ワキ「（寶言語道斷。はや鶴若殿の御覧じ切りて候程に）今は何をか隠し（寶包み）申すべき……ワキ「げにげに尤もにて候（寶ナ……この所はこの跡がはからひにて候程に、御心安くいつまでも御座あらうずるにて候。ワキ「心得申し候）

古謡本　（貞享二年本）

【一】寶男「承り候や（貞ナシ）これに高札の……　ワキ「（貞承候）何々佐藤の館に於て……　【二】ワキ「これなる内を人は誰が御子息にて渡り（貞御入）候ぞ……ワキ「さればこそ御大事にて……判官「げにこれは尤もにて候（貞ナシ）　【三】地下歌「空しくなりし兄弟（貞大信）を二

度見るも……【四】シテ「まづ唯今物仰せられ……兼房山伏にてましますな又あれ（貞今度）年寄たるか兼房ならば。尼公も兼房にて候

「さかしやわらけしからずの仰や候。なふ〳〵（貞是）なる山伏は……御渡り（貞人）候ぞ……シテ「この御聲こそ……都（貞京）の人の……近

江の人の聲にも似たり（貞いて此御内にあふみの人はたそ。實是も思ひ出したり」はしめより器量こつから人に勝れ）これは西塔（貞舞

塔）山伏ごさんなれ……三塔一の遊（貞惡）僧……地「武士も……御心強くましますぞあかさせ給へ人々と餘所（貞と扶にすかり諸共に人）目

も知らず……【五】子方「かく（貞如何にらはにせ）小僧」心もなき人々に……今ははや（貞ナシ）御内へ……判官「暫く候（貞是なるわら

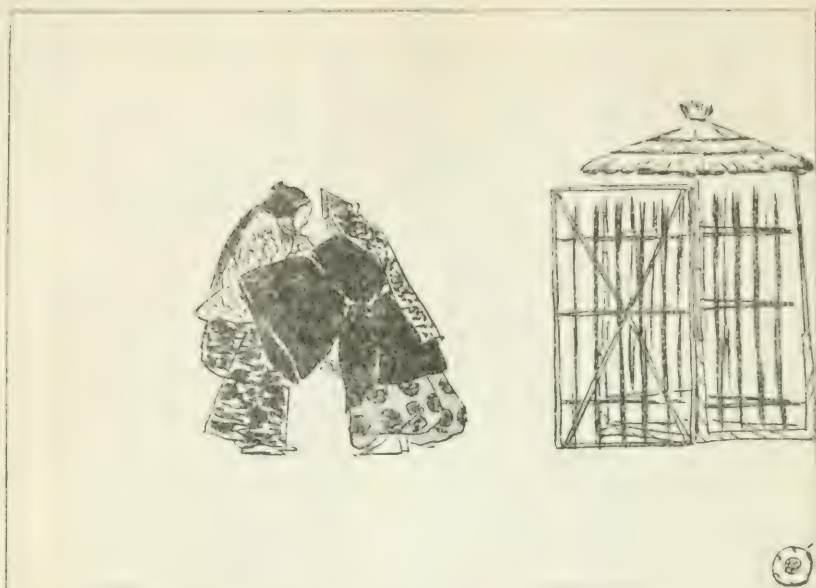
んべは）こさかしや事を申物哉）まことに（貞信の御（貞ナシ）子ならば（貞主君）判官殿（貞ナシ）と思しき（貞者）をさし給ひ（貞えつて出し）候へ

判官「さことにてあるべきとは何故に仰せ候ぞ（貞謂はいかに）……【六】ワキ「今（貞此上）は何をか……わが君にて御座候この上は

（貞いそなて）御座を……老尼も（貞ナシ）逝う御参り……シテ「あらありがたや候（貞ナシ）わが君を……ワキ「げにげに尤もにて候（貞ナシ）

判官「嗣信が八島にての最期の様を（貞しき）……ワキ「畏つて候御最と申し（貞御）所望といひ怨に（貞終夜）……ワキ「さても八島の合戦

（貞なにて）捲へたり（貞給ふ）【七】シテ「それは仰せまでも……一人なりとも（貞命ながらへ）御供申し……【九】子方「いかに誰か

ある（貞菊王）馬に鞍……シテ「それは弓矢の御供（貞事）なり……

蟬丸　觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　**ツレ**　蟬丸宮、**ワキ**　勅使（淸貫）、**ワキツレ**　輿舁（二人）、**狂言**　博雅三位、**シテ**　逆髮宮

【所】　近江國　逢坂山

【時】　醍醐天皇御宇（八月）

【異稱】　古く〔逆髮〕ともいつた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。但し能本作者註文には「別作と云說あり」と割註してゐる。世子六十以後申樂談儀に「逆髮の能に、宮の物に狂はんこと、姿大事なりし程に、水衣をたみてきし時、世に褒美せし也」と述べてゐる。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】　延喜帝第四皇子蟬丸の宮は御幼少より御盲目であらせられたが、帝は淸貫に仰せて宮を逢坂山に捨てさせ給うた。宮はこれも前世の業因を助けようとの父帝の御慈悲であると諦められたが、やがて淸貫が宮

の御髪を剃り、蓑笠杖を参らせて都へ立ち歸ると、さすが御淋しさに琵琶を抱いて泣き給ふのであつた。こゝに又延喜帝第三皇女逆髪の宮も、前世の業因で御心が亂れ、御髪は逆さまに生ひ上つてゐた。そして狂ひ狂ひ花の都を出で、逢坂山までお出でになると、藁屋の中から妙なる琵琶の音が聞えて來たので、立ち寄つて御覽になると、その内には御弟蟬丸の宮がお出でになつたのである。御姉弟の宮は不思議な御邂逅に、お互の御不運を御歎きあひになつたが、御名殘は盡きないながら、姉宮は別れてこゝをお立ちになつた。

【出典】この盲人蟬丸の事は、今昔物語卷廿四「源博雅朝臣行二會坂盲許一語第廿三」に、

今は昔、源博雅朝臣と云人有けり。延喜の御子の兵部（イ克明）卿の親王と申人の子也。萬の事止事無かりける中にも、管絃の道になむ極たりける。琵琶をも微妙に彈けり。……其時に會坂の關に一人の盲庵を造て住けり。名をば蟬丸とぞ云ける。此れは敦實と申ける式部卿の宮の雜色にてなむ有ける。此の宮は宇多法王の御子にて、管絃の道に極りける人也。年來琵琶を彈給けるを常に聞て、蟬丸琵琶をなむ微妙に彈く。而る間此博雅此道を強に好て求けるに、彼の會坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞て、彼の琵琶を極て聞ま欲く思けれども、盲の家異樣なれば不行して、人を以て内々に蟬丸に云せける樣、「何と不思懸所には住ぞ、京に來ても住かし」と。盲此を聞て其答へをば不云して云く、「世の中はとてもかくてもすごしてむ、みやもわらやもはてしなければ」と。使返て此由を語ければ、博雅此を聞て心憾く思えて、……琵琶に流泉啄木と云曲有り、此は世に絶ぬべき事也、只此盲のみこそ此を知たるなれ、構て此が彈を聞かむと思て、夜彼の會坂の關に行にけり。……

これが本曲の原據であらうと思はれるが、これには蟬丸を宮の雜色と記してゐて、もとより皇子ではない。江談抄にもこれと同樣の傳說を掲げてゐるが、これには「會坂目暗」とあるのみで、蟬丸の名も見えない。然るに平家物語卷十「海道くだり」に、

四の宮河原になりぬれば、こゝは昔、延喜第四の皇子蟬丸の、關の嵐に心をすまし、琵琶を彈き給ひしに、博雅の三位といひし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間步みを運び立ち聞きて、かの三曲を傳へけん、藁屋の床の古も、思ひやられてあはれなり。

と言つてゐるので、（源平盛衰記にも同樣の記事がある）謠曲作者はこれに據つて、更に逆髪といふ姉宮の狂女まで想像して、本曲を構想したのであらう。なほ蟬丸を延喜第四皇子とする說の起つたのは、小野小町家集に、

四のみこ失せ給ふつとめて風ふくに

○前世の戒行いみじくて―過去の世に於て佛の戒をよく保つたから。
○襁褓―むつき、産兒を包む衣。幼兒の意。
○五更の雨―五更は今の午前四時。雨は涙の喩。太平記卷廿一に「中流に船を覆しこ一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて五更の雨に向ふが如し」
○具足―作ふこと。鎌倉室町時代の慣用語。
○逢坂山―山城と近江との國境にある山
○綸言出でて―綸言は天子の御詞。禮記緇衣篇に「王言如絲、其出如綸」。源平盛衰記に「綸言汗の如し、出でて再び歸らずとこそ承れ」
○足弱車―車輪の遅い車。足の弱きものに譬へていふ。
○忍び路―密かに捨てに行く路。
○名殘の都路―名殘の多い都を、路にいひかけた。
○よる邊の―寄る邊なき事を、絲の緣しを片絲にいひかけ、絲の緣でよると續けた。片絲はまだ合せない絲。
○浮木の龜―幸運に逢ひ難い喩。雜阿含經に「譬へば大海中

します。ワキツレ「げにや何事も報いありける浮世かな。前世の戒行いみじくて、今皇子とはなり給へども、襁褓のうちよりなどやらん、兩眼盲ひましまして、蒼天に月日の光なく。闇夜に燈火暗うして、五更の雨もやむ事なし。ツレ「明かし暮らさせ給ふ處に、帝いかなる叡慮やらん。「密かに具足し奉り、逢坂山に捨て置き申し、御髪をおろし奉れとの、綸言出でてかへらねば、御痛はしさは限りなけれども、勅諚なれば力なく、

下歌「足弱車忍び路を、雲居のよそに廻らして。

上歌「東雲の、空も名殘の都路を、空も名殘の都路を。今日出でそめて又いつか、歸らんこともかた絲の、寄る邊なき身の行方、さなきだに世の中は、浮木の龜の年を經て、盲龜の闇路たどり

の宮に渡らせられるのです
（見物人へ、と紹介し、）
ワキツレ「誠にこの世の中の事はすべて前世の應報で、この蟬丸の宮樣も、前世で堅く佛戒をお守りになつた報いで、現世で皇子としてお生まれになつたのであるが、どういふわけか、御幼少の時から兩眼ともお見えにならず、月日の光をも知らず、闇黑の世をお過しになつて、悲しい御涙の乾く時もおありにならないのだ。宮樣はこのやうなお氣の毒な年月をお過しになつてお出でになつたところ、帝にはどう思し召したものか、我々に密かに宮樣の御供をして、逢坂山にお捨て申し、御髮をお剃り申せと仰せつけられた。世の中にこれほどお痛はしいことはないが、帝の仰せであるから是非もなく、氣の進まぬながら、密かに宮を出立することとし、夜の明方都を出たが、今日お出でになれば、もはやいつお歸りになれることか、見込のないお不仕合なお身の上だ。さうでなくても、この世の中に幸運といふことの實に少いものであるのに、まして御盲目の御身で、闇の世をお辿りになるとは、實にお氣の毒なことだ。……と御同

行く、迷ひの雲も立ちのぼる逢坂山に、着きに
けり逢坂山に着きにけり
ワキ「急ぎ候程に。これははや逢坂山に着きて候。この所に御
座候へ。[illegible]にて候
といひて、ツレは地藏座の前へ行き床几にかゝり、ワキは仕
手柱先にて下に居る。（ワキヅレは切戸より入る）

【三】
ツレ「いかに清貫
ワキ「御前に候（と手を突く）
ツレ「さてわれをばこの山に捨て置くべきか
ワキ「さん候宣旨にて候程に。これまでは御供申
して候へども。いづくに捨て置き申すべきやら
ん。さるにてもわが君は。堯舜よりこの方。國
を治め民を憐む御事なるに。かやうの叡慮は何
と申したる御事やらん。かかる思ひもよらぬ事
は候はじ
ツレ「あら愚かの清貫がいひごとやな。もとより

清貫申し上げてゐるうちに、逢坂山に着い
た」
[illegible]

【三】
ツレ蝉丸はこの山に置かれ[illegible]
蝉丸「おい清貫」
清貫「はい」
蝉丸「自分をこの山に捨てて置くのか」
清貫「左様でございます。帝の御仰せでご
ざいますので、ともかくこゝまでは御供
致しましたが、さてどこへお捨て申すべ
きやら、ほんとに恐れ多いことに存じま
す。それにしましても、わが君は上古の
聖王堯舜以來、他に類ひのない聖天子に
渡らせられ、誠によく國を治め民をお憐
み遊ばすのに、このやうな思召を、どう
して遊ばしたものか、全く意外千萬に存
じます」
蝉丸「清貫は何を馬鹿な事を申すのだ。も

[illegible]

【二】
○清貫―姓は藤原。醍醐天
皇の御時大納言であつた人
で、菅公亡靈の雷火に打た
れて死んだと傳へられてお
る。或は正字通に「侍從之
官曰二清貫一」とあり、侍從の
汎稱として用ひたものか。
○逢坂―[illegible]

○過去の業障—前世で悪業をなした爲に、現世で障りのあること。

【三】○香髪搔をきり—唐の李賀の美人梳頭歌に、西施曉夢綃帳寒、香鬟墮髻半沈檀」を聞違つて引いたもので原意は香鬟の香ばしいびんづら」や墮髻(下げ髪)の半が落ちて、沈水香や栴檀香の香と混融するとのことであるのを、爰には立派な髪の毛を斬つて、堅い檀を枕として寝るとの意に用ゐたのである。

○西施—呉王夫差が寵愛した美人。香髪云々の歌は西施の事を詠じたもので、西施が詠んだのではない。

盲目の身と生まるる事。前世の戒行拙き故なり。「されば父帝も、山野に捨てさせ給ふ事。御情なきには似たれども、この世にて過去の業障を果し、後の世を助けんとの御はかりこと。これこそ誠の親の慈悲よ。あら歎くまじの勅諚やな

ワキ「宣旨にて候程に。御髪をおろし奉り候

ツレ「これは何といひたる事ぞ

ワキ「これは御出家とてめでたき御事にて渡らせ給ひ候

【物着】ツレ床几を外し、髪を剃る心にて、後見ツレの狩衣を脱がせ角帽子を被す。

【三】ツレ「げにや香髪搔をきり。半ば檀に枕すと、唐土の西施が申しけるも。かやうの姿にてありけるぞや

ワキ「この御有様にては。なかなか盗人の恐れもあるべければ。御衣を賜はつて蓑といふものを

もともとこのやうな盲目の身に生まれたのは、前世の戒行の足りなかつた爲なのだ。それで、父帝が山野に自分をお捨てになるのは、御情ないやうではあるが、それはこの現世で過去の罪業を消滅させ、更には後生によい果報を得るやうにとの、深い思召によるのだ。これがほんとの親の御慈悲といふものだ。あゝ歎くまい歎くまい」

勅使「わが君の仰せでございますから、御髪をお剃り申し上げませう」

蟬丸「これはどうしたことなのだ」

勅使「これは御出家と申して、佛道にお入り遊ばすめでたい事でございます」

蟬丸剃髪し墨染衣を着る。

【三】蟬丸「昔支那の西施が美しい髪を斬つて、堅い木を枕にする」と申したのは、かういふ姿をいつたのであらう」

勅使「この立派なお召し物では、却つて盗賊に襲はれる心配がございますから、その御召物を戴きまして、この蓑と申すもの

○雨による田蓑の島―古今集雑上之歌「雨により田蓑の島をけふ行けば名にはかくれぬものにぞありける」をいふ。田蓑の島は大阪天王寺邊にあつたといふ。

○御侍御笠と申せ―古今集東歌「御侍御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」をいふ。

○つくからに―同集に「仁和の帝、親王におはしましける時に、御をばの八十の賀に、白銀を杖につくれりけるを見て、かの御をばに代りてよめる」と詞書して僧正遍昭の歌「千早振る神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり」をいふ。

○榮ゆく杖―坂行く杖と兼ねて用ゐた。

參らせ上げ候

ツレ蓑を受取りたる心にて、

ツレ「これは雨による田蓑の島と詠み置きつる。蓑といふものか

ワキ「又雨露の御爲なれば。同じく笠を參らする

ワキ後見より笠を受取り、ツレに渡す。ツレこれを手に持ちて、

ツレ「これは御侍御笠と申せと詠み置きつる。笠といふものよなう（といひて笠を下に置く）

ワキ「又この杖は御道しるべ。御手に持たせ給ふべし

ワキ後見より杖を受取り、ツレに渡す。

ツレ「げにげにこれもつくからに。千歳の坂をも越えなんと　かの遍昭が詠みし杖か

ワキもとの座に歸り下に居て、

ワキ「それは千歳の榮ゆく杖

ツレ「ここは所も逢坂山の

をさし上げます」

蝉丸「これが、――

『雨により田蓑の島を今日行けば、名にはかくれぬものにぞありける』

（雨が降つたから、丁度田蓑島といへば蓑の代りにもなららうかと思つて、難波へ來て見たが、地名では雨覆ひとならないものであつた）

と歌に詠んだ蓑といふものか」

勅使「また雨露をお凌ぎになる爲に、笠をさし上げます」

蝉丸「これは、――

『御侍御笠と申せ宮城野の、木の下露は雨にまされり』

（宮城野の木の下露は雨よりもひどいから、御侍よ御笠を持つて參るやうに申せ）

と歌に詠まれた笠といふものだな」

勅使「またこの杖はお歩きになる時のお頼りに、御手にお持ちなさいませ」

蝉丸「なるほど、これも――

『千早振る神の切りけんつくからに、千歳の坂も越えぬべらなり』

（この杖は神様のお作りになつたものだから、これをつけば、千年も長生きが出來るであらう）

と僧正遍昭の詠んだ杖か」

勅使「遍昭の歌に詠んだ杖は、千年の榮えを祝つたものでございますが……」

蝉丸「こゝは千年の坂ではなうて……」

ワキ「關の戸ざしの藁屋の竹の
ツレ「杖柱とも賴みつる
ワキ「父帝には
ツレ「捨てられて
地「かかる浮世に逢坂の、知るも知らぬもこれ見よや、延喜の皇子のなり行く果ぞ悲しき（ツレ面伏せ）行人征馬の數々、上り下りの旅衣、袖をしをりて村雨のふり捨てがたき、名殘かなふり捨てがたき名殘かな（ワキ、ツレに禮儀し）さりとてはいつを限りに有明の、つきぬ淚をおさへつつ、はや歸るさになりぬれば（ワキしをりながら立ち橋懸へ行く）皇子は後に唯ひとり、御身に添ふものとては、琵琶を抱きて杖を持ち臥しまろびてぞ泣き給ふ臥しまろびてぞ泣き給ふ

（ツレ琵琶を抱きて杖と笠を持ちて正面先へ出で、見えぬ目にてワキを見送る。ワキ二の松にてツレを見返して幕へ）

勅使「逢坂山の竹を柱としたお粗末な藁屋で……」

蟬丸「杖とも柱ともお賴みする父帝に捨てられて、このやうな辛い目に逢ふのだ。知る者も知らぬ者も見てくれ、これが醍醐天皇の皇子のなれの果てなのだ。あゝ悲しいことだ」

かういふ御痛はしい御有樣を拜しては京へ上る者も田舍へ下る者も、すべての旅人が淚に袖を濡らして、お側を立ち去ることが出來ないであらう。とはいふものの、何時まで經つても限りがないので、勅使も溢れ出る淚を抑へて、歸途に就いたので、皇子蟬丸宮は御身につけてお持ちになつた唯一つのもの――琵琶を抱いて、泣き臥されたのである。

○關の戸ざしの藁屋―玉葉集藤原實氏の歌「しひてやはなほ過ぎ行かむ逢坂の關の藁屋の秋の夕霧」に據つた。

○知るも知らぬも―後撰集蟬丸の歌「これやこの行くも歸るも別れつつ、知るも知らぬも逢坂の關」の詞を借りた。

○行人征馬―旅行く人や馬。和漢朗詠集源順の賦に「南望則有關路之長、行人征馬駱驛於翠簾之下、東顧亦有林塘之妙、紫鴛白鷗逆於朱檻之前」

○上り下り―京へ上つたり京から田舍へ下つたりすること。

○ふり捨てがたき―村雨の降りといひかけた。

○つきぬ淚―有明の月といひかけた。

○歸るさ―歸りがけ。歸路に就くこと。

○いかにあれなる童どもは—〔柏崎〕の後ジテの出と同一筆法。

○星霜を戴く—歳月を經て白髪となる意を、字義通りに天上の星、天より降る霜の意に用ゐたのである。

○柳の髪をも—和漢朗詠集都良香の詩句「氣霽風梳二新柳髪一、氷消波洗二舊苔鬚一」を借りた。

撫づれども下らず（髪を撫で下し）。「いかにあれなる童どもは何を笑ふぞ（と往来を見る心にて右の方へ向き）。「なにわが髪の逆さまなるがをかしいとや。げに逆さまなる事はをかしいよな。「さてはわが髪よりも。汝等が身にてわれを笑ふこそさかさまなれ。「面白し面白し。これらは皆人間目前の境界なり。それ花の種は地に埋もつて千林の梢にのぼり。月の影は天にかかつて萬水の底に沈む（と上下を見）。これらをば皆いづれか順と見逆なりといはん。「われは皇子なれども。庶人に下り（と舞ひながら舞臺に入り）。髪は身上より生ひのぼつて星霜を戴く。これ皆順逆の二つなり面白や（と舞臺に入り）

〔カケリ〕

シテ「柳の髪をも風は梳るに

逆髪「これそこの子供達、何がをかしうて笑ふのぢや。なに、私の髪の逆さまになつてゐるのがをかしいと申すのか。いかにも逆さまといふ事はをかしいであらう。しかし、逆さま事といへば、私の髪の逆さまなのよりは、お前達の身分で、皇女の私を笑ふ方が逆さまぢやぞ。いや面白いものだ。逆さま事は、人間の眼の前にいくつもあるのぢや。例へば花の種は地に埋もるのだが、それが成長すれば、茂つた梢となつて上へ上つて行き、月は高い天にかゝつてゐながら、その影は深い水底に映つてゐるのぢや。考へれば、そのいづれが順で、いづれが逆だか分らない。現在私自身が、身分は皇女でありながら平民の境界に下り、髪はからだから生ひ上つて、空に向つてゐるのだ。これ皆順逆二つの理を示してゐるのだ。ほんとに面白いことだ」（といつて）

〔カケリ〕
に狂亂の様を示し、

逆髪「風は柳の髪さへ梳るといふのに、私

○かなぐり――かきむしり。
○みての袂――みては御手か、或はめて（右手）又はまて（両手）の誤か。
○抜頭の舞――唐楽の名。教訓抄に、この舞は唐の后が嫉妬して鬼女となつたので牢へ入れられたのが、牢を破つて出て舞ふ姿であるといふ。亂髪の垂れかゝつた面を用ふ。枕草子に「抜頭は髪ふりあげたる眉など恐ろしけれど、樂もいと面白し」。
○花の都を立ち出でて――以下、四の宮河原四つの辻まで、曲舞「東国下」（世阿彌の申樂談儀に、作者たまりん、節曲舞南阿彌陀佛といふ）にあり、本曲はこの曲舞から採つたものか。以下この節の語釋、本曲の末に記す。

地「風にも解かれず
シテ「手にもわけられず（と髪を持ちて見て）
地「かなぐりすつるみての袂
シテ「抜頭の舞かやあさましや
（これより謡に合せ狂亂の心にて舞ふ。）
地上歌「花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。憂き音に鳴くか賀茂川や。末白河をうち渡り。粟田口にも着きしかば今は誰をか松坂や。關のこなたと思ひしに。後になるや音羽山の名殘惜しの都や。松蟲鈴蟲きりぎりすの。鳴くや夕陰の山科の里人も咎むなよ。狂女なれど心は清瀧川と知るべし
シテ「逢坂の。關の清水に影見えて
地「今や引くらん望月の。駒の歩みも近づくか。水も走井の影見れば。われながらあさましや。

の髪は風でも解かれず、手でもわけられない。一層のこと、かきむしつて捨てようかと手を頭にあてたその姿は、あの抜頭舞そつくりだ。あゝ淺ましいことだ――
（といひながら立ち出で、）
地謡　京の都を出て、悲しい思ひに泣きながら賀茂川を渡り、白河を過ぎて、粟田口に着くと、もう京の外れで、誰知つた人に逢ふこともないのだ。やがて松坂を過ぎ、いつの間にやら音羽山も後の方になつたことに氣がつくと、さすがに都が名殘惜しく思はれることだ。かうして、松蟲や鈴蟲きりぎりすなどの鳴く山科へ來た。この里人よ、私が狂人だからとて咎めるな、氣は狂うても心は清いものだぞ。（なにかといふうちにはや）――
「逢坂の關の清水に影見えて、今や引くらん望月の駒」
と歌に詠まれた逢坂の關にも近づいた。そして、この關の清水にわが影を映して見ると、われながら呆れるやうな姿だ。髪は荻の亂れたやうになり、顔は黒く亂

髮はおどろを戴き黛も亂れ黑みて。げに逆髮の影うつる。水を鏡と夕波のうつつなのわが姿や

（逢坂山に着きたる心にて後見座にくつろぐ。）

【五】

（ツレ藁屋の中にて琵琶を彈く心にて扇を開き左手に持ちて、）

ツレサシ「第一第二の絃は索々として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は。われ蟬丸が調めも四つの。をりからなりける村雨かな。あら心凄の夜すがらやな。世の中は。とにもかくにもありぬべし。宮も藁屋も。はてしなければ

（シテはツレの謠の間に仕手柱先へ出で、ツレ謠に耳を傾け、）

シテ「不思議やなこれなる藁屋の內よりも（と藁屋に向き）撥音氣高き琵琶の音聞ゆ。そもこれほどの賤が屋にも。かかる調めのありけるよと。思ふにつけてなどやらん。世になつかしき心地して。藁屋の雨の足音もせで。密かに立ちより聞き居たり（と靜かに眞中へ行く）

【五】○第一第二の絃は—和漢朗詠集白樂天の詩句「第一第二絃索々、秋風拂レ松疎韻落、第三第四絃冷々、夜鶴憶レ子籠中鳴」を引いた。索々は聲の亂れた貌。疎韻は絶え絶えな聲。

○第三第四の宮—前の詩の第三句を、第三の宮（逆髮）第四の宮（蟬丸）に轉じた。

○四つのをりから—四つの緒（四絃で琵琶の意）を折柄にいひかけた。

○世の中はとにもかくにもありぬべし宮も藁屋もはてしなければ—蟬丸の歌。第二三句今昔物語江談抄等には「とてもかくてもすごしてむ」、新古今には「とてもかくても同じこと」とある。

○世になつかしき—非常になつかしい。

○雨の足音—雨の脚を足音にいひかけた。

れ、逆髮の姿がそのまゝ映つてゐる。水を鏡といふが、その鏡に映つた私の姿のあさましさ、まあ何といふことであらう」

といつてゐるうちに、逢坂山へ來た態で、舞臺はもとの逢坂山となる。

【五】

蟬丸は獨居の淋しさに琵琶を彈いて、

蟬丸「第一第二の絃は索々として、秋の風松を拂つて疎韻落つ。第三第四の……（と謠ひかけて）……その第四の宮である自分が琵琶を彈いてゐると、折も折とて村雨が降る。あゝ何といふもの凄い夜たらう。いやそれも考へれば何でもないことだ。——

『世の中はとにもかくにもありぬべし、宮も藁屋もはてしなければ』——

（いづれこの世の中はいつまでも住み果てることの出來るものでないから、宮殿であらうと、藁屋であらうと、どうでもよいのだ）といふ歌を詠む。

逆髮は先程から蟬丸の琵琶を聞いてゐて、

逆髮「これは不思議だ。この藁屋の中から、撥音の氣高い琵琶の音が聞えるが、こんな粗末な家に、どうしてこのやうな立派に彈く人があるのであらう。さう思ふにつけても、何故かしら、非常になつかしい氣がする」

と逆髮は雨音に紛れて、密かに藁屋へ

○博雅の三位―醍醐天皇の皇子克明親王の御子、蟬丸に琵琶を學ばれた由今昔物語に見ゆ、解說參照。この方が琵琶の名手であつたことは大鏡にも見えてゐる。

ツレ扇を疊みて、

ツレ「誰そやこの藁屋の外面に音するは。この程をりをり訪はれつる。博雅の三位にてましますか

シテ「近づき聲をよくよく聞けば。弟の宮の聲なりけり。「なう逆髪こそ參りたれ。蟬丸は内にましますか

ツレ「なに逆髪とは姉宮かと。驚き藁屋の戸をあくれば

と杖を持ちて立上り戸を開く。

シテ「さもあさましき御有樣

と言ひながらツレの傍へ行き、ツレも作物の外に出づる

ツレ「互に手に手を取りかはし

と互に肩に手をかけて下に居り、

シテ「弟の宮か

ツレ「姉宮かと

忍び寄つて、琵琶を聞いてゐた。

蟬丸「この藁屋の外に人音のするのは誰だ、この頃時折訪ねてくれる博雅の三位ですか」

逆髪(獨言に)「近づいてその聲をよく聞けば、弟宮だ。(蟬丸に向ひ)蟬丸はこの内においでになるのですか、逆髪がこゝへ參りましたぞ」

蟬丸「なに逆髪といはれるのは姉宮樣ですか」

と驚きながら、藁屋の戸を開けると、

逆髪「これは何といふあさましいお姿だらう」

と姉弟の宮は互に手に手を取りかはし

逆髪「おゝ弟宮か」

蟬丸「姉宮樣ですか」

地「ともに御名を木綿附の。鳥も音を鳴く逢坂の。
せきあへぬ御涙。互に袖やしをるらん（二人しをる）
次ノクリに、シテ眞中に歸りて下に居り、
【六】
地クリ「それ栴檀は二葉より香ばしといへり。ま
してや一樹の宿りとして。風たちばなの香をと
めて。花も連なる。枝とかや
シテサシ「遠くは淨藏淨眼早離速離。近くは又應神
天皇の皇子
地「難波の皇子菟道の皇子と。互に即位謙讓の御
志、皆これ連理の情とかや
シテ「さりながらここはせうとの宿りとも
地「思はざりしに藁屋の内の。一曲なくはかくぞ
ともいかで調めの四つの緒に
シテ「引かれてここに。寄るべの水の
地「淺からざりし。契りかな
（[illegible]）

○木綿附の鳥—鷄の異名。逢坂關の名物として歌に多く詠まれてゐる。御名をいふといひかけたのである。
○せきあへぬ—關といひかけた。
【六】
○栴檀は二葉より香ばし—英俊の人は幼時から他に勝れてゐるとの古諺であるが、こゝでは高貴の方は自らその人柄で知られるとの意に轉用したのである。
○一樹の宿り—前世から離れ難い宿縁があつてといふ意に用ゐた。平家物語に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず」〔千手〕參照。
○風たちばなの—風立ちを橘にいひかけ、古今集讀人知らずの歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を引き、忘れることの出來ない兄弟といふ意にとり做した。
○連なる枝—連枝（兄弟の意）を述べていつた。
○淨藏淨眼—法華經にみえた兄弟の名。妙莊嚴王品に「有王名妙莊嚴、其王夫人名淨德、有二子、一名淨藏、二名淨眼」とあり、この兄弟は外道を信じてゐた父をして佛道に歸せしめた。

と互にお名を名乘つて、このやうな逢坂の關のかなしい邂逅に御涙が溢れ出て、互の袖を濡らされるのであつた。
【六】
逆髮「高貴の人はどことなくその人柄で知られるといはれてゐるのに、殊に私達は前世の宿縁の深い兄弟の間柄ですから、なつかしさにすぐ分つたのです。——
凡そ兄弟といふものは、遠い外國の例で申せば、淨藏と淨眼、又は早離と速離、近くわが國の例では、應神天皇の皇子の難波皇子と菟道稚郎子とが互に天子の御位をお讓りあひになつたのも、みな兄弟情愛の深い心から出たものです。しかし、こゝはまさかわが弟宮の住家とは思はれない賤しい藁屋で、琵琶の曲を聞かなければ、氣のつく筈もなかつたのですが、今の調べに心引かれて立ち寄つたのも、兄弟の縁が深いからです。——

○早離速離—淨土本緣經に見えた兄弟の名。同經に「於二南天竺一有二一先生一曰二長那一妻名二摩耶斯羅一得二二子一歡喜、招二古相一使レ見二二子一皆言別二離父母一不レ久、兄號二早離一弟名二速離一」果して早く實母に別れ繼母の爲に孤島に捨てられ、死後白骨となつて父に逢つたといふ。この故事、源平盛衰記・太平記にも出てゐる。
○鷦鷯の皇子—大鷦鷯尊即ち後の仁德天皇。
○菟道の皇子—仁德天皇の御弟菟道稚郎子。
○御位讓讓の御志—仁德天皇と稚郎子と互に帝位をお讓りあひになつた事は、古事記・日本書紀に記された著名な史實。
○連理—兄弟。連枝に同じ。
○せうと—兄人である。兄にも弟にもいふ。
○いかで訪めの—いかでと訪ふを和ら方を訪めにいひかけた。
○寄るべの水—神前に瓶を据ゑて汲み置く水。こゝに寄るといひかけ、水の縁で淺かふさせ（?）とし續けた。
○世は末世に及ぶとても—平治物語に「末代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを」この句、要害にもある。

地ウ「世は末世に及ぶとても。日月は地に墮ちぬ。習ひとこそ思ひしに。我等いかなれば。皇子を出でてかくばかり。人臣にだに交はらで。雲居の空をも迷ひ來て都鄙遠境の狂人路頭山林の賤となつて。邊土旅人の憐みを賴むばかりなり。さるにても昨日までは。玉樓金殿の。床を磨きて玉衣の。袖ひきかへて今日は又かかる所の臥所とて。竹の柱に竹の垣軒も樞もまばらなる。藁屋の床に藁の窓。敷く物とても藁筵。これぞ古の錦の褥なるべし

ツレ「たまたまこと訪ふものとては

地「峯に木傳ふ猿の聲。袖を濕す村雨の。音にたぐへて琵琶の音を。彈きならし彈きならし。わが音をもなく涙の。雨だにも音せぬ藁屋の軒のひまびまに。時々月は漏りながら。目に見る事

それにしても、いかに末世とはいひながら、月日は地に墮ちず、ものの道理に變りはないものと思つてゐましたのに、私達は皇子と生まれながら、どうしてこのやうな身となり、人臣として世間並の交はりさへ出來ず、都からさ迷ひ出て、遠い田舍歩きの狂人となり、路傍や山林にうろついて、田舍人や旅人の憐みで、はかない命を繫ぐ身の上となつたのでせう。それにしても、ついこの間までは、金殿玉樓の立派な住居に立派な着物を着てゐたものが、今は全くうつて變つて、このやうな所を住居として、竹の柱に竹の垣の粗末な家で、軒も樞も風を塞ぐだけの締りもない藁屋住居で、敷く物さへ藁むしろといふみぢめさ。しかもそれさへ今は昔の錦の褥のやうにありがたく思はなければならないのでせう。

ツレ　誰一人訪ねてくれる者もなく、たまに訪ねてくれる者があるかと思へば、山の木から木へ傳つて行く猿の聲で、たゞ悲しさに涙にくれるばかりですが、雨の降る時などは、あの雨音に擬へてと思つて、琵琶を彈きならし彈きならして、心を慰めようとしてゐるのです。けれど、

○たまたまこと訪ふものとては―平家物語小原御幸に「僅かに言と訪ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲」
○村雨の音にたぐへて―白樂天の琵琶行の句に「大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語」
○月にも疎く雨をだに―撰集抄の連歌「月は漏れ雨はたまれと思ふには」賤がふせやと葺きぞわづらふ」を胸に置いて綴つた。「雨月」參照。
【七】○行くは慰む方もあり―この句「籠待」にもある。
○夕雲の―さこそといふを夕に、雲の立つを立ちやすらふにいひかけた。
○うかれ心は―旅にうかれ出る心、夜中ねぐらに落ちつかないで鳴く烏を浮かれ烏といふので、烏といつて烏羽玉と續け、「烏」の字を重ねて烏羽玉といつた。
○烏羽玉の―黑の枕詞、
○飽かで行く―黑の髮を飽かでにいひかけた。
○別れ路とめよ逢坂の關―逢坂の關であるから、別れ行く人をせきとめてくれといふ意、
○逢坂の關の杉村―歌枕にいひ慣れた所。後拾遺集良暹法師の歌に「逢坂の關の杉むらひく程はをぶちに見ゆる望月の駒」

の叶はねば。月にも疎く雨をだに。聞かぬ藁屋の起臥を。思ひやられて痛はしや（二人しをる）

【七】シテロンギ「これまでなりやいつまでも。名殘は更に盡きすまじ。暇申して蟬丸

（二人とも立上り、）

ツレ「一樹の蔭の宿りとて。それだにあるにましてげに。せうとの宮の御別れ。とまるを思ひやり給へ

（この間にシテは仕手柱際へ行き、）

シテ「げに痛はしやわれながら。行くは慰む方もあり。留まるをさこそと夕雲の。立ちやすらひて泣き居たり（しをる）

ツレ「鳴くや關路の夕烏。うかれ心は烏羽玉の

シテ「わが黒髮の飽かで行く

ツレ「別れ路とめよ逢坂の

シテ「關の杉村過ぎ行けば（と橋懸一の松へ行き）

淚の絶える時はなくて、雨音は藁屋のこととて音もせず、たゞ月の光は時々藁屋根の隙間から漏れ入るのですが、盲目のこととてこれを見ることが出來ず、結局月も見られなければ雨音も聞かれない、みぢめな藁屋住居を思ひますと、たまらなく悲しいのです」

（互に身の不運を歎き語らつて時を過す。）

【七】逆髮「では、もうお別れしませう。いつまでゐても名殘の盡きる時はありますまい。では、蟬丸、お暇を致します」

蟬丸「同じ木蔭に休んだだけの緣でも、名殘は惜しいものですのに、まして姉宮樣とお別れしては、どんなに辛いことか、あとに殘された私の心を推量して下さい」

逆髮「ほんとにお氣の毒です。私が考へても、出て行く方はいくらか慰みがあらうと思はれるのですから、後に殘されてはどんなにお淋しいことか、お察しします」といつて、逆髮も立ち留まつて泣いて居られた。

蟬丸「盲目の身はたゞ泣くばかりで、お跡を慕ふことも出來ませんが……」

逆髮「いつまで經つても名殘は盡きませんが、お別れして行きませう」

ツレ「人聲遠くなるままに
シテ「藁屋の軒に
ツレ「佇みて
地「互にさらばよ常には訪はせ給へと（シテ三の松にてツレを顧みて）かすかに聲のするほど聞き送りかへり見置きて泣く泣く別れ、おはします泣く泣く別れおはします

「かすかに聲のする」とシテ歩み出し、ツレ「聞き送り」と二三足出でゝ聞き、「かへり見置きて」とシテ遙かに見返し、「泣く泣く別れ」とシテしをりながら幕に入り、ツレ残りてしをり留。

蟬丸「あゝ折角お逢ひしたものを、逢坂の關よ、この別れをとめてくれ」といふうちに、逆髪は關の杉林のあたりを過ぎて行つて、次第に人聲も遠く聞えにくくなつたが、蟬丸は藁屋の軒に佇んで、お互に
逆髪「さようなら」
蟬丸「始終お訪ね下さい」
とかすかに聲の聞えなくなるまで、聞き送り見返りながら、泣く泣くお別れになつた。

〇常には　常にはのはは強めの助詞。刊行會本の辭解に、常は希の誤りであらうといつてゐるのは、いかゞであらう。

【考異】
諸流（五流）
五流共同、著しい異同はない
古謡本（貞享二年本）
【三】「[illegible]宣旨にて候……　【四】「[illegible]」これは延喜……これらをば皆いづれ（貞を）か顧と見……

附記
〇憂き音に鳴く」は旅路の心細さと辛さとに泣くを水鳥の浮寝にいひかけ、鴨を呼び起した。

○賀茂川―鳥の鴨を川にいひかけた。京都の東部を流れる河。

○末白河―行末知らぬを白にいひかけた。白河は南禪寺の奥から出て賀茂川に流れ入る川。

○粟田口―三條白河橋から東山際までの街道。近江へ出る道筋。

○松坂―粟田口から日の岡に登る坂道。誰をか待つを松にいひかけた。

○關のこなたと思ひしに―關は逢坂關。古今集在原元方の歌「音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年を經るかな」を轉用した。

○音羽山―京都東山、清水寺がある。

○きりぎりすの鳴くや―古今集素性法師の歌「われのみやあはれと思はんきりぎりす鳴く夕陰の大和撫子」を引き、大和から山科と轉じた。

○山科―山城國宇治郡、宇治と大津との間にある。

○清瀧川―大井河の水上で、愛宕高雄の邊を過ぎる川。心は清しといひかけただけで、こゝには地理的の關係はない。

○逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒―拾遺集にある紀貫之の歌。望月は信濃國にある馬の名產地。古この地から年々馬を貢獻したので、その馬をこの仲秋十五日の月夜に、逢坂山の邊へ牽いて來ることだらうと詠んだもの。影見えては望月の文字の緣語。

○走井―吹き上げ井戸。こゝでは關の清水をいふ。

○おどろ―茨などの生ひ亂れたこと。亂髮の形容。

○夕波の―鏡といふを夕にいひかけ、波の打つをうつゝにいひかけた。

禪師曾我（ぜんじそが）

觀（寶 喜）

解說

【能柄】四番目 二段劇能

【人物】前ツレ 曾我兄弟の母、前ツレ 鬼王、前ツレ 團三郎、後シテ 久上禪師、狂言 久上寺能力、後ワキ 伊東九郎祐宗、ワキツレ 疋田小三郎、同 狩野源六、同 祐宗從兵（二三人）

【所】第一段 相摸國曾我館 第二段 越後國久上寺

【時】建久四年（七月）

【異稱】古く「久上」又は「久我美」ともいつた。

【作者】能本作者註文の作者不明の部に「久我美」といふ曲名の出てゐるのは、本曲のことであらう。この外に古記錄には見當らない。

【梗概】曾我兄弟が父の敵工藤祐經を討ち取つた後、その郎黨鬼王團三郎が兄弟の形見を持つて曾我へ歸ると、兄弟の母は深く歎いたが、末子久上禪師の身上を案じて、鬼王等を久上に遣つた。久上では禪師が別行をしてゐると、賴朝の命を受けて、養父伊東九郎祐宗が討ち寄せたので、暫し斬り合つた後

自害しようとしたところを生捕りにせられて、鎌倉に送られるといふので、〔夜討曾我〕の後を受ける曲柄である。

【出典】　この第一段は曾我物語卷十「鬼王團三郎曾我へ歸りし事」第二段は同卷「禪師法師が自害の事」に據つたものであらう。但し物語では、討手に下つたのは源義信で、禪師はこの事を聞くや、「人手にかゝらんよりは、淸き自害をして見せん」といつて、討手と戰はないで自殺しかけたところを捕へられて、鎌倉へ送られたといつてゐる。

【概評】　本曲は脚色として劇的に最も發達した形式で、シテ・ツレ・ワキの約束にも拘泥せず、第一段の登場人物はすべてツレとして取扱つてゐる。文章も殆どすべて科白で、地謠の部分が極めて少い。しかし、劇的興味を加へる爲に、物語ではたゞ兄達の跡を慕つて尋常に自害してゐる久上禪師をして、本曲では討手と戰はしめてゐるのは、あまり巧みな手法とは思はれない。殊に寶生・喜多等の謠本では、第二段に禪師の「名乘」の後、鬼王團三郎が母の文を持つて禪師に會ふことを記してゐるのに、現行觀世流にこれを省略したのは、前段との聯絡を亂つたもので、失敗であるといはなければならない。

第一段

【一】

舞臺は最初富士の裾野、ツレ鬼王、ツレ團三郎登場。

ツレ曾我兄弟の母、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて、何事なく舞臺に入り臨座にて下に居る。

次第の囃子にて、ツレ團三郎、ツレ鬼王、襟花色・着附熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束（團三郎は守を懷中）にて舞臺に入り向き合ひて、

〔鬼王團三〕次第　散りにし花の名殘には、散りにし花の名殘には、香ばかり、送る嵐かな

〔二人〕花の散つてしまつた後は、たゞ嵐が名殘の香を送るばかりだが、曾我兄弟も身は討死して名譽を殘されたのだ。

と次第に主を思ふ心持を述べ、

地取に團三郎は正面に向き、

〔團三〕これは曾我兄弟の人々に仕へ申す鬼王團

〔團三〕私どもは曾我兄弟の方々にお仕へし

○散りにし花の—曾我兄弟が親の敵を討つて、その身も討たれた後には、たゞ名譽だけが殘るといふ意に譬へたのである。

○曾我兄弟—河津三郎祐泰の子、十郎祐成と五郎時致と。委しくは「小袖曾我」にいふ。

○鬼王團三郎—曾我兄弟の郎黨。

○二十八日の夜―建久四年五月廿八日、この日曾我兄弟が父の敵を討つたこと、吾妻鏡にも委しく記してゐる。(「夜討曾我」參照)
○井手の館―井手は駿河國富士郡、富士の裾野にある。頼朝はこゝで卷狩を催した。館はその時の工藤祐經の陣屋をいふ。
○敵―工藤左衛門尉祐經。兄弟の五歳三歳の時、所領爭ひの事から、祐經が兄弟の父を殺したのであつた。
○その身も即座に討たれ―兄十郎はその場で新田四郎に討たれ、弟五郎は翌日殺された。
○使の泣きて歸りしは―鬼王團三郎が兄弟を離れて、故郷へ使に歸ることを、漢の蘇武が胡國に捕はれてゐた時、雁の足に書を結びつけて、故郷に音信をしたといふ故事により、雁に喩へた。
○花を見捨つる―雁は春になると北國へ行くから、鬼王等が兄弟を離れて行つたことを含めてゐる。
○それは越路に歸る山―雁は北越に歸る、と越前國歸山にいひかけた。
○煙見えたる―富士の煙に

鬼王 三郎にて候。さても兄弟の人々は。過ぎにし二十八日の夜。井手の館へ忍び入り。易々と敵を討ち。その身も即座に討たれ給ひて候。われ等兄弟も御供申し候へども形見の品々を持ちて。古里へ下れとの御事にて候程に。かひなき命助かり。御形見を持ち唯今古里へ下り候

といひて二人向合ひ、

鬼王團三 道行 使の泣きて歸りしは。使の泣きて歸りしは。花を見捨つるかりがね。それは越路に歸る山これは名高き富士の嶺の。煙見えたる東屋に歸りかねたる、心かな歸りかねたる心かな

團三郎・煙見えたる東屋に一と正面に向き三四足出でまたもとへ歸りて曾我に着きたる心。道行済みて團三郎は正面に向き、

團三 急ぎ候程に。これははや曾我の里に着きて候。まづまづ案内を申さうずるにて候

鬼王「然るべう候

てゐる鬼王と團三郎とです。さて、兄弟の方々は去る二十八日の夜、井手の館に忍び入つて、易々と父君の敵を討ち、御自身もその場でお討たれになつたのです。私ども兄弟もそれまでお供してゐたのですが、形見の品々を持つて古里へ歸れとの仰せであつたので、生き甲斐もない命を永らへ、御形見の品々を持つて、今古里へ歸らうとしてゐるのです」

(見物人に自己紹介をして、事件の概略を述べ、)

(二人)「昔蘇武の使となつて、鳴き鳴き古里へ歸つたのは、花を見捨てて行く雁で、その雁が北の方へ歸つて行くやうに、自分達は名高い富士山の煙を後にして、東の方古里の家に歸らうとするのであるが、悲しみに足も進みかねるのだ」

(力なき旅を續けた態で、舞臺は相模國曾我の里兄弟の母の館となる。)

團三「道を急いだので、思ひの外早く曾我の里に着きました。まづ案内を頼みませう」

(門前に立つ態で、)

○東屋で焚く煙を兼ねていふ
○東屋―四方葺きおろしの家をいふが、こゝには東方の散鄕の家といふ意に取做した。
○曾我の里―相摸國足柄下郡にある。兄弟の母はこの地の曾我太郎祐信に再嫁し兄弟もこゝに養はれてゐた
【三】
○人までもあるまじ―取次の人を待つまでもあるまい
○面目もなき―會はせる顏もない、申譯のない恥かしい。

といひて脇正面へ行きツレ母の方に向ひ、

【三】

團三「いかに案內申し候。鬼王團三郎が參りたる由それそれ御申し候へ

ツレ母、團三郎に向ひ、

母「なに鬼王團三郎と申すか。人までもあるまじ此方へ來り候へ

二人下に居る。

母「さて唯今は何の爲に來りたるぞ

團三「さん候面目もなき御使に參りて候

母「面目もなき使とは。如何なる事にてあるやらん

團三「過ぎにし二十八日の夜。井手の館へ忍び入り。やすやすと敵を討ち。御身も卽座に討たれ給ひて候。又御形見の物を持ちて參りて候。これこれ御覽候へ

と守を扇にのせて母に渡す。母これを見て、

【三】

團三「申しお願ひいたします。鬼王・團三郎が參りましたとお取次を願ひます」

ツレ曾我兄弟の母、最初から登場してゐて、

母「なに、鬼王・團三郎といふのか。取次までもない、こちらへお出で」

二人、母の前に出る。

母「して、唯今は何の用で來たのか」

團三「はい申譯のない情ないお使に參りました」

母「申譯のない情ない使とは、一體とうした事なのだ」

團三「御兄弟の君には去る二十八日の夜、井手の館に忍び入つて、易々と敵をお討ちになり、御自身もその場でお討たれになつたのでございます。又御形見の物を持つて參りました。これでございます、どうぞ御覽下さいませ」

と兄弟の形見を母に渡す。

○箱根―箱根寺の別當を指す。五郎は幼名を箱王といつて、この寺に預けられてゐた。（元服曾我參照）
○久上の寺―駿河國富士郡□□村にあり、兄弟の弟禪師坊この寺にゐた。
○禪師―兄弟の弟。父河津三郎の歿後に生まれ、伯父伊東九郎祐清に養はれ、後に上寺にやられて、伊東禪師といつた。
○捨人―世捨人。出家。
○如何なる日をも―如何なる目をも見ん、を水莖にいひかけた。如何なる目にもとは、禪師は出家ではあるが、敵側から見ると兄弟の同類であるから、討手を向けられて、どんな目に遭ふかも知れないといふ意。
○水莖―筆跡。こゝでは手紙の意。
○筆の立て―筆の立てやう。何と書くべきか書くすべも分らないといふ意。

母「祐經を討つ程ならば、何とて落ち延びざりけるぞ。敵を討つは父が爲。母をば思はぬ子どもの形見。恨めしや

鬼王「げにげに御歎き尤もにて候。まづ箱根へ人を御上せ候へ

母「箱根へと聞けば思ひ出だしたり。まづまづ久上の寺へ參り候へ

團三「げにげに禪師の御事よなう。假令御身は捨人なりとも

母「如何なる日をも

團三「水莖の

鬼王「筆の立てども覺えねば、涙ながらにかきくれて久上の寺に、送りけり久上の寺に送りけり

【三】　母「涙ながらに」と文を團三郎に渡し、團三郎これを受けて鬼王と共に幕に入る。母も續いて幕に入る。
後見、一疊臺を見所の前に出す。

母「祐經を討つ位ならば、何故逃げのびてくれなかつたのであらう。敵を討つのはたゞ亡き父のためで、たゞ父のことだけを思つて、生き殘つた母の事を思つてくれないわが子は、形見を見るのも恨めしいわ」

鬼王「お歎きはいかにも御尤もでございます。それにつけても、まづ箱根別當へ知らせの使をお出しになるのがよろしうございませう」

母「さう〳〵、箱根へといつたので思ひ出した。それよりも先づ久上の寺へ行つておくれ」

團三「いかにも禪師樣のお身上の事が案ぜられます。たとひ御身は御出家であるとは申せ、御兄弟のお間柄ですから……」

母「どのやうな辛い目を見るかも知れない」

と、手紙をどう書いてやればよいやら惑ひながら、涙ながらに文を認めて、鬼王團三郎を久上の寺に送つた。

【三】　鬼王團三郎は久上の寺へ使に、退場。母も第一段を終つたので退場。

【三】

○別行の子細―別行は特別の行法。曾我兄弟仇討の成功を祈つたのであらう。刊行會本には「別行の子細の候間」とある。

○百座の護摩―護摩は梵語Homaで、焚燒と譯す。智慧の火を以て煩惱の薪を燒くといふ意で、護摩壇を設け、火を燒いて佛に祈る、密教修法の一。百座はその護摩壇を百座設け又は百回行ふこと。大護摩の意。

◎いかに誰かある―以下、狂言・シテ及び狂言・ワキの掛合、現行曲實演について確める機會を得ず、暫く疑ひを存したまゝ、古寫本に從つた。

【四】

○藤波のかかれる木々―藤波は藤の花のことで、藤は紫色で、紫をゆかりの色といふから、曾我兄弟に緣故のある者といふ意を、藤波のかゝれる木に喩へたのである。

○嵐―敵情よりの討手即ち伊東九郎を喩へた。

シテ久上禪師、沙門帽子・襟花色・着附無色厚板・黑水衣・白大口・腰帶・小刀・扇・數珠の裝束、狂言能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて出で、シテ常座に立ち、狂言その後に下に居て、

シテ「これは久上の禪師にて候。われこの間別行の子細候間。百座の護摩を燒かばやと存じ候

眞中に出て狂言に向ひ、

シテ「いかに誰かある

狂言「御前に候

シテ「護摩堂の戶を開き候へ

狂言「畏つて候

といひて一疊臺に向ひ扇を開きて「さら〳〵」といひて戶を開く形をし、扇を閉ぢてもとの座に歸り、

狂言「護摩堂の戶を開き申して候

シテ一疊臺の上に坐し、狂言は笛座の前に居る。

【四】

一聲の囃子にて、ワキ伊東祐宗、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束にて弓矢を持ち、ワキヅレ（立衆）從兵四五人、白鉢卷・着附厚板・白大口・腰帶・太刀の裝束にて橋懸に立並び、

立衆一聲「藤波の。かかれる木々の梢をば。嵐や寄せて。散らすらん

第二段

舞臺は越後國久上寺で、シテ久上禪師登場。

禪師「私は久上の禪師です。私はこの頃特別の行法を行ひたいと思ふ事情があるので、百座の護摩を焚きたいと思ふのです」

と修法の態。

【四】

舞臺は久上へ至る道筋の態で、ワキ伊東九郎祐宗ワキヅレ從兵を隨へて橋懸に出、

祐宗「藤の花のかゝつた木々を嵐が吹き散らすやうに、自分達は曾我兄弟に緣故の者を討ち取らうとするのだ」

と自分の目的を述べ、

○伊東の九郎祐宗—曾我兄弟の伯父で、禪師の養父であつた九郎祐清のことであらう。但し曾我物語には禪師の養父源義信が討手に寄せたと記してゐる。
（二）曾我兄弟の者ども—刊行會本には「と」もの二字がない。
（三）君　源頼朝を指す。
（四）唯今久上の寺に—刊行會本には「唯今久上の寺へ」とある。
【五】

ワキ「これは伊東の九郎祐宗なり。さても過ぎにし二十八日の夜。曾我兄弟の者ども。井手の館に忍び入り。親の敵を討ちその身も即座に討たれて候。その弟に久上の禪師と申して候を。幼少の時より某養子として出家させ申し候を。如何なる者の申し候やらん。君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ搦め捕つて參らせよとの御事にて候程に。唯今久上の寺に押し寄せ候

【五】
ワキ「これははや久上の寺にて候。まづまづ案内を請はうずるにて候
ワキヅレ「然るべう候
といひて舞臺際へ出で、
ワキ「いかに案内申し候
狂言仕手柱際へ行き、
狂言「案内とは誰にて渡り候ぞ
ワキ「伊東の九郎祐宗が參りたり。急いで門を開

祐宗「自分は伊東九郎祐宗です。さて去る二十八日の夜、曾我兄弟の者が井手の館に忍び入つて、親の敵を討ち取り、自身もその場で討たれたのです。その弟に久上禪師といふ者があつて、幼い時から自分が養子として出家させて置いたのですが、誰が告げたものやら、わが君頼朝公がこの事をお聞きになつて、急いで搦め捕つて來いと仰せられたので、唯今久上の寺に押し寄せるのです」
と見物人に自己紹介をして、事件の經過を述べ、やがて久上寺に着いた態、、
【五】
祐宗「もはや久上の寺に着いた。まづ案内を賴まう」
と舞臺に入り、
祐宗「おうい お取次を賴む。伊東九郎祐宗

き候へ

狂言「その由申さうずる間。暫くそれにて御待ち候へ。（シテの前へ出で）いかに申し候。伊東九郎祐宗殿の御登山にて候

シテ「なに祐宗の御出でと申すか

狂言「なか〳〵の事

シテ「木戸を開いて内へ入れ申せ

狂言「畏つて候。（仕手柱際へ出で）かう〳〵御通り候へ

ワキ名乘座へ入る。（狂言は引く）

シテ「祐宗は何の爲に御出でにて候ぞ

ワキ「鎌倉殿より搦め捕つて參れとの御事なり。

疾う疾う出で候へ

シテ「や。祐宗は某が討手のためな。よしよし尋常に討死し。御名を揚げて參らせん（と立上り）そも抑も

これは。河津の三郎が末の子。久上の禪師

地「墨染の下に。忍辱の鎧。惡魔降伏の劍。三尺の長刀。指しかざしたり。討つべきやうこそ。なかりけれ（とシテ身を構ふ）

が來たのだ。すぐこの門を開けてくれい」

禪師「祐宗殿には何の御用でお出でになつたのです」

祐宗「鎌倉殿から搦め捕つて來いとの仰せだ。すぐ出られよ」

禪師「やあ、祐宗殿には私の討手として來られたのか。よろしい、尋常に討死して、あなたに功名を立てさせてあげよう」

と身仕度をして、

禪師「抑も自分は河津三郎の末子で、久上の禪師だ」

と名乘りをあげ、

墨染の衣の下に忍辱の鎧を着、惡魔降伏の劍三尺の長刀を振りかざした樣はいかにも勇ましく、誰も討ち入ろすべもなかつた。

○鎌倉殿—鎌倉に幕府を開いた源頼朝を指す。

○河津三郎が末の子—刊行會本には「河津三郎が末の子に」とある。

○忍辱の鎧—忍辱は諸の侮辱を忍んで、瞋恚を起さないこと。これを外難を防ぐ鎧に喩へたのである。法華經勸持品に「我等敬ニ信佛一、當レ著ニ忍辱鎧一」

○惡魔降伏の劍—惡魔を退治する爲の劍。不動明王などの持つ劍によそへていふ

【六】地「心得給へ祐宗と。木戸を開いて（ト臺を下り）、切つて出づれば手もとに近づきあやまちすな。射取れや、射取れ梓弓（立衆舞臺に入り）。疋田の小三郎が進んでかかるを長刀取り延べ法師の切るとて袈裟がけなり。南無佛無慙やな

（シテ立衆と切組み、立衆の一人斬られたる心にて切戸より入る、）

シテ「たとへば沙門の體とて

地、思ひゆるすも事にこそよれ。唯一命の、勝負をせんと。狩野の源六その外若武者われもわれもとかかりけれども禪師は騒がず打物合はせ。こやかしこに切り立てられ門前の外まで引退けば。これまでなりと、長刀投げ捨て。護摩の。壇上に走り上り御本尊に向ひて阿毘羅吽欠に。つなぬかれ禮盤の上より落ちけるを生捕にせんとて利劍を奪ひ。鎌倉へこそ、上せけれ鎌倉

【六】〇梓弓―射取れの縁で梓弓を出し、弓を引くを疋田にいひかけた。〇疋田の小三郎―謡曲作者の假作人物。〇法師の切るとて袈裟がけ―法師の着るを斬るにいひかけ、法師の着る袈裟を袈裟がけにいひかけた。袈裟がけは袈裟をかけたやうに一方の肩から斜に他の一方の腋の下へ斬り下げること。〇無慙や―いたはしい。氣の毒だ。〇沙門の體―僧侶の姿。〇狩野の源六―謡曲作者の假作人物。〇打物―太刀長刀など打ち鍛へたものをいふ。〇御本尊―壇上に安置した佛像。不動明王であらう。〇阿毘羅吽欠―梵語Avira-hūmkham. 大日如來の眞言で、地水火風空の意で、この一呪に一切萬法を含むから、これを稱へれば、一切萬法悉く成就するといふ。吽欠を劍にいひかけ、劍に貫かれて自殺したといひつゞけた。〇禮盤―佛を禮拜する爲の高座。

【六】禪師「さあ御用意なされい、祐宗殿―」と禪師が木戸を開いて斬つて出ると、祐宗が

祐宗「あの手先に近づいて怪我をするな、射とれ、射とれ―」と下知する。聲に應じて、疋田小三郎が進んで攻めかゝると、禪師は長刀を長く延ばして、いかにも法師の業らしく、疋田を袈裟がけに斬つてしまつた。

禪師「おゝ南無阿彌陀佛、氣の毒なことだ。……いや、たとへ僧の姿でも、躊躇するのも場合によることだ。討つか討たれるか、命の勝負をしよう」

と、狩野源六その外の若武者がわれもわれもと斬つてかゝるのを、禪師は落ちついて、太刀を合はせ、敵勢があちらこちらと斬り立てられて、門の外まで引き退くと、禪師は『今はこれまでだ』と長刀を投げ捨て、護摩壇の上に走り上り、御本尊に向つて『阿毘羅吽欠』と稱へ、劍を以て喉を貫き、禮盤の上から落ちて自殺しようとしたのを、祐宗等は生捕りにしようと思ひ、その劍を奪ひ取つて、鎌倉へ引連れて行つた。

へこそは上せけれ

シテ、ワキ立衆と切組み、「墳上に走り上り」と一疊臺へ上り、臺より下ると、立衆の一人懷中より繩を出してシテを縛り左右より引立てて幕に入る。ワキ仕手柱際にて太刀をかたげて留む。

○利劍—鋭い劍。不動明王などの持つ利劍によそへていふ。

〔考異〕

諸流（觀寶喜）

【二】地「祐經を討つ程ならば……子どもの形見恨めしや（喜敵を討つは父の爲。母をば思はぬ子供の形見。いとほしやなつかしや未だ移り香の殘るぞや。さればこそかゝるべしとは白綾の。〱。あやなや誰と吳織。泣く〱見れば色々の。形見ありかもそのまゝなる。繡肌の守。よしなや主ならで誰を守りの形見ぞやと。胸に當て顏にあて聲も惜しまず泣きゐたり）【五】シテ「祐宗は何の爲に……地「墨染の下に忍辱の鎧（寶、喜ハ略寶ニ同ジ、何と曾我よりの御文と候や。やがて開いて見うずるにて候。さても去る二十八日の夜曾我兄弟の人。日比の本望を遂げんとて。井出の館に忍び入り。敵をも討ちその身も即座に討たれて候。さては祐宗は某が討手よな。たばからばやと存じ候。いかに申し候。曾我よりの文の候。文讀まん程御矢を留めて給はり候へ。ワキ「心得申し候。早風どつて候よ。シテ「その身も即座に討たれて候。また御事はその爲の出家。忍びたりとも難あるまじ。いかにも命を全うして。兄々が跡をも弔ひ。殘り留る母が身をも訪ひ慰めてたび給へ。今はの時この御文を給はる事のありがたさは候。いかに祐宗へ申し候。正しく御身は某が爲には伯父にてましまさずや。情なくもたばかり給ふものかな。よし〱尋常に討死し。御名を上げて參らせん。抑もこれは河津の三郎が末の子。久上の禪師。墨染の下に。地「惡魔降伏の劍……【六】地「心得給へ祐宗と（寶喜よ〱。養父も親といふ名あり。捨刀もあやうしや五道の冥も恐ろしや。よし誰とても。かゝる憂き世にながらへて。何の要害も城郭も。身を惜しむにこそよるべけれとて）木戸を開いて植つて……

古謠本

元祿以前のもの、未だ索め得ない、

千手（せんじゅ）　觀（寶　春　剛　喜）

解説

【能柄】　三番目　一段劇能

【人物】　**ツレ**　平重衡、**ワキ**　狩野介宗茂、**シテ**　千手前

【所】　鎌倉　狩野介館

【時】　元暦元年四月（三月）

【異稱】　〔千壽〕とも書き、〔千手重衡〕又は〔重衡〕ともいつた。

【作者】　能本作者註文には作者として金春禪竹と觀世彌次郎との二人を擧げ、二百十番謠目錄には禪竹の作とす。恐らく禪竹の方が正しいのであらう。世子六十以後申樂談儀に、

重衡に「ここぞ閻浮の奈良坂に」、この「ここぞ閻浮の奈良坂に」の節、曲舞にあるまじき節なり。……

重衡の能に「鬼ぞつくなる恐しや」の「つくなる」と突いていはば、おそろのろを納めていふべし。……

とあるが、この引句は本曲に見えないから、この〔重衡〕は本曲の異名でなく別曲〔笠卒都婆〕についていつたものなのであらうか。看聞日記

永享四年正月十四日の條に〔重衡〕演能のこと、言經卿記文祿四年四月三日の條に〔重衡〕註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　平重衡は一の谷の戰に生捕られて、鎌倉に護送せられ、狩野介宗茂に預けられてゐたが、賴朝は手越の長の女、千手の前を遣はしてこれを慰めてゐた。今日しも千手が琵琶琴を持つて重衡を訪ねると、重衡は昨日千手に託して賴朝に願つた出家の望みの成否を尋ねたが、それは到底叶はないとの事であつた。重衡は南都の佛寺を燒いた罪業を悔い歎いた。折柄宗茂が雨中の夕暮の徒然を慰める爲に酒を持つて來たので、千手は朗詠を吟じ、舞を舞つて、これを慰めた。重衡も興に乘じて琵琶を彈じ、夜を更かした。しかし、やがて重衡は勅命によつてまた都へ送られることとなつたので、千手は深く名殘を惜しむ。

【出典】　この事は、吾妻鏡、元曆元年四月二十日の條に詳しく記されてゐる。卽ち

本三位中將依二武衛御免一有二沐浴之儀一、其後及二秉燭之期一、稱レ爲レ慰二徒然一、被レ遣二藤判官代邦道工藤一﨟祐經竝官女一人（號二千手前一）等於羽林之方一、剩被レ副二送竹葉上林已下一、羽林殊有二喜悅遊興移一レ尅、祐經打レ鼓歌二今樣一、女房彈二琵琶一、羽林和二横笛一、先吹二五常樂一、爲二下官一以可レ爲二往生樂一由稱レ之、次吹二皇麞急一、謂二往生急一、凡於レ事莫レ不レ催レ興、及二夜半一女房欲レ歸、羽林暫抑二留之一與レ盃及二朗詠一、燭暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲云々……武衛又令レ持二宿衣一領於千手前一、更被二送遣一、其上以二祐經一邊鄙士女還可レ有二其興一歟、御在國之程可レ被二召置一之由被レ仰云々。

しかし、本曲の直接の依據は平家物語卷十「千手の事」であらう。――その文は必要に應じて語釋に引くこととする。

【批評】　重衡千手の事は、平家物語中でも興味の深い一節であり、劇そのまゝな材料である。平家物語を厚く尊重してゐる謡曲作者が、これを見逃さないで、現在物として劇的に脚色したのは、まことに當然なことである。しかし、「源平の名將の人體の本說ならば、殊に殊に平家の物語のまゝに書くべし」といふ敎を奉じてゐる謡曲作者は、劇的な本說をそのまゝ劇能として脚色する時に、往々大きな失敗を招いてゐる。戯曲は常に劇的現在を以て展開しなければならないのに、物語の歴史的叙述を踏襲し、科白を以て進行すべきものを、小說的な叙事文を以て說明して行くからである。本曲のクセの如きは、正にこの失敗の標本とも見るべきものであらう。にも拘らず、實際の舞臺效果を見ると、この歴史的な叙述は却つて尚古的な典雅な感を起さしめて、所謂三番目物にふさはしい優麗な氣品を漂はし、餘り不自然な感は起さしめないのである。しかしこれは複式能の後ジテの昔語に慣れてゐるが爲に、劇能に於ける叙事をもこれと混同する觀客の習癖から來たものであつて、作者が豫め意圖した巧みな手法と見ることは出來ない。

【一】

○鎌倉殿の御内―源頼朝の家臣。

○狩野の介宗茂―工藤茂光の子。工藤祐經と從兄弟。

○相國―太政大臣の唐名。

○重衡―清盛の五男。三位中將、一谷の合戰に生田森を守つて破れ、須磨で庄四郎高家に生捕られ、鎌倉へ送られた。これより先、重衡が奈良を攻めた時、東大寺興福寺を燒き拂つたので南都の僧徒に恨まれ、因はれて後、僧徒がその首を望んで止まないので、出家の望みも叶はず、奈良に送り返されて、文治元年六月、生年廿九歲で木津川原で斬首された。

○千手の前―吾妻鏡に「文治四年四月廿五日於鎌倉千壽前卒去、年廿四、其性太穩便人々所惜也、前左三位中將重衡向之時、不慮相馴、彼上洛之後戀慕之思朝々不休、憶念之所積若爲發病之因歟之由、人疑之」

○手越の長―手越は駿河國安倍郡にある驛。長は宿驛の長者の意で、多くの遊女を置く宿舍の女將。

【三】

【一】 何事もなく、ツレ平重衡、直面・襟淺黃・着附厚板唐織・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、脇座へ行き床几にかゝる。名乘笛にて、ワキ狩野介宗茂、梨打烏帽子・白鉢卷・着附段厚板・直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

ワキ「これは鎌倉殿の御内に。狩野の介宗茂にて候。さても相國の御子重衡の卿は。この度一の谷の合戰に生捕られ給ひ候を。某預かり申して候。朝敵の御事とは申しながら。賴朝痛はしく思し召され。よく痛はり申せとの御事にて。昨日も千手の前を遣はされて候。かの千手の前と申すは。手越の長が女にて候が。優にやさしく候とて。御身近く召し使はれ候を遣はされ候事。誠にありがたき御志にて御座候。今日はまた雨中の御つれづれ。酒を勸め申さばやと存じ候

【二】 といひて地謠座前へ行き下に居る。

【三】 次第の囃子にて、シテ千手前、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・赤地唐織着流・扇の裝束にて舞臺に入り、常座に立ち

【一】 舞臺は鎌倉の狩野介宗茂の館で、ツレ平重衡、ワキ狩野介宗茂登場。

宗茂「私は鎌倉將軍賴朝公の家臣で、狩野介宗茂といふ者です。さて太政大臣平淸盛公の御子重衡卿は、今度一谷の合戰に生捕になられたのを、私がお預かりしてゐるのです。朝敵の御事とは申しながら、賴朝公には氣の毒に思し召され、重衡卿を大切にお世話せよと仰せられて、昨日も千手の前を遣はされたのです。この千手の前と申すのは、手越の宿の長者の女ですが、誠に優しい女であるといふので、賴朝公のお側近くお召使ひになつて居られたのを、特にお遣はしになるのは、誠にありがたいお情です。今日はまた雨降りの事でもあれば、重衡卿のお慰めに酒をお勸めしようと思ふのです」

と見物人に自己紹介して事件の概略を述べる。

【三】 シテ千手前登場。こゝは宗茂館へ行く途中の心で

て大小前の方に向き、

シテ次第「琴の音添へて音づるる。琴の音添へて音づるるこれや東屋なるらん

地取に正面に向き、

シテサシ「それ春の花の樹頭に榮え。秋の月の水底に沈むも。世のはかなさの有樣を。見てもあはれや重衡の。その古は雲の上。かけても知らぬ身の行方波に漂ひ舟に浮き。さらばよるべの。よそならで。ありしにかへる。有樣かな

シテ下歌「都にだにも留めぬ御涙なるを痛はしや。

上歌「陸奥の。忍ぶに堪へぬ雨の音。忍ぶに堪へぬ雨の音。降りすさみたる折しもは。思ひの露も、散り散りに心の花もしをしをと。しをるる袖の色までも。今日の夕の、たぐひかな今日の夕のたぐひかな

ーしをるる袖のーと右の方へ向き二三足出で、またもとへ歸

千手「琴を持つてお訪ねして行くこの樣子は、催馬樂の東屋の趣だともいへようか」

と次第を謠つて心持を述べ、

千手「春の花の梢に咲き誇り、秋の月の水底に映る姿を見ても、世の果敢なさは知られるのであるが、殊に今お訪ねしようとする重衡卿は、もと貴い雲の上人であつたのに、思ひもよらぬお不仕合で、浮舟のやうに波に漂ひ、たまたま陸にお着きになつたと思へば、またもとと苦しみの變らない囚はれのお身とおなりになつたことだ。

そして、都にさへ留まることが出來ず、この鎌倉まで下られたのは、實にお氣の毒なことだ。

折しも悲しみに堪へないやうに、雨がしとしとと降りしきり、花もしをれて行くが、それは丁度悲しい思ひに千々に亂れ、うちしをれた人の氣持にふさはしい夕ではある」

と獨言をいひながら來るうちに宗茂の館に着いた態で、

○琴の音添へてー自分の訪れに、琴の音づれを加へてといふ意。

○東屋ー催馬樂の東屋といふ歌に「東屋のまやの餘りの雨そゝぎ、わが立ち濡れぬその殿戸開かせ」。この歌と家の東屋と國の東とを含めていつたのである。

○春の花の樹頭に榮えー世上の盛衰無常を喩へていふ秋夜長物語に「それ春の花の樹頭にのぼるは、上求菩提の機を勸め、秋の月の水底に下るは、下化衆生の相を現ず」この類句〔敦盛〕にもある。

○見てもあはれやー世の有樣と重衡と、上下にかゝる。

○雲の上ー雲上人。宮中殿上間に昇殿を許された高官の人達。

○かけても知らぬー夢にも知らぬ。全く豫期しなかつた。

○さらばよるべのよそならでー海中に漂つて、たまたま陸地に寄つたと思つても、落ちつくことが出來ない生捕の身上となるといふ意であらう。よるべは舟の漕ぎ寄る岸邊。

○ありしにかへるーもとの不安な境遇に返る。或はあ

りしにかはるの習りで、もとの榮花の身とは變り果てたといふ意か。
○都にだにも留めぬ―身を都に留め得ぬと、涙の出るを留め得ぬとを兼ねていふ。
○故郷の―故郷の信夫と同音であるところから、忍ぶの枕詞とした。
○降りすさみたる―降りしきりたる。
○思ひの露―心配の多いことを露に喩へた。次の「心の花」と對す。
◎心の花―心の美しさを花に喩へた。
○夕のたぐひ―悲しい思ひに袖のしをれるのは、雨の夕の趣に似てゐる。
○御機嫌を以て―御機嫌のよい折を見計つて。
【三】○槿花一日の榮―盛りの短い喩。和漢朗詠集、白樂天の詩句に「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」
○命は蜉蝣―命の短い喩。淮南子説林訓に「鶴壽千歳、以極其游、蜉蝣朝生暮死、而盡其樂」
○蘇武が胡國に囚はれ―前漢書列傳廿四に「蘇武字子卿、杜陵人、武帝時以中郎將持節使匈奴、單于欲

りて宗茂の傍に着きたる心、上歌済みてワキに向ひ、

シテ いかに案内申し候はん

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ 誰にて渡り候ぞ

シテ 千手の前が參りたる由それそれ御申し候へ

ワキ 暫く御待ち候へ。御機嫌を以て申さうずるにて候

といひて下に居る、シテは太鼓座にくつろぐ。

【三】

ツレ 身はこれ槿花一日の榮。命は蜉蝣の定めなきに似たり。心は蘇武が胡國に囚はれ。巖窟の内に籠められて。君邊を忘れぬ志。それはやうりが謀にて。敵を亡ぼし舊里に歸る。われはいつとなく敵陣にこめられて。縲紲の責を受くる。知らず今日もや限りならん。あら定めなや候

千手「お頼み申します」

宗茂「どなたです」

千手「千手の前が參りましたと、申し上げて下さい」

宗茂「暫くお待ち下さい。御機嫌のよい折を見計つて申し上げませう」

ここで二人は暫く控へてゐる。

【三】

重衡「人の榮花の短いことは槿の花の盛りのやうなものであり、命の賴みにならないことは、蜉蝣と相似たものだ。その譬に漏れず、自分はあはれ囚人の身となつたのだ。同じ囚人となつたものでも、漢の蘇武は匈奴の捕虜となり、岩窟に閉ぢ籠められたが、忠君の志が顯れ、やうりの謀によつて、敵を亡ぼし故郷に歸ることが出來たが、しかし自分は、いつまでも敵陣に閉ぢ籠められ、縲紲の辱めを受け、今日にも殺されるか分らない命である。あゝ實に果敢ないことだ」

レ降レ之、廼幽レ武、置二大窖中一絶不二飲食一、天雨レ雪、武臥齧レ雪與二旃毛一幷咽レ之、數日不レ死、匈奴以爲レ神」

○巖窟の内に籠められ―この句、平家物語に「昔は巖窟の洞に籠められて、三春の愁歎を送り、今は曠田の畝にすてられて、胡地の一族となれり」とあるに據つたのであらう。

○やうり―分らない。拾葉抄には史記匈奴傳に見えてゐる廣利であらうといひ、刊行會本辭解には今昔物語にある衞律の訛であらうといつてゐる。

○纓絶の責―纓日の辱しめ

○定めなや―果敢ないことだ。

○私にあらず―私用でない

○琵琶琴―琵琶は重衡の彈く料、琴は千手の彈く料。

ワキ立ちてツレの前へ行き手を突きて、

ワキ「いかに申し上げ候。千手の御參りにて候

ツレ「唯今は何の爲にて候ぞ。よしよし何事にてもあれ。今日の對面は叶ふまじきと申し候へ

ワキ「畏つて候

ワキもとの座に歸りてシテに向ひ、（シテはこの間に常座に出で居る）

ワキ「いかに申し候。御參りの由申して候へば。何と思し召し候やらん。今日の御對面は叶ふまじき由仰せ出だされて候

シテ「これも私にあらず。賴朝よりの御諚にて。琵琶琴持たせて參りたり。この由重ねて御申し候へ

ワキ「心得申し候

といひてまたツレの前へ出で、

ワキ「御諚の趣申して候へば。これも私にあらず。賴朝よりの御諚にて。琵琶琴持たせて參りたり。

と獨言して歎く。宗茂重衡の前へ出て、

宗茂「申し上げます。千手の前が參られましてございます」

重衡「唯今は何の用事で參つたのだ。いやいや何の用事であらうとも、今日は對面出來ないといつてくれ」

宗茂「畏りました」

といつて千手前に向ひ、

宗茂「千手どの、あなたのお出でになつたことを重衡卿に申し上げたところ、何と思し召したものか、今日は對面出來ないと仰しやいました」

千手「いえ、これは私の勝手に參つたのではございません。賴朝公の仰せにより、琵琶や琴を持たせて參つたのでございます。この由を重ねて申し上げて下さい」

宗茂（重衡の前へ出て）「仰せの趣を千手の前に傳へましたところ、これは自分の一存で參つたのではございません、賴朝公の仰せにより、琵琶琴を持たせて參つたのだと申します。今のお身上として、御遠慮なされますのは、いかにも御尤もでござ

○御憚りはさる事なれども—囚人の身として御遠慮になるのは尤もであるが。
○御簾の追風—重衡は殿上人で着物に香を焚きしめてゐる。その薫が風の吹くにつれて匂つてくるのをいふ。源氏物語初音の巻に「御簾の内の追風、なまめかしう吹きにほはして」
○花の都人—衣に香を焚きしめてゐるやうな風雅な都人。
○人の心の奥深き—奥は「東のはて」に承く。東国の田舎者で、風雅な心はなくとも、深い情は持つてゐる。その情の深いこそ誠の都人といふべきであらうとの意。
○花の春—都より花を出した。都の風雅な遊びも今はたゞ悲しい思出の種であるとの意。
【四】
○あからさまに—かりそめに。それとなく。
○出家の御暇—出家の御許し。
○いかほど—随分。

よしよし御憚りはさる事なれども、「ただ此方へと請ずれば（とシテへ向く）
シテ「その時千手立ち寄りて（とツレへ詰め）
（ツレもとの座に帰り下に居る）
地上歌「妻戸をきりりと押し開く（とシテ右手にて戸を開く形をして）御簾の追風匂ひ来る。花の都人に。恥かしながら見みえん（と真中へ行き下に居る）げにや東のはてしまで。人の心の奥深き。その情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。誰が思出となりぬらん
【四】
ツレ「いかに千手の前。昨日あからさまに申しつる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ
シテ「さん候その由申して候へば。朝敵の御事なるを私として。出家を許し申さんこと。思ひもよらずとこそ候ひつれ。「わらはも御心の中。おしはかり参らせて。いかほどこまごまと申して

いますが……」
（といつて、宗茂は心で千手前を招き入れようと考へ、千手に向ひ、）
宗茂「さあこちらへお入りなされ」
と招き入れたので、千手の前は立ち寄つて、戸をきりゝと押し開くと、重衡の着物に薫きしめた匂ひが、御簾の中から吹きくる風につれて、匂つてくる。
千手「田舎者で、お恥かしながら、風雅な都人にお目にかゝります」（と重衡の前へ出る）
いかにも辺鄙な東国者で、風雅な心とてはないが、しかし人情には深いもので、その情の深いことこそ、ほんとの都人といふべきものであらう。都といへば、重衡はこれまで春の花につけ秋の紅葉につけ、風雅な遊びをしてゐたのであるが、今はそれもたゞ悲しい思出の種となつたのだ。
【四】
重衡「千手の前、昨日一寸頼んで置いた出家の願ひは許されるであらうか、聞きたいものだが」
千手「さやうでございます。その事は頼朝公に申し上げましたところ、朝敵の御事であるから、自分の一存で出家を許すなどは、とても思ひもよらぬ事だと仰せら

○かひなき―許されない。
○一の谷―攝津國武庫郡西須磨村（今神戸市に入る）。壽永三年二月平家が義經に破られた所。
○佛像を亡ぼし―治承四年十二月、重衡が奈良を攻め、大暴風に乘じて火を放ち、大佛殿その他の寺院を燒き拂つたことをいふ。この事百練抄同月廿八日の條に見ゆ
○現當の罪を果すこと―現當は現世及び當來。前業は前世の惡業。現世で犯した罪を直にこの世で報いられることは、前世の惡業の報いをこの世で受けるよりもなほ恥かしいとの意、當來はこゝでは深い意味がない

候へども。かひなき出家の御望み。痛はしうこそ候へ（としをる）

ツレ「口惜しやわれ一の谷にていかにもなるべき身の生捕られ。今は東のはてまでも。かやうに面を曝すこと。前世の報いといひながら。「又思はずも父命により。佛像を亡ぼし人壽を絶ちし。現當の罪を果すこと。前業より猶恥かしうこそ候へ

シテ「げにげにこれは御理さりながら。かかる例は古今に。多き習ひと聞くものを。ひとりとな歎き給ひそとよ

ツレ「げによく慰め給へども。たぐひはあらじ憂き身のはて

シテ「昨日は都の花と榮え

ツレ「今日は東の春に來て

れました。私もあなた樣の御心中をお察し申し上げまして、隨分細々と申し上げたのでございますが、結局出家のお望みの叶はないのは、誠にお氣の毒に存じ上げます」

重衡「あゝ殘念なことだ。自分は一谷で死んでしまへばよかつたものを、生捕られて、今はこのやうに東國の果で、恥かしい面を曝すこととなつたのだ。これも前世の報いであるが、もつと恐ろしいことは、わが心ならずも父上の命により、佛像を燒き人を殺したことで、この現世で犯した罪業の報いを直にこの世で受けることが、前世の罪業の報いを受けるのよりも、なほ恥かしう思ふのだ」

千手「誠に御尤もなことではございますが、かういふ例は、昔も今も少くないとの事でございますから、御自分お獨りのやうにお歎きなさいますな」

重衡「いやよくお慰め下さるが、このやうな事は他に類のない辛い運命なのだ」

千手「つい昨日までは都で花のやうにお榮えになつたものを……」

重衡「それが今はこのやうた東國の春に來

○世は空蟬の―世は變しを空蟬に、蟬の殼を唐衣にいひかけた。
○唐衣きつつ馴れにし―伊勢物語の歌「唐衣きつつなれにし妻しあればはるばるる來ぬる旅をしぞ思ふ」をば上下二句分けて引き「思ふ衰へ」とつづけた。
○水行く川の八橋や―前項の歌の詞書に「三河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん、八橋といひける」とあるに據つては「物を思ふ」の序とした。
○蜘蛛手に物を思へ―蜘蛛の手のやうに、あれやこれやとに思ひ亂れる。
○かけぬ情の―かけぬは思ひかけぬの意で、上の物を思ふ」と、下の情と兩方にかける。
○なかなかに―却つて。
【五】
○いつしか憚りの―いつしか憚りの心も薄らいで。
○手まづ遮る盃の―盃を受けとの意、「手まづ遮る」とは、和漢朗詠集、曲水宴を詠んだ菅原雅規の詩句「巖下心未レ得、來レ流盡過手先遮」に據つたのである。
○心一つに思ふ―盃を手にしたものの、思はず物思ひに沈む。

シテ「移り變れる
ツレ「身の程を
地上歌「思へただ。世は空蟬の唐衣。世は空蟬の唐衣。きつつ馴れにし妻しある。都の雲居をたち離れ。はるばるきぬる。旅をしぞ思ふ衰への。憂き身の果ぞ悲しき。水行く川の八橋や。蜘蛛手に物を思へとは。かけぬ情のなかなかに馴るるや恨みなるらん馴るるや恨みなるらん
【五】
ワキ「今日の雨中の夕の空。御つれづれを慰めんと。樽を抱きて參りつつ既に酒宴を始めんとす
と言ひながら扇を開きツレに酌をす。
シテ「千手もこの由見るよりも。御酌に立ちて重衡の。御前にこそ參りけれ
と言ひながらシテは扇を開きてツレの前へ出で酌をす。
ツレ「今はいつしか憚りの。心ならずに思はずも。手まづ遮る盃の。心一つに思ふ思ひ

て、このやうに變りはてた身の上を察してくれ。――
思へば、この世の中は誠に果敢ないもので、なつかしい都を離れて、遠い旅の空で情ない思ひをして、衰へて行くのが悲しい。かうして千々に思ひを碎かうとは、夢にも思はなかつたことで、やがて辛い最期を見ることかと思へば、假初の情に馴れ親しむのが、却つて恨みの種だ」
【五】
宗茂「今日の雨降る夕暮の御徒然をお慰め致さう」
といつて、宗茂は酒樽を持つて參り、今や酒宴を始めようとする。
千手もこの様子を見るや、お酌に立つて重衡の前へ參つた。
重衡もいつの間にか遠慮の心も薄らいで、心ならずも又思ひがけなくも、盃を手にとつたが、やはり心の悲しみは離れないのである。

○羅綺の重衣たる―和漢朗詠集、菅原道眞の句「羅綺之爲二重衣一、妬三無レ情於機婦二」を引いた。羅綺はうすもので、輕い衣であるが、かよわい美人にはそれでもなほ重くて堪へられないので、織りやうが惡いやうに、機織女の不深切を恨むとの意。平家物語に「千手の前酌をさしおき、羅綺の重衣たるは、情なき事を機婦に妬むといふ朗詠を、一兩返したりければ、三位の中將、この朗詠をせん人をば、北野の天神毎日三度かけつて守らんと誓はせ給ふとなり。されども重衡は、今生にてははや捨てられ奉つたる身なれば、助音をしても何かせん、但罪障かるみぬべきことならば從ふべしとの給へば、千手の前やがて十惡といふとも猶引攝すといふ朗詠して、極樂願はん人は皆彌陀の名號を唱ふべしといふ今樣を、四五返謠ひすましたりければ、その時中將杯を傾けられける」
○北野―北野天滿宮。菅原道眞。
○十惡といふとも―和漢朗詠集、具平親王の句「雖二十

ワキ扇を閉ぢてシテへ向き、

ワキ「それそれいかに何にても。御肴にと勸むれば

シテ「その時千手とりあへず。羅綺の重衣たる。情なきことを機婦に妬む

三人向合ひ、

シテ・ツレ・ワキ「唯今詠じ給ふ朗詠は。忝くも北野の御作。この詩を詠ぜは聞く人までも。守るべしとの御誓ひなり

ツレ「さりながら重衡は今生の望みなし

三人「唯來世の便りこそ聞かまほしけれと宣へば

シテ「わらは仰せを承り。十惡といふとも。引攝すと

地「朗詠してぞ。奏でける

とシテ・ワキ立ち、ワキはもとの座に歸りて下に居り、シテ

宗茂「さあ千手殿、何なりと御肴に……」

と勸めると、千手はとりあへず、

千手「……『羅綺の重衣たる、情なきことを機婦に妬む』――」

と謠ひ、重衡・宗茂もこれに聲を合せて、

三人「今謠はれた朗詠は、忝くも北野天神の御作で、この詩をよめば、謠ふ者は勿論聞く者までも加護してやらうとの御誓願だ」

と相共に感じ合ひ、

重衡「しかし自分はこの世には何の望みもない。たゞ來世極樂往生のたよりとなる朗詠が聞きたいものだ」

といはれると、千手の前は

千手「畏りました（といって）。『十惡といふとも引攝す』――」

といふ朗詠を謠つた。

は、

〔イロへ〕を舞ひて大小前に立ち、

【六】

シテサシ「さてもかの重衡は。相國の末の御子とは申せども

地「兄弟にも勝れ一門にも越えて。父母の寵愛。限りなし

シテ下「されども時移り。平家の運命ことごとく

地「月の夜すがら聲立てて。啼くや牡鹿の津の國の。生田の川に身を捨てて防ぎ戰ふと申せども

シテ上「森の下風木の葉の露

地「落されけるこそあはれなれ（とツレに向ひしをり）

これより謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ「今は梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするにいづ方も。網を置きたる如くにて。逃れかねたる淀鯉の。生捕られつつありて憂き。身を

〔イロへ〕を舞ひ、

【六】さて、この重衡は清盛の末子であるが、その器量骨柄が兄弟一門に勝れ、父母にこの上もなく寵愛せられてゐたのであつた。

ところが時運は變轉して、平家の運命も全く盡きはて、源氏に攻め立てられて、重衡は攝津國生田森で身を捨てて防戰したが、あはれ木葉の露が風に吹き落されるかやうに、うち落されてしまつた。

重衡も今は致し方なく陣を引かうとしたが、四方の敵は網を置いたやうで、逃れ出る道もなく、遂に生捕にせられ、生きて甲斐のない身は死ぬることも出來ないで、汚名を流して、川越重房

靈分類引據、其於政風教三寳等」をいふ。十惡は殺生・偸盗・邪婬・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・邪見。

【六】

○月の夜すがら—運命の盡きを月にいひかけた。

○啼くや牡鹿の—角を津のにいひかけて、津の國の序とした。

○生田の川—神戸市の近くを流れる川。

○森の下風木の葉の露—森の下吹く風で木葉の露の落ちるやうに、平家が源氏に攻め落されること。

○梓弓—何を隔てて「引かんとする」の序に用ゐた。

○淀鯉の—世を淀にいひかけた。山城國淀は鯉の名産地。鯉は生捕られの喩。

○身をうろくづの—身を憂

いくをうろくづ（魚）にいひかけた。
○名をこそ流せ―憂き名を世に流すといつて、流すから川を呼び起した。
○川越の重房―頼朝の家臣重衡を護送したのは實は梶原景時である。
○定めなきかな―後撰集讀人知らずの歌に「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける」
○時雨降りおく―古今集文屋有季の歌「神無月時雨降りおける楢の葉の名に負ふ宮のふる言ぞこれ」を引いて奈良坂と續けた。
○奈良坂―京都から奈良へ入る坂路。こゝでは單に奈良の意。
○衆徒―僧兵。
○とにもかくにも―句を隔てて「奈良坂や」を承けて、萬葉集卷十六「奈良坂やこの手柏のふたおもてとにもかくにもねぢけ人かな」を借りた。
○雲居の都―八橋の蜘蛛手を雲にいひかけた。
○三河の國や―いつか見んと三河にいひかけた。
○足柄箱根―ともに相模國にある。
○明けもやすらん―着の縁

うろくづのそのままに。沈みは果てずして。名をこそ流せ川越の。重房が手に渡り心の外の都入り

シテ「げにや世の中は

地「定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りなば。とにもかくにも果てはせで。又鎌倉に渡さるる。ここはいづくぞ八橋の。雲居の都、いつかまた。三河の國や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限りぞと思ひしに馴るれば。ここも忍び音にあはれ昔を思ひ妻の。燈火暗うしては數行虞氏が涙の。雨さへしきる夜の空

シテ「四面に楚歌の聲のうち

地「何とかかへす舞の袖。思ひの色にや出でぬらん涙を添へてめぐらすも。雪のふる枝の枯れて

の手に渡され、心にもない都入りをした。

誠に世の中の轉變は分らないものである。時は十月、時雨の降りみ降らずみの頃で、その時直に奈良の僧徒の手に殺されもしないで、鎌倉へ渡される事となつた。その途中、三河國八橋のあたりを過ぎては、もはや都も見納めかと思ひながら、遠江・足柄・箱根を越えて鎌倉に着いた。そしてこの住居こそ憂き限りと思つてゐたのに、馴れれば千手といふ忍び妻も出來たのである。そして楚の敗將項羽の昔を思ひ出して

重衡「――「燈火暗うして數行虞氏の涙、夜深うして四面楚歌の聲」――

（この朗詠を諷ふ。――ここで物語は舞臺上現在の光景となる――）

千手「このお悲しい有樣を取替へて、何とか昔のやうに取戻すことが出來ないものか、と思ひますと、涙が滲み出るのでご

○語開くにいひかけた。
○星月夜—鎌倉の枕詞、
○思ひ妻—寵愛する女。昔を思ふといひかけた。
○燈火暗うして—思妻の友と燈にいひかけ、和漢朗詠集、橘相公の句「燈暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲」を引いた。平家物語に「三位中將、燈暗うして數行虞氏の涙、といふ朗詠をぞせられける」
○涙を添へて—めぐらすも—舞容を喩へて廻雪といふ成語があるので、雪を呼び起した。
○雪のふる枝—雪の降るを、古枝にいひかけた。
○枯れてだに花咲く—枯枝にも花を咲かせる千手觀音といひかけて、千手の前に擬じた。古今著聞集に「いづれの佛の誓よりも、千手の誓ひぞたのもしき。枯れたる草木も忽ちに、花咲き實のると說きたれば」。
○忘れめや—觀音の誓願を忘れないと上を承け、また他生の緣を忘れないと下に續く。
○一樹の蔭—他生の緣—平家物語に「千手の前重ねて、一樹の蔭に宿りあひ、同じ

だに花咲く。千手の袖ならば。重ねていざやかへさん

と大小前へ來て舞ひあげ、

地「忘れめや（と常座へ行き）

〔序舞〕

を舞ひて常座に立ち、

シテワカ「一樹の蔭や。一河の水

地「皆これ他生の緣といふ。白拍子をぞ謠ひける

シテくつろぐ。

【七】

ツレ「その時重衡興に乘じ

地「その時重衡興に乘じ。琵琶を引き寄せ彈じ給へばまた玉琴の。緒合はせに

ツレ床几を離れ下に居て、扇を開き琵琶を彈ずる心。「また玉琴の」とツレもシテの前へ出で扇を開き、

シテ「合はせて聞けば

とツレと見合せて音合せの心。

地「峯の松風通ひ來にけり（シテ角の方を見上げ）。琴を

ざいますが、千手と申せば、千手觀音は枯枝に花を咲かせる程の御利益のある佛樣でございますから、なほ舞をつゞけて御利益を願ひませう」

千手「この假初の情を忘れることは出來ません」（といって）

〔序舞〕

を舞ひ、

『一樹の蔭や一河の水、皆これ他生の緣……』

といふ白拍子を謠つた。

【七】

その時重衡も興に乘じて、琵琶を引き寄せて彈かれたので、千手も琴の音を合はせて彈くと、峯の松風も同じやうに調べを合はせるのである。かうして琴を枕に假寢をせられると、間もなく短夜はほの〴〵と明け初めた。

流れをむすぶも、皆是先世の契りといふ白拍子を、誠に面白くかぞへたりければ」說法明眼論に「或處二一村ニ宿二一樹下ニ汲ニ一河流ニ一夜同宿ニ皆是先世結緣」

〇白拍子—素拍子の意で、遊女の演じた舞の一種。

【七】

〇緒合は世—琵琶と琴との合奏。

〇峯の松風通ひ—拾遺集、齋宮女御の歌「琴の音に峯の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん」を引いた。

〇あさま—朝の意と明らさまの意とを兼ねた。

【八】

〇なかなかの憂き契り—別れる辛さを思へば、親しくしたのが却つて恨めしい。

〇きぬぎぬ—後朝。男女の朝の別れ。

枕の短夜のうたたね、夢も程なく。東雲もほのぼのと（脇座の方を見）。明け渡る空の

シテ「あさまにやなりぬべき

と扇を疊みてツレと向合ひ、

地「あさまにやなりなんと。酒宴をやめ給ふ御心の中ぞ痛はしき（シテしをる）

【八】

地「かくて重衡勅により。かくて重衡勅により。又都にとありしかば。武士守護し出で給へば

とワキ、ツレに辭儀して出立を促し、ツレと共に立上り、

シテ「千手も泣く泣く立ち出で（としをりながら立ち）

地「何なかなかの憂き契り。はやきぬぎぬに。引き離るる袖と袖との露涙。げに重衡のありさま目もあてられぬ、氣色かな目もあてられぬ氣色かな

（引き離るる袖と袖とのこと、シテとツレ袖の振れ合ふやうにして入替り、ツレはそのまゝワキと共に幕に入り、シテは常座に出でてシテを見送り、しをり留む。）

重衡「おゝはや明方になつた」といつて酒宴をやめられた心中を察しると、まことにお氣の毒である。

【八】

かうして、重衡はまた都へ上るやうにとの勅命があつたので、武士に守護せられて、鎌倉を出立せられると、千手も泣く泣く出て見送つた。このやうに別れるのを思へば、親しくなつたことが却つて恨めしく、互に涙に袖を濡らしながら別れて、重衡の上洛した樣は、實に目もあてられない氣の毒なものであつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ツレ「これは鎌倉殿の御内に……相國の御子（下懸三位の中將）重衡の卿はこの度一の谷の合戰に……千手の前を遣はされて候（下懸囚人となり鎌倉へ御下向候を、某預り申して候。この重衡の卿と申すは。相國の末の御子とは申しながら。父母の寵愛一門の賞翫雙びなき人にて渡り候。漸うに御痛はり申せとの御事により、昨日も御湯ひかせ申し候に、千手の前を遣はされ介錯させ申され候）

古名本（光悦本）

【一】シテ「光抑これは鎌倉殿……昨日も（光は）千手の前を遣はされ（光御湯などひかせ申されて候　【二】シテサシ「それ春の花の……かほども知らぬ身の行方（光向後）……ありしにかゝる有樣（光恨み）……シテ「千手の前が參りたる（光て候その）由それそれ（光ナシ）御申し……　【三】ツレ「いかに申し上げ候千手の（光前の）御參り……ツレ「いかに申し候……何と思し召し（光とれ）候やらん……ツレ「（光いかに申候）御前の參申して……　【四】ツレ「いかに千手の前……こまごまと申して候へども（光參らせてこそ候へ）かひなき出家の……

卒都婆小町　觀（寳　春　剛　喜）

解　說

【能柄】　三番目　一段劇能

【人物】　**ワキ**　高野山僧、**ワキツレ**　同從僧、**シテ**　小野小町

【所】　京都郊外

【時】　平安初期（九月）

【作者】　世子六十以後申樂談儀に觀阿彌の作として擧げてゐる「小町」は同書に、

小町、昔は長き能なり。「すぎ行く人は誰やらむ」といひて、猶々謠ひしなり。後はそのあたりに玉津島の御座ありとて幣帛を捧げければ、御先となりて出現ある體なり。これを善くせしとて、日吉のからす太夫といはれしなり、當世これを略す。

とある「小町」と同曲と思はれ、その「こき（今）すぎ」と謠ふ「行く人は誰やらむ」は本曲のシテ道行の句に相當するから、この「小町」は即ち本曲を指したもので、觀阿彌が古曲を改作したものであらうか。能本

作者註文には「小町」を世阿彌の作とし、二百十番謠目錄には本曲を觀阿彌の作としてゐる。親元日記に寛正六年三月九日音阿彌が本曲を演じたこと、言繼卿記に文祿四年三月廿九日本曲を註釋したことを記してゐる。

【梗概】　小野小町が老後零落して乞食の姿となり、京都の郊外にさまよひ、行き疲れて卒都婆に腰かけてゐるのを、高野山から都に上つて來た僧が見咎めて教化すると、小町は佛法の奧儀を以て辯駁したが、今の見苦しい姿を咎められて、往時を懷想してゐるうちに、深草少將の靈が憑いて、物に狂ひ、やがて狂ひから覺めて、眞の佛道に入る。

【出典】　このやうに美人の零落した樣を記した古書には玉造小町子壯衰書がある。この作者を弘法大師と傳へてゐるのは、恐らく僞りであらうと思はれ、またこの書に詠歌の事が少しも記されてゐない所から見て、小野小町とは別人の傳に違ひないが、古今著聞集卷五に、

小野小町が若くて色好みし時、もてなし有樣たぐひなかりけり。壯衰記といふものに……

と、この記事を抄出して小野小町の事に結びつけ、徒然草にも、

小野の小町が事、極めて定かならず。衰へたる樣は玉造といふ文に見えたり。

といつて、やはり壯衰書を小野小町の事と見てゐる。かくして小野小町零落の傳說が發展して行つたものであつて、本曲にも壯衰記序を引いてゐる所が少くないから、これを記すと、

予行路之次、步道之間、徑邊途傍有二一女人一、容貌顦顇、身體疲瘦、頭如二霜蓬一、膚似二凍梨一、骨竦筋抗、面黑齒黃、裸形無レ衣、徒跣無レ履、聲振不レ能レ言、足蹇不レ能レ步、糇糧已盡、朝夕之飡難レ支、糠粃悉畢、旦暮之命不レ知、左臂懸二破筐一、右手提二壞笠一、頸係二一裹一、背負二一袋一、袋容何物、垢膩之衣、裹容何物、粟豆之餉、笠入何物、田里草莖、筐入何物、野青蕨薇、肩破衣墜レ胸、頸壞裹纏レ腰、側二徊衢閭一、佇二徊路頭一、予問レ女曰、汝何鄉之人、誰家之子、何村往還、何里去來、有二父母一哉、無二子孫一歟、無二兄弟一歟、有二親戚一哉、女答レ予曰、吾是倡家之子、良家之女、壯時憍慢最甚、衰日愁歎猶深、尚未レ及二三八之員一、名猶兼二三千之列一、被レ寵二華帳之裏一、不レ步二外戶一、彼優二珠簾之內一、無レ行二傍門一、朝向二鏡臺一[illegible]而好二容色一、暮取二寶鏡一、畫二[illegible]一而現二[illegible]色一、面不レ絕二白粉一、顏無レ斷二丹朱一、擬[illegible]咲、細腰風柳、[illegible]、[illegible]而千、[illegible]芙蓉之[illegible]、[illegible]、誤二楊柳之亂二春風一、不レ耒二楊貴妃之花眼一、不レ屑二李夫人之蓮瞼一、衣非二羅綺一不レ着、食非二珍膳一不レ喰、[illegible]之[illegible]、[illegible]之裏、[illegible]之衣多、[illegible]之間、[illegible]、如二彩[illegible]之廻一

吟、夫以富貴者天之所レ與也、東西南北之雲色不レ定、愛樂者人之所レ感也、生老病死之風音無レ常、寄二言老衰之女一、誰人永年有レ保二富貴一、欲レ述二孤寡之憾一、孰子數残有レ測二康寧一、因レ茲且學二樂天秦中吟之詩一、且效二幸地魯士詠之賦一、韻造二古調一、詩賦二新章一示レ爾。

なほ深草少將百夜通ひの傳說については、〔通小町〕の解說に記したから、こゝには省く。

【概評】　老後の小町を取扱つた謠曲には、本曲の外に〔鸚鵡小町〕〔關寺小町〕があり、いづれも重い曲となつてゐるが、その中でも最も深刻味のあるのは本曲であらう。

朽ちた卒都婆の腰かけた卒都婆を主題として、高野山の僧と一問一答して、遂に僧をして感歎の餘り叩頭禮拜せしめる條は、まつたく乞食の小町が、その腰かけた卒都婆を主題として、（※）今に衰へない自負矜持を示したものである。しかしそれも結局女人のあさはかな增上慢であつて、その一代の才媛として聞えた小町の、今に衰へない自負矜持を示したものである。進んで今の見苦しい姿を詰られると、悲歎の餘り、もの狂ほしくなつて行く。そして、往時人を人とも思はなかつた增上慢の悔恨が胸にひしひしと迫つて感じられる。小町に苦められた男性の代表者深草少將の靈が憑き添うて、遂に狂亂を演せしめる。かうして、局面は層一層深みを加へて行くのである。キリの、狂亂より覺めて佛道に入ることも、謠曲作者常套の手法とはいひたが、本曲に於ては局面急轉の妙味を持つてゐるのである。その中にあつて、本曲の如き複式夢幻能には劇的要素の足りないものが多く、劇能には散文的に陷つて幽玄の味を缺いたものが多い。その中にあつて、本曲の如きは劇能として劇的要素を具へ、しかも夢幻味幽玄味を多分に持つた、實に傑作であると思ふ。

【一】　舞臺は初め高野山から都への途中で、ワキ高野山の僧、ワキヅレ從僧を随へて登場。

【一】　次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附小格子・縷水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

（ワキ・ワキヅレ）次第　山は淺きに隱れがの。山は淺きに隱れがの深きや心なるらん

（僧）わが住む山はさほどの深山ではないが、世に隱れる出家心は深いのである。

・次第にわが心持を云ひ、

地取にワキは正面に向き、

【二】

〔一〕山は淺きに隱れ家の　わが住む山は淺いが、世に隱れる心は深いといふ意。

○高野山―紀伊國伊都郡にあり、弘法大師の創立した金剛峯寺のある所。「玉造小町子壯衰書」は弘法大師の作であると傳へられてゐるので、ワキを高野山の僧としたのであらう。○前佛―既に滅度してこの世を去つた佛―釋迦牟尼佛で、その先任者を如來である。○後佛―彌勒菩薩。釋迦滅後五十六億七千萬年して、世に出るといふ彌勒菩薩をいふ。○夢の中間―前佛後佛の中間にあつて、佛の敎を受けることが出來ず、常に厭離することの出來ない夢のやうな現世。與眞實心集に「衆生佛前佛後之中間、出離無期之因緣」○受け難き人身を受け―心地觀經に「受一人身一、値遇佛、信佛法、出離生死甚難」○思ふ心もひとへなる―佛を信ずる心も專らであるといふ意を、衣の單にいひかけた。○生まれぬ先の身を知れば―一切衆生は本來本覺自性淸淨の眞體であるから、自他の差別もなく、因緣によつて迷ひ出たものであ

ワキ「これは高野山より出でたる僧にて候。われこの度都に上らばやと思ひ候

（トいひてワキヅレと向合ひ、）

ワキ・ワキヅレ「それ前佛は既に去り。後佛は未だ世に出でず。夢の中間に生まれきて。何を現と思ふべき。たまたま受け難き人身を受け。逢ひ難き如來の佛敎に逢ひ奉る事。これぞ悟りの種なると。思ふ心もひとへなる。墨の衣に身をなして

ワキ・ワキヅレ「生まれぬ先の身を知れば。生まれぬ先の身を知れば。憐むべき親もなし。親のなければわが爲に。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山に泊る身のこれぞまことの栖なる。との、栖なるこれぞまことの栖なる

（ワキ「千里を行くも遠からず」と正面に向き三四足出でてまた元へ歸りワキヅレと向合ひて旅を進めたる心。上歌濟みてワキは正面に向き、）

ワキ「この所に暫く休らはばやと思ひ候、

僧「私は高野山から出てきた僧で、今度都に上らうと思ふのです」

（と見物人へ自己紹介をし、）

僧「過去佛の釋迦は既にこの世を去られて、後佛の彌勒佛はまだこの世に現れられない、今はその中間にあつて、佛の敎へを受けることの出來ない、夢のやうな世の中で、自分達はさういふ夢の世に生まれて來たのであるから、現と思はれるやうなことは何一つないのだ。それにしても、幸ひにも容易に生まれることの出來ない人間と生まれ、容易に受けられない釋迦如來の佛敎を伺ふことの出來るのは、これがやがて佛道の悟りを開く因であると思ふと、信仰の心も深く起るのであつて、かうして墨染の衣を身に纏うて、道を修めてゐる次第で、佛の御敎へによつて、一度未生以前の本覺實體を悟れば、一切平等無差別で、恩愛の絆となる親といふものもなく、又從つて自分の爲に心を動かす子といふものもないのだ。遠近も亦無差別で、千里を行つたところで、遠いといふ心持はないのだ。このやうな心持で、或時は野に臥し、また或時は山に泊り、たゞ自然に任かせて過

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き下に居り、ワキヅレその次に坐す。

【三】次第の囃子にて、シテ小野小町、面姥・姥髪・壺帯・襟白・着附摺箔・無色縫箔腰巻・水衣・腰帯の装束にて女笠を被り杖をつきて橋懸へ出で、二の松にて一度休息し、一の松に立ちて、

シテ次第「身は浮草を誘ふ水身は浮草を誘ふ水なきこそ悲しかりけれ

地取に舞臺へ入り常座にて、

シテサシ「あはれやげに古は。憍慢もつとも甚しう。翡翠のかんざしは婀娜とたをやかにして。楊柳の春の風に靡くが如し。又鶯舌の囀りは。露を含める糸萩の。かごとばかりに散りそむる花よりも猶めづらしや。今は民間賤の目にさへきたなまれ。諸人に恥をさらし。嬉しからぬ月日身に積つて。百年の姥となりて候

シテ下歌「都は人目つつましやもしもそれとか夕まぐれ。上歌「月もろともに出でて行く。月もろ

して行く、これがほんとの身の安住といふものだ」

といつてゐるうちに、旅は進んだ態で、舞臺は京都の郊外となる。

【三】

シテ小野小町、老いほれた姿で登場。

小町「わが身はこのやうに老い衰へて、昔若く美しかつた時のやうに、誰も誘つてくれるもののないのは悲しいことだ。あゝ思へば、昔は自分の美しい容色に非常な誇りを持つてゐたのだ。あの翡翠のやうに緑滴る髪は美しくしとやかで、柳の枝が春風に靡くやうであつたし、又鶯の囀るやうな美しい聲は、露を含んだ糸萩の花が、少しばかり散り初めた樣よりも、なほ愛らしいものであつたのだ。それが今は平民ともの下らない者の目にさへ穢たがられて、多勢の人に恥をさらし、嬉しくもない月日を過して行くうちに、はや百年の姥となつたわけです」

と問はず語りに自己紹介をし、

小町「都は人の見る目も恥かしい。もしや『あれが小町の果か』といはれるかと思へば人目も恥かしいから、この夕暮に月

るから、一度未生以前の本覺寳體を證悟すれば、一切無差別平等で、親子の恩愛も何もないといふ意。

○千里を行くも遠からず―止觀に「千里之路、不二謂爲一ㇾ遠、數步之地不二謂爲一ㇾ近」

○これぞまことの栖―雲水の如く自然に任かせるのが誠の安住である。

【三】

○身は浮草の―古今集小野小町の歌「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」を引いて、老い衰へたので、若く美しかつた時のやうに、誘つてくれる者のないのが悲しいといふ意に用ゐた。

○憍慢もつとも甚しう―容色の美しさを誇ること。壯衰書に「壯時憍慢最甚、衰日愁歎猶深」とあるを引いた。

○翡翠―かはせみの羽の色髮の緑濃い形容。

○婀娜とたをやかにして―しとやかに美しいこと。壯衰書に「婀娜腰支、誤三楊柳之亂二春風一」

○鶯舌の囀り―言葉の美しい形容。壯衰書に「鶯囀三春之梢、早罷[illegible]」

○かごとばかり―申しわけばかり。少しばかり。

○人目つゝまし―人に顔を見られるのも恥かしい。
○もしもそれかとタぐれ―もしや小町といふことをタにいひかけ、月を呼び出した。
○月もろともに―西の方へ行くのである。
○雲居百敷―内裏をいふ。月の縁で雲を出した。
○大内山の山守も―千載集源三位頼政の歌「人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」を借りた。
○鳥羽の戀塚―京都の南西郊外鳥羽にあり、袈裟御前の首を埋めた塚といふ。
○秋の山―鳥羽にある名勝。
○月の桂の川瀬舟―秋より月に、月より桂にいひつゞけ、桂を桂川にいひかけた。桂川は京都の西を流れる大井河の下流。
○漕ぎ行く人は誰やらん―桂川を漕いで行く人は、もしや自分の知つてゐる人でなからうかと懐しくなつかしゆかしがる心。
【三】
○卒都婆―梵語ストゥーパの音譯で、墳堂又は廟の意。後には供又は板に五輪塔を模して、死者の供養に建てるものとなつた。こゝの卒都婆はそ

ともに出てて行く。雲居百敷や。大内山の山守も。かゝる憂き身はよも咎めじ木隠れてよしなや。鳥羽の戀塚秋の山。月の桂の川瀬舟。漕ぎ行く人は。誰やらん漕ぎ行く人は誰やらん

「鳥羽の戀塚」と右の方へ向き二三足出で、「漕ぎ行く人は誰やらん」と杖に両手をかけて心持し、

シテ「あまりに苦しう候程に。これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候

といひながら眞中へ行き、笠を脱ぎて下に居る。ワキ・ワキヅレ立ちて、

【三】

ワキ「なうはや日の暮れて候道を急がうずるにて候。(シテを見て)や。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒都婆にて候。教化して除けうずるにて候

ワキヅレ「尤もにて候

ワキ、シテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる乞丐人。おことの腰かけた

と一緒に西の方へ出で行くのだが、このやうなやつれた姿では、都の人たちは誰も見咎めもしはしまい。……木の間隠れて、よくも見えないが、あの邊が鳥羽の戀塚や秋の山であらうか。……おゝあの桂川を漕いで行く舟の主は誰であらう」

と人目恥かしい人なつかしい思ひをしながら、少しづつ歩いて、

小町「あまり苦しいから、この朽木に腰をかけて休みませう」

と、そこにあつた卒都婆に腰をかける。

【三】

僧は暫く休んでゐたが、立つて、

僧「おゝ早や日が暮れた。道を急ぎませう」

と少し歩いて小町を見つけ、

僧「やあ、この乞食の腰かけてゐるのは、確かに卒都婆だ。よく教へ諭して立ち退かせませう」

小町に向ひ、

僧「おい、こゝな乞食。お前の腰かけてゐる

の柱のものであらう。
○教化して除けら―教へ諭して立去らしめよう。
○乞丐人―丐も乞と同じ意で、乞食のこと。
○佛體色性―密教で卒都婆を大日如來三摩耶形とするから、佛體といひ、また五大を具象したものであるから、色性といふ。
○たとひ深山の―詞花集源頼政の歌「深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」を胸に置いて綴つたのであらう。
○心の花―和歌を詠む雅情
○手向になどか―和歌を詠めば、それが佛への手向になるだらうとの意。
○金剛薩埵―眞言宗付法八祖の第二祖で、本尊大日如來の説法を結集して、南天竺の鐵塔中に置き、のち龍樹がこの塔を開いた時、金胎兩部の秘訣を授けたといふ。
○三摩耶形―本書の末に記す。
○地水火風空―一切萬有の成分を五方面から觀たもの、これを五大又は五輪といふ。五輪塔はこの五大を表したもので、地を表す方形、水を表す圓形、火を表す三角形、風を表す半

るは。忝くも佛體色性の卒都婆にてはなきか。
そこ立ちのきて餘の所に休み候へ

シテ「佛體色性の忝きとは宣へども。これ程に文字も見えず。刻める像もなし唯朽木とこそ見えたれ

ワキ「たとひ深山の朽木なりとも。花咲きし木は隱れなし。いはんや佛體に刻める木。などしるしのなかるべき

シテ「われも賤しき埋木なれども。心の花のまだあれば。手向になどかならざらん。「さて佛體たるべき謂れはいかに

ワキヅレ「それ卒都婆は金剛薩埵。かりに出化して三摩耶形を行ひ給ふ

シテ「行ひなさせる形はいかに

ワキ「地水火風空

るのは、勿體なくも佛の御姿を形に表した卒都婆ではないか。そこを立ち退いて、外の所でお休みなさい」

小町「佛の御姿を表した勿體ないものだと仰しやるが、これこのやうに文字も見えず、刻んだ像もなし、たゞの朽木と見えますが……」

僧「いや、たとひ深山の朽木でも、花の咲いた木はよく分るものだ。まして佛體を刻んだ木であるものが、どうしてしるしのないことがあるものか」

小町「朽木といへば、私も賤しい埋木ですが、まだ心の花はあるのですから、それが佛への手向とならないこともありますまい。ところで、これが佛像であるといふのはどうしたわけです」

從僧「抑も卒都婆は金剛薩埵が假にこの世に現れて、大日如來の誓願を形に表されたものたのだ」

小町「その表した形は何です」

僧「地水火風空た

月輪、空を表す如意珠形の五つを積み重ねたものである。
〇五大五輪は人の體―人の體も地水火風空の五大から成立つてゐるのであるから、五輪塔と變りがないといふ意。
〇一見卒都婆永離三惡道―一たび卒都婆を見れば、永く三惡道を離る―と言ふ。三惡道は地獄・餓鬼・畜生。この經文の出所は分らない。
〇一念發起菩提心―華嚴經の「一念發起菩提心、勝於造立百千塔、寶塔畢竟成微塵、一念菩提心能成佛」を引いた。菩提心は正覺佛果を求めようとする心。
〇妾が世をも厭はばこそ―妾は世を厭ふのではない、心が世を厭ふのである。自分も姿は出家の形でないが菩提を求める心は深いといふ意。
〇とても臥したるこの卒都婆―卒都婆は既に臥し寢てゐるから、自分も共に休むのであるとの意。
〇苦しいか―不都合であるか。不都合でない。
〇順縁―善事が佛道に入る縁となること。
〇逆縁―惡事が却つて佛道に入る縁となること。

シテ「五大五輪は人の體。何しに隔てあるべきぞ
ワキツレ「像はそれにたがはずとも。心功德は變るべし
シテ「さて卒都婆の功德はいかに
ワキ「一見卒都婆永離三惡道
シテ「一念發起菩提心。それもいかでか劣るべき
ワキツレ「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ
シテ「妾が世をも厭はばこそ心こそ厭へ
ワキ「心なき身なればこそ。佛體をば知らざるらめ
シテ「佛體と知ればこそ卒都婆には近づきたれ
ワキツレ「さらばなど禮をばなさで敷きたるぞ
シテ「とても臥したるこの卒都婆。われも休むは苦しいか
ワキ「それは順縁に外れたり
シテ「逆縁なりと浮かむべし

小町「その五大五輪ならば、人間のからだにも具はつたもので、別段卒都婆と距りがない筈です。
從僧「なる程形像には變りがなくても、その心、功德に違ひがあるのだ。
小町「それならば、卒都婆の功德は何です。
僧「一たび卒都婆を見れば、永く三惡道を離れるのだ。
小町「けれど「一念發して菩提心を起さば、百千塔を建立するより勝れり」ともありますから、菩提心も卒都婆の功德に劣るものではありません。
從僧「お前のいふやうに、若し菩提心があるならば、何故この浮世を厭つて出家しないのだ。
小町「姿で世を厭ふのではありません。心で世を厭ふことが大切なのです。私は心の出家です。
僧「いや心のない者だからこそ、佛體が分らなかつたのだらう。
小町「佛體であると知つて居ればこそ、卒都婆に近づいたのです。
從僧「それならば、何故卒都婆に禮拜しないで、尻に敷いたのだ。
小町「どうせ卒都婆も寢てゐるから、私も休んだのに、何が不都合です。
僧「それは順縁に外れてゐる。
小町「逆縁でも成佛出來ませう。

○提婆―提婆達多の略。釋迦の從弟であるが、釋迦の威勢を嫉んで、これを殺さうとし、その他多くの惡逆を重ね、生きながら墮獄した。しかし釋迦はわが過去の善知識で、未來には天王如來になるであらうと豫言した。この事法華經提婆達多品に見ゆ。
○觀音―觀世音菩薩。大慈大悲を以て十方世界に身を現じ、世人のその名を稱する音聲を觀じて、皆解脫せしめる菩薩。
○槃特―周利槃特迦の略。釋迦の弟子で、極めて闇愚であつたが、遂に釋迦の敎化によつて證果を得た。
○文殊―文殊師利の略。釋迦の左側にあつて智慧を司る菩薩。
○惡といふも―「善惡不二、邪正一如」の義。
○煩惱といふも―煩惱即菩提―の義。
○菩提もと植木にあらず―禪宗第六祖慧能の偈文。委しくは本曲の末に記す。

ワキヅレ「提婆が惡も
シテ「觀音の慈悲
ワキ『槃特が愚癡も
シテ「文殊の智慧
ワキ『惡といふも
シテ『善なり
ワキ『煩惱といふも
シテ『菩提なり
ワキ『菩提もと
シテ『植木にあらず
ワキ『明鏡また
シテ『臺になし
地『げに本來一物なき時は佛も衆生も隔てなし。もとより愚癡の凡夫を、救はん爲の方便の、深き誓ひの願なれば、逆緣なりと浮かむべしと、

從僧「提婆のやうな惡逆の者でも……」
小町「慈悲深い觀世音と同じやうに成佛出來ます」
僧「槃特のやうな闇愚な者でも……」
小町「文殊のやうな智慧者と同じやうに……」
從僧「惡といつても……」
小町「結局善と同じです」
僧「煩惱といつても……」
小町「畢竟菩提と同じです」
從僧「元來菩提といふものが……」
小町「實相としてあるのではありません」
僧「明鏡も……」
小町「ありはしません。元來この世は無一物で、從つて佛も衆生も變りはないのです。たゞ愚かな凡夫を救ふ方便として、誓願せられたものなのだから、たとへ逆緣であつても、成佛出來ませう」

〇非人―乞食のこと。
〇極樂の内ならばこそ惡しからめそとは何かは苦しかるべき―戯歌。出所は分らない。「そとは」は卒都婆を「外は」にいひかけた。
〇むつかし―うるさい。

【四】

〇小野の良實が女―小野氏系圖に「出羽守良實、小野篁二男、大内記石見守俊生之弟也、一本當澄、又石見守道、有二女一人一、號曰小町一歟人也」と。

懇に申せば。誠に悟れる。非人なりとて。僧は頭を地につけて。三度禮し給へば

ヒツキ・ツキテ下に居てシテに禮す。

シテ われはこの時力を得。なほ戯れの歌を詠む。（少し間を置きて）極樂の内ならばこそ惡しからめ。そとは何かは。苦しかるべき

地 むつかしの僧の、敎化やむつかしの僧の敎化や

ヒシテ杖を取りて立上り常座へ行く、

【四】

ワキ さておことは如何なる人ぞ名を御名乘り候へ

シテ 恥かしながら名を名乘り候べし

ト眞中へ行き下に居て、

シテ これは出羽の郡司。小野の良實が女。小野の小町がなれる果にてさむらふなり

ワキ 痛はしやな小町は。さも古は優女にて。花

と委しくいつたので、僧も

僧「まことによく悟つた乞食だ」

といつて、頭を地につけて、三度禮拜せられたので、小町は得意になつて、なほ戯れの歌を詠む。

小町「――

「極樂の内ならばこそ惡しからめ、そとは何かは苦しかるべき」――

（極樂の内ならば、無禮をしてはいけないだらうが卒都婆さいへば、極樂の「外」だから、何も差支なからう）

いやお僧の御敎化はうるさいことだ―

と小町は僧を茶化してしまふ。

【四】

僧は話題をかへて、

僧「さてそなたはどういふ方なのです。名をお名乘りなさい」

小町「恥かしながら名を申しませう。私は出羽の郡司小野良實の女小野小町が、かう落ちぶれてしまつたのです」

僧「お氣の毒な。小町といへば昔は實に

の貌輝き。桂の黛青うして。白粉を絶えさず。羅綾の衣多うして桂殿の間に餘りしぞかし

シテ「歌を詠み詩を作り

地「酔を勸むる盃は。漢月袖に靜かなり。まことに優なる有様のいつその程にひきかへて

地上歌「頭には。霜蓬を戴き。嬋娟たりし兩鬢も。膚にかしけて墨亂れ宛轉たりし雙蛾も遠山の色を失ふ。百年に。一年足らぬつくも髪。かかる思ひは有明の影恥かしきわが身かな（と笠にて身を隱し）

【五】

シテ立ちて常座へ行き、

地ロシギ「頸に懸けたる袋には。如何なる物を入れたるぞ

シテ「今日も命は知らねども。明日の飢を助けんと。粟豆の乾飯を袋に入れて持ちたるよ

美しい女で、花のやうな顔は輝き、月のやうな黛は青く、いつも白粉を絶やさず、うす綾の美しい着物を澤山持つてゐて、立派な御殿にも入り切らなかつた程であつたのだ」

小町「歌も詠めば詩も作り、また酒を勸める盃を手に持てば、空行く月が袖にあるやうで、ほんとに優美な姿であつたのに、いつの頃からか、それとは全く反對に、頭髪は霜を置いた蓬生のやうになり、美しかつた兩鬢も膚に萎えちゞんで、昔の翠のやうに黒かつた面影はなく、圓らかな美しかつた黛も、あの遠山を見るやうな趣はなくなつてしまひ、老い朽ちて、海藻のやうに亂れた白髪の姥となり、このやうな悲しい思ひをしようとは、人の見る目も恥かしい身上です」

【五】

僧は小町の身なりを見て、

僧「頸にかけた袋には、どういふ物を入れてゐるのだ」

小町「今日死ぬやら知れない果敢ない命ではありますが、明日の飢を免れる爲に、粗末な粟や豆の乾飯を袋に入れて持つてゐるのです」

○桂の黛—桂は月の異名で三日月形の黛をいふ。美人の形容。
○白粉を絶えさず—壯衰書に「面不レ絶二白粉一、顏無レ斷二丹朱一」
○羅綾の衣多うして—壯衰書に「羅綾之衣多、餘二桂殿之間一」羅綾はうす綾。桂殿は美しい家。
○酔を勸むる盃は—壯衰書に「手取二鸚鵡之觴一、漢月落而影靜」漢月の漢は天河で、漢月とは空の月をいふ。
○頭には霜蓬を戴き—壯衰書に「頭如二霜蓬一、膚似二凍梨一」
○嬋娟たりし兩鬢も—白樂天の詩句「嬋娟兩鬢秋蟬翼、宛轉雙蛾遠山色」に據つた。嬋娟は姿の美しいこと。
○膚にかしけて墨亂れ—この句通じ難い。美しかつた兩鬢も膚に萎えちゞんで、昔の墨のやうに黒かつた面影がないといふ意か。
○宛轉たる雙蛾—宛轉は曲つた貌。雙蛾は美しい黛。蛾は月のこと。
○百年に一年足らぬ—末に記す。
○かかる思ひ—髪の垂れかかるを斯かる思ひにいひかけた。
○有明の影恥かしき—有明の月影を面影にいひかけた

【五】○頸に懸けたる袋には—以下數節、壯衰書に「頸係二一裹一、背負二一袋一、袋容何物、粟豆之餉。裹容何物、垢膩之衣。」云々とあるに據つた。
○粟豆の餉—米の干飯ではなく、粗末な粟や豆などのほしいひ。
○垢膩—垢はあか、膩はあぶら。
○簣—竹で編んだ籠。
○白黒の慈姑—白は原文の田を誤つたのであらう。
○[illegible]—小町の[illegible]のであるう。
【七】

地「後に負へる袋には
シテ「垢膩のあかづける衣あり
地「臂に懸けたる簣には
シテ「白黒の慈姑あり
地「破れ簑
シテ「破れ笠（と笠を見ており）
地「面ばかりも隱さねば
シテ「まして霜雪雨露
地「涙をだにも抑さうべき袂も袖もあらばこそ（と袖を見て）今は路頭にさそらひ（と笠をうけ）。往來の人に物を乞ふ（と角へ行き）。乞ひ得ぬ時は惡心（と笠の中を見て）また狂亂の心つきて（杖をつきて二三足出で）。聲かはりけしからず（と杖をすつ）
【六】
シテ「なう物たべなうお僧なう（と笠を兩手に持ちて[illegible]）
（小町前へ出で）

僧「背中に背負つてゐる袋には……」
小町「垢やあぶらで汚れた着物があるのです」
僧「臂に懸けた籠には……」
小町「田に出來る黒い慈姑があります」
僧「そのやうな破れ簑を着て……」
小町「このやうな破れ笠では、顔だけも隱すことが出來ないのですから、まして霜雪雨露を凌げよう筈もなく、涙さへ抑さへるべき袂も袖もないのです。そして今はこのやうに路頭に迷うて、往來の人に物を貰つてゐるのですが、何も貰へない時には、惡心、狂亂の心がついて、聲も異様なものに變つてしまふのです」
（[illegible]、ほ狂亂の心になつて、）
【六】
小町「もうし、何か下さい、お僧さま」
僧（[illegible]）

○おこと—そなた。第二人稱の代名詞。
○色が深うて—容色が秀れてゐて、人をして深く戀心を起させること。
○あなたの玉章こなたの文—壯嚢書に「君臣子孫爭ニ婚姻於日夜一、富貴主客競ニ伉儷於時辰ニ」
○かきくれて降る—文を書く、をかきくれにいひかけ、寶治百首少將内侍の歌「かきくらし降る五月雨の頃をへて谷の小川の音まさるなり」を借り、五月雨の空を、そら言にいひかけた。
○深草の四位の少將—思ひ深きを深草にいひかけた。深草少將は假作の人物で、謠曲以前にこの情話を記したものはない。良岑宗貞後の僧正遍昭を種にしたものであらうといはれてゐたが、黑岩涙香は小野小町論に別な説を立ててゐる。
○恨みの數のめぐり來て—少將の數々の恨みが小町に報うて來て「めぐり」は車の緣語。
○車の榻—榻は車の轅を載せて置く臺。これを數重なる意の「しぢ」にいひかけた

ワキ「何事ぞ

シテたら／＼と下り、

シテ「小町がもとへ通はうよなう

ワキ「おことこそ小町よ。何とて現なき事をば申すぞ

シテ「いや小町といふ人は。あまりに色が深うて。あなたの玉章こなたの文。「かきくれて降る五月雨の。「そらごとなりとも。一度の返事も無うて。「今百年になるが報うて。あら人戀しやあら人戀しや（としをる）

ワキ「人戀しいとは。さておことには如何なる者のつき添ひてあるぞ

シテ「小町に心をかけし人は多き中にも。殊に思ひ深草の四位の少將の

地「恨みの數のめぐり來て車の榻に通はん（と正面

僧「何だ」

小町に深草少將の靈が憑いて、

小町「さあ、小町のとこへ行かう」

僧「そなたが小町なのだ。どうしてそのやうな狂氣のことをいふのだ」

小町「いや小町といふ人は、非常に美しくて、人の心を迷はせ、あちらからもこちらからも手紙が雨の降るやうに來たが、うそにも僞りにも一度の返事もしないで、今このやうな姥となつたのが報うて來て……あゝ戀しい、あゝ人が戀しい」

僧「人が戀しいとは、一體そなたにはどういふ者の靈が憑き添うたのだ」

小町「小町に執心であつた人の多い中で、殊に深く思ひ入つた深草の四位少將の恨みが報うて來たのだ。……さあ毎夜毎夜通うて行かう。——」

一(出かけ)日は何時ぞ夕暮(西の方橋懸を見やり)。月こそ友よ通ひ路の。關守はありともとまるまじや出で立たん

(と常座にくつろぎて【物着】黒風折烏帽子・白地長絹を着け扇を持ちて正面に向き、)

今は何時だ。夕暮だ。月の光が自分のよい道連れだ。この通ひ路に關守がゐようとも、この戀を思ひ留まることが出來ようか。さあ行かう」

これより少將の靈が小町に憑いて、小町をして少將の昔に通つた時の様を再現させるのである。
○通ひ路の關守—伊勢物語の歌「人知れぬわが通ひ路の關守はよひよひ毎にうちも寝ななむ」を借りた。

【七】

シテ『浄衣の袴かいとつて

地浄衣の袴かいとつて。立烏帽子を風折り狩衣の袖をうちかづいて(と袖をかづき)。人目忍ぶの通ひ路の(二三足出で)。月にも行く闇にも行く(又二三足出で)。雨の夜も風の夜も。木の葉の時雨雪深し(と正面に直し)

シテ『軒の玉水とくとくと(雨をつかひ)

地行きては歸り(二三足出で右へ廻り)。歸りては行き一夜二夜三夜四夜(と指を折りて數へ)。七夜八夜九夜、豐の明の節會にも(と右へ廻り)。逢はでぞ通ふ鶏の。時をもかへず曉の(正面へ出で)。榻のはしがき百夜

【七】

小町「白い袴の裾をからげて、立烏帽子を風折に折り曲げて、狩衣の袖をかぶつて、人目を忍んで通つて行くのだ。——

月夜にも行けば闇夜にも行く。雨の夜も風の夜も、木葉の時雨のやうに散り亂れる時も、雪の深く降り積つた時も、とつとつと、早く行つては歸り、歸つては行き、一夜、二夜、三夜、四夜、五夜、……九夜、十夜と、逢ふことは出來ないのに、頻りに通ひつめ、毎夜時をも違へずに行つて、明方車の榻の端に通つて來た度數を書きつけて、百夜まで通ひつめようと思つて、もはや九十九夜となつたのだ。

——

【七】
○浄衣の袴—白布の袴。
○かいとつて—袴の端をからげること。
○立烏帽子を風折り—立烏帽子は長く直立した烏帽子、風折りはこれを中程から斜に折り曲げること。
○木の葉の時雨雪深し—木葉の時雨の如く散り亂れる時も雪の深く降つた時もとの意。
○軒の玉水とくとくと—軒の玉水は雨垂。その落ちる音のとくとくを早い意のとくとくにいひかけた。
○豐の明の節會—新嘗祭の翌日宮中で行はせられる賜宴。但しこゝでは十夜を豐にいひかけ、節會を切にいひかける爲に出しただけである。
○鶏の—時の枕詞に用ゐた。
○曉の榻のはしがき—古今集讀人知らずの歌「曉の榻

までと通ひて。九十九夜になりたり（と左の小指を見）

シテ「あら苦し目まひや（とたら〳〵と後へ下り）

地「胸苦しやと悲しみて（扇を胸にあて）。一夜を待たで死したりし（と安坐し）。深草の少將の。その怨念がつき添ひて（と立上り）。かやうに物には狂はするぞや（とワキに向く）

地（キリ）「これにつけても後の世を。願ふぞ眞なりける。砂を塔と重ねて。黄金の膚こまやかに。花を佛に手向けつつ。悟りの道に入らうよ。悟りの道に入らうよ

（と常座にて合掌して留む）

あゝ苦しい、目がまふやうだ。胸が苦しい。と悲しんで、とうとう今一夜を通ひ得ないで死んでしまつた深草少將の、その怨靈が憑き添つて、このやうに氣を狂はせるのだ。

（といつて、われに歸り、）

小町「これにつけても、現世の迷ひを棄てて、後世を願ふのがほんとの道なのだ。自分も小さな善を積み重ねて大きな功德となし、佛身となるやうに、花を手向けて佛に仕へ、悟りの道に入りませう」

（といつて退場。）

の羽かき百羽かき君がこぬ夜はわれぞ數かく」を本として詠んだ千載集藤原俊成の歌「思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜も同じまろねせんとは」に據る。委しくは「通小町」の解説にいふ。「榻のはしがき」は車の榻に通つた數を書きつけて置くこと。

○かやうに物には狂はす―本の小町の詞となる。

○砂を塔と重ねて―童子教に「聚レ砂爲レ塔人、早磨ニ黄金膚一、折レ花供レ佛輩、速結ニ蓮臺趺一」とあるに據る。砂を塔と重ね―は小善を積んで大功德を爲すこと。黄金の膚は佛身の喩へ。

（考異）

諸流（五流）

【一】ワキ上歌「生まれ出づ……野に臥し山に泊る身のこれぞまことの……栖なる（下懸こそ。實に捨つる身の習ひなれ〳〵）　【二】シテ「是ははや津の國安部野の松原とかや申し候」あまりに苦しう候程に……　【四】ワキさておことは如何なる人ぞ名を御名乗り

泰山府君

剛

解說

【能柄】四番目　劇的夢幻能

【人物】ワキ　櫻町中納言、前シテ　天女、狂言　花守、後シテ　泰山府君、後ツレ　天女

【所】京都　櫻町

【時】平家時代　春（三月）

【作者】世阿彌の能作書に「たいさんもく」と書いて、應永新作の本體として本曲を擧げ、また世子六十以後申樂談儀にも、世子の作として擧げてゐるから、世阿彌の作に相違なからう。能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作としてゐる。親元日記に寛正六年三月九日音阿彌の演じたことが見えてゐる。

【梗概】櫻町中納言成範が櫻の名殘を惜しんで泰山府君の祭をしてゐると、天女が天降つて來て、一枝手折つて行つたが、やがて泰山府君が現れて、天女の偸盜を責め、成範の風流を愛して、花の命を三七日に延ばす。

【出典】この事は、源平盛衰記卷二「清盛息女事」に、

抑も此成範卿とは、故少納言入道信西の三男也。櫻町中納言と申す事は、優に情深き人にて、吉野山を思出して、櫻を愛し給ひけり。室八島より歸り上つて後、町の四方に吉野の櫻を移し植ゑ、其中に屋を立てて住み給ひければ、見る人此町をば樋口町櫻町と申しけり。又は此中納言櫻の名殘を惜みて、立行く春を悲み、又こん春を待ちわび給ひしかば、異名に櫻待中納言ともいへり。殊に執し思はれける櫻あり。七日に咲き散る事を歎きて、春ごとに花の命を惜みて、泰山府君を祭られける上、天照大神に祈り申させ給ひければ、三七日の齢を延べたりけり。……君も御感ありて、花の本には此人をぞすべきとて、勅書に櫻町の中納言とぞ仰せける。

とあるに據つたのであらう。

【概評】本曲は前に述べたやうに、世阿彌が自ら代表作として擧げてゐる曲で、その構想は特異なものであるが、戲曲として秀れた作とはいひ難い。例へば前段、前ジテ天女が天降つて花を手折らうとして、ワキ櫻町中納言と別々の心で花に見入つてゐるのも、面白いといへば面白いが、兩者全く沒交渉で、劇的葛藤の結ばれてゐないのは、著しい缺點である。後段に於て、前ジテの天女がそのまゝ後ヅレとして現れるのも、舞臺效果を高める所以でなからうと思はれる。一體、櫻の花の命の短いのを、天女の仕業に歸せしめたのは面白い構想であるが、その天女、前ジテとワキ、後ヅレと後ジテの關係が餘りに稀薄である。恐らくは後世原作を甚しく改竄したのではなからうか。

【一】

前段

舞臺は京都で、ワキ櫻町中納言住居。

櫻町　自分は風雅の樂しみに耽つて、春は花咲く山に入つて一日眺め暮らし、秋はまた龍田のやうな紅葉の名所に遊び、花紅葉の色香を愛して、いつも風流を樂しんでゐるので、心に少しも思ひ殘す所は

【二】

後見、櫻の立木の作物を正面先に出す。名乘笛にて、ワキ櫻町中納言、風折烏帽子・着附段厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で舞臺に入り、

ワキ　わが好ける心にあくがれて。青陽の春の朝には。花山に入つて日を暮らし。秋は龍田のもみぢ葉の。色に染み香にめでて。情を四方に廻

【二】「金剛流謠本にはワキの名乘がないが、古謠本には「これは櫻町の中納言とはわが事なり」とある。
○好ける心―風雅な心。
○青陽―春の異名。
○花山―花の咲いてゐる山。固有名詞ではない。
○龍田―大和國生駒郡にあり、紅葉の名所であるから、紅葉の序のやうに用ゐた。

○三春—春三ケ月。
○泰山府君—もと支那道家から出た名で、泰山の神をいふ。わが國の陰陽家は素盞鳴尊であるといひ、佛家では閻魔王の太子で生類の生命を司る神であるといふ。本曲はその佛説に據つた。
○荒磯海の—何かこの上の望みはあらんを「ありそ」にいひかけて、古今集序の歌「わが戀はよむとも盡きじありそ海の濱の眞砂はよみつくすとも」を引き「事を盡すや」とつゞけた。
○夕露の—手向といふを夕にいひかけた。
○白木綿—楮の皮で作つた白い紙又は布。神に供へる幣とする。白い櫻を白い幣をかけたやうであると形容したのである。
○月の光も曇らじな—春の夜の朧月といふが、花の影が明らかである爲に、月の光が曇らないとの意。
【三】
○花におり立つ白雲の—櫻花を眺めるために、天女が白雲に乘つて天降り、その白雲が梢に留まるので、花が白雲のやうに見えるのであるといふ心で用ゐた。

らせば。心に洩るる方もなし。然れども恨みは花盛り。三春だに經ずして。唯一七日の間なり。餘りに名殘惜しく候へば。泰山府君の祭を執り行ひ。花の命を延べばやと存じ候

ツレ地「ありがたや治まる御代の習ひとて。何か望みは荒磯海の。濱の眞砂の數々に。事を盡すや榮花の家

地「花の命を延ばへんと。花の命を延ばへんと。これも手向と夕露の。白木綿懸けて咲く花の影明らかに春の夜の。月の光も曇らじな。金銀珠玉色々の。花の祭をなしにけり花の祭をなしにけり

【三】

一聲の囃子にて、シテ天人、面増・鬘・鬘帶・天冠・襟白・着附箔・長絹・縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて出で、

シテ一聲「花におり立つ白雲の。嵐や空に。歸るらん

ないのです。しかしたゞ殘念なことには、櫻の花盛りが、春三箇月間も保たないで、僅か一週間に過ぎないのが、餘りに名殘惜しく思はれるので、泰山府君の祭典を行つて、花の壽命を延ばしたいと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

櫻町「あゝありがたいことだ。天下泰平の御治世なので、この上何の望みをも起しやうのない程、すべての事が思ふまゝに滿されて、榮耀榮華に過すことが出來るのだが、なほ今一つ花の壽命を延ばしたいと思ふのだ。……おゝこの白い花は白木綿のやうで、これも神への手向となるであらう。……このやうに奇麗に咲いた花の影がほんとに明らかで、春の夜とはいへ、月の光まで曇りがないやうだ」

といつて、金銀珠玉色々の立派なものを供へて、花の祭を行つた。

【三】

前シテ天女登場。

天女「花見のために白雲に乘つて天降つて來ると、その白雲は花の梢に留まるが、雲を吹き送つて來た嵐はまた空へ歸つて行くことであらう。……和讃に——

「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ、少女の

シテサシ『天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ。少女の姿暫しだに。留めかねたる春の夜の。色香妙なる花盛り。餘所に見るさへ。面白や
シテ上歌『いざ櫻われも散りなむ一盛り。われも散りなむ一盛り。誘ふ嵐も心して。松に殘る白雪の。盛りとも夕暮の。月も曇らぬ天の原。霞の衣きて見れば。妙なる花の。氣色かな妙なる花の氣色かな

【三】
シテ「あら面白の花盛りやな。一枝手折り天上へ歸らばやと思ひ候。『宴罷んで紅燭猶餘れり。花一枝を手折らんと。忍び忍びに立ち寄れば
ワキ「春宵一刻値千金。花に清香月に陰。見る目隙なき花守の。心は空に。なりやせむ
シテ「折らばやの花一枝に人知れぬ。わが通ひ路の關守は。宵々毎にうちも寢よ

姿暫し留めむ』と詠まれたが、その天女よりも、春の夜は一時も留め難いものであるが、今はその春の、色香のこの上もなく秀れた花盛りで、遠くから見てさへ面白いことだ。……櫻といふものは『いざ櫻われも散りなむ一盛り』と詠まれた通り、盛りの短いものだから、花を散らす嵐も氣をつけて、散つた花を松の枝に白雪のやうに殘して行くので、花のない松までが花の雪で眞白で、夕暮の月も曇らず照り渡つてゐることだ。その月の空から霞の衣を着て、この下界へ來て見ると、ほんとに美しい花の眺めだ」
（天降つて來た心で、）

【三】
天女「ほんとに面白い花盛りだ。一枝手折つて天上へ歸りませう。……花の宴は終つて、たゞ燭火が殘つてゐるだけで、人は誰もゐない、丁度よい幸ひだ、花を一枝折りませう」
と忍び忍んで花の下へ立ち寄ると、
（櫻町中納言は天女には氣がつかず、たゞ花に眺め入つて、）
櫻町「古人が『花には清い香があり、月には明らかな光があり、春の宵は一時に千金の値がある』といつた通り、誠に美しい眺めで、少しの油斷もなく花盜人の見張りをしてゐる花守も、この景色を眺めては、心も浮き立つことであらう」
（天女はまた花を手折らうと夢中になつて、）

○嵐や空に歸るらん―白雲は嵐に吹き送られて、花の梢に留まり、嵐だけがまた空に歸つて行くといふ意。
○天つ風雲の通ひ路―古今集僧正遍昭の歌「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ少女の姿しばしとゞめむ」を引き、「暫しだに」の序に用ゐた。
○いざ櫻われも散りなむ―古今集承均法師の歌「いざ櫻われも散りなむ一盛りありなば人に憂き目見えなむ」を引いた。
○松に殘る白雪の―松に散りかゝつた落花を喩へて白雪といつた。
○霞の衣きて見れば―霞の衣着てを來てにいひかけた。

【三】
○宴罷んで紅燭猶餘れり―和漢朗詠集謝觀の賦「嚴二粧金屋之中一、青蛾正畫、罷二宴瓊筵之上一、紅燭空餘」の下句を引いた。
○春宵一刻値千金―蘇東坡の春夜の詩「春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沈々」を引いた。
○見る目隙なき花守―一時の休みもなく花盜人の番をしてゐる番人をいふ。
○人知れぬわが通ひ路の―

○伊勢物語の歌「人知れぬわが通ひ路の關守はよひ〳〵ごとにうちも寢ななむ」を引き、花を盗み折らうとして、花守の眠るのを待つ意に用ゐた。
○寢られんものか—花の面白さに寢ることが出來ず、たまたま寢れば花の夢ばかりを見るといふ意。
○なかなか—却つて。
○影あさまなり—姿があらはに見える。
【四】
○花の祭—今少しで花の命を亡ぼす爲に散り行つてゐる祭をいふ。
○今少しこそ松の風—今暫くの間は咲き誇つた花の盛りを「待つ」を松にいひかけ、やがてはその花も散つて、松吹く風が花の跡を訪ふといふ意につゞけた。
○跡とはん—新古今集寂蓮法師の歌に「散りにけりあはれうらみの誰なれば花の跡とふ春の山風」
○千本—京都市の西陣千本の櫻が大和國吉野の櫻を移植したものであるといふこと(「吉野天人」に見ゆ)。
○春の夜の—「月も霞る」を霞にいひかけた。

ワキ「寢られんものか下枕。花より外は夢もなし
シテ「げにげに見れば木の本に。人を寄せじと花の垣
ワキ「隔てぬ月の影ともに
シテ「花の光の照り添ひて
地「なかなか木蔭はくらからねば。何と手折らむ花心。月の夜櫻の影。あさまなり恥かしや
【四】
地ロンギ「げにありがたやこの春の。げにありがたやこの春の。花の祭の時過げば。今少しこそ松の風終には花の跡とはん
シテ「今手折らずは一枝の。後の七日を松の風。雪になり行く花ならば跡とふとても由なし
地「よしや吉野の山櫻。ここも千本の花の影
シテ「月も折しも春の夜の
地「霞の光

天女「人知れず花を一枝折りたいと思ふについては、どうか花守が早く寢てくれるとよいのだが……」
櫻町「この美しい眺めを棄てて寢られるものではない。いやほんの一寸眠つても、花の夢ばかり見ることだ」
天女「おゝよく見ると、木の傍へ人を寄せまいとして、垣が結つてある」
櫻町「月の光も明らであり……」
天女「花の光が照り添つて、木蔭が却つて明るいので、どうして花を手折らうやら、このやうに月や花の光が明るくては、わが姿があからさまに人に見られるやうで、ほんとに恥かしい」
【四】
櫻町「あゝありがたいことだ、この春の花の祭の時刻も過ぎて行くが、花を散らす松風はなほ暫く咲き誇つた花の盛りを待つてくれてゐるやうだ。しかしそれも暫くのことで、やがてはその花も散つて、たゞ松風が花の跡を訪ふばかりとなるであらう」
天女「今一枝を手折らないで、あと一週間も經つて、松吹く風が花を雪のやうに吹き散らしてしまつたならば、その跡を訪れたところで、何の甲斐もないのだ」
櫻町「たとひ吉野の山櫻ではないにしても、こゝも千本の櫻で……」
天女「折も折、春の夜の月も霞らかで……」
櫻町「霞の光といひ……」

○天の羽袖—天人の羽衣の袖。

【五】
○さやかにて—明らかにて

○木の下闇—梢が繁つて、木の下の暗くなつてゐるのをいふ。

【六】
○心許ない—気がかりな

シテ「花の色

地「何か今宵の。思出ならぬさりながら。あはれ一枝を天の羽袖に手折りて。月をもともに眺めばやの。望みは殘れりこの春の望み殘れり

【五】
シテ「あまりに月のさやかにて。手折るべき便りなければ。「徒らに更くる夜の間を待ちつるに

地「嬉しや月も入りたりや。嬉しや月も入りたりや。梢は花に曇らねど。木の下闇に忍び寄り。さしも妙なる花の枝手折りて行くや少女子が。天つ羽衣立ち重ね雲居遥かにのぼりけり雲居遥かにのぼりけり

シテ中入。

【六】
狂言花守、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の装束にて出て、

狂言「やあ〳〵今のは正しく花を折つた音であつたが。心許ないことかや。されぼこそ。お庭の花を何者やら折つた。さても〳〵苦々しい事かな。何としたものであらうぞ。誠に各々花を御賞翫なされども。櫻町の中納言殿別して花を御寵愛なされ。いつも春になれば。花の下にて日を暮らされら

天女「花の色といひ、今宵の眺めは何一つ後の思出とならないものはない。けれども、あの花の一枝を折つて、月とともに眺めたいと思ふ望みが果されない」

ここ人は別々の心で花を見入つてゐる。

【五】
天女「餘りに月の光が明らかなので、花を手折るのに都合がわるく、夜の更けるのを待つてゐたところ、おゝ嬉しいことに、月も隠れた」

と、梢は花の光で曇らないけれど、木下闇を幸ひに忍び寄つて、あのやうに美しい花の枝を手折つて、天女は天羽衣の身繕ひを整へて、遥か天上に昇つて行つた。

天女、昇天の心持で退場。

ゐれども。花の盛りは三春に足らずして。唯一七日の間なれば。餘り名殘惜しく思し召し。何卒して花の命を御延ばしあらうするとて。この春泰山府君の祭を執り行はせらるる程の事なれば。花の下には垣を厳しく結ひて。番をも堅く仰せつけられて置かれたが。是は何者が折つたことやら知らぬまで。垣もそこねもせず足跡もないが。合點の行かぬ事ぢや。というて是をそのまゝに置いたらば。よいとは仰せられまい。とかく申し上げう。いかに申し上げ候。御庭の花を何者やら折り申して候

ワキ「この詞未だ索め得ず」

狂言「その事にて候。垣も損じ申さず。人の寄りたる跡もなく候。殊に番をも油斷なく致し候に不思議なる事にて候。最前月の少し曇りたる時分に花を折る音の聞え候間。やがて罷り出で見申して候へども。人影も見え申さず候。いかさま是は人間の業にてはあるまじく候。もし天人などが天降り手折り申したるかと存ぜられ候。殊にこの春は泰山府君の祭を仰せつけられて候へば。随分禁じ申したる事にて候。されば神前に於て御祈念候はば。奇特なる事も御座あらうずるかと存じ候間。急いで御祈念あれかしと存じ候

○やがて—早速。

【六】
○五道の冥官—五道は天、人、餓鬼、畜生、地獄をいふ。冥官はその地獄の廳にゐて、六道（五道に修羅を加へたもの）の衆生の罪を裁判する役人。
○定相—定命といふ意であらうか。
○明闇二つ—娑婆と冥途。
○花心—古今集序の「今の世の中、色につき人の心花になりにける」によつたものか。一時の浮氣心といふ意であらう。

といひて引く。

【六】 出端の囃子にて、後ジテ泰山府君、面小べし見・唐冠・金襴鉢巻・赤頭・襟紺・狩衣・半切・腰帯・唐團扇の裝束にて出で、

後ジテ「抑もこれは。五道の冥官。泰山府君なり。われ人間の定相を守り明闇二つを守護する處に。上古にも聞かざりし。花の命を延べむ爲われを祭る。唯色に染む人花心に似たれども。よ

【六】 後段

後ジテ泰山府君登場。

府君「自分は五道輪廻の衆生を裁判する泰山府君である。自分は人間の定命を守り、娑婆と冥途の兩方を守護してゐるのであるが、昔から聞いたこともない、花の命を延ばしたい爲に、自分を祭るといふことは、たゞ風流に過ぎない一時の出來心のやうではあるが、よく考へて見れば、

くよく思へば道理道理。『煙霞跡を埋んでは花の暮を惜しみ。佐國まさに身を捨てて。後の春を待たず。』かかる例もある花を。手折れる者は何者ぞと通力を以てよく見るに。欲界色界無色界。化天耶摩天にてもなく。らく天下天の天人が手折りつるな

地「山河草木震動して。虚空に光充ち滿てり

シテ「天上淸しと見る處に。何ぞ偸盗の雲の上

地「天つ少女の羽衣の。花の葛の春を待て

シテ「待たじはや待たじはや

地『花一時の榮花の櫻

シテ『かざしの花のたまたまなるに

地「花實の種も中空の。天つ御空は雲晴れて。らく天下天の天人忽ち現れたり

後ヅレ天女、白小袖・唐・雲帯・天冠・着附箔・長絹・縫箔腰巻・腰帯・扇の装束にて、櫻の枝を持ちて出で、

いかにも尤もなことで、詩の句にも『煙霞跡を埋んでは花の暮を惜しみ、佐國正に身を捨てて後の春を待たず』とあることだ。そのやうに誰も花を惜しむものであるのに、惜しげもなく花を手折つた者は誰であらうと、神通力を以てよく見ると、欲界・色界・無色界のうち、化天耶摩天などのものではなく、樂變化天の天人が手折つたのだな—

と花盗人を探すために、

山河も草木も震動して、光は空中に充滿したのである。

府君「天上は淸らかなものだと思つてゐたのに、どうしてこのやうな偸盗の罪を犯すものが出たのだ。……なに、天つ少女が花咲く春を待てといふのか。……いや待てない、早く〳〵出て來い。……なに櫻の花は一時の盛りに過ぎないと。……だから、そのたまたま咲いた花が大切なのだ」

と天女が逃口上をいふのを免さないで、責めるので、

中天に雲が晴れて、かの樂變化天の天女は忽ちに顯れ出た。

後ヅレ天女登場。

○煙霞跡を埋んでは—「煙霞埋レ跡惜二花暮一佐國弄レ身不レ待レ春」といふ白氏文集の詩句を引いたのであるといふが、見當らない。

○欲界色界無色界—一切衆生の生死輪廻する三種の世界で、欲界は六道、六欲天の總稱で、この世界にあるものは書欲に耽る。色界は十八天より成り、書欲を離れて男女の別もなく、光明を食とする。無色界は四天より成り、ここに住するものは總て形色はなくただ識だけがあるといふ。

○化天—分らない。或は化樂天、他化自在天などのある六欲天を總稱し、六欲天の耶摩天とつづけたのであらうか。或は「下天」の訛で色界無色界の諸天に對し、やはり六欲天を指したものであらうか。

○耶摩天—欲界六天の第三

○らく天下天—古謠本に「らくへん下天」とあるやうに、樂變化天の訛であらう。この天は六欲天の第五である。

○偸盜—佛戒十惡の一。
○たまたまなるに—[illegible]の花の玉といひかけた。
○花實の種も中實の—花の咲く時と實を結ぶ時との中間といひかけて中實とつゞけた。
【七】
○萎しぼむ—天人五衰の一たる「頭上花萎」を指す。委しくは「羽衣」にいふ。
○梵釋—[illegible]
○十王—冥府にあるといふ十人の王[illegible]五官王、閻魔王、變成王、泰山王、平等王、都市王、五道轉輪王をいふ。
○閻魔宮—閻魔の住む宮殿[illegible]
○鬼神に横道あらんや—古謡に「鬼神に横道なし」といふ。[illegible]

〔舞〕（ツレ舞ふ）

【七】地 天女は二度天降り。天女は二度天降り。さしも心にかけし花の、葛もしぼむ涙の雨より散りくる花を慕ひ行けば

シテ 天上にてこそ榮花の櫻

地 散れども枝に、殘りの雪の。消えせしものを花の節梵釋十王閻魔宮。五道の冥官泰山府君の力を種の繼木の櫻。あつはれ奇特の花盛り

〔働〕（シテ働く）

シテ 通力自在の遍滿なれば

地 通力自在の遍滿なれば。花の命は七日なれどももとより鬼神に横道あらんや。花の梢に飛び翔つて。嵐を防ぎ雨を漏らさず四方に護る例を見せて。七日に限る櫻の盛り。三七日まで殘りけり

〔舞〕
た舞ふ。

【七】
天女は二度天降つて、あのやうに大切にしてゐた花鬘の萎むのを歎いて、雨に散る花を慕つて行くと、

府君「天上に於てこそ榮花の櫻は散り失せるが、この木の枝には雪のやうに散り殘して、花の壽命など梵天帝釋や十王閻魔王、殊にこの五道輪廻の衆生を裁く泰山府君の力を以て繼ぎ延ばし、立派な花盛りにして見せよう」

〔働〕
にその奇特を示し、

府君 神通力が自在で、この力は世界に遍滿してゐるのであるから、元來は花の命は七日であるが、もとより鬼神の言葉に僞りはなく、必ず命を延ばせてやらう—と、花の梢に飛び翔つて、花を散らす嵐を防ぎ、雨を防いで、四方を護る例を見せ、七日しかない櫻の花盛りを三七日まで延ばした。

〔考異〕

古謡本（観世流明暦三年本）

【一】ワキ「（明是は櫻町の中納言とは我事なり）わが好ける心に……然れども恨みは（明妙なる）花盛り三春（明に）だに經ず（明足らず）して……地「花の命を延ばへ（明殘さ）んと……手向と夕露（明木綿花）の白木綿懸けて咲く花（明緋櫻）の……花の祭をなしに……祭をなしにけり（明急くなり／＼）　【二】シテサシ「天つ風雲の……餘所に見るさへ（明めの色も）面白や。上歌「いざ櫻……松に殘る白（明薄）雪の……月も曇らぬ（明落くる）天の原……　【三】シテ「あら面白の花盛りやな（明何ともして）一枝手折り……宴罷んで紅燭猶餘れり（明花枝眠に入って春あひ得す）花一枝を……ワキ「春宵一刻……心は空になりやせむ（明鼓を數へ待ち居たり）　【四】地「よしや吉野の山櫻ここも（明ナシ）千本の花の影（明櫻町）……シテ「花の色（明影）……　【五】シテ「あまりに月のさやかにて（明嬉しやな月か入て候さりながら）……地「嬉しや月の……梢は花に曇らねども（明今は上こそ花盛）木の下闇に……雲居遙かに……のぼりける（明天つ空にぞ歸りける／＼）

【六】後ジテ「抑もこれは……人花心に似たれども（明とは思へとも）らく天（明へん）……下天の天人が手折りつるな（明此花を折ったよ）……地「花實の種も中空の……らく天（明へん）下天は……　【七】地「散れども枝に（明り來て何か）殘りの雪の消えせしものを（明はや）花の齡（明も命の定）延程……地「通力自在の……四方に護る例を見せて（明ふさかる花の命）七日に限る……

大佛供養

觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】四番目 二段劇能

【人物】ツレ 景清母、**前シテ** 悪七兵衛景清、**狂言** 東大寺能力、**子方** 源頼朝、**ワキ** 同臣、**立衆** 同（三人）、**後シテ** 悪七兵衛景清

【所】**第一段** 奈良景清母の住家 **第二段** 奈良大佛供養の場

【時】建久六年（九月）

【異名】金春流では「奈良詣」といふ。

【作者】謡本作者註文に作者不明として本曲の名を擧げてゐる外、古記錄には見當らない。

【梗概】平家の遺臣悪七兵衛景清が京都清水に參籠してゐる時、頼朝が奈良大佛供養を行ふとの事を聞き、密かに奈良に行つて、まづ母に對面し、その後白張淨衣の姿に身をやつして、供養の場に忍び入つたが、頼朝の臣に見咎められたので、敵の若武者を斬つて一先立退く。

【出典】建久六年三月、頼朝が奈良大佛供養を行つた事は、吾妻鏡にも見えてゐる史實であるが、この時景清が頼朝を狙つたといふ事は、

平家物語の諸本にも見えてゐない。たゞ長門本卷十九に、

同(建久六年)三月十三日に大佛供養あり。平家の侍上總の惡七兵衛景清、鎌倉殿へ降つて參りたりければ、和田の左衛門尉義盛に預けらる。昔平家に候ひし樣に少しも口へらず、和田の左衛門に所をもおかず、一座をせめて盃先に取り、或は椽のわきに馬引寄せて乘りなどしてありければ、もて扱ひて他人に預けたまへと申しければ、常陸國の住人八田の左衛門尉知家に預けらる。

同卷二十に、

上總の惡七兵衛景清は、降人に參りたりけるが、大佛供養の日を數へて、建久七年三月七日にてありけるが、湯水を止めて、終に死にけり。

と、大佛供養に何等かの關係があつたらしく記してゐるが、明らかに賴朝を狙撃したとはいつてゐない。同長門本によれば、賴朝を狙つたのは、中務丞宗助で、同書卷十九に、

鎌倉殿、大佛供養の隨兵の守護の爲に、建久六年三月に御上洛。同三月十二日南都に入らせ給ふ。大衆恐れて引きたるが、悉くある中に、怪しばみたる者見えければ、梶原を召て入らせ給ひつる。南の大門の東のわきに怪しばみたる者ありと、大衆の中へかきわけ〳〵入りて、頭つゝみたる袈裟を引きはぎて見れば、髭をば剃りて、頭をば剃らざりけり。「何者ぞ」と問ふに「平家の侍薩摩の中務丞宗助と申す者にて候なり」「それはいかに」といへば「若しや君をねらひ參らせ候なり」と申せば、鎌倉殿うちうなづかせ給ひて、「汝が志神妙なり」とて召置かれて、大佛供養果てて、都へ御上りありて、宗助をば六條河原にて斬られにけり。

とある。或はこの宗助の事を景清傳說に採り入れて、本曲を構想したものであらうか。但し本曲及び〔景清〕と同樣の說話を取扱つたものに、幸若舞曲の「景清」がある。このことは〔景清〕の解說に述べて置いたから參照せられたい。

【批評】本曲は第一段に母子の情愛を、第二段に武士の忠誠武勇を描いたもので、武士を對象とした戲曲には、恰當の材料であつて、脚色の運び方にも無理が少いが、武士の母たるものが、故主を思ふわが子の志を聞いて、「申すことはさる事なれども、明日をも知らぬ老の身の、果をも見屆け給へかし」といつてゐるのは、〔小袖曾我〕の母と同樣、餘りに不甲斐ない感じがするし、これに對する景清の詞も仇討を前にした勇士としては餘りに軟弱に過ぎてゐる。從つて第二段に於ても、敵に近づくや忽ちに見顯されて、一度はさらぬ樣にて立ち歸り、また現れ出て、僅かに若武者一人を倒して、霧隱れをするといふ、不首尾を招いて、結局全體に生氣を缺いてゐる。これを

同一主人公の「景清」と比べて見ると、兩者とも親子の再會を描いてゐるが、本曲の景清は人目を忍んで漸くにして母を訪ねる弱々しいものであるのに反し、〔景清〕の姫は、父に會ふためには、旅の困苦を厭はない雄々しさがあり、本曲の景清は敗亡の後なほ闘志を保つてはゐるものの、その結果は失敗に終つてゐるのに反し、かの景清は最早再起することの出來ない盲目敗殘の身ではあるが、その語る所には三保谷と力競べをした勇武の面影を殘してゐる。兩曲同文の「一門の船の内に云々の一節を見ても、本曲では弱々しい愚痴として語られるが、彼に於ては深い詠歎として感じられる。兩者を比較すれば、彼は深刻であり、此は淺薄であるといはざるを得ない。

【一】

第一段

舞臺は初め京都清水寺の邊。(演能にはまづツレ景清の母が登場するが、見物人にはまだ見えない態)シテ惡七兵衞景清登場。

景清「草の名には、物忘れをするといふ忘れ草があると聞いてゐるが、自分はどうしても憎い敵源氏に對する恨みを忘れることが出來ず、忍ぶ草といふ草の名のやうに、身を忍び隱して、密かに仇を狙つてゐる身上だ」

と、次第に自分の心持をいひ、

景清「自分は平家の侍の惡七兵衞景清です。さて自分は先達中は西國の方にゐたが、年來の願ひ事があるので、この間京に上り、清水觀音に一七日の間お籠りをしてゐたのです。ところで、噂に聞けば、奈良大佛の供養法會があるといふことなので、自分の母があの若草山の近傍に居

〔二〕 ツレ景清母、直深井・鬘・鬘帯・襟淺黄・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて、何事もなく出で脇座にて下に居る。

次第の囃子にて、シテ惡七兵衞景清、直面・襟淺黄・着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて男笠を被り、常座に立ちて大小前の方に向き、

〔三〕 シテ次第「忘れは草の名に聞きて。忘れは草の名に聞きて、忍ぶやわが身なるらん

地取に笠を脱ぎて正面に向き、

シテ詞「これは平家の侍惡七兵衞景清にて候。われこの間は西國の方に候ひしが、宿願の子細あるにより、この程罷り上り清水に一七日參籠申して候。(右の方へ向きて)又承り候へば、南都大佛供養の由申し候。某も若草邊に母を一人持ちて候程

【二】

○忘れは草の名に聞きて―草の名に「忘れ草」といふのがあることは聞いてゐるが、自分は源氏の恨みを忘れることが出來ず、却つて「忍ぶ草」のやうに身を忍び隱して、仇討を企ててゐると、草の名を文のあやとして、自分の心持を述べたのである。

○惡七兵衞景清―上總介忠清の三男で、上總七郎兵衞、伯父大日坊を殺したので、惡七兵衞と呼ばれた。平家の侍の中で、最も著しい勇士。

○清水―京都東山の清水寺。(「田村」參照)

○大佛供養―大佛は奈良東大寺にあり、平重衡の爲に燒かれたのを、源頼朝が再興し、建久六年三月十二日供養の法會を行つた。(「安宅」の勸進帳參照)

○若草山―若草山は東大寺の東にある。

○貴賤に紛れ―多勢の人中に紛れ入つて。○向顔―對面。○花紅葉の―平家の榮華の形容。○壽永の秋の―壽永四年三月平家が西海で亡びたことをいふ。○思はぬ風―平家の滅亡を花紅葉を散らす風に喩へた○ひきかへ―引きかへて。反對に。○繋がぬ船の―憂きを浮きに通はせて船を出し、寄るべもない身上を、綱で繋いでゐない浮舟に喩へ、舟の櫂もなくを、武家に生まれた甲斐もなくにいひかけた○三笠の森の―三笠山は春日明神鎭座の山、明神の御蔭を頼む意、○その帚木の―帚木は母の意、信濃國園原にあると傳へられた木で、森の縁でこの語を用ゐたのである。○神も敎への―春日明神も母が生きてゐることを敎へ給ふとの意、○牡鹿鳴く―「敎へ」と音を重ねた。牡鹿は春日の神鹿、○春日の里―奈良の古稱。

に。かやうの折節貴賤に紛れ（と正面に向き）。向顔のため唯今南都へと急ぎ候

（といひて笠を被り、）

シテサシ「あはれやげに古は。さしも榮えし花紅葉の。壽永の秋のいかなれば。思はぬ風に誘はれて。さしも馴れにし都の空。ひきかへ鄙の憂き住居

シテ下歌「繋がぬ船のかひもなく弓矢の家に生まれ來て（上歌）「三笠の森の蔭頼む。三笠の森の蔭頼む。その帚木のながらへて。未だこの世の御住居。神も敎への牡鹿鳴く。春日の里に着きにけり春日の里に着きにけり

（神も敎への牡鹿鳴く」と右の方に向きて二三足出でまたもとへ歸りて春日に着きたる心。上歌濟みて笠を脱ぎ正面に向き、）

シテ「急ぎ候程に、南都若草邊に着きて候。このあ

られるから、丁度この折を幸ひ、大佛供養に參詣する多勢の人込に紛れて、母に對面したいと思ひ、これから急いで奈良へ行くのです」

（と見物人に自己紹介をし、）

景清「あゝ思へば夢のやうだ。昔の平家は盛りを競ふ春の花や秋の紅葉のやうに、あのやうに榮花に誇つてゐたものを、どうしたことであらう、壽永四年、秋風に誘はれて散つて行く紅葉のやうに、一門沒落の運命に出遭ひ、これまでの、あのやうに樂しかつた都の生活とは大違ひな情ない田舍住居となつてしまつた。まるで、櫂もない浮舟のやうな浪々の身上で、武士の家に生まれた甲斐もないことだ。それにしても、母上は春日明神の御加護を受けて、まだこの世に生き永らへて居られることだらう。おゝ、明神が母の存命をお知らせ下さるやうに、鹿が鳴く、わ。さうだ、はやその鹿の名所の春日の里に着いた」

（上道々景色を眺めてゐるうちに、奈良春日の里へ着いた、と謡ひ、舞臺は春日の里となる。）

景清「道を急いだので、奈良若草山のあた

【三】

◎三世の諸佛―過去現在未來の佛達。

◎樞―戸。

たりにて御行方を尋ねばやと存じ候

といひて後見座にくつろぐ。

【三】

ツレ正面の方に向き、

ツレ「さてもわが子の景清は。この程いづくにあるやらん。（合掌して）南無や三世の諸佛。わが子の景清に。二度逢はせてたび給へ

シテ常座へ出でツレに向ひ、

シテ「いかに案内申し候

ツレシテの方に向き、

ツレ「わが子の聲と聞くよりも（と立ち）。覺えず樞に立ち出でて。（と二三足出づ）

シテ「暫く。あたりに人もや候らん。某が名をば仰せられまじいにて候

ツレ「まづこなたへ渡り候へ

シテ常座の眞中へ出で、二人向合ひて下に居り、

ツレ「さてこの程はいづくに候ひつるぞ

りに着いた。この邊で母上の御行方を尋ねませう」

と母の在所を探す態。

【三】

舞臺は景清母の住家となる。（ツレ母は今向ふに見物人に見えるのである）

母「……さういへば、わが子の景清は今頃はどこにゐることであらう。（と獨言をいひ、佛に向ふ態で）おゝ十方世界の佛様、どうかわが子の景清に、今一度逢はせて下さいませ」

と合掌する。

景清は母の住家を探しあてた態で、

景清「お頼みします」

母はわが子の聲と聞くや、われ知らず戸口に出て來て、

母「おゝ景清か」

と悦ぶと、

景清「お靜かに、あたりに人が聞いてゐるかも知れません、私の名を仰しやつて下さいますな」

母「とにかく、こちらへお入り」

二人は一室に入った態で、

母「して、お前はこの間中はどこにゐたのだえ」

シテ「さん候西國の方に候ひしが。宿願の子細あるにより。都に上り清水に參籠申し候處に。大佛供養の由承り候程に。かやうの折節貴賤に紛れ御音信のために參りて候

ツレ「さては嬉しくも來り給ひて候。又尋ね申すべき事の候つつまず申すべきか

シテ「これは今めかしき仰せかな。何事にても候へ申し上げうずるにて候

ツレ「まことや人の申すは。頼朝を狙ひ申すと聞き及びて候が。眞にて候か

シテ「これは思ひもよらぬ仰せにて候さりながら。西海にて亡び給ひし御一門の。御弔ひにもなるべきかと。思へば狙ひ申すなり

ツレ「申すところはさる事なれども。明日をも知らぬ老の身の。果をも見届け給へかし

○今めかしき―今更らしく改まつた。

○御一門―平家の一族。

○さる事―尤もな事。

○果―命の最後。死期。

景清「はい、西國の方に居りましたが、年來祈願してゐる事がありますので、都に上つて清水觀音にお籠りしてゐましたところ、大佛の供養法會があるといふことを聞きましたので、このやうな折を幸ひ、多勢の參詣人に紛れ込んで、お伺ひしたいと思つて參つたのです」

母「それはまあよく來ておくれだ。それから又、少し尋ねたいことがあるが、隱さずにいつておくれかえ」

景清「これは又改まつたことを仰せになります。勿論何事であらうとも、隱さず申し上げませうとも」

母「さういへば、人の噂に、そなたが頼朝を狙つてゐるといふことを耳にしたのだが、それはほんとかえ」

景清「これは又意外なお尋ね事ですが、實は壇の浦でお果てになつた平家御一族の爲に、御回向にもならうかと思つて、狙つてゐるのです」

母「そなたのいふことも尤もではあるが、明日の命も知れない、この老先の短い母の最期をも見屆けておくれ」

シテ「風に漂ふ浮舟の。教經の御供申さずして

ツレ「物を思へば

シテ「起きもせず

地「寝もせで夜半を明かしかね。この身を隠すかひもなく。景清が心のうち。母もあはれと思し召せ（ツレしをる）

地上歌「一門の船のうち。一門の船のうちに肩を並べ膝を組みて。所せくすむ月の。景清は誰よりも御座船になくて叶ふまじ。一類その以下武略さまざまに多けれど。名をとり梶の船に乗せ。主従隔てなかりしは。さも羨まれたりし身の。麒麟も老いぬれば駑馬に劣るが如くなり

【三】（シテ居立ちて東の方を見、）

シテ「はや夜の明けて候程に御暇申し候

ツレ「かまへて御身をよくよく愼みて。重ねて來

○風に漂ふ—揺られて寄るべもない平家の境遇を喩へた。
○教經—舟に「乗り」を教經にいひかけた。教經は清盛の弟教盛の子、壇の浦の戦に海に投じて死んだ。
○物を思へば—身の不運を歎く景清の思ひと、行末の便りなきを歎く母の思ひと両方を兼ねさせる。
○起きもせず寝もせで—古今集「伊勢物語」にも在原業平の歌「起きもせず寝もせで夜半を明かしては春のものとてながめ暮らしつ」を借りた。
○一門の船のうち—以下「駑馬に劣るが如くなり」まで「景清」と同文。
○肩を並べ膝を組み—船中の込み合つてゐるさま。
○所せくすむ月の—所せくは所狭く、窮屈な思ひをして住むを澄むにいひかけ、澄む月、月の影、景清といひ續けた。
○御座船—安徳天皇の御乗り遊ばされた船。
○一類—平家一族。
○名をとり梶の—武名をとるを「取梶」にいひかけ、取梶は船の舳を左に向ける漕ぎ方。
○麒麟も老いぬれば—俊英の士も老衰すれば凡庸の者にも劣るやうになるといふ意、戦国策に「麒麟之衰也、

景清「あゝ思へば、風の吹くまゝに揺られて行く浮舟のやうな境遇となつて、あの時教經殿の御最期のお供をして死ぬこともせず……」

母「かうして色々の物思ひをしてゐると……」

景清「立つても坐つてもゐられず、夜も碌々寝ることも出来ず、身を忍び隠しては本望を遂げたいと思ひながら、その甲斐もなく月日を過して行く私の心中を、どうか母上もかわいさうだと思つて下さい。

思へば、あの合戦の頃、平家一門の者が皆船に乗つて、船中多勢の者が肩を突き合せ膝を折り曲げて、窮屈な思ひをしてゐた時にも、私は天子の御座船になくてはならぬ者にせられてゐたのです。平家一族を始め味方の諸侍には、武略の勝れた者も多かつたのですが、その中でも高名を取り、御座船に陪乗して、主従のお隔てもなかつたのは、私獨りで、皆に羨まれたものですが、それが『麒麟も老いては駑馬に劣る』の譬へ通り、よくもまあ、このやうなみぢめな身上になつたことです」

（ト母子、身上の不遇を歎いて語り明かす。）

【三】

景清「もう夜が明けましたから、お暇を致します」

母「必ずよく氣をつけ身を愼んで、また母

り給ふべし

シテ『げにありがたき母の慈悲。御言葉の末も頼もしき

地上歌』柞の森の雨露の。柞の森の雨露の。梢も濡らすわが袖を（二人しをるゝ）しをりかねたる涙かな。（シテ笠を持ちて立上り）いつしか親心（シテ橋懸へ行き）。かなしむ母の門送り景清もあとを見返りて涙とともに、別れけり涙とともに別れけり

の許へ來ておくれ」

景清「實にありがたい母上の御慈悲でございます。このお言葉を聞いただけでも、行末心丈夫に思はれます。母上のありがたいお情に、思はず涙が溢れ出て、袖も絞りかねるばかりでございます」

（名殘を惜しみながら立ち出るニ、）

母も子を思ふ親心、わが子がいとしくて門口まで見送ると、景清も跡を見返つて、涙ながらに母子の別れを告げた。

（二人こゝ退場。）

「かなしむ母の」とツレも立上り少し前に出てシテを見送り、「景清もあとを」とシテ一の松にてツレを見返し、直して静かに中入。ツレも後より幕に入る。

【四】　狂言東大寺能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。南都東大寺俊乘坊に仕へ申す者にて候。扨も當寺の大佛殿成就仕り候へば。今日吉日によつて御供養なさるべきとの御事なり。總じてこの大佛殿と申すは。聖武天皇の后光明皇后の爲に。伊勢大神宮へ一度の勅使を立てられ。二度目には行基菩薩御出であつて。色々の奇瑞あつて。大佛殿を建て給ひたると申す。然るにその後平家の大將淸盛の三男。三位中將重衡燒き拂ひたるを。源の賴朝大伽藍の滅したるをあはれと思し召し。俊乘坊に仰せつけられ。大佛殿を御建立あり。御本尊は申すに及ばず。四天王までも成就仕り候事。誠にめでたき御事なれば。今日の御

駑馬先レ之」。麒麟は一日に千里を行く駿馬をいふ。

【三】
○かまへて―氣をつけて。必ず。
○柞の森―母を柞にいひかけ、山城國相樂郡の地名「柞の森」を出し、森の縁で雨露を出し涙の形容とした。
○しをりかねたる―しぼりかねたるの訛。
○かなしむ―慈愛する。

【四】
○俊乘坊―名は重源、東大寺再興の爲に諸國に勸進した僧。「安宅」の勸進帳參照。
○行基菩薩―聖武天皇の御信敬を受け、天平二十一年特に菩薩號を賜はつた高僧
○重衡―「千手」參照。

供養に。頼朝卿も御參詣あるべきとの御事なり。それにつき平家の討ち漏らされ。頼朝卿を狙ひ申す事もあるべき。寺中にもその覺悟を致し。用心仕り候へとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【四】

一聲の囃子にて、子方源頼朝、風折烏帽子・襟白・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、ワキ頼朝の臣、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・長直垂上下・小刀・扇・太刀の裝束、ワキヅレ（立衆）頼朝の臣三人、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板掛直垂・白大口・腰帶・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

立衆一聲「世に隱れなき大伽藍。佛の供養。急ぐなり

子方正面に向きて（ワキ・立衆は下に居り）

子方「抑もこれは源家の官軍。右大將頼朝とはわが事なり

といひてまた向合ひ、

立衆「忝くもこの御寺は。聖武皇帝の御建立。大佛殿にておはします

ツレ（正面に向き）「又この君の御威光。今この御寺にあひにあふ（といひて向合ひ）

【四】

第二段

舞臺は奈良東大寺。

子方源頼朝、ワキ頼朝の重臣、立衆同じく從臣多勢登場。

從臣一同「世に隱れもない有名な大伽藍、大佛の供養法會を急いで行ふのである」

頼朝「自分は源氏の統領右近衛大將の頼朝である」

と見物人に自己紹介をし、

從臣一同「忝くもこの東大寺は、聖武天皇の御建立遊ばされたもので、大佛殿がおありになるのであるが、今又わが君頼朝公の御威光がこの御寺の御佛德にうち添つたので、この大伽藍の御供養は光り輝くばかり盛んな有樣で、春日の三笠山に讀經の聲が響き渡つて、色々と丁重な御供

○討ち漏らされ—討ち漏らされ人。平家滅亡の際生き殘つた者。

【四】

○大伽藍—大きな寺。

○官軍—監軍か。或は官軍である源家といふ意か。

○右大將頼朝—源義朝の三男。平家を滅して征夷大將軍となり、權大納言に右近衛大將を兼ねた。正治元年五十三で薨じた。

○聖武皇帝—第四十五代の天皇。佛法を深く御信仰遊ばされ、奈良に東大寺、諸國に國分寺を御建立遊ばされた。

○この君—頼朝を指す。

○この御寺にあひにあふ—頼朝の威光と東大寺の佛の威光とが合致して。

立衆上歌「大伽藍の御供養。大伽藍の御供養。光りかかやく春の日の三笠の山に影高き。法の御聲の樣々に。供養をなすぞ、ありがたき供養をなすぞありがたき

ワキ「法の御聲の」と正面に向きて三四足出で、「供養をなすぞ」ともとへ歸り、返句を謠ひながら一同脇座の方へ行き、子方は脇座にて床几にかゝり、ワキ・立衆その次々に下に居る。

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ景清、翁烏帽子・着附厚板・縷狩衣・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束にて萩箒を持ちて橋懸一の松に立ち、

後ジテサシ「面白や奈良の都の時めきて。色々飾る物詣で。われはそれには引きかへて。敵を討たん謀を。思ふ心は已が名の。惡七兵衞景清と。よそにもそれと人やもし。白張淨衣に立烏帽子。げにわれながら思はざる。姿に今は楢の葉の。時雨降りおく天が下に（ことば淚し）身を隱すべき便りなき。憂き身の果ぞあはれなる

○光りかかやく—威光の輝くのを春の日の光によそへ地名の春日に寄せた。

【五】

○時めきて—時を得て榮える意。

○思ふ心は已が名の—思ふ心はわが名の如く惡心であるといひかけて、惡七兵衞を出した。

○白張淨衣—人やもし知らんを白張にいひかけた。白張は糊をこはくつけて張つた白布の狩衣、淨衣は神事に著る清淨な衣。即ち神主の姿を裝うたのである。

○楢の葉の—姿になるを楢にいひかけ、古今集文屋有季の歌「神無月時雨ふりおける楢の葉の名に負ふ宮の古事ぞこれ」を引き、天が下にとつゞけた。

養の行はれるのは、實にありがたいことだ」

【五】

後ジテ景清、姿を改めて登場

景清「おゝ賑はしいことだ。この奈良の都が景氣づいて、多勢の人々が色々に着飾つて參詣に行くわ〳〵。ところが已れは、さういふ呑氣な人達とは違つて、敵を討ちたいと謀を立ててゐるので、——こんなことをするのは、已れの名前の通り惡い心得であらうか——已れが惡七兵衞景清であると、ひよつと誰かに氣づかれはしないかと心配して、白布の神主裝束に立烏帽子を被り、われながら意外な姿になつたことだ。思へば、このやうに人を忍ばなければならない、この廣い天下に身を隱す術もない、情ない身上となつてしまつたことだ。

シテ「宮人の、姿を暫し狩衣（と舞臺へ入り）
地「今日ばかりこそ翁さび（と常座に立ち）
シテ「人な咎めそ、神だにも
地「塵に交はる宮寺の（と扇にて掃く形をして）供養の場に、立ち出づる
（ヒラキ、トメアシ、と子方へ走り寄る。ワキ立ちてこれを扇にて支へ）

【六】

ワキ「こは何者なれば御前間近く參るぞそこ退き候へ
（シテワキに支へられて扇をすてて舞臺の眞中へ下り、）
シテ「これは春日のみやつこなるが。今日の佛の御供養。場を清めの役人なるを。何しに咎め給ふらん
ワキ「春日祭にあらばこそ。これは佛の御供養
シテ「なう水波の隔てと聞く時は。佛も神も同一體。その上貴賤の事なるに。何とて簡み給ふべ

○暫し狩衣―姿を暫し借り、といひかけた。
○今日ばかりこそ翁さび―伊勢物語（後撰集）にある歌「翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」を引いた。
○塵に交はる―和光同塵の意で、神でさへ衆生濟度の爲にこの塵の世に出現し給ふのであるから、景清が神主となつて供養の場所に立入るのをお咎め下さるなといふのである。
○宮寺―神佛混淆の社又は寺。東大寺は春日明神の境内にあるから、かういつたのである。

【六】

○みやつこ―宮の子、神に仕へる下人。
○水波の隔て―水と波とは同一體の形貌を變へたもので、下一段下となるもの（ママ）。
○貴賤の事なるに―貴賤の隔てなく結縁すべき法會であるのに。
○簡み給ふ―吟味して差別をつける。

まあ、とにかく暫く神主姿を拝借しよう、どうか今日だけは、この年寄りめいた姿を誰も見咎めないでくれるとよいが。神様でさへ衆生濟度の爲には姿を變へて御垂跡になるのだから。……それでは功徳の高いお寺の御供養の場所へ出かけよう」
（獨言をいつて、稚者に近づいて行く。）

【六】

（稚者の家臣、景清を見咎めて、）
家臣「こりや、何者なればわが君の御前近くへ參るのだ。そこを退け」
景清「私は春日のお社にお仕へしてゐる者で、今日の佛の御供養の場所を清める役人だのに、何故お咎めになるのです」
家臣「春日祭ならば神主に御用もあらうが今日は佛の御供養だから……」
景清「いや／＼、神と佛との差別は水と波とのやうなもので、もと／＼同一體のものです。その上佛の御供養には貴賤の差

き。

ワキ「包むとすれど神はなほ。君を守りの御威光

シテ「顯れけるか白張の

ワキ「脇より見ゆる具足の金物

（ヒツキ肩を脱ぎて刀に手をかけ、）

シテ「光を放つ

ワキ「打物の

地「鞘つまりたる言葉の末。名乘れ名乘れと責めければ（ワキシテへ詰め寄る。）顯れたりと思ひつつ。さらぬやうにてたち歸り。又人影に隱れけり

（ヒツキに詰め寄られてシテ後へ下り後見座にくつろぐ。ワキ シテを追ひて仕手柱先に立ち、）

【七】

ワキ「言語道斷の事。唯今の者を如何なる者ぞと存じて候へば。平家の侍惡七兵衞景清にて候。正しくわが君を狙ひ申すと存じ候程に。警固の者に申しつけ討ちとらせばやと存じ候。（立衆に向

○具足—鎧。

○光を放つ—金物の光ると刀など打物の光ると兩方に兼ねて用ゐた。

○鞘つまりたる—打物の緣で鞘を出し、刀の身が鞘につまるを返答に窮して言葉につまる意にいひかけた。

○さらぬやうにて—何事もない樣子をして。

【七】

○言語道斷—いひやうもなく驚き呆れた時に發する語。瓔珞經に「言語道斷、心行所滅」

○警固の者—非常を禁しめて守護する者。

別を立てられない筈のものであるのに、何故そのやうに分け隔てをなさるのです」

重臣 いかに隠しても駄目だ。神様のお守りドさるわが君の御威光には勝てないぞ

景清 やあ顯れたか、この白布装束の……

重臣 その脇から具足の金物が見えるぞ

景清 うん、これが光つたか

重臣 その刀は何だ。それ見ろ、返答に詰まつたであらう。何者だ、さあ名をいへ

と責めかけたので、景清は折角隠してゐたのがばれてしまつた、とは思ひながらも、素知らぬ振りをして、もとの方へ歸り、人中に隠れてしまつた。

（賴朝の重臣は景清の跡を追懸けたが、姿を見失つたので、立ち歸り、）

【七】

重臣 以ての外の事だ。今の者を何者かと思つたら、平家の侍の惡七兵衞景清であつた。これは確かにわが君を狙つてゐるのに違ひないから、警固の者どもにいひつけて討ち取りませう。

（[illegible]の從臣達に向ひ、）

○痴者—馬鹿者。

○下知—命令。

【八】

○弓矢の恥辱—武士の恥、武士の不名誉。

○あざ丸—太刀の名。又は作者の假作。

(ツレ)いかにやいかに警固の兵たしかに聞け。唯今見えし痴者を、はや討ち取つて參らせよと。さも高聲に下知すれば（と立衆へ詰め）

(立衆)畏つて候とて、かねて用意の警固の兵、皆一同に、立ち騒ぐ

と立衆は烏帽子・小刀をとりて太刀を持つ。ワキは子方に警儀をし、子方立ちて切戸より入る。ワキもその後より入る。

シテ烏帽子を脱ぎ白鉢巻して橋懸一の松に立ち、

【八】

(シテ)その時景清又立ち出でて思ふやう。ここ立ち退きては弓矢の恥辱となるべきなれば。今一太刀は打ち合ひて、重ねて時節を待つべしと。大音あげて呼ばはりけり。抑もこれは平家の侍、惡七兵衛景清と

(地)名乗りもあへずあざ丸を（シテ太刀を拔き立衆も拔き）名乗りもあへずあざ丸を、するりと拔き持ち立ち向ひ、（立衆幕に入る）大勢に割つて入れば

(重臣)「おういおうい、警固の武士達よく聞け、今こゝへ來た馬鹿者を直樣討ち取つてしまへ」

と高い聲で命令すると、

(從臣)「畏りました」

と、かねて用意せられてゐた警固の武士が皆一同に立ち騒いだ。

【八】

その時、景清はまた立ち歸つて來て思ふには、「今こゝを立ち退いては武士の恥辱となるのだ。今一太刀打ち合つた上で、また次の機會を待つことにしよう」と、大きな聲を上げて、

(景清)「己れこそ平家の侍惡七兵衛景清たぞ」

と名乗るや否や、あざ丸の銘刀をするりと拔いて、立ち合ひ、大勢の中へ割つて入ると、物々しく警固してゐた武士達も、四方へぱつと逃げてしまつた。その中で、若武者が一人進んで出て、

（シテ立衆切組み(一)）さしも固めし警固なれども四方へばつとぞ逃げにける中に若武者進み出でて。走りかかつてちやうと切れば。ひらりと飛んで、手もとに寄り忽ち勝負を見せにけり今は景清これまでなりと。少し祈念を致しつつ。かのあざ丸を、さしかざせば。霧立ち隱すや春日山。茂みに飛び入り落ちけるが。又こそ時節を待つべけれと。虚空に聲して失せにけり

「四方へばつとぞ」と立衆切戸より入り、一人だけ残りて橋懸へ行き、「走りかかつて」と舞臺に歸りてシテと切組み、「勝負を見せにけり」と斬られて切戸より入る。シテ「少し祈念を致しつつ」と眞中にて心持をし、「茂みに飛び入り」と橋懸へ行き、「虚空に聲して」と三の松にて正面に開き、太刀をかたげて留む。

走りかゝつてちやうと切ると、景清はひらりと飛んで身をかはし、若武者の手もとに食ひ入つて、忽ちに討ち取つてしまつた。そして景清は、『これで一先切り上げよう』と、暫く佛に念じて呪を唱へた後、そのあざ丸をさしかざすと、霧隱れの忍術によつて、からだが隱れてしまひ、春日山の林の方へ行つてしまつて、

景清「又次の機會を待つことにしよう」といふ聲だけ虚空に聞えて、からだは何處へやら消え失せてしまつた。

シテ景清消え失せる態にて退場。

○勝負を見せにけり―景清が源氏方の若武者を討ち殺したのである。
○少し祈念を致し―隱形の呪を唱へたのである。
○霧立ち隱すや―隱形の術を行つたのである。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ここ（これは平家の侍）われこの間は西國の方に（春、剛喜＝略春＝同ジ、以下準之）さてもわれ西海の合戰に討ち負け（）この程は西國方に忍び（）住ひしが宿願の子細あるによりこの程都に上り（春住ひて都に上り）母を一人（春ナシ）持ちて候程に（春ハ久しく御暫

大瓶猩々　觀

解説

【能柄】　五番目　複式劇能

【人物】　ワキ　かうふう、前シテ　童子（猩々）、狂言　水神
　後ツレ　猩々（四人）、後シテ　猩々

【所】　第一段　支那　かね金山の麓　第二段　潯陽江邊

【時】　秋（九月）

【異稱】　貞享版觀世流番外謠本に「狗形猩々」とあるとは、本曲と同文である。但し本曲に狗形のことは少しも見えないから、これは本曲の異名ではなく、貞享本が題名を書き誤つたのであらう。

【作者】　作者及び演能に關する古記錄は見當らない。さほど古い作ではなからう。貞享本の「七人猩々」これも作者不明。が本曲の原形であらうかと思はれる。

【梗概】　支那かね金山の麓に住むかうふうといふ者は親孝行であつたので、次第に富貴となつた。さてこゝに何處からともなく童子が數多來て、かうふうの酒を買ひ求めるので、或日その素性を尋ねると、「潯陽

江に住む猩々であるが、御身は親孝行であるから、泉の壺を與へよう」といつて消え去つた。やがて夜になると、多くの猩々が現れ出て、酒を飲んで舞を舞ひ、泉の壺をかうふうに與へて、御代を祝ふ。

【出典】〔猩々〕と全く同一の材料から出たものである。〔猩々〕の出典參照。

【概評】本曲は〔猩々〕と同じやうに、孝行の美德を稱し、酒を主題として祝言を述べたものであるが、これを〔猩々〕に比べると、本曲の第二段にはシテ・ツレ五人登場して、まことに賑はしい、從つて祝言らしい感が一層深いのであるが、一曲のまとめ方は〔猩々〕の方が手際よく出來てゐて、これには模倣作らしいたどたどしい所が多い。

【一】名乘笛にて、ワキかうふう、着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の装束にて名乘座に出で、

ワキ「これは唐土かね金山の麓に。かうふうと申す民にて候。われ親に孝あるにより。次第次第に富貴の家と罷りなりて候。又この間いづくとも知らず童子數多來り。某が酒を買ひ取り候。今日も來りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】一聲の囃子にて、シテ童子、面童子・黑頭・金緞鉢卷・襟白赤・着附摺箔・水衣・腰帶・扇の装束にて出で常座に立ちて、

シテ一聲「わたづみの。そこともしらぬ波間より。

第一段

【一】舞臺は支那かね金山の麓で、ワキかうふう登場して、

かうふう「私は支那のかね金山の麓に住んでゐるかうふうといふ者です。私は親孝行なので、次第々々と富貴な身上となつたのです。ところで、先達來どこから來るのか所は分らないが、童子が多勢出て來て、私の酒を買つてくれるのです。今日も來たならば、一體どういふ者なのだか、名を尋ねたいものだと思つてゐます」

と見物人に自己紹介して童子の來るのを待つてゐる。

【三】一聲で、童子の姿をしたシテ登場し、

シテ「大海の何處とも知れぬ波間から日が

【一】

○かね金山―江蘇省揚子江の沿岸に金山といふ山がある。この附近に多く黃金を產したといふので、富貴となるかうふうの住所にこの地を選んだのであらう。金山を「かねきんざん」と呼んだのは、同音の別字、例へば徑山「こみちきんざん」と區別して訓んだのである。

○かうふう―謠曲作者假作の人物か。或は庭訓往來抄にある鶣鳳を當つたものか。

【三】

○わたづみ―海の古語。

○そこともしらぬ―海の底、を其處にいひかけた。

現れ出づる。日影かな

　ワキシテに向ひ、

ワキ「今日の市人は何とて遲く來り給ふぞ

シテ「嬉しやさらばと內に入り（とワキへ進み）。「いつもの酒を愛しけり

　と舞臺の眞中にて下に居る。

地上歌「琴詩酒と。聞くも隔てぬ友人の。聞くも隔てぬ友人の。いつも變らぬ酒功贊に。酒を愛せし來し方の。人の心に引きかへて。これは琴にも盃。詩を作るにも盃。唯酒のみの友ばかり。恥かしやさこそげに市人のわれを笑ふらん

【三】

ワキ「この程はいづくの人とも辨へず。今日は御名を名乘りおはしませ

シテ「今は何をか包むべき。これは潯陽の江に年久しき。猩々といへる者なるが。御身親に孝あ

○現れ出づる―朝日が波間から昇ることを、猩々がどことも分らない海中から現れ出るに喩へた。
○市人―こゝでは市に物を買ひに來る客をいふ。
○琴詩酒と―和漢朗詠集、白樂天の交友の詩句に「琴詩酒友皆抛我、雪月花時最憶君」同じく文集に「今日北窓之下、自問何所爲、欣然得三友、三友者爲誰、琴罷輒擧酒、酒罷輒吟詩」
○酒功贊―白樂天の文の題。和漢朗詠集に「唐太子賓客白樂天、亦嗜酒、作酒功贊以繼之」
○來し方の人―昔の人。白樂天を指す。
○これは―猩々をさす。

【三】
○潯陽の江―江西省九江府の北方、揚子江の潯水と合する所。白樂天の琵琶行で名高い所である。
○猩々―人面獸身、よく言語を解し、酒を好む動物。禮記、曲禮に「猩々能言、不離禽獸」

現れ出るやうに、海中どこからともなく現れ出るのだ」
　といつて、かうふうの前へ出る。
かう「今日は、お客様はどうして遲くいらつしやつたのです」
猩々「おう嬉しいことだ。それでは早速貰はう」
　と、かうふうの店の內へ入つて、例の通り旨さうに酒を飮んだ。
地「昔の人は、琴詩酒といつて、この三つを隔てのない友とし、酒功贊といふ詩を作つて、いつも變りなく酒を愛したが、自分はさういふ昔の人の心持とはちがつて、たゞ酒ばかりを好み、琴を彈くにも盃、詩を作るにも盃と、たゞ酒ばかりを友としてゐることだ。いや恥かしい次第で、さぞかし他の市人達は自分を笑ふことであらう」

【三】
かう「この間中から何處の人だか分らないでゐたのですが、今日はお名前を明かして下さい」
猩々「今は何を隱さう、自分は潯陽の江に永年住んでゐる猩々といふ者だが、そなたは親孝行なので、天の神様のおいつく

るにより。天の憐み深ければ。泉の壺を與へんなり。疑ひ給ふなかうふうと

地夕の空も近ければ。夕の空も近ければ。暇申してさらばとて（と立ち）。行くかと見ればさにぬりの。面も赤く様變りて。市人に立ち紛れて跡も見えずなりにけり跡をも見せずなりにけり

しみが深いから、泉の涌き出るやうに盡きることのない酒壺をやらうと思ふのだ。いかうふうよ、決してお疑ひなさるな。……もう夕暮近くなつたから、それではお暇をしよう」

といつて、向ふの方へ行くかと思ふと、朱塗のやうに顔も赤くなり、様子が變つて、市人の中に紛れ込んで、跡かたも見えなくなつてしまつた。

○天の憐み―天の神のいつくしみ。
○泉の壺―泉の如く涌き出て盡きない酒壺。
○夕の空―といふを夕にいひかけた。
○さにぬりの―丹塗のやうにといふは接頭語。

【一】

と右へ廻りて常座にて開き、来序の囃子にて中入。

【間】 末社来序の囃子にて、狂言水神、末社頭巾・面鼻引・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帯・扇の装束にて名乗座へ出で、

狂言「かやうに候者は。潯陽の江に住む水神にて候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。扨も猩々と申す者。この市へ出る由申し候間。見物申さんと存じ。是まで罷り出でて候。總じて猩々と申すものは。不思議なるものにて候。まづ姿顔ばせは人間の如く。手足の爪は鷲の如くにして。木に登る事自由自在なりと申す。その子細は。唐土阮汧と申す者。封渓といふ所にて。確かに猩々を見たると申す。又山谷山川を住家として壽命長く。よろづにめでたき者にて候。かの猩々が出入り住り候へば。必ず富貴の身となり申し候。扨又猩々を近づけ候には。里人山川の傍に大なる瓶に酒を湛へ。その傍に草にて沓のやうなる物を拵へ置き申せば。かの猩々は酒を好むものにて。酒の匂ひについて来り。酒を得たるものなれば。人間に向ひその者の名を明らかに呼ぶと申す。扨又酒と申すものは。佛も五戒の内に入れ禁じ給ふと雖も。酒は百薬の長として。寒氣を防ぎ心を晴らし。壽命を延

○酒は百薬の長―漢書食貨志に「夫塩食肴之將、酒百薬之長」

ばし人間を勇め申す時は。酒ほどめでたきものはあるまじく候。いや獨言を申す内に。漸々猩々の出る時刻にて候。皆々罷り出で見物仕り候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【四】

後見、壺の作物を正面先へ出し、その前に一疊臺を出す。下端の囃子にて、後ヅレ猩々二人、面猩々・赤頭・金緞鉢巻・襟赤・着附赤地箔・赤地唐織壺折・緋大口・腰帯・扇の装束にて、舞臺に入り並びて、

地「御酒と聞く。御酒と聞く。名もすさまじく秋の來て。暖め酒と菊月の（と正面へ出で）。頃もはや紅葉の。はや色づくか一重山（と上の方を見）。薄きもみぢ葉色々の。菊の盃すゑ置き。秋の夜深く待ちけるに

と盃を据ゑ置く心にて二人とも下に居り、向合ひて、

二人「不思議やこの友の

地「不思議やこの友の。來らぬは覺束な（と幕の方を見）。沖に向ひてわが友の（と立ち）。など遅なはり給ふぞや急ぎ給へ友人

と幕へ向きて開き、次の下端にて一疊臺の左右に立つ。

【四】

○御酒と聞く―猩々に「御酒と聞く。名もことわりや秋風の」とあるを轉用したのであらう。

○暖め酒―身の寒さを暖める酒。

○菊月―九月の異名。「聞く」といひかけたのである。

○一重山―信濃國埴科郡にある山の名。この地名を借り、一重の縁で薄きといつた。

○菊の盃―九月九日の宴などに菊花を浮べて飲む盃。

○覺束な―[illegible]

【四】

第二段

舞臺は潯陽江岸。後ヅレ猩々二人登場。

酒、酒といへば、名まで寒さうな秋が來ても、これさへ飲めば、からだの暖まるもので、今九月、はや紅葉も色づきそめたものか、山に薄もみぢ葉の見え出した頃、菊の花を浮かべた盃を置いて、秋の夜の更くるまで待つてゐたが、

ツレ猩々「どうしたのであらう。わが友の來ないのは氣がかりなことだ」

と沖の方に向つて、

ツレ猩々「わが友よ、なぜ遅なはつて居られるのです。急いでお出でなされ」

【五】

○妙なる泉―不可思議靈妙な泉の如く湧き出して盡きない酒壺。

○大瓶―靈妙な酒壺を指す同音の太平の意を含ませて祝言としたのである。

○泉の口―酒壺の蓋。

【五】

下端の囃子にて、後ジテ猩々、面猩々・赤頭・金緞鉢卷・襟赤・着附赤地箔・赤地半切・赤地法被・腰帶・扇の裝束にて柄杓を後にさし、三・四のツレ猩々、一・二のツレと同樣の裝束にて、三ツレ・シテ・四ツレの順にて橋懸に立ち竝び、

地　又猩々は現れ出でて。又猩々は現れ出でて。かのかうふうに。妙なる泉を與へんとて（と三人とも舞臺に入り）。波間を分けて潯陽の江の。汀も近く。現れたり（と大小前に立ち竝ぶ）

地　頃は秋の夜月面白く。頃は秋の夜月面白く（とシテ月を眺むる形をし）。汀の波も更け靜まりて（右の方波を眺めて）あまたの猩々大瓶にあがり（と三人とも臺へ進みて）泉の口を（三ツレ壺の蓋をとりて）とるとぞと見えしが湧きあがり湧き流れ汲めども汲めども盡きせぬ泉（シテ臺を上り柄杓にて酒を汲む形をし）。いづれも戯れ。舞ふとかや（と大小前へ行き）

〔中舞〕

一ツレ・シテ・二ツレは舞臺にて、三・四のツレは橋懸にて相

【五】

シテ猩々、他のツレ猩々二人を伴つて登場。

すると又、猩々が現れ出た。かのかういふうに靈妙な泉の酒を與へようと思つて、波間を分けて、潯陽江の岸邊近く現れ出た。

時は秋の夜で、月の光は面白く、岸邊の波も夜の更けるに從つて靜かになつて、多勢の猩々が大きな酒壺に上り、壺の蓋を取るかと思ふと、酒は湧き上り湧き流れて、泉のやうに、いくら汲んでも盡きない。それにうち興じて、猩々はいづれも戯れ舞ふのである。

〔中舞〕

五人の猩々が相舞をする。

舞。舞ひ上げて四人のツレは扇を枕の心にて頭に當てて安坐し、

【六】

シテ「菊の露。積りて盡きぬ。この泉

地「盡きせぬ宿に

シテ「返し授け置き（とワキへ向き）

地「これまでなりや。醉ひ伏す夢の（と扇を頭にあてて下に居り）覺むると思へば又起きあがり（と立ちて臺に上り）命長柄の柄杓の酒を（柄杓にて酒を汲みつつ）道俗男女に殘さず勸め（と扇を前に出して面をつかひ）。もとの泉に納まりければ（と柄杓を壺の上に置きて臺より下り）。いづれもいづれも足もとはよろよろよろよろと（大小前へ下りつつ）繰り言茂く。千秋萬歳君千代までと。千秋萬歳君千代までと。榮うる御代こそ。めでたけれ

（と右へ廻り常座にて留拍子を踏む。（ツレは「覺むると思へば又起きあがり」にシテと同時に立ちて臺の側へ行き、足も

【六】
○菊の露積りて―拾遺集源元輔の歌「わが宿の菊の白露けふ毎に幾世つもりて淵となるらん」に據つた。
○盡きせぬ宿―泉の盡きぬを、榮えの盡きぬ宿にいひかけた。
○返し授け置き―かうふうに授ける酒を程々并一度わがものとして飲んだから、返しといつたのである。
○長柄の柄杓―柄の長い柄杓。命長きといひかけたのである。
○道俗―佛道に入つたもの と俗世間の者と。
○もとの泉に納まり―柄杓をもとの壺へ收めることをいふ。
○繰言茂く―酒に醉つて千秋萬歳の祝言を幾度も繰り返していふのである。

【六】シテ猩々「菊の白露の積つたやうに、この酒の泉はいつまでも盡きることはないのだ」

と、榮えの盡きることのないこの家に酒壺を返し與へて、

シテ猩々「ではお暇しよう」

といひながら醉ひ倒れて寢てしまつたが、やがて夢がさめたかと思ふと、すぐ起きあがつて、長い柄杓で、壽命長久の酒を僧俗男女すべての人に漏れなく汲み與へ、その柄杓をもとの壺へ收めて、皆足もとをよろよろさせながら、「千秋萬歳、君千代まで榮えませ」と、幾度も繰り返して祝言をのべた。

かうして千代に榮えます大御代はまことにめでたい限りである。

とはよろよろ」と大小前へ下り、「千秋萬歳」に橋懸へ行きて留む。

〔考異〕

古謠本　貞享三年本（猶形猩々）

【一】ワキ これは唐土（貞ナシ）かね金山の……又（貞ナシ）この間は……某が酒を買ひ取り（貞て）候……如何なる者ぞと（貞ナシ）名を尋ねばやと思ひ（貞存）候　【二】シテ・哥 わたづみの……現れ出づる日影かな（貞明行は。ともなひ出て歸るさも。獨歸らぬ思ふとち）……シテ 嬉しやさらばと（貞とともをいさなひ）内に入り　【四】地「御酒と聞く……色づくか一重山（貞の）……地「不思議や……急ぎ給へ友人（貞／＼）　【五】地「又猩々は現れ出でて／＼（貞奥より大へいあらはれ出て／＼）かのからうに……地「頃は秋の夜の……汲めども汲め（貞のめ）ども盡きせぬ泉いづれも戯れ舞ふとかや（貞をしゆこする猩々あらはれたり）　【六】地「これまでなりや……いづれもいづれも（貞のこりの猩々）足もとは……千秋萬歳君千代までと千秋萬歳君千代までと榮うる（貞いくたひいふもめでたき）御代こそめでたけれ（貞そとて、うたひすてゝかへりける）

第六天　觀

解說

【能柄】　五番目　劇的夢幻能

【人物】　ワキ　解脱上人、ワキツレ　同從僧（二人）、前シテ　里女（神靈）、前ツレ　里女、狂言　末社神、後シテ　第六天魔王、後ツレ　素盞嗚尊

【所】　伊勢大神宮

【時】　鎌倉初期（三月）

【作者】　作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗槪】　解脱上人が伊勢へ參宮すると、神靈が里女の姿で現れ、御裳濯川の謂れを語つた後、佛法の障碍があるであらうとの靈夢を告げて消え失せる。やがて六種震動して、第六天魔王が群魔を率ゐて現れたが、素盞嗚尊が撞棒を以てうち懲らし、これを退散せしめられた。

【出典】　これは太平記卷十二「千種殿竝文觀僧正奢侈事附解脱上人事」に、

文治の比洛陽に有二一沙門一、其名を解脱上人とぞ申ける。……或時伊

勢大神宮に參て、內外宮に參て、內外宮を巡禮して、潛に自受法樂の法施をぞ被レ奉ける。大方自餘の社には樣替て、千木不レ曲、形軸木不レ揆、是正直捨方便の貌を顯せるかと見え、古松垂レ枝、老樹敷レ葉、皆下化衆生の相を表すと覺たり。……外宮の御前に通夜念誦して、神路山の松風に眠をさまし、御裳濯川の月に心を清して御座ける處に、俄に空掻曇、雨風烈吹て、……上人消レ肝見給へば、忽然として虛空に瑩レ玉鏤レ金たる宮殿樓閣出來て、……上座に居たる大人、左右に向て申けるは、「此比帝釋の軍に打勝て、手に握二日月一、身居二須彌頂一、足に雖レ踏二大海一、其眷屬每日數萬人亡、故何事ぞと見れば、南贍部州扶桑國洛陽邊に、解脫房と云一人の聖出來て、化導利生する間、法威盛にして天帝得レ力、魔障弱して修羅失レ勢、所詮彼が角て有ん程は、我等向二天帝一合戰する事叶ふまじ。如何にもして彼が醒二道心一、可レ着二憍慢懈怠心一」と申ければ、胄の前向に第六天の魔王と金字に銘を打たる者、座中に進出て「彼醒二道心一候はん事は、可レ輙にて候……」と申ければ、二行に並居たる惡魔外道共「此議尤可レ然覺候」と同じて、各東西に飛去にけり。上人聞二此事一給て、是ぞ神明の我に道心を勸めさせ給ふ御利生よと歡喜の淚を流し……。

とあるに據つて構想したものであらう。

【概評】 前揭の說話を本として、第六天魔王が實際に佛法を障碍する場面を構想し、殊に素盞嗚尊が魔王を退散せしめ給ふ事を新に創案したのは、作者の手腕であるが、原據に記された大神宮靈夢の事を述べたい爲に、五番目物らしい劇能の體裁を棄てて、脇能らしい複式能とし、前ジテ里女を出したが、しかしその前段には御裳濯川の謂れなどを述べるだけで、解脫上人の法威の盛んなこと、從つて魔王の恐れをなしてゐる事などは少しも述べず——間語には述べてあるが——たゞ僅かに「御法に障碍あるべし」と極めて唐突に謎のやうなことを一言して中入するのであるから、一向に後段を引立てる力とならない、否前後兩段全く趣の異つたものとなつてゐるのである。かの「春日龍神」の明惠上人のやうに、前段でこの人の法威を多少なりとも述べて置いたならば、もつと力強い曲となつたであらうと惜まれる。——元章壽本は現行曲よりも稍委しいものであるが、前ジテが神樂を奏したりなどしてゐるだけ、現行曲よりも一層力の弱いものであつた。

【二】

【二】 大鼓の囃子にて、ワキ解脫上人、角帽子・着附小格子・絓水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二

【一】 前段

[illegible]

○心の花—普通には和歌の意に用ゐるが、こゝでは神佛に對する信仰心の意に用ゐた。形のある木の花を手向けるのではなく、形のない信心を手向けとしようとの意。
○解脫—藤原貞憲の子貞慶法相宗の高僧で、山城笠置寺に隱棲し、建暦三年五十九歳で寂した。解脫上人はその諡號である。
○沙門—出家して佛道修行する者の總稱。
○九重—都。
○音羽の山—山城國宇治郡逢坂山の南嶺、牛尾山の別名で、都から伊勢路に出る道筋である。
○花の瀧川—瀧川は音羽瀧から落ちる流れをいふ。花とは飛び散る瀧の水を形容していつたのである。
○これぞこの—蟬丸の歌「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」を引いて文のあやとした。
○逢坂—山城から近江へ入つた所にある逢坂山。
○杉の木の間—杉は逢坂山の名物である。後拾遺集良暹法師の歌に「逢坂の關の杉村ひく程はをぶちに見ゆ

人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキ・ワキヅレ〔次第〕心の花を手向とて。心の花を手向とて。大神宮に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ〔名ノリ〕これは解脫と申す沙門にて候。われ未だ大神宮に參らず候程に。この度思ひ立ち伊勢參宮と志し候

といひてワキ・ワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〔道行〕旅衣。今日九重を立ち出でて。今日九重を立ち出でて。末は音羽の山櫻。花の瀧川これぞこの。行くも歸るも逢坂の。杉の木の間に波寄する。湖向ふ鏡山。やうやう行けば鈴鹿路や。多氣の都の程もなく度會の宮に、着きにけり度會の宮に着きにけり

ワキ「やうやう行けば」と正面に向きて先へ出でまたもとへ歸りて度會に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

を隨へて登場、

解脫「自分は木の花よりも心の信仰を神への手向として、伊勢大神宮に參詣しよう」

と次第を謠つて、旅の目的を述べ、

解脫「私は解脫といふ僧ですが、私はまだ大神宮へお參りしたことがないので、今度思ひ立つて伊勢參宮をしようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

解脫「今日都を立つて旅に出かけ、櫻の名所音羽山の山越えをしては、水までが花のやうに飛び散る瀧川の流れを眺め、人の往返の多い逢坂山まで來ては、杉の木の間から遙か彼方に琵琶の湖を見渡し、やがて鏡山も過ぎて、次第に旅を進めて行くと、鈴鹿の山路も通り過ぎ、氣多の齋宮も後にして、はや度會の宮——伊勢內宮に着いた」

といつてゐるうちに伊勢に着いた態、舞臺は伊勢內宮となる。

ワキ「急ぎ候程に。是ははや伊勢の國度會の宮に着きて候。心靜かに參詣申さばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ里女、面増・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流・扇の装束、ツレ里女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流・扇の装束にてツレを先に立てて橋懸へ出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

ツレ一聲「神路山。御裳濯川のその上に。契りし事の。末は違はじ

二人とも正面に向きて、

ツレ二句「永き代までも仕へ來て。シテツレ(向合ひ)「盡きぬ惠みは。賴もしや

と謠ひて舞臺へ行き、ツレは眞中に、シテは仕手柱先に立ちて、

シテサシ「見渡せば千木もゆがまずかたそぎも反らず。二人(向合ひて)「これ正直捨方便の象を現すかと見え。古松枝を垂れ。老樹緑を添へ。皆これ上求菩提の相を表す。ありがたかりし。宮居かな

【三】シテ神樂、ツレもこれに里女の姿をして登場し

里女二「神路山の麓を流れる御裳濯川の流れの盡きることのないやうに、自分達も昔約束したことはいつまでも背きはしない。

かうして、永い間神にお仕へ申して來たが、いついつまでも盡きることのない御惠みを受けるのは、ほんとにありがたいことだ。

お社を見上げると、千木もゆがまず、かたそぎも反り曲らず、誠に素直な姿で、神が正直を旨として一時的な手段方便をお用ゐにならない御心持を現してゐるやうであり、古松老樹が廣く枝を張り擴げ緑の色をも濃く染めてゐる樣は、上に向つて悟りの道を求めてゐるやうだ。ほんとにありがたい御神境だ。實に——

『神風に心安くぞ任せつる、櫻の宮の花の盛りは』

——このあたりを吹く風は神風なので、……この櫻の宮の花盛りにも、何

○望月の駒—

○鏡山—近江國蒲生郡にある。「向ふ」は鏡の縁語。

○鈴鹿路—近江と伊勢との境にある鈴鹿山の山路をいふ。

○多氣の都—伊勢國多氣郡多氣郷。齋宮の御在所であつたから、皇都になぞらへて都といつたのである。

○度會の宮—度會郡におはす伊勢大神宮即ち内宮。

【三】

○神路山—内宮の南側にある山。

○御裳濯川—内宮の神苑を流れて二見浦に入る五十鈴川の別名。

○その上—川上と往昔と兩方に兼ねて用ゐた。

○契りし事の—新古今集藤原良經の歌「神風や御裳濯川のそのかみに契りしことの末をたがふな」を引いた。

○千木—切棟の屋根の上に×形に高く差し出した木をいふ。これはわが上古建築の一般樣式であつたが、中古以降は神社にのみ用ゐる。

○かたそぎ—千木の一角を殺いだものをいふ。内宮のは内角を殺ぎ、外宮のは外角を殺いである。

○反らず—反りゆがまず。

○正直捨方便—法華經方便

シテ・ツレ下歌「神風に心安くぞ任せつる。上歌「櫻の宮の花盛り。櫻の宮の花盛り。花の白雲立ち迷ひ空さへ匂ふ月讀の。洩り來る影ものどかにて。知るも知らぬも道のべの。行きかふ袖の花の香に春一入の、氣色かな春一入の氣色かな

（「春一入の」と謠ひながら、シテとツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。シテワキに向ひ、）

【三】シテ「これなる御僧はいづくよりの御參詣にて候ぞ

ワキ「これは都方より出でたる沙門にて候。和光同塵の本願は結緣の始め。濁世のわれ等何ぞ神力の妙樂を蒙らざらんや。神祕を委しく語り給へ

シテ「やさしき人のいひ事や。懇に語り參らせうずるにて候

（といひて、眞中へ出て下に居る。ツレは笛座の前へ行きて下に居る。）

品に「於二諸菩薩中一正直捨二方便一、但說二無上道一」千木かたそぎの質直なことは神が正直で方便を用ゐないことを表してあるとの意。

○上求菩提—下化衆生の對で、上に向つて菩提心悟りを求めること。

○神風に心安くぞ任せつる—續古今集西行の歌。下句は「櫻の宮の花の盛りは」

○櫻の宮—內宮攝社の一で木華開耶姬を祀る。

○月讀の—內宮の北にある月讀宮、內宮七所別宮の一で、月讀命及び荒御魂を祀る。雲を承けて月を出し、月讀宮の森を洩りくるにいひかけたのである。

○知るも知らぬも—續古今集雅經卿の歌「この程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふ袖は花の香ぞする」を引いた。

【三】

○和光同塵—佛菩薩が其の本來の德光を和らげ、假の姿を以て俗世の塵に交り、衆生濟度の緣を結ぶこと。止觀に「和光同塵結緣之始」

○神祕—神の祕事、神社の謂れ。

の心配もなく風の吹くまゝに任せて置くことだ）と詠まれたやうに、櫻の宮あたりの花盛りはまことにのどかで、あたり一面花の白雲がたちこめて、空までが花で匂つて居り、あの月讀の宮のあたり、月の洩れくる森の木蔭ものどかで、誰も彼もが花見に道を往き來して、さうした人の袂までが花の香で匂ひ、一入春らしい感じの深いことだ—

（と御言のやうに神德をたゝへ、いかにも春を樂しみながら、解說上人の居る方へ來て、）

【三】里女「もうし、お僧樣にはどこから御參詣でございます。

僧「私は都の方から出て來ました僧です。神樣はその本來の德光を和らげ、假の姿を以て俗世間に立ち交り、衆生と緣を結ぶのを最初の本願となさるのですから、私たちのやうなこの末世の者も、ありがたい神の御利益を蒙らないといふことはないと思ふのです。どうかこのお宮の謂れを委しくお話し下さい。

里女「御殊勝なお言葉です。それでは委しくお話致しませう。—

○倭姫の命―垂仁天皇の皇女で伊勢齋宮となられた御方。神皇正統記に「垂仁天皇の御宇に大倭姫の皇女天照大神の御教のまゝに國々を巡り、伊勢の國に宮所を求め給ひし時、大田命といふ神參りあひて、五十鈴の河上に寶物をまぼり置ける所を示し申ししに、かの天逆矛五十鈴の金鈴天宮の圖形ありき。大倭姫命悅びてその所を定めて神宮を建てらる」
○二見の浦―伊勢國度會郡二見の海濱。
○裳裾の穢れ給ひしを―倭姫命世記に「于時河際爾志天倭姫命御裳裔長計加禮侍介留於洗給倍利。從其以降號御裳須曾河」―
○下つ岩根に―地下の岩に屆くまで深く宮柱を太く立てて。
○日神―天照大神。
○月神―月讀命。
○蛭子―諸冊二尊の第一の御子。神皇正統記には第三御子として擧ぐ。
○枝を連ぬる―連枝。兄弟。神皇正統記に「先づ日神を生みます。この御子光華しくして國の內照り通る。二神悅びて天に送り上げて天

地クリ「それ御裳濯川といつぱ。倭姫の命、七百餘歳に至るまで。宮居を尋ねおはします
シテサシ「然れば當國二見の浦にあがり
地「裳裾の穢れ給ひしを。この川にて洗ひしにより。御裳濯川と。申すなり
（居クセ）
地クセ「抑も當社は垂仁の御宇にはじめて。下つ岩根に宮柱太敷き立てて。日神月神を。崇め申すなり。蛭子素盞嗚は。枝を連ぬる御神。高天の原の昔より
シテ「今も變らぬ神德の
地「その品々の方便を。語るもいかで盡さまし。仰ぎても猶あまりあり。かかる惠みをおしなめて。賴めや賴め神の告。木綿四手に榊葉添へ。御法の障碍あるべしと（シテ立ちて）夢に來りて申す

一體、この御裳濯川といふのは、七百年餘りの永い間、お社として適當な所をお探しになつた末、この伊勢國の二見の浦にお上りになつて、裳裾の穢れてゐたのを、この川でお洗ひになつたので、それで御裳濯川と申すのです。――

さて、この御社は垂仁天皇の御代に始めて、地下の岩まで深く御柱を太くお建てになつて、日の神、月の神樣をお祀り申してゐるのです。それに蛭子・素盞嗚尊もこの神々と御兄弟で、高天原におはした天神七代の太古から今日に至るまで、變りのないありがたい御神德をお示し遊ばすのです。その色々の御利益は、いくらお話しても盡きることはないのです。何と譬へやうもないありがたいことで、このやうな御惠みを廣くお施しになるのですから、よく神樣のお告げをお賴みになるのがよろしうございます。そのお告げといふのは、佛法の妨げをするものがあるといふことで、これを夢に現れてお知ら

とて。かき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

ト右へ廻りて常座にて開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて入る。

せするのです」といつて、かき消すやうに見えなくなつてしまつた。

【間】 末社來序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇・小刀の裝束にて杖を突きて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。伊勢大神宮に仕へ申す末社の神にて候。唯今これへ出づる事餘の儀にあらず。都に解脱上人と申す貴き沙門の御座候が。初めて大神宮へ御詣りなされ候處に。第六天の魔王ども解脱上人を魔道へ引き入れ申さんとするを大神宮御存じあつて。急ぎ解脱上人へ告げ知らせよとの御事にて。人間と顯れ解脱上人に行き合ひ。御裳濯川の御事御宮居の謂れ委しく御物語あり。さて又魔王ども集まり上人を魔道へ引き入れ佛法を妨げ申す由。沙門に御告げなされ候間。沙門も忝く思し召し。その心得にて候。總じて解脱上人と申すは。櫻本の中納言と申す御方の御子にて候が。南都春日大明神御寵愛あつて。片時の間も御側を離れ給ふを。いかゞと思し召す程の貴き御方なれば。大神宮も大切に思し召し。この事を御知らせなされ候程に。いかなる魔王なりとも忽ち迷惑致さうずるは疑ひなく候。誠に内宮外宮の神々達は申すに及ばず。住吉明神出雲の大社日本國中の神達。解脱上人へ力を御つけあるべきとの御事なり。左樣候はば。當宮の末社門守の神までも悉く罷り出で。上人へ力を添へ申さうずる間。障碍をなす事は思ひも寄らず候。かやうに申せども。魔王共は三界にをきものにて候間。何事を仕らうも存ぜず候。先われ等も罷り歸りその用意を致し。解脱上人へ力をつけ申さうずるにて候。當宮の末社達殘らず出でられ候へ。その分心得候へ〳〵」

といひて引く。

上の事を授け給ふ。……次に月神を生みます。其光日につげり。天に上せて夜の政を授け給ふ、次に蛭子を生みます……次に素盞嗚尊を生みます」

○高天の原―國常立尊から諾冊二神まで天神七代のおはした天上の世界。

○木綿四手―木綿で作つた布又は紙の幣。言ふを木綿にいひかけたのである。

○榊葉添へ―幣に榊葉を取り添へ、元祿本にはこの次に「てとりどりに」とあるさうでなければ文が續かない。

○御法の障碍―間語に語つてゐるやうに、第六天魔王の障碍を指してゐる。しかしこの句法は餘り唐突であり且漠然としてゐる。

【間】

○春日大明神御寵愛あつて―「春日權現記」に明慧上人を太郎、解脱上人を次郎と名づけて、雙の眼雙の手の如くに思し召されたとある。

【四】
○風雨雷電肝を消し―風雨雷電の物凄さに人が肝を消すばかりで。
○六種の震動―佛說に所謂動・起・涌・震・吼・撃の六樣の震動をいふ。

【五】
○第六天の魔王―欲界第六の他化自在天の天主で、佛道の障礙をなすから魔王といふ。天魔、天子魔ともいふ。
○六天―第六天。こゝに次に擧げる四魔が居る。
○煩惱の惡魔―煩惱魔。貪欲瞋恚愚癡等の煩惱の爲に善行を妨げられるもの。
○陰魔―五陰魔。五陰即ち色心の爲に束縛せられて善行を妨げられるもの。
○天子業魔―第六天の天主である。これを天魔又は天子魔といふが、普通天子業魔とはいはない。
○死魔―佛道を修めようとしても、死の爲に長く續かないのをいふ。

【六】
○觀念―佛を靜思凝念すること。

【四】
ワキ「かくて神前に心を澄ます折節に
地「俄かに大空さえかへり。風雨雷電肝を消し。六種の。震動夥しや

【五】
大癋の囃子にて、後ジテ第六天魔王、面大癋見・赤頭・金緞鉢卷・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・魔王團扇の裝束にて舞臺へ出て、

後ジテ「抑もこれは。佛法を破却する。第六天の魔王とはわが事なり
地「さて又供奉は誰々ぞ
シテ「六天には煩惱の惡魔
地「陰魔死魔
シテ「『天子業魔
地「その外從類悟りの道を。障碍の群鬼は。さまざまなり

【六】
ワキ「その時解脫合掌して（と合掌し）
地「その時解脫合掌して。觀念をなしければ不

後段

【四】
解脫「かうして神の御前で心を澄ましてゐると、俄かに大空がさえかへつて、たまげるばかり雨風が起り雷電が鳴り轟いて、大地が樣々に震動する、實に恐ろしいことだ」
と驚いてゐるところへ、後ジテ第六天魔王登場。

【五】
魔王「自分は佛法を破滅する第六天の魔王である。そして自分が引き連れて來たものを誰かといへば、第六天の煩惱魔、陰魔、死魔などで、この天子業魔を始めとして、家來ども、佛法の悟りを妨げようとする鬼が色々多勢ゐるのだ」

【六】
その時解脫上人が合掌して、靜思凝念すると、不思議にも大空から不動明王がお現れになつた。

思議や天つ空よりも。素盞嗚現れ出で給へり

【七】

早笛にて、後ヅレ素盞嗚尊、面天神・黒頭・走天冠・金襴鉢卷・襟淺黄・着附厚板・側次・半切・腰帶・劍の裝束にて打杖を持ち一ノ松へ出て、

地「即ち素盞嗚現れ給ひ。即ち素盞嗚現れ給へばさしもに猛き。六天なれども恐れをなしてぞ。見えたりける

〔舞働〕

ツレシテを打懲らさんとし、シテこれに對抗する心。

後ヅレ「素盞嗚猶も。怒り給ひ

地「素盞嗚猶も。怒り給ひて。寶棒を取り直し打たんとせしに。飛び違ひ須彌に。上らんとするを。引きとどめ大地に打ち伏せて（ツレシテを打伏せて）忽ちさんざんに苦を見せ給へば今よりこの土に來るまじと（シテツレに辭儀）。誓ひをなせば、尊は雲居にあがらせ給ひ（ツレ幕に入り）、魔王は通力盡き

【七】

後ヅレ 素盞嗚尊登場。

かくて素盞嗚尊がお現れになると、あのやうなもの凄い第六天魔王も、さすがに恐れ入つたやうである。

〔舞働〕

素盞嗚尊が魔王をお討ちになる、魔王は對抗しようとするが敵はない。

素盞嗚尊がなほも怒つて、寶棒を取り直して魔王をお討ちにならうとすると、魔王は飛んで避け、須彌山に上らうとするのを、尊はお引きとめになつて、大地にうち伏せ、さんざんに苦しい目にお遭はせになつたので、魔王は「今後はこの國へ參りません」と誓ひを立てたので、尊は空へ上つてお歸りになり、魔王は神通力をすつかりなくしてしまつて、空に跡方もなく消えてしまつた。

〔須彌〕山の名。妙高峯と譯す。この世界の中心をなす最高峯で、帝釋天がその頂上に住むといふ。

〔通力〕神通力。自由自在の力。

果てて。魔王は通力。盡き果てて。虚空に跡なく。

失せにけり

と橋懸へ行き幕際にて袖をかつぎ立ちて留拍子を踏む。

〔考異〕

古謠本（元祿二年本）

【一】ワキ「これは（元當陽のかたはらに）解脱と申す沙門にて候……【三】地「その品々の……仰ぎてもなほ餘りあり（元中にも岩戸の舞の袖。返す神樂は面白や。シテ「謹上。地「再拜。人平に生るるは。丸が力によつてなり）。かゝる恵みをおしなめて（元〳〵）。頼めや頼め神の告（元と。シテ」木綿四手に榊葉添へ（元てとり〳〵に）御法の障碍あるべしと……【五】シテ「天子業魔（元大子とほらま）。地「その外從類……群鬼はさまざまなり（元シテ「此比帝釋の軍にうちかつて。手に日月を握り。身を須彌の上におきて。一足に大海を踏むといへとも。けんぞく毎日。數萬人を亡す其故は。南瞻部州に沙門有て。衆生を化度し。地「法力を増長す。かれをさまたけ。我道に誘引せん事いたはしや）【七】地「即ち素盞鳴現れ給ひ……素盞鳴なほも怒り給ひて（元則しやう天怒りをなして。〳〵。鐵杖をふり上尊にかゝれば。ツレ「素盞鳴是を見るよりも。〳〵）。寶棒を取り直し……忽ちさんざんに苦を見せ給へば（ありしゆかことくなさんとせしを）……責ひをなせば尊は（元歡喜の氣色をあらはし）。雲居に上らせ給ひ（元けれは）。魔王は通力盡き果てて……

大會（だいゑ）　觀（寶　春　剛　喜）

解說

【能柄】　五番目　複式劇能

【人物】　**ワキ**　比叡山僧正、**前シテ**　山伏（大天狗）、**狂言**　木葉天狗（三四人）、**後シテ**　愛宕山大天狗、**後ツレ**　帝釋天王

【所】　近江國　比叡山

【時】　（無季）

【作者】　能本作者註文には作者不明とし、二百十番謠目錄には金春禪竹の作とす。禪竹の五音次第に闌曲の例として、

夫一代の教法は、五時八教をつくり、教内教外を別たれたり、五時と云は、華嚴阿含方等般若法華涅槃、四教とは、是藏通別圓たり、釋迦教主の祕藏を受け、五相成身のむねを開きしより此かた、たれか佛法を崇敬せざらん

とワキサシの一章を擧げ、世阿彌の五音曲條々にも、闌曲音曲の本聲の姿に「夫一代のけうはうは、五じ八けうをつくりのうたひのきよく

本風なり」といつてゐる。尤もこれらは大會制作以前の闌曲についていつたものと思はれるが、本曲は恐らく禪竹の作であらう。親俊日記に天文七年二月十三日細川殿で觀世が演じたこと、言經卿記に文祿四年三月廿八日註釋したことが見えてゐる。

【梗概】比叡山の僧正がわが庵室で修道してゐると、前に都東北院の邊で命を助けられた天狗が山伏姿をして訪ねて來て、報恩の爲に何事たりともお望みを叶へようといふ。僧は釋尊が靈鷲山で說法せられた有樣が見たいといふ。天狗はこれを引受けて立ち去り、やがて靈鷲山會場の有樣を示して見せた。ところが、僧が隨喜して禮拜すると、俄かに山が震動して、帝釋天が天降り、天狗の魔術を打破つたので、天狗は恐れて岩洞に逃げ入る。

【出典】これは、十訓抄第一に、

後冷泉院御位の時、天狗あれて、世の中騷がしかりける比、比叡山の西塔に住みける僧、白地(あからさま)に京に出でて歸りけるに、東北院の北の大路に、童部五六人ばかり集まりて、物を打領じけるを、歩みよりて見れば、古鳶のよに恐ろしげなるをしばりからめて、すばえにて打ちけり「あないみじ、なとかくはするぞ」といへば、「殺して羽をとらん」といふ。此の僧慈悲を發して、扇をとらせて、これをこひとりて放ちやりつ。ゆゝしき功德つくりつと思ひて行く程に、きれ堤のほどに、藪よりことやうなる法師の歩み出でて、……「御憐みを蒙りて命生きて侍れば、その悦び聞えんとてなん」といふ。僧たち歸りて「えこそ覺えね、誰人にか」と問ひければ、「さぞおぼすらん、東北院の北の大路にて、からき目みて侍りつる老法師に侍り。生ける者は命に過ぎたる物なし。かばかりの御志には、いかでか報じ申さざらん。然れば何事にても念比なる御願あらば、一事かなへ奉らん。己はかつしらせ給ひたるらん、小神通を得たれば、何かはかなへざらん」といふ。あさましくめづらかなるわざかなとむつかしく思ひながら、こまやかにいへば、やうこそあらめとおもひて、「我は此の世の望更になし、……但し釋迦如來の靈山にて說法し給ひけん儀こそ、いかにめでたかりけんとおもひやられて、朝夕心にかけて見まほしくおぼゆれ。其のありさま學びて見せたまひてんや」といふ。この法師「いとやすき事なり、さやうの物のまねをおのれが德とするなり」といひて、さがり松のうへの山へ具して上りぬ。「こゝにて目をふさぎて居たまへ、佛の說法の御聲聞えん時に、目をばあけたまへ、但しあなかしこたふとしとおぼすな。信だに發したまはば、おのれがためあしかりなん」といひて、峯のかたへのぼりぬ。とばかりして、法の御聲聞えければ、目を見あけたるに、山は靈山となり、地は紺瑠璃となり、木は七重寶樹となりて、釋迦如來獅子座の上におはします。普賢・文殊左右に坐し給へり。菩薩聖衆雲霞のごとし。帝釋・四王・龍神八部、所もなくみち

みてり。そらより四種の華ふりて、香しきかほり四方に滿ち、天人雲につらなりて、微妙の音樂を奏す。如來寶華に坐して、甚深の法門を演說し給ふ。其のことわり大かた心も言葉も及びがたし……信心忽ちにおこりて、隨喜の淚眼にうかび、渇仰の思骨にとほるあなた、手を額にあてて歸命頂禮するほどに、山おびたゞしくからめきさわぎて、ありつる大會、かきけすやうに失せぬ。夢のさむるがごとし……さてあるべきならねば、山へ上るに、水のみのほとにて、ありつる法師出で來て、「さばかり契り奉りつることをたがへて、いかで信をば發し給ひつるにか。信力によりて、護法天童下り給ひて、かばかりの信者をみだりにたぶらかすとて、我らをさいなみ給へる間、雇ひ集めたりつる法師ばらも、からき肝つぶして逃げさりぬ。おのれ片方の羽がひうたれて術なし。」といひて失せにけり。

とあるに據つたものである

【評言】 本曲は前揭の說話を殆と原形のまゝで脚色したもので、その脚色は簡單ながら、五番目物らしい劇的な體裁を整へてゐる。しかしその本來の內容が、由來佛道を障碍する惡魔と見られてゐる天狗をして、その通性に反して、報恩の念を起し、佛教の方でも最も大切な靈山會場の様を示させようとするのであるから、一般觀念とは甚しく矛盾した取扱をしなければならないこととなり、從つて天狗の通性に從つて佛法を妨げる「車僧」「善界」のやうな强さ鋭さがなく、といつて、「春日龍神」のやうな尊嚴さのあらう筈もなく、天狗の魔術を信じて隨喜渇仰するワキ僧が愚かしくさへ思はれ、結局帝釋天が天狗の魔術を破ると同時に、本曲全體が破壞されてしまふやうな感じを亦するのである。

【一】　第一段

舞臺は比叡山の庵室で、ワキは比叡山の僧正。

僧正 抑も釋迦如來御一代の御教義御說法には五時八教があつて、これを教內と教外とに二大別せられてゐるのである。その五時といふのは、釋迦如來が華嚴經を說かれた時代から、阿含經、方等經、般

【一】　ナシテ上ゲ囃子にて、ワキ僧、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、舞臺の眞中に立ち、

ワキ上ゲ　それ一代の教法は、五時八教をけづり。教內教外を分たれたり。五時といつぱ華嚴阿含

【二】○五時、八教—本曲の末に記す。○一代の教法—釋迦如來一代に說いた大小乘諸律の教。○けづり—[illegible]の五音[illegible]にも、「つくり」とある。○教內教外—[illegible]に記す。[illegible]

方等般若法華。四教とはこれ藏通別圓たり。遮那教主の秘藏を受け。五相成身の峯を開きしよりこの方。誰か佛法を崇敬せざらん。げにありがたき。御法とかや

　と合掌し、次の地上歌に脇座へ行き床几にかゝる、

地上歌「鷲の御山をうつすなる。鷲の御山をうつすなる。一佛乘の嶺には。眞如の慧日、まとかなり。鳥三寶を念じて。風常樂と音づるる。げにたぐひなき、御山かなげにたぐひなき御山かな

【三】

　右の地上歌の間に、シテ山伏、兜巾・摽花色・着附小格子・水衣・白大口・篠懸・腰帶・小刀・扇・刺高數珠の裝束にて舞臺に入り常座に立ちて、

シテサシ「月は古殿の燈火を挑げ。風は空廊の箒となつて。石上に塵なく滑かなる。苔路を歩みよるべの水。あら心すごの山洞やな

　と謠ひてワキの方へ向き、

シテ「いかにこの庵室の内へ案内申し候

○四教、藏通別圓—本曲の末に記す。
○遮那教主—遮那は摩訶毘盧遮那の略で、大日如來のこと。但し禪竹の五音次第には「釋迦教主」とある。後世謠ひ誤つたのである。
○秘藏—眞言秘密の教へ。
○五相成身—末に記す。
○峯を開きし—傳教大師が比叡山に延暦寺を創建したことを指す。但し禪竹の五音次第には「むねを開きし」とある。
○鷲の御山—釋迦が法華經を說いた靈鷲山。
○一佛乘の嶺—唯一成佛の教法を說き弘める山、比叡山をさす。
○眞如の慧日—眞如の妙理を悟つた佛の智慧を日の光に喩へたのである。
○鳥三寶を念じ—三寶は佛法僧で、比叡山高野山等に三寶鳥といつて佛法僧と鳴く鳥があるといふ。夫木抄に「わが國は御法の道の廣ければ鳥も稱ふる佛法僧かな」
○風常樂と—常樂とは佛果の四德常・樂・我・淨の中、我・淨を略していつた。續千載集、權僧正智[illegible]の歌に「觀念の心し澄めば山風も常樂我淨とこそ聞ゆれ」
【三】○月は古殿の燈火を挑げ—

若經、法華經をそれぞれ說かれた時代までを區分した名稱であり、八教といふのは、化儀の四教と化法の四教とで、その化法の四教とは、藏教・通教・別教・圓教をいふのである。わが傳教大師が遮那教主大日如來からこのありがたい眞言秘密の教を相傳して、通達本心・修菩提心・成金剛心・證金剛心・佛心圓滿の五相を具備し佛身を顯得すべきこの比叡山をお開きになつてよりこの方、誰一人として佛法を崇敬しないものはない。實にありがたい御教へである。
さて、この比叡山—釋迦如來が法華經を說かれた靈鷲山に象つた、唯一無二の妙典を說くこの比叡山には、佛道の悟りにも喩ふべき日の光が隈なく照り渡り、鳥も佛法僧と鳴いて三寶を稱へ奉り、風も常樂我淨といふ音をたてて吹き渡つてゐる、誠に他に類ひのないありがたい御山である—

　と佛德を崇め、わが山を讃へてゐる。

【三】

　シテ愛宕山の大天狗が山伏姿をして登場、

山伏「月の光が燈火に代つて古い殿堂を照らし、風が箒木に代つて人のゐない廊下を掃いてゐる。石の上にも塵はなく、滑かな苔路を歩み寄つてくると、池の水も寂しくたゝへてゐる。實にもの凄い山洞の有樣だ—

　と僧の庵室に近づき、

山伏「もうし、この庵室の方にお伺ひ申します—

「夜々宿山寺、更無二一個僧一、風掃二空廊一寂、月爲二夜殿燈一」といふ古詩を引いたのであらうか。
○よるべの水―社頭の瓶にたまつてゐる水。こゝでは、單に寄るといひかけただけで、意味はない。
○山洞―山中の住家。
○禪觀―坐禪して眞理を觀念することであらう。古寫本には「せんかん」と書き、金春本には禪關の字を充ててゐる。
○客僧―山伏。
○身まかる―死ぬ。
○この事申さん―この御禮を申さう。
○東北院―長久年間上東門院(彰子)の建立せられたもので、もとは法成寺の東北にあつたが、後東山眞如堂の西に移つた。(「東北」參照。)
○かばかりの御志―これほど厚い御深切。
○刹那―一念と同じ。極めて短い時間をいふ。こゝではすぐさまといふ意。

ツレ「われ禪觀の窓に向ひ。心を澄ます處に。案内申さんとは如何なる者ぞ
シテ「これはこのあたりに住居する客僧にて候。われ既に身まかるべきを。御憐みにより命助かり申す事。返す返すもありがたう候。この事申さん爲にこれまで參りて候
ツレ「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。命を助け申すとは更に思ひもよらず候
シテ「都東北院のあたりにての御事なり。定めて思し召し合はすべし。「かばかりの御志。などかは申し上げざらん。「この報恩に何事にてもあれ。御望みの事候はば。刹那に叶へ申すべし
ツレ「げにさる事のありしなり。又望みを叶へ給はん事。この世の望み更になし。ただし釋尊靈鷲山にての御說法の有樣。目のあたりに拜み申

僧正「自分が坐禪修道して心を澄ましてゐるところへ、案内を請ふのは誰だ」
山伏「自分はこの邊に住んでゐる山伏ですが、危く死にかけたところを、御慈悲によつて命の助かりましたのは、ほんとにありがたい事でございました。この御禮を申したいと思つて、これまで參つたのです」
僧正「これは思ひがけないことを伺ふものだ。命を助けたなどとは、全く思ひもよらないことです」
山伏「都東北院のあたりでの事です。かう申せば、定めし思ひおあたりになりませう。あのやうなありがたい御深切に對して、どうして御禮を申さないでゐられませう。この御恩報じに、何事なりともお望みの事がございましたら、すぐさまお叶へ申しませう」
僧正「なる程さういふ事があつたのだ。そして又、望みを叶へてやらうと仰しやるが、自分はこの世に何も望みといふものはない。たゞ釋迦如來が靈鷲山で御說法遊ばした有樣を目のあたりに拜みたいと

○わがため惡しかるべし—天狗の爲に具合が惡い。天狗の身を以て佛會の眞似をし人を惑はすれば、冒瀆の罪を以て佛の叱りを受けるから。
○かまへて—必ず。きつと。
○いふかと見れば雲霧—言葉が終ると忽ち雲霧が起つて。
○ほろほろと—雨の音と客僧の足音とにかけていふ。

したくこそ候へ

シテ「それこそ易き御望みなれ。まことさやうに思し召さば。即ち拜ませ申すべしさりながら。尊しと思し召すならば。必ずわがため惡しかるべし。『かまへて疑ひ給ふなと（ワキへ詰め）

地上歌「返す返すも約諾し。返す返すも約諾し。さあらばあれに見えたる（と右の方に向き）。杉一むらに立ち寄りて。目を塞ぎ待ち給ひ（とワキに向き）。佛の御聲の聞えなば。その時。兩眼を開きて。よくよく御覽候へと　いふかと見れば雲霧（と正面を見上げ）。降りくる雨の足音ほろほろと歩み行く道の（と面を使ひ拍子を踏みて）木の葉をさつと吹き上げて（と扇を開きて正面に出て）。梢に上り（上を指し）。谷に下り（下を指し）。かき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

思ふのです」

山伏「それこそお易いお望みです。ほんとにそのやうに思し召すならば、早速拜ませませう。しかしそれは眞似事なのですから、それをほんとに尊いと思し召すと、必ず私の爲に不都合な結果を生ずるのです。決してお疑ひ下さるな」

と固く約束して、

山伏「それでは、あそこに見える杉林の所に立ち寄つて、目を塞いでお待ちになり、佛の御聲が聞えたならば、その時兩の眼を開いてよく御覽なさい

といふかと思ふと、雲霧がたち籠めて、雨がほろほろと降つて、山伏はその雨音のやうな足音をして歩み行き、木葉をさつと吹き上げて、梢にあがつたり谷に下つたりして、かき消すやうに消えてしまつた。

（前シテ中入）

と右へ廻りて常座にて聞き、來序の囃子にて中入。

【四】　狂言木葉天狗、面袈吹（アドは見德）・末社頭巾・着附厚板・水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて、まづオモ、狂言杖を突きて名乘座へ出で、

オモ「かやうに候者は。愛宕山大天狗に仕へ申す木葉天狗にて候。唯今これへ出づる事餘の儀にあらず。さても大天狗はこのほど遊山のため鳶の姿となり。洛中を飛び廻り給ひしに。都東北院のほとりにて。山蜘蛛の巢にあたつて落ちられたを。京童どもが見つけて。毛をむしらうの羽根を拔かうのと申す處へ。比叡山の御僧御通りあつて。不憫に思し召し。何卒放してとらせいと御申し候へども、合點致さず候間。さらばこの數珠も扇も取らせうと御申し候へば。さあらばとて放し申す間。大天狗御喜びあつて。その儘愛宕山へ御歸りあり。客僧の姿となり比叡山へ御出であつて。われ既に身まかるべき處を。御助けありがたく候。その報恩に何にても御望みあらば。叶へて參らすべしと御申し候へば。僧正更に合點行かず。客僧の命助けたる覺えなしと御申し候へば。都東北院の邊の事にて候と御申しあれば。僧正も合點せられ。今思ひ出したる事の候。さりながらこの世に望み更になし。天竺靈鷲山に於て釋迦如來御說法の處を。目前に見せ給へと御申し候へば。大天狗聞し召し。これは一大事の御事なり。さりながら學うで御目にかけ申さうずるにて候。然し我等の致す事。必ず尊く思し召すなと御約束あつて。その儘愛宕へ御歸りあり。我等のやうなる木葉天狗にも罷り出で。何佛になりともなれとの御事によつ。これまで出でて候。われら如きの者は見えぬか知らぬ。

アド二人ばかり出づ。オモ一のアドに向ひ、

オモ「いやここなものは子細を聞いて出たか

アド「なかなか何佛になりともなれと仰せつけられた程に。それ故出でおりやる

オモ「さて何佛にならうと思ふぞ

【四】

○遊山―見物して歩くこと。

○合點―承知、承諾。

○合點行かず―この合點は了解の意。

○一大事―非常にむつかしいこと。

○阿難―後に掲ける。

○賓頭盧―賓頭盧頗羅堕の略。釋尊の弟子、十六羅漢の一。

○談合　相談。

【二】

○山は小さき土くれを…戰國策、李斯の上書に「太山不レ讓二土壤一、故能成二其大一、河海不レ擇二細流一、故能就二其深二」。「生ず」は「讓せず」を謡ひ誤つたものか。

アド「身どもは仁王にならうと思ふが。又そなたは何になるぞ

オモ「某は阿難にならうと思ふ

アド「いかなく阿難になる事はなるまい

オモ（二のアドに）「そなたは何にならうと思ふぞ

二アド「某は堂の隅なる賓頭盧（びんづる）にならうと思ふ

オモ「これは一段とよからう。この由を謡うて參らう

アド「それがよからう

オモ「をかしき天狗の寄り合ひて。く。何佛にならうやれと。（アド二人）談合することそをかしけれ

オモ「愛宕の地藏に得（え）なるまじ。（アド二人）『大峯葛城は法貴菩薩。これまた大事の菩薩なり。よくくものを案ずるに。堂の隅なる賓頭盧にならん。みな紙衣を拵へて。皆紙衣を着つれ着つれて。こそりこそりとは入りにけり

と拍子を踏みて幕に入る。

【三】

後見、一疊臺を大小前に出し、その上に椅子の作物を置く。出端の囃子にて、後ジテ大天狗、面大癋見・赤頭・大兜巾・大會頭巾・縹紺・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・魔王團扇の裝束にて經卷を持ちて出で、橋懸一の松に立ち、

後ジテ「それ山（やま）は小（ちいさ）き土（つち）くれを生（しやう）ず。かるが故（ゆゑ）に高き事をなし。海は。細（ほそ）き流（なが）れを厭（いと）はず故（ゆゑ）に。深（ふか）き事をなす

地上歌「不思議（しぎ）や虚空（こくう）に音樂（おんがく）響き。不思議や虚空

第二段

【三】

後ジテ（愛宕山の大天狗登場）

天狗　すべて、山は小さな土塊をも捨てないから高いものとなり、海は細い流れをも厭はず集めるから深いものとなるのである」

といつて、霊鷲山大會の様を示す心。

地謡　これは不思議だ。大空に音樂が響き、

〇靈山—靈鷲山。〇大地は紺瑠璃—極樂の樣である。往生要集に「彼世界以二瑠璃一爲レ地」。〇七重寶樹—極樂淨土の寶樹。七重に行列してあるから七重行樹とも記されてゐる。〇獅子の座—佛は人中の獅子であるから、その座を獅子座といふ。般若經に「爾時世尊自敷二師子座一結跏趺坐」。〇普賢文殊—二菩薩の名。普賢菩薩は釋迦の右に侍り、白象に乘つて理を司り、文殊菩薩は獅子に乘つて釋迦の左に侍し智慧を司る。〇聖衆—菩薩衆のこと。〇龍神八部—天龍八部とも。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽をいふ。いづれも佛法守護の神で、法會の座に列つた。「百萬」參照。〇迦葉—摩訶迦葉波の略。釋迦十大弟子の一で、悉く無上の正法を授けられ、釋迦の滅後遺法を結集し、經律論の三藏を〇阿難—阿難陀の略。同じく十大弟子の一で、二十五年間釋迦に從し多聞第一と稱せられた。〇大聲聞—聲聞は佛の言教を聞き、教によつて

に音樂響き。佛の御聲。あらたに聞ゆ。兩眼を開き。あたりを見れば

（と上を見上げ、ツヤも正面を見る。）

シテ「山は即ち靈山となり

地「大地は紺瑠璃

シテ「木はまた七重寶樹となつて

地「釋迦如來獅子の座に現れ給へば（と舞臺へ入り）。普賢文殊。左右に居給へり（と一疊臺に上り床几にかゝる）。菩薩聖衆。雲霞の如く。砂の上には龍神八部（と經を開き）。おのおの拜し。圍繞せり

シテ「迦葉阿難の大聲聞

地「迦葉阿難の大聲聞は。一面に坐せり（經を下げ）。空より四種の。花降り下り。天人雲に。連なり微妙の音樂を奏す。如來肝心の。法門を說き給ふ（と經を戴き）、げにありがたき。氣色かな

佛の御聲があらたかに聞える。兩の眼を開いてあたりを見ると……」

天狗「この山がそのまゝ靈鷲山となり……」

僧正「大地は紺瑠璃となり……」

天狗「木は又七重の寶樹となつて……」

僧正「釋迦如來が獅子の座に御出現になると、普賢菩薩と文殊菩薩がその左右にお坐りになり、その他の菩薩達が雲霞の如く多勢集まり、砂の上には天龍八部が皆釋迦如來を拜して、圍繞してゐる」

天狗「それから迦葉尊者と阿難尊者が……」

僧正「迦葉尊者と阿難尊者が一方に坐つて居られる。空からは大小紅白の蓮華が降り下り、天人が雲の中に居並び、いひ知れず妙なる音樂を奏してゐる。その中で、釋迦如來が大切な教法をお說き遊ばす。實にありがたい有樣だ」

【四】
ワキ『僧正その時忽ちに
地『僧正その時忽ちに。信心を起し。随喜の涙。眼を浮かみ。一心に合掌し（とワキ合掌し）。歸命頂禮大恩教主。釋迦如來と。恭敬禮拜するほどに。俄かに台嶺。響き震動し。帝釋天より下り給ふと見るより天狗（シテ上を見込み）。おのおの騷ぎ。恐れをなしける。不思議さよ

【五】
と臺より飛び下り正面に出で、橋懸幕際を見込み、笛座の前にくつろぐ。
早笛にて、後ヅレ帝釋天、面天神・黒垂・輪冠・金襴鉢卷・襟淺黄・着附厚板・側次・半切・腰帶の裝束にて、打杖を持ちて出で、常座に立つ。同時に、シテ、頭巾を脱ぎ、無地熨斗目の衣を被ぎ魔王團扇を持ちて正面へ出づ。
地上歌『刹那が間に喜見城の。刹那が間に喜見城の（ツレ正面へ出で）。帝釋現れ數千の魔術を。あさまになせば。ありつる大會。散り散りになつてぞ見えたりける
（シテ、ツレへ向き、シテ掛衣を脱ぎ捨て、

【四】その時僧正は（前に天狗と約束したことをもうち忘れて）忽ちに信心を起し、随喜の涙を眼に浮かめ、一心に合掌して、
僧正「歸命頂禮大恩教主釋迦如來……」
と恭敬禮拜すると、俄かに比叡山中が鳴り響き震動して、帝釋天王が下り給ふやうに見えると、天狗どもがみな大騷ぎをして、恐れたのは不思議なことである。

【五】後ヅレ帝釋天登場。
瞬く間に喜見城主の帝釋天王が現れて、あらゆる魔術の化の皮をはがれると、今まで見えてゐた大會の有樣は散り散りになつてしまつた。

て四諦の理を觀じ煩惱を斷つて涅槃に入る聖者をいふ。
○四種の花—法華說法の時に降り下つた大小紅白の蓮華。法華經序品に「是時天雨二曼陀羅華（白蓮花）・摩訶曼陀羅華（大白蓮花）・曼殊沙華（紅蓮花）・摩訶曼殊沙華（大紅蓮花）二」
○肝心の法門—十訓抄には「深甚の法門」とある。
【四】○歸命頂禮—歸命は梵語南無に同じく、自分の命を歸投して佛を賴む意。頂禮は自分の頭頂を佛菩薩の足へつける最敬禮。
○大恩教主—一切衆生に教を說く釋迦の恩德を讃へていふ語。
○台嶺—天台宗の根本道場である比叡山。
○帝釋天—須彌山の頂上忉利天の主。佛法歸依の人を護り阿修羅の軍を征する天王。
【五】○喜見城—帝釋天の居城。
○あさまになせば—明らさまにすると。魔術を暴露すること。
○大會—大法會。法華經說法の會座をいふ。

〔舞働〕

（ツレシテを追ひまはす、）

ツレ 帝釋この時怒り給ひ

地 帝釋この時怒り給ひ、かばかりの信者をなど驚かすと（ツレシテへ寄り）、忽ちさんざんに苦を見せ給へば羽風を立てて（ツレ、シテを打つ、シテ下に居り）、翔らんとすれども。もぢり羽になつて。飛行もかなはねば（シテ角へ行きて安座して）恐れ奉り（シテ禮儀をして）拜し申せば帝釋則ち雲路をさして（ツレ橋懸へ行き）。上らせ給ふ（と幕へ入り）。その時天狗は岩根を傳ひ（シテ立ちて）下るとぞ見えし、岩根を傳ひ、下ると見えて。深谷の岩洞に。入りにけり

（と橋懸へ行き幕際にて團扇を投げ捨て飛び廻り、下に居て袖をかつぎ、立ちて留拍子を踏む。）

〔舞働〕

[illegible]

この時帝釋天王がお怒りになつて、「帝釋、なぜこれほどの深い信者を驚かすのだ」と天狗にさんざん苦しみを見せられると、天狗は羽風を立てて翔らうとするが、羽根がねぢれて自由にならず、飛行する事も出來ないので、恐れ奉つて、帝釋天王に禮拜すると、帝釋天王ははや雲路をさしてお上りになる。その時天狗は岩根を傳つて下るやうに見えたが、やがて深い岩洞に入つてしまつた。

○もぢり羽—羽根がねぢれて自由にならないこと。

考異

諸流なし

著しい異同はない。

古諸本（光悦本）

【二】シテ「月は古殿の……心すごの山洞（光氣色）やな……シテ「これはこのあたりに住居する（光仕る）客僧……ワキ「げにさる事……ただし釋尊（光迦ほとけ）靈鷲（光ナシ）山にての……　【四】ワキ「僧正そ（光こ）の時忽ちに。地「僧正その時忽ちに（光〱）……

附記

○五時＝天台宗で、釋迦一代五十年間の說教を年時の上から別けて五種としたもの、華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華般若時をいふ。

○八教＝天台宗で、化儀の四教と化法の四教とを合はせて八教といふ。

○教內教外＝釋迦の說法を聞いて得道するを教內といひ、物に觸れ事に當つて自分自身の力で悟るを教外といふ。

○華嚴阿含方等＝五時の分類で、第一の華嚴時は釋迦が成道して後華嚴經を說いた三七日間、次が增一阿含經・長阿含經・中阿含經・雜阿含經を說いた十二年間、方等時は次の十六年（又は八年）間で維摩經・思益經・楞伽經・勝鬘經等を說いた。第四は諸種の般若經を說いた十四年（又は廿二年）間、第五は法華經を說いた最後の八年間をいふ。

○四教＝化儀と化法との別があり、化儀の四教とは頓・漸・不定・祕密をいひ、化法の四教とは次の藏通別圓をいふ。

○藏通別圓＝化法の四教で藏は三藏教の略で阿含經の如き小乘をいひ、通教は方等般若の如き小乘大乘に通ずる教、別教は華嚴教の如き大乘、圓教は圓融の法華經をいふ。

○五相成身＝通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛心、佛心圓滿の五相（五段の觀想）を成就して金剛界の佛身を顯得すること。

道成寺　観（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】　四番目　複式劇能

【人物】　**ワキ**　道成寺住僧、**ワキツレ**　同従僧（二人）、**狂言**　能力（二人）、**前シテ**　白拍子、**後シテ**　蛇體

【所】　紀伊國　道成寺

【時】　（三月）

【作者】　二百十番謡目錄に観阿彌の作とす。類曲に「鐘巻」があり、能本作者註文にはこれを作者不明として擧げ、吉田東伍博士の同書註に「鐘巻は道成寺の古名なり」と記して居られるが、元祿番外謡本「鐘巻」によれば、本曲とかなり詞章を異にして居り、且いづれが他を改作したものか俄かに定め難い。言繼卿記天文二十三年三月一日の條に本曲演能のこと、言經卿記文祿四年四月三日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　紀伊國道成寺で撞鐘再興の供養が行はれた時、女人禁制と觸れたにも拘らず、白拍子が一人来て、舞を舞ふからといつて、能力を説きつけ、遂にその許しを得て、舞を舞ひながら鐘樓に昇つて行き、人の隙を狙

つて、鐘を引き下しその中に入つてしまつた。寺の住僧の話によれば、昔奥州の山伏が熊野へ年詣りをして、まなごの莊司の宅を宿坊としたところ、莊司が冗談にこの山伏を娘の婿であると敎へたのを、娘は眞と信じて、山伏に迎へ取るやうにと催促した。山伏は驚いてこの寺へ逃げて來て、鐘の中に隱して貰つたが、娘は追つかけて來て、日高川を渡る時蛇體となり、寺へ泳ぎ着いて、鐘を取り卷き、これを燒きとかしてしまつた。今の白拍子は恐らくその執心であらうといふことであつた。それで、寺僧達は必死になつて祈ると、鐘は再び榛木に上り、女は蛇體となつて現れ出で、日高川に飛び入つた。

【出典】この傳說はもと僧鎭源が長久元年撰んだ日本法華驗記から出て、爾來、今昔物語、元亨釋書、道成寺緣詞等に傳へられてゐるものである。本曲はそのいづれに據つたか明かにし難いが、傳說文藝として著しい今昔物語の文を擧げれば、その卷十四「紀伊國道成寺僧寫法花救蛇語」に、

今は昔、熊野に參る二人の僧有けり。一人は年老いたり。一人は年若くして形貌美麗也。牟婁の郡に至て人の屋を借て二人共に宿りぬ。其の家の主寡にして若き女也。……此の家主の女、宿りたる若き僧の美麗なるを見て、深く愛欲の心を發して……夜半許に家主の女窃に此の若き僧の寢たる所に這ひ至りて、衣を打覆て並び寢て僧を驚かす。僧驚き覺めて……………還向の次に君の宣はむ事に隨はむ、と約束を成しつ。……其の後女は約束の日を計て、更に他の心無くして僧を戀ひて、諸の備へを儲けて待つに、僧還向の次に彼の女を恐れて不寄ずして、忍びて他の道より逃て過ぎぬ。……（女）大に嗔りて家に返りて寢屋に籠り居ぬ。音せずして暫く有りて即ち死ぬ。家の從女等此れを見て泣き悲む程に、五尋許の毒蛇忽に寢屋より出でぬ。家を出て道に趣く。熊野より還向の道の如く走り行く。人此れを見て大きに恐れを成しぬ。……僧、疾く走り逃て道成寺と云ふ寺に逃入りぬ。寺の僧共此の僧を見て云く、「何事に依て走り來れるぞ」と。僧此の由を具に語て可助き由を云ふ。寺の僧共集て此の事を議して鐘を取下して、此の若き僧を鐘の中に籠め居ゑて寺の門を閉つ。……暫く有て、大蛇此の寺に追來て……此の僧を籠めたる鐘の戸の許に至りて、尾を以て扉を叩く事百度許也。遂に扉を叩き破て蛇入りぬ。鐘を卷て尾を以て龍頭を叩く事二時三時許也。寺の僧共此を恐ると云へども、怪むで四面の戸を開き集りて此れを見るに、毒蛇兩の眼より血の淚を流して、頸を持上て舌嘗づりをして本の方に走り去ぬ。寺の僧共此れを見るに、大鐘蛇の毒熱の氣に被燒て炎盛也。敢て不可近付ず。然れば水を懸て鐘を冷して、鐘を取去て僧を見れば、僧皆燒失せて骸骨尙し不殘ず。纔に灰許り有り。……其の後其の寺の上﨟たる老僧……忽に道心を發して自ら如來壽量品を書寫して衣鉢を投て……供養し奉りつ。其の後老僧

の多に、一の僧一の女有り、咲を含みて喜びたる氣色にて、道成寺に來て老僧を禮拜して云く、「君の清淨の善根を修し給へるに依て、我等二人忽に蛇身を棄てて善所に趣き、女は忉利天に生れ、僧は都率天に昇りぬ」と。如是く告畢て、各別れて空に昇り去ると見て夢覺めぬ。其の後老僧喜び悲しみて、法花の威力を彌よ貴ぶ事無限し。」

【評】 本曲は所謂「道成寺物」として近世文藝に著しい影響を與へたもので、女の嫉妬邪婬を描いた謡曲として見ても、「葵上」「鐵輪」などに比べて數等潑剌たものである。殊にその脚色に於て、前掲の傳說は法華驗記・今昔物語・元亨釋書いづれも、この女主人公を寡婦なる女房としてゐるのに、これには無邪氣な少女が父の冗談を信じた爲の戀慕として、觀客の同情を誘ひ、且それが今は變化して白拍子を裝ふ筋に構想して、亂拍子・急ノ舞を演ぜしめて舞臺效果を擧げ、しかもその結末は、從來の說話では法華經の功德によつて男女とも昇天得脫することとなつてゐるのに、これでは女の執念が永く止まつてその蛇體が日高川に飛び入ることとしてゐるなどは、作者の非凡な手腕を見るべきものであらう。ただこのワキ語は、傳說を詳細に語るといふ點に於ては遺漏がないとはいへ、その聞き手を同じ寺の從僧としてゐるのは、「藤戸」のワキが亡き漁師の母に語り、「隅田川」のワキが旅人に語つてゐるのに比へて、甚だ不自然な無理な作法であるといはなければならない。

【一】

狂言方の後見、鐘の作物を持ち出し、舞臺の眞中に釣り上げ、綱を鐘引なる仕手方の後見に渡して引く。

名乘笛にて、ワキ道成寺の住僧、角帽子・着附白厚板・紫水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人又は四人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠の裝束にて出で、ワキは舞臺に入り眞中に立ち、(ツレは橋懸にて下に居り)

ワキ「これは紀州道成寺の住僧にて候。さても當寺に於て、さる子細あつて、久しく撞鐘退轉仕り

【一】 前段

舞臺は紀伊國道成寺で、大きな鐘が釣り上げられる。

ワキ道成寺住僧、ワキツレ從僧を伴つて登場。

住僧 私は紀伊國道成寺の住僧です。さて當寺では、ある事情があつて、永らく撞鐘が廢絶してゐたのですが、今度再興し

【一】

○道成寺―紀伊國日高郡矢田村土生にあり、天音山千手院と號す。大寶元年文武天皇の勅願により紀道成の創立したものであると傳ふ。

○退轉―修行して得た位を退失する意に用ひるもとの下位に轉落する意の佛語で、轉じて一度あつたものが廢絶した意に用ゐる。

○鐘の供養―鐘を鑄て成就した後、撞き初めの供養法會。

○能力―力役を主とする身分の低い僧。

○さん候―以下、次の「畏つて候」までの狂言詞、諸本（光悦本にも）にもある。

○かまひて―必ず、きつと。

て候を。この程再興し鐘を鑄させて候。今日吉日にて候程に。鐘の供養を致さばやと存じ候

といひて脇座へ行き下に居る。ワキヅレも舞臺に入りその次に坐す。

ワキ「いかに能力

狂言能力一人、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にてワキヅレの後より出て狂言座に控へ居り、ワキに呼ばれて、オモ立ちて舞臺に入りワキに辭儀して、

狂言「御前に候

ワキ「はや鐘をば鐘樓へ上げてあるか

狂言「さん候はや鐘樓へ上げて候御覽候へ

ワキ「今日鐘の供養を致さうずるにてあるぞ。又さる子細ある間。女人禁制にてあるぞ。かまひて一人も入れ候な。その分心得候へ

狂言「畏つて候

といひて名乘座に立ち、

狂言「皆々承り候へ。紀州道成寺に於て今日鐘の供養の候間。志の方々は皆々參られ候へ。又何と思し召し候やらん。供養の庭へ女人禁制と仰せ出だされて候間。その分心得候へ／＼、

て鐘を鑄させました。幸ひ今日は吉日ですから、鐘の供養をしようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

住僧「これ能力、鐘はもう鐘樓へ上げたか」

と能力を呼び出す。狂言能力登場して、

能力「はい、もう鐘樓へ上げました。どうぞ御覽下さいませ」

住僧「今日鐘の供養を致さうと思ふが、少し事情があるから、女人は禁制だぞ。女は決して一人も入れてはいけないぞ。よく氣をつけるやうに」

能力「畏りました」

能力は町の人達に鐘供養の事を觸れる。

といひて笛座の前に坐す。

【三】

次第の囃子にて、シテ白拍子、面深井・長鬘・鬘帶・襟白赤・着附白地鱗箔・赤地唐織壺折・黒地縫紋腰卷・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り、常座にて囃子座の方に向き、

シテ次第「作りし罪も消えぬべし。作りし罪も消えぬべし。鐘の供養に參らん

地取に正面に向き、

シテサシ「これはこの國の傍に住む白拍子にて候。さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候由申し候程に。唯今參らばやと思ひ候

シテ上歌「月は程なく入汐の。月は程なく入汐の。煙滿ち來る小松原。急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり日高の寺に着きにけり

「急ぐ心かまだ暮れぬ」と右の方に向きて二三足出でまたもとへ歸りて日高寺に着きたる心。上歌濟みて正面に向き、

シテ「急ぎ候程に。日高の寺に着きて候。やがて供養を拜まうずるにて候

といひて眞中へ少し出かける。オモ狂言立ちて、

【三】

舞臺は變つて一、二、は紀伊國のある里、三、は白拍子登場。

白拍「これまで色々惡業を犯した罪も消えることであらうから、鐘の供養に參詣しませう」

と自分の心持を獨言し、

白拍「私はこの紀伊國の片田舎の白拍子でございます。さて道成寺と申すお寺で鐘の供養を遊ばすといふことを伺ひましたので、これから參詣しようと思ひます」

と見物人に自己紹介をし、

白拍「夜の明方に家を出て、間もなく月が西に隱れる頃、岸邊に汐の滿ちてくる、霞のたちこめた小松原を通り、道を急いでゐるうちに、まだ日の暮れない晝の間に、日高の道成寺に着きました」

と道々の景色を眺め獨言をいつてゐるうちに、道成寺に着いた態で、舞臺はもとの道成寺となる。

白拍「道を急いたので、はや道成寺に着きました。すぐ鐘供養を拜みませう」

といつて鐘樓に近づかうとする。能力が「女人は禁制だ」といつて止める。

【三】

○作りし罪—これまで色々佛戒を破つた罪業。

○白拍子—歌舞を演じ酒席をとりもつた遊女。平安末期から鎌倉時代に流行した。

○程なく入汐の—夜の明方で、月が程なく入るを入汐にいひかけた。入汐はさし汐、滿汐のこと。

○煙滿ち來る—煙は汐煙と霞の煙とを兼ねた。滿ち來るは汐の緣語。

○小松原—日高郡湯川村にある。

○急ぐ心か—心が急いだせいか。

○日高の寺—まだ暮れぬ日の高いうちにといひかけた道成寺は日高郡にあるからいつたのである。

◎なう／＼女人―以下、次の「まことにこれは」云々の狂言詞と同樣の文、光悅本にある。考異參照。

○涯分―力の及ぶ限り。

【三】

○宮人―社人、轉じて寺の役僧の意に用ゐたのであらう。刊行會本辭解には、「折から供養に來合はせた官位ある人をさしたのであらう」といふ。

○假に着て―暫し借りといひかけた。

○花の外には―あたり一面皆櫻花で、その外にはたゞ松があるだけである。

○鐘や響くらん―入相の鐘が鳴るのである。

狂言「なう／＼女人禁制にて候程に。供養の庭へは叶ひ候まじ

シテ「これはこの國の傍に住む白拍子にて候。鐘の供養にそと舞を舞ひ候べし。供養を拜ませてたまはり候へ

狂言「まことにこれは又唯の女人とは違ひ申し候間。某が心得を以て拜ませ申さうずる間。面白う舞を舞うて御見せ候へ。いや折節これに烏帽子の候。これを召して一さし御舞ひ候へや

シテ「あら嬉しや。涯分舞を舞ひ候べし

シテ後見座にくつろぎ【物着】。狂言もとの座に歸り坐す。

【三】

シテ前折烏帽子を着けて、一の松へ行き柱越に鐘を見上げ、すらすらと舞臺に入り常座に立ちて、

シテ「嬉しやさらば舞はんとて。あれにましますの宮人の。烏帽子を暫し假に着て。すでに拍子を進めけり

シテ次第「花の外には松ばかり。花の外には松ばかり暮れそめて、鐘や響くらん

地取に左手にて壺折の褄を取り少し引上げて、

白拍「私はこの國の片田舍の白拍子でございます。鐘の御供養に少し舞を舞つて御覽に入れませうから、どうぞ御供養を拜ませて下さいまし」

能力「成程唯の女人とは違うて白拍子といはれるならば、いかにも拙者の心得で鐘供養を拜ませて進ぜませう。その代り、面白う舞を舞うて見せて下さい」

白拍「あゝ嬉しい。よろしうございますとも。隨分舞を舞うてお見せしませう」

ト仕度を整へ烏帽子を着る。

【三】

白拍「あゝ嬉しい。それでは舞を舞ひませう。一寸あのお役人さまの烏帽子を拜借致します」

ト烏帽子を借りて、はや拍子を踏み出した。

これより白拍子は歌を謡つて能力に舞を見せる。

白拍「――

『あたりはすべて櫻花、今を盛りと咲き匂ふ、花より外に見るものは、松[illegible]ら[illegible]の色、はや日も西に暮れそめて、入相の鐘や響くらん』

こゝより[illegible]を謡ひ、

〔亂拍子〕

拍子を踏みながら一段々々と鐘樓の石段を昇り行く心。

シテ ワカ『道成の卿。うけたまはり。始めて伽藍。たちばなの。道成興行の寺なればとて。道成寺とは。名づけたりや

シテ謠ひながら、なほ拍子を踏みつゞけ、

地『山寺のや

〔急舞〕

（この舞には僧の眠りをさまさぬ心にて拍子を踏まず）

シテ『春の夕暮。來て見れば

シテなほ謠に合せて舞ひつゞけ、

地『入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞ散りける花ぞ散りける

シテ『さる程にさる程に。寺々の鐘

地『月落ち鳥啼いて霜雪天に。滿汐程なく日高の寺の。江村の漁火。愁ひに對して人々眠ればよ

〔亂拍子〕

舞を舞ひながら次第に鐘樓へ昇つて行き、

白拍「――

『抑もこゝの御寺は、
橘朝臣道成が、
君の仰せを承りて、
伽藍建立せし故に、
道成奉行の縁により、
道成寺とは名づけらる』

といふ意味の歌を謠ひながら、

〔急舞〕

を舞ひ、次第に鐘樓に近づく。能力は舞の面白さに恍惚として夢心地になる。

白拍「――
『山寺の、春の夕暮來て見れば、
入相の鐘に花ぞ散りける。――
歌の文句をそのまゝに、
あちらこちらの寺々で、
入相告げる鐘をつく。……
……月といへば唐の詩に、――
月落ち烏啼いて霜天に滿ち、
江楓漁火愁眠に對す。――
漁火の眺めはこの寺の……』

と謠ひながら能力を見て、

白拍「おゝ皆眠つてゐる、丁度よい折だ―

○道成の卿―傳が分らない。「小鍛冶」のワキと同名で、恐らく謠曲作者の假作であらう。寺傳や名勝志に文武天皇の時の大臣と傳へてあるのは謠曲以後の傳説であらう。

○伽藍たちばなの―伽藍は寺院の總稱。伽藍を建つを橘にいひかけた。

○山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける―新古今集能因法師の歌。但し原歌の初句は「山里の」とある。「や」は囃子言葉である。

○月落ち烏啼いて―鐘を撞きといひかけて月と出し、唐詩選、張繼の詩「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」を引いた。

○滿汐程なく―霜天に滿つを滿汐にいひかけ、汐の程なく干るを日高にいひかけた。

○江村―原詩には江楓とあるのを、日高川附近の漁村の意にいひかへた。

き隙ぞと（ツキ・ツキヅレを見廻し）。立ち舞ふ様にて狙ひよりて（と扇をたゝみて鐘を見上げ）。撞かんとせしが（扇を撞木の心にて振上げ）。思へばこの鐘うらめしやとて（鐘の下へ行き）。龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし。引きかづきてぞ失せにける

と白拍子は舞ひ續けてゐる様を裝うて狙ひ寄り、鐘を撞かうとしたが、

白拍「思へばこの鐘が恨めしい」といつて、鐘の龍頭に手を掛け、飛ぶがやうに鐘を引被つて消えてしまつた。

白拍子が鐘の下に入るや否や、鐘は物凄い音を立てて下に落ちる。

「龍頭に手をかけ」とシテ鐘の緣に手をかけ飛上ると同時に、鐘引の後見鐘を下へ落し、シテその中に平坐す。

【間】シテの舞に見惚れてうつら／＼と眠りゐたる狂言、鐘の落つる音に驚きて目を覺ましたる態にて、オモは舞臺にて、アドは橋懸へころげかゝり、

オモ・アド「なう悲しや／＼。さても／＼危なやの／＼。今のは何事であつたぞ。したゝかな鳴りやうで。肝がつぶれて性根がない

オモ「したゝかな鳴りやうであつたが。今一人の者は何處に居るぞ。（アドを見つけて）さて／＼わごりよのなりは

アド「いやお主は何としたぞ

オモ「身共はまだ氣がつかぬ

アド「尤もぢや。さて舞があまり面白うて。とろ／＼居眠りした折節。したゝか鳴つたが。今の鳴りやうは何であらうと思ふぞ

オモ「その事ぢや。雷であらうか。雷ならば前かどに少しなりともおとがせう事ぢやが。不審な事ぢやわい。

○龍頭―鐘の上頭部にあり龍頭の形をし、梁に懸ける綱を通すところ。

○かづき―被り。

【間】

○したゝかな―甚しい。

○性根―精神。正氣。

○わごりよ―和御寮。そなた。

○なり―態。様子。

○分別に與はぬ—分別がつかぬ、考へがつかぬ。
○この分—このまゝ。
○跡取つた—いひ出しが後であつたといふ意。

アド「わごりよがいふ如く。何やら地が夥しうゆるいだ
オモ「いや／＼それでもあるまい。先こちへ渡らしめ
　　といひて鐘を見つけ、手を拍ちて、
オモ「やあ／＼これであつた
アド「誠にこれであつた
オモ「随分念を入れて釣つたが。龍頭が切れたか。何として落ちたぞ
アド「見れば龍頭もその儘あり。害ねた所もないが。不審な事ぢやわい
　　といひて鐘に手を觸れ、
アド「あつつ。はあしたたかに鐘が煮えてある
オモ「落ちた分で煮よう様はないが
　　と同じく鐘に手を觸れ、
オモ「あつつ／＼。殊の外煮えた
アド「苦々しい事ぢや。これは何とした事であらうぞ。分別に與はぬ。この分では置かれまい程に。この由申し上げさしめ
オモ「尤もぢや。餘の者の口からお耳に立つたならば悪からう。この分では置かれまい。さりながら身共は申すこととなるまい程に。わごりよ行て申してくれさしめ
アド「言ふは易いが。身共がいふたら悪からう。わごりよ跡取つたほどに。わごりよ言はしめ
オモ「されば身共が跡取つたによつていひ憎い。わごりよ言うてくれい
　　といひてアドを突き出す。
アド「いや身共は出ていふ事はなるまい。早う行ていはしめ

○是非に及ばぬ—致し方がない。

【四】○言語道斷—言葉ではいひ現せない程驚き呆れたこと。瓔珞經に「言語道斷、心行所滅」

○曲事—正しくない事。不都合な事。

といひてオモを突き出す。

オモ「さりとては頼む程に。わごりよ行てくれい

アド「これは身共がいふ子細がない。わごりよ言はしめ。身共は知らぬ

といひてアドは引く。オモアドを見送りて、

オモ「やい〳〵はや戻つた。是非に及ばぬ。迷惑するともいはずはなるまい。急いで申さう

ワキの前へ出で、

オモ「落ちてござる

ワキ「落ちたるとは

オモ「鐘が鐘樓より落ちて候

ワキ「何と鐘が鐘樓より落ちたると申すか

オモ「なか〳〵

ワキ「その謂ればしあるか

オモ「隨分念を入れて候が落ちて候。それにつき思ひ出でて候。最前この國の傍に住む白拍子にて。この鐘の供養を拜ませてくれよと申し候程に。禁制の由申してござれば。餘の女人とは變り。舞を舞うて見せうと申し候程に。拜ませてござるが。もし左樣の者の業にてもござらうずるか

【四】ワキ「言語道斷。かやうの儀を存じてこそ。かたく女人禁制の由申して候に曲事にてあるぞ

オモ「あゝ

ワキ「さりながら立ち越え見うするにて候

【四】後段

住僧は能力が禁を犯して女人を入れた爲にこのやうな椿事を起したことを知つて、

住僧「以ての外の事だ。このやうな事がありはしないかと心配したから、女人禁制だと嚴しく申付けたのに、不埒な奴だ。

オモ「急いで御覧候へ（と立ち）なう助かりや〳〵（と幕に入る）
ワキ「なうなう皆々から渡り候へ
と立ち、ワキヅレを伴ひて鐘の前へ行き、
ワキ「この鐘について女人禁制と申しつる謂れの候を御存じ候か
ワキヅレ「いや何とも存ぜず候
ワキ「さらばその謂れを語つて聞かせ申し候べし
ワキヅレ「懇に御物語り候へ（といひて一同元の座に歸り）
ワキ（語）「昔この所に、まなごの莊司といふ者あり。かの者一人の息女を持つ。又その頃奥より熊野へ年詣でする山伏のありしが。莊司がもとを宿坊と定め。いつもかの所に來りぬ。莊司娘を寵愛のあまりに、あの客僧こそ。汝がつまよ夫よなんどと戯れしを幼心に眞と思ひ年月を送る。

（從僧達に向ひ）さあ皆こゝへお出でなされ」
と寺僧一同鐘の前に出て、
住僧「この鐘供養について、女人禁制と申付けたわけを、そなた方は御存じか」
從僧「いえ何も存じません」
住僧「それではそのわけを話して聞かせよう」
從僧「どうか委しくお聞かせ下さい」
住僧「昔この所にまなごの莊司といふ者があつて、一人の娘を持つてゐた。また其頃陸奥から熊野へ年詣りをする山伏があつて、この莊司の所を宿坊と定め、いつもその家に泊まつたのであつた。ところが、莊司は娘可愛さの餘り、つい冗談に『あの山伏がお前の夫だ』といつたのを、娘は幼心に是をほんとだと思ひ、そのつもりで年月を過してゐた。さてある年のこと、かの山伏が例の通りこの莊司の所へ

○まなごの莊司―まなごは愛子の意で、子を愛するところからつけられた名であらう。莊司は莊園の主で、一種の支配者。
○奥―奥州。
○熊野―紀伊國の熊野坐神社、本宮・新宮・那智の三所あり、山伏の最も尊崇した所。
○年詣で―毎年參詣する。
○宿坊―僧の宿泊する所。
○客僧―山伏と同じ意。
○つま―夫に同じ。

又ある時かの客僧荘司が許に來りしに。かの女夜更け人靜まつて後。客僧の閨に行き。いつまで妾をばかくて置き給ふぞ。急ぎ迎へ給へと申ししかば。客僧大きに騒ぎ。さあらぬ由にもてなし。夜に紛れ忍び出でこの寺に來り。ひらに頼む由申ししかば。隱すべき所なければ。撞鐘をおろしその内にこの客僧を隱し置く。さてかの女は山伏を。遁すまじとて追つかくる。をりふし日高川の水以ての外に增りしかば。川の上下をかなたこなたへ走りまはりしが。一念の毒蛇となつて。川を易々と泳ぎ越しこの寺に來り。ここかしこを尋ねしが。鐘の下りたるを怪しめ。龍頭をくはへ七まとひ纏ひ。焔を出だし尾を以て叩けば。鐘は即ち湯となつて。終に山伏を取りをはんぬ。なんぼう恐ろしき物語にて候ぞ

來たところ、その娘が夜も更けて人の寢靜まつた後、山伏の部屋へ行つて、『私をいつまでこの儘にしてお置きになるのです。早く迎へて下さいまし』といつたので、山伏は非常に驚いたが、その場はそれとなくあしらつて置いて、夜に紛れてその家を逃げ出し、この道成寺へ來て、『是非ともおかくまひ下さい』と頼んだが、といつて、この寺に何處といつて隱す場所もないので、撞鐘を下して、その内に隱して置いたのだ。すると、その娘は『山伏を遁がしてなるものか』と追つかけたが、丁度その時、日高川の水が大變な水嵩で渡ることが出來ない。どこか渡れる所がないかと、川の上や下を走り廻つたが、そのうちに男を思ふ一念に身は毒蛇となつて、とう／＼川を易々と泳ぎ越し、この寺へ來て、あちらこちらと尋ねたが、撞鐘の下りてゐるのを見て不審に思ひ、龍頭を啣へて鐘を七廻りとり卷き、口から焔を出して、尾で鐘を叩くと、鐘は遂に湯になつて、山伏はとり殺されてしまつたのだ。實に恐ろしい話ではないか』

○さあらぬ由―素知らぬ樣子。驚かない振り。
○この寺―道成寺。
○ひらに―是非とも。
○日高川―道成寺の東南を流れる川。龍神山から出で、鹽屋村で海に入る。
○一念の毒蛇―瞋恚執念が凝り固つて毒蛇となること。
○焔を出だし―口から焔を出し。
○取りをはんぬ―命を奪つてしまつた。
○なんぼう―いかほど。甚だ。

ソキツレ「言語道斷。かかる恐ろしき御物語こそ候はね

ソキ「その時の女の執心殘つて。又この鐘に障碍をなすと存じ候。われ人の行功も。かやうの爲にてこそ候へ。涯分祈つて。この鐘を二度鐘樓へ上げうずるにて候

ソキヅレ「尤も然るべう候

【五】 ソキ・ソキヅレ左右に分れて鐘に向ひ、ノットの囃子にて、

ソキ『水かへつて日高川原の。眞砂の數は盡くるとも。行者の法力盡くべきかと

ソキヅレ『皆一同に聲をあげ

ソキ『東方に降三世明王（と數珠を揉み）

ソキヅレ『南方に軍荼利夜叉明王

ソキ『西方に大威德明王

ソキヅレ『北方に金剛夜叉明王

ソキ「中央に大日大聖不動

從僧「これは驚き入つた、このやうな恐ろしい話はございません」

住僧「それで、自分が考へるに、あの時の女の執心が未だに殘つてゐて、今も又この鐘に障碍をするのだと思ふのだ。御同様、我々の修行してゐるのも、かういふ時の役に立てよう爲だ。さあこれから一所懸命お祈りして、この鐘を二度鐘樓へ釣りあげようではないか」

從僧「御尤もでございます」

【五】

住僧・從僧は鐘の前に出で、

住僧「水が逆に流れ、日高川原の砂が盡きてしまふやうなことがあつても、われら行者の法力の盡きることがあるものか」

と寺僧一同聲を張りあげて、

寺僧一同「――『東方におはす降三世明王、南方におはす軍荼利夜叉明王、西方におはす大威德明王、北方におはす金剛夜叉明王、殊には中央におはす大日大聖不動明王何卒御利益を示し給へ』――

○行功―修行を積んで得た功驗力。

【五】

○水かへつて―水が逆流し

○東方に降三世―以下修驗道の尊信する五大尊明王を呼び覺まして祈るのである。降三世は五大尊中東方に配し、「三世」の恩敵を降伏する、四面八臂の明王。

○軍荼利夜叉―五大尊中南方に配し、一切諸惡鬼神を降伏する一頭八臂の明王。

○大威德明王―一切の毒蛇惡龍を降伏する三面六臂の明王。

○金剛夜叉―一切の可畏夜叉を摧伏する三面六臂の明王。

○大日大聖不動―五大明王の中央尊で、大日如來が一切の惡魔を降伏せんが爲に變化して忿怒身を現した明王。右手には煩惱惡魔を斷伏する劍を持ち、左手には方便自在の索を持つ。

○動くか動かぬか—不動の字を承けて出した。
○索—不動尊の左手に持つ繩。
○曩謨三曼茶—吽多羅吒干𤚥まで不動明王の陀羅尼三種中の中呪で慈救呪といふ。歸命(曩謨)普遍(三曼茶)諸金剛(嚩日羅赧)暴惡(旋陀)大忿怒(摩訶嚕遮那)破壞(娑婆多耶)恐怖(吽)堅固(多羅吒)種子(干𤚥)の意。
○聽我説者得大智慧—不動本誓、四願のうちの二を出した。〔安達原〕にその全文が出てゐる。
○有明の撞鐘—何の恨みかあらんを有明に、有明の月を撞鐘にいひかけた。
○すはすは—そら／＼。物を見て驚く辭。
○千手の陀羅尼—千手觀音の呪文で、委しくは千手千眼大悲心陀羅尼といふ。「手ん手に」を承けて千手といつたのである。
○不動の慈救の偈—前に出た曩謨三曼茶の呪。
○明王の火焔の—不動明王の周圍にある火焔の如く。次の黒煙の序に用ゐたのである。
○黒煙を立てて—必死になつて祈る様。

ワキヅレ 動くか動かぬか索の。曩謨三曼茶嚩日羅赧。旋陀摩訶嚕遮那。娑婆多耶吽多羅吒干𤚥。聽我説者得大智慧。知我心者即身成佛と。今の蛇身を祈る上は

ワキ 何の恨みか有明の。撞鐘こそ

地 すはすは動くぞ祈れただ(後見鐘を少し上ぐシテ中に鐘を左右に動かす)。すはすは動くぞ祈れただ。引けや手ん手に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焔の。黒煙を立ててぞ祈りける。祈り祈られ撞かねどこの鐘響き出で(シテ中にて鐃鈸を鳴らす)。引かねどこの鐘躍るとぞ見えし(後見鐘を少し引上げシテ中より鐘を動かす)。程なく鐘樓に引き上げたり。あれ見よ蛇體は。現れたり

(後見鐘を引上ぐ、と、後ジテ蛇體、前の面を般若に取替へ、唐織を被ぎて居立ち、鐘高く上ると平伏し、やがて打杖を持ち唐織を兩手に持ちて腰に巻きて起き上り、)

さあこの鐘が動くかどうか。——「なまく、さまんだ、ばさらだ、せんだまかろしやな、そわたや、うん、たらた、かんまん。——わが説を聽く者は大智慧を得、わが心を知る者はその身そのまゝ成佛せん」と。このやうに蛇身成佛を祈るからは、何の恨みが殘るものか」

(と祈ると、下に落ちた鐘が少し動く。)

寺僧「そら／＼、鐘が動き出したぞ、さあ一所懸命に祈れ／＼」

と寺僧一同、千手觀音の陀羅尼、不動明王慈救の偈を唱へ、不動明王の火焔の如く頭に煙を立てて、必死になつて祈つた。

このやうに祈ると、鐘は祈られて、誰も撞かないのに響き出し、誰も綱を引かないのに、鐘は躍り上るやうにして、やがて鐘は鐘樓に引き上げられた。そして見よ、蛇體が中から現れ出たのである。

(鐘が梁に引上げられて、後ジテ蛇體、中から現れ出る。)

【六】
○謹請東方青龍—五大龍王に祈るのである。五方五色に配當してあるが、南北を略した。
○青龍清淨—もとは青體青龍とあつたのを誤つたのであらう。
○一大三千大千世界—佛教でいふ一切の世界。
○恒沙—恒河沙の略。數の極めて夥しい譬。
○哀愍納受—あはれんでこの願を納受し給へ。
○じきん—分らない。光悦本には「りきん」とある。改訂本には[illegible]の字を充ててゐる。
○その身を燒く—苦しみの甚しい樣。燒く火を日高にいひかけた。
○驗者—修驗者。
○本坊—住僧の住む僧坊。

〔祈〕

シテワキを追ひやらんとし、ワキ・ワキヅレ、シテを祈り伏せんとす。その間にシテ橋懸にて唐織を捨て、幕際まで追はれたる後、またワキを追ひ返して、仕手柱に背中をおしつけ柱を一まはりして(これを柱卷といふ)、舞臺に入り、鐘を引き下さんとす。ワキ走りよりて數珠にて打伏す。シテ直に立上り、なほ次の謠に合せて、シテ・ワキ互に爭ふ。

【六】
地〽謹請東方青龍清淨。謹請西方白體白龍謹請中央黃體黃龍一大三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受。哀愍じきんのみぎんなればいづくに大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかつぱと轉ぶが又起き上つて忽ちに鐘に向つてつく息は。猛火となつてその身を燒く。日高の川波深淵に飛んでぞ入りにける。望み足りぬと驗者達はわが本坊にぞ歸りける　わが本坊にぞ歸りける

シテ「かつぱと轉ぶが」と常座にて飛び返り、「鐘に向つて」と鐘を見上げ、「猛火となつて」と立ちて橋懸へ走り行き「飛んでぞ入りにける」と幕の中に飛び入る。ワキ「わが本坊にぞ歸りける」と仕手柱先にて留拍子を踏む。

〔祈〕寺僧蛇體を祈り伏せようとし、蛇體これに反抗する。

【六】
寺僧「謹んで東方の青體青龍、西方の白體白龍、中央の黃體黃龍、その他三千世界のあらゆる龍王に申し奉る。何卒われ等の志を憐み給ひ、われ等の願ひを聽き容れ給へ」——かう祈るからは、いかな大蛇も永くその姿を保つことが出來ようか」と祈ると、蛇體は祈られて、かつぱと轉んだが、また起き上り、鐘に向つて息を吹きかけたが、その息は猛火となつて、わが身を燒く苦しみを受け、日高川の深い淵に飛んで入つた。それで、寺僧達は祈禱の效驗の現れたことを喜んで、それぞれわが僧坊へ歸つた。

シテ日高川へ入水した態で退場。ワキ・ワキヅレ祈り伏せて本坊に歸る態で退場。

〔考異〕

諸流（五流）

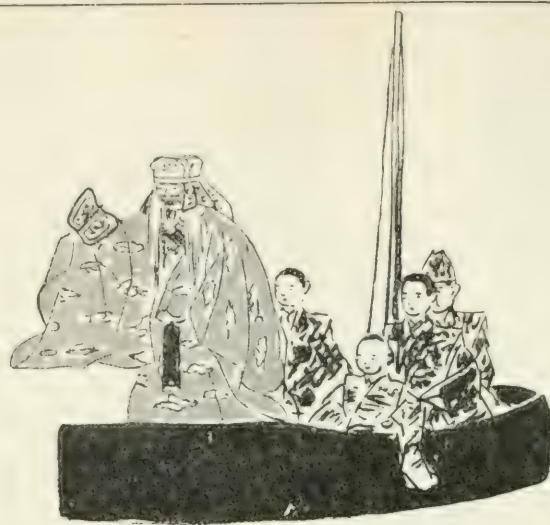
【一】上懸ではワキ名乘の前に、狂言後見が鐘を持ち出すが、下懸ではワキ名乘の後、ワキ「今日吉日にてある間鐘を鐘樓に上げ候へ」といつて、狂言が鐘を持ち出す。【二】シテ次第「作りし罪も……鐘の供養に參らん（下懸拜まん）……【三】シテ「嬉しやさらば舞はんとて（賁下懸ナシ）……假に着て（下懸扇おつとり色々に）既に拍子を……【六】地「謹請……西方白體白龍（下懸白龍白王）……

古諸本（光悅本）

【一】ワキ「これは紀州……再興し（光仕り）鐘を鑄……【二】シテ「急ぎ候程に……供養を拜まうずるにて候（光ナシ、光ヲカシ「なふ〳〵女人禁制にて候程にくやうのにはへはかなひ候まし急いてかへられ候へ）。シテ「これはこの國の……拜ませて給はり候へ。（光ヲカシ「是は又たゝの女人にはかはり申候間、そと人に尋ね申て見うするにて候御待候へ。いかに御同宿。ちともの申候へし。ツレ「何事そ。ヲカシ「女人禁制と仰られ候ほとに。其分申付候ところにこの國の傍の白拍子にて候か。そと供養をおかませてくれよ。さあらは供養に舞をまはふするよし申候かそれの御心得にて。そと御場へいれられ候へかし。ツレ「いや〳〵堅う禁制の由おほせられ候程に。それかしは存すまじひにて候。ヲカシ「あら曲もなや候。なふ〳〵そとうかゝひて候へは。中々女人は叶ふまじき由仰られ候へとも。舞を面白う御舞候はは。某か心得にてそと場へ入申さうするにて候）【三】……嬉しやさらば……あれにまします（光ナシ）宮人の烏帽子を……【六】地「謹請東方……哀愍じきん（光りきん）の砌なれば……

唐船

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四番目 一段劇能

【人物】**ワキ** 箱崎何某、**狂言** 同從者（太刀持）、**狂言** 唐船の舟夫、**子方** 唐子そんし、**同** 同そいう
シテ 祖慶官人、**子方** 日本子（二人）

【所】筑前國 箱崎

【時】（無季）

【作者】能本作者註文には作者不明とし、二百十番謡目錄には外山吉廣の作とす。言繼卿記に天文二十三年三月一日本曲演能のことが見えてゐる。

【梗概】九州の箱崎何某は唐土と日本と船爭ひのあつた時、唐船一隻を奪ひ取り、その船中にゐた祖慶官人に牛馬の野飼をさせてゐた。爾來十三年、官人は日本で生まれた二人の子とともに勞役に服してゐた。すると、故郷の支那に殘して置いた二人の子が父戀しさの餘り、數多の寶を以て父の身を贖はうと、箱崎へ迎へに來た。官人は許されて歸

國することとなつたが、日本子は父と共に行くことを許されない。そこで、唐子は父を連れて歸らうとし、日本子は引き留めようとし、官人はどちらの子にも從ひかねて、海に身を投げようとした。箱崎はこの樣を見て憐愍の情を催し、日本子を連れ歸ることを許した。官人は夢かとばかり喜んで、父子五人うち連れて唐船に乘り、船中喜びの舞を奏しながら、歸國の途に就いた。

【出典】　これといふ典據は見當らないが、吉野朝廷時代には所謂和寇が橫行したので、これに類した事件も少くはなかつたであらう。作者はさうした悲話に本づいて本曲を構想したものであらう。

【總評】　外國船がわが國を犯さうとしたものに、遠く元寇の難があり、わが國人で海賊の如き振舞をしたものに、近く和寇の事があつたが、それらの事は殆ど一つもわが文藝に採り入れられてゐない。その中に、この〔唐船〕の如き曲の出たのは誠に珍しいことである。しかもその内容は父子の情愛を主とし、日本人の寬大を副として、勞役に服する悲哀、子に迎へられる喜悦、去就に迷ふ憂悶、主の寬仁によつてすべてが圓滿に解決する愉悅が次々に展開して行つて、極めて變化に富み常に緊張した場面を作つてゐるのである。現行曲中佳作の一として數ふべきものであらう。

【一】　箱崎何某の名宣、ワキ箱崎何某登場

箱崎　こゝへ登場した私は、九州箱崎の何某といふ者です。さて先年支那と日本との間に船の爭ひあひがあつて、日本の船を支那にとられたり、支那の船を日本がとつたりしました。その時、私も支那の船を一艘奪ひ取つたのです。その船に祖慶官人といふ者があつて、これをこゝに

【一】

名乘笛にて、ワキ箱崎何某、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・長直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束にて、狂言太刀持（着附熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて太刀を持つ）を隨へ、て舞臺に入り、名乘座に立ちて、

ワキ　かやうに候者は、九州箱崎の何某にて候。さても一年唐土と日本と船の爭ひあつて、日本の船をば唐土に留め、唐土の船をば日本に留め置きて候。某も船を一艘留め置きて候。その船に

【一】

○箱崎—筑前國糟屋郡、今の箱崎町で、昔支那朝鮮と往來する要津であつた。
○唐土と日本と船の爭ひ—吉野朝廷時代の和寇などを指していつたものか。

祖慶官人と申す者を留め置きて候が。はや十三回になり候。某は牛馬をあまた持ちて候程に。かの祖慶官人に申しつけ野飼をさせ候。今日も申しつけばやと存じ候

といひて狂言に向ひ、

ツレ「いかに誰かある

狂言「御前に候

ツレ「祖慶官人にいつもの如く牛馬を引きて野飼に出でよと申し候へ

狂言「畏つて候

ツレ脇座へ行き下に居る。狂言仕手柱先に立ちて、

狂言「いかに祖慶官人。いつもの如く牛馬を追ひ野飼に出で候へや

といひて狂言座につく。

【三】

狂言舟子、官人頭巾・鬘・着附厚板・側次・小手・股引の装束にて、船の作物を持ち出し橋懸に置き、船に乗る。

一噌の囃子にて、子方唐子二人（そんし・そいう）、襟浅黄・着附厚板・側次・白大口・腰帯・扇の装束にて出で、船に乗り向合ひて、

子方二人「唐土船の梶枕。夢路程なき。名残かな

○祖慶官人—作者の假作であらう。光悦本には[illegible]の字を充ててゐる。今箱崎宮にある祖慶の碑は本曲から出た附會である。
○十三回—十三年。
○野飼—牛馬を野原に連れて行つて草を食ませ遊ばせること。

【三】

○梶枕—船中の假寝。○夢路程なき—僅の間なども熟睡できないこと。○名残かな—早くも故郷を立ち別れる名残惜しさを惜しんでいふ。

留めて置きましたが、はやその時から十三年になりました。私は牛馬を澤山持つてゐますので、その祖慶官人にいひつけて、野飼をさせてゐるのです。今日もいひつけようと思つてゐます」

と見物人に事件の經過を紹介し、さて太刀持の狂言に祖慶官人に野飼をさせることをいひつけて、脇座へ行き休息の態。

【三】

狂言と交替して祖慶官人の子、唐子そんし・そいうの二人登場、狂言舟に乗つてゐる態で、

唐子「唐船に乗つて、辛い船旅をすると、烈しい波音で、夢もろくに見る間もない程寝覺め勝ちで、故郷の方が名残惜しく思はれることだ」

○明州の津―浙江省、今の寧波港を指したものか。
○そんしそいう―本書の狂言底本とした大藏流古寫本には孫子蘇祐の字を充ててゐる。假作の人物であらう。
○思ひ立つ日を吉日―諺。
○海漫々―海の廣くて際涯のないこと。白氏文集に海漫々、直下無レ底―
○心筑紫―父に逢はうといふ氣を揉み心を盡すを筑紫にいひかけた。
○忍びし夫を―昔大伴狭手彦が新羅へ渡る爲に松浦潟を船出した時、その妻佐用姫が夫を戀ひ慕つて山に登り領巾を振つたといふ故事に據つて、松浦潟の序とした。
○松浦潟―肥前國松浦郡唐津の海邊。

そんしは正面に向きて、

そんしサシ「これは唐土明州の津に、そんしそいうと申す兄弟の者なり。唐子二人（向合ひ）「さてもわが父官人は。一年日本の賊船にとらはれ。昨日今日とは思へども。十三回にはやなりぬ。餘りに父の戀しさに。未だこの世にましまさば。今一度對面申さんと

唐子二人下歌「思ひ立つ日を吉日と船の纜解きはじめ。上歌「明州河を押し渡り。明州河を押し渡り。海漫々と漕ぎ行けば。はや日の本もほの見えて。心筑紫の果にある忍びし夫を松浦潟。波路遥かに行く程に。名にのみ聞きし筑紫路や箱崎に早く、着きにけり箱崎に早く着きにけり

そんし「波路遥かに行く程に」と正面に向き「箱崎に早く着きにけり」と再び向合ひ、箱崎に着きたる態。

そんし「急ぎ候程に、これははや箱崎に着きて候」狂言に向ひ、

「いかに誰かある

さまづ船旅の心持を述べ、

唐子「私達は支那の明州の津の、そんし・そいうといふ兄弟の者です。さて私達の父祖慶官人は先年日本の海賊船に奪はれて、それから昨日か今日の事のやうに思つてゐるうちに、はや十三年になりました。それで、餘り父が戀しく思はれるので、まだこの世に生きて居られたならば、も一度お會ひしたいものだと思つて「思ひ立つ日を吉日」と定め、船を漕ぎ出して、明州河を渡り、廣々とした海を渡つて行くうちに、はや日本の國が見えて來て、父に會ひたいと切ない思ひをし、忍び逢ふ日を樂しみに待つて、遠い海を渡つて行くうちに、噂にだけ聞いてゐた九州の箱崎に、存外早く着いた―

といつてゐるうちに船は箱崎に着いた態で、狂言身夫は箱崎の大刀持に案内を乞ひ、唐子二人は舞臺に入る。

舟子「御前に候

そんし「祖慶官人未だ存生にて。箱崎殿に召し遣はれ候由承り
候間。尋ねて對面申したき由申し候へ

舟子「心得申して候

といひて幕より出で、一の松にて舞臺に向ひ、

舟子「いかにこの内へ案内申し候

太刀持狂言、仕手柱際に出で、

太刀「誰にて渡り候ぞ

舟子「是は唐土明州の津に。祖慶官人が子。孫子蘇祐と申す者
にて候か。官人未だ存生にて箱崎殿へ仕へ申す由承り。數の
寶に代へ連れて歸國仕りたくとて。この地へ渡りて候。その
由御申しあつて給はり候へ

太刀「その由申さうずる間。暫くそれに御待ち候へ

舟子「心得申して候

太刀持ツキの前へ出で、

太刀「いかに申し候。唐土明州の津に祖慶官人が子。孫子蘇祐
と申す者。官人未だ存生の由承り。數の寶に代へ歸國仕りた
き由にて參りて候

ツキ「それはめでたき事にて候。やがて對面せうずる間。こな
たへ通れと候へ

(一)物詣—神佛に參詣すること。

太刀「畏つて候。(舟子に向ひ)最前の人の渡り候か

舟子「是に候

太刀「その由申して候へば。箱崎殿御對面あらうずるとの御事にて候間。かう〳〵御通り候へ

舟子「心得申して候。(子方に向ひ)いかに申し候。官人の事を尋ねて候へば。箱崎殿御對面あらうずるとの御事にて候。かうかう御通り候へ

唐子二人船より出で舞臺に入る。(舟子船を後の欄干に横に立て掛け置く)。ワキ唐子に向ひ、

ワキ「唐土の人の渡り候か

そんし「これに候。祖慶官人未だ存生にて。箱崎殿に召しつかはれ候由承り候程に。數の寶に代へ連れて歸國仕るべきために。唯今この所に渡りて候

ワキ「さん候祖慶官人は未だ存生にて候。唯今物詣とて御出で候。暫くそれに御待ち候へ。御歸り候はば引き合はせ申し候べし

箱崎「支那の人は居られるか」

そんし「私どもです。父祖慶官人がまだ存生で、箱崎殿に召し使はれてゐるとの事を承りましたので、澤山の寶物と取換へて戴いて、國へ連れて歸りたいと思つて、唯今こゝへ參つたのです」

箱崎「いかにも祖慶官人はまだ存生ですが、今參詣に出掛けて居られます。暫くそこでお待ちなさい。お歸りになつたらお引き合はせしませう」

【三】

○あれなるわらんべども——日本子を指す。

そんし「さらばこれに待ち申さうずるにて候
といひて唐子二人後見座にくつろぐ。
ワキ「いかに誰かある
太刀「御前に候
ワキ「祖慶官人に牛馬を引かせ候事を。兄弟の者に知らせ候な
太刀「心得申して候
ワキ「又存ずる子細のある間。官人に裏より歸れと申し候へ
太刀「畏つて候。(幕に向ひ)やあ〳〵祖慶官人に。今日は子細のある間。裏道より御歸り候へや
といひてもとの座に着く。

【三】

一聲の囃子にて、シテ祖慶官人、面阿古父尉・尉髮・襟淺黄・着附小格子厚板・茶水衣・腰帶・扇の裝束、子方日本子二人、襟赤・着附摺箔・縫紋腰卷・腰帶・扇の裝束にて、三人とも左右の手に手綱と鞭とを持ち、子方を先に立てて出で、橋懸に立ち並び、シテ子方に目を附けて、
シテサシ「いかにあれなるわらんべども。野飼の牛を集めつつ。はやはや家路に急ぐべし
子方シテへ向き、
日本子(二人)「かかる業こそもの憂けれ
シテ「よしわれのみか天の原

そんし「それではこゝに待つて居りませう」
といつて後見座にくつろぐ。父を待つてゐる態。

【三】

橋懸は箱崎の牛馬を飼つてゐる野原で、シテ祖慶官人、子方日本子二人を作つて登場、各々鞭を持つて野飼の態で、
官人「おうい、そこにゐる子供たちも、野飼の牛を集めて、急いで家へ歸るがよからう」
日本子「あゝこのやうな仕事はほんとに辛いことだ」
官人「いや我々人間だけではない、天上界

シテ一聲「七夕の。たとへにも似ぬ身の業の
日本子（三人向合ひ）「牛牽く星の。名ぞしるき
三人とも正面に向き、
日本子（二人）「秋咲く花の野飼こそ。シテ日本子（三人向合ひ）「老の心の。慰めなれ（といひてまた正面に直し）
シテ「これは唐土明州の津に。祖慶官人と申す者なり。われ圖らざるに日本に渡り。牛馬をあつかひ草刈笛の。高麗唐土をば名にのみ聞きて過ぎし身の。あら故郷戀しや。かくて年月を送る程に二人の子を持つ。又唐土にも二人の子あり。かれ等が事を思ふ時は。それも戀しく。又これもいとほしし（と子方を見）。一方ならぬ箱崎の。
二人の子どもなかりせば
シテ下歌「老木の枝は雪折れてこの身の果はいかならん（としをる）

の七夕といへば、美しい戀を祀られる方だが、お星様には不似合な、牽牛星といふ名でも知られる通り、自分達と同じやうな牛飼ひをなさるのだ。
日本子「さういへば、草の名にも牽牛花といふのがあつて、かういふ秋の草花の咲いてゐる野で牛飼をするのは……
官人「うん、それがせめてもの年寄りの慰めとなるのだ。
自分はもとは支那明州の津の者で、祖慶官人といふ者だが、意外なことから日本に渡り、牛や馬の世話をして、草刈笛を吹いては、高麗笛の名から、高麗や支那の事を思ひ出すばかりで、永い年月を過して來たことだ。あゝ故郷が戀しい。かうして年月を過すうちに、この日本で二人の子を儲けた。そして支那にも二人の子があり、あちらの子供の事を思へば、支那の方が戀しく、といつて、又こちらの子供も可愛し、どちらへとも定めることが出來ないのだ。でも、この二人の子がなかつたならば、年寄りの身は弱り果てて、どうなつてしまふことやら。

○七夕のたとへにも似ぬ—天の原の牽牛織女の二星は七夕に祭られ、戀の神とせられてゐるが、そのやうな花やかな御身分にも似ずといふ意。
○牛牽く星の名ぞ—牽牛星といふ名の通り牛を牽いてゐる。
○秋咲く花の—朝顔を牽牛花とも書くので牽牛星の縁でこの花を思ひ起し、廣く秋の花をいつたのである。
○草刈笛—牧童の吹く笛。草笛。
○高麗唐土をば—高麗笛といふ笛があるので、草刈笛の縁でこの語を出した。
○二人の子ども—箱の縁語蓋をふたりにいひかけた。
○老木の枝は—老人の弱り果てた喩。古くは老木の松といつたのを、徳川氏の松平姓に憚つて枝と言ひ更へたのである。

○子ゆゑに物や思ふらん―夫木抄の歌に「里近く山路の末けなりにけり野飼の牛の子を思ふ聲」
○人倫―人間。

【四】
○なかなかなれや―さうであるとも。
○華山には馬を放し―書經武成に泰平の代を形容して「歸二馬于華山之陽一放二牛于桃林之野一」とあるを引き、華、桃の文字によつてこれを花の名所に取り做したのである。華山は陝西省の南部、桃林はその東にある。
○尉―老翁のこと。
○九牛が一毛―大小多寡の差の甚しい喩。漢書司馬遷傳に「假令僕伏レ法受レ誅若二九牛亡一一毛一」。太平記に「大海の一滴、九牛が一毛なり」
○痛はしや―氣の毒なことだ。

地上歌「あれを見よ、野飼の牛の聲々に（シテ正面を見）
「野飼の牛の、聲々に子ゆゑに物や思ふらん 況んや人倫に於てをやわが身ながらも愚かなりわが身ながらも愚かなり。下歌「いざや家路に歸らんいさや家路に歸らん（と子方に向く）

【四】
日本子（二人）「いかに父御よ聞し召せ、さて住み給ふ唐土に、牛馬をば、飼ふやらん御物語り候へ
シテ「なかなかなれや唐土の、華山には馬を放し。桃林に牛を繋ぐこれ花の名所なり
日本子（二人）「さて唐土と日の本は、いづれ優りの國やらん、委しく語り給へや
シテ「愚かなりとよ唐土に、日の本を喩ふれば、唯今尉が率いて行く、九牛が一毛よ
日本子（二人）「さほど樂しむ國ならば。痛はしやさこそげに、戀しく思し召すらめ

おゝあちらを見よ、野飼の牛が聲々に泣いてゐるが、あれも子供可愛さに心配してゐるのであらう。まして人間だもの、子を思ふのは當り前のことだ。それだのに、支那と日本と別れ〳〵に子供を持つとは、われながら愚かなことをしたものだ……いや愚痴は止めて、さあ家へ歸らう」

【四】
（唐船官人父子は家路へ歸らうと歩きながら、）
日本子「ねいお父さま、お國の支那でも牛馬を飼ふのですか、お話して下さい」
官人「おう〳〵、支那の華山といふ所では馬を放ち、桃林では牛をつないであるのだ。そしてそこは花の名所なのだ」
日本子「支那と日本とは、どちらがよい國なのでせう。ほんとのことをいつて下さいな」
官人「いふまでもないことだ。日本を支那に比較すれば、今わしが率いて行く牛の九牛と一毛とのやうなもので、比べものにはならない」
日本子「それほど樂しい國でしたら、ほんとにお父さま、お國が戀しいでせう」

シテ「いやとよ方々を。まうけて後は唐衣。歸國の事も思はずと

地「語り慰み行く程に。嵐の音の少きは松原や末になりぬらん箱崎に早く着きにけり

「語り慰み行く程に」と舞臺の方へ進みて、子方は直に舞臺に入り地謡座の前に立ち、シテは一の松に留まりて「嵐の音の少きは」と上の方松の梢を見渡す心持をし、直して舞臺に進み仕手柱際に立つ。地謡済みて、子方二人は下に居り、シテは鞭と手綱を後見に渡して扇を手に持ち常座に立つ。

【五】

ワキ「いかに祖慶官人。何とて遲く歸りてあるぞ

シテ「さん候餘りに多き牛馬にて御座候程に。さて遲く罷り歸りて候

ワキ「尤もにて候。又尋ぬべき事の候隠さず申すべきか

シテ「これは今めかしき事を承り候ものかな。何事にてもあれ申し上げうずるにて候

官人「いや／＼、そなた達が出來てからは、支那へ歸らうとは思はない」

官人「かうして、話しあひながら歩いてゐるうちに、いつの間にか嵐の音の少くなつたのは、もう松原の端なのであらう。……おゝ、はや箱崎に着いた」

と舞臺に入る。

【五】

箱崎「おい祖慶官人、どうして遲く歸つたのだ」

官人「はい餘り牛馬が多いので、それで遲くなりました」

箱崎「それは尤もだ。また尋ねたい事があるが、隠さずにいふか」

官人「これは又改まつた事を仰しやいます。何事でも隠さず申しあげませう」

○唐衣—唐衣着るを歸國にいひかけた。

○松原—箱崎の松原は駿河の三保、丹後の橋立とともに本朝三松原として稱揚されてゐる。

【五】

○今めかしき事—今更らしき事、改まつたお詞。

といひて眞中へ行き下に居る。

ワキ「さておことは唐土に二人の子を持ちてあるか

シテ「さん候子を二人持ちて候

ワキ「その名をそんしそいうと申すか

シテ「あら不思議や。何とて知ろしめされて候ぞさやうに申し候

ワキ「そのそんしそいう。汝未だ存生の由を聞き。數の寶に代へ連れて歸國すべき爲に。唯今この所に渡りて候

シテ「これは思ひもよらぬ事にて候ものかな。さてその船はいづくに御座候ぞ

ワキ「此方へ來り候へ

ト ワキ立つ、シテも立つ、ワキ橋懸の方を見て、

ワキ「あれにかかりたる船こそ。かの兩人の船にて候へ

箱崎「お前は支那に二人子供を持つてゐるか」

官人「はい二人子供を持つてゐます」

箱崎「その名をそんし・そいうといふか」

官人「これは不思議な、どうして御存じでございます。さやうに申します」

箱崎「そのそんし・そいうが、お前がまだ生きてゐるといふ事を聞いて、澤山の寶物と取換へて國へ連れて歸りたいといつて、今こゝへ來たのだ」

官人「これは意外千萬なことです。して、その船はどこにございます」

箱崎「こちらへお出で」

、官人を招き寄せ、橋の方を見せる態にて、

箱崎「あそこに泊つてゐるのが、その二人の子供の船だ」

○引き繕ひて—衣裳を整へて。

【六】

○明けやせん—宵の鐘聲開くを夜の明くにいひかけた

○春宵一刻その値千金も—「夢の縁で、「蘇東坡の詩句「春宵一刻値千金、花有清香月有陰」を引き、千金の縁で、萬葉集山上憶良の歌「白銀も黄金も玉も何せんにまされる寶子にしかめやも」を引いた。

シテ仕手柱先へ行き橋懸の方を見て、

シテ「げにこれは某が船にて候（とワキへ向く）

ワキ「さらば對面し候へ

シテ「餘りに見苦しく候程に。引き繕ひて給はり候へ

ワキ「心得申し候

ワキ下に居る。シテ笛座の前へ行き【物着】、唐頭巾を被り法被を着る。この間に唐子二人は橋懸に出でて立つ。シテ仕手柱先へ行き橋懸の方に向き、

【六】

シテ「やあいかにあれなるは唐土に留め置きたる二人の者か

唐子二人「さん候童名そんしそいうなり

シテ「これは夢かや夢ならば

唐子二人「所は箱崎

シテ「明けやせん

地「春宵一刻その値千金も何ならず子程の寶よ

官人「いかにもあれは私の船です」

箱崎「それでは會ふがよからう」

官人「餘り見苦しい體裁ですから、身繕ひをさせて下さい」

箱崎「承知した」

官人は衣裳を改める。唐子は浦にゐる態、橋懸に居る。官人橋懸の方を見て、

【六】

官人「やあ、そこにゐるのは支那に殘して置いた二人の者か」

唐子「はい、私どもは幼名をそんし・そいうと申します」

官人「これは夢であらうか、もし夢であつたら……」

唐子「いえ確かな現實です」

官人「もしもこの夢がさめたら」

地「誠に千金の値にも換へ難い、子はと大

○隨喜—喜んで歸依する意の佛語。こゝでは轉じて深く感動する意に用ゐた。○箱崎の神—箱崎八幡宮。應神天皇、仲哀天皇、神功皇后を合祀す。○納受—神が願意を聽き入れ給ふこと。

【七】○追風—順風。

もあらじ。唐土は心なき。夷の國と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと日本人も隨喜せり。尊や箱崎の。神も納受し給ふか

「子程の寶よもあらじ」とシテ唐子を扇にて招きて、シテは大小前へ行き、唐子は脇正面へ出て、三人とも下に居り、「尊や箱崎の」とシテ正面に向ひ合掌す。

狂言舟子、舞臺へ出てそんしに向ひ、

【七】

舟子「いかに申し候。一段の追風がおりて候。急ぎ御船に召され候へ

そんし（シテに）「いかに申し候。追風がおりて候急ぎお船に召され候へ

シテ（ワキに）「いかに箱崎殿へ申し候。追風がおりて候程に船に乘れと申し候御暇申し候べし

ワキ「めでたうやがて御歸國候へ

シテ立つ、

日本子（二人）「あら悲しやわれ等をも連れて御出で候へ

（と二人とも立つ）

シテ「げにげに出船の習ひとてはたと忘れてあ

きな寶はよもや他にあるまい。『支那は情を知らぬ野蠻の國だと聞いてゐたのに、このやうな孝子があるのだ』と、日本人も感心した。さぞ箱崎の神様もこの孝心を御感納遊ばすことであらう。

【七】

唐子「お父さま、丁度順風になりました。急いで船にお乘り下さい」

官人「箱崎殿、子供が『順風になつたから船に乘れ』と申しますから、お暇を戴きます」

箱崎「めでたうすぐ歸國せられよ」

日本子走り出て、

日本子「おゝ悲しい、私たちも一緒に連れて行つて下さい」

官人「いかにもく。とかく出發間際のこ

るぞ此方へ來り候へ

　と子方にいひて仕手柱の方へ行きかゝり、子方も少し前へ出づ。

ワキ「暫く。祖慶官人の事は力なき事。この幼き者どもは。この所にて生まれ相續の者にて候程に。いつまでも某召し使はうずるにてあるぞ此方へ來り候へ

日本子（二人）「あら情なの御事や（とワキに向ひ）。大和撫子の花だにも。同じ種とて唐土の。唐紅に咲くものを。薄くも濃くも花は花。情なくこそ候へとよ

（としをる）

　唐子二人立ち、

唐子（二人）「時刻移りて叶ふまじ。急ぎお船に召されよと。はや纜をとくとくと

シテ「呼ぶ子もあれば（と唐子に向きつ）

日本子（二人）「とり留むる

とて、ふいと忘れたのだ。こちらへお出で」

箱崎「いや一寸待て。祖慶官人の事は致し方ないが、この幼い子供はこゝで生まれたもので、跡を繼ぐべきものだから、自分がいつまでも召し使はうと思ふ。さあこちらへお出で」

日本子「あゝ情ない。日本で生まれたものでも、父は同じ父で、支那で生まれたものと、國こそ違へ、同じ父の子でありながら、唐子には御深切で、私達には餘りにお情ないお仕打です」

　と箱崎を恨む。唐子はまた父に向ひ、

唐子「時刻が過ぎてはいけません、早く船にお乗り下さい」

と、はや纜を解いて呼ぶ子もあれば、日本に留めようと引留める子もあり、中に挾まれて、父はひとりでどうすることも出來ず、泣いてゐた。

○力なき事―是非のない、致し方のない事。

○相續の者―父の跡を續いで勞役すべき者といふ意か。

○大和撫子―かはらなでしこ。日本子の喩。

○同じ種とて―同じ父の子であるから。

○唐紅に咲くものを―唐紅は深紅の色。唐の文字によつて、同じく唐人の血統であるのにといふ意に喩へた。

○薄くも濃くも―日本子と唐子と名は異つても、同じ父子であるとの意。續古今集北野天神の御詠に「撫子の薄くも濃くも日くるれば見む人わきて思ひ定めよ」

○とくとくと―纜を解くを、疾くにいひかけた。

○たづきも知らず―爲すべき術も知らずに。上の「呼ぶ子もあれば」を承けて、「呼古今集讀人知らずの歌「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼ぶ子鳥かな」を胸に置いて綴つたのである。
○身もがな二つ―行く身と留る身と、からだが二つあればよいが、「身、ふたは箱の緣語。
○うらめしの―筥崎の浦といひかけた。
○燒野の雉子夜の鶴―ともに親の子を思ふ例。「太平記に「燒野の雉の殘る叢を命にて、雛を育む風情にて」。詞花集に「夜の鶴都の内にこめられて子を戀ひつゝも鳴き明かすかな」
○梁の燕―今昔物語に、或家で燕が巣を作つて子を産んだところ、家人がその雄鳥を殺してしまつた。すると翌年の春も雌鳥は同じ家に歸つて來たが、もはや子を産まなかつたとあり、貞婦の喩として記してあるのを、こゝには親の子を思ふ喩へに引いたのである。〔竹の雪〕には「婦愛の燕」、「廢曲・切兼曾我」には「子を

シテ『中に留まる（と日本子に向き）

シテ・唐子・日本子（五人）『父ひとり

地『たづきも知らず泣きゐたり。身もがな二つ箱崎のうらめしの心づくしや（と安坐してしをり）。例へば。親の子を思ふ事。人倫に限らず。燒野の雉子夜の鶴。梁の燕も皆子ゆゑこそ物思へ

地クセ『況んやわれ等さなきだに。明日をも知らぬ老の身の。子ゆゑに消えん命は何なかなかに惜しからじと

（とシテ少し考ふる心持をし、）

シテ『今は思へばとにかくに

地『船にも乘るまじ留まるまじと（居立ち）。巖にあがりて十念し既に憂き身を投げんとす。唐土や日の本の子どもは左右にとりつきて。これをいかにと悲しめば。さすが心もよわよわとなり行

官人「あゝからだが二つあればよい。ほんたうに情ない困つたことだ。親が子を思ふのは、人間ばかりでない、燒野の雉子、夜の鶴、梁の燕も、皆わが子ゆゑに物思ひをしてゐるのだ。まして人間たるものが、殊に自分は明日の命もあるやらないやら分らない年寄りだ。この身を子の爲に捨てるのに、何の惜しいことがあらう―かう思へば、船にも乘るまい、陸にも留まるまい」

と岩に上つて、念佛を稱へ、將にこの辛い身を海に投げようとする。唐子や日本子はその左右にとりついて『これをどうしよう』と悲しむと、さすが祖慶官人の決心もにぶつて、たゞ悲しさに心も弱つて行くばかりであつた。

喩へに用ゐてある。
○十念—念佛を十度唱へること。

【八】
○物を案ずるに—物を考へるのに。
○なかなかに—然りといふ意の時代語。
○諸天—諸の天部。

く事ぞ悲しき

シテ「巖にあがり十念し」と立ちて少し出で合掌し「身を投げんとす」と正面先へづかづかと出づ。唐子は右の、日本子は左の袖に取りつきて留む。シテ右左の子方を見やり「さすが心もよわよわと」と後へ下り安坐してしをる。子方は四人とも地謡座前に並びて下に居る。

【八】

ワキ よくよく物を案ずるに。物のあはれを知らざるは。唯木石に異ならず。殊更出船の障りなれば。はやはや暇とらするぞ。とくとく歸國を急ぐべし

シテ 餘りの事の不思議さに。更に眞と思はれず

ワキ こはそも何の疑ひぞや。當社八幡も御知見あれ。僞り更にあるべからず。とくとく船に乘り給へ

シテ「これは眞か（と居立ちてワキに向ひ）

ワキ なかなかに

地 ありがたの御事や。まことに諸天納受して と

【八】

箱崎はこの様を見て、

箱崎「よく物を考へて見るのに、ものの情を知らないのは、全く木石と同じことだ。殊にこのやうな場合、かうして置いては出船の障りとなるのだから、すぐ日本子にも暇をやらう。さあ早く歸るがよからう」

官人 これはまた餘り意外なことで、全くほんとうとも思はれませんが……

箱崎「いや決して僞りではない。當社八幡宮も御照覽あれ、斷じてうそはいはない。さあ早く船にお乘りなさい」

官人 これはほんとなのですか

箱崎「さうだ」

官人 ありがたい事です。ほんとに神佛も

シテ正面に合掌し、この子をわれ等に與へ給ふかありがたや（ト子方を見廻し）

この間に狂言舟子船を脇正面に持ち出し帆柱を立てて帆をあぐる用意をなし置く。

【九】地、かくて餘りの嬉しさに。時刻を移さず。暇申して唐人は（トシテ・子方一同船に乗り）。船にとり乗りおし出だす。悦びの餘りにや。樂を奏し舟子ども。棹のさす手も舞の袖。をりから波の鼓の舞樂につれて面白や

ト子方は下に居り、シテは船の先の方に乗りたるまゝ船中にて、

［樂］を舞ひ、なほ次の謡に合せて舞ひつゞく。

地（キリ）陸には舞樂に乗じつつ。陸には舞樂に乗じつつ。名殘おしてる海面遠く。なり行くままに（シテ正面を遠く見やりて）招くも追風（ツキ招き扇をして）船には舞の。袖の羽風も。追風とやならん（シテ左袖を

【九】

○舟子―船頭。

○棹のさす手―棹をさすを舞のさす手にいひかけた。

○波の鼓―波の音を鼓に見立てたのである。

○陸には―何を隔てて「招く」にかゝる。

○名殘おしてる―名殘惜しといひかけた。おしてるは海の枕詞。

○招くも追風―陸から招く手風も船中で舞ふ袖の羽風もみな順風となつて。

○帆を引きつれ―帆を引き

御感納遊ばされて、この子どもを私に賜はつたのであらう。實にありがたいことだ」

【九】かうして、餘りの嬉しさに、すぐさま箱崎にお暇をして、支那人は船に乗つて沖へ押し出した。そして悦びの餘りであらう、船中で樂を奏すると、船頭の棹さす手も舞につれて輕やかに動き、波の音も舞樂の鼓の音に調子を合はせて、面白いことである。

［樂］祖慶官人船中で舞ふ。

陸の方でも、この舞樂の面白さに誘はれながら、名殘を惜しんでゐるうちに、船は次第に海上遠く離れて行くので、陸から手招きをすると、その手風も、乃至船中で舞を舞ふ袖の羽風も、すべてが順風となるのであらう、舟夫は帆を高くあげて、一同うち連れ、悦び勇

あしらひて小廻りをし)。帆を引きつれて(シテ帆を見上げ)。

舟子ども。帆を引きつれて(狂言帆を引上げ)。舟子どもは。悦び勇みて。唐土さしてぞ。急ぎける

と舞ひ納め、諸終りてシテ子方順次船より下りて幕に入り、狂言舟子船を持ちて後より入る。

んで支那の方へ急いで行つた。

船が進んで行く態で、祖慶官人・唐子・日本子等退場、次で箱崎退場。

あげを親子うち連れの意にいひかけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

五流の間、殊に第一・二節に於て詞の異同が少くないが、著しく文意の異つたものはない。

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「かやうに候者は……さても一年唐土と日本と(光ナシ)船の爭ひ……その船に祖慶(光蘇經)官人と申す者を留め置きて候が。はや十三回になり候(光ナシ)……　【二】そんしサシ「これは唐土……未だ(光もしも)この世にましまさば……ワキ「唐土の人の渡り(光御座)候か……ワキ「さん候祖慶官人は……暫くそれに御待ち候へ(光ナシ)御歸り候はば(光やかて)引き(光ナシ)合はせ申し候べし……　【三】シテ下歌「老木の枝(光松)は……　【五】シテ「これは(光ナシ)今めかしき事を承り(光仰られ)候ものかな。何事にてもあれ申し上げうするにて候(光御尋候へ申候へし)……ワキ「そのそんしそいう……歸國すべき(光せうずる)爲に(光とて)。唯今この所に……ワキ「あれにかかりたる(光あつ)船こそ……シテ「げにこれは(光ナシ)菜が船にて……シテ「餘りに見苦しく候程に引き繕ひて給はり候へ(光唯今の對面はいかゞにて候)……ワキ「心得申して候(光いや〳〵くるしからぬ事急ひで對面し候へ。シテ「さらば對面仕候へし)　【七】シテ「いかに箱崎殿に申し候……子方「あてたら御歸國候へ(光何と追手がおりたれば船にのれと候や心得てあるぞ)日本子「あら悲しや……シテ「げにげに出船の……はたと忘れてあるぞ(光候)……シテ「暫く……力なき事(光く候)この幼き者ども(光が事)は……召し使はうずるにて候(光い候へし)……唐子「時刻移りて叶ふまじ(光ナシ)急ぎお船に……　【八】ワキ「よくよく物を案ずるに……暇とらするぞ(光なり)

道明寺　觀（剛　喜）

解　說

【能柄】脇能　複式夢幻能

【人物】**ワキ**　尊性、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　老翁（白太夫神靈）、**前ツレ**　宮人、**狂言**　末社神、**後ツレ**　天女、**後シテ**　白太夫神

【所】河內國　道明寺

【時】九月

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。言繼卿記天文元年五月二日の條に演能のこと、言經卿記文祿四年四月二日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】相摸國田代の僧尊性が信濃國善光寺に參籠してゐると、或夜、河內國土師の里道明寺に、天滿天神が供養の爲に埋められた大乘經の卷軸から生えた木槵樹がある、その木の實で數珠を作り、念佛百萬遍すれば必ず往生するといふ靈夢を蒙つたので、早速道明寺に參り、折から來合はせた老社人にこの話をすると、老人はその木槵樹のある所

へ尊性を案内して、神佛同一體であること、菅公の配流せられた時のことなどを語り、やがて自分は天神の御使の白太夫神であるといつて消え失せる。尊性は奇特の思ひをしてこゝで一夜を明かすと、その夜の夢に天女が現れて、天の岩戸の神遊びを思ひ起して、舞樂を催し、笛の役者として白太夫を呼び出す。白太夫神は命に應じて、笏拍子面白く〔樂〕を舞ひ、木槵樹の實を尊性に與へる、と思ふと尊性の夢はさめた。

【出典】道明寺卽ち土師寺と菅公との關係については、江談抄第三「菅家本土師氏也、子孫雖レ多官位不レ至事」に、

彼レ談云、菅家人ハ子孫多シテ官位不レ至、有二其故一、菅家本姓者、土師氏也、河内國土師氏是其先祖氏寺也。

とあるが、木槵樹のことは何書にも見當らない。たゞ拾葉抄所引の道明寺緣起に、

元慶八年、菅相丞當寺に於て五部の大乘經を書き寫す。此經を納むべき地を求め給ふに、講堂の西の傍にあたりて石函を得る。則ち此經を彼の函に納めて土を以て上を築く。其後かの塚より木槵樹自然に生ひ出て、年々繁みを添ふ。一年回祿の災にあひて枯れしかども、其根猶殘りて、二度枝葉を生じ、今に至りて盛なり。人々此實を貴みて數珠につなぐなり。

又

相州田代寺の尊性といへる僧、信州善光寺に參籠する事一七日、我れ命終の後、必ず西方極樂に往生せしめ給へと、一心に祈願せしかば、ある夜の夢に、內陣より如來の告げ給ふと覺えて、「木槵樹一百八を貫き、これをもて數を取りて、念佛百萬遍を修行せば、決定して極樂に生れん、その木槵樹は河州土師寺にあり」と。尊性夢さめて後、遙々尋ね來りけるに、一人の老翁出て案內して木槵樹を敎ふ。此僧これを得て念數とし、敎の如く修せしかば、臨終正念して、往生の本意を遂げたり。かの翁は白太夫の神の化現にてありしとなり。

とあるが、これは或は本曲以後の制作でなからうか。

【批評】神佛同一體、本地垂跡の思想の最も濃厚な曲である。歿後神と崇められた菅公が氏寺で大乘經を書き寫して供養した、その經塚から數珠の材とする木槵樹が生えたといふのは、この寺の寶譜として妥當な脚色であるが、クセに菅公配流の時の樣を敍べたのは蛇足で、むしろ初同から直にロンギに續いた方がよかつたと思ふ。後段にツレ天女が出現して舞を演じ、また後ジテ白太夫神が樂を舞ふのは、脇能に屢〻用ゐられる手法であるが、木槵樹との交渉に甚だ薄い。これを世阿彌の作とすれば、その中での劣つたものであると思ふ。

【一】

○善き光ぞと—善光寺の名を和らげて出した。
○田代—鎌倉比企谷、田代冠者信綱の屋敷跡で、こゝに普門寺俗稱田代寺があつた。延寶八年燒失して今はない。
○尊性—尊乘、尊淨などとも書く。閲歴は分らない。
○善光寺—信濃國長野にあり、本尊阿彌陀如來は釋迦在世の當時鑄造したもので、欽明天皇十三年に傳來したと傳ふ。「相模」參照。
○土師寺—河内國南河内郡にあり、一に道明寺ともいふ。江談抄に「菅家、本姓者土師氏也、河内國土師寺、是其先祖氏寺也」。「…」參照。
○あらたに—あらたかに。
○思ひたつ旅衣—衣の縁語「裁つ」を言つた。「着る」を昨日にいひかけた。
○白雲の—行方は知らぬを白雲にいひかけ、雲を海に見立てた。

【一】

後見、木?樹の作物を正面先に出す。次第の囃子にて、ワキ尊性、角帽子・着附小格子・緋水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「善き光ぞと名を聞くや。善き光ぞと名を聞くや。佛の御寺なるらん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「かやうに候者は。相摸の國田代と申す所に。尊性と申す者にて候。われ善光寺の如來に一七日參籠申して候へば。あらたに御靈夢を蒙りて候程に。これより河内の國土師寺へ參らばやと思ひ候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ 道行「捨ててはや。久しかりつる世の中を。久しかりつる世の中を。また思ひたつ旅衣。昨日の山を跡に見て猶行く方は白雲の。海も見えた

【一】

前段

舞臺は始め信濃國善光寺、ワキ尊性、ワキヅレ從僧を随へて登場。

尊性「善き光といふ寺の名を聞いても、ありがたい御寺であることが察せられることだ」

と次第に寺の徳をたゝへ、

尊性「私は相摸國田代といふ所に住む尊性といふ者です。さて私は善光寺の阿彌陀如來に一七日お籠りしてゐると、あらたかな夢のお告げを受けましたので、これから河内國の土師寺に參らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、

尊性「世を捨てて出家してから、もはや隨分の年月となるのであるが、また旅を思ひ立つて、昨日までゐた山を後にし、遥かなる彼方、白雲が海のやうに見える西の方に進み行き、夕日を隱す霧の絶え間

〇流れもこれや—流れは河の緣語。

る西の空。夕日がくれの霧間より。流れもこれや河內なる。土師の里にも着きにけり土師の里にも着きにけり

「海も見えたる西の空」とワキは正面に向きて三四足出で、またもとへ歸りて土師の里に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に土師寺に着きて候。暫く相待ち人來りて候はば。當寺の謂れ委しく尋ねうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて一同脇座へ行き順次並びて下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・緋水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて杖をつき、ツレ男、直面・襟赤・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸へ出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテツレ一聲「長月の。色も梢の秋を得て。照るや紅葉の。土師の里

二人とも正面の方に向き、

ツレ二句「なほ晴れ殘る音とてや

向合ひ

二人「松風ひとり。しぐるらん

〇長月—九月。
〇色も梢の—色も濃きを梢にいひかけた。
〇紅葉の土師の里—紅葉の美しい櫨の木を地名にいひかけた。
〇晴れ殘る音とてや—紅葉を染める時雨は降り止んで音もせず、たゞ松風だけが時雨のやうな音をたてゝゐるとの意。

—からかすかに見えた河內の土師の里に着いた」

といつてゐるうちに土師の里に着いた態で、舞臺は土師の里道明寺となる。寺僧はここで人の來るのを待つてゐる。

【二】

シテ白太夫の神、老翁の姿を裝うて、ツレ宮人を作うて登場。

老翁「時は九月、木々の梢は秋らしく色づいて、こゝ土師の里では名も土地の名に緣のある櫨の葉が奇麗に紅葉してゐることだ」

宮人「木葉を色づけた時雨はいつしか晴れあがつて、たゞ松風だけが雨のやうな音を立ててゐることです」

といひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、

シテ(サシ)「これに出でたる老人は、この里の名も土師寺の。佛神に仕へ申す者なり。シテ ツレ(向合ひ)「ありがたや利生はさまざま多けれども。わきて誓ひもかげ高き、天滿神の宮寺に、歩みを運ぶ御値遇。げに身を知れば。心なき。われ等が爲は。頼もしや

シテ ツレ(下歌)「いざや歩みを運ばんいざや歩みを運ばん。(上歌)「神さぶる。松は十かへり千代の秋。松は十かへり千代の秋。霜を重ねて下草の。露の身ながら長らへて神に仕へ奉る。宮路久しき瑞籬の。深き誓ひは、ありがたや深き誓ひはありがたや

「深き誓ひは」と謠ひながらシテとツレと入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる宮人に申すべき事の候

これだけの意を述べ、見物人に向つて、

老翁「こゝへ出ました老人は、土地の名も紅葉に緣のある土師寺の佛神にお仕へしてゐる者です」

○自己紹介をし、

老翁「あゝありがたいことだ。我々の戴く御利益はいづれの神佛にしても色々多いのであるが、殊に御利益の深い天滿天神の宮寺に、かうして常に參詣の出來るやうな御緣を得たことは、自分達罪業の深い身上を思ふと、一層頼もしく思はれることだ。さあ參詣しよう。神々しい松は千歲變らぬ緣をたゝえてゐる。その松にあやかつて、はかない身ながらも年久しく生きながらへて、神にお仕へ申しあげ、深い御利益を蒙つてゐるのは、ほんとにありがたいことだ」

○神德をたゝへながら、尊性の居る所へ近づいてくる。

【三】

尊性これを見て、

尊性「もうし、こゝな神主様」

○里の名も土師寺の――これも櫨を土師にいひかけたのである。
○利生――衆生を利益すること。
○天滿神の宮寺――道明寺の境内に菅原道眞を祀つた天滿宮がある。京都北野神社と同じく天暦元年に創建せられたもの。宮寺は神を祀つた寺。
○御値遇――値遇は人に逢ふこと。こゝでは神に參詣する緣の深い意。
○身を知れば――罪業深い賤しい身の上を思へば。
○神さぶる――神々しい感じの深い。
○松は十かへり――松は百年を十度繰り返して千年目に花が咲くといふ傳說に據つて言つた。「高砂」參照。なほこゝは菅公の愛木であるから松に出したのであらう。「老松」參照。
○千代の秋――十かへりを承けて千代といひ、秋より霜、下草、露とつゞけた。
○宮路久しき瑞籬の――崇神天皇の皇居を磯城瑞籬宮と申すので、宮路久しきを承けて瑞籬を出し、また瑞籬は神社の玉垣をもいふので、これを直に神の意に用ゐて、深き誓ひとつゞけた。
○誓ひ――神佛の誓約、利益。

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「これは善光寺の如來の御夢想により。遥々當寺に參りて候。寺中の人に逢ひ申し。御夢想の樣を語り申したく候

シテ「不思議なる事を承り候ものかな。まづ御夢想の樣をこの老人に御物語り候へ。某承つて。寺中の人々へ弘め申し候べし

ワキ「あら嬉しや候。さらば委しく申し候べし。寺中の人々に御弘め候へ

シテ「心得申し候

ワキ「これは相摸の國田代と申す所に。尊性と申す聖にて候が。われ念佛往生の志あるにより。この度信濃の國善光寺へ參り。一七日參籠申す處に。如來御廚子の御戸を開き。香の衣に香の袈裟かけ給ひたる老僧の。あらたなる御聲にて。

老翁「私をお呼びになるのですか、何の御用です」

尊性「私は善光寺の阿彌陀如來の夢のお告げを受けて、遠くのところをこの寺へ參詣したのです。寺の方にお逢ひして、このお告げの次第をお話したいと思ふのです」

老翁「これは不思議なお話です。まづそのお告げをこの老人にお話し下さい。私が伺つて寺中の人々にみな知らせませう」

尊性「それは嬉しいことです。では委しくお話しませう。寺々の方にお知らせ下さい」

老翁「承知しました」

尊性「私は相摸國田代といふ所に住む尊性といふ僧ですが、專心念佛して極樂往生したいといふ望みをもつてゐるので、今度信濃國の善光寺へ參り、一七日お籠りをしてゐますと、阿彌陀如來の御廚子の御戸をお開きになつて、香染の衣を着て香染の袈裟をかけた老僧がお現れになりあらたかな御聲で『そなたは念佛を行と

【三】

○御夢想―夢のお告げ。

○念佛往生の志―念佛を行として、阿彌陀佛を頼りにすることによつて、極樂に往生したいといふ志。

○御廚子―佛を安置する龕

○香の衣―香染の衣。香染は丁子の汁で染めた、薄紅に黄を帶びた色。僧侶の色衣である。

○五畿内―畿内五ケ國、山城、大和、河内、和泉、攝津をいふ。
○神明―こゝでは天照大神を指す。間語參照。
○七社―その名を詳かにし難い。
○現當二世―現在及び當來の二世。
○五部の大乘經―第一に華嚴經六十卷、第二に大集經五十卷、第三に般若經三十卷、第四に妙法蓮華經八卷、第五に大般若涅槃經四十卷、以上五種の經文をいふ。
○その軸―經卷の軸木。
○木槵樹―むくろじ。その種子は古來數珠に用ゐる。
○なんぼう―いかほど。甚だ。

汝念佛往生の志誠に懇なり。然らば五畿内河内の國土師寺は。天神の御在所なり。かの所に神明を始め奉り。七社の神々を勸請申されたり。又天神は一切衆生現當二世の爲に。五部の大乘經を書き供養して埋まれたり。その軸より木槵樹の木生ひ出でたり。その木の實をとり數珠とし。念佛百萬遍申さば。往生疑ひあるまじきと承つて夢覺めぬ。なんぼうありがたき御夢想候ぞ

かかるありがたき御事こそ候はね。やがて寺中の人々に觸れ申し候べし。まづ唯今仰せられ候木槵樹を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ

さらばやがて御供申し候べし

シテ右の方へ二三足出で、ワキも少し出て、

して極樂往生したいといふ望みが實に深い者だ。就ては、五畿内河内國の土師寺は、天滿天神のお出でになる所で、あそこに天照大神を始め奉り七社の神々を勸請せられたのである。そして天滿天神はまた一切衆生が現世で安穩に暮らし未來世で極樂往生するやうにとの思召で、五部の大乘經を書いて佛を供養し、こゝに埋められたのである。すると、その卷物の軸木から木槵樹の木が生え出た。その木の實を取つて數珠とし、百萬遍念佛すれば、必ず極樂往生するぞ』と仰しやつて、夢が覺めたのです。實にありがたいお告げです」

老翁「このやうなありがたい事はありません。早速寺中の人々に觸れ知らせませう。が、それよりも先に唯今お話の木槵樹をお見せしませう。こちらへお出でなさい」

鉢性「では、すぐお伴しませう」

といつて木槵樹の方へ行き、

シテ これに神明を始め奉り。七社の神々を齋ひ申され候。（左の方へ向き）又こなたなるは天神にて御座候。（作物へ向き）あれに見えたるこそ唯今御物語り候木槵樹にて候。よくよく御拜み候へ

ワキ ありがたや神も佛も同一體とは申せども。天神同位の御結縁今始めて承り候

ツレ うたての聖の仰せやな。今に始めぬ天神の。彌陀一體の御値遇。天神と申すにその御本地。救世觀音にてましまさずや

ワキ げにげにこれは理なり。昔在靈山名法華

シテ 今在西方名阿彌陀

ワキ 娑婆示現觀世音

シテ 三世利益同一體

ワキ そのほか神や

シテ 佛とは

○齋ひ―神を祀ること。
○天神同位の御結縁―神である天滿天神が佛と同様に衆生と因縁を結ばれることと開喜には「天神彌陀同意の御事」とある。
○うたての―情ない。
○彌陀一體の御値遇―阿彌陀如來と同一體である御縁
○御本地―化現垂跡せられた神の御本體である佛。
○救世觀音―觀世音菩薩のこと。法華經普門品に、觀世音の妙智力はよく世間の苦を救ふとあるので、救世といふ。
○昔在靈山名法華―南岳慧思禪師の偈文として傳へられてゐるもの。昔釋迦如來として靈鷲山に居られた時には法華經を說かれたが、今は西方極樂淨土にあつて阿彌陀如來といはれ、又この娑婆世界には觀世音として示現せられるが、過去現在未來の三世とも衆生を利益せられるのであるから、結局名は違つても實は同一體であるといふ意。

老翁「こゝに天照大神を始め奉り七社の神神をお祀りしてあるのです。それからこちらにあるのが天滿天神です。そしてあそこに見えるのが、今お話の木槵樹です。よくお拜みなさい」

僧「あゝありがたいことだ。神も佛も元來同じものであるとは、豫て伺つてゐるものの、天滿天神が佛と同樣に衆生と因緣をお結びになつたことは、今始めて伺ひました」

宮人「これはまた、お僧は情ないことを仰しやる。天滿天神が阿彌陀如來と御一體であるといふことは、今に始まつたことではありません。第一天滿天神と申しても、その御本地は觀世音菩薩ぢやありませんか」

僧「なるほどこれは御尤もです。經文にある通り、昔釋迦如來が靈鷲山に居られた時は法華經を說かれ……」

老翁「今西方淨土に於ては阿彌陀如來と申し……」

僧「この世へは觀世音菩薩として現れ給ひ……」

老翁「このやうに過去現在未來の三世に亘つて、衆生を利益し給ふ所を見れば、名

○水波の隔て—水の動いた姿が波で、實は同一物であるやうに、本地と垂跡化現と、神と佛と、名は違つても實は同じである。
○道明らかに—道明寺を和らげて用ゐた。
○和光—和光同塵の略。佛がその徳光を和らげて俗塵の世に交はり衆生を救濟すること。

【四】○後五の時代—大集月藏經。に、釋迦滅後の二千五百年間を五個の五百年に分つて佛教の盛衰を說いた。後五はその最後の五百年で佛法の最も衰へる時代であると
○至るまで—前後の意味がつゞかない。
○神も濁世に應じ—菅公の左遷されたことをいふ。
○西都—太宰府。
○二月下の五日—二月二十五日實は菅公薨去の日で、都を出發せられたのは昌泰四年二月朔日である。

地上歌 唯これ水波の隔てにて。神佛一如なる寺の名の。道明らかに曇らぬ神の宮寺ぞ尊き。ありがたしありがたし。げに神力も佛說も。同じ和光の影に來て拜むぞ尊かりける拜むぞ尊かりける

シテ大小前にて下に居る、ツレは笛座前に坐し、ツキももとの座に坐す。

【四】

地クリ それ佛の昔神の今。後五の時代に至るまで。神も濁世に應じ給ひて暫く西都に移り給ふ

シテサシ 二月下の五日にして。都を出でさせ給ひつつ

地 この土師の里に旅宿あつて。様々の御神物をとどめ。末代値遇の御結緣今に絶ゆる事なし

シテ かくてもとまらぬ。道のべの

地 草葉の露も。しをるるばかり

（居グセ）

は違つても全く同一體であるのでありまして、すべて神といひ佛といつても、それは水と波との相異のやうなものに過ぎないのです。その神と佛とが全く御一體で、寺の名まで道明らかといふ、曇りのないこの宮寺はほんとに尊いことです。ほんとにありがたいことです。神力も佛德もうち添うて御利益の深いこの神を參詣するのは、實に尊いことです。

【四】

老翁 さて、佛として住み給うた昔も、神として垂跡せられた今も、御一體であることに變りはないが、後五百年佛法衰微の世の中では、神もこの濁世に順應して、暫く太宰府にお移りになつたのです。それは二月二十五日のことで、都をお出立になつて、その途中この土師の里にお泊まりになり、様々の御神物を殘して、末代の衆生と因緣をお結びになり、爾來今に至るまで御利益の絶えることはないのです。しかしいつまでも途中に御滯在になるわけにはいかず、旅の道すがら都の名殘を惜しんでお歎きになり——

『君が住む宿の梢をゆくゆくも、隱るるまでにかへり見ぞする』

○君が住む宿の梢をゆくゆくも隱るるまでにかへり見ぞする―菅公左遷の途中から北の方へ贈られた歌で、末句、拾遺集には「歸り見し」はや―大鏡には―歸り見しかな」とある。
○名に負ふ―こゝでは文字通りにといふ意。
○天ざかる―鄙の枕詞。
○都府樓の瓦―菅公配所での詩、「都府樓纔看二瓦色一、觀音寺唯聽二鐘聲一」（菅家後集）の詞を借りた、都府樓は太宰府の樓門、觀音寺は太宰府の二町ばかり東にあつた。
○家を離れて―同じく配所での詩、「離レ家三四月、落涙百千行、萬事皆如レ夢、時々仰二彼蒼一」（菅家後集）を引いた。
○よりより彼蒼を則す―何かの物事につけ、運を天に任すとの意。彼蒼は蒼天の意、
○昨日は北闕に―一條天皇正暦五年勅使を筑紫に遣し正一位太政大臣を贈られた時、天から聞えて來たといふ詩「昨爲二北闕被レ悲士一、今作二西都雪レ恥尸一、生恨死歡其我奈、今須レ望足是天…

地ツセ、君が住む。宿の梢をゆくゆくも。隱るるまでに。かへり見ぞするとの御詠めさこそと知るぞかたじけなき。さてもいつしかに。ならはせ給はぬ旅の空。名に負ふ心筑紫とて。天ざかる鄙の國に。住まはせ給ひしかば。あたりは。都府樓の瓦。觀音寺の鐘の聲朝暮に響く折々は。都の春秋を思し召しいでぬ時はなし

シテ 家を離れて三四月

地 落つる涙は百千行。萬事は皆夢の如し。より彼蒼を則すといふ。その御心の至りにや。昨日は北闕に。悲しみを被る士たり。今日は。西都に。恥を清むる屍たりと。御神感あらたに。生きての恨み死しての悦び。あまねしや天満つ陽感ぞめでたかりける

【五】

地 げにありがたや草も木も。げにありがた

（思ひきつて西の方へと足を進めて行きながらも、あなたの事が忍ばれて、あの家の梢が隱れて見えなくなるまで、ふり返りふり返りしてゐるのです）とお詠みになつた御心中、お察しするも勿體ないことです。さていつの間にか次第に、お馴れにならない旅も進んで、文字通り心盡しな、筑紫といふ、遠い田舎の國にお住みになることとなつたので、ここはあたりに見えるものといへば太宰府樓門の瓦、聞えるものといへば觀音寺の鐘の聲ばかりで、その鐘の聲が朝夕に響く折には、都の春秋をお思ひ出しにならないことがなかつたのです。しかし、「都の家を離れて三月と過ぎ四月となるにつけて、悲しみの涙がさめざめとふり落ちるのである。思へばすべてが夢のやうで、何彼の事につけてただ運を天に任せるばかりである」―といふ詩をお詠みになつた、さうしたお心の結果でありませう、―以前は集中で悲しい目に遭つたが、今はこの太宰府で死んだ後この恥を雪ぐことが出來た―といふあらたかな御神詠を遺にして、生前深くお恨みになつたものが、死後恨みを晴らすお悦びを得て、天日の普く照り渡るやうな御心となられたのは、ほんとにめでたいことです。

【五】

地 實にありがたいことです。草木國土

皇甫」(聖廟記)を引いた。北闕は禁中。

○陽感—神感に同じ。天を承けて陽の字を用ゐた。

【五】

○皆成佛の木の實まで—四句偈文「草木國土悉皆成佛」を借りて、佛果を木の實と和らげ、木槵樹の果を玉に連ねるといふ意に續けた。

○枯れたる木にだにも—觀世音菩薩の誓願に枯木にも花を咲かせるといふ。梁塵秘抄に「よろづの佛の願よりも、千手の誓ひぞありがたき、枯れたる草木も忽ちに、花咲き實なると說き給ふ」。〔田村〕參照。

○面前—まのあたり。

○念ひの珠—數珠の一名念珠を分けて用ゐた。理を念ひ、念ひの珠、珠の緒、おのづからと順次にいひかけて行つたのである。

○白太夫—北野及び當社の攝社。生前伊勢の神主で渡會春彥といつた。菅公在世の時親交があつたので、攝社に祀られたのであるといふ。誰とか知らん、といひかけたのである。

○翁草—翁を菊の異名翁草にいひかけた。

や草も木も、皆成佛の木の實まで、玉をつらぬる光かな

シテ「枯れたる木にだにも。誓ひの花は咲くぞかし。ましてや、面前木槵樹。花咲き實なる御覽ぜよ

地「げにや花咲き實なるなる。梢の色もあらたにて

シテ「法を稱ふる理を

地「念ひの珠の

シテ「おのづから

地「あの梢の木の實こそ(と居立ちて作物を見)。この數珠の御法なれ(と數珠をさし)。必ず授け申さんとて(立ちて少し出かけ)。歸ると見れば立ち止まりて。われは天神の御使(とワキへ向き)。名をば誰とか白太夫の神と申す翁草の。霜曇りしてげりや霜曇り

悉皆成佛といはれてゐますが、その木の實までが玉として連らねられ、數珠となつて光を放つことです」

老翁「觀世音の御誓願には、枯れた木でさへ花が咲くのです。ましてまのあたりに拜する木槵樹が花咲き實のなる樣をよく御覽なさい」

合唱「いかにも、花が咲き實のなるこの木は、梢の色までが新しくて……」

老翁「佛法の理を考へながらつまぐる念珠とする、あの梢の木の實が、數珠によつて百八煩惱を斷除する御法なのです。きつとこれをお授けしませう」

といつて、歸りかけたが、また立ちどまつて、

老翁「自分は天滿天神の御使で、名は誰とも知らないであらうが、白太夫といふ老人である」

といつて、霜の深い朝空の曇るやうに、うすぼんやりとなつて消えてしまつ

○霜曇りして―菊の縁で霜を出した。霜曇りとは霜の深い朝、雲が曇つて霞み渡つてゐるのをいふ。

【四】

一に失せにけり

と右へ廻りて常座へ行き、來序の囃子にて中入。

た。

前ジテ老翁退場。

【五】　末社來序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。河内の國土師の寺七社勸請の靈神に仕へ申す末社の神にて候。抑もこの寺は忝くも天照大神を始め奉り。わが朝に隱れなき靈神七社まで勸請あり。誠にあらたなる宮寺にて候。又木槵樹と申すは。菅相丞この所に御逗留の御時。五部の大乘經を遊ばし。この所に埋め給ふ。その上に生ひ出でたる木なればとて。木槵樹と申し候。さて唯今相摸の國田代寺の住僧尊性と申す人。善光寺の如來に參り。一七日參籠往生の祈願をし給ふに。ある夜の御靈夢に。汝誠の志あるならば。河内の國土師の寺に行き。木槵樹の實をとり百八の數珠となし。念佛百萬遍申すならば。決定往生疑ひなしとの御靈夢に任せ。この寺へ參詣申され候を。諸神歡び給ひ。中にも白太夫の神假に現れ。御詞をかはし給ふが。重ねて舞樂を奏し慰め申さうずるとの御事なり。その間に我等がやうなる者までも。一曲を仕り慰め申せとの御事により。これまで出でて候。さてかの尊性は何方に居らるるか知らぬ。(ワキを見て)いや是に居らるる。さてもさても殊勝な事かな。急いで一曲奏で申さう。(と囃子座前へ出で、

狂言「めでたかりける時とかや。三段[illegible]ら〳〵めでたやめでたやな。かゝる[illegible]でたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も現れ出て。謠ひ奏でて。是までなりとて末社の神は。〳〵。本の社に歸りけり。

と舞ひて幕に入る。

【六】　出端の囃子にて、後ヅレ天女、面増・鬘・鬘帶・[illegible]・天冠・[illegible]・着附摺箔・紫長絹・緋大口・鬘帶・扇の裝束にて舞臺一の

【六】

後段

後ジテ[illegible]白太夫神[illegible]登場。

○久方の—天の枕詞。
○天の岩戸の神遊び—天照大神が天の岩戸に隠れ給うた時、天鈿女命等が舞を舞はれた事を今思ひ出しても面白いとの意。この後ツレ天女は天照大神に擬して奏つたのであらう。
○琴—七絃の樂器。箏は十三絃。
○和琴—東琴ともいふ。六絃。
○笛竹—笛に同じ。竹の節をいひかけた。
○缶—酒水などを入れた腹の太く口の小い瓦器。これを拍子を打つ樂器に用ゐた。

【七】
○常の燈火—常夜燈。
○韓神—神樂歌の曲名。その歌詞は「本、三島木綿、肩に取りかけ、われ韓神の、からをぎせんや、からをぎ、からをぎせんや」末「やひらでを、手に取りもちて、われ韓神の、からをぎせんや」。
○催馬樂—[illegible]民間の俗謠[illegible]
○缶筎拍子—缶を二つに割り[illegible]拍子をとる樂器。
○役とは知らず[illegible]

松に出づ。

と舞臺に入り、

地「久方の。天の岩戸の神遊び。今思ひ出も。面白や

〔天女舞〕

を舞ひ、續いて次の謠に合せて舞ふ。

地「舞樂の役々とりどりに。舞樂の役々とりどりに。琵琶琴和琴。笛竹の。夜は更け行けども缶の役者。などや遲きぞ(と橋懸を見込み)。白太夫。急いで出でよと。待ち給ふ

と大小前に立つ。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ白太夫神、面茗荷惡尉・白垂・烏甲・金緞鉢卷・襟淺黃・着附無色段厚板・白地狩衣・半切・腰帶・扇・筎の裝束にて橋懸一の松へ出で、

後ジテ「月もかかやく宮寺の。常の燈火。明々たり

ツレ(シテの方へ向き)「いかに白太夫の神。七社の御前に韓神催馬樂。謠ふや缶筎拍子の。役とは知ら

天女「天の岩戸隱れの時、神々の舞ひ遊んだ樣は、今思ひ出しても面白いことであるこ

といつて、昔の神樂を追憶する心で、

〔天女舞〕

を舞ひ、

天女「舞樂の役人達は、それぞれ琵琶・琴・和琴・笛などを奏して、夜も次第に更けて行くのに、缶の役者はどうして遲いのだ。白太夫急いで出るように」

とお待ちになる。

【七】

後ジテ白太夫神登場。

白太夫「この宮寺には月まで輝いて、常夜燈があかあかとしてゐることだ」

天女「これ白太夫の神、そなたは七社の御前で韓神や催馬樂を謠ふ時の缶筎拍子の役であること知らないのか、これ白太夫」

や、白太夫と同じ音を重ねた。

○名にだに白太夫—名にさへ白といふ字のついてゐるやうな白髪の老人といふ意。

○庭燎—神樂歌の名。これをまことの庭火にとりなし火の明きを玉垣の色の朱にいひかけた。

○小忌—神事に着る齋服。舞人の衣にも用ゐる。

○打つも寄るも—ともに波の縁語。

○雪の白太夫—波の雪。雪の白といひつゞけた。

ずや白太夫

シテ「仰せは重く候へども。既に名にだに白太夫が。星霜積る老が身の。役をばゆるし給ふべし

ツレ「いやとよその役定まりたり。急いで役をなすべきなり

シテ「さては辭すとも叶ふまじ。」さてその役は

ツレ「韓神催馬樂

シテ「庭燎の影や

ツレ「朱の玉垣

地「かかやけるその中に（シテ舞臺に入り、ツレ笛座前に床几にかゝる。）かかやけるその中に。白太夫が小忌の袖より。とるや笏拍子とうとうと（笏を手に持ちて）打つも寄るも老の波の（と右へ廻り）雪の白太夫が笛の、笏拍子は、面白や

〔樂〕

白太夫「仰せを大切には心得て居りますが名前さへ白太夫と申します通り、白髪の年寄つた老人でございますから、どうかお役をお免し下さい」

天女「いや／＼、外の役は定まつたのだ。急いでその役をしなければいけない」

白太夫「では、お斷り致してもお免し下さいますまい。してその役は……」

天女「韓神や催馬樂や庭燎や……」

白太夫「丁度庭火も……」

天女「火のやうに玉垣も朱色で……」

すべてがあか／＼と輝いてゐる中で、白太夫は舞衣の袖をとつて、笏拍子をとう／＼と打つ。かうして年を寄つた雪のやうな白髪の白太夫がうつ笛の笏拍子はほんとに面白いものである。

〔樂〕

〔考異〕

諸流（觀剛喜）

【二】ツレ「句「なほ晴れ殘る音とてや。二人「松風ひとりしぐるらん（剛喜忌垣に殘る下紅葉。散るこそ秋の名殘なれ）シテサシ「これに出でたる……佛神に仕へ申す者なり（剛喜ナシ）……わきて誓ひも影高き（剛喜超世の悲願とて）。天滿神の宮寺に歩みを運ぶ御値遇……われ等が爲は賴もしや（剛喜二世安樂の御誓ひ。げにありがたき悲願かな）。下歌「いざや歩みを……運ばん（剛喜庭を淸めんいざいざ庭を淸めん）【六】地「久方の天の岩戶の……急いで出でよと待ち給ふ（剛喜樂に引かれて古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ）【七】後ジテ「月もかかやく……明々たり（剛喜ナシ）

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「かやうに候者は……善光寺の如來に（光參り）……【三】シテ「不思議なる……御夢想の樣をこの老人に（光ナシ）……ワキ「あら嬉しや……御弘め（光御披露）候へ。ワキ「これは相撲の國……ありがたき御夢想候ぞ（光御靈夢にて候）。シテ「かかる……觸れ申し候べし（光さうするにて候）まづ唯今仰せられ候（光かの）木槵樹を……ワキ「さらばやがて（光ナシ）御供申し候べし。シテ「（光御覽候へ）これ（光此所）に神明を始め……いはひ（光勸請）申され（光て）候……（光いつれも）よくよく御拜み候へ【四】地「落つる淚は……被むる土（光かうふつし）たり……

附　記

○百八煩惱―百八結業ともいふ。心神を惱亂する種々の煩惱で、一說には六根が六塵の境に對する時、好惡平の三種の不同によつて十八煩惱を生じ、また苦樂捨によつて同じく十八煩惱を生じ、倂せて三十六煩惱となる。そしてこれを過去現在未來に配する時に總て百八の煩惱となるといひ、一說には三界の見惑八十八使と修惑十使と、これに無慚・無愧・昏沈・惡作・惱・嫉・悼悔・睡眠・忿・覆の十纒を倂せて百八とす。そして數珠の數を百八とすることは、木槵子經に「若欲レ滅二煩惱障報障一者、當レ貫二木槵子一百八一、以常自隨……若復能滿二百萬遍一者、當レ得レ斷二除百八結業一」

當麻（たえま） 觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四・五番目　複式夢幻能

【人物】**ワキ**　念佛僧、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　化尼、**前ツレ**　化女、**狂言**　所の者、**後シテ**　中將姫

【所】大和國　當麻寺

【時】二月十五日

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記文明十五年三月十二日の條に演能のことが出てゐる。

【梗概】ある念佛僧が熊野參詣の歸途、大和の當麻寺に參ると、一人の老尼が若い女性を連れて來て、僧に尋ねられるがまゝに、當麻寺、染殿の井、櫻のことなどを敎へた上、昔中將姫が日夜淨土經を讀誦して生身の彌陀を拜みたいと祈念すると、化尼・化女が現れ出て曼荼羅を織つた事を物語り、自分がその化尼・化女であるといつて上天する。念佛の僧がなほも奇特を待つてゐると、やがて中將姫の靈が現れて、

ありがたいことを述べ、舞を舞ひ、後夜の勤行をする、と思ふうちに、僧の夢はさめた。

【出典】　この當麻の曼荼羅のことは、元亨釋書、古今著聞集、當麻曼荼羅緣起等に見えて居るが、いづれも大同小異で、本曲がそのいづれに據つたかは分らないが、元亨釋書卷二十八に記してゐるものを擧げると、

和州禪林寺者、俗號二當麻寺一、用明帝第四王子麻呂王、因二見豐聰王子訓一所レ創也、……其後天平寶字中、僕射藤原豐成有レ女、性無二世染一(便蒙註、俗曰二中將姬一、法名法如)、不レ納二聘禮一、專志二安養一、七年六月入レ寺薙レ髮、誓曰、我不レ見二彌陀眞身一、不レ出二寺門一、其志確乎不レ拔、數日一比丘尼至、不レ知二從來一、儀相麗偉、語曰、我令下汝見二淨土一觀中彌陀上、須レ集二百駄蓮莖一、於レ是乎祈二尼姿于朝一、詔使レ送二蓮莖一、二日而滿レ數、化尼自折二莖取レ絲、穿二新井一濯レ之、五色燦然、又數日一女來、容貌端麗、問二化尼一曰、絲成否、對曰成、化女得レ絲、於二殿之西北角一織レ之、機杼軋々、始二于初更一終二于四更一、其幅一丈五尺、以二藕莖一把一浸二油一升一爲レ燭、化女捧二授化尼一、化尼與二新尼一、淨土衆相嚴麗備足、新尼大悅、以二無レ節竹一爲レ軸、蓋長竹兩節之間耳、又可レ怪焉、化女忽然不レ見、化尼作レ偈讚レ圖曰、往昔迦葉說法所、佛事新起又有レ故、感二君懇志一我來レ此、一至二是場一永離レ苦、新尼問曰、善哉吾知識從レ何來耶、又向婦人爲レ誰、對曰、我豈異人乎、西方教主也、向女觀音大士也、言已凌レ空而西去、新尼自レ是精修益勤、寶龜六年三月十四日、安坐念佛逝。

【概評】　佛寺の緣起を主材とした、本曲と趣の相似たものに「誓願寺」がある。兩者とも女性をシテとし、念佛を讚嘆したものであるが、ワキは「誓願寺」の方は一遍上人といふ高僧であるのに對し、これには普通の旅僧を持ち出してゐる。從つて前者は劇能に近く、後者は普通の夢幻能として脚色せられさうであるが、前者の前ジテは里女であるのに、これは化尼で、後ジテとは別人格として居り、舞も前者は三番目らしい序舞で、これは早舞として五番目物に取扱つてゐるのである。兩者とも世阿彌の作で、相似た題材をこのやうに使ひわけてゐるところに、彼の手腕が認められるのである。兩者の優劣を論ずれば、「誓願寺」は文辭が強くて演出が優雅であり、「當麻」は文辭が詳かで演出が勁健である。それぞれに異つた效果を擧げてゐて、俄かに一二を定め難いが、文段の樣式推移を圓滑にして、演出の樣式を調和した本曲の方が、一步右に出たものといふべきであらうか。なほ中將姬の事を描いたものには、本曲の外に「雲雀山」がある。

【一】
○教へうれしき法の門―ありがたい教へである佛法の門戸。新千載集、後伏見院の御歌に「教へおくその品品の法の門開くる道は一つなりけり」
○開くる道―佛門に入ることの出來る道。佛法修行の儀。
○念佛の行者―念佛宗の修行者。
○三熊野―紀伊國の熊野三社（本宮、新宮、那智）をいふ。
○當麻の御寺―大和國北葛城郡當麻村にあり、もと用明天皇の皇子麻呂子王が創建せられたもので、初め二上山の麓に建てられて萬法藏院といひ、後白鳳二年今の地丸子山の麓役行者の宅跡といふ所に移して禪林寺と名づけられた。當麻は當岐麻でその音便タイマが正しく、タエマと讀むのは訛音である。
○紀の路の關―歸り來といひかけた。和泉國との境山口村にあつた白鳥の關をいふ。
○こや―これや。
○岩田川―紀伊國西牟婁郡岩田村の東部を流れる。
○夜晝わかぬ―波の寄るを

【一】
次第の囃子にて、ワキ僧、角帽子・着附小格子・絓水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・絓水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第 教へうれしき法の門。教へうれしき法の門開くる、道に出でうよ

地取にワキは正面に向き、

ワキ これは念佛の行者にて候、われこの度三熊野に參り。下向道に赴きて候 又これより大和路にかかり。當麻の御寺に參らばやと思ひ候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ 道行 程もなく。歸り紀の路の關越えて。歸り紀の路の關越えて。こや三熊野の岩田川。波も散るなり朝日影夜晝わかぬ心地して。雲もそなたに遠かりし。二上山の麓なる。當麻の寺に着きにけり當麻の寺に着きにけり

ワキ「雲もそなたに」と正面に向きて三四足出で、またもとへ歸りワキヅレと向合ひて、當麻に着きたる心。道行濟みて

【一】 前段

舞臺は初め紀伊國熊野で、ワキ念佛僧、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

僧「ありがたい佛の教へを受けて、悟りを開くやうに、修行の旅に出かけよう」

と次第を謠つて出家の心持を述べ、

僧「私は念佛宗の修行者ですが、今度熊野三社に參詣して歸るところです。そしてこれから大和路へ入つて、當麻のお寺に參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「熊野から歸り道について、間もなく紀の關を越え、ここ岩田川の川邊に來ると、川波が水に映る朝日影を散らしてゐる。それから、なほ夜晝の區別もないやうに旅をつゞけて行くうちに、遙か遠く雲の彼方に思はれた、二上山の麓の當麻寺に着いた」

と旅の様を述べてゐるうちに、[illegible]、舞臺は大和國當麻寺となる。

夜にいひかけ、朝夕夜と竝べた。

○二上山―大和國北葛城郡にあり、雄嶽雌嶽の二峯から成る。丸子山はこの下にある。

【二】

○一念彌陀佛―慧心僧都の佛心法要に往生本緣經にあるといふ。

○八萬諸聖教―佛心法要に「經云、阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖教、皆是阿彌陀佛」とあるが、その何經に出てゐるかは分らない。

○釋迦は遣り彌陀は導く一筋に心ゆるすな南無阿彌陀佛―作者未詳。この歌「柏崎」にも見ゆ。

○稱ふれば佛もわれもなかりけり―下句は「南無阿彌陀佛の聲ばかりして」一遍上人の歌と傳ふ。

ワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや當麻の寺に着きて候。心靜かに參詣申さうずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ化尼、面姥・鬘・花帽子・襟白・着附摺箔・無色唐織着流・數珠の裝束にて杖をつき、ツレ化女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・色入唐織着流・數珠の裝束にてツレを先に立てて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて正面の方に向き、

シテサシ「一念彌陀佛卽滅無量罪とも說かれたり

ツレ「八萬諸聖教皆是阿彌陀とありげに候

シテ「釋迦は遣り

ツレ「彌陀は導く一筋に

シテ（向合ひ）ツレ「心ゆるすな南無阿彌陀佛と（といひて正面の方に向き）

シテ一聲「稱ふれば、佛もわれもなかりけり

ツレ「南無阿彌陀佛の。聲ばかり

【三】

シテ化尼、ツレ化女、話をしながら當麻寺に參る態で登場。

化尼「念佛は誠にありがたいもので、『一度念佛すれば、直に限りのないほど大きな罪障も消滅する』とも、お說きになつてゐる」

化女「さうでございます『あらゆる佛の御敎へも、皆阿彌陀如來を念ずることに歸着する』とも、お說きになつてゐるやうでございます」

化尼「釋迦如來は衆生に道を敎へて、極樂へお送り下さるし……」

化女「阿彌陀如來は念佛の聲を聞いて、衆生を極樂へ導き迎へて下さいますし……」

二人「ほんとにありがたいことだ。たゞ一心に油斷なく、南無阿彌陀佛と稱へませう」

化尼「さうすれば、佛と我との差別もなく、たゞ一體不二となるのだ」

化女「たゞ南無阿彌陀佛とばかり稱へて居れば……」

○すずしき道—極樂淨土。
○濁りにしまぬ蓮の—古今集、僧正遍昭の歌「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」に據つた。
○五色に—元亨釋書、靈林寺の項に「化尼自折‐草取‐絲、穿‐新井‐瀝‐之、五色燦然」「釋書參照」
○超世の悲願—普通の三世諸佛の誓願に超越した阿彌陀佛の誓願。無量壽經に「我建‐超世願‐、必至‐無上道‐」同經に「超‐世流布諸佛本願‐、是名‐超世‐」
○五つの雲—女の五障を月を蔽ふ雲に喩へた。山家集に「けふや君おほふ五つの雲晴れて心の月をみがき出づらん」
○雨夜の月の影をだに—玉葉集讀人知らずの歌「彌陀頼む人は雨夜の月なれや雲晴れねども西へこそ行け」に據つた。
○頼めば近き道—唯心の淨土己身の彌陀（「稲荷」參照）たとへて、極樂は遠い所にあるのではない。
○末の法萬年々經るまでに—釋尊滅後の佛法盛衰の狀態を正法五百年、像法千年、末法萬年の三期に分ち、そ

シテ「すずしき道は
シテ ツレ（向合ひ）「頼もしや
といひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて向合ひ、
シテ ツレ 次第「濁りにしまぬ蓮の絲。濁りにしまぬ蓮の絲の。五色にいかで染みぬらん
地取に正面に向き、
シテ サシ「ありがたや諸佛の誓ひ様々なれども。わきて超世の悲願とて。迷ひの中にも殊になほ。
シテ ツレ（向合ひ）「五つの雲は晴れやらぬ。雨夜の月の影をだに。知らぬ心の行方をや西へとばかり頼むらん。げにや頼めば。近き道を。なに遙々と。思ふらん
シテ ツレ 下歌「末の世に迷ふわれ等が爲なれや。上歌「説き殘す。御法はこれぞ一聲の。御法はこれぞ一聲の。彌陀の教へを頼まずは。末の法。萬年々經

化尼「あの涼しい極樂へ行けるとは、ほんとに頼もしいことだ」
さいひながら、當麻寺に着いた態で、
二人「蓮の葉は泥の中にあつても、濁りに染まないものであるのに、その蓮の絲が佛の御爲には、よくもまあ、どうして五色に染まつたことであらう」
化尼「あゝありがたいことだ。佛様の御功德は色々あるが、殊に阿彌陀如來は三世の諸佛に勝れた慈悲をお垂れ下さるのだ。そして、誰も彼も迷つてゐる中にも、殊に女性には五つの大きな罪障があつて、迷ひの晴れない、雨夜で月影を知らないやうな身であるのに、それでもなほ、この心の迷つたものをそのまま、西方淨土へお導き下さるのだ。ほんとに頼もしいことだ。さうだ、たゞ南無阿彌陀佛と稱へさへすれば、極樂はすぐそばにあるものを、どうして遠い所だと思つてゐるのであらう」
二人「念佛こそは、われ／＼末世澆季に生まれて迷つてゐる者の爲に、お與へ下さつた御教へなのだ。釋迦如來が最後に説いて世にお遺しになつた御經は、實にこの阿彌陀經て、たゞ南無阿彌陀佛とさへ

の末法の世には他の諸教はすべて廢れてたゞ阿彌陀經だけが殘るといふ。慈恩大師の語に「末法萬年餘經悉滅、彌陀一教利物偏增」
○松の戸の―待つといひかけて、明くればの序に用ゐた。

【三】
○染殿の井―當麻寺から四町ばかり離れた石光寺の門前にある。「玉葉集」に「濁りにはしまぬ蓮の絲なれどなほ色々に染殿の池」
○染寺―石光寺。

るまでに餘經の法はよもあらじ。たまたまこの生に浮かまずは。又いつの世を松の戸の。明くれば出でて暮るるまで法の場に交るなり御法の、場に交るなり

（明くれば出でて、と謠ひながら、シテとツレ入替り、シテは眞中にツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、）

【三】
ワキ「いかにこれなる方々に尋ね申すべき事の候
シテ「何事にて候ぞ
ワキ（正面に向きて）「これは當麻の御寺にて候か
シテ「さん候當麻の御寺とも申し。又當麻寺とも申し候
ツレ（ワキに向ひて）「又これなる池は蓮の絲を。濯ぎて清めしその故に。染殿の井とも申すとかや
シテ「あれは當麻寺
ツレ「これは染寺

稱へればよいこの御教へを賴みにしなければ、佛法の衰へた今日では、千年萬年を經るうちに、外の御經は皆消えてしまふことであらう。われ／＼はたま／＼この現世を人間に生まれて來たのだから、今念佛の道に入らなければ、もういつの世になつても、極樂に浮かび出る時は來ないのだ。だから、夜が明ければすぐに家を出て、日の暮れるまでこのお寺で人々と一所に念佛をすることだ」

【三】
（念佛僧、この女性の參詣するのを見て、）
僧「もうし、こゝの方にお尋ねします」
化尼「何の御用でございます」
僧「これは當麻のお寺ですか」
化尼「さうです、當麻のお寺とも申し、又當麻寺とも申します」
化女「又こゝの池は、蓮の絲を濯いで染めた所なので、染殿の井とも申すといふことでございます」
化尼「あれが當麻寺―
化女「これが染寺で……

○色々樣々—井を色にいひかけた。
○白絲の—いさ知らずといひかけた。
○寶樹—極樂の七重寶樹に比していつた。
○櫻木—石光寺の前にあり役行者の植ゑたものであると元亨釋書に見ゆ。
○なかなかなるべし—尤もなことである。
○草木國土成佛—四句偈文「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」に據つた。
○法の潤ひ—佛法の惠みを雨露が草木を潤すに譬へた。

シテ詞 又この池は染殿の
色々樣々所々の。法の見佛聞法ありと
も。それをもいさや白絲の。唯一筋ぞ
一心不亂に南無阿彌陀佛
ワキ げにありがたき人の言葉。即ちこれこそ彌
陀一教なれ。さて又これなる花櫻。常の色には
變りつつ。これも故ある寶樹と見えたり
ツレ げによく御覽じ分けられたり。あれこそ蓮
の絲を染めて
シテ 掛けて乾されし櫻木の。花も心のある故に。
蓮の色に咲くともいへり
ワキ なかなかなるべしもとよりも。草木國土成
佛の。色香に染める花心の
シテ 法の潤ひ種添へて
ワキ 濁りにしまぬ蓮の絲を

化尼 又この池が染殿で、色々名所がございますが、そして佛のありがたい御教へも色々ございませうが、私どもは委しいことは存じません。たゞ一隨に、一心不亂に南無阿彌陀佛と稱へるばかりでございます。

僧 いや實にありがたいお話です。これこそ隨一の彌陀の御教へです。それから、ここの花櫻は、世間の普通のものとは樣子が變つてゐますが、定めてこれも由緒のある名樹でせう」

化女 ほんとによくお氣がつきました。あれが蓮の絲を染めて……

化尼 かけて乾された櫻の木でございます。それで、花にも心があつて、蓮の色に咲くのだとも申します。

僧 いかにもさもあることです。草木國土も皆成佛するのですから、この花にも佛心があつて、そのやうな色に咲くのでせう

化尼 草木までも佛法の惠みを受けまして……

僧 それで、蓮の葉は濁りに染まないものですが、その蓮の絲を

○緋櫻—乾すといひかけた。
○絲櫻—枝垂櫻。蓮の絲といひかけた。
○花の錦の經緯に—錦の織り絲に、花をたて絲とし、雲をよこ絲とする意、
○雲の絕え間—當麻を含ませて綴つた。
○晴れ曇る—晴れたり曇つたりして見える。落花と花の紅色とは晴れの感じ、綠は曇りの感じ。
○雪も綠も紅も—雪は落花の樣、綠は葉櫻の色、紅は花盛りの色、
○唯一聲の—表には秋の音をいつて、裏に念佛の聲を含めた。
○誘はんや—誘ふのが。
○西吹く—西方極樂淨土へ吹き送る。
【四】○曼荼羅—Mandara 圓輪具足、道場等と譯す。圓滿に萬德を具備したものの意で、佛世界の種々相を描いたもの。この曼荼羅は淨土曼荼羅で、極樂淨土の樣を描いたもの。「安宅」參照。
○廢帝天皇—淡路廢帝とも申す。天平寶字八年廢せられて淡路公にせられ給うた淳仁天皇、
○横佩の右大臣—帝王編年記に「天平神護元年十一月

シテ『濯ぎて淸めし人の心の
ワキ「迷ひを乾すは
シテ「緋櫻の
地上歌「色はへて。掛けし蓮の絲櫻。掛けし蓮の絲櫻。花の錦の經緯に。雲の絕え間に晴れ曇る雪も綠も紅も（シテ脇正面を見渡し）。唯一聲の誘はんや西吹く秋の（幕の方を見）、風ならん西吹く秋の風ならん
「掛けし蓮の絲櫻」にツレ地謠座前へ行きて下に居り、ワキも下に居る。
【四】
ワキ「猶々當麻の曼荼羅の謂れ委しく御物語り候へ
と聞きて、シテ眞中へ行き床几にかゝる、
地ッョ「抑もこの當麻の曼荼羅と申すは。人皇四十七代の帝。廢帝天皇の御宇かとよ。横佩の右大臣豐成と申しし人

化尼「濯いで淸めて、人の迷ひを開く爲に、この美しい櫻にかけて……。蓮の絲を櫻にかけると申せば、この櫻の花盛りの樣は、花と雲とを經緯の絲にして織つた錦のやうで、その櫻には、晴れた空のやうに明るい花盛りの時も、曇つた空のやうに綠の葉の小暗い時も、また雪の降るやうに花の散る時もありますが、結局いづれも西へ吹く秋風に誘はれて行くやうにわれ〳〵もその時折に色々迷ふことがあつても、たゞ念佛稱名して居れば、西方淨土に導かれることでございます」
【四】
僧「ただに當麻の曼荼羅の謂れを委しくお話して下さい」
化尼「一體この當麻の曼荼羅と申しますのは、人皇四十七代の帝淳仁天皇の御代のことださうでございますが、横佩の右大臣豐成といふ人があつて、その御息女中將姬がこの山にお籠りになつて、毎日

二十七日、右大臣從一位豐原朝臣豐成薨、春秋六十二、淡海公孫武智麿一男、後人號二難波大臣一、又號二横佩大臣一、此大臣女號二中將姫一、織二當麻曼荼羅一時之願主也」

○中將姫―當麻寺の事を記した元亨釋書、古今著聞集、當麻曼荼羅縁起には豐成女とだけあつて、この名は見えない。帝王編年記、尊卑分脈等に中將姫の名が見えてゐる。

○稱讃淨土經―唐の玄奘三藏が譯したもので、羅什三藏の譯した阿彌陀經と同經異譯。

○生身の彌陀―畫像や木像でない、眞の阿彌陀如來。

○畢命を期として―命の終るまで。

○三昧の定―三昧は梵語Samādhiで等持と譯し、定の一名である。定は心を散ある心を一處に止めて散亂しないこと。一心になること。

○忘れ水―野中等に絶え絶えに流れる水。夏を忘れをいひかけた。

○心耳を澄ます―耳も心も澄み澄ること。

○稱名觀念―念佛して ひた

シテ「サシ」その御息女中將姫、この山に籠り給ひつつ

地「稱讃淨土經、毎日讀誦し給ひしが。心中に誓ひ給ふやう。願はくは生身の彌陀來迎あつて。われに拜まれおはしませと。一心不亂に觀念し給ふ

シテ「然らずは畢命を期として

地「この草庵を出でじと誓つて。一向に念佛三昧の定に入り給ふ

地クセ『所は山陰の。松吹く風も涼しくて。さながら夏を忘れ水の。音も絶え絶えに。心耳を澄ます夜もすがら。稱名。觀念の床の上。坐禪圓月の窓の内。寥々とある折節に。一人の老尼の、忽然と來りたたずめり。これは如何なる人やらんと。尋ねさせ給ひしに。老尼答へて宣はく。誰とは

稱讃淨土經を讀誦せられましたが、心中に御祈願になることには『どうか生身の阿彌陀如來が御來迎になつて、これを拜むことが出來ますやうに』と、かう一心不亂になつて、もし阿彌陀如來を拜むことが出來なければ、一生死ぬまでこの庵を出まいと決心して、雜念を離れ、ひたすら念佛三昧にお入りになつたのです。

――

この所は山の陰で、松吹く風も涼しく、夏の暑さも忘れるばかりで、水の音も絶えくに聞える折柄、中將姫が心を澄まして、終夜念佛して迷ひの心を離れ、悟りの道を修めて居られると、あたりのものの淋しい處へ、一人の老尼が突然現れて、そこに立つてゐるのです。中將姫が驚いて『あなたはどういふ方なのですか』とお尋ねになると、老尼が答へて『誰だなどとお尋ねになるとは、何といふ迂濶なこ

などやおろかなり。呼べばこそ來りたれと。仰せられける程に。中將姬はあきれつつ

シテ「われは誰をか呼子鳥

地「たづきも知らぬ山中に。聲立つる事とては。南無阿彌陀佛の稱へならで又他事もなきものをと。答へさせ給ひしに。それこそわが名なれ聲をしるべに來れりと。宣へば姬君もさてはこの願成就して。生身の彌陀如來。げに來迎の時節よと。感淚肝に銘じつつ。綺羅衣の御袖も。しをるばかりに、見え給ふ

【五】

地「ロンギ「げにや貴き物語。卽ち彌陀の敎へぞと。思ふにつけてありがたや

ツレ「今宵しも。二月中の五日にて。しかも時正の時節なり。法事をなさん爲今この寺に來りたり

地「法事のために來るとは。そも如何なる御事ぞ

とでせう。あなたが呼んだからこそ、私はこゝへ來たのです」と仰しやるので、中將姬は意も呆れて、「私は誰も呼びはしない、この誰もゐない山中に暮らしてゐて、聲を出すことといへば、たゞ南無阿彌陀佛と稱へるだけで、その外には何もいひはしないのに」とお答へになる。すると、老尼は「その、そなたの呼んでゐるのが、自分の名です。そなたの聲を道しるべにして、ここへ來たのです」と仰しやつたので、姬君も、さては自分の大願が成就して、生身の阿彌陀如來が御來迎下さつたのかと、身に沁むありがた淚に、立派なお召物のお袖もしをれるばかりにお濡れになつたのです。

【五】

（地）貴い貴いお話です。このお話がそのまま阿彌陀如來の御敎へだと思はれるにつけて、意ありがたく思はれます。

（化尼）今宵は丁度二月十五日で、しかも彼岸の中日に當るのです。それで法事をしたいと思つて、今この寺に來たのです。

（地）法事の爲に來たとは、それはまたどうした事なのです

すら佛道を思ふこと。

○坐禪圓月―禪定に入つて心中の妄念を掃ひ去ることを澄み渡る圓月に喩へた。

○寥々―さびしいこと。

○誰をか呼子鳥―古今集讀人知らずの歌「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」を引いた。

○たづきも知らぬ―賴り所もない。

○綺羅衣―きらびやかな着物。

【五】

○二月中の五日―二月十五日、中將姬の死んだ日といふのであらうか。雜記には寶龜六年三月十四日に往生したとある。

○時正―晝夜の時間の等しい彼岸の中日。

〇化尼化女—佛が尼となり女となつて現れたもの。中將姫の前に現れた化尼は阿彌陀如來、化女は觀世音菩薩の化現であつたといふ。

〇異香—妙なる香。

〇尼上の嶽—謠曲作者の附會說。

【[illegible]】

シテ「今は何をか包むべき、その古の化尼化女の

地「夢中に現じ來れりと

ツレ「いひもあへねば

地「光さして、花降り異香薰じ、音樂の聲すなり。恥かしや旅人よ暇申して歸る山の（とシテ立上リ）。二上の嶽とは二上の、山とこそ人はいへど。眞はこの尼が上りし山なる故に。尼上の嶽とは申すなり老の坂を上り上る雲に乘りて、あがりけり紫雲に乘りてあがりけり

〔老の坂を上り〕と仕手柱際へ行きて正面に向き、雲に乘る心にて身を延ばし杖をすて一靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。

化尼・化女「今は何を隱さう、昔の化尼・化女が夢うつつに現れて來たのです」

といふやいはずに、光がさして、天より花が降り、妙なる香が薫り、音樂が聞える。

化尼「おゝ恥かしい、これは旅の方、お暇して歸ります。私達の歸る二上が嶽を世間の人は二上の山といつて居ますが、實はこの尼が上つた山であるので、尼上が嶽といふのです」

と、老尼は坂を上り、雲に上り、紫雲に乘つて昇天してしまつた。

〔化尼、ツレ化女、退場する心で退場。〕

【間】

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。このあたりに住居する者にて候。この間は久しく當麻寺へ參らず候間。今日は參詣申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは廻國の聖にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

〇雲雀山―この事「雲雀山」に作らる。
〇權者―假に現れた者。權現、佛の化身。

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候
狂言「畏つて候。(眞中へ出で下に居て)さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。當寺の御謂れ中將姫の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「まづ中將姫と申したる御方は。人皇四十七代廢帝天皇の御宇に。橫佩の右大臣豐成公と申したる御方の御息女にて御座ありたると申す。さる子細ありて雲雀山に捨てられ給ふが。山中の事なれば常の者さて住ひ難く候に。中將姫は權者の御身なれば。左樣の事も厭ひ給はず。念佛三昧にて月日を送り給ふに。ある時父の豐成公。御狩の御沙汰候て雲雀山へ分け入り給ふが。ある谷あひに柴の庵を結びて。美しき姫のおはします。豐成公不思議に思し召し。この山中に人間にてはよもあらじ。如何なる者ぞと尋ね給へば。その時にわれは橫佩の右大臣豐成と申す者の娘なるが。繼母の計らひにより。この山奧に捨てられしと御申し候へば。豐成聞し召し。言語道斷左樣の事夢にも知らず。我こそ父の豐成よ。何事もわれに免じて給はれと。奈良の都に伴ひ給ひ。旣に后に備へんとし給ふ處に。中將姫は左樣の事は御心に入らず。後世菩提の事をのみ思し召し。奈良の都を忍び出で。この寺へ來り。これにて御髪を下し。われ生身の阿彌陀如來を拜みたくと御立願の起し給ふに。ある時彌陀如來を拜み給ひ。末世の衆生濟度のため奇特を殘し給へと宣へば。さらばとて蓮の絲にて極樂の妙像を曼荼羅に織り現し。中將姫に與へ給ふ。その時この寺の庭に井を掘り蓮の絲をすゝがせ

【六】○奇特―不思議な靈驗。○いひもあへねば―いひもあへぬに。○歌舞の菩薩―音樂歌舞を以て佛德を讃歎する諸菩薩中の菩薩衆。

給へば、即ち五色に染まりたると申す。さるによつてこの寺を染殿と申す。又井を染殿の井と申し候。とりわけこの櫻の木へ絲を乾し給ふ間、花も五色に咲き申し候。まつわれ等の承り及びたるはかくの如くにて御座候か。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ツレ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老尼と若き女性の來り給ひて候程に、即ち言葉をかはして候へば、所の名所などを教へ、當麻の曼荼羅の謂れ。唯今御物語りの如く懇に語り。古の化尼化女の、夢中に現じ來れりといひもあへず。紫雲に乘り給ふと見て、姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては疑ひもなく中將姫現れ給ひたると存じ候間、愈々御信心ありて重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ツレ「近頃不思議なる事にて候程に。愈々信心を致し、重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はゞ重ねて仰せ候へ

ツレ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ツレ「かくありがたき御事なれば、重ねて奇特を拜まんと

地「（上歌・待謠）いひもあへねば不思議やな　いひもあへねば不思議やな。妙音聞え光さし、歌舞

【六】後段

（地）このやうなありがたい事だから、重ねて奇特を拜まう……と、いふやいはずに

これは不思議だ、妙なる音樂が聞えて、歌舞の菩薩が眼のあたりに御來現になる、

これは實に不思議なことだ―

の菩薩の日のあたり。現れ給ふ、不思議さよ現れ給ふ不思議さよ

【七】

出端の囃子にて、後ジテ中將姫、面增・天冠(白蓮を戴く)・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・舞衣・緋大口・腰帶・扇の裝束にて經卷を手に持ちて舞臺に入り常座に立ちて、

後ジテ『唯今夢中に現れたるは。中將姫の精魂なり。われ娑婆に在りし時。稱讚淨土經。朝々時々に怠らず。信心誠なりし故に。微妙安樂の結界の衆となり。本覺眞如の圓月に坐せり。然れども。ここを去る事遠からずして。法身却來の法味をなせり

地『ありがたや。盡虛空界の莊嚴は。眼は雲路にかかやき

シテ『轉妙法輪の音聲は。聽寶刹の耳に充てり(と右の方に向き)

地『蕭然とある曉の心

【七】

後ジテ中將姫、僧の夢に現れる態で登場。

姫「今そなたの夢に現れ出たのは、中將姫の幽靈です。自分は現世にゐた時、稱讚淨土經を毎日毎日怠らず讀誦して、深く信心したので、今は立派な極樂世界に菩薩衆の仲間に入り、圓滿な月のやうに何の迷ひもない悟りの道に入つたのです。然しその極樂はここから遠い所ではないのであつて、法身を化現してまたこの世に立ち還つたのです。

地「極樂は實にありがたいところです。廣大無邊の極樂世界は莊嚴を極めたものでただこの立派さに見とれて、眼は雲の中に遊び入らんばかりに輝き、阿彌陀如來の御說法の御聲は極樂淨土の隅々までへも聞え渡るのです。あの靜肅な曉の氣色のやうな心持、彌陀の光明によつて涼しい極樂に導かれて行く心持は、實に尊いも

【七】○微妙安樂の結界―微妙は淨土の莊嚴をいひ、安樂は淨土の愉悦をいふ。結界は他より區劃した清淨境、極樂淨土へ行き佛菩薩の仲間に入つてとの意。

○本覺眞如の圓月―眞如は諸法の實體實性で、その覺體理體を本覺といふ。誠の悟りに入つた身といふことで、これを圓やかな月に喩へた。

○法身却來―佛菩薩がその正位妙法身からこの娑婆に還り來て、假位假りの姿を現すこと。

○法味―佛法の滋味。

○盡虛空界の莊嚴は―悲心偈都往生要集の―盡虛空界之莊嚴、眼遊二雲路一、轉妙法輪之音聲、聽滿二寶刹一―を引いた。盡虛空界は極樂の廣大無邊なさまをいひ、轉妙法輪は輪王の輪法が一切の障碍物を破壞するやうに罪見を破つて正法を開く教法、佛の說法をいふ。寶刹は寶國で佛世界。

○蕭然―靜かにさびしいこと。

○光陰の心—極樂に引導する彌陀の光明を愛惜するといふ意を、光陰を惜しむといふ成句にいひかけた。
○時は人をも待たざる—陶淵明の詩句に「歳月不待人」。
○唯心の淨土經—唯心の淨土といふ成句(前掲)を經文の名に冠した。淨土經は前掲の稱讃淨土經をいふ。
○攝取不捨—觀無量壽經にある句。念佛の衆生を淨土へ取つて一人をも見棄てないとの意。
○爲一切世間—阿彌陀經に「爲一切世間、說此難信之法」。是爲甚難」。
○難信之法—念佛の法、阿彌陀經。初心の凡夫には念佛することも困難であるから、難信の法といつた。
○慈悲加祐—慈悲を以て助ける。[illegible]稱讃淨土經に「[illegible]、無量壽佛乃至[illegible]來住其前、[illegible]、令心不亂」とあるを引いた。

シテ「誠に涼しき。道に引かるる光陰の心
地「惜しむべしやな惜しむべしやな(と眞中へ行き)。時は人をも。待たざるものを(下に居て經を開き)。卽ちここぞ。唯心の淨土經。戴きまつれや戴きまつれや(と經を禮し)。攝取不捨(と經を讀む心)
シテ「爲一切世間。說此難信
地「之法。是爲。甚難
シテ「げにもこの法甚しければ
地「信ずる事も難かるべしとや(と經を卷きて立ち)
シテ「ただ賴め
と謠ひながらワキの前へ行き經を與へ、
地「賴めや。賴め
ワキ經を受取りて聞き、
シテ「慈悲加祐
と謠ひながら仕手柱際へ行き、
地「令心不亂

のです。まことに時といふものは大切なもので、時は暫くも人の爲に待つてゐないのですから、少しも猶豫してゐてはいけない、今すぐこの念佛の道に入るのがよいのです。ひたすらこの淨土經を仰ぎ奉るのがよいのです。阿彌陀如來は衆生を殘らず極樂へお迎へ取り下さつて「一切世間の衆生の爲に、凡夫の容易に信じ難い佛法を分り易く說くのであるが、凡夫はなほこれでも非常にむづかしいと思つてゐる」と仰せられ『いかにも佛法は深遠な敎へであるから、これを信ずることはむづかしいのであらう』と仰せられました。しかし、決してむづかしいことはない、たゞ阿彌陀如來を賴み奉れば、成佛することが出來るのです。——

如來は『彌陀の慈悲を以て衆生を助け、心の亂れないやうにしてやらう』とも仰せられたのですから、たゞ心を迷はせな

シテ「亂るなよ（とワキに向き）
地「亂るなよ
シテ「十聲も
地「一聲ぞ。ありがたや
ワキ經を拜して卷き懷中す。シテ
［早舞］
を舞ひ、引續き謠に合せて舞ふ。
【八】
シテ「後夜の鐘の音
地「後夜の鐘の音。鳧鐘の響。稱名の妙音の。見佛聞法の色々の法事。げにも普き光明遍照十方の衆生を。ただ西方に。迎へ行く。御法の舟の。水馴棹。御法の舟の。さを投ぐる間の夢の。夜はほのぼのとぞなりにける
と當麻にて留拍子を踏む。

いやうに、心の亂れないやうにするのがよいのです。一度念佛すれば、十度念佛すると同じ値打のある、實にありがたいことです」
と阿彌陀經の大意を說いて、その經卷を念佛僧に與へ
［早舞］
に極樂のありがたい樣を示す。
【八】
かくして、後夜勤行の鐘の音、釣鐘の響きが鳴り渡り、ありがたい稱名の聲が聞え、成佛した中將姫はこゝに現れて、念佛讀經し、色々の法事をしてゐると、阿彌陀如來の光明は十方世界に照り渡り、すべての衆生を西方淨土に迎へ、悟りの彼岸にお渡し下さる。と思つてゐるうちに、夜はまたたく間に過ぎてしまつて、今念佛僧の見てゐた夢はさめ、夜はほのぼのと白んで來た。
念佛[illegible]

〇十聲も一聲—一聲も十聲ぞの意。信心さへ深ければ一聲の念佛も十聲の念佛にあたる。
【八】
〇後夜　夜を三時に分けた最後の時で、寅の刻午前四時頃。
〇鳧鐘　鐘。こゝでは釣鐘。
〇光明遍照十方の—彌陀の光明は遍く十方世界を照らすといふを十方世界の衆生にいひかけた。
〇御法の舟　佛の教へによつて極樂の彼岸に至ることを舟に喩へていつた。
〇さを投ぐる間の—棹の音を承けて、吳竹集の「何事も思ひすてたる身ぞやすきさをなぐる間の夢の世なれば」の歌詞を借り、夢の夜とつゞけた。さをなぐる間は短い時間の喩へであるが、さは矢であるといふ說と、機織の梭であるといふ說とがある。

考異

諸流（二九流）

【一】ワキ「これは念佛の行者（下懸御國の聖）にて候……遊行（程もなく歸り紀の路の……關越えて（下懸捨人の衣も同じ苔の道〳〵）……夜昔わかれの心地して（下懸和泉の楠木たな引く中に）夢のそなたに……【四】ワキ「猶々當麻の曼荼羅の謂れ委しく御物語り候へ（春剛ナシ）

【六】ワキ「かくありがたき御事なれば（金春ニは中將姫かりに現れ給ひけるぞや）……上歌 いひもあへねば不思議やな〳〵（下懸音樂の〳〵）……

古謠本（光悦本）

【四】ワキ「猶々當麻の曼荼羅の……御物語り候へ（光ナシ）て……池のたづきも知らぬ……綺羅衣（光歸禮）の御袖も……【六】ワキ「かくてありがたき……拜まんと（光ナシ）……

高砂（たかさご）　觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　阿蘇神主友成、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　尉（住吉松の精）、**前ツレ**　姥（高砂松の精）
狂言　高砂の浦人、**後シテ**　住吉明神

【所】　**前段**　播磨國高砂、**後段**　攝津國住吉

【時】　春正月

【異稱】　古くは「相生」又は「相生松」といつた。（天文頃から「高砂」といつたやうである。）

【作者】　世阿彌の能作書に應永新作の老體能として「あひ老」を擧げ、世子六十以後申樂談儀、能本作者註文、二百十番謡目錄にも世阿彌の作として擧げてある。金春禪竹の歌舞髓腦記、拾玉得花、申風の毛端私珍抄にも本曲のことを記し、演能のことは、糺河原勸進猿樂記寛正五年四月四日、親俊日記天文七年三月廿六日、言繼卿記天文十三年二月二日、光源院御元服記天文十三年十二月二十五日の條などに見え、言

經覺記文祿四年三月二十六日の條には本曲註釋のことを記してゐる。

【梗概】 肥後國阿蘇の神主友成が都へ上る途中、播磨國高砂の浦に立ち寄つて見物してゐると、老人夫婦が出て來て、あたりの風光を賞し情懷を述べて、松の木蔭の塵を掃き清める。友成はこれを見て「どれが高砂の松であるか」と尋ね、また「高砂と住吉とは國を隔ててゐるのに、何故相生の松と謂ふのか」と不審を起す。老人は「山川萬里を隔てても、妹背の道は近いものである」と夫婦の愛を述べ、且友成の問に應じて、高砂住吉とは萬葉集と古今集とのことであり、相生の松とは古今變りのない御代を壽ぐ喩へである」と語り、なほ松に關する和漢のめでたい故事を擧げ、「自分達は高砂住吉の松の精である。まづ住吉に行つて待たう」といつて、舟に乘つて沖へ出て行く。友成は奇特の思ひをして、浦人の舟に乘つて住吉へ行くと、住吉明神が出現して、春景色を賞し御代を祝つて舞を舞ひ給ふ。

【出典】 本曲は古今集の序に「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ」とある所から暗示を得て、謠曲作者の新しく構想したものである。ただ相生の松を擬人化する爲に、その精魂を老人夫婦として人格化したことは、燕居雜話にいつてゐるやうに、南遷錄の、

岳陽樓有レ碑極大、乃前知州李觀所レ記二呂洞賓事跡一、言呂憩二於岳州白鶴寺前一、松下有二老人一、自二松樹一冉々而下、致二恭於呂一、問之爲何、乃曰、某松精也、見二先生過一、禮當二候見一、因書二二絶句於寺門壁間一、其一云、獨自行兮獨自坐、無限世人不レ識レ我、惟有二城南松樹精一、分明知二道神仙過一、郡人於二松下一、創レ亭名曰二呂仙一。

から得たものであらうか、但し鳥獸草木を人格化して脚色することは謠曲の常套手段であつて、本曲も亦その一と見るべきものであり、必ずしも前掲の出典を俟たないで、謠曲作者の容易に構想し得た筈のものである。寧ろ一般的に謠曲の精魂物は支那小說の影響を受けたものであるといつた方が穩かであらう。

【概評】 本曲は諸流ともに「翁」に次いで無上なめでたい曲として取扱つてゐるやうに、夫婦の和合、壽命の長久、國家の安穩を祝福した謠曲數百番中で最もめでたい曲である。さて、謠曲は一體に佛教的色彩の濃厚なもので、神に對する考へ方についても、この時代の、神佛混淆本地垂迹の說に支配されたものであるにも拘らず、——「道明寺」にこの思想の著しい例であるが——不思議にも祝言の神事物には、力めて佛說佛語を排除して、これに代へるに、わが國文學の精華たる和歌及び雅語を以て文を綴つてゐるのである。殊に本曲の如きはその最も顯著なもので、佛語らしい佛語は一つもなく、主想には古今集の序文を採り、シテには和歌神の住吉明神を求めて、歌道を說き敷島の道を崇めることが、やがて大君を仰ぎ御國を祝ふ所以であると見てゐるのである。

脚色の工夫については、申楽談儀に「あひ生もなをひれが有也」といつてゐるが、同書に脇能の典型として擧げてゐる「弓八幡」と比べても、甚しく冗長なものとは思はれない。たゞ第三節に二つの想を並べてゐることは、やゝ煩はしい感じを與へないでもない。待謠を道行文として、舞臺の場所を前後別にしてゐるのは、複式能には類例の少い手法であるが、これは相生の意義を明らかにする爲に、高砂住吉の兩所を具象化しようとする作意から出たものであらう。

【一】

眞次第の囃子にて、ワキ阿蘇神主友成、大臣烏帽子・赤上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人又は四人、大臣烏帽子・萠黄上頭掛・着附厚板・赤袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ ワキヅレ 次第「今を始めの旅衣。今を始めの旅衣日も行く末ぞ久しき

地取の後また次第を繰返し謠ひて後、ワキは正面に向き、ツレは下に居て、

ワキ「抑もこれは九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われ未だ都を見ず候程に。この度思ひ立ち都に上り候。又よきついでなれば。播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候

といひてツレと向合ひ、（ツレ立上り）

ワキ ワキヅレ 道行「旅衣。末はるばるの都路を。末はるばる

【一】

前段

舞臺は初め肥後國阿蘇で、ワキ阿蘇神主友成、ワキヅレ從者を隨へて登場。

友成「今度始めて旅に出掛けるので、行先の遠々しい、しかしのどかな感じがする」

と次第に旅の心持を謠ひ、

友成「自分は九州肥後國阿蘇の神主友成であるが、まだ都を見たことがないので、今度思ひ立つて、都に上るのです。そして丁度よい折であるから、播磨の高砂の浦をも見物したいと思つてゐます」

と見物人に自己紹介をし、

友成「行先の遠々しい都への旅を今日思ひ

【一】
○日も行く末ぞ久しき　衣の縁語紐を日もにいひかけ「久しき」に旅の日數の多い意と、末久しい祝言の意とを兼ねさせた。
○阿蘇の宮―阿蘇山の麓阿蘇郡宮地町にあり、武磐龍命、阿蘇姫、國造速甕玉命を祀る。今官幣中社。
○友成―拾葉抄に「神主友成は友能が子なり。延喜の頃の人なり」景行天皇阿蘇に遊歷の時、速瓶玉命の子、惟人を神職に定め給ふ。此友成は惟人の神胤なりといふ。
○高砂の浦―播磨國加古郡にあり、今高砂町といふ。
○旅衣にはるばるの―衣の「はる」は「張る」と同音、播磨は「張る」と同音、「思ひ立つ」は「裁つ」と同音、「浦」は裏と同音、「末」は「着る」と同音で、すべて衣の縁語を以て文のあやとした。

○幾日來ぬらん—續拾遺集衣笠内大臣家良の歌に「旅人の衣の關のはる〲と都へだてゝ幾日來ぬらん」
○いさ白雲の—いさ知らずといひかけた。
○さしも思ひし—あのやうに遠方だと思つてゐた。

【二】

○尾上の鐘—千載集、大江匡房の歌「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜や置くらん」に據つた。尾上は峯の上といふ意。

の都路を。今日思ひ立つ浦の波。船路のどけき春風の幾日來ぬらん跡末も。いさ白雲の遙々と。さしも思ひし播磨潟高砂の浦に着きにけり高砂の浦に着きにけり

ワキ「いさ白雲の遙々と」と正面に向き先へ出で、またもとへ歸りて高砂に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。播州高砂の浦に着きて候。暫くこの所に相待ち。所の樣をも尋ねばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き順次並びて下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ尉、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にてサラへを持ち、ツレ姥、面姥・姥髪・鬘帶・襟朽葉・着附摺箔・上衣無色唐織・水衣の裝束にて杉箒を持ちて、ツレを先に立てゝ橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「高砂の。松の春風吹きくれて。尾上の鐘も。響くなり

正面に向き…

立つて、浦から船に乘り出し、のどかな春風に吹かれながら船旅を續け、來し方も行く先も見當のつかないやうな、廣々とした海を渡つて行くうちに、あのやうに遙々しく思つてゐた播磨潟の高砂の浦に着いた」

さ船旅の樣を述べてゐる間に旅は進んだ態で、舞臺は高砂の浦となり、こゝで友成等は人の來るのを待つてゐる。

【三】

シテ住吉の松の精を翁の姿をし、ツレ高砂の松の精老嫗の姿をして、熊手・箒を持つて登場。

〔一聲〕高砂の松にのとかな春風が吹いて、日は早や暮れ方になり、尾上の鐘も入相を告げてゐることだ。

○音こそ潮の滿干なれ｜波は霞に隱れて見えないが、波音の遠近によつて潮の滿干が察せられるといふ意。

○誰をかも知る人にせん高砂の｜下句「松も昔の友ならなくに」で、古今集藤原興風の歌。

○白雪の｜過ぎ去つた昔のことは忘れてしまつて知らぬを白雪にいひかけた。

○積り積りて｜雪の積るを年の積るにいひかけた。

○老の鶴の｜老の身を松の緣で鶴に喩へ、鶴の鳴く音を塒にいひかけた。

○春の霜夜｜春とはいひながらまだ霜が降つて寒い夜

○心を友と菅筵の｜友とすを菅にいひかけ、筵の緣とのぶるといつた。心を友とすとは和歌を友とすること

○落葉衣｜落葉の散りかゝつた衣。[illegible]

○袖添へて｜[illegible]

○年ふりて｜年も古くなつて。

○老の波も寄りくるや｜老の隙なく寄りくるを波に見立てたのである。

ツレ二句「波は霞の磯がくれ」シテ（向合ひ）「音こそ潮の。滿干なれ

と云ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ち、

シテツレ二句「誰をかも知る人にせん高砂の。松も昔の友ならで。シテ（向合ひ）「過ぎ來し世々は白雪の。積り積りて老の鶴の。塒に殘る有明の。春の霜夜の起居にも松風をのみ聞き馴れて。心を友と。菅筵の。思ひを述ぶるばかりなり

下歌「おとづれは松にこと問ふ浦風の。落葉衣の袖添へて木蔭の塵を掻かうよ。上歌「所は高砂の。所は高砂の。尾上の松も年ふりて。老の波も寄りくるや。木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて。猶いつまでか生の松。それも久しき名所かな　それも久しき名所かな

「それも久しき」と、シテとツレと入替り、シテは眞中に、

翁媼「波の姿は一面にたちこめた霞に隱れて見えないが、岸打つ波音の遠さ近さで、潮の滿干が察せられることだ」

と舞臺の景色をうち眺め、

翁媼「和歌に——

「誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならなくに」

（年寄つて、昔からの友達は大抵死んでしまつたし、あの高砂の松さても、自分よりは若い後のもので、昔からの友でないのだから、誰一人昔馴染の知合がない。ほんとに淋しいことだ）

と詠まれてゐるが、自分達も隨分年をとつて、昔の事は何が何やらすつかり忘れてしまひ、たゞ年だけは追々と積つて、雪のやうな白髮の老人となり、寢床についても、とかく春の夜寒に寢覺め勝ちで、たゞ淋しく松風ばかりを聞き馴れてゐるのであるが、和歌によつてこの淋しい思ひを慰めてゐることだ」

と老の感懷を洩らし、目前の松を見て、

翁媼「訪れてくるものといへば、松吹く浦風ばかりで、松葉がその度に散り落ちることだ。さうだ、その落葉の散りかゝつたこの着物の袖をとつて、木蔭の木葉を掃き淸めよう。こゝは高砂で、尾上の松も隨分古いものとなつたが、自分達もずんずんと年をとつて、このやうな年まで命をながらへて來たが、なほこの後もいつまでも生きの松原だらう。……さういへば、あの生の松原も昔からのめでたい名所だ」

○落葉かくなるまで―落葉搔くを斯くにいひかけた。
○生の松―本曲の末に記す。
○それも久しき名所―こゝも高砂や住吉と同じく昔からの名所であるといひ「久しき」に祝言の意を含めた。
【三】
○高砂の松―高砂の相生の松といふ唯一本の名木があつたやうに作りなしたのである。
○高砂住の江の松に相生の名―解說にあげた古今集序の詞によつていふ。
○相生の松―末に記す。
○古今の序―古今集は醍醐天皇の延喜年間、紀友則・紀貫之・凡河內躬恒・壬生忠岑の撰んだわが國最初の勅撰和歌集で、その序文は貫之の作。
○尉―老翁。安齋隨筆八に「老翁稱」尉、老翁を尉と稱し、尉殿などいふ尉の字は用る誤りなり。尉は左衞門尉・兵衞尉などの官名なり。尉の字は老翁の事には非ず丈の字を書くべし。丈は丈夫の意なり。丈夫は年たけたる人なり。丈はツヱなり。老いてつゑつく人を丈人といふ」と。

ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちて正面に向き、

【三】
ワキ 里人を相待つ處に。老人夫婦來れり。（シテに向ひ）いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候
シテ ワキにこなたの事にて候か何事にて候ぞ
ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ
シテ 唯今木蔭を淸め候こそ高砂の松にて候へ
ワキ 高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに。何とて相生の松とは申し候ぞ
シテ 仰せの如く古今の序に。高砂住の江の松も。相生のやうに覺えとありさりながら。この尉は津の國住吉の者。（ツレを見て）これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申さ給へ
ワキ 不思議や見れば老人の。夫婦一所にありながら。遠き住の江高砂の。浦山國を隔てて住む

こ、われながらその長命に感歎しながら松の木蔭を掃く。

【三】
神主友成は老人夫婦の來たのを見て、
友成「里人の來るのを待つてゐると、折よく老人夫婦が来た。（と獨言をいつて老人に向ひ）もうし御老人、お尋ねします」
老翁「私をお呼びになつたのですか、何の御用です」
友成「高砂の松といふのは、この中でどの木をいふのです」
老翁「今木蔭を掃き淸めてゐるのが、高砂の松です」
友成「高砂の松と住吉の松とを相生といひますが、一體こゝと住吉とは國もちがつてゐるのに、どうして相生の松といふのです」
老翁「仰せの通り、古今集の序文にも「高砂住の江の松も相生のやうに覺え」とありますが、私は攝津國住吉の者で他所者ですが、この婆さんはこの地の者です。（老婆に）そなた知つてゐる事があれば、お聞かせしな」
友成「これは不思議だ、老人夫婦が一緒にたりながら、遠く住吉と高砂と、海山を隔て國を隔てて住むといふのは、一體ど

○津の國住吉―攝津國東成郡住吉(今大阪に入る)古くは「すみのえ」といひ、後すみよし といふやうになつた。
○申し給へ―申させ給への訛。「通盛」の曲にも「急ぎ給へ」とある。
○うたて―けしからぬ。
○仰せ候や―候をさふらふと濁るのは、に候の約つたのである。
○妹背の道―夫婦の中。
○案じて―考へて。
○非情―佛教で草木金石等心靈のないものを非情といひ、これに對して人天鬼畜等心靈のあるものを有情といふ。
○生ある人―生命のある人間。
○世のためし―このためしは譬喩の意。下懸では「たとへ」と謠ふ。
○高砂といふは―この說、古今秘說に見ゆ。委しくは附記に揭げる。
○萬葉集―奈良朝に編まれたわが國最初のそして最も大きな歌集。

と、いふは如何なる事やらん

ツレ うたての仰せ候や。山川萬里を隔つれども。互に通ふ心遣ひの。妹背の道は遠からず

シテ まづ案じても御覽ぜよ

シテ ツレ 「高砂住の江の。松は非情のものだにも。相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として。年久しくも住吉より。通ひ馴れたる尉と姥は。松もろともに。この年まで。相生の夫婦となるものを

ワキ 「謂れを聞けば面白や。さてさて先に聞えつる。相生の松の物語を。所にいひ置く謂れはなきか

シテ 昔の人の申ししは。これはめでたき世の例なり

ツレ 「高砂といふは上代の。萬葉集の古の義

うしたわけなのでせう」

老媼「これは異な事を仰しやる。たとひ山川萬里を隔てゝゐても、互に思ひ合ひ愛し合ふ夫婦の仲は、うち解けた近しいものです」

老翁「まあ考へても御覽なさい。高砂住吉の松は無心のものですが、それでも相生といはれてゐるのです。まして生類たる人間と生まれて、永年の間住吉から通ひ馴れた私と婆さんとは、この松と同樣、この年まで相老の夫婦となつたのです。それに別段不思議はないぢやありませんか」

友成「成程わけを聞けば面白いことです。ところで、先程お尋ねした、相生の松の物語について、この地でいひ傳へてゐる話はありませんか」

老翁「昔の人の話によれば、これはめでたい御代を喩へたものです」

老媼「高砂といふのは、上代萬葉集の時代といふ意味で――

○延喜―醍醐天皇御宇の年號で、古今集の出來た時。
○松とは盡きぬ言の葉の―古今集序に「松の葉の散り失せずして」とあるに據つて、松の如く和歌の道も榮えてといつたのである。
○不審春の日の―不審の晴るゝを春にいひかけた。
○光やはらぐ西の海の―日を承けて光といひ、和光同塵の語の和光に通はせて、西天の西を呼び起し、後に引く「西の海やあをきが原の」歌によつて住吉とつづけた。
○四海波靜かに―天下泰平の意。後拾遺集序に「わが君天下しろしめしてよりこの方、四つの海波の聲聞えず」夫木抄衣笠內大臣の歌に「四つの海波靜かなる御代なればはらかのにへもけふ供ふなり」
○時つ風―潮の滿ちくる時に吹く風。轉じて時に適つた順風。
○枝を鳴らさぬ―太平の象。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴條、雨不破塊」
○逢ひに相生の―御代に逢ふといひかけて、逢ひの音を重ねて相生とつゞけた。

シテ「住吉と申すは。今この御代に住み給ふ延喜の御事

ツレ「松とは盡きぬ言の葉の

シテ「榮えは古今相同じと。ツレ「御代を崇むる喩へなり

ワキ「よくよく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の

シテ「光やはらぐ西の海の

ワキ「かしこは住の江

シテ「ここは高砂

ワキ「松も色添ひ

シテ「春も

ワキ「のどかに

地上歌「四海波靜かにて。國も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひに相生の。松こそめ

老翁「住吉といふのは、今この御代を治め給ふ延喜の帝の御事で……」

老嫗「松とは、いつまでも盡きないといふ意味で……」

老翁「御代の榮え、和歌の榮えが昔も今も變りがないと……」

翁嫗「大御代を崇めたゝへた喩へたのです」

友成「よくお話を伺へば、實にありがたい事です。今は不審がすつかり晴れました」

老翁「晴れるといへば、光ののどかなあの西の海の……」

友成「あそこは住吉で……」

老翁「こゝは高砂で……」

友成「その松の緑も色濃く……」

老翁「春ものどかで、天下靜穩、國もよく治まつて、吹く風も枝を鳴らさぬ泰平の御代です。このやうな大御代に生まれて、相老となるのはほんとにめでたいことです。申すまでもないことだから、このやうな泰平の御代の民として生まれあうた

○ことも愚かや—言葉に出して言ふのも愚かな程顯著なことである。

【四】○花實の時をたがへず—無名抄に「中頃古今の時、花實共に備はりて、其の樣まちまちに分れたり」とあり、古今集の事を含めていつたのである。

○南枝花始めて開く—和漢朗詠集、菅原文時の詩句「誰言春色從東到、露暖南枝花始開」を引いた。花は梅花を指す。

○花葉時を分かず—他の木のやうに、花の咲き葉の落ちる事はなく、いつも緑色をしてゐる。

○四つの時—春夏秋冬の四季。

○一千年の色—和漢朗詠集、源順の詩句「十八公榮霜後露、一千年色雪中深」を引いた。

○松花の色十廻り—本朝文粹、大江朝綱の句「椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻、昔聞天童子」を引いた。童蒙抄に「松花は千年に一度咲くなり」ともあり、百年を十度重り還すことを十廻といふ、新後撰集藤原具俊の歌に「松の花十かへり咲ける君が代に何をあら

でたかりけれ。げにや仰ぎても。ことも愚かや

かかる世に。住める民とて豐かなる。君の惠み

ぞ、ありがたき君の惠みぞありがたき

ツレ地上歌の初めに地謡座前に行きて下に居り、ワキ地上歌濟みて下に居る。

【四】

ワキ「なほなほ高砂の松のめでたき謂れ委しく御物語り候へ。

シテ眞中へ行きサラへを下に置きて坐し、

地クリ「それ草木心なしとは申せども花實の時をたがへず。陽春の徳を具へて南枝花始めて開く

シテサシ「然れどもこの松は。その氣色長へにして花葉時を分かず

地「四つの時至りても。一千年の色雪のうちに深く。又は松花の色十廻りともいへり

シテ「かかるたよりを松が枝の

地「言の葉草の露の玉。心を磨く種となりて

ことは、わが大君の厚い大御惠みによることで、ほんとにありがたいことです」

○天下の太平を祝ふ。

【四】

友成「なほ高砂の松のめでたいわけを委しくお話し下さい」

老翁「一體草木には心のないものだといはれてゐますが、春花が咲き秋實を結ぶ季節を間違へず、春になれば、まづ暖い南側の枝から花を咲き初めるものです。しかし、この松はいつまでも同じ姿で、花が咲き葉が落ちるといふやうな季節による變化がなく、春夏秋冬いつでも、深い雪の中でも、千年變らぬ緑の色をたゝへ、殊に命の久しいもので、松の花は百年を十度も繰返して千年に一度咲くといはれて居ります。それで、このやうなめでたい時の來る松などが、和歌を詠み心を磨く材料となつて、苟も生あるものは皆和歌の道を仰ぐのです。

〇そふ鶴がよはひぞ—
〇松が枝の—待つといひかけた。
〇言の葉草—和歌を指す。松の葉、葉草、草の露、露の玉といひつゞけ、玉を磨くを心を磨くにいひかけた。種も草の緣語。
〇生きとし生けるもの—あらゆる生物。古今集序に「花に鳴く鶯、水にすむ蛙、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」
〇敷島—和歌の道をいふ。
〇長能—藤原氏。一條天皇頃の歌人で、その詠歌は拾遺集以下の勅撰集に採られてゐる。その著と傳へられてゐる私記に「和歌はこれただ行の體なり。詞に出すを歌とし、心に知れるを體とす。春の林の東風に動き、秋の蟲の北露に鳴くも、皆和歌の體に洩れず。有情非情ともに歌の道をばおこすなり」とあるを引いた。
〇十八公の粧ひ—十八公は松の折字。粧ひは威厳といふほどの意。吳録に「吳丁固初爲二尚書一、夢松生二其腹上一、謂レ人曰、松字十八公也、後十八歲吾其爲レ公乎、卒如レ夢」
〇古今の色を見ず—下聽で

シテ「生きとし生ける。ものごとに
地「敷島の陰に。よるとかや
（居クセ）
地クセ「然るに。長能が言葉にも。有情非情のその聲みな歌に漏るる事なし。草木土沙。風聲水音まで萬物のこもる心あり。春の林の。東風に動き秋の蟲の。北露に鳴くも皆。和歌の姿ならずや。中にもこの松は。萬木に勝れて。十八公の粧ひ。千秋の綠をなして。古今の色を見ず。始皇の御爵に。あづかる程の木なりとて異國にも。本朝にも萬民これを賞翫す
シテ「高砂の。尾上の鐘の音すなり（とサラヘを持ちて立たり）
地「曉かけて。霜は置けども松が枝の。葉色は同じ深綠立ち寄る蔭の朝夕に（とサラへにて落葉を搔く形

これについて、長能も「生あるものも生なきものも、森羅萬象の發する聲は、皆和歌の數に入らないものはない。かの草木や土砂、風の聲水の音に至るまで、皆深い心持がこもつてゐるのである。例へば春東風の吹くにつれて林の木の動くのも、秋寒い霜が置くにつけて蟲の悲しく鳴くのも、皆和歌の姿ではないか」といつてゐるのです。かうして一切萬物みな和歌の姿を具へてゐるのですが、その中でも、殊にこの松は萬木に勝れて、十八公たる威厳を備へ、千歳變らぬ綠をたゝへ、いつ如何なる時にも色が變らず、その上、秦始皇から位を賜はる程の木であるといふので、外國でもわが日本でも、すべての人がこれを賞翫するのです

（この松の德をたゝへてゐると、鐘の響が聞えてくる心で、）

老翁「おゝ高砂の尾上の鐘が鳴つてゐる、かうして夜が更けて行くと、明方へかけて霜が地に降りるのですが、松の葉色はいつも同じやうな深綠で、朝夕木蔭に立ち寄つて、いくら掃き清めても落葉の盡きない所を見ると、成程『松の葉の散り失

は見す」と讀んで置ふ。
○始皇の御傳に―史記、秦始皇本紀に「二十八年始皇東行ニ郡縣一……乃遂上ニ泰山一立ニ石封祠祀一、下風雨暴至、休ニ於樹下一、因封ニ其樹一爲ニ五大夫一」―老松一參照。傅は五位をいふ。
○高砂の尾上の鐘の音すなり―前に引いた千載集、大江匡房の歌。
○眞拆のかづら長き世の―色はなほ増すといひかけて古今集序「松の葉の散り失せずして、眞拆のかづら長く傳はり」を引いた。
○末代のためし―松を末にいひかけた。
【五】○松の精―精は精魂。謠曲には非情の木石にも精魂があるものとして取扱つた曲が少くない。この構想は支那小説に屢々用ゐられたものである。解説參照。
○奇特―不思議、奇蹟。
○土も木もわが大君の―太平記卷十六紀朝雄の歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼の棲なるべき」を引いて「いづくか……」より「いつまでも」と續けた。「田村」參照。

シテ 掻けども落葉の盡きせぬは（と落葉を見る心にて下を見）まことなり松の葉の散り失せずして色はなほ眞拆のかづら長き世の。たとへなりける常磐木の中にも名は高砂の。末代のためしにも相生の松ぞめでたき

【五】（向き下に居る）

地 げに名を得たる松が枝の。げに名を得たる松が枝の。老木の昔あらはして。その名を名乗り給へや

ツレ 今は何をかつつむべき。これは高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり

地 不思議やさては名所の。松の奇特を現して

シテ 草木心なけれども

地 かしこき代とて

シテ 土も木も

せずして』と、いや榮え行く末久しい御代の喩へに引かれたのも尤もなことです。殊に同じ常磐木の中でも、高砂の松は後の世までも相生の松といはれてゐるのは、ほんとにめでたいことです」

【五】

友成「この松のやうに御長命なされたあなた方の、昔の御素性をお隱しにならず、どうぞお名前を聞かせて下さい」

翁媼「今は何を隱さう、私達は高砂住吉の相生の松の精で、夫婦として現れて來たのです」

友成「これは不思議だ。すると、名所の松の奇蹟を現して……」

翁媼「草木には心のないものですが、ありがたい大御代の御惠みにより、土も木も皆わが大君の國土のものとして、いつまでも安らかに生きながらへることが出來て……いや兎に角一足先に住吉へ行つて

地「わが大君の國なれば。いつまでも君が代に。住吉にまづ行きてあれにて（シテ扇にて橋懸の方を指し）て待ち申さんと（立上り）。夕波の汀なる海士の（右の方へ出でて）小舟にうち乗りて（と舟に乗る形をし）。追風にまかせつつ沖の方に出でにけりや、沖の方に出でにけり

あそこでお待ちしてゐませうといつて、夕暮の岸邊にかゝつてゐる漁船に乗り、順風に船を走らせて沖の方へ出て行つた。
シテ舟に乗つて住吉へ行く態で退場。ツレも續いて幕に入る。

○夕波の―言ふを夕にいひかけた。
○追風―順風、

と仕手柱際へ行き、遥かに向ふを見て、舟を漕ぎ出す心にてさら／＼と中入。ツレも續いて入る。

【詞】
ワキ「いかに誰かある
ワキヅレ（ワキの前に出で）御前に候
ワキ「當浦の者を呼びて來り候へ
ワキヅレ「畏つて候。（仕手柱際へ出でて）當浦の人の渡り候か
狂言所の者、着附熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の装束にて狂言座に控へ居り、ワキヅレに呼ばれて一の松へ出で、
狂言「當浦の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキヅレに）當浦の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來りて給はり候へ
狂言「畏つて候
二人とも舞臺の眞中へ出で下に居て、

ツキヅレ「當浦の者を召して參りて候
狂言「當浦の者御前に候
　　ツキヅレもとの座に歸りて坐す。
ツキ「これは九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成にて候。當浦始めて一見の事にて候。この所に於て高砂の松の謂れ語つて聞かされ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等も當浦に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ツキ「やがて語られ候へ
狂言「まづ當浦に於て高砂の松と申すは。これなる松を申しならはし候。また相生と申す事は。古今集の序にも。高砂住の江の松も相生のやうに覺えと記し置かれたると申す。諸木多き中に松は常磐木にて榮え久しきものなれば。和歌の道榮え行く事も。この高砂住の江の松の葉の如くなるべき事を喩へ置かれたると申す。又一說に。當社明神と住吉の御神とは。夫婦の御神にて御座あると申す。それをいかにと申すに。住吉の明神當社へ御影向の御時は。これなる松にて神かたらひあり。當社明神住吉へ御影向の御時も。御神木の松にて神かたらひをなされ。昔より今に至るまで。幾久しく通ひ來り給ふにより。相生の松とも申し候。されば和歌の言葉にも。いさご長じて巖となり。塵積つて山となる。濱の眞砂は盡くるとも。よむ言の葉は盡きまじいなどと。かくの如く承り候。又松のめでたき事と申すことは。九夏三伏の暑き月。竹錯午の風を含み。玄冬素雪の寒き朝。松君子の徳を彰す。されば歌にも。天下るあら人神の相生を。思へば久し住吉の松と。かやうに承り候。松に上越してめでたきものはあるまじいとて。兩神もろともに植ゑ給ふにより。相植の松とも。これは

○いさご長じて―古今集序に「―さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき」、又「―高き山も麓の塵ひぢよりなりて」、又「濱の眞砂の數多く積りぬれば」
○九夏三伏の―和漢朗詠集紀長谷雄の句に「九夏三伏之暑月、竹含錯午之風、玄冬素雪之寒朝、松彰君子之徳」
○天下るあら人神の―拾遺集、安法法師の歌。

この所に於て我等如きの者の名づけたる子細にてありげに候。われこの所をば五十六億七千萬歳までも守り給うずるとの御事と承りて候。總じて最前より申す如く。委しき謂れは存じも致さず。我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。さて唯今は何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。かた〴〵以前に老人夫婦來られ候程に。高砂の松の子細尋ねて候へば。唯今の如く懇に語り。住吉にて待たうずる由申され。汀なる小舟にうち乘り。沖をさして出で給ふと見て。姿を見失うて候よ

狂言「これは言語道斷奇特なる事を承り候ものかな。總じてこのあたりに左樣の心ある老人夫婦は御座なく候が。われ等が推量申すには。住吉の明神當社へ御影向なされ。これなる松を清め給ふ折節御言葉をかはされたると推量申して候。その上住吉にて御待ちあらうずるとの御事。これより直に住吉へ御參詣あつて然るべう候。それにつき某この間新艘を造りて候が。未だ乘り初めを仕らず候。いかやうなる御方にても候へ。吉左右めでたき御方を乘せ初め申さんと存ずる處に。阿蘇の宮の御神職と申し。殊に當社と住吉の明神の御言葉をかはされたる程の。神慮めでたき御方を乘せ初め申すならば。船路の行末も千秋萬歳めでたからうと存ずる間。我等が舟に召され候へ。卽ちかんどり仕り。住吉へ御供申さうずるにて候。いや御覽候へ。神慮の奇特一段の追風が吹き來りて候。急いで御舟に召され候へ

といひて引く。

【六】 後段

【六】ワキ・ワキヅレ立上り、舞臺の眞中に、次第の時の如く向合ひて、

ワキ ワキヅレ 上歌（待謠）「高砂や。この浦舟に帆をあげて。こ

神主友成は高砂の浦の舟夫が新しく造つた舟に乘つて高砂の浦を出る趣、

一友成「この高砂の浦から、舟に帆をかけて、

○我等如き者の―確かな典據のない附會說であることを斷つたのである。

○かた〴〵―あなた方。

○言語道斷―ひどく驚いた時に發する詞。

○新艘―新しい舟。

○かんどり―楫取の音便。

【六】

○月もろともに出汐の――月の出ると共に舟に乗り出るを出汐にいひかけた。出汐は月の出る時滿ちくる汐水。
○波の淡路の――波の泡を淡路にいひかけ、淡に淡く彷んで見える意を含ませた。
○遠く鳴尾――遠くなるを鳴尾にいひかけた。鳴尾は攝津國武庫郡武庫川の川口にあたる。
【七】
○われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらん――伊勢物語に「昔帝住吉に行幸し給ひけり」と詞書して載せた歌。古今集にも見ゆ。
○睦しと君は知らずや――「おほん神現形し給ひて」と詞書した右の返歌「睦しと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」を引き、世より夜神樂と轉じた（この歌新古今にも見ゆ）。
○すずしめ給へ――神慮を清く慰め給へとの意。
○宮つこ――神社に仕へる人。神主。
○西の海あをきが原の――續古今集卜部兼直の歌「西の海やあをきが原の汐路より現れ出でし住吉の神」を引

の浦舟に帆をあげて。月もろともに出汐の。波の淡路の島影や。遠く鳴尾の沖過ぎてはや住の江に。着きにけりはや住の江に着きにけり

（遠く鳴尾の沖過ぎて」と謡ひながら脇座の方へ行き、もとの座に坐し、住吉に着きたる心。）

【七】

出端の囃子にて、後ジテ住吉明神、面邯鄲男・黒垂・透冠・金襴袷巻・襟淺黄・着附紅白段厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の装束にて橋懸一の松へ出で、

後ジテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松幾代經ぬらん。睦しと君は知らずや瑞籬の（とワキを見込みて）久しき代々の神かぐら。夜の鼓の拍子を揃へて。すずしめ給へ。宮つこ達（と囃子方の方へ向き）

地「西の海。あをきが原の。波間より（と舞臺に入り、これより謡に合せて舞ふ。）現れ出でし。神松の。春なれや。殘んの雪の淺香潟

月の出と同時に、汐の滿ちた海に乗り出し、波のかなたにかすかに淡路島を眺め、遠く鳴尾の沖を通つて行くうちに、はや住吉に着いた」

といつてゐるうちに住吉についた態で、舞臺は住吉の社前となる。

【七】

後ジテ住吉明神登場、

明神「――

『われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松幾代經ぬらん』

（この住吉の岸の姫松は、自分が初めて見た時からいつでも、隨分長い年月となるが、あの時既に老松であつたのであるから、幾程の年數を經てゐることか知らん）

と、帝が仰せられたので、自分は――

『睦しと君は知らずや瑞籬の、久しき代よりいはひそめてき』

（自分はずつと古い昔から、わが朝廷の御榮えをお祝ひ申しあげたもので、隨つてわが大君とは親しい間柄であることを、御存じではないのでせうか）

とお答へしたわけだ。さあ社人達、鼓の拍子を揃へて夜神樂を奏し、神の御心をお慰め申されよ。

自分は筑紫のあをきが原の波間から現れ出た住吉の神であるが、今は春のことゝて、雪が僅かに消え殘つてゐるこの淺香

いた。住吉明神即ち底筒男神・中筒男神・表筒男神は伊弉諾神が日向の小戸の橘の檍原で穢れを祓ひ給うた時に生まれ給うたと記紀に記してゐるのに據つて詠んだ歌である。
○神松｜神木の松。
○春なれや｜松の春、春なれやとつゞけた。
○淺香潟｜雪の少く淺いを地名にいひかけた。淺香潟は昔攝津國住吉の海邊であつたが、今は和泉國泉北郡五箇莊村にその面影を殘してゐるだけである。
○玉藻刈るなる｜萬葉集に「夕されば汐みちくなる住吉の淺香の浦に玉藻刈りてな」などとある。
○松根に倚つて腰を摩れば｜和漢朗詠集、橘在列の文「倚₂松根₁而摩ℷ腰、千年之翠滿ℷ手、折₂梅花₁而挿ℷ頭、二月之雪落ℷ衣」を引いた。二月之雪は落花の喩へ。
【八】
○影向｜神靈が姿を現して出現し給ふこと。
○月住吉の｜月の澄むを住吉にいひかけた。
○青海波｜本曲の末に記す。
○道すぐに｜神の惠みの普く君の政の正しいのを道路の直ぐな意にいひかけた。
○還城樂｜舞樂の曲名、委しくは後に記す。

地「玉藻刈るなる岸陰の
シテ「松根に倚つて腰を摩れば
地「千年の綠。手に滿てり
シテ「梅花を折つて頭に挿せば
地「二月の雪衣に落つ
〔神舞〕
【八】
地ワンギ「ありがたの影向や。ありがたの影向や。月住吉の神遊び。御影を拜むあらたさよ
シテ「げに樣々の舞姬の。聲も澄むなり住の江の。松影も映るなる。青海波とはこれやらん
地「神と君との道すぐに。都の春に行くべくは
シテ「それぞ還城樂の舞
地「さて萬歲の
シテ「小忌衣
地「さす腕には。惡魔を拂ひ。をさむる手には。壽

潟、玉藻を刈るといふ岸陰の、松の根もとに倚りかゝつて腰をさすると、千歲變らぬ松の綠がこの手にまで一杯になるやうだ。そしてまた、梅の花を折つて頭に挿すと、花びらが散つて、春の雪が衣に落ちかゝつたやうだ」
さいつゝ、春景色の面白さにうち興ずる心で、
〔神舞〕
を舞ふ。
【八】
友成は夢心地に神の影向を拜して感激に堪へず、
友成「神樣の影向を拜するとは實にありがたいことだ。月の澄み渡つた夜、住吉明神の神舞を遊ばす御姿を拜すとは、何といふあらたかなことであらう」
明神「さうだ、多勢の舞姬の謠ふ歌聲も澄み渡るのだ。そしてこの住吉の青々とした松影が海の波に映るところは、文字通り青海波ともいへようか」
友成「神の御惠みの豐かた、大君の御政道の正しい大御代の春に、都へ行くものにとりましては……」
明神「それには還城樂の舞がふさはしいであらう。……かうしてめでたい小忌衣を着て、舞のさす手には惡魔を拂ひ、ひく手には福を招き、千秋樂を奏しては民

福を抱き。千秋樂は民を撫で。萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞ樂しむ颯々の聲ぞ樂しむ

ト舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

を愛撫し、萬歳樂を舞うては壽命を延ばすのである。

と、舞袖を翻す音、相生の松へ吹き渡る風音、いづれもさつ／＼と響を立て、すべてが樂しみに浸るのである。

○小忌衣―白布青摺の狩衣風の上衣で、大嘗祭豐明節會などに祭官又は舞人が着る。

○さす腕―以下附記に記す

〔考異〕

諸流（左流）

【三】ワキ「甲人を相待つ處に老人夫婦來れり（下懸ナシ）

古名本（光悦本）

【一】ワキ「抑もこれは九州肥後の國（光ナシ）……またよきついでなれば（光にて候程に）播州高砂の浦をも一見せ（光道すがらの名所をも一見し）心しづかに上らばやと存じ候　【三】ワキ「甲人を相待つ處に老人夫婦來れり（光ナシ）……シテ「唯今（光此尉か）木蔭を清め……古今の序に……この尉は（光あの）津の國……ワキ「謂れを聞けば……相生の松の物語を（光ナシ）　【四】ワキ「猶々高砂の（光ナシ）松の……委しく（光ナシ）御物語り候へ（光シテ「委かたつて聞せ參らせ候へし）

附記

○生の松―筑前國早良郡にある生の松原。神功皇后三韓征伐の時、松の枝をこの海岸にさし給ひ、若し戰に勝ちて歸らばこの松生きよと仰せられたが、果してこの松が生ひ出たので、生の松原といふとの傳說がある。新續古今集大僧正道順の歌「うきことは色も變らぬ同じ世にあはれいつまで生の松原」など、歌に多く詠まれた名所。いつまでか生きながらへんを地名にいひかけたのである。

○相生の松―古今集序の「あひおひ」については、勝り劣りのない意の相逐、同じ年に生まれた意の相生、いづれも年老いた意の相老など諸說あるが、いづれにしても松と人との關係をいつたものであるのを、こゝには松と松との關係にとりなし、あひおひを共に生ふ意の相生に解し、且これに相老の意をも含ませたのである。爾來相生の松といへば本曲の解釋と同樣の意に用ゐられるやうになつた。

○高砂といふは上代の―古今秘說に「高砂とは上古萬葉の歌をさす。住の江とは當代古今集の歌をさす。合せて一部となれば、相生とて、松は千歳をふる例に祝ひいへるなり。高砂といふに、古を仰ぐひらきあり。住吉と云ふには、彼の御神此道の長者にておはします上、住江と申すにつきてめでたく聞ゆればなり。都て此集の體たるを相生のやうにと書けるなり」

○青海波―盤渉調の舞樂。その裝束は舞樂中最も華美なもので、源氏物語紅葉賀の巻に光君と頭中將と雙舞したことが見えてゐる。

○還城樂―舞樂の曲名。この名を以てわが國に傳つてゐるのは見蛇樂で、唐玄宗が韋后を誅して帝都に還り作つた還城樂とは別曲であると、舞樂圖說に述べてあるが、こゝでは都に還るといふ文字に因んで擧げたのである。

○さす腕―兩手を前へさし出す舞の形。

○をさむる手―兩手を體へ引き寄せる舞の形。

○千秋樂―盤渉調の樂曲で、後三條天皇の大嘗會に源頼能の作つたもの。これには舞はないが、萬歳樂と對にして出したのである。この曲は一日の最終に奏せられるので、俗に最終のことを千秋樂といふ。

○萬歳樂―舞樂の曲名。則天武后がその飼つてゐた鸚鵡の常に萬歳と鳴いたのを喜んで作つた曲であると傳ふ。御即位の大典にも演奏せられるめでたい曲である。

○颯々の聲―松風の音と舞の袖の飜る聲。

竹の雪　寶（喜）

解説

【能柄】　四五番目　二段劇能

【人物】　**前ワキ**　直井左衛門、**狂言**　直井後妻、**子方**　月若
前シテ　月若の實母、**狂言**　直井の從者、**後シテ**
月若の實母、**後ツレ**　月若の姉、**後ワキ**　直井左衛門

【所】　**第一段**　越後國　直井邸及び母の宅
第二段　同國　直井邸

【時】　冬十二月

【作者】　能本作者註文に世阿彌の作とある。

【梗概】　越後國直井の左衛門何某は二子を儲けた妻を離別して、これを姉娘と共に程近き長松といふ所に住まはせ、男の月若は跡目を相續させる爲にわが家に殘し、やがて又後妻を娶つた。さて直井は後妻に月若の事を賴んで、參詣に出かけた留守に、後妻は月若を虐げたので、月若は家出を決心して長松へ暇乞に行くと、また後妻が父の命だと僞

つて從者に連れ戻らせ、着物を脱がせて竹の雪を拂はせたので、寒さに堪へ兼ねて、終に死んでしまつた。情ある從者の知らせによつて、これを知つた母と姉とは歎き悲しんで、雪の中を掘つて月若の死骸を尋ね出したが、呼べど叫べどもとより答ふる聲はない。そこへ長井が歸つて來て、驚き悲しむと、兩親の歎きを憐んで、竹林の七賢が月若を蘇生させた。

【出典】昔から絶えない家庭悲劇繼子いぢめを主想としたものであるが、本曲直接の典據といふほどのものは見當らない。

【批評】繼子いぢめを主想としたわが文藝は、落窪物語を始めとして、室町時代のお伽草子にも數種あるが、謠曲には母子の情愛を描いた狂女物こそ多いが、繼子いぢめを取扱つたものは、たゞ一つ本曲があるだけである。尤も謠曲作者も父の愛の母性愛に及ばないことを認めてゐて、「雲雀山」「弱法師」などの父は人の讒言を信じてわが子を一度は捨てて居り、また子が繼母に視またいで、實母を慕ふ眞情をも認めて「松山鏡」にはこれを主想としてゐるが、本曲の如く繼子の虐待そのものを直寫したものは外にない。勿論この種の材料も文藝として全く無いものではあるが、本曲の脚色行文は決して秀れたものとはいへない。舞臺面の幾度か轉換することは、現在物の通弊であるとしても、シテ・子方等の出入が頻煩であり、その間に狂言が幾度か舞臺に出入して、甚しく緊張味を殺いで居り、文章も一體に混雜で、最も悲痛であるべき第七八節にしても、徒らに故事を引き綺語を弄んだだけで、深刻味が足りない。能本作者註文には世阿彌の作といつてゐるが、恐らくもつと後の作ではなからうか。

【一】
〇直井　直江の津。越後國中頸城郡、今の直江津。
〇長松　直江津の西にあり今の眞行寺は長松寺の趾であるといふ。

【一】
名乘笛にて、ワキ直井何某、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて出で、

ワキ「これは越後の國の住人。直井の左衛門何某にて候。さても某妻を持ちて候を。假初ながら離別して。あたり近き長松と申す所に置きて候。かの者二人の子を持つ。姉をば長松の母に添へ

【一】
第一段
舞臺は越後國直井何某の邸で、ワキ直井何某登場

直井　私は越後の國の住人で、直井の左衛門何某です。さて私は妻を持つてゐましたが、一寸した事から離別して、この近くの長松といふ所に住まはせて置くのですが、その妻との間に二人子どもがあつて、姉の方は長松の母親につけてあり、弟の

○一跡相續―跡目相續。
○妻を語らひ―妻を娶り。
○宿願―以前から望んでゐたこと。
○參籠―一七日とか三七日とか日を定めて社寺に參り日夜そこに籠つて祈ること
○やがて―間もなく、早く。
○至らぬ事―行届かないこと。

置き。弟月若をば某一跡相續の爲に、この屋の内に置きて候。かやうに候處に、又新しき妻を語らひて候。某この間宿願の事候ひて。あたり近き所に參籠仕り候間、月若が事を委しく申し置かばやと存じ候

ワキ「いかに渡り候か

狂言直井の後妻、美男鬘・着附箔小袖・女帶の裝束にて出で、

狂言女「何事にて候ぞ

ワキ「某は宿願の子細候ひて。あたり近き所へ參籠申し候。留守の間月若をよく御痛はり候へ。又この程雪氣に見えて候。雪降り候へば簾の竹損じ候間。召し仕ふる者に竹の雪を拂はせられ候へ

女「何と御物語と候や。さあらばやがて御下向候へ。又竹の雪の事は心得申し候。又月若殿の事よく／＼痛はれと仰せられ候。あら今めかしや候。妾が至らぬ事の候べき。御心安く思し召し候へ

ワキ「いや幼き者の事にて候間かやうに申し候。めでたくやがて下向申さうずるにて候

月若に自分の跡目相續をさせる爲に、この自分の家に住まはせて置くのです。このやうにしたところへ、又新しい妻を娶りました。ところで、私は先達來から望んでゐる願ひ事があるので、この近くの所へお籠りをしようと思ふについて、月若の事をよくいひつけて置かうと思ふのです」

〔見物人に自己紹介をして家庭の事情を述べ、さて狂言の後妻を呼び出し、雪が降つたらばよく拂はせるやうに、又月若を大切にするやうにいひつけ、參籠する [illegible]〕

【二】○とう〳〵　疾く疾くの音便。

○果報―前世の業因に應じて現世で報いられる結果。仕合。

○信濃なる―悲しい思ひをしてといひかけた。

○秩父の山―思ひを千々にするといひかけ、又父にいひかけた。秩父は武藏國にあるが、信濃に近いので、から續けたのであらうか。

○秋果てぬれば―父が飽きを秋にいひかけた。

○柞の森―山城の名所。秋も暮れて木葉が散り落ち、木蔭と頼む所もなくなつたとの意。はゝそに母の意を含め、繼母の頼りにならない悲しみを述べたのである

女「委細心得申して候。やがて御下向候へ

【二】ツキ中入。シテ月若の母、面曲見・鬘・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて出で、地謠座前に下に居る。

女（幕に向ひ）「いかに月若〳〵。用の事がある程にとう〳〵出さしめ。〳〵

子方月若、襟赤・着附縫箔・唐織壺折・長袴・扇の裝束にて幕より出づ。

女「もどかしや何をして居るぞ。早う出で候へ。父御は御物詣とて御留守にて候。惡狂ひばしさしますな。今又御申しにはこ月若が事頼むと御申し候が。これは定めて妾が惡しう當ると。そなたが告げ口ばし言うたものであらう。お主殿に聞きたうもない事を聞く。あら腹立ちや。構へて餘所へばかり行かしますな。腹立ちや〳〵（といひて狂言座に居る）

子方「げにや世の中に月若ほど果報なき者よもあらじ。明暮思ひを信濃なる秩父の山。秋果てぬれば柞の森。頼む方なくなりはてぬ。ただ長松におはします。母と姉御に暇を乞ひ。何方へも行かばやと思ひ候

といひて母の許へ行く心にて後見座にくつろぐ、

【二】狂言の後妻、子方月若を呼び出し、父に告げ口をしたであらうと責める。

月若「ほんとにこの世の中に自分ほど不仕合な者はまたとあるまい。毎日毎日悲しい思ひをして、父には飽かれ、繼母にはつれなくあたられ、頼りにするところもなくなつてしまつた。この上は長松においでになる母上と姉上とにお暇乞をしてどこへなりとも行きたいと思ふ」

と獨言をいつて、長松へ行く。

【三】

シテ月若の母、その場にて、

シテサシ「この程は松吹く風もさびしくて。伴ふものは月の影。人も訪ひ來ぬ隱れ家の。柴の樞のあけくれは。いつまで誰を長松の。みどり子故の住居かな

子方仕手柱際へ出で、

子方「いかに申し候。月若が參りて候

シテ「なに月若と申すか。あら嬉しと來りたるや。人あまた連れて來りたるか

子方「いや一人參りて候

シテ「あら心許なや。はや日の暮れてあるに。何とて一人は來りたるぞ

子方「さん候唯今參る事は繼母御の

シテ「ああ暫く。一名のらずはいかでそれとも夕暮の。面影變る。月若かな。あはれやげにわれ添

【三】

○伴ふものは月の影―自分と一所にあるものは、家にさし入る月影だけである。

○柴の樞の―小さい雜木で編んだ戸。明暮の序に用ゐたのである。

○誰を長松の―誰をか長く待つべきを地名にいひかけた。夫の心が變り果てたので待つ甲斐もないがとの意

○みどり子―愛する幼子。松の緑で緑とつゞけた。

○心許なや―氣がかりなことである。

○一名のらずは―了覺法師の歌に「名のらずはいかでそれとも夕暮の面影かはるはゝその杜

【三】

舞臺は長松の實母の住居となり、シテ月若の母登場。

母「この頃は松に吹き渡る風までが淋しくて、自分と一所にあるものといへば、たゞ月影ばかりで、誰一人訪ねてくれるものもなく、このあはれた隱れ家にいつまで待つてゐたとて、誰も來てくれはしないのだが、たゞわが子いとしさに生き永らへてゐることだ」

と夫に離別せられて淋しい思ひを述懐してゐると月若が來て、

月若「御免下さい、月若が參りました」

母「なに、月若が來たといやるのか、まあ嬉しい、よく來ておくれだ。供の者は多勢つれて來たかへ」

月若「いえ一人で參りました」

母「おゝ氣遣ひな。もう日も暮れてゐるのに、どうして一人で來たのだえ」

月若「はい唯今參りましたのは、繼母様が……」

母「あゝ一寸お待ち。そなたに會はなかつたら、まさかこれほどまでになつてゐようとは、どうして想像がつかう。まあ何

○かしづきしに—大切に育てたのに。
○梓弓—梓弓の矢といひかけて、やがての枕詞とし、引きかへてを呼び起す料とした。
○衣はただ鶉の—つぎはぎした着物を鶉衣といふので、かう續けたのである。
○木綿四手の—何とも更にいふべきを木綿にいひかけ、幣のかゝるを肩にかゝるといひかけた。木綿四手は木綿の布又は紙で作つた幣。
○風のたまり—風が着物にさゝへられて吹きとまり、身に當らぬこと。
○短夜の夢かや見れば—驚くはの序。
○臥所荒れたつ草むら—實母のあはれな住居を喩へていふ。

ひたりし時は。さこそもてなしかしづきしに梓弓。やがていつしかひきかへて。身に着る衣はただ鶉の。所々もつづかねば。なにとも更に木綿四手の肩にもかかるべくもなし。花こそ綻びたるをば愛すれ。芭蕉葉こそ破れたるは風情なれ

地下歌「いづくに風のたまりつつ。寒を防ぎけるらん。上歌「短夜の夢かや見れば驚くは。夢かや見れば驚くは。山田の鹿の如くなる臥所荒れたつ草むらに。尋ねて來る志親子ならでは。かくあらじ親子ならではかくあらじ

【四】

狂言女、舞臺に出で、

女、されはこそ以ての外の大雪にて候。いかに月若〳〵。月若が居らぬ。いかに誰かある

狂言太刀持、着附熨斗目・狂言上下・腰帯・扇・太刀の装束にて出て、

といふ變りはてた姿であらう。ほんとにかわいさうに、自分が一所にゐた時は、あのやうに大切に育ててゐたものを、私が去ると、はやもうこれまでとはうつて變つて、身につけてゐる着物は鶉衣のやうに、あちらこちら破れたまゝなので、まあ何といふことであらう、肩にも碌々かゝらないやうな始末だ。なるほど、花こそ綻びたのがよからう、芭蕉葉こそ破れたのが趣もあらう。人の着る着物が綻び破れて、どうなるものか。このやうな破れ衣を着てゐては、どうして風の防ぎやう、寒さの防ぎやうがあらう。一寸見ただけでも、たゞもう驚くばかりだ。でも、このやうな鹿の寢床のやうに荒れ果てたところへ、よく尋ねておくれた。親子の間でなくては、かうした厚い志はあるまい—

さわが子の訪ねて來たことを喜び、そのあはれな姿を見ては歎く。

【四】

一方[illegible]井の[illegible]では、後妻、月若の居ないことに氣がつき、父[illegible]の通り[illegible]の時へ[illegible]行つたのであらうと、父のお召だと欺いて、従者をして月若を迎へにやる。

○太儀な　骨の折れる、厄介な

【五】

○ます　女なさ

○なり　風采、服装

太刀「御前に候
女「月若はいづくにあるぞ
太刀「月若殿は御出でなく候
女「又例の長松の母の方へ告げ口に行つたものであらう。父の御召とて月若を連れて参り候へ
太刀「畏つて候。さても／＼太儀な事を仰せつけられて候。急いで長松へ参らばやと存ずる。いかに月若殿に申し候。殿の御召にて候間。急ぎ御帰りあれとの御事にて候
シテ「なに父御の召され候とや。あら悲しやたまたま来りたるものを。さりながら召しにて候はばとく参りて。又この程に来りて母を慰め候へ

太刀持狂言子方を伴ひてくつろぎ、シテ中入。

【五】

後見、雪綿を掩ひたる竹の作物を出す。狂言女笹を持ちて脇座に立つ。太刀持子方を伴ひて舞台へ出で、

太刀「いかに申し候。月若殿の御帰りにて候
女「いかに月若。お主は殿の御留守になれば長松へ行くは何事ぢや。殿の仰せには。月若に竹の雪を払はせよとの御事にて候。なう腹立ちや。そのなりは何事ぢや。この着たる物を脱ぎ。肌の物一つにて四壁の竹の雪を払はしめ（と唐織を脱がせ）

留守の家では、月若を迎への使が来たので、

せたにお父さまがお召しになるといふのか。たま／＼来てくれたのに、まあ悲しいことだ。でも、お召しとあれば、早く参つて、又近いうちに来て、この母を慰めておくれ」

月若は従者に伴はれて父の許へ帰る意、舞台から退場するので、シテ月若の母も退場する。

【五】

舞台はさながら長井の家で、従者が月若を連れて帰ると、後妻は月若の着物を脱がせ、肌着一枚にして、竹の雪を払はせる。

その扇もこちへおこさしめ。なう面憎くや／＼

といひて幕に入る。

○門をさす―門を閉づ。

子方『さりとては拂はでかくてあるならば

地』拂はでかくてあるならば。われのみならず。母上も姉御前も思ひは。長松の風。身にしむばかり更くる夜の。雪寒うして拂ひかね歸らんとすれば門をさす。明けよと叩けど音もせず。あら寒や堪へがたや。月若助けよ。げにや無常の荒き風。うき身ばかりつらきかなと。思ふかひなき月若は終に空しくなりにけり　終に空しくなりにけり

と死したる態にて子方くつろぐ。太刀持狂言舞臺に出で、

太刀「さても／＼痛はしき御事にて候。月若殿は空しくなり給ひて候。この由長松へ御知らせ申さばやと存ずる。あら痛はしや／＼

といひて幕に入る。

【六】

後ジテ月若の母、前の装束の唐織を脱ぎ、白水衣・腰巻箔・腰帯をつけ、後ヅレ月若の姉、面小面・鬘・鬘帯・着附箔・腰巻箔・

月若「おゝ寒い／＼。でも、かうして雪を拂はないでゐたならば、愈々繼母様の憎しみを増すことであらう。いや自分だけではない、母上や姉上もあの長松を吹き渡る風で寒い思ひをして居られることであらう。おゝ寒さが身に沁む、夜は更けて行く。あまりに雪が寒うて、拂ふことも出來かねて、家に歸らうとすれば、門が閉めてある。『こゝを明けてくれい』と叩いても、内からは音もしない。おゝ寒さに堪へられない。この月若を助けてくれ。荒々しい無常の風は、この不仕合な者にだけ辛く當るのか」

と、いかに歎いてもその效はなく、月若は終に死んでしまつた。

月若、寒さに凍え、雪に埋れて死んでしまつた態。從者は月若の死んだのを見て、氣の毒に思ひ、この事を長松へ告げに行く。

【六】

後ジテ月若の母、後ヅレ月若の姉、雪装束をして

月若を雪の中から掘り出す爲に雪掘をなして登場

○羅睺爲長子—羅睺は釋迦如來が在俗の時まうけた長子の名。釋迦如來も親子の情には變りがないとの意。法華經、授學無學人記品に「我爲太子時、羅睺爲長子、我今成佛道、受法爲法子」
○法藏比丘—阿彌陀如來が因位にあつて世自在王佛の所で出家修行した時の名。
○御子の太子を悲しみ—この出典未詳。
○鹿野苑—中天竺波羅奈國にある苑で、釋尊成道三七日の後、憍陳如等の五比丘を濟度した所。
○降るに思ひの積る—雪が降り積るにつけてわが子を思ふ悲しみが積る。
○消えしわが子の—死んだわが子の。消えしは雪の縁語。
○子を思ふ身を白雪の—子を思ふ餘り、われ身のものとも思はぬ狂ほしい振舞に氣がつかない、身を知らぬを白雪にいひかけた。
○降るに歸らぬ—雪が降れば普通の人はわが家に歸るのに、もの狂ほしい自分は却つて外へ出かけるとの意。
○花は根に鳥は古巣に—千載集、崇德院の御歌「花は

白水衣・腰帶の裝束にて、二人とも雪細のつきたる笠を被り雪篠を持ち、ツレを先に立てて出で、

母姉「げにげに生を受くる類ひ。誰か別れを悲しまざる　されば大聖釋尊も。羅睺爲長子と說き。又西方極樂の敎主法藏比丘は。御子の太子を悲しみ。鹿野苑に迷はせ給ふとこそ承りて候へとよ況んや人間に於てをや。誰かは子を思はざる

二人次第「降るに思ひの積る雪。降るに思ひの積る雪消えしわが子を尋ねん

地次第「降るに思ひの積る雪。消えしわが子を尋ねん

シテ一聲「子を思ふ。身を白雪の振舞は

地「降るに歸らぬ。心かな

ツレ二人「花は根に。鳥は古巣に歸れども

シテ「われは二度この道に。立ち歸らん事もかた絲の。一筋にただ思ひきり。忘れて年をふる雪の。

母姉「苟も生類と名のつくほどの者は、誰だとて、離別を悲しまないものはなからう。かの大聖釋迦如來も羅睺を長子として愛し給ひ、西方淨土の敎主の法藏比丘も御子の太子を失つては、悲しみのあまり鹿野苑にお迷ひになつたと伺つてゐるのだ。まして普通の人間で、誰が子を思はないものがあらう」

母姉「雪が降り積るにつけて、悲しい思ひも積るばかりだ。さあ亡くなつたわが子を尋ね出さう」

とわが家を立出で、

母「子を思ふあまり、心も亂れたこの身はもの狂ほしいわが振舞にも氣がつかず、雪が降つても家へ歸らうとはせず、却つて外へ出かけて行くのだ。

花は根に、鳥は古巣に、多くのものは一度離れてもまた元へ歸るが、自分は夫と別れては、二度元の家へ歸ることもならず、全く夫のことを思ひ切り、昔の事を忘れて月日を過して來たのではあるが、今またわが子を殺されて、深い恨みは積

根に鳥は古巣に帰るなり春の別れを知る人ぞなき」を引いた。○この道―夫の家をさしていふ。○かた糸の―帰らんことも難しを片糸にいひかけ、糸の縁で一筋とつゞけた。○年をふる雪の―年を経るを降る雪にいひかけた。○積りの恨み―離縁せられた恨みに、わが子を殺された恨みの重なることをいふ。○行く水に数ならぬ―古今集読人知らずの歌「行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」を引いた。○身は有明の―以下、この節の語釈本曲の末に記す。

【七】○曉梁王の園に　和漢朗詠集、謝観の賦「曉入梁王之苑、雪満群山、夜登庾公之楼、月明千里」を少し替へて引いた。梁王之苑は梁孝王の菟園をいひ、庾公之楼は庾亮の南楼をいふ。○湘浦の浦　支那舜の后、娥皇及び女英は舜の崩御を悲しみ、湘江の岸で泣き焦れ死をしたので、こゝに二

積りの恨みの深ければ。行く水に数ならぬ。身は有明の月若に。ただかきくれて五障の雲の隙よりもあくがれ出づるはかなさよ

シテ 上なき思ひは富士の嶺の

シテ 隠れぬ雪とも現れなば

地下歌 恥かしやいづくへやり身は小車のわが姿。

上歌 習はぬ業を菅蓑は。習はぬ業を菅蓑は。寒風もたまらず。いつを呉山にあらねども。笠の雪の重さよ老の白髪となりやせん戴く雪を払はんまづ笠の雪を払はん

【七】シテサシ 曉梁王の園に入らざれども。雪群山に満ち

ツレ 夜庾公が楼に登らねども。月千里に明らかなり

ツレ 恐ろしや見渡せば。ここは湘浦の浦かとよ。

み重なり、はかないこの身が後に残つて、いとしい月若を先立たせた悲しみに堪へられず、愛着の心に惹かされて、あの思ひ切つた夫の家へ出かけて行くとは、何といふ果敢ないことであらう。

餘りの悲しさに、かうして出かけはしたものの、もし人に知られたならば、ほんとに恥かしいことだ。どこへこの身を隠さう。この恥かしいわが姿。

これまでしつけない雪掻をする爲に、菅蓑を着けたものの、寒い風は防ぎやうもなく、例の呉山の雪ではないが、笠に雪が重く積つて、それがそのまゝ白髪ともなりさうだ。まづ笠の雪を拂ひませう」

こゝ、月若の埋れてゐる所に着いた態で、笠の雪を拂ふ。

【七】シテ 詩に詠まれてゐるやうに、曉に梁王の菟園に入つたわけではないが、雪がどこにもこゝにも降り満ち……」

ツレ 夜庾公の南楼に登つたわけではないが、月が遠くまで皎々と照つてゐます」

ツレ ても恐ろしい、こゝは恰も湘浦の浦

人の廟を作ると、廟前の竹に亡靈の涙で斑文のあとをつけたといふ故事。○孟宗　所謂二十四孝の一人で、母の爲に雪の中から筍を掘り出した。○引きかへて　反對に。○はや呉竹の　日の暮れるを呉竹にいひかけた。○窓の雪　晉書、孫康傳に「孫康少清介、交遊不雜、家貧無油、嘗映雪讀書、後官至御史大夫。」○谷を隔つる山鳥の　萬葉集に「足引の山鳥こそは、峰向ひに妻問ひすといへ……」古今和歌六帖に「雲のある遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつゝぞ寢る」など、山鳥は夫婦別々に住むものといひ習はしたので、月若の父が妻を離別したさまに比べていつた。○尾を履む峯の　山鳥の尾を虎の尾に轉じ、恐ろしい危い思ひをする喩とした。周易、履卦に「履虎尾不咥人亨」○世を鶯の　世を憂しと思ふを鶯にいひかけた。鶯は竹に縁のあるもの。古今集讀人知らずの歌に「世に經れば言の葉しげき呉竹のう

まだらに見ゆる雪の竹。涙や色を染むべき
ツレ「かの唐土の孟宗は。親のため雪中に入り筍をまうく
シテ「今われは引きかへて
地「子の別れ路を悲しみて。竹の雪をかきのくる。わが子の死骸あらば孟宗にはかはりたり。嬉しからずの雪の中や。思ひの多き年月も。はや呉竹の窓の雪夜學の人の燈火も。拂はばやがて消えやせん。谷を隔つる山鳥の。尾を履む峯の竹には虎や住むらん恐ろしや。世を鶯の聲立て煙は竹を白雪のあかしといへば須磨の浦の。海士の燒くなる鹽やらん

【八】
地「空に知られて木の下に。吹き立てて降る雪は狼藉か落花か
シテ「母は泣く泣く雪を掻けば

のやうだ。雪のかゝつた竹が斑に見えて、涙で竹の色を染めたやうだ」
姉「あの支那の孟宗は、親のために雪の中に入つて、筍を掘り出しましたが……」
母「今私はそれとは逆に、わが子の死んだのを悲しんで、竹の雪を掻きのけるのだ。そしてわが子の死骸を見出したならば、……やはり孟宗が喜んだやうな喜びは得られないのだ。嬉しくもない雪の中だ。思へば悲しい年月を過して來たことだ。この竹の雪——同じ竹の雪にしても、雪の光で夜勉強してゐる人にとつては、雪を拂つたらば、燈火を消したと同樣の歎きとならうが、夫婦別れをさせたこの竹には、虎が住んでもゐようか、ほんとに悲しいことだ。世の中を辛く思つて、泣き聲を立てて歎く胸の煙は、この竹の雪があかしに縁のあるものとすれば、須磨の浦の海士の燒く鹽煙にも擬へられようか」

【八】（と歎きながら雪を掻き、）
母「空に知られぬ木の花ではなくて、天から吹き立てて降る雪は、落花狼藉とでもいはうか」
と、母が泣きながら雪を掻くと、姉は

きふしごとに鶯の鳴く」
○煙は竹を白雪の―煙と見えたのが竹林であることを知らずを白雪にいひかけた。煙は思ひの煙より竹の煙に轉じ、更に下の鹽燒く煙を出す用意としたのである。竹を煙に見立てることは、和漢朗詠集白樂天の句に「煙葉蒙籠侵レ夜色」、同じく章孝標の句に「子猷看處鳥栖レ煙」などある。
○あかしといへば―白雪の光が明しを地名の明石にいひかけて須磨を呼び出した。
【八】
○空に知られて―拾遺集、紀貫之の歌に「櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」とあるを、これは誠の雪であるから、空に知られてと洒落れたのである。
○巣籠か落花か―落花巣籠といふ熟語を二つに分けて用ゐた。
【九】
○四壁―周圍、家の外廓。

ツレ「姉は父御を恨みて人知れぬ涙せきあへず
地「すはや死骸の見えたるは
シテ「いかに月若母上よ
ツレ「姉こそわれと
地「呼べども叫べども。答ふる聲のなどなきぞ。消えよと思ふ。雪は積りて月若が別れを何にたとへなん別れを何にたとへなん

【九】

後ツレ直井何某前と同じ裝束にて出で、
後ツレ「この間諸願成就して。唯今下向仕り候。あら不思議や。某が四壁の内に。人の泣く聲の聞え候はいかに。あら心もとなや候や。さればこそいかに姫。これは何と申したる事ぞ
ツレ「さん候月若長松へ來り給ひしを。父御の召しとて歸りて候へば。竹の雪を拂へと仰せ候程に拂ひて候へば。もとより衣は一重なり。寒風

父の仕打を恨んで、人知れず流れ落ちる涙がとまらないのである。
歎きながら雪を掘つてゐるうちに、月若の死骸を見つけて、
母姉「おゝ、死骸が見えたわ」
母「これ月若、母ですよ」
姉「私が姉ですよ」
母姉「いかに呼んでも叫んでも、答へる聲のないのは、どうしたことであらう。消えてくれればよいと思ふ雪は愈降り積り、生き返へればよいと思ふ月若は死に消えてしまふ。あゝこの悲しい別れを何に喩へよう」

【九】

後ツレ直井何某、參詣を果し歸宅の態で登場。
直井「先達來の諸願を成就して今歸つたのです（といつて月若の母姉の方を見）。おや不思議だ。自分の屋敷内で人の泣き聲のするのは、どうしたことであらう。あゝ氣がかりなことだ。（二人を見て）やあ。やつぱり人がゐたのだ。これ姫、一體どうしたといふことだ」
姉「はい、月若が長松へ參りましたのを、お父さまがお召しになるといふので歸りますと、竹の雪を拂へと仰しやつたので、それを拂ひましたが、もと〳〵着物は一

に責められ空しくなりて候を。情ある人の長松へこの由かくと申し候程に。母上これまで御出でにて候。いづれも親にてましませども。母御はこれほど悲しみ給ふに。父御前は子をば思ひ給はぬぞや。繼母御をば恨むまじ。唯父御こそ恨めしう候へ

ツレ　いや某は月若に竹の雪を拂へと申したる事は　ゆめゆめなき事にて候ぞとよ。定めて人の教戒にてぞ候らん。これと申すもとにかくに。唯某が科にてこそ候へ。あら面目なや候

シテ　身を梁の燕のならひ。すみねたき事を聞きながら。様をも今までかへざるは。彼を思ふ故なるに。そも繼母はいかなれば。この月若をば殺しけむ。餘所の歎きは一旦の思ひ。唯憂き身ひとりの歎きぞかし。命惜しとも思はれず

枚てあり、寒い風に責められて、亡くなつてしまつたのです。それを情のある人が長松へ知らせてくれましたので、お母さまがこゝまでお出でになつたのです。お二人とも親ではありながら、お母さまはこれほどお歎きになるのに、お父さまは子どもの事を思つては下さらないのです。私は繼母様を恨みません、たゞお父さまがお恨めしうございます」

直井　いや自分は月若に竹の雪を拂へといつた事は決してないのだ。定めし繼母がいひつけたのであらう。が、これといふのも、いづれにしても全く自分の罪なのだ。あゝ面目もないことだ。

母　御夫婦睦しくお暮らしになると、嫉ましい事を聞きながらも、今まで尼にもならずにゐましたのは、あの子を思ふからでございます。それだのに、一體繼母は何と思つてこの月若を殺したのです。他人の悲しみはその場限りの一時のもので、いつまでも歎きの薄らがないのは、親身の私だけです。もう命も惜しいとは思ひません。

○ゆめゆめ—決して、少しも。
○教戒—いひつけ。
○梁の燕のならひ—白氏文集、上陽白髪人をあはれむ詩に「宮鶯百囀愁厭レ聞、梁燕雙栖老休レ妬」とあり、梁の燕のならびすみ(雙栖)とは夫婦の睦しく暮らす喩。これをならひ、すみ、と二つに切り、日常を詠んで言つてある。「[illegible]」語釋參照。
○ねたき事—夫と後妻とが睦しくしてゐるといふ嫉ましいこと。
○様をも今まで—今まで尼ともならないでゐるのは。

ツキ『身は白雪と消えばやなん

地下歌『理や面目なや思はぬ外の歎きかな。上歌』二人の親の悲しみの。不可思議なる憐みにや。虚空に聲ありて。竹林の七賢竹ゆゑ消ゆる緑子を。又二度返すなりと。告げ給ふ御聲より。月若生きかへり悦びは日々に添ふ

【一〇】

地（キリ）『かくて親子にあひ竹の。かくて親子にあひ竹の。世をふる里をあらためて。佛法流布の寺となし。佛種の緣となりにけり。二世安樂の緣深き。親子の道ぞありがたき親子の道ぞありがたき

直井　自分が死んでしまひたい。そなたの歎くのは尤もだ。面目のないことだ。思ひも寄らぬ歎きに會うたものだ」

と二人の親が悲しんだので、不思議にも憐みを感じてか、空中に聲がして、『竹林の七賢の力により、一度亡くなつた幼子を二度蘇へすのである』とおつげになる御聲がするや否や、月若は生き返つて、爾來悦びは日に日に加はることとなつた。

【一〇】

かうして、親子二度相逢ふことが出來て、今までの住家を改めて佛法を弘める寺となし、人を佛に導き入れる緣となつた。かくて現世安穩來世極樂往生の深い緣を作つた親子の間柄は實にありがたいものである。

○思はぬ外の―思ひの外の

○竹林の七賢―支那晋の代世を遁れて琴詩酒を友とした人達で、晋書、嵆康傳に「康所ㇾ與交ㇾ者、惟陳留阮籍、河内山濤、河東向秀、沛國劉伶、籍兄子咸、瑯琊王戎、遂爲竹林之遊、世所ㇾ謂竹林之七賢也」竹の緣で月若の救主にこの人達を出したのである、

【一〇】

○あひ竹―數管を同時に合せて吹く笙の吹き方の名。親子に逢ふといひかけて、竹の節を世にいひかけた。以下終りまで「木賊」のキリと同文。

○佛種―佛種性、佛性、佛果に至るべき種子を具すること、

○二世安樂―現世安穩、來世極樂往生。

〔考　異〕

諸　流「寶　喜」

寶・喜の間著しい相異はない。

古謠本「觀世流元祿八年本

忠信（ただのぶ）　觀（寶）

解説

【能柄】四番目　二段劇能

【人物】ツレ　源義經、ツレ　太刀持、ワキ　伊勢三郎義盛、シテ　佐藤忠信、ツレ　討手（二人）、ツレ　吉野僧兵（三人又は五人）

【所】大和國　吉野山

【時】文治元年十一月

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。

【梗概】賴朝と不和になつて都落した源義經は、吉野に忍んでゐたが、この山の僧兵の評議が變り、今夜義經を夜討にするとの事を、伊勢三郎が聞き知つたので、佐藤忠信一人を跡に留めて防矢を射させることとし、義經主從は山を落ち延びた。夜も更けると、果して僧兵が襲つて來たので、忠信は高櫓に上つて敵を射、空腹を切つて谷に飛び下りたが、僧兵はたほも追つて來たので、忠信はこれを斬り拂ひ、蜚鳥の如くに飛び翔つて、都へさして急いで行つた。

【出典】　義經吉野落について、源平盛衰記には卷四十六に、

義經都を落ちて金峯に登つて、金王法橋が坊にて、具したりし白拍子二人舞はせて、世を世ともせず二三日遊び戯れて、あゝさてのみあるべからずとて、白拍子を此より京へ返し送るとて、金王法橋に誂へ附けて、年來の妻の局、河越太郎が娘計を相具して下りにけり。

と記してゐるだけであり、殊に伊勢三郎義盛については、

義經都を落ちける時、義盛君の落ちつき給へらば馳せ參るべしと樣々契り申して、思ふ樣ありとて暇を乞ひて、故郷伊勢國に下る。その時の守護人首藤四郎を伺ひ討つ。國中の武士追つかゝりければ、義盛鈴鹿山に逃げ籠りて戰ひけるが、敵は大勢なり、矢種射盡して自害して失せにけり。

と記してゐて、吉野には隨從してゐない。平家物語卷十二にも、

判官の乘り給へる船は、住吉の浦へ打ち上げられて、それより吉野山へぞ籠られける。吉野法師に攻められて奈良へ落つ。

とあるに過ぎない。本曲と同樣の事を記してゐるのは義經記であつて、その卷五に、義經が都を落ちて吉野山に入ると、吉野の衆徒は「九郎判官殿は中院谷におはすなり、いざや寄せて討ち取りて、鎌倉殿の見參に入らん」と評議した。伊勢三郎はこれに對する所置の謀議に於て「申すにつけて臆病の致す所に候へども、見えたる徴なくて自害無益なり。衆徒に逢うて討死詮なし。たゞ幾度もあしきのよからん方へ、一先落ちさせ給へ」と進言して、義經主從はこゝを忍び出ることとなつた。たゞ佐藤忠信は「君は御心安く落ちさせ給ひ候へ、忠信は此處に止まり候うて、麓の大衆を待ち得て、一方の防矢仕り、一先落し參らせ候はばや」といつて、義經の鎧太刀を戴いて跡に踏み留まり、大衆と奮鬪し、寺を燒いて空腹を切り、敵の眼を欺いて後の山へ飛び越へ、二度都へ入つた、と記してゐるが、本曲が世阿彌の作であるとすれば、義經記は本曲以後の制作かとも疑はれ、俄かに本曲の典據と速斷することは出來ない。

【批評】　よく纏つた脚色である。第一段にはたゞ筋を運んだに過ぎないといふあつけなさを感じないでもないが、第二段には忠信の勇武な様がよく描かれてゐる。「吉野静」は本曲と同じく義經吉野落の插話を取扱つたもので、本曲のシテ忠信をツキとし、靜御前をシテとしてこれに舞を演ぜしめるもので、本曲と相對して前後照應するものである。

【一】

ツレ源義經、風折烏帽子・襟淺黄・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ツレ太刀持、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて太刀を持ち舞臺に入り、義經は脇座へ行き床几にかゝり、太刀持はその次に坐す、

名乘笛にて、ツキ伊勢三郎、梨打烏帽子・白鉢卷・長直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束にて出で名乘座に立ちて、

ツキ「これは判官殿の御内に。伊勢の三郎義盛にて候。さてもわが君判官殿は。この吉野を頼み御座候處に。衆徒の詮議變り。今夜夜討すべき事一定のやうに申し候間。この事申し上げばやと存じ候

【二】

といひて義經に禮儀して、

ツレ義經ツキに向ひ、

ツキ「いかに申し上げ候。義盛が參りて候

ツレ「此方へ來り候へ

ツキ「畏つて候

といひて舞臺の眞中に出で義經に禮儀す、

ツレ「さて唯今は何の爲に來りてあるぞ

第一段

【一】

舞臺は大和國吉野山、義經の泊まつてゐる坊舍で、ツレ源義經、ツレ太刀持を隨へて、まづ登場してある。

ツキ伊勢三郎義盛登場、

義盛「自分は九郎判官義經殿の家來で、伊勢三郎義盛といふ者です。さてわが主君判官殿はこの吉野の僧兵を賴りにしておいでになつたところ、僧兵等の相談が變つて、今夜主君を夜討にするに相違ないといふことなので、この事を主君に申し上げたいと思ふのです」

と見物人に自己紹介して事件の概略を述べ、さて劇に移つて、義盛は義經の坊舍へ來て態ゞ、

【二】

義盛「申しあげます、義盛が參りましてございます」

義經「こちらへお出て」

義盛「畏りました」

義盛、義經の前に出る。

義經「さて唯今は何の用事で來たのだ」

【一】

○判官—檢非違使尉で、源義經をさす。

○伊勢の三郎義盛—伊勢の國江村の人で、初め江の三郎といつた。義經に隨ひ軍功を立てた。吾妻鏡によれば、義經が西海へ逃れた時伊勢に歸り、山内瀧口三郎經俊と戰つて自殺したのであるが、義經記には本曲と同樣吉野落の評議に與つたと記してある。（安宅參照）

○吉野—大和國吉野郡にある吉野山。山中の藏王權現に團屬した僧兵は叡山及び奈良興福寺のものと相竝んで勢力を持つてゐた。

○衆徒—僧兵。平安朝以來大きな寺院には武を專らにする僧侶があつて強い勢力を持つてゐた。

○詮議—評議して定めること。

【三】

○一定—全く確かなこと。

○幾ばくの—数多くの。
○朝敵の虚名—頼朝が義經の心中を疑つて遂に追討の宣旨を申し請けたことをいふ。
○開く—逃げ落ちる意の武者詞。
○防矢—敵の襲撃を防ぎ止める爲に矢を射ること。
○路次—途中。
○御諚—仰せ。

ワキ「さん候唯今參る事餘の儀にあらず。當山の者ども心變りし。今夜夜討すべき事一定のやうに申し候間。この事申し上ぐべき爲に參りて候

ツレ「これは眞にてあるか

ワキ「さん候

ツレ「口惜しやわれ幾ばくの難を遁れ。命を重んずる事も。朝敵の虚名を晴らさんその爲なり。それに當山の衆徒夜討すべきを告げ知らする條。これ偏に天の御加護なり。とにかくにわれは夜に入りこの所を開くべし。誰か一人留まり防矢を射。その後命を全うして。路次にて追つつくべき者やある。義盛計らひ候へ

ワキ「御諚畏つて承り候さりながら。某を始め皆いづくまでも御供とこそ存じ候べけれ。恐れながら誰にても召し出だされて。直に仰せつけら

義盛「はい唯今參りましたのは別の事でもございません。この吉野山の者どもが心變りして、今夜夜討にくるに相違ないといふことなので、この事を申し上げる爲に參りました」

義經「それはほんとか」

義盛「さやうでございます」

義經「殘念なことだ。自分が色々の難儀を遁れて、命を大切にしてゐるのも、朝敵といふ汚名を雪ぎたい爲なのだ。その際、この山の僧徒が夜討にくることを告げ知らせてくれて、危い命を遁れることが出來たのは、全く天がお守り下さつたのだ。とにかく、自分は夜になればこの所を落ち延びよう。誰か一人跡に殘つて、矢を射て敵の襲撃を防ぎ、その上命を無事に助かつて、途中で自分に追つついてくるやうな者がたからうか。義盛取計つてくれい」

義盛「仰せはよく承りましたが、私を始め一同のもの皆、どこまでも主君のお供をしたいと存じて居るのでございませう。恐れながら誰なりともお召出しになつてお直々に仰せつけて戴きたう存じます」

（一）佐藤忠信――陸奥信夫の佐藤莊司元治の子で、三郎繼信の弟。兄は八島の戰に義經に代つて討たれ、弟忠信はその後も義經に隨ひ、吉野で奮戰した後、再び京都に上り、文治二年九月糟谷有季の兵に襲はれて自殺した。時に年二十六。「吉野靜」「攝待」參照。

【三】

れよかしと存じ候

ツレ　それこそ我等が思ふところなれ。さらば佐藤忠信を此方へと申し候へ

ワキ　畏つて候

といひて立ち、橋懸一の松へ出で幕に向ひて、

ワキ　いかにこの家の内に忠信の渡り候か

【三】

シテ佐藤忠信、侍烏帽子・樣花色・着附厚板・着込側次・掛直垂・白大口・腰帶・小刀・扇の裝束にて幕より出で、橋懸三の松に立ちて、

シテ　誰にて渡り候ぞ

ワキ　君よりの御使に義盛が參じて候（シテ辭儀）少し御用の事候へば。御參りあれとの御事にて候

シテ　畏つて候

二人とも舞臺に入り、眞中にてツレに辭儀して、

ワキ　忠信參りて候

といひてワキは地謠座の前へ行き下に居る、

ツレ　いかに忠信。當山の者ども心變りし。今夜夜

義經「それは自分の考へてゐるところだ。それでは佐藤忠信にこちらへ來るやうにいつてくれ」

義盛「畏りました」

橋懸は佐藤忠信の居る所の體で、義盛橋懸へ出て

義盛「もうしこの家に忠信殿はお出でか」

【三】

シテ佐藤忠信登場、

忠信「どなたです」

義盛「主君よりの御使として義盛が參りました」

忠信辭儀をして敬意を表する。

義盛「少し御用の事があるので、御出でなされいとの仰せです」

忠信「畏りました」

二人とも舞臺に入り義經の前へ出、

義盛「忠信が參りました

義經「おい忠信、この山の僧兵どもが心變

討すべき事一定のやうに申し候。とにかくにわれは夜に入りこの所を開くべし。汝一人留まり防矢を射。その後命を全うして。路次にてやがて追つつき候へ

シテ「御諚畏つて承り候さりながら。某が事はいづくまでも御供に召し具せられ候ひて。餘人に仰せつけられ候へ。もし辭し申す者あらば。その時御意をば背き申すまじく候

ツレ「いや汝を賴む上は。とかくの事はあるまじく候

シテ「御意をばいかで背くべき。しかも一人選まれ申し。防矢仕れとの御諚。弓矢取つての面目なれば。忝うこそ候へとよさりながら。わが君を始め奉り。「皆人々に御名殘こそ惜しう候へ

〔と地謡座を見渡す〕

○とかくの事—かれこれとする事。

○御意—仰せ。

○弓矢取つての—武士としての。

りをして、今夜夜討に襲つてくるに相違ないといふことだ。とにかく自分は夜になればこの所を落ち延びようと思ふ。お前は一人跡に殘つて敵の襲撃を防ぎ、その上無事に命を助かつて、途中で自分に追つついてくるやうに」

忠信「仰せ畏つて承りました。しかしどうか私はどこまでもお供にお召し連れ下さいまして、このお役は他の人に仰せつけ下さいませ。もしその者がやはり御辭退致しましたならば、その時には私が仰せに背かずお請け申し上げます」

義經「いやお前を賴みにする上は、かれこれ他の者にいひつけることはいるまい」

忠信「わが君の仰せには決して違背致しません。殊に特に私一人をお選び遊ばして、敵を防げとの仰せは、武士の身にとつて名譽なことでございますから、誠にありがたい仕合に存じます。たゞ皆の方々にお名殘惜しう存ぜられます」

○不覺の涙―武士としてのあきらめを忘れ、思はずも流れ落ちる涙。

○間道―抜け道。

○かまへて―氣をつけて。必ず。

○涙なるらん―使ひもなしといひ[illegible]

地、不覺の涙を抑へて御前を立つ、皆あはれにぞ覺ゆる

（とシテしをりながら立ち、後見座にくつろぐ、）

地、かくては時刻移るとて、かくては時刻移るとてわが君を始め奉り門前を出でて間道より。密かに忍び出で給へば

（ト ツレ義經立ちて橋懸へ行き、太刀持及びツキこれに從ふ、シテも義經の後に從ひて仕手柱際まで行き橋懸の方を見送りて、）

シテ、忠信暫しは御供し

地、御暇申し留まれば（と下に居り）。かまへて命を全うして（ツレシテにあしらひて）御供に參らずは。不忠なるべし心得よと。涙を流させ給へば（とツレしをりながら幕に入る、）忝しと忠信は唯一人留まる心のたよりも涙なるらんたよりも涙なるらん

（ト立ちてしをりながら、ツレ・ツキの幕に入るを見送り、後見座にくつろぎ【物着】。白鉢巻をし赤上頭懸をかけ、襷をして太刀を挿し弓矢を持つ。）

と思はず流れ出る涙を抑へて、義經の御前を立つ。これを見て皆あはれに感じた。

かうしてゐては時が過ぎるといふので、わが主君義經を始め一同の人達が寺の門前を出て、抜け道から密かに落ち延びると、忠信は暫くは君のお供をし、やがて御暇を申して、後に居殘ると、義經が、

義經「きつと命を無事に助かつて、後から追つつくやうに。死んでしまつては不忠であるぞ、よく氣をつけよ」

といつて涙を流されるので、忠信は『ありがたうございます』と、いつたものの、唯一人居殘つては、さぞ便りもなく、涙がこぼれ出ることであらう。

[illegible]

【四】

○吉野川—大和國大臺が原と高見山から發して吉野山の麓を流れる川。

○波うち寄する嵐—吉野衆徒の襲擊する樣の形容。

○坊中—坊舍の中。坊は寺僧の分宿してゐる所。こゝに參詣者をも泊まらせる。

○わりなく—餘儀なく。

○はかばかしや—はき〳〵した、けなげなことだ。

後見、一疊臺を地謠座の前に置く。シテ裝束を整へてこれに腰をかく。

【四】

一聲の囃子にて後ヅレ(立衆)法師武者三人(又は五人)、沙門帽子・着附無色厚板・着込側次・水衣・半切・腰帶・太刀(重ヅレは長刀を持つ)の裝束にて襷をかけ、同討手二人、白鉢卷・着附厚板・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束にて橋懸に立ち並び、

立衆一同 一聲」吉野川。水のまにまに騷ぎ來て。波うち寄する。嵐かな

立衆の一人(重ヅレ)舞臺際に進み、

立衆「いかにこの坊中へ案內申し候

シテ「今は夜更け人靜まるに。案內申さんとは如何なる者ぞ

立衆 わりなく賴朝よりの仰せに從ひ。當山の者ども判官殿の御迎ひに參りたり。疾う疾う出でさせ給ふべし

シテ あらはかばかしや忝くも。わが君に思ひかからんとや。よしまづ軍の試みに。『この矢一筋受けて見よと(と立ちて臺の上に上り)

【四】

第二段

舞臺は前に同じく、佐藤忠信は身仕度を整へ敵を待ち構へてゐる。

後ヅレ僧兵多勢登場。

僧兵「吉野川の水を湧き立たせて、波を岸にうち寄せる烈しい嵐のやうな、そのやうな烈しい勢ひて、うち襲ふのだ」

といつて、義經の泊まつてゐた坊舍に着いた態で

僧兵の一人が忠信に近づき、

僧兵「もうし、この坊の方にお賴み申す」

忠信「今は夜も更け人も寢靜まつたのに、案內を請ふのは何者だ」

僧兵「賴朝殿の仰せにより是非なく、この山の者が判官殿のお迎へに參つたのだ。早くお出でなされい」

忠信「おゝ、小生意氣な、勿體なくもわが主君に手をかけようとするのか。よし、まづ軍始めの試みに、この矢を一本受けて見よ」

地「高櫓に走りあがり。高櫓に走りあがり。中差取つてうち番ひ。よつぴいて放つ矢に（と矢を放つ）。眞先かけたる武者あまた。一矢にどうと轉べば目を驚かし（と立衆の一人打たれたる心にて切戸より入る）肝を消して一度にどつとぞ褒めたりける。刀を抜き持ちて（シテ太刀を抜き）刀を抜き持ちて。弓手の脇より、馬手の脇へ。一文字に切るとぞ見えしが虚腹切つて。櫓より後の谷にぞ轉び落つ（と臺より飛び下り橋懸へ行く）

地「敵の兵これを見て。寄れや者ども首を取れと（殘りの立衆臺によりて）一度にばつと寄り。うち破り亂れ入り。喚き叫んで震動すれば

シテ「その隙に忠信は（と舞臺に入り、これより立衆と切組、

地「その隙に忠信は。かねて用意の小太刀おつ取り密かに忍び出で。荊からたち。分けつくぐり

と、忠信は高櫓に走りあがり、箙の中差を取つて弦にかけ、よく引きしぼつて矢を放つと、先頭に立つてゐた僧兵が多勢、一本の矢でどうと射ころばされたので、僧兵達は眼を丸くして驚きたまげ、一度にどうと忠信の武勇を褒めた。忠信は刀を抜いて、左の脇から右の脇へかけて、眞一文字に腹をかき切るやうに見せかけて、櫓から後の谷に轉び落ちた。

敵の僧兵はこれを見て「さあ皆の者、彼に寄り進め、あの首を取れ」といつて、一度にばつと忠信に寄り進んで、櫓をうち破り、中に亂れ入り、わめき叫んで、あたりを震動させた。

その隙間に、忠信は前から用意してゐた小太刀を手に持つて、密かに谷から忍び出で、荊からたちの中を踏み分けて、義經の後を慕つて行くと、僧兵の中にこれを見咎める者があつて「あれ

○高櫓―高く築いた櫓。城・寺の楼門などに築いた物見の建物。
○中差―箙の眞中にさし添へた、普通の矢とはちがつた鏃の鋭い矢。
○うち番ひ―矢を弓の弦にかけること。
○よつぴいて―よくひきての音便。弦を十分に引きしぼつて。
○肝を消し―驚きの甚しい形容。
○弓手―左。
○馬手―右。
○虚腹切つて―切腹するやうに見せかけて。
○寄れや者ども―寄り進め皆の者ども。
○喚き―わめき。
○小太刀―佩き添へた太刀。大太刀に對していふ。
○荊からたち―からたちは枳殻ともいふ刺の多い木。

つ慕ひ行くを。怪しむる者ありて。あれはいかにと呼ばはりかくれば、地に伏し隠れ。暗きを便りに忍ばんとするを、遁すまじとて走りかかつて拂ふと見えしが眞向割られて二つになれば（立衆切られて切戸より入る）。續く兵大太刀かざし。打つ太刀を受け流し諸膝かけて。切り放し通つて（重ヅレ切られて切戸より入る）。今はかうよと遥かの谷を。蝶鳥の如くに飛び翔り（と橋懸へ駆け行き）蝶鳥の如くに飛び翔つて。都をさしてぞ。急ぎける

（と三の松にて留拍子を踏む。）

は何だ」と大聲を立てるので、忠信はまた地に伏して隠れ、あたりの暗いのを幸ひにまた忍び出ようとすれば、僧兵はこれを遁がすまいとして走りかゝり切り拂はうとした。それを忠信に眞向から二つに切り割られると、後に續く僧兵がまた大太刀を振りかざして、斬つてかゝつたが、忠信はこれを受け流して、その兩膝を切り放してしまひ、今はこれまでだと、遥か遠くの谷を蝶や鳥のやうに飛びかけつて、都へさして急いで行つた。

○慕ひ行く―義經の跡を慕ひ行く。
○諸膝かけて―兩膝ともに切り放つこと。
○今はかうよ―今はこれまでである。

〔考　異〕

諸流（觀寶）

【三】……（寶）御諚（寶仰せ）畏つて承り候さりながら、某が事はいづくまでも御供に召し具せられ候ひて……（ノ）いや汝を……（ここ）御意をば……恭うこそ候へとよさりながら（寶とこそ存じ候處に、御跡に留まり防矢仕れとの御事、弓矢とつての面目なりさりながら、心に任せぬは軍の習ひ。われ奥州を出でしよりも、參らせたりし一命の、この時や期し候らん（寶）ただ返す〳〵も）……（ここ）忠信暫しは御供し……御暇申し……便りも無なるらん（寶忠信は蹴割りて、御跡遥かに見送りて、敵をこそは待ちゐたれ）……【四】……（寶）高櫓に走り……眞先かけたる武者數多一矢にどうと……その隣に……（寶）その隣に……都をさしてぞ急ぎける（寶若武者一々射落しければをめき叫んで

亂れ入る。シテ「今は忠信これまでなり。地「今は忠信これまでなりと。虚腹切つて遥かの谷に落ちければ。敵の兵亂れ入るを。兼ねて用意の細道づたひ。谷陰草木を分けつ滑りつ隱れ行くを。寄手は怪しめあれは如何にと呼ばはりかくれば地に伏し倒れ。暗きを便りに忍びけるを。逃すまじとて走りかゝるを拂ふと見えしが眞向割られて二つになれば。續く兵太刀さしかざし。討つてかゝるをひらりと飛んで。諸膝かけて斬落し。今はかうよと遥かなる。谷を飛び越え峯を分けて。都をさしてぞ急ぎける」

忠度（ただのり）

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】二番目 複式夢幻能

【人物】**ワキ** 僧（俊成御内の者）、**ワキツレ** 同従僧（二人）、**前シテ** 老樵夫（忠度の靈）、**狂言** 所の者、**後シテ** 平忠度

【所】攝津國 須磨

【時】鎌倉初期 春（三月）

【異稱】〔忠則〕とも書く。古く〔薩摩守〕〔薩摩守忠教〕又〔短册忠度〕といつた。

【作者】能作書に應永の新作として〔薩摩守〕を擧げ、世子六十以後申樂談儀にもこれを世阿彌の作と記し、能本作者註文及び二百十番謡目錄に〔忠度〕を世阿彌の作として擧げてゐる、金春禪竹の歌舞髓腦記には〔薩摩守忠教〕を軍體寵深花風として擧げ、禪鳳習道目錄にも〔短册忠度〕のことを記してゐる。親俊日記天文七年二月十三日の條に〔忠度〕演能のこと、言經卿記文祿四年三月二十六日の條に同じく註釋のことを記してゐる。

【梗概】俊成卿に仕へてゐた者が、主の歿後出家して西國行脚に赴く途次、須磨で一人の老樵夫に會つた。もはや日も暮れたので、この老人に一夜の宿を請ふと、老人は花の蔭に上越す宿はない、この木が「行き暮れて」と詠んだ忠度の墓標であるから、よく回向し給へと勸

める。僧はいはれるがまゝに誦經すると、老人は囘向を喜び、また夜の夢に現れようといつて消え失せる。その夜僧の夢に、忠度の靈が現れ出て「行き暮れて」の歌は千載集に入れられたが、勅勘の身の悲しさに、讀人知らずと書かれたのは殘念であるから、定家に話して作者の名をつけてくれと賴み、生前、平家都落の時、歌の爲に途中から都へ引返したこと、一の谷の合戰に岡部六彌太と組んで討たれたこと、六彌太が首をとつた後、箙の中から「行き暮れて」の短册を見出したことなどを語り、なほよく囘向を請うて消え失せる。

【出典】忠度の歌を千載集に入れられたことは、平家物語卷七「忠度の都落の事」、源平盛衰記卷三十二「落行人々歌附忠度自ㇾ淀歸謁二俊成一事」に、岡部六彌太に討取られたことは、平家物語卷九「忠度の最後の事」、源平盛衰記卷三十七「忠度通盛等最後事」に出てゐる。

本曲の據つたと思はれる平家物語の文を擧げると、詠歌の事については、

薩摩守忠度はいづくよりか歸られたりけん、……五條の三位俊成の卿のもとにおはして……申されけるは、「先年申し承つてより後は、ゆめゆめ疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は京都の騷ぎ國々の亂出で來、剩へ當家の身の上に罷りなつて候へば、常に參り寄ることも候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出で來て、その沙汰なく候條、たゞ一身の歎きと存ずる候。この後世靜まりて、撰集の御沙汰候はゞ、是に候卷物の中に、さりぬべき歌候はゞ、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はゞ、遠き御守とこそなり參らせ候はんずれ」とて、日頃詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百餘首書き集められたりける卷物を、今はとて打ち立たれける時、是に取つて持たれたりけるを、鎧の引合より取出でて、俊成の卿に奉らる。……その後世靜まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有樣、いひ置きし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の卷物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勘の人たれば、名字をばあらはされず、故鄕花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、よみ人知らずと入れられたる。

さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな

忠度最後の事は、

薩摩守忠度は西の手の大將軍にておはしけるが、その日の裝束には、紺地の錦の直垂に黑絲の鎧着て、……いとさわがず控へ控へ落ち給ふ處に、武藏國の住人岡部の六彌太忠純、よき敵と目をかけ、鞭鐙を合せて追ひかけ奉り、……いか樣にもこれは平家の公達に

てこそおはすらめとて、押し竝べてむずと組む……薩摩守は聞ゆる熊野そだちの大力、屈竟の早業にておはしければ、六彌太を摑うで——取つて押へて首を掻かんとし給ふ處に、六彌太が童、後ればせに馳せ来て、急ぎ馬より飛びて下り、討ち刀をぬいて、薩摩守の右の腕を臂のもとよりふつと打ち落す。薩摩守今はかうとや思はれけん、「暫し退け、最後の十念唱へん」とて、六彌太を摑うで、弓丈ばかりぞ投げ退けらる。その後西に向ひ、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」との給ひもはてねば、六彌太うしろより薩摩守の首をとる。よい首討ちたりとは思へども、名をば誰とも知らざりけるが、箙に結びつけられたる文を取つて見ければ、旅宿花といふ題にて歌をぞ一首よまれたる、

行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし　忠度

と書かれたりける故にこそ、薩摩守とは知りてけれ、

【寛評】　武將を主人公とした修羅物ではあるが、その主人公忠度は、戰死する最後まで和歌に心を寄せた歌人でもあるから、勇ましい中に優しみの漂い、世阿彌の花傳書物學條々、修羅の項に「源平たとの名のある人の事を、花鳥風月につくりよせて、能よければ、何よりもまたおもしろし、是ことに花やかなる所ありたし」といふ條件に適つた曲柄である。曲の構造について見れば、前段第一節にワキ道行の代りに、シテの出のやうにサシ謠・下歌・上歌を用ゐて、その文辭も「沖波遠き小舟かな」と留めて所謂「平着」（旅程を何々に着きにけり」と最後まで述べないで中途で切れてゐるもの）とし、殊に後段第八節第九節に、普通の曲ではクセとして軍語をする所を、これには第八節にクリ・サシから下歌・上歌に移り、第九節に改めてクセに似た長い叙事を加へてゐるのは、複式能の類型を破つたものである。その第九節の後半「六彌太心に思ふやう」以下の文が、忠度の科白とは見られない叙事文、地の文となつてゐるのは、能作書に所謂「源平の名將の人體の本説ならば、ことに／＼平家の物かたりのまゝに書くべし」といふ主張に煩されたものと思はれるが、實演の効果からいふと、忠度自身の科白からいつしか昔物語に移つてゐる所に夢幻的な味ひがあつて、やはり世阿彌の作らしい手腕は認められるのである。それにしても、行き暮れての歌を三度まで繰り返した上、たほ最後までこの歌を以て結んでゐるのは、あまりにくど／＼しい感を與へないでもない。謡曲に「俊成忠度」がある。同曲参照。

【一】○花をも憂しと―月と花とは風流第一のものであるが世を捨てた身には、この風流をも棄てて顧みないとの意。この僧は歌人の家に仕へてゐたのであるから、殊に月花に心をひかれたものとして綴つた。○俊成―藤原俊忠の子で、定家の父。皇太后宮太夫正三位で五條に住んだから、世に五條三位といふ。秀れた歌人で、後白河院の勅を奉じて千載集を撰んだ。元久元年九十一歳で死んだ。○城南の離宮―山城國紀伊郡鳥羽にあつた白河、鳥羽兩帝の離宮。平安城の南に當るから、かういつた。○山崎―同國乙訓郡にあり攝津との國境である。都を隔つる山といひかけた。○關戸の宿―山崎の西南にあり、攝津國に屬す。往昔こゝに關所が置かれた。○名のみして―宿といふ名は殘つてゐても、昔の跡かたはなく。○憂き身はいつも交はりの―憂き身は常に浮世の塵に交はるといつて、塵から芥を呼び出した。○芥川―攝津國三島郡芥川村を貫いて淀川に注ぐ川。

【一】

次第の囃子にて、ワキ僧、ワキヅレ從僧二人、いづれも角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ　次第「花をも憂しと捨つる身の。花をも憂しと捨つる身の月にも雲は厭はじ

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは俊成の御內にありし者にて候。さても俊成亡くなり給ひて後。かやうの姿となりて候。又西國を見ず候程に。この度思ひ立ち西國行脚と志し候

ワキサシ「城南の離宮に赴き都を隔つる山崎や。關戸の宿は名のみして。泊りも果てぬ旅の習ひ。憂き身はいつも交はりの。塵の浮世の芥川。猪名の小笹を分け過ぎて

と謠ひながらワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ　下歌「月も宿かる昆陽の池水底清く澄みなして。上歌「蘆の葉分の風の音。蘆の葉分の風の音。

【一】　前　段

舞臺は初め京都で、ワキ僧、ワキヅレ從僧を伴へて登場。

僧「自分達は出家して世の中の風流をも棄て、花が散つても惜しいと思はないのだから、月が雲に隱れても辛いとも思ふまい」

と次第に一切をうち捨てた出家の心持を述べ、

僧「私は俊成の御家來であつたのですが、俊成がお亡くなりになつた後、このやうな出家姿となつたのです。さて私はまだ西國を見物しないので、今度思ひついて、西國行脚に出かけるのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「鳥羽の離宮の方へさして旅立ち、都を離れて山崎を過ぎ、關戸の宿を通つたが、宿といふ名はあつても、此處に落ちついて泊るといふことも出來ず、例の旅の習ひでいつも辛い思ひをして、浮世の塵に吹かれながら、芥川を渡り、猪名野の小笹を踏み分け、月影の映る水底の清く澄んだ昆陽の池を過ぎ、蘆の葉に吹き渡る風の音を聞くにつけても、兎角聞きたくもない浮世のいやな事を耳にして、出家した後でも、やはり世の中から離れきれ

○猪名の小笹―猪名は摂津国河辺郡にあり、今稲野村といふ。新千載集に「しながより猪名野の小笹うち靡きしのに吹きしく秋の夕風」なと詠まれた笹の名所。
○昆陽の池―宿かる小屋といひかけた。池は摂津国川辺郡にあり、猪名野に隣接してゐて、新後拾遺集に「五月雨に小笹が原を見渡せば猪名野につゞく昆陽の池水」なと詠まれてゐる。
○蘆の葉分つ―蘆の葉に吹き渡る風の音、拾遺集に「夏虫の光をそよぐ難波潟蘆の葉分けに過ぐる浦風」。
○聞かじとするに―風音と憂き事と、上下にかゝる。
○有馬山―摂津国有馬郡、憂き事のありといひかけた。
○隠れかねたる―山に隠るといひかけて、浮世の隠れ難い意につゞけた。
○畳むる枕に―浮世の夢を旅寝の夢にいひかけた。新撰集に「幾の夜を難波の旅寝のあはれをうちよする浮世の夢の」むる枕に。
○鐘遠き―難波寺、大阪の天王寺の鐘をさす。
○鳴尾潟―摂津国武庫川の川口、跡になるといひかけた。

聞かじとするに憂き事の、捨つる身までも、有馬山隠れかねたる世の中の、憂きに心はあだ夢の畳むる枕に鐘遠き、難波は跡に鳴尾潟沖波遠き、小舟かな沖波遠き小舟かな

憂きに心はあだ夢の と ワキは正面に向きて三四足出でまたもとへ帰りて、やがて須磨に着きたる心。上歌済みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に、これははや須磨の浦に着きて候。暫くこの所に休らひ、花の様をも眺めうずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き着座して下に居る。

【三】

一声の囃子にて、シテ老樵夫、面皺尉・尉髪・襟浅黄・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帯・扇の装束にて左手に木葉を持ち右手に杖をつきて常座に出で、

シテサシ「げに世を渡る習ひとて、かく憂き業にも懲りずまの、汲まぬ時だに塩木を運べば、乾せども隙は馴衣の、 右方に向き 浦山かけて須磨の海、

シテ一声「海上の呼び声ひまなきに と正面に直して し

たいものかと情なく思ひたから、有馬山を越え、旅寝の夢の破れ時にた枕邊に、遠くから響いてくる難波寺の鐘の音を聞き、そこここをも後にして、鳴尾潟の沖遠く小舟を漕ぎ行くのである。

〔旅程を急いでゐるうちに、やがて須磨に着いたので、暫く休む。〕

【三】

〔シテ老人登場、老人の姿で出て、常座に一声を謡ふ。〕

〔シテ〕ほんとにその日その日のなりはひは渡世とはいひながら、このやうな情ない家業をして、須磨の浦で汐水を汲まない隙には、山から薪を切り出し、少しも休む暇がないので、この着馴れた着物も汐に濡れたのを乾す隙もなく、浦へ出たり山へ行つたりして暮らしてゐることだ。

〇沖波―沖に立つ波。

【三】

〇憂き業―いやな仕事。樵漁の業をさす。

〇こりずまの―懲りもせずを地名にいひかけた。こりずまの浦は須磨の浦で、枕草子の「浦は」にも見ゆ。

〇波まぬ時だに―汐水を汲まない時でも。

〇漁木―鹽を焼く爲の薪。

〇磯衣―着慣れた着物。隙はなしといひかけ、衣の縁語裏を浦にいひかけた。

〇浦山かけて―浦から山へかけて。浦では汐を汲み山では薪をとる意。

〇須磨の浦―攝津國武庫郡にある。住むといひかけた。

〇海士の呼び聲―漁夫が網を引く掛聲。萬葉集に「大宮の内まで聞ゆあびきすとあご調ふる海人の呼び聲」

〇しば鳴く―しばしば鳴く

〇音ぞ遠き―海士の呼び聲の騒しい爲に千鳥の鳴く音がかすかにしか聞えない。

〇寂しき故に―あたりがもの寂しいので有名になつた

〇わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ」古今集在原行平の歌。わくらはにはたまさかに。藻鹽は藻を焼いて作つた鹽で、鹽たれて、[illegible]じみてといひかけた。

ば鳴く千鳥。音ぞ遠き

シテサシ 抑もこの須磨の浦と申すは。寂しき故にその名を得る。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に。藻鹽たれつつわぶと答へよ。げにや漁の海士小舟。藻鹽の煙松の風。いづれか寂しからずといふ事なき。(右の方に向きて) 又この須磨の山陰に一木の櫻の候。これはある人の亡き跡のしるしの木なり。(正面に直し)『殊更時しも春の花。手向のために逆縁ながら。足引の山より歸る折ごとに。薪に(と木葉を見)、花を折り添へて手向をなして歸らん手向をなして歸らん

(と下に居て、手向の心にて木葉を下に置き合掌して立つ。ツレ立ちて、

【三】

ワキ いかにこれなる老人。おことはこの山賤にてましますか

シテ さん候この浦の海士にて候

といつて海邊を見て、

樵翁 漁師の網引く掛聲が絶え間なく騒がしいので、いつも鳴いてゐる千鳥の聲もかすかにしか聞えないわい。一體この須磨の浦といふ所は、寂しいが爲に有名な所で、――

『わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつつわぶと答へよ』

(めつた尋ねてくれる者もあるまいが、たまたまかにでも自分の事を尋ねてくれる者があつたら、須磨の浦で鹽たれて淋しく暮らしてゐると答へてくれ)

と歌に詠まれた通り、あの漁をする海士小舟を見ても、鹽を焼く煙や松吹く風を見ても、何を見ても寂しいものばかりだ。(櫻の木を見る心にて) 又この須磨の山陰に櫻の木が一本ある。これはある人が亡くなつた跡の墓標の木だ。丁度今は春の花時だ。通りがかりの一寸した縁故だから、山から歸る度毎に、薪に花を折り添へてこれを手向に供へて歸らう。

といつて、手に持つた櫻花を木蔭に供へ禮拜する。

【三】

僧はこの老人に言葉をかけ、

僧 もうし御老人、そなたはこの山家の樵夫ですか

樵翁 はい、この浦の漁師です。

○逆縁—順縁の對で、佛道に反對した事が却つて佛道に入る因縁となる意である。謡曲では道すがらの一寸とした緣といふ意に用ゐる。
○足引の—山の枕詞。
○手向—神佛に物を捧げること。

【三】
○おこと—汝、そなた。
○山賤—樵夫など山家暮らしの者。
○山人—山賤に同じ。
○絶間を遅し—煙の絶える間も待たないで。少しの休む暇もなく。
○道こそかはれ—浦で汐を汲むと、山で薪をとると、行く道は變るが。
○里離れの—源氏物語須磨の巻に「今はいと里ばなれ心すごくて、海士の家だに稀に」とあるを借りた。
○柴といふもの—同じ巻に「煙のいと近く時々立ち來るを、これや海士の鹽焼くならむと思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり」とあるを胸に置いて綴つた。
○餘り[illegible]來る海士といひかけて、[illegible]

ワキ「海士ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべけれ
シテ「そも海士人の汲む汐をば、焼かでそのまゝ置き候べきか
ワキ「げにげにこれは理なり、藻鹽焚くなる夕煙
シテ「絶間を遅しと鹽木とる
ワキ「道こそかはれ里離れの
シテ「人音稀に須磨の浦
ワキ「近き後の山里に
シテ「柴といふものの候へば
地「柴といふものの候へば、鹽木のために通ひ來る
シテ「餘りにおろかなる お僧の御諚かなやな（ト右の方に向き見廻し）
地「げに須磨の浦餘の所にや變るらん それ花に辛きは嶺の嵐や山颪の（ト目附柱

僧「漁師ならば海邊に住む筈で、山のある方へ通ふ人ならば、樵夫といふのがあたりまへであらう」
樵翁「すると、漁師の汲む汐水は焼かないで、そのまゝにして置くのですか」
僧「なるほどこれは尤もだ。現に汐水を焚く夕煙が立ちあがつてゐる」
樵翁「あの煙の消えるのも待ちかねて、鹽焼く薪をとりに行くのです」
僧「山に入つて薪をとると、浦に出て汐水を汲むと、行く道はちがつても、いづれにしても人里離れた所で……」
樵翁「この人氣の少い須磨の浦に住んで、近い後の山に入ると、柴といふものがありますので、鹽焼く薪とする爲にとりに行くのです。お僧にも似合はない、餘りに迂闊な仰せですね。——」
「いや成程、須磨の浦は外の所とは違つてゐませう。一體花にとつて無情なものは、嶺吹く嵐や山颪の風で、たゞ山風の音ば

○若木の櫻—源氏物語須磨の巻に「須磨には年かへりて日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて」とあるに據つた。
○海少しだにも隔てねば—同じ巻に「須磨にはいとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど」とあるを逆に用ゐた。
【四】
○うたてや—情ない。風流氣のない。
○花の宿—花の木蔭に宿ること。
○行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし—平家物語に見えた平忠度の歌。
○常は—常に。
○おろか—おろそか。氣のつかない。

の方へ出でて眺め）。音をこそ厭ひしに。須磨の若木の櫻は海少しだにも隔てねば（と左へ廻りて常座へ歸り）。通ふ浦風に山の櫻も散るものを（と散る花を眺むる心）

【四】

ワキ「いかに尉殿。はや日の暮れて候へば一夜の宿を御貸し候へ

シテ「うたてやなこの花の蔭ほどのお宿の候べきか

ワキ「げにげにこれは花の宿なれどもさりながら。誰を主と定むべき

シテ「行き暮れて木の下蔭を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人はこの苔の下（と木葉を置きたる所を見）。痛はしやわれ等がやうなる海士だにも。常は立ち寄り弔ひ申すに。お僧たちはなど逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにまします人々かな

かりをいやに思つてゐたのですが、この須磨の若木の櫻は、海のすぐ近くにあるので、海から吹いてくる浦風の爲に山の櫻まで散るのですから……」
（と散る花を惜しんで眺め入る。

【四】

僧「もうし御老人、もはや日が暮れましたから、一夜の宿をお貸し下さい」

樵翁「無風流なことを仰しやる。この花の木蔭ほど氣のきいたお宿が外にありませうか」

僧「成程これは面白い花の宿ですが、しかし誰を宿の主人とするのです」

樵翁「それについて—『行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし』
（家に歸るのも忘れて遊び暮らし、日が暮れたまま、花の木蔭を宿とすれば、花が今晩の宿主となつてくれるであらう）
と歌を詠んだ人は、この苔の下に居られるのです。誠にお痛はしいことで、私たちのやうな漁師でさへも、いつも立ち寄つて回向してゐますのに、お僧達は通りがかりの御縁とはいひながら何故御回向なさらないのです。隨分お氣のつかない方々ですね」

○忠度─平忠盛の末子で清盛の弟。左兵衛佐薩摩守となり、壽永三年二月一の谷の戰に岡部六彌太と組討つて死んだ。年四十一。「俊成忠度」參照。
○一の谷─須磨村、鐵枴が嶽の南にある。
○ゆかりの人─緣故のある人。
○値遇─出會ふこと。
○忠度の─御法といひかけた。
○花の臺─極樂淨土の蓮花臺。これに坐すとは成佛する事である。

【五】

○佛果─佛と成る結果。

ワキ「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならましと、詠めし人は薩摩の守

シテ「忠度と申しし人は、この一の谷の合戰に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる、しるしの木にて候なり

ワキ「こはそも不思議の値遇の緣。さしもさばかり俊成の

シテ「和歌の友とて淺からぬ

ワキ「宿は今宵の

シテ「主の人

地「名も忠度の聲聞きて花の臺に坐し給へ

とシテ眞中へ出でて下に居り、ワキ正面の方に向き下に居て合掌。

【五】

シテ「ありがたや今よりは。かく弔ひの聲聞きて佛果を得んぞ嬉しき

ワキ直してシテに向き、

僧「───『行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし』と詠まれたのは、薩摩守……」

樵翁 その忠度といふ方は、この一の谷の合戰に討死せられました。これがその緣故の人の植ゑて置いた墓標の木なのです」

僧「これは實に不思議なめぐり合せだ。すると、あの有名な俊成の……」

樵翁 和歌の友として親しみの深かつた……

僧「───『宿は今宵の』と詠まれた……」

樵翁 その人の墓標なのです」

僧「お名前も『たゞのり』といはれたやうに、唯法の聲を聞いて成佛なされよ」

（櫻の木に向いて合掌禮拜する。）

【五】

樵翁 ありがたうございます。このやうな御回向を戴いて、今は成佛することが出來ませう。ほんとに嬉しいことです」

地「不思議や今の老人の、手向の聲を身に受けて。悦ぶ氣色見えたるは何の故にてあるやらん

シテ「お僧に弔はれ申さんとて、これまで來れりと

地「夕の花の蔭に寢て（とシテ立ち）、夢の告をも待ち給へ。都へ言づて申さんとて花の蔭に宿木の行く方知らずなりにけり行く方知らずなりにけり

僧「これは不思議だ、今の老人が回向の聲をわが身のことのやうにして喜ぶ樣子に見えるのは、一體どうしたわけであらう」

樵翁「お僧の御回向を受けたいと思つて、ここまで來たのです。この夕暮花の木蔭に寢て、夢の告をお待ち下さい。都へお言傳がしたいのです」といつて、花の木蔭に入るやうに見えて、行方知れずになつてしまつた。

シテ老樵夫消え失せる態で退場。

○夕の花の―來れりといふといひかけた。

○宿木の―花の蔭に宿るを寄生木にいひかけた。寄生木は木の幹に種を宿して生えるもので根のないものであるから、行く方知らずの序に用ゐた。

【間】

シテ「花の蔭に宿木の」と仕手柱際へ行きて正面に開き、靜かに中入。

【間】 狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。須磨の浦に住居する者にて候。今日は罷り出で若木の櫻を眺めばやと存じ候

ワキを見て「いやこれに見馴れ申さぬお僧の御出でなされ候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なかなかこのあたりの者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候

と舞臺の眞中へ行きて下に居り、

○御歎き―御歎願。
○左右なう―造作なく。

狂言「さて御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。若木の櫻の謂れ。又忠度の果て給ひたる樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひも寄らぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。少しも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「さる程に平家の公達に薩摩守忠度と申したる御方は。平家の御一門の中にても文武二道に勝れ。よき大將にて御座ありたると申す。然るに忠度この所へ御下向の時。五條の三位俊成の卿に御申し候は。われ素より和歌の道專らに仕り候間。歌人の數に入りたき由御申し候へども。俊成卿宣ふやうは。平家は勅勘の御事なれば。叶ふまじき由仰せ候へども。忠度是非にもと御歎きあり。山崎より取つて返し。又俊成の方へ御參りあり。詠み置き給ふ歌數多參らせられ。この中に然るべき歌も候はば。御入れ下されたく候へとて。そのまゝ御下向ありたると申す。その後後白河の院の御宇に千載集を撰まれしに。忠度の歌を一首御入れ候へども。讀人知らずと書かれたり。又御最期の樣體は。平家はこの所に多勢にて籠り給ふを。源氏は平家を亡ぼさんと六萬餘騎を二手に分ち。範頼義經押し寄せ給ひ。左右なう打ち破り。公達數多討死あり。散々に落ち給ふ。忠度は西の手の大將にて候が。はや御本陣より破れしかば。雜兵にうち紛れしづしづと落ち給ふ處を。岡部の六彌太忠澄よき敵と目をかけ。七八騎にて追つ驅ける。忠度やがて六彌太と組み給ふに。素より聞ゆる大力なれば。六彌太を取つて押さへ給ふ處を。忠澄が郞等忠度を討ち申して候間。痛はしき事とて皆々涙を流したると申す。又この若木の櫻と申すは。忠度の植ゑさせられたるとも申す。又光源氏の植ゑさせられた

るとも申し候。我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。これは俊成の卿の御内にありし者にて候が。俊成亡くならせ給ひて後。かやうの姿と罷りなりて候。御身以前に老人一人來られ候程に。即ち言葉をかはして候へば。老木の櫻の謂れ。唯今御物語の如く懇に語り。忠度の事を身の上のやうに申され。都へ言傳せんといひもあへず。花の蔭にて姿を見失ひて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては忠度の御亡心現れ。御言葉をかはし給ふと存じ候間。暫く御逗留あつて。忠度の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事も候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

ワキ・ワキヅレ坐したるまゝにて、

【六】

ワキ「まづまづ都に歸りつゝ。定家にこの事申さんと

上歌「待謠」夕月早くかげろふの。おのが友呼ぶ群千鳥の。跡見えぬ磯山の夜の花に旅寢して。浦風までも心して。春

後段

【六】

僧　東に角都に歸つて、定家にこの事を申し上げよう。……とはいふものの、はや夕月は暗くなつて、友呼びかはす群千鳥の姿も見えたくなつた。今夜はこの磯山の花の木蔭に旅寢をしよう。……おゝ浦風までが櫻の方には氣をつけて避け、松の方に吹きつける爲か、須磨の關所のあ

【六】○定家―俊成の子。正二位權中納言に上り、後鳥羽院の勅を奉じて新古今集を、又後堀河院の勅を奉じて新勅撰集を撰んだ當代第一の歌人。仁治二年年八十で薨じた。

○夕月早くかげろふの―申さんといふを夕月にいひかけ、大和國吉野郡の地名蜻蛉の小野にいひかけて、おのが友呼ぶと續けた。夕月は夕暮方暫く見える上弦の月。

○浦風までも心して春に聞けば―解し難い句法であるが、春は松の書き誤りで、松に聞けばやは松に吹けばやの意で、浦風が花には心して避け、松に吹き渡るから甚だもの凄く聞えるといふ意であらうか。

に聞けばや音すごき。須磨の關屋の、旅寢かな

須磨の關屋の旅寢かな

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ平忠度、面中將・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白淺黃・着附厚板唐織・單法被・色大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて短冊をつけたる矢を腰にさして出で、舞臺に入り常座に立ちて、

後ジテサシ「恥かしや亡き跡に。姿を返す夢の中。覺むる心は古に。迷ふ雨夜の物語。申さん爲に魂魄にうつりかはりて來りたり（とワキに向き）。さなきだに妄執多き娑婆なるに。何なかなかの千載集の。歌の品には入りたれども。勅勘の身の悲しさは。讀人知らずと書かれし事。妄執の中の第一なり。されどもそれを撰じ給ひし。俊成さへ空しくなり給へば。御身は御内にありし人なれば。今の定家君に申し。然るべくは作者をつけてたび給へと。夢物語申すに。須磨の浦風も

○須磨の關屋―須磨の關の番所。

【七】○亡き跡に姿を返す―討死した遺蹟樣の木蔭に生前の姿を現して僧の夢の中に見えるとの意。○覺むる心は―心が現世に甦る意、○雨夜の物語―源氏物語帚木の卷に記された、光源氏・頭中將等が雨夜の徒然なるまゝに女の品定めをした物語をいふ。但しこゝでは海上を雨夜にいひかけて出しただけで、たゞ物語といふほどの意。○魂魄にうつりかはり―魂魄は禮記に「魂氣歸レ天、形魄歸レ地」左傳に「心之精爽是謂二魂魄一」とあり、人間の精靈をいふ。死んで姿は變つた幽靈となつてといふ意、○妄執―迷妄して執着する事、○娑婆―この世。○何なかなかの―なまじひに、なまじか。○千載集―後白河院の院宣により俊成が撰び、後鳥羽天皇の文治四年四月に完成した第七番目の勅撰和歌集。○歌の品―歌の數、○勅勘の身―平家は朝敵と

たりは隨分もの凄いことだ」

といつて眠る。

七】

後ジテ平忠度、僧の夢に現れた態で登場。

忠度「恥かしながら、この討死した遺跡で、お僧の夢の中に生前の姿を現し、心迷ひの殘つた昔物語を致したいと思つて、幽靈となつて出て來ました。――

何がなくても、この娑婆は執着の多いものであるのに、私の歌がなまじか千載集の歌の數に入れられはしたものゝ、勅勘を蒙つた身の悲しさには、名を顯さず、讀人知らずと書かれたのが、色々執着の殘つた事でも第一の迷ひとなつたものです。しかしこれをお撰びになつた俊成もお亡くなりになつたのだから、幸ひあなたはその御家來であつた人だから、今の定家君に申して、出來ることならば作者たる私の名をつけて戴きたいと、夢物語を致すのです（といつて）。おゝ須磨の浦風も氣をつけて、お僧の夢をさましてくれ

して帝の御勘氣を蒙つたからいふ。
○讀人知らず—千載集春上によみ人知らずとして入れられた「さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」を指す。
○然るべくは—出來ることならば、
○須磨の浦風も心せよ—浦風も夢物語を驚さぬやうに氣をつけよ、
【八】
○和歌の家に生まれ—忠度の父忠盛は金葉集以下の勅撰集に採られた歌人であるからいふ。
○敷島の蔭に寄つし事—敷島の道に寄りし事、和歌を詠じたこと。
○專らなり—人間として最もありがたいことである。
○眼高し—世間から重視せられる。
○壽永の秋の頃—安德天皇の壽永二年七月平家が都を落ちて福原へ行つたことをいふ。
○心の花か—和歌を愛する心を花に喩へ、花から蘭菊を呼び起した。
○蘭菊の狐川—白氏文集の「凶宅の詩に「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一」とある

心せよ（と右の方を見渡す）
【八】
地クリ「げにや和歌の家に生まれ、その道を嗜み。敷島の蔭に寄つし事人倫に於て專らなり
（シテこの間に舞臺の眞中に出で下に居る、）
サシ「中にもこの忠度は。文武二道を受け給ひて世上に眼高し
地「抑も後白河の院の御宇に。千載集を撰はる。五條の三位俊成の卿。承つてこれを撰ず
地下歌「年は壽永の秋の頃（とシテ立ち、）都を出でし時なれば
（と正面へ出でこれより謡に合せて仕科、）
地上歌『さも忙はしかりし身の。さも忙はしかりし身の。心の花か蘭菊の。狐川より引き返し。俊成の家に行き歌の望みを歎きしに。望み足りぬれば、又弓箭にたづさはりて。西海の波の上暫

るな」（とあたりを見る）
【八】
（僧は夢の中ながらこれに答へて、）
僧「實に歌人の名家に生まれて、この道を嗜み、和歌に心を寄せることは、人間として最もありがたいことです。殊にこの忠度は文武の二道を兼ね備へて、世間から重視されて居られた。ところで、後白河院の御代に千載集を撰ばれ、五條三位俊成卿が仰せを承つてこれを撰ぶこととなつたのです」
忠度「それは壽永二年の秋の頃で、平家一門が都を立ち出た時なので、隨分忙しい身の上であつたが、和歌を愛する餘り、私はまた狐川から都に引返して俊成の家に行き、撰集に入れて戴きたいと歎願したところ、幸ひ望みが叶へられたので、又武事にたづさはつて、筑紫の海上に漂ひ、その後一度須磨の浦まで引返すことが出來たが、須磨といへば光源氏の侘住居せられた所で、源氏にこそ縁があれ、平家のためには何のゆかりもない所だといふ

の下、蘭菊を狐に寵せた。狐川は山城名勝志に、下海印寺村・圓明寺村の間を流れて水垂村の南で淀川に入るといふ。
○歌の望みを歎きしに—勅撰集に入れて貰ひたいと歎願したことをいふ。
○西海の波の上—平家が福原から筑紫に落ち延びたことをいふ。
○背しと賴む—須磨から戻つて一の谷に據つたことをいふ。
○源氏の住み所—源氏物語須磨の卷に、光源氏が須磨に配流せられてゐた事を記してゐるので、源氏にこそ緣故があるが、平家には何のゆかりもないといふ意。
【九】○今はかうよ—今は最後だ
○岡部六彌太—武藏國の者で義經の從臣。
○上に[illegible]—忠度の上に[illegible]

しと頼む須磨の浦。源氏の住み所。平家のためはよしなしと知らざりけるぞはかなき

【九】

地さる程に一の谷の合戰(と脇座へ行き)今はかうよと見えし程に。皆々船に取り乘つて海上に浮かむ(と一の松にて海を見渡す心)

シテ われも船に乘らんとて(と舞臺に入りて)汀の方にうち出でしに(脇座の方へ行き)後を見れば(幕へ向き)。武藏の國の住人に。岡部の六彌太忠澄と名乘つて。六七騎にて追つかけたり。これこそ望む所よと思ひ(と脇正面を見て少し出で)。駒の手綱を引つ返せば六彌太やがてむずと組み。兩馬が間にどうと落ち(下に居て組み落つ形をして)かの六彌太を取つておさへ(左手にて押へる形)。既に刀に手をかけしに(と太刀に手をかけ)

地六彌太が郎等。御後より立ち廻り。上にまし

ことに氣がつかなかつたのは、誠にあさはかなことでした」

【九】

忠度「かうしてゐるうちに、一の谷の合戰もはや今は見込がなくなつたので、平家の人々は皆船に乘つて海上に漕ぎ出しました。それで、自分も船に乘らうと思つて、波打際まで出たとき、後を見ると、「武藏國住人岡部六彌太忠澄」と名乘つて六七騎で追つかけて來た。これこそこちらも望む所だと思つて、馬の手綱を引返すと、六彌太は直に自分とむづと組み合ひ、二人は兩方の馬の間にどんと落ちた。

自分は六彌太を抑へつけて、既に刀に手をかけたところが、六彌太の家來が後から立ち廻つて、上にゐたこの忠度の右の腕を斬り落したので、自分は左の手で六彌太を投げ除け、今は是非がないと思つて、そこをのいてくれ、兩方淨土を拜む

失ひ、地の文、普通の語り物の態となつてゐる。しかし通譯にはやはり忠度の詞として取扱つて置いた。

○西拜まん―西方淨土を拜まう。
○光明遍照十方世界―觀無量壽經にある文。
○攝取不捨―極樂へ迎へ取つて見棄てない。
○あへなくも―はかなくももろくも。
○年もまだしき―年もまだ若くて末長いを長月にいひかけた。
○長月の―長月は九月。以下時雨ぞ通ふまで村紅葉の序。
○降りみ降らずみ―降つたり降らなかつたり。
○村紅葉―濃く濃くむらむらに染めた紅葉で、赤地の錦の直垂の形容。
○直垂―鎧の下に着る着物

ます忠度の、右の腕を打ち落せば（と右の手を下げてその心を示して）左の御手にて六彌太を取つて投げ除け今は叶はじと思し召して（と左手にて投出す形をして安坐し）。そこのき給へ人々よ（と左右を見廻し）。西拜まんと宣ひて（と片手にて合掌して）。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と宣ひし。御聲の下よりも（手を直して）痛はしやあへなくも。六彌太太刀を拔き持ち終に御首を、打ち落す（と面を伏せて斬られたる心）

シテ六彌太。心に思ふやう（面を直し）

地痛はしやかの人の（立ちて常座へ行き）。御死骸を見奉れば（と前に坐したる所を見）。その年もまだしき。長月頃のうす曇り（と空を見上げて）降りみ降らずみ定めなき、時雨ぞ通ふ村紅葉の（前に坐したる所へ行き）。錦の直垂はただ世の常にもあらじ（と坐して下を

から』といつて『阿彌陀如來の光明は遍く十方世界を照らし、念佛する衆生を攝取して捨てず』と讀經するや否や、あはれ果敢なくも、六彌太が太刀を拔いて、遂に首をうち落してしまつたのです。

その時六彌太が心の中に思ふにはああお氣の毒なことだ、この人の御死骸を見ると、まだ年は若くて、村紅葉の錦の直垂を着て居られる所を見ると、よもや尋常の人ではあるまい。『成程平家の公達の一人であらう』と、その名が知りたくて、箙を見ると、不思議なことに短冊がつけてある。見ると、旅宿といふ題があつて――

○公達―大臣大將など地位の高い貴族の子息。
○御名ゆかしき―御名は誰であらうと知りたく思ふ。
○箙―矢を入れて背に負ふ器。
○旅宿の題―平家物語、源平盛衰記ともに「旅宿花」といふ題にてゝある。
○嵐の音に―疑ひあらじといひかけた。

【一〇】
○日を暮らし―夕暮のやうに日を暗くして。
○花は根に歸るなり―千載集、崇德院の御歌「花は根に鳥は古巣に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき」を引き、再び冥土に歸る意に用ゐた。

見て、いかさまこれは公達の。御中にこそあるらめと（立ちて當作へ行き）。御名ゆかしき處に。箙を見れば不思議やな（と矢を取出し）。短冊をつけられたり（と短冊を見）見れば旅宿の題をすゑ。行き暮れて。木の下蔭を宿とせば

（短冊を持ちたるまゝにて、）〔カケリ〕（を舞ひ、短冊を取上げ見て、）

シテ「花や今宵の。主ならまし。忠度と書かれたり

地「さては疑ひ嵐の音に。聞えし薩摩の守にてますぞ痛はしき（と下に居て両伏す）

【一〇】

地（キリ）「御身この花の（と立ちてワキに向き）。蔭に立ち寄り給ひしを。かく物語申さんとて日を暮らしとどめしなり。今は疑ひよもあらじ。花は根に歸るなり。わが跡弔ひてたび給へ。木蔭を旅の

「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし　忠度」と書いてある。さては疑ひもなく、あの有名な薩摩守であつたのだ。あゝ氣の毒なことだと同情したのです」（といつて）

〔カケリ〕（に當時の様を示し、）

【一〇】
忠度「あなたがこの花の木蔭にお立ち寄りになつたので、このやうなお話をしたいと思ひ、日を暗くして、お留めしたのです。今はよもやお疑ひもありますまい。花が根に歸るやうに、私も歸つて行きます。どうぞわが亡き跡を回向して下さい。この木蔭を旅の宿とたのまれば、花がそ

宿とせば。花こそあるじなりけれ

と常座にて留拍子を踏む。

の宿主なのです。そして私がその花の主です」

といつて消え失せる。

〔考異〕

諸流（五流）

【六】〔ロキ〕まづ都に歸りつつ定家にこの事申さんと（下懸ナシ）〔上歌〕夕月早くかげろふの。……おのが友呼ぶ群千鳥の（下懸袖をかたしく草枕、〳〵。夢路もさぞな入る月の）。跡見えぬ磯山の夜の花に旅寢して浦風までも心して春に明けばや……須磨の關屋の旅寢かな（下懸心もともに更け行くや、嵐はげしき氣色かな〳〵）

古謠本（光悅本）

觀世現行曲に同じ

龍田（たつた） 觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】 三・四番目 複式夢幻能

【人物】 ワキ 旅僧、ワキツレ 同從僧（二人）、前シテ 巫女（龍田姫神靈）、狂言 所の者、後シテ 龍田姫の神

【所】 大和國 龍田

【時】 十一月

【異稱】 〔立川〕とも書き、又〔立田姫〕ともいつた。

【作者】 能本作者註文、二百十番謡目録ともに金春禪竹の作とす。言經卿記文祿四年三月廿八日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 日本六十餘州に納經する旅僧が、龍田明神に參詣しようとして、龍田川を渡らうとすると、一人の巫女が出て來て、古今集の歌や藤原家隆の歌を引いて、川を渡ることを留め、別の道から社殿に案内し、神木の紅葉などを見せ、やがて「自分が龍田姫である」といつて神殿の中に入る。僧は奇特の思ひをして、こゝに一夜を明かすと、龍田

姫の神靈が現れ出て、明神の縁起を語り、所の風景を賞して、神樂を奏し、夜も明け方になると神上りし給うた。

【出典】この前段は古今集讀人知らずの歌(古註にこの歌はある人奈良の帝の御歌なりとなむ申すと)、

　龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ

及び藤原家隆の歌(家集壬二集に見ゆ)、

　龍田川もみぢ葉閉づる薄氷、渡らじそれも中や絶えなむ

この二つの歌が脚色の骨子となり、後段、龍田明神が天逆矛を守護し給ふことは、〔逆矛〕の解說に掲げた神皇正統記卷一の記事から出たものであらう。

【概評】本曲のシテは女性であるから、演能には三番目又は四番目として取扱つてゐるが、また略脇能ともするやうに、後ジテは女神であつて、普通の鬘物とは趣を異にした、寧ろ神事物と見るべきものである。たゞ後ジテの龍田姫神自身であることが、その脚色と相應しない感じを與へてゐて、例へばクセに神靈自身が縁起を說くのも自家宣傳のやうでをかしく、謹上再拜といつて神樂を舞ふのも、巫女か禰宜のやうで、やゝ奇異の感を起さしめるのである。――〔蟻通〕〔雨月〕などの後ジテは神主に神靈が憑くのであるから、その神の縁起を語つても、謹上再拜といつて神樂を舞つても不思議はない。――本曲に男神瀧祭の神をシテとした〔逆矛〕があり、彼此相竝べて見ると、彼の剛健、此の優雅、それぞれちがつた趣があつて面白い。また秋の神をシテとした本曲に對し、春の神をシテとした〔佐保山〕を比べると、春の曲には溫雅の感じが充ちて居り、これにはやゝ嚴肅な氣持が加はつて居るのである。

前　段

一【一】

一　舞臺に引廻をかけたる小宮の作物を大小前に出す。

大鼓の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附熨斗目・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同様の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

一　舞臺は初め奈良で、ワキ旅僧、ワキヅレ從僧を伴つて登場。

ワキ・ワキヅレ〔次第〕教への道も秋津國。教への道も秋津國。

一　佛教が流布して、政道の明らかなわが

【一】

○教への道―佛教の道。

○秋津國―秋津洲。日本の古名。教への道も明らかといひかけた。

○數ある法を納めん―數々の佛典を修めようといふ意と、數々の經文を國々に奉納しようといふ意を兼ねて用ゐた。
○御經を納むる―六十六部の法華經を書寫して、日本六十六箇國の神社佛閣に奉納すること。
○聖―僧といふに同じ。
○龍田越―龍田山の山路で大和より河内に越える本道
○西の大寺―奈良の西大寺月の殘る雲間といつて西の字を呼び起した。
○秋篠や外山の―秋篠は奈良の西北、生駒山の麓にある。外山は高い山の外に續いた丘地をいふ。新古今集西行法師の歌に「秋篠や外山の里やしぐるらん生駒の嶽に雲のかゝれる」
○龍田の川―生駒川の下流龍田村を過ぐる邊をいふ。
○明神―龍田神社。

數ある法を納めん

（地取にツレは正面に向き、）

ワキ　これは六十餘州に御經を納むる聖にて候。われこの程は南都に候ひて、靈佛靈社殘りなく拜み廻りて候。又これより龍田越にかかり、河内の國へと急ぎ候

（といひてワキ・ワキヅレ向合ひ、）

ワキ　ワキヅレ　道行「古き名の。奈良の都を立ち出でて。奈良の都を立ち出でて、有明殘る雲間の西の大寺をよそに見て。はや暮れ過ぎし秋篠や。外山の紅葉名に殘る、龍田の川に、着きにけり龍田の川に着きにけり

（「はや暮れ過ぎし」とワキは正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りて龍田に着きたる心、道行濟みて正面に向き、）

ワキ　急ぎ候程に、これははや龍田川に着きて候。この川を渡り明神に參らばやと思ひ候

日本の國々に、數々の經文を納めて、佛道の修行をしよう」

（と次第に心持を述べ、）

僧「私は日本六十餘州に御經を納めて歩く僧です。私はこの間中は奈良に居て、靈佛靈社を殘りなく巡拜しました。これからは又龍田越をして河内國へ急いで行かうと思ふのです」

（と見物人に自己紹介をし、）

僧「舊都の奈良を出立して、夜の明け方、西大寺を後にして旅を急ぎ、夕暮過ぎた頃、はや秋篠の里を通つて、紅葉で有名な龍田川に着いた」

（と旅程を述べてゐるうちに龍田に着いて、舞臺は龍田川邊となる。）

僧「旅を急いだので、思ひの外早く、龍田川に着きました。これからこの川を渡つて、龍田明神に參詣しようと思ひます」

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行きかゝる。

【三】

シテ巫女、面増・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・色入唐織着流・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうその川な渡り給ひそ申すべき事の候

ワキ脇座にてシテに向ひ、

ワキ「不思議やなこの川を渡り。龍田の明神に參り候ところに。何とてその川な渡りそとは承り候ぞ

シテ「さればこそ神に參り給ふも。神慮に合はん爲ならずや。心もなくて渡り給はば。『神と人との中や絶えなん。よくよく案じて渡り給へ(と橋懸一の松に留まる)

ワキ「げに今思ひ出だしたり。龍田川紅葉亂れて流るめり。渡らば錦中や絶えなんとの。古歌の心を思へとや

といつて、龍田川を渡りかける。

【三】

シテ龍田姫の神靈、巫女の姿を裝うて登場、僧が川を渡らうとするのを見て、

女「もうし、その川をお渡りになつてはいけません。お話しなければならない事がございます」

僧「これは不思議だ。これからこの川を渡つて龍田明神へ參詣しようと思ふのに、何故川を渡るなとお留めなさるのだ」

女「その事でございます。神樣に御參詣なされるのも、神樣の思召に叶ふやうにとの爲でございませう。それだのに、思慮もなくこの川をお渡りになれば、神と人との中が絶えて、思召に背くこととなりませう」

僧「なるほど、『中が絶えよう』といはれるので思ひ出した。それでは――『龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなん』といふ古歌の心持を味へといはれるのでせう」

【三】

○龍田の明神―大和國生駒郡立野にある龍田坐天御柱國御柱神(風の神)と龍田町にある龍田新宮とを同體として取扱つた。新宮には龍田彦・龍田姫を祀り、秋を司り、紅葉を織ると傳ふ。〔逆矛〕參照。

○心もなくて―心得がなく不注意に。

○神と人との―次に引く歌「紅葉の錦中や絶えなむ」のいひかへ。

○案じて―考へて。氣をつけて。

○龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなん　古今集讀人知らずの歌。但しその古註に「奈良の帝の御歌」とある。

シテこの間に舞臺に入り常座にてツレに向ひ、

シテ(?) なかなかの事この歌は。紅葉の水に散り浮きて。錦を張れる如くなれば。渡らば錦中や絶えなんとなり。それにつきなほなほ深き心もあり　紅葉と申すは當社の神體。神の畏れもあるべければと。戒め給ふ心もあり

ツレ げにげにそれはさる事なれども。紅葉の頃も時過ぎて。川の面も薄氷にて。立つ波までも見えぬなり。許させ給へ渡りて行かんと少し前に出づる

シテ いやいやなほも御科あり。氷にも又中絶えんとの。その戒めもあるものを

ツレ 不思議や紅葉の錦ならで。氷にも又中絶えんとの。謂れは如何なる事やらん

シテ(?) 紅葉の歌は帝の御製。又その後家隆の歌に。

女「その通りでございます。この歌には、紅葉が散つて水に浮かんだ樣が、錦を張つたやうであるから、その美しい川を渡ると、錦を中途で絶つこととならうとの意味です。しかし、これについて、なほもつと深い意味があるのでございます。と申すのは、この紅葉は、龍田明神の御神體なので、神に對する畏れもあるからと、戒められたものでございます」

僧「いかにも、それは尤もな事ですが、今は紅葉の季節も過ぎて、川面には薄氷が張つて、波も見えない時なのです。だから、紅葉についての心配はありません。御免下さい、川を渡つて參りませう」

女「いえいえそれでもやはりお咎めがございます。『氷にも中が絶えよう』といふ戒めがあるのですから」

僧「不思議なことをいはれる。紅葉の錦でなくて、氷にも中が絶えようとは、それはどういふ謂れがあるのですか」

女「前に申しました紅葉の歌は、天子樣の御歌ですが、又その後家隆卿の歌に――

○紅葉と申すは當社の神體―龍田明神は龍田姫で、龍田姫は秋を司る神とせられてゐるので、秋の徵ともいふべき紅葉を直に神體の如くにいつたのである。

○紅葉の歌は帝の御製―前揭の如く古今集古註に「奈良の帝の御歌」といひ、古今集序にも「秋のゆふべ龍田川に流るる紅葉を帝の御目に錦と見給ひ」とある。

○家隆―藤原氏。從二位大納言となり、嘉禎三年四月八十歳で薨じた。新古今集撰者の一人で、その家集を[illegible]二集といふ。

『龍田川紅葉を閉づる薄氷。「渡らばそれも中や絶えなんと。『重ねてかやうに詠みたれば。必ず紅葉に限るべからず

地上歌『氷にも。中絶ゆる名の龍田川。中絶ゆる名の龍田川。錦織りかく神無月の。冬川になるまでも。紅葉を閉づる薄氷を。情なや中絶えて。渡らん人は心なや。さなきだに危きは薄氷を履む理のたとへも今に、知られたりたとへも今に知られたり

【三】

ツレ「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ

シテ「これは巫にて候。明神へ御参り候はば御道しるべ申し候べし

ツレ「あら嬉しや御供申し。宮廻り申さうずるにて候

シテ作物へ向き歩きながら、

『龍田川紅葉を閉づる薄氷、渡らばそれも中や絶えなん』
（龍田川には紅葉を閉ぢこめたまゝで薄氷が張つて、やはり紅葉の時と同じやうに錦のやうであるから、今でも川を渡ると、錦を中途で絶つことになるだらう）
と、このやうにも繰り返して詠まれたのですから、この川を渡つていけないのは、紅葉の季節だけに限らないのでございます。このやうに、氷の張つた季節でさへ、川を渡れば錦が中途で絶たれる心配があると詠まれた、有名な龍田川で、十月の冬になつても、錦を織つたやうに紅葉の散り浮かんでゐるのを、薄氷がそのまゝ閉ぢこめてゐるのに、それを中途で絶ち斷れることをも構はないで渡つて行かうとは、餘りに御分別のないことです。さうでなくてさへ、薄氷を履むことは、最も危險なことの喩に引かれてゐますが、その尤もなことが、今の樣を見て、よく分るのでございます」

【三】

僧「一體あなたはどういふお方でいらつしやるのです」

女「私は巫女でございます。明神へ御參詣遊ばすのでしたら、御案内を致しませう」

僧「これは嬉しい。お供して宮廻りをいたしませう」

龍田明神の神前に着いた心で、

○龍田川紅葉を閉づる薄氷渡らばそれも中や絶えなん―壬二集の歌。但し原歌には「龍田川もみぢ葉閉づる薄氷渡らじそれも……」とある。
○名の龍田川―名の立つといふを龍田にいひかけた。
○龍田川錦織りかく神無月―古今集讀人知らずの歌の上句を引き、神無月から冬川とつゞけた。その下句は「時雨の雨をたてぬきにして」
○薄氷を履む―極めて危險なことの喩。詩經、小旻篇に「戰々兢々、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一」

【三】

○巫―みこ。女で神に仕へてゐる者。
○道しるべ―道案内。

○霜降月—十一月。

○三輪の明神—大物主神。大和國磯城郡三輪山にある大神神社の祭神。〔三輪〕参照。

○和光同塵は結緣の始め—摩訶止觀の「和光同塵結緣之始、八相成道以論二其終一」を引いた。佛が徳光を和らげて神と現れ俗界に交はるのは、衆生と緣を結ぶ始めで、佛道を成就して衆生を利益するのは、その功徳の終りであるとの意。八相は釋尊がこの世に現れて示した、降都率天、託胎、降生、踰城（出家）、降魔、成道、説法、入涅槃の種々相。

○下紅葉塵に—下紅葉散りを塵にいひかけた。

シテ「これこそ龍田の明神にて御入り候へよくよく御拜み候へ

と眞中へ出て下に居る。ワキも作物に向き宮に參りたる心にて、

ワキ「不思議やな頃は霜降月なれば。木々の梢も冬枯れて。氣色寂しき社頭の御垣に。盛りなる紅葉一本見えたり。これは御神木にて候か

シテ「さん候當國三輪の明神の神木は杉なり。當社は紅色に愛で給ふにより。紅葉を神木と崇め參らせ候

ワキ少し作物の方へ出で下に居て、

ワキ「ありがたやわれ國々を廻り。今日は又この御神に參る事のありがたさよ。『和光同塵は結緣の始め。八相成道は利物の終り

地下歌「下紅葉塵に交はる神慮。和光の影の色添へて。我等を守り給へや（ワキ合掌す）

女「これが龍田明神に渡らせられます。よくお拜みなさいませ」

僧「これは不思議だ。今は十一月で、木々の梢も冬枯れになつて、寂しい氣色であるのに、この神前の玉垣の所に、眞盛りに紅葉した木が一本見えますが、これは御神木ですか」

女「さうでございます。この大和國三輪明神の神木は杉でございますし、當社は紅葉をお好みになるので、紅葉を神木と崇めてゐるのでございます」

僧「私は諸國を廻り、今日は又この御神に參ることの出來たのは、ほんとにありがたいことです。（明神を拜して）『經文に、『和光同塵は結緣の始め、八相成道は利物の終り』とあります通り、この塵の世に交つて、衆生をお救ひ下さいまする神樣、どうか深いお慈悲で、私どもをお守り下さいまするやうに」

シテ・ワキともに正面に向き、

地上歌「殊更にこの度は。殊更にこの度は。幣とりあへぬ折なるに。心して吹け嵐。紅葉を幣の神慮。神さび心も澄み渡る。龍田の嶺はほのかにて（シテ笛座の上を見）。川音もなほ冴えまさる夕暮（正面に向きて川音を聞き）。いざ宮廻り始めんとて（ワキに向ひ立上り）。名に負ふ龍田山。同じかざしの榊葉を。とりどりに少女子が。裳裾をはへて袖をかざし。運ぶ歩みの數々に。度重なると見る程に（常座へ行き）。不思議やな今まではただ巫と見えつるが。われは眞はこの神の。龍田姫はわれなりと（ワキへ向きて）。名のりもあへず御身より。光を放ちて紅の袖をうちかづき。社壇の。扉を押し開き御殿に入らせ給ひけり御殿に入らせ給ひけり

シテ扉を押し開き と作物に向き戸を開く形をし、作物に中入。

と神拜を終つて、紅葉の木を眺め、

僧「殊更この度は旅を急いで、神前に供へるべき幣も持つて來なかつたので、この紅葉をそのまゝ幣としたいと思ふのだから、嵐も氣をつけて吹き散らさないやうにしてくれ。紅葉を幣とするのは、この神樣の思召にも叶ふと思ふから」

まことに神前は神々しくて、心も澄み渡るばかりで、龍田の嶺はぼんやりと霞み渡り、川音は愈〻冴えまさる。時は夕暮である。

巫女は僧を促して、

女「さあ宮廻りを始めませう」

といつて、巫女はこの有名な龍田山の宮廻りをする爲に、舞のかざしにもする榊葉を手に持ち、裳裾を長く引き、袖をかざして歩いて行き、あちらこちら宮廻りをすると思ふうちに、不思議や、今が今まで普通の巫女のやうに見えてゐたのに、

女「私はほんとはこの神體の龍田姫である」

と名のるや否や、御身から光を放ち、紅色の袖を頭にかづいて、社壇の扉を開き、御殿の中にお入りになつた。

前ジテ作物の神殿の中に入る。

○この度は幣取りあへぬ―古今集、菅原道眞の歌「この度は幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」を借りた。

○紅葉を幣の神慮―古今集兼覽王の歌に「龍田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉の幣と散るらめ」

○同じかざしの榊葉を―龍田山を承けて、拾遺集藤原爲賴の歌「ぬす人の立田の山に入りにけり同じかざしの名にやかくれん」を借り「かざし」から神樂の舞のかざしとする榊葉と續けた。

○とりどりに―榊葉を取るを、それぞれの意のとりどりにいひかけた。

○裳裾をはへて―裳の裾を長く引いて。

○うちかづき―頭にかぶること。

【四】

〔寂光の都〕極楽浄土、

【四】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・小刀・扇の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。龍田の里に住居（すまひ）する者にて候。この間は久しく大明神へ参らず候程に。今日は参詣申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくより御参詣なされ候ぞ

ワキ「これは六十餘州に御經を納むる聖にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか／＼このあたりの者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中へ出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。當社に於て紅葉を御賞翫候事。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊（あたり）には住居（すまひ）仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ當社龍田の明神と申すは。本地寂光の都よりかりに光を和らげ。この國に跡を垂れ君を護り給ふにより。生きとし生けるものまでも。この神の御神德をうけ悦び申す事にて候。又鷄を使者となし給ふ御事は。曉の聲を立て時を知らする者なれば。一切衆生の眠りを覺まさせ。本覺の道に入れうずるとて使者になし給ふ。又紅葉を御神木となし給ふ御事は。紅色に愛で給ふ故と承り候。當社は天の逆鉾の守護神にて御座候。この御鉾の刃先が八つ御座候間。その刃先を學び紅葉も八葉御座候。されば紅葉の一葉も愛翫に取りつき候はんかと悲しみ給ふ。殊更秋も末つ方になり候へば。

龍田川へ紅葉の散り浮き流るゝ氣色。さながら錦を織りたる如くにて。左様の時はこの川を渡る人もなく候。渡れば神慮に背く由申し候。さて又當社は四季を守り給ふ。春は佐保姫夏は生田姫。秋は龍田姫冬は慈悲萬行の守護し御申し候。中にも當社は秋を司りて守り給ふ御神にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前龍田川を渡り。明神へ参らんと思ひ候處に。いづくともなく女性一人参られ。色々古歌などを詠まれ。伴ひ申し宮廻りし。龍田姫はわれなりといひもあへず。社壇に入り給ふと見て姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては當社明神假に座と現れ。御道しるべありたると存じ候間。暫くこの所に御逗留あり。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。今宵は神前に通夜申し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ・ワキヅレ脇座にて脇正面に向きたるまゝ、

ワキ・ワキヅレ上歌〔待謡〕「神の御前に通夜をして。神の御前に通夜をして。ありつる告を待たんとて。袖をかたしき臥しにけり袖をかたしき臥しにけり

【四】 後段

僧「神様の御前で通夜をして、先程の神様のお告げを待たう」

といつて、僧は片袖を下に敷いて寝た。

【五】

後ジテ龍田姫神、面増・鬘・鬘帯・黒垂・天冠・襟白赤・着附摺

【五】

○慈悲萬行ー春日明神の菩薩號。

【四】

○袖をかたしきー片袖を下に敷いて。

【五】

○神は非禮を享け給はず―論語八佾篇の朱子註に「神不享非禮」、南使江の鬼神論に「神不享非禮也、鬼神是理、祭之必無得享之理、下治物…盛眞記等にも見ゆ。
○宜禰―神官の古名。
○光も朱の―光も明らけきを朱にいひかけた。
○劫初―世界の始めをいふ。
○御矛―天逆矛。龍田明神が御矛を守護し給ふことは神皇正統記に見ゆ。委しくは「矛」の條下にいふ。
○八葉の葉―紅葉の葉の八片に切れてゐるものを、矛の刃先に見立て、また天逆矛の一名八坂瓊乃矛に寄せていふ。
○劔の験者―劔の験を効験ある僧にいひかけた。
【六】
○瀧祭の御神―龍田明神と瀧祭神と同一體であることは「逆矛」に掲げた神皇正統記に見え、神祇本源にも「瀧祭神與龍田神同體異名、水神也、故號龍田神、名龍田神…是天逆矛守護神也」。
○天祖の詔―神皇正統記卷一に「こゝに天祖國常立尊、伊弉諾伊弉冊の二神に勅し

箔・長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて、引廻をかけたる作物の中にて床几にかゝり、出端の囃子にて、

後シテ「神は非禮を享け給はず。水上清しや龍田の川

地「御殿頻りに鳴動して。宜禰が鼓も聲々に

シテ「有明の月。燈火の光

地「和光同塵おのづから。光も朱の。玉垣かかやきて。あらたに御神體現れたり（引廻をおろす）

シテ「われ劫初よりこの方。この秋津洲に地を占めて。御代を守りの御矛を守護し。紅葉の色も八葉の葉。卽ち矛の刃先なるべし。劔の驗僧の法味に引かれて。夜半に神燈。明らかなり

【六】

地「抑も瀧祭の御神とは卽ち當社の御事なり

シテ「昔天祖の詔

地「末明らかなる御國とかや

神は禮儀に外れたものをお容しにならない。その御心のやうに、龍田川の水は水源から清く流れてゐる。その龍田明神の神殿が頻りに鳴動し、神官の打つ鼓の音も度重なり、有明の月の光も、神前の燈火の光も、殊に神の御慈悲の光も明らかで、その光によつて朱色の玉垣は光り輝き、あらたかな御神體がお現れになつた。

（僧の夢に出現し給ふ態で、後ジテ龍田明神、作物の神殿から出て、）

明神「自分は世界の始めよりこの日本の國にゐて、大御代を守る天逆矛を守護し奉るものである。かの紅葉の葉が八つに裂け尖つてゐるのも、御矛の刃先に擬へたものである。今、效驗の著しい僧の法養に引かされて、この夜半神燈の光に、正しき姿を現したのである」

【六】

明神「抑も瀧祭の御神とは、卽ち當社の御事を申すのである。わが國は昔天祖國常立尊が天逆矛を諸册二尊に與へて、この國を治めよと仰せられてよりこの方、御代の榮えの幾久しい御國柄なのである。かうして、諸册二尊が天逆矛を持つてこの大和國の靈山にお出でになり、こゝに

シテサシ「然れば當國寶山に至り
地「天地治まる御代のためし。民安全に豐かなる
も偏に當社の御故なり
シテ「梢の秋の。四方の色
地「千秋の御影。目前たり
（シテ床几を離れ作物の前に出で、これより詞に合せて舞ふ。）
（舞クセ）
地クセ「年毎に。もみぢ葉流る龍田川。湊や秋の泊りなる。山も動ぜず。海邊も波靜かにて。樂しみのみの秋の色。名こそ龍田の山風も靜かなりけり。然れば代々の歌人も。心を染めてもみぢ葉の。龍田の山の朝霞。春は紅葉にあらねども。唯紅色にめで給へば。今朝よりは。龍田の櫻色ぞ濃き。夕日や花の。時雨なるらんと。詠みしも紅に心を。染めし詠歌なり
シテ「神南備の。御室の岸やくづるらん

天地治まり御代榮えることとなつたのであるから、民安穩に國土豐かなのも、全く當社龍田明神のお蔭である、今眼の前に見る紅葉の色、あたりの氣色を以てしても、千年萬年御代の榮えますことが知られるのである。
「年毎にもみぢ葉流る龍田川、湊や秋のとまりなるらん」
（龍田川に、秋の象徴ともいふべき紅葉が、毎年毎年流れて行くのを見れば、この川下の湊が、秋の暮れて行く泊り所であらう）
と古歌に詠まれて、このあたりは山も動かず波も靜かで、たゞ樂しい時ばかりである。なるほど龍田といへば有名な風の神ではあるが、實際は山風も靜かな平和な所なのである。それで、代々の歌人もこの紅葉をしみじみと賞翫し、又龍田山に朝霞のたちこめた春は、紅葉の季節ではないが、神が紅色をお好みになるので
「今朝よりは龍田の櫻色ぞ濃き、夕日や花の時雨なるらん」
（龍田の櫻花が今朝からは大變色が濃くなつた、それは夕日の光にあたつて、色濃くなつたのであつて、花にとつては夕日が紅葉に對する時雨と同じ役をなすのであらう）
とも詠まれてゐるが、これも紅色を賞翫した歌なのである。また歌には――
「神南備の御室の岸やくづるらん、龍田の川の水は濁れる」
（神南備の御室の山の岸が崩れたと見えて、龍田

て宜はく、豐葦原の千五百秋の瑞穗の地あり、汝往きてしらすべしとて、即ち天の瓊矛を授け給ふ」とあるに據つた。
○當國寶山　大和國葛城山をいふ。神皇正統記に「龍田も靈山近き所なれば、龍神を天柱國柱といへるも深秘の心あるべきにや」（「葛城」參照。）
○梢の秋　紅葉をさす。
○千秋の御影　限りなく榮える神の御姿。梢の秋を承けて千秋といつたのである。
○年毎にもみぢ葉流る　古今集、紀貫之の歌「年毎にもみぢ葉流す龍田川湊や秋のとまりなるらん」を引いた。
○名こそ龍田の　名こそ立つを龍田にいひかけ、龍田は風の神であるが、吹く風は靜かであるとの意。
○今朝よりは　七玉集、衣笠内大臣家良の歌「今朝よりは龍田の櫻色ぞ濃き夕日や花の時雨なるらん」を引いた。
○神南備の御室の岸や崩るらん　拾遺集、高向草春の歌。下句は「龍田の川の水は濁れる」

いゝれる」神南備の御室は今の龍田町字神南にあり、神山又は三室山といふ。
○紅葉襲―襲衣の色目の名表紅裏青のもの。紅葉を閉ぢた薄氷を紅葉襲に見立てたのである。

【七】

○数至りて―神樂の鼓を時の鼓にいひかけ、時刻の過ぎ行く意に用ゐた。
○月も霜も白和幣―夜が更けて月も白み霜も白く置くといふ意を白和幣にいひかけた。白和幣は白い御幣。
○久方の―月の枕詞。
○月も落ち來る―明方になつて月の傾くを瀧の水の落ちるにいひかけた。

地「龍田の川の。水は濁るとも和光の影は明らけき。眞如の月はなほ照るや。龍田川紅葉亂れし跡なれや。古は錦のみ。今は氷の下紅葉。あら美しや色々の。紅葉襲の薄氷。渡らば。紅葉も氷も。重ねて中絶ゆべしやいかで今は渡らん

【七】

シテ「さる程に夜神樂の

地「さる程に夜神樂の。時移り事去りて。宜禰が鼓も数至りて月も霜も白和幣。振り上げて聲澄むや

（月も霜も白和幣」とくつろぎ、幣を持ちて仕手柱先へ出で、

シテ「謹上。と幣を振りて拜し）

地「再拜

〔神樂〕を舞ひ、舞の中に幣を捨て、これより謡に合せて引續き舞ふ。

シテ「久方の。月も落ちくる。瀧祭

川の水が濁つてゐる）とも詠まれてゐるが、たとへ川の水は濁つても、御神徳は濁ることなく明らかで、眞如の月は依然として照り輝いてゐるのである。まことに、龍田川は紅葉の亂れ流れる名所で、昔はその紅葉の季節ばかりを錦のやうだと稱歎したが、今は氷に閉ぢこめられた紅葉をも賞美してゐるのである。あの白い氷の下に紅い紅葉のあるのは、美しい紅葉襲の着物のやうで、その中を渡つたならば、紅葉ばかりでなく、白い氷も同時に絶たれることとなるので、今は渡ることは出來ないのである」

（と明神自ら縁起を語り風景を賞美せられる。

【七】

かうして、夜神樂を奏し、神官が神樂の鼓を打つてゐるうちに、次第に時刻は移つて、月も白く更けて行き、霜も白く降り置いた。明神は白い御幣を振りあげ、澄み渡つた聲で、

明神「謹上再拜」

（と神官と同じやうに神殿を拜して、

〔神樂〕を舞ふ。

月も西に傾いて更け行く夜の瀧祭に、

地『波の。龍田の
シテ『神の御前に
地『神の御前に。散るはもみぢ葉
シテ『卽ち神の幣
地『龍田の山風の。時雨降る音は
シテ『颯々の鈴の聲
地『立つや川波は
シテ『それぞ白木綿
地『神風松風。吹き亂れ吹き亂れもみぢ葉散り
飛ぶ木綿附鳥の。御祓も幣も。飄る小忌衣。謹上
再拜再拜再拜と。山河草木。國土治まりて。神は
あがらせ。給ひけり

（と常座にて留拍子を踏みて舞ひ納む。）

龍田明神の神前に紅葉が降れば、それはそのまゝ神に供へる幣となり、龍田の山風につれて時雨が降れば、その颯颯といふ音はそのまゝ神樂の鈴の音となり、川波の立てば、それは白木綿に見立てられる。

かくて、神風松風の吹くにつれて、紅葉が散り亂れ、やがて雞の聲が聞えて夜も明けて行くと、御幣も舞衣も風に飜り、

明神「謹上再拜再拜再拜」といつて、國土の安穩を守つて、神上りにあがつておしまひになつた。

○白木綿—ゆふ（楮）の皮で作つた白い布又は紙で、神前の榊に掛けるもの。川波の白いのをこれに喩へた。
○木綿附鳥—雞の異名。雞は龍田明神の神鳥であるから、紅葉の散る夕といひかけてこれを出し、御祓の枕詞とした。
○小忌衣—大嘗會等に祭官の着る青摺の衣。これを舞人の衣にも用ゐたので、ここに神樂の舞衣として出した。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

著しい異同はない。

古名本　（光悦本）

【二】シテ「なら（光〳〵）その川な……シテ「さればこそ……神慮に合はん爲ならずや（光そかし）……シテ「紅葉の歌は……重ねて（光ナシ）かやうに（光重ねて）……　【三】ワキ「さて（光ナシ）御身は……シテ「これは巫にて候……御道しるべ候べし（光こなたへ御入候へ）ワキ「あら嬉しや御供申し宮廻り（光ナシ）申さらずるにて候……シテ「さん候……三輪の明神の（光御）神木は……ワキありがたや……この御神（光垣）に……　【五】シテ「われ坊初より……劒（光やいは）の驗修の……

谷行　觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四・五番目　二段劇能

【人物】**前ワキ**　師阿闍梨、**前子方**　松若、**前シテ**　松若の母、**後子方**　松若、**後ワキ**　師阿闍梨、**重ワキツレ**　小先達、**ワキツレ**　同行山伏（二三人）、**後シテ**　伎樂鬼神

【所】**第一段**　京都松若宅　**第二段**　大和國葛城山

【時】（十月）

【作者】能本作者註文には作者不明とし、二百十番謡目録には金春禪竹の作とす。

【梗概】京都今熊野の山伏師阿闍梨に松若といふ一人の幼い弟子があつた。阿闍梨は近いうちに峯入をするについて、松若の私宅へ暇乞に行くと、折から母が少し風邪の氣味であつたが、松若は母の現世祈禱の爲に峯入の人數に加はりたいと願ひ出て、遂に許されることとなつた。やがて松若は師匠に伴はれて、小先達・同行山伏とともに葛城山

の麓まで來たところ、馴れぬ旅の疲れで風邪をひいた。山伏道の大法によれば、峯入の途中病に罹つたものは、谷行といつて生埋めにせられなければならない。師阿闍梨は暫く松若の病を隱してゐたが、同行山伏に見顯されて、松若は遂に谷行に處せられた。阿闍梨は悲しんで、こゝを立去らうとしない。それで同行山伏もその心中を察して、わが行徳を以て松若を再び蘇生させようと祈つた。すると、役行者が松若の孝心に感じて、伎樂鬼神に命じて、松若を土中から掘り出して蘇生せしめた。

【出典】見當らない。何か巷説を材料として謡曲作者の創案したものであらうか。

【總評】孝子を讃美した曲は、〔養老〕〔猩々〕など數少くないが、その犧牲的な辛苦を描いたものは、廢曲〔家持〕など一二を除いては、ただ本曲があるだけである。しかし一曲の主題は谷行といふ極めて慘忍な處刑であつて、これを勸める同行山伏の態度が亦從つて甚だ冷酷であるから――觀世現行曲では多少その態度を和らげてゐる――孝子物語らしい爽かな感じを與へることが少い。尤もその間には師弟の情愛をも濃かに描いて居り、殊に結末に於ては、孝行の徳によつて再び蘇生の喜びを享けてゐるが、なほ且谷行といふ不愉快な印象を消し去ることが出來ない。孝子美談の曲といふよりも、謡曲すへてを通じて最も慘虐な場面を描いたものといつた方が適當であるやうに思ふ。

脚色の推移は甚しい無理もないが、さほど巧みなものとも思はれない。觀世流以外で、後ヅレ役行者を出すのは、原形に近いものでなからうかと思はれるが、演出の效果からいへば、必ずしも大切な要素であるとも見られない。

第一段

【一】〇今熊野―京都東山、三十三間堂の東南三町ばかり。一に新熊野ともいふ。今熊野觀音寺がある。紀伊國熊野を移したからの名である〔田村〕參照。〇椰の木の坊―觀音寺の僧坊の名か。〇師の阿闍梨―〔境風〕のワキと同一人。師は父が大宰師であつたからの名であら

【一】シテ松若の母、面深井・鬘・鬘帶・摺箔淺黄・着附箔・無色唐織着流の裝束、子方松若、襟赤・着附縫箔・稚兒袴・扇の裝束にて何事なく出で、地謡座前に行き下に居る。ワキ師阿闍梨、角帽子（沙門）・着附厚板・黒水衣・白大口・篠懸・腰帶・扇・刺高數珠の裝束にて橋懸に出で一の松邊に立ちて、

ワキ　これは今熊野椰の木の坊に。師の阿闍梨と

【一】舞臺より初め京都今熊野の椰の木の坊、ワキ師阿闍梨登場。

師　私は京都今熊野の椰の木の坊に住む師の阿闍梨といふ山伏です。そこで私は一

ら。阿闍梨は梵語Acaryaで軌範又は正行と譯し、弟子の軌範となりその行を矯正する者。天台眞言宗では職名とす。
○山伏―修驗道の行者。野に伏し山に伏して修行するとの意から出た名。
○峯入―山伏が修驗道の道場たる高峯、殊に役行者がこの道を開いた大和國葛城山に入つて困苦修行すること。こゝの峯入は葛城山に入るのである。

【二】
○松若―作者の假作であらう。
○言語道斷―言葉にいひ表し得ないこと。甚だ驚いたさま。
○ゆめゆめ―少しも。

申す山伏にて候。さても某弟子を一人持ちて候が、かの者の父空しくなり。母ばかりに添ひて候。又某は近き間に峯入を仕り候程に。暇乞の爲に唯今出京仕り候

【三】といひつゝ舞臺際に出で、シテの方に向き、

ワキ「いかに案内申し候

子方立ちて道中に出で、

子方「誰にて御入り候ぞ。や、師匠の御出でにて候よ

ワキ「いかに松若。何とて久しく寺へは上り給ひ候はぬぞ

子方「さん候母御の風の心地にて候程に參らず候

ワキ「言語道斷。ゆめゆめさやうの事をも存ぜず候。まづまづ某が參りたる由御申し候へ

子方母の前に出で、

子方「いかに申し候。師匠の御出でに

人弟子を持つてゐますが、その子の父は亡くなつて、母親だけが一所に暮らしてゐるのです。ところで、私は近いうちに峯入をしますので、その家に暇乞をする爲に、これから町へ出かけるのです」

といつて、やがて着いた態で、舞臺は京都の松若の家となる。子方松若、シテ松若の母は登場してゐる。

【三】

師「もうし、お取次を願ひます」

松若「どなたでございます。阿闍梨を見て、やあ、これはお師匠さまがお出で下さつたのですね」

師「これ松若、どうして長い間寺へ參られなかつたのだ」

松若「はい、お母さまが風邪の氣味だつたので參らなかつたのです」

師「これは驚いた。少しもそのやうな事とは知らなかつた。まづ自分の來たことをお母さまに申し上げておくれ」

松若、母の前へ行つて、

松若「お母さま、お師匠さまがお出でにな

○苦しからず—惡くない、快くなつた。

○やがて—そのまゝ、早く。

て候

シテ「此方へと申し候へ

子方（ワキに）「此方へ御入り候へ

ワキ眞中へ出で下に居る。子方も元の座に坐す。ワキシテに向ひ、

ワキ「久しく參らず候。又松若申され候は。風の心地の由承り候。いかやうに御座候ぞ

シテ「風の心地ははや苦しからず候。御心安く思し召され候へ

ワキ「さてはめでたう候。又近き間に峯入を仕り候程に。御暇乞の爲に參りて候

シテ「げにげに峯入とやらんは。大事の行とこそ承りて候へ。さて松若も御供にて候か

ワキ「幼き者の供すべき道にてはなく候

シテ「さてはめでたうやがて御歸り候へ

ワキ「さらばやがて參らうずるにて候

りました」

母「こちらへとおいひ」

松若、師匠の方へ出て、

松若「こちらへお通り下さい」

師阿闍梨は中へ入つて、舞臺は松若の家の一室となる。阿闍梨、松若の母に向ひ、

師「久しく御無沙汰しました。また松若の申されるには、あなたはお風邪の氣味だとか。御樣子はいかゞです」

母「風邪はもはやよくなりました。どうぞ御安心下さい」

師「それは結構でした。ところで、私は近いうちに峯入をしますので、お暇乞に參りました」

母「いかにも、峯入とか申すことは、大變むつかしい修行ださうでございますね。松若もお供するのでございますか」

師「小さい者の供の出來るところぢやありません」

母「では御機嫌よく早くお歸りなさいませ」

師「では、またすぐ歸つて參りませう」

○難行捨身＝難行は艱難な行法、苦行と熟し、易行と對する。捨身は報恩又は布施の爲に臂を焼き肉を割いて身を棄てること。

といひて仕手柱際へ行く、子方立ちて眞中へ出でワキに向ひ、

子方「いかに申すべき事の候

ワキ仕手柱際に立留りて子方に向ひ、

ワキ「何事にて候ぞ

子方「松若も峯入の御供申さうずるにて候

ワキ「いやいや唯今も母御に申し候如く、この道は難行捨身の行體にて。思ひもよらぬ事にてあるぞ。その上母の風の心地を見捨つべきにあらず。かたがた思ひもよらぬ事。唯止まり候へ

子方「いや母の風の心地にて候へば。御祈りの爲に參らうずるにて候

ワキ「さあらばこの由を母御に申さうずるにて候

ワキ立歸りて眞中に坐しシテに向ひ、子方も元の座に坐す、

ワキ「又參りて候。松若峯入の供せうずる由申さ

と挨拶して出かける。松若これを引留めて、

松若「もうしお師匠様」

師「何の用だ」

松若「私も峯入のお供がしたうございます」

師「いや〳〵今もお母さまにお話したやうに、この峯入といふことは、難行苦行のむつかしい修行で、小さい者にはとても思ひもよらないことなのだ。その上お母さまの風邪の御病氣を棄てて置いてはいけない。どちらにしても、行くことはならない。是非思ひとまるがよい」

松若「いえ、お母さまが風邪なので、その御全快を祈る爲に參りたいと思ふのです」

師「それならば、その事をお母さまにお話して見よう」

再びもとの室に立歸つて、

師「又參りました。松若が峯入の供をした

れ候間。母御の風の御心地といひ。難行捨身の道と申し。かたがた叶ふまじき由申して候へば。御祈りの爲に供すべき由申され候。いかが候べき

シテ「仰せ承り候。まづは松若申す如く。峯入の御供申さん事こそ。最も望む所なれども。（子方に）『御身の父に後れし日より。唯一人子のひたすらに。身に添ふ時だに見ぬ隙は。露程だにも忘られず。思ふ心を思へかし。唯思ひとまり候へ

子方「仰せはさる御事にて候へども。『身は難行の道に出でて。母の現世を祈らんと。思ひ立ちたるばかりなりと

地下歌「かきくどきたるその氣色。師匠も母も諸共に。あはれ孝行の深きや涙なるらん

【三】

シテ・ワキ「この上なれば力なし。さらば師匠のお

○父に後れし日―父に死に別れた日。
○身に添ふ時だに―同じ家に暮らしてゐる時でも顔を見ない時には。
○思ふ心を思へかし―子を思ふ親の心持を、子の方でも察してくれ。
○現世を祈らん―現世に於ける安穩を祈らん。
○深きや涙―孝行の深きを涙の深きにいひかけた。

【三】

○力なし―是非がない。

いといはれるので、お母さまはお風邪であり、難行苦行のむつかしい修行ではあり、いづれから見ても、行くことは出來ないと申すと、お母さまの御病氣全快のお祈りの爲に供がしたいといはれるのですが、どうしませう」

母「よく承りました。それは松若の申しますやうに、峯入のお供をするのが、一番望ましいことですけれど……（といひさして松若に向ひ）そなたのお父さまがお亡くなりになつてからは、たゞ獨り子を唯一の賴りとして、かうして一所に暮らしてゐてさへ、暫くでもそなたの顏が見えないと、心配になつて忘れられないのだ。私がこのやうに思ふ心を、お前も察しておくれ。是非思ひ止まつておくれ」

松若「仰せは御尤もでございますが、私は難行苦行をして、お母さまの現世安穩をお祈りしたいと、かう思ひ立つただけでございます」

と、松若のかきくどく樣に、その深い孝行の心に感じて、師匠も母も諸共に泣くのであつた。

【三】

（山伏）「この上は是非がないから、それではお

供して。とくとく歸り給へや

子方「歸るさの。心をとめて出づる日も。やがて急ぐや足引の。大和路遠き思ひかな

シテ「思ひをつくす手向には

子方「つゞりの袖も切るべきに

地「別れはさまざまの。行末知ればよそにのみ。見てや止みなん葛城や。高間の山の峯の雲。晴れぬは親の思ひ子の名殘惜しさを、いかにせん名殘惜しさをいかにせん

地謡の初めにワキ子方を立たせて仕手柱際へ行く。シテ立ち二三足出てこれを見送り、地謡終りてワキ・子方中入。シテも續いて中入。

後見、もちの木二本を兩隅に立てたる一疊臺を脇正面に持ち出す。

【四】

アシラヒの囃子にて、後子方松若、兜巾・篠懸・着附縫箔・水衣・白大口・腰帶・扇・刺高數珠の裝束、後ワキ師阿闍梨、兜巾・篠懸・着附大格子・水衣・白大口・腰帶・小刀・扇・刺高數珠の裝束、帥ツキヅレ小先達、兜巾・篠懸・着附厚板・水衣・白大口・

師匠さまのお供をして、そして早くお歸りよ。」

松若「歸る時の嬉しい心持を思ふと、出立の時からもう心が急がれて、あの大和路が隨分遠々しく思はれます」

母「心からお祈りする場合には、神への手向にも……

松若「衣の袖を切つて幣ともするのでございますが……

母「かうして別れるのかと思へば、色々行先のことが案じられて、「よそにのみ見てや止みなん」と歌に詠まれたやうに、あの遠い葛城の高間の山の白雲も、餘所事のやうには思はれず、親心としてたゞ可愛い子の上が案じられ、名殘惜しくてたまらないのだ」

といつて別れを惜しむ。師阿闍梨と松若はやがて幕へ出掛け、母もこれを見送つた後、第一段が終つて退場。

【四】

第二段

舞臺は初め京都で、後ワキ師阿闍梨、後子方松若と後ツキヅレ小先達及び同行山伏を伴つて登場。

○歸るさの心を—歸る時の嬉しい心を豫想して家を出ると、出立の時から早くも道が急がれるとの意。

○足引の—やまの枕詞。「急ぐ足」といひかけた。

○手向にはつゞりの袖も—古今集、素性法師の歌—手向にはつゞりの袖も切るべきに紅葉に飽ける神や返さん—の詞を借り、袖を切るといつた縁で別れとつゞけた。

○よそにのみ見てや止みなん葛城や—新古今集讀人知らずの歌。下句は「高間の山の峯の白雲」。母が子の行末を思ふ心持にとりなして引いたのである。

○高間の山—大和國葛城郡にある葛城山の高峯。

○晴れぬは—雲の晴れぬを母の思ひの晴れぬにいひかけた。

【四】

腰帯・扇・刺高數珠の装束、ツキヅレ同行山伏二三人、重ツレと同様の装束（着附は無地熨斗目）にて舞臺に入り、

ワキサシ「かくて小童思ひの外。峯入の姿山伏の。兜巾篠懸苔の衣

一同向合ひ、

ワキツレ上歌「今日思ひ立つ道のべの。今日思ひ立つ道のべの。たよりぞ深き志。唯孝行の心力に。馬はあれども徒歩に行くこは誰が爲ぞ宇治の里。都出で。今日みかの原泉川。川風寒み千鳥鳴く聲こそ今日の夕なれ。聲こそ今日の、夕なれ。ふりさけ見れば春日なる。ふりさけ見れば春日なる。三笠の山をさし過ぎて。布留の神杉過ぎがてに。三輪の山もとよそに見て。誰わが庵と定めけん。峯の巌の苔衣。かたしき初むる葛城の露こそ宿りなりけれ露こそ宿りなりけれ

ワキ「峯の巌の苔衣」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて、一同旅を進めたる心。上歌濟みてワキは正面に向き、

師 このやうに、小さな子供が意外にも峯入をすることとなり、兜巾や篠懸衣の山伏姿となつて、今日愈〻思ひ立つて旅に出で、道を行くのにも、誰が爲でもない、たゞ深く母を思ふ孝行の心から、馬で行けるところをも徒歩で行つて、木幡や宇治の里を過ぎ、早くも都を出てから三日も經つた頃には、甕の原や泉川まで來ると、川風が寒くて千鳥の鳴く聲が聞える。かうして今日も亦夕暮となつたかと思ひながら、旅を續け、遙か遠くに見えてゐた春日の三笠山も、やがて通り過ぎて、布留の社の神杉のあるあたりでは、さすがに素通りにし難い思ひをしながらも、三輪の山本にも立寄らないで、やがて葛城山へ來て、山腹の巌の中で、——誰が最初このやうな所を宿としたものか、あまりにもみおめた巌だ——、衣の片袖を下に敷いて、果敢ない夢を結ぶこととなつた」

こゝいつてゐるうちに、葛城山腹に着いた心で、舞臺は葛城山の一の宿となり、

○兜巾—山伏のかぶる小さな冠物。黒色で十二の襞がある。
○篠懸—山伏の着る上衣。麻で作り菊綴の紋をつける。
○苔の衣—僧衣。
○馬はあれども—拾遺集、柿本人丸の歌「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」を引いた。
○こは誰が爲ぞ—前揭の歌の木幡を「こは誰が」といひかけた。木幡は山城國宇治郡にある。
○宇治の里—誰が爲にもの憂く思ふといひかけた。
○都出で今日みかの原泉川—古今集、讀人知らずの歌、下句は「川風寒し衣かせ山」。今日三日を甕の原にいひかけた。甕の原は山城國相樂郡にあり、泉川は木津川の一名で甕の原の南を流る。
○川風寒み千鳥鳴く—拾遺集、紀貫之の歌「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり」を引いた。
○ふりさけ見れば—古今集安倍仲麿の歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」を借りた。

○布留の中在—布留は大和國山邊郡山邊村の字名。こゝに石上神社がある。過ぎて行くを布留にいひかけた。○過ぎがてに—過ぎ難く思ひながら。
○三輪の山もと—杉の緑で、古今集、讀人知らずの歌「わが庵は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」を引き、「誰わが庵と」と續けた。三輪は大和國磯城郡にある。
○よそに見て—立ち寄らないで。
○かたしき—片袖を下に敷いて寝ること。
○露こそ宿り—露の上を床として野宿すること。
○一の室—山伏等が泊まる爲に作られた山腹の石窟で、その幾つかある中の、最も近い室。
【五】
○先達—山伏修行の功を積んで、同行山伏の先導をなすもの、山伏一行中の頭領、

ツレ「急ぎ候程に、これははや一の室に着きて候。
重ヅレに「暫くこれにあらうずるにて候
重ツレ「承り候
ツレ、子方に「まづかう御座候へ」といひて、一同脇座より囃子座前にかけて弓形に並び下に居る。

【五】
子方ツレに「いかに申すべき事の候
ツレ「何事にて候ぞ
子方「道より風の心地にて候
ツレ「暫く。この道に出でてさやうの事をば申さぬ事にて候。それは習はぬ旅の疲れにてあるべし。よくよく休み候へ
子方兜巾・水衣を脱ぎ、ツレと入替り、ツレの膝枕にて臥す。
重ヅレ立ち、二のツレと向合ひて下に居り、
重ヅレ（二のツレに）「松若殿道より風の心地の由承り候。先達に尋ね申さうずるにて候
二のツレ「尤もにて候

師「道を急いだので、もう早や一の室に着いた。暫くこゝに休むこととしよう」
同行「畏りました」
一同休息の體。
【五】
松若、師に「お師匠さま」
師「何の用だね」
松若「途中から風邪氣味になりました」
師「お待ち。峯入の旅に出たものは、そのやうなことをいつてはいけないのだ。多分馴れない旅に疲れたのであらう。ゆつくりお休み」
小山伏、他の同行山伏に「松若殿が途中から風邪氣味になつたとのことだが、先達に様子を尋ねて見ることにしよう」
同行「それがよろしいでせう」

重ヅレ（ツキに）「松若殿風の心地と承り候は。何と御座候ぞ御心許なく候

ツキ「さん候これは習はぬ旅の疲れにてありげに候苦しからず候

重ヅレ「さては御心安く候

ツキヅレ（重ヅレに）「いかに方々へ申し候。松若殿旅の疲れの由仰せられ候が。以ての外に見え給ひて候。何とて大法の如く谷行に行ひ給ひ候はぬぞ

重ヅレ「げにげにこれは尤もにて候。さらば先達へその由申さうずるにて候。（ツキに）いかに申し候。さきに松若殿の御事を尋ね申して候へば。旅の疲れと承り候が。今ははや以ての外に見えさせ給ひて候。憚り多き申し事にて候へども。昔よりの大法にて候へば。谷行に行ひ申さうず

小先達（師に）「松若殿が風邪の氣味だといふことですが、どんな様子です、氣がかりに思ひますが」

師「いや何、これは馴れない旅の疲れが出たらしいのだ。心配することはない」

小先達「それならば安心です」

（この間に一夜はとにかく過ぎたのであらう。相當時間の經つた後）

同行（小先達等に）「各々方、松若殿は旅の疲れだと先達が仰しやるけれど、非常な大病のやうに思はれます。何故嚴しい掟に從つて谷行に行はれないのです」

小先達「いかにもこれは尤もだ。それでは自分が先達にこの事を話すことにしよう（師に）先達殿、先程、松若殿の御様子をお尋ねしたら、旅の疲れだと仰しやつたが、今はもはや大變な病氣のやうに思はれます。甚だいひ難いことですが、昔からの嚴しい掟なのですから、谷行に行ふことにしようと、皆の者が申して居ります」

○大法―嚴しい規則。

○谷行―石こづみ。罪のある者を谷に陥れ上から土石を落して生埋めにすること山伏の間に行はれた刑法で峯入の途中病に罹る者があれば、佛罰を受けたものとしてこの法を行ひ、他の者の禍難を免れる手段としたものであることが、本曲によつて知られる。

○憚り多き申し事―遠慮すべき、いひにくい事。

○是非をば申さず　彼是いはない。致し方がない。

○前例　先例。

○假初も　暫くの間でも同じ峯入の仲間となつたのは

る由皆々申され候

ワキ「何と松若を谷行に行はれうずると候や

ワキツレ「さん候

ワキ「大法の事にて候程に。是非をば申さず候さりながら。かの者の心中餘りに不便に候へば。大法の由を懇に申し聞かせうずるにて候

ワキツレ「尤もにて候

ワキ「いかに松若たしかに聞け。この道に出でてかやうに違例する者をば。谷行とて忽ち命を失ふ事。これ昔よりの大法なり。御身に代るものならば。何か命の惜しからん。進退谷まりて候

子方「仰せ承り候。この道に出でて命を捨てん事こそ。最も望む所なれども。母の御歎きの色。それこそ深き悲しみなれ。また假初も他生の縁。皆人々に御名殘こそ惜しう候へ

帥「何といふ、松若を谷行に行はうといふのか」

小先達「さうです」

帥「嚴しい掟だから、是非もないが、あの子の心根があまりに可哀想だから、この掟のことをよくいつて聞かせようと思ふか」

小先達「それは御尤もです」

帥（松若に）「おい松若、よくお聞き。この峯入の旅に出て、このやうに病氣をする者は、谷行といつて、すぐ命をとつてしまふのが、昔からの嚴しい掟なのだ。自分がそなたの命に代つてやれるものならば、何の命が惜しからう。自分もどうしてよいやら分らないのだ」

松若「お詞はよく分りました。この峯入の修行に出て、その爲に命を捨てるのは、私の最も望みとする所でございますが、たゞお母さまのお歎きになるのが、それが非常に悲しうございます。それからまた、暫くでも御一所になつた方々に對しても、これも前世からの御緣があればこそと思へば、皆さまにもお名殘惜しうございます」

地「何といひやる方もなく。皆聲を上げ涙に咽ぶ心ぞあはれなる（とワキ面伏せ）

【六】

一同「サシ」かくて面々一同に。あはれ悲しき世の習ひ。殊更これは大法の。冥見私なきままに。谷行にこそ行ひけれ（と一同居立ちて子方へ見込む）

ワキ「先達も師弟の契りの中なれば。何といひやる方もなく。たゞくれくれと目もあやなく（としをりし）

地「泣く涙せかれぬ道なれば。身も諸共にともかくもならばやと思ふさへ。叶はぬ事ぞ悲しき。悲しみの至りて悲しきは。生別離の心なり。なかなか死別ならばかほどの歎きよもあらじ

（居クセ）

地「クセ」一切有爲の世の習ひ。如夢幻泡影如露亦如電。應作如是觀の心をも。思ひ知らずやさし

かういはれては、誰も何といひ慰める術もなく、皆聲をあげて涙に咽んだ、まことにあはれなことであつた。

【六】

かうして、一行の者皆憐み悲しんだが、これも是非のない世の習ひ、殊にこれは嚴しい掟で、神佛の御照覽遊ばす、自分勝手に法を枉げることの出來ないものであるから、遂に谷行に行ふこととなつた。

先達も、松若とは師弟の間柄であるから、この悲しみをどう慰めよう術もなく、たゞ心も暗くなり、涙に眼も見えなくなつて、せきくる涙を止めやうもなく、

地 是非ないことであるから、せめて自分も一所に死んでしまひたいと思ふのだが、それさへ思ふやうにならないのが悲しい。色々悲しい事の多い中でも、最も悲しいのは生き別れだ。むしろ死に別れであつたならば、却つてこれほどまでには悲しくもあるまい。——

この世にあるものは一切無常變化するもので、喩へば夢や幻の如く、又は泡や露の如く、乃至は電の如くに、すぐ消えてし

【六】

○冥見私なきままに—冥界から神佛が明らかに照覽し給ふのだから。神佛の思召に背いて勝手なことをするわけに行かないから、

○くれくれと—涙に目もくらくなつて。

○目もあやなく—目も物の見わけがつかず。

○せかれぬ道—涙のせきとめられない意と、大法を止められないこととを兼ねて用ゐた。

○ともかくもならばや—死にたい。

○悲しみの至りて—楚辭、九歌に「悲莫ㇾ悲ㇾ兮生別離ㇾ、樂莫ㇾ樂ㇾ兮新相知ㇾ」

○なかなか—却つて。

○一切有爲の世の—金剛般若經に「一切有爲法、如ㇾ夢幻泡影ㇾ、如ㇾ露亦如ㇾ電、應ㇾ作ㇾ如ㇾ是觀ㇾ」有爲は生滅變化する現象、

○火宅の門—法華經、譬喩品に「三界無安、猶如火宅」。火宅は火に焼けてゐる家。
○三界—欲界・色界・無色界で、衆生の生死輪廻する迷界。
○親子恩愛の—「子は三界の絆」といふ諺によつて、三界を承けてこの語を出した。
○邪見の劍—邪見は因果の理を無視する妄見。情を忍んで思ひ切る喩とした。
○身を碎く心—胸を碎かれるやうな切ない思ひ。
○雨塊を動かせる—王充の論衡に「雨不破塊」とあり屢々引用せられる語である。から雨をたゞ塊に冠しただけである。動かせるは塊と心と上下にかゝる。

【七】

○日のたけて—日が高く上つて、觀世以外には「はや夜が明けて候」とある。
○われ等は—刊行會本には「われ〳〵は」とある。

もこの。行者の道には出でながら。火宅の門を上りやらで。猶安からぬ三界の。親子恩愛の。歎きにひとしかりけり

シテツレ かくて時刻も移るとて（ワキヅレ一同居立ち）

地 皆面々に思ひ切り。邪見の劍身を碎く心をなしてかの人を。嶮しき谷に陷れ。上に被ふや石瓦。雨塊を動かせる。心を傷め聲を上げ。皆面々に泣きゐたり皆面々に泣きゐたり

（ト、ツレヅレ二人、子方を連出して一疊臺に上せ、これを下「日附柱際」に落し、もとの座に歸りてしをる。後見子方に小袖を覆ふ。）

【七】

ワキヅレ一ツレに はや日のたけて候。急ぎ御立ちあらうずるにて候

ワキ 愚僧は罷り立つまじく候

ワキヅレ 先達の御立ちなく候ひては。われ等は何と仕り候べき。唯急いで御立ち候へ

まふ果敢ないものである。かういふ考へを持つてゐなければならない。——といふ教を、自分は知らないわけでもなからうに、殊にこのやうな修驗道を修める身でありながら、火事にかゝつてゐる家のやうな娑婆のことを思ひきることが出來ないで、やはり不安な悲しみに襲はれて、親子の恩愛と同じ歎きに沈むことだ。

小先達「かうしてゐては、時間が經つばかりだ」

といつて、一行の者が皆思ひきつて、情の心をうち棄て、身を碎くやうな悲しみに打たれたながらも、この松若を嶮しい谷に陷れて、その上に石や瓦や塊を被ひかぶせたものの、悲しみに心を傷めて、皆聲をあげて泣いてゐた。

【七】

そのうちに時はまたも過ぎて行くので、

小先達二師に「もはや日も高く上つて、大分遲くなりました。早くお立ちになるがよろしいでせう」

帥「いや自分は出て行くまい」

小先達「先達が御出立にならなければ、我我はどうするのです。是非早くお立ち下さい」

ワキ「まづ案じても御覽候へ。われ等都に上り、かの者の母には何と申すべきぞ。所詮病氣も歎きも同じ事にて候へば。われ等をも谷行に行ひて給はり候へ

重ツレ「御歎き尤もにて候。(二のツレに)いかに方々へ申し候。先達の仰せ候は。病氣も歎きも同じ事なれば。先達をも谷行に行ひ申せと仰せ候。さて何と仕り候べき

ワキヅレ「げにげに御歎き尤もにて候。われ等存じ候は。この年月の行德もかやうの時にてこそ候へ。開山役の優婆塞。並に大聖不動明王の索にかけ。松若殿の御命を二度蘇生させ申さうずるにて候

重ヅレ「これは尤もにて候。(ワキに)いかに申し候。皆々申され候は。この年月の行德もかやうの時

師「まあ考へても見て下さい。自分は都に上つて、あの子の母に何と挨拶が出來ます。つまり病氣も歎きも同じ事なのだから、自分をも谷行に行つて下さい」

小先達「お歎きになるのも御尤もです。(ここいつて同行山伏に)各々方、先達が仰しやるには、病氣も歎きも同じ事なのだから、自分をも谷行に行つてくれと、かう仰しやるのです。一體どうしたものであらう」

同行「いかにもお歎きは御尤もです。自分達が思ふには、この永い年月修行の功德を積んだのも、かういふ時の爲なのです。で、わが修驗道の開山役の優婆塞並に不動明王にお祈り申して、松若殿のお命をも一度生き返へらせるやうにしませう

小先達「これは御尤もです。(師に)先達殿、皆の者が申されるには、この永い年月修行の功德を積んだのも、かういふ時の爲だ

◎われ等存じ候は―刊行會本には「われ〳〵存候は」とある。
○行德―修行の功德。
○役の優婆塞―修驗道の開祖役小角。文武天皇頃の人、葛城山の巖窟に籠つて難行苦行し、孔雀明王呪を誦持して神通を得た。〔安宅〕〔葛城〕參照。優婆塞は僧形とならないで佛道を修行する男子。
○不動明王―山伏の尊崇する五大尊の中央尊で、大日如來が一切の惡魔を降伏せんが爲に變化して、忿怒身を現した明王。大火焔の中にあつて石上に坐し、右手に劍、左手に索を持つ。
○索―繩。不動明王が惡魔を緊縛する爲に左手に持つ

にてこそ候へ。開山役の優婆塞。殊には大聖不動明王の索にかけ。松若殿の御命を蘇生させ申さうずる由皆々申され候

ワキ「さやうの事こそ聞かまほしう候へ。われ等もこれにて祈念申さうずるにて候

ツレ「尤もにて候（とワキヅレ一同兩袖を肩へ上げ）

ワキツレ一同「さても師匠のその歎き、理過ぐる有樣を、見聞くも同じ心かな

（ワキ・ワキヅレ一同立ちて正面に向き、）

ワキ「さりとも年月賴みをかくる。大聖不動明王の威力

一同「又は山神護法善神

ワキ「殊には開山役の優婆塞

一同「哀愍納受垂れ給ひ

地「使者の鬼神の伎樂伎女を。遣はし助けおはし

から、開山の役の優婆塞殊に不動明王にお祈り申して、松若殿のお命も生き返させようと、かう申されるのです」

師「さういふ事が聞きたかつた。自分もここでお祈りすることとしよう」

同行一同「師匠の尤も千萬なこの歎きを見聞くと、自分達も同じやうに悲しくなるのだ」

（いつて、祈禱を始め、）

師「この永い年月お賴み申してゐる、威力の夥しい不動明王樣……」

一同「又この山の神樣並に佛法を守護し給ふ善神方……」

師「殊にはわが修驗道の開山役の優婆塞樣……」

一同「どうか私どもの心を憐み、私どもの願ひをお聞き届け下さいまして、御使者の伎樂鬼神・伎樂伎女をお遣はしになり、

○山神—山の神。葛城山に祀られた事代主神を指すか。

○護法善神—四天王帝釋等佛法を守護する善神。

○伎樂伎女—伎樂は一種の雜樂で、わが國に古く輸入せられた（總說參照）。伎女は伎樂を奏する女。

ませ

【八】　と一同数珠をもみて祈り、直してもとの座に歸り下に居る。早笛にて、後ジテ伎樂鬼神、面癋・赤頭・金緞鉢卷・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて斧を持ちて橋懸一の松へ出で、

地「伎樂鬼神は飛び來り。伎樂鬼神は飛び來つて（と舞臺に入り）。行者のお前に跪いて（ワキの前に坐し）。頭を傾け仰せを受けて（辭儀して立ち）。谷行に飛びかけつて（一疊臺に上り）。上に蓋へる土木磐石。押し倒し取り拂つて（立木を伐り拂ひ）。上なる土をばやはらやはらと靜かに返してかの小童を（子方の小袖をとりのけ）。恙もなく抱き上げ（子方を抱き）。行者のお前に參らすれば（子方をワキへ出し）。行者は喜悅の色をなし（子方の面を撫でて）。慈悲の御手に髪を撫で（ワキ數珠にて子方の面を撫でて）。善哉善哉孝行切なる。心を感ずるぞとて。歸らせ給へば伎樂も共に（シテ立ちて後へ廻りて）御先を拂つてさかしき道を（正面へ出でて）分けつゝくぐり

松若をお助け下さいませ」

【八】　一同の願ひは叶つて、後ジテ伎樂鬼神登場、（觀世流では役行者は實際の舞臺には出ない）

伎樂鬼神が飛び來つて、役の行者のお前に跪き、頭を垂れて行者の仰せを伺ひ、行者の命令を受けるや、かの松若の谷行に行はれた所へ飛び翔つて、松若の上を被つてゐた土や木や磐や石を押し倒し取り拂つて、上にかゝつてゐた土を、もの和らかに靜かにとりのけて、かの小さな子を無事に抱き上げ、役の行者のお前に連れて行くと、行者は喜びを顏に現して、慈悲深い御手を以てかの松若の髪を撫で『おゝ感心だ、孝行の深い心を褒めるぞ』といつて、お歸りになる。

すると、伎樂鬼神も一緒に立つて、行者のお先拂ひをして、けはしい道を分けたり拂つたりして、高い高間山に[illegible]

【八】

○伎樂鬼神—伎樂を奏する鬼神。法華經、譬喩品に「諸天伎樂、百千萬種、於二虛空中一、一時俱作」とあるから、かういふ鬼神があると想つたのであらう。

○谷行に飛びかけつて—谷行にせられた松若の上に飛び翔つて。

○行者—役の行者。

○善哉善哉—神佛が賞讃せられる時の歎聲。

○御先を拂つて—役の行者の先拂ひをして。

○登る＝高間の—上るや高くといひかけた。
○かからざれども—葛の緣語で、目にかゝると橋がかかると兩方に兼ねた。
○岩橋—役行者が鬼神を使役して葛城と大峯との間に架けた橋。「葛城」參照。
○大峯—吉野の金峯山。

つ登るや高間の雲霧傳ふや葛城の（左へ廻り）人の目にこそかからざれどもまことは渡せる岩橋を」大峯かけて遙々と（橋懸へ行き）」大峯かけて遙々と」虚空を渡つて失せにけり

（橋際にて留拍子を踏む。子方・ワキ等續いて幕に入る。）

り、雲霧に傳つて、人の目には見えないが、實際は架かつてゐる岩橋を渡つて、大峯の方へ行き、空中に入つて見えなくなつてしまつた。

〔考異〕

謡本（五流）

【七】喜多 使者の鬼神、助けおはしませ」の次に、寶春剛喜とも、後ヅレ役行者登場、左の謡を加へ、【八】の地 役樂鬼神は飛び來り……

〽なる役 苦修練行の山路嶮しくして、衆生三毒の冥闇を照らし。積功累德の床の上には、眞如の月ほがらかにして。至らぬ隈もあらざりけり。寂寞無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現、清淨光明身。いかに面々確かに聞け。かの小童は他に異なる。親孝行の仁體なれば、忽ち命を助くるなり。心安かれ人々よ。ワキ「あらありがたの御事や。抑々かやうに見え給ふは。如何なる行者におはすらん。ツレ「行者と見るこそやがてそれよ。年ふりまさり老たけて。ワキ「いさ實頭は雪。ツレ「しもといふ。地「葛城山の名ぞ高き。〳〵。役の優婆塞まのあたり、示現も孝行故、あらありがたの御慈悲や。元より衆生一子にて。〳〵。哀愍あれば視心。佛の慈悲にかくばかり。今現さん待て暫し。使者の鬼神の役業役女、とく〳〵參耳申すべし。

古謡本（元祿八年本）

【一】ツレ これは（元都）今熊野。持ちて候ふが（元名をば松若と申候）かの者の父空しくなり（元いまだ幼く候程に）母ばかり（元の方）に添ひて（元「置きて」候……【二】子方「誰にて御入り（元渡り）候ぞ。……御出でにて候よ（元ナシ）。ワキ「いかに松若（元殿）……子方「とも候——心地にて（元御入）候程に（元久敷）……子方「（元畏て候）いかに申し候……子方「（元畏て候）こなたへ御入り候へ。ワキ「久しく參らず候（元ひて唯今參候へば）風の心地の由承り候（元御痛りのよし松若殿仰られ候）如何やうに（元さて何と）御座候ぞ。シテ「風の心

地ははや苦しからず候（元さん候少心も能候程に）……。ワキ「扨はめでたう候（元御心易存候。又唯今参る事餘の儀にあらす）又（元ナシ）
……シテ「げにげに（元ナシ）（元御）峯入と……大事の行（元異なる御行體）とこそ……。ワキ「（元いや〳〵難行捨身の行にて候程に）幼き
人の……シテ「さては（元御心やすう候）めでたうやがて御歸り候へ（元御出あらふするにて候）。ワキ「さらば……にて候（元いかに松若殿。
母御によくつきそひ痛はり御申候へ。頓て罷出ふするにて候）。子方「いかに（元師匠に）申すべき……子方「松若も……申さうずるにて候（元
し候へし）……子方「いや母の風の心地にて候へば（元御の御痛はりにて候程に）御祈りの爲に参らうずるにて候（元御供申候へし）。ワキ
「（元扨は孝行のために仰られ候な。是も又尤にて候程に）さあらば此由を……松若（元殿仰られ候は）峯入の……申され候間母御の風の……
……叶ふまじき（元程に以前も申候ごとく。思ひもよらぬ）由申して候へば（元母御の）御祈りの爲に供すべき由申され候如何候べき（元峯
入したきよし仰候。何と御座候へき）……子方「仰せはさる事にて候へども（元心をとめて御身につかへ）……【四】ワキサシの前に、（元
ワキ「いかに面々へ申候。松若峯入の供せうずるよし申候程に。俄に召連て候。いまた幼き者にて候間。いたはりて給り候へ。小先達「近比
めでたう候）を加ふ。ワキ「急ぎ候程に。これははや（元葛城）一の宿に……暫くこれにあらうずるにて候（元此所にて御心靜に御休みあら
ふするにて候）……【五】子方「いかに（元師匠に）……ワキ「暫くこの道に出でて（元て）……よくよく休み候へ（元御心易く思召候へ）。
重ヅレ「松若殿……風の心地の由承り候（元と仰られ候御心元なく候程に）先達に尋ね申さうずるにて候（元へ尋ね申さはやと存候）。ツレ「尤
にて候（元小先達「いかに先達へ申すべき事の候。ワキ「何事にて候ぞ）。重ヅレ「松若殿（元道より）風の……ワキ「さん候……疲れにてありげに
（元ナシ）候苦しからず候（元御心安く思召れ候へ）。重ヅレ「さては御心安く候（元能痛はり申され候へ）。ツレ「いかに方々……給ひ候はぬ
ぞ（元 小先達「さん候唯今其由を尋申て候へは。先達の仰には。風の心地にてはなく候。習はぬ旅のつかれにて候由仰られ候。ツレ「いや
〳〵それは先達の御僞にて御座候。以の外の御煩にて御座候程に。先達へ御申有て大法に任せ。谷行に行ひ申され候へ）。重ヅレ「げにげ
に……さらば先達へ（元ナシ）その由（元を）申さう……いかに（元先達へ）申し候……と承り（元の由仰せ）候が……憚り多き申し事にて……
皆々申され候（元に何とて大法のごとく谷行には行ひ申され候はぬぞ。加樣の事をは先達より社仰られ候べきに。然るにかやうなる由各
申され候。痛はしながら谷行に行ひ申さうするにて候）……重ヅレ「さん候（元中々の事）。ワキ「大法の……聞かせうずるにて候（元聞少の
暇を給はり候へ）。重ヅレ「尤にて候（元心得申候。暫く待申さうするにて候）……子方「仰せ承り候……命を捨てん（元失はん）事……（元ひ
とつ心にかゝる事は）母の御歎きの……皆人々に（元ナシ）……何といひ……あはれなる（元悲しき）【七】重ヅレ「はや日のたけて候

(元や)はや夜の明け候)……ヮニ(元仰承候)異信は……重ノ……御歎き尤もにて……先達(元我)をも谷行に行ひ申せと仰せ候(元へとて
様候て御座候へとて(元是は何と——ヮニげにげに御歎き……申さうずるにて候(元と存候)。重ノと「これは尤もにて候(元實々是は仰尤
にて候」とあるは此由を先達へ申候へし」いかに申し候……ヮニさやうの事こそ聞かまほしう候へ(元面々の行徳も加様の爲にて社候へ)
【八】 伎業也師は……心を盡すぞとて(元即師匠に與へ給ひ)……

玉葛

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　旅僧、前シテ　女舟人（玉葛の靈）狂言　門前の者、後シテ　玉葛内侍

【所】大和國　初瀬

【時】秋（九月）

【異稱】〔玉鬘〕とも書く、

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに金春禪竹の作とす。禪鳳習道目錄にこの曲名が見え、言經卿記文祿四年三月三十日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】旅僧が奈良から初瀬詣でに出かけて、初瀬川の邊へ來ると、一人の女性が小舟に棹さして上つて來たので、怪んで言葉をかけると、女は自分も長谷へ參るのであるといつて、やがて二本の杉へ僧を案内し、玉葛内侍が筑紫から逃げ上つて此所へ來て、母夕顔の侍女右近に會つた事などを語り、自分がその玉葛の幽靈であるといひも終らずに消え失せた。僧があはれんで回向してゐると、その夢に玉葛の靈が現れ出て、昔の事を懺悔して妄執を晴らした、と見ると僧の夢もさめた。

【出典】源氏物語玉葛の卷に、幼少の時母夕顔を亡くした玉葛は、乳母の夫が太宰少貳に任ぜられたまゝに、これに伴はれて筑紫へ下つ

たが、少貳はその地で病死した。しかしその後もなほ色々障る事があつて、玉葛は乳母と共にこゝに居留つてゐると、大夫の監といふ武士がいひ寄つて來て、これを斥ければ、危い目に遭ふ恐れが生じたので、密かにこゝを免れ出て都に上つた。そして初瀬に參詣した時、玉葛の身を案じてこの觀音に祈願に參つた母の侍女右近にめぐり會つた、とある記事に據つたのである。

【概評】　女性を主人公とした複式夢幻能として、形式內容ともにまづ尋常の出來であるが、これを母夕顏を主人公とした「夕顏」「半蔀」などに比べると、遙かに粗雜で、源語物らしい優雅さを缺いてゐる。平凡な作である。

前段

【一】

舞臺は初め奈良で、ワキ旅僧登場。

僧「私は諸國を見物して歩いてゐる僧です。この間中は奈良にゐて、靈驗のあらたかな神社佛閣を殘らず拜み廻りました。そしてこれから長谷觀音に參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、

僧「奈良といふ有名な舊都の往事を色々と想像しながら、旅程を進めて、道すがら石上寺に參詣し、人の目じるしにした三輪の杉、それを法の道に入る目じるしとも思ひなして、三輪山の麓を通つて行くうちに、間もなく初瀬川に着いた」

と旅程を進めてゐるうちに、初瀬川に着いた體で、舞臺は大和國初瀬川の畔となる。

【一】

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・絓水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り名乘座に立ちて、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は南都に候ひて。靈佛靈社殘りなく拜み廻りて候。又これより初瀬詣でと志して候

ワキ道行「楢の葉の。名におふ宮の古ことを。名におふ宮の古ことを。思ひつづけて行く末は。石上寺伏し拜み。法のしるしや三輪の杉。山本行けば程もなく。初瀬川にも、着きにけり初瀬川にも着きにけり

「法のしるしや」と右の方に向きて二三足出で、またもとへ歸りて初瀬川に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

【一】○南都—元明天皇より七代の都であつた奈良、これに對して京都を北都ともいつた。○靈佛靈社—靈驗の著しい神社佛閣。○初瀬詣で—大和國磯城郡初瀬村にある長谷寺に參詣すること。長谷寺は一に豐山寺といひ、本尊十一面觀音、西國巡禮三十三所第八番の札所。○楢の葉の—古今集、文屋有季の歌「神無月時雨降りおける楢の葉の名におふ宮の古ことぞこれ」を引き、奈良といふ有名な都の古事といふ意に用ゐた。○石上寺—大和國山邊郡山邊村にあつた。○法のしるしや三輪の杉—古今集、讀人知らずの歌「わが庵は三輪の山本戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる

門」を引き、その目じるしの杉を法の道に入る目じるしの心にいひなしたのである。三輪の神杉は大和國磯城郡三輪村にある。
○山本―山の麓。
○初瀬川―三輪山の東北から流れ出て末は佐保川に合す。
【三】○舟の泊りや―初瀬を泊瀬とも書くので、かういつた。
○上りかねた―註釋に「一景色の面白さに棹を留めて見とれ居る心なり」といつてゐるのは如何であらう。女手には漕ぎかねる意でなからうか。でないと次のサシ謠と相應しない。
○舟人も誰を戀ふとか大島の―源氏物語玉鬘の巻、玉葛が筑紫に下る時舟中で大貳少貳の女の詠んだ歌。下句は「うらかなしげに聲の聞ゆる」。大島は筑前國宗像の沖に在る。
○こがれ來にける―舟を漕ぐと、古を思ひ焦がれると。
○はてしも―果てしも無いと、思ひ焦がれる心の果てしもと、行方の果てしと。
○白露の―果てしも知らずといひかけた。
○心の月の御舟―以下この

ツレ「急ぎ候程に。初瀬川に着きて候。心靜かに參詣申さうずるにて候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】一聲の囃子にて、シテ女舟人、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附箔・紅水衣・無色縫箔腰卷の裝束にて棹を持ちて出で常座に立ちて、

シテ一聲「程もなき。舟の泊りや初瀬川。上りかねたる。けしきかな

シテサシ「舟人も誰を戀ふとか大島の。うら悲しげに聲立てて。こがれ來にける古の。はてしもいさや白波の。よるべいづくぞ心の月の。御舟はそこと。はてしもなし

シテ下歌「唯われひとり水馴棹。雫も袖の色にのみ。

上歌「暮れて行く。秋の涙か村時雨。秋の涙か村時雨。古川野邊のさみしくも（と右の方を見）。人や見るらん身の程もなほ浮舟の楫を絶え。綱手かな

俳「道を急いだので、思ひの外早く初瀬川に着きました。心靜かに觀音に參詣しませう」

といつて、長谷觀音の方へ行く。

【三】前ジテ玉葛の靈、女舟人の姿を装ひ、初瀬川に小舟を棹さして來る態で登場。

女「もう直ぐそこが舟着き場であるが、この初瀬川の急な流れを漕ぎのぼることはなか／＼容易ではなささうだ。思へば昔、―――
『舟人も誰を戀ふとか大島の、うら悲しげに聲の聞ゆる』
（自分ばかりではない、この大島の浦の舟人も、やはり人を戀ひ慕つてゐると見えて、悲しさうな聲で船歌を謡つてゐるのが聞える）
と漕ぎ渡る船中で詠んで、母を戀ひこがれた昔の事、思へば果てしもない大海に漂うて、どこを頼りとする當てもなく、あの大空を渡つて行く月――それを空の御舟とも見立て得よう――のやうな、どこといふ目當てのない、果てしのない船旅をしたことだ。
たゞ自分一人でさして行くこの棹の雫までが、涙に濡れた袖の色に染まることだ。このやうに涙が色を染めるものとすれば、木葉を紅く染める村時雨は晩秋の涙ともいへようか。それにしてもこの古川

節の語釋、本曲の末に記す。

【三】

○名に流れたる―名に聞えた、有名な。川の緣で流れたるといつた。○海士小舟初瀬の川―萬葉集卷十一に「海士小舟泊瀬の山に降る雪のけながく戀し君が音ぞする」。初瀬の川とつゞけた歌は見當らない。○えにし―江にしを緣にいひかけた。○古き詠め―古歌。○波小舟―類もなしといひかけ、舟の緣でさしてとつづけた。

しき、たぐひかな綱手かなしきたぐひかな

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】ワキ「不思議やなこの川は山川の。さも淺くしてしかも漲る岩間傳ひを。小さき舟に棹さす人を見れば女なり。そも御身は如何なる人にてましますぞ

シテ「これはこの初瀬寺に詣でくる者なり。又この川は所から。『名に流れたる海士小舟。初瀬の川と詠み置ける。その川野邊のえにしあるに。不審はなさせ給ひそとよ

ワキ「あら面白の言葉やな。げに海士小舟初瀬とは。古き詠めの言葉なるべしさりながら。又そのたぐひも波小舟。『さして謂れのあるやらん

シテ「いや何事のそれよりも。まづ御覽ぜよ折からに

のあたりは何といふ寂しい事であらう。それよりも私のこのみすぼらしい姿を人が見はしないだらうか。私こそは楫緒の斷れた浮舟のやうな、かなしい身上だ―

と歎きながら舟を漕いで來る態。

【三】

旅僧はこれを見て、

僧「これは不思議だ。この川は山川で、底こそ淺いが、水は漲つてゐるのに、その岩間傳ひのところを、小さな舟に棹をさして來る人を見ると、女なのだ（と獨言のやうにいつて、女に向ひ）一體そなたはどういふ人なのです」

女「私はこの長谷寺にお參りする者です。又この川は有名な『海士小舟初瀬の川』と歌に詠まれたところで、小舟はこの川に緣があるのですから、御不審になることはございません」

僧「これは面白い言葉だ。いかにも『海士小舟初瀬』とは、古歌に詠まれた言葉でせうが、しかし、事實は例のないことと思ひますが、何かこれにはわけがあるのでせうか」

女「いえ、それよりも何よりも、まづこの景色を御覽なさいませ。ほのかに見える、あの木々の紅葉した初瀬山、麓までが秋

地上歌「ほの見えて。色づく木々の初瀬山。色づく木々の初瀬山。風もうつろふ薄雲に（と右の空を見）。日影も匂ふ一しほの。さぞな氣色もかく川の（と前へ出で）。浦わの眺めまでげに。たぐひなや面白や（角を眺め）。川音聞えて里續き（左へ廻り）。奥もの深き谷の戸に。つらなる軒をたえだえの霧間に殘す、夕かな霧間に殘す夕かな（棹をすてて扇を持ち）。かくて御堂に參りつつ（正面へ出で）。かくて御堂に參りつつ（下に居て合掌）、補陀落山もまのあたり（と立ち）て。四方のながめも妙なるや（右の方へ出で）、紅葉の色に常磐木の二本の杉に着きにけり（と大小前に立つ）二本の杉に着きにけり。

ソキ「かくて御堂に參りつつ」とシテと共に參詣する心にて眞中へ行き、「補陀落山も」にもとの座に歸る。

【四】

ミテ（正面を見て）「これこそ二本の杉にて候へよくよく御覽候へ

らしい色あひになつて、これが薄雲のかかつた日の光に照り映えた時には、さぞ一段と美しいことであらうと想はれて、この川の浦邊の景色までがほんとに面白いぢやございませんか。この川に沿うた里續きの、奥深さうな谷間の、軒並にならんだ家々が、霧の絶え間から見え隱れする夕景色の面白いこと」

かういつて、[illegible]長谷觀音に參詣し、かの補陀落山を眼のあたりに見るやうな、あたりの美しい景色を眺めて、間もなく、紅葉の中に交つた常磐木、二本の杉のある所へ着いた。

【四】

觀音を拜した後、女[illegible]は僧を案内して二本杉に來た態で、

女「これが二本の杉です。よく御覽なさいませ」

○色づく木々の初瀬山—木木の葉を初瀬にいひかけた。萬葉集、大伴坂上郎女の歌に「こもりくの初瀬の山は色づきぬしぐれの雨は降りにけらしも」

○風もうつろふ—木々の葉の色づくにつれて、風の氣色まで秋らしくなること。

○日影も匂ふ—日影も照り添へば、さぞ一層美しいであらう。

○かく川の—「かく」の次に脫字があるのでなからうか。川は初瀬川を指す。評釋には「かく川は初瀬川の内の名」といふ。

○奥もの深き谷の戸—奥行の深い谷の入口。

○霧間に殘す—人家が霧の絶え間に隱れ殘つて見えるのである。

○御堂—長谷寺の御堂。

○補陀落山—Potaraka. 印度の南海にある觀音の住所。長谷寺の本尊は觀音であるから、これに擬した。

○二本の杉—古今集の旋頭歌に「初瀬川古川のべに二本ある杉、年を經て又もあひ見む二本ある杉」。これを詠みこんだ源氏物語の歌後に見ゆ。

【四】

○二本の杉の立所を尋ねずは古川野邊に君を見ましや｜玉葛の卷、玉葛の母夕顏の侍女右近が初瀨で玉葛に再會した時に詠んだ歌。
○玉葛の內侍｜光源氏の親友頭中將と夕顏との間に生まれた女。後源氏に養はれ尙侍となつた。
○右近｜夕顏の侍女。
○夕顏｜初め頭中將と契つて玉葛を生んだが、その正妻の嫉みを怖れて姿を隱し後源氏に通はれたが、間もなく五條何某の院ではかなく死んだ。「夕顏」「半蔀」參照。
○撫子の形見｜帚木の卷、夕顏が頭中將に贈つた歌に「山がつのかきほ荒るともをり〳〵にあはれはかけよなでしこの露」とあるをいふ。玉葛を撫子に喩へたのである。
○思ひの玉葛｜念珠を和らげて念ひの珠といふので、玉葛にいひかけ、玉葛を枕詞として「かけても」とつゞけた。
○心づくしの木の間の月｜筑紫を心づくしにいひかけて、古今集、讀人知らずの歌「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」を引き、これを雲居の序に用ゐた。

ワキ「さては二本の杉にて候ひけるぞや。『二本の杉の立所を尋ねずは。古川野邊に君を見ましやとは。なにと詠まれたる古歌にて候ぞ

シテ「これは光源氏の古。玉葛の內侍この初瀨に詣で給ひしを。右近とかや見奉りて詠みし歌なり。『共にあはれと思し召して。御跡をよく弔ひ給ひ候へ

と眞中へ行きて下に居る。ワキも坐す。

地クリ「げにやありし世をなほ夕顏の露の身の。消えにし跡はなかなかに何撫子の形見も憂し

シテサシ「あはれ思ひの玉葛。かけてもいさや知らざりし

地「心づくしの木の間の月。雲居のよそにいつしかと。鄙の住居の憂きのみかさてしも堪へてあるべき身を

僧「すると、これが二本の杉だつたのですね。——「二本の杉の立所を尋ねずは、古川野邊に君を見ましや」（二本の杉のある所——長谷觀音に參詣しなかつたならば、この古川の野邊でわが君にお會ひすることが出來なかつたであらう）といふのは、どういふ事情で詠まれた古歌なのですか」

女「これは昔光源氏の時代、玉葛の內侍がこの初瀨に參詣せられたのを、右近とかいふ人がお會ひ申して詠んだ歌でございます。どうぞあなた樣もあはれと思し召して、その御跡をよく御回向下さいませ。

ほんとに、あの頃の事を申しますと、母夕顏が露のやうに果敢なく消えました後は、その形見の撫子——玉葛は、生きてゐることが却つて辛く思はれたのでございます。

可哀想に、玉葛は思ひもかけない、果てしも知らない情ない筑紫の旅に出て、遠く都を離れた田舍住居をすることとなり、辛い思ひをしましたが、また田舍住居だけならば、とにかく我慢も出來ませうが、なほ一層情ないことには、その地

○なほしをりつる—田舍住居の悲しい上、なほ色々悲しい事が起つて。大夫の監が結婚を强ひたことを指す

○荒き波風—人心の荒きといひかけた。

○たよりとなれば—都合よくなれば。波風が凪ぎ落ちて船出に都合のよい時を待つて。

○早船に乘り後れじと—早船は艪を多く具へた船足の早い船。玉葛の卷、玉葛が危害を避けて上洛する條に「心も惑ひて、早船といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走りのぼりぬ。響の灘もなだらかに過ぎぬ」

○松浦潟唐土船を—大伴狹手彥が任那を征伐する爲に肥前國松浦潟から船出した時、妻の佐用姬が山に上つて、その船影を慕ひ悲しんだといふ故事。

○心ぞ變る—佐用姬は出帆を悲しんだが、玉葛はこれを喜ぶのをいふ。

○浮島を漕ぎ離れても行く方や—玉葛の卷、玉葛上洛の船中にあつた少貳の娘兵部が詠んだ歌を引き、下句「いづく泊りと知らずもあ

シテ「なほしをりつる。人心の

地「荒き波風たち隔て

（居クセ）

地クセ「たよりとなれば早船に乘り後れじと松浦潟。唐土船を慕ひしに。心ぞ變るわれはただ。浮島を。漕ぎ離れても行く方やいづく泊りと白波に。響の灘も過ぎ。思ひに障る方もなし。かくて都のうちとても。われは浮きたる舟のうち。なほや憂き目を水鳥の陸にまどへる、心地してたづきも知らぬ身の程を。思ひ歎きて行き惱む。足引の大和路や。唐土までも聞ゆなる。初瀨の寺に詣でつつ

シテ「年も經ぬ。祈る契りは初瀨山

地「尾上の鐘のよそにのみ、思ひ絕えにし古の。人に二度二本の。杉の立所を尋ねずは。古川野

の人から酷くあたられて、その末、荒い波風の靜まつた船出に都合のよい時を待つて、船足の早い船に急いで乘り込み、松浦潟を立ち出るにつけても、支那へ行く船の別れを悲しんだ昔の人とはちがつた心持で、いそ／＼と浮島のあたりを漕ぎ離れて行き、どこに泊るといふこともなく、やがて響の灘も通り過ぎ、今は氣になることもなかつたのでございます。かうして、都の內に歸りましたが、都にてもやはり辛い身には、浮舟の中にあると同じやうで、水鳥が陸に上つてまどふやうな心持がしまして、誰を賴る者もない境遇を悲しんで、重い足を引きながら大和へ行き、支那にまで聞えた有名な長谷寺に參詣しました。しかし——

『年も經ぬ祈る契りは初瀨山、尾上の鐘のよその夕暮』

（戀しい人に會へるやうにと、隨分長い年月長谷の御佛に祈つて來たが、何の御利益もなく、あの夕暮を告げる山の鐘も、たゞ餘所の人達に相會ふ時を知らせるばかりで、自分には何の樂みもないのだ）

といふ歌のやうに、もはや昔の人に會ふことは出來ないものと思ひあきらめてみましたところ、幸ひにも二度會ふことが出來まして、——

るかな」の知らぬを白波にいひかけた。
○響の灘―以下この節の語釋、本曲の末に記す。

【五】
○こもり江―草などに蔽はれた江。涙の籠るといひかけた。
○あはれ―水の泡といひかけた。
○初瀬川早くも知るや―右近が「二本の杉の立所を」と詠んだ歌の玉葛の返歌「初瀬川早くの事は知らねども今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ」を引いた、早くの事は昔の事。
○涙の露の玉の名と―涙の露、露の玉とつゞけ、玉葛の玉の字だけ名乘つて、葛といひ終らないで消えた。

【四】

邊と詠めける。今日の逢ふ瀬も、同じ身を思へば法の衣の。玉ならば玉葛、迷ひを照らし給へや

【五】
地ロンギ「げに古き世の物語、聞けば涙もこもり江に。こもれる水のあはれかな
シテ「あはれとも、思ひは初めよ初瀬川、早くも知るや淺からぬ
地「緣にひかるる
シテ「心とて
地「ただ賴むぞよ法の人。弔ひ給へわれこそは（と立ちて）涙の露の玉の名と名乘りもやらずなりにけり名乘りもやらずなりにけり

（と右へ廻り常座にて正面に開き、靜かに中入。）

【四】　狂言初瀬門前の者、着附段熨斗目・狂言上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に立ち、
狂言「かやうに候者は、初瀬の門前に住居する者にて候。この間は觀世音に參らず候間、今日は參詣申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづ方へ御通

「二本の杉の立所を尋ねずは、古川のべに君を見ましや』
といふ喜びを得たのでございます。今日私がお僧樣にお逢ひする機會を得ましたのも、これと同じ身で、思へばありがたい佛の御導きでございます。どうか佛の御光を以て、冥土の闇路に迷つてゐる玉葛を成佛させて下さいませ」

【五】
僧「このやうな昔物語を伺ふと、涙が眼に溢れるばかり、ほんとにあはれに思はれます」
女「どうぞあはれとも思つて下さいませ。も早やお氣もつきましたでせうが、深い御緣に引かれて來ましたのですから、どうぞお願ひでございます、お僧さま、私の回向をして下さいませ。私は涙の露に緣の深い玉……」
と、葛まで名乘りも終らないで、消えてしまつた。

○撫子―帚木の巻に夕顔が玉葛のことに寄せて「山がつのかきほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露」と詠んだので、その幼名の如くに取做したのである。
○合點―承知。

ありなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ
ツレ「これは當國一見の僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か
狂言「なか〳〵この邊の者にて候
ツレ「さやうに候はば。近う御入り候へ。尋ねたき事の候
狂言「畏つて候。(眞中へ出て下に居る)さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ
ツレ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所に於て二本の杉の謂れ。又玉葛の内侍の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候事なう。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ツレ「近頃にて候
狂言「さる程に玉葛と申す御方は。夕顔の上の御息女にて御座候が。さる子細あつて稚き時筑紫に御入り候が。その時は御名を撫子と申したるげに候。早く御年も二八あまりになり給ふ故。御縁の事を申しかけ候中にも。筑紫人にて太夫の將監と申す者。玉葛の御事美しき御方と聞き。乳人に色々とこひ給へども。更に合點なく候間。この上は奪ひとらんとありし程に。乳人こゝに置きましては惡しかりなんとて。舟を拵へ乘せ奉り。都をさして上せしに。太夫の將監これを聞きて。追手の船を拵へ追かけ申し候へども。叶はず候處に。舟路に響の灘とて聞ゆる難所の御座候間。御立願なくては叶ふまじとて。初瀬へ御祈誓なされ候へば。その奇特にや何事なく御舟は都の地に着き申し候間。觀音の御利益なりとて。當寺へ御參りありしに。又都より右近と申す女房。今一度玉葛に逢ひたくとて初瀬へ月詣で致し候處に。當寺の御利生にて二本の杉の本にて玉葛に逢ひ奉り。互に御悦

びあつて。玉葛の御供申し都に歸り。程なく御緣も定まり。末繁昌に榮えたると申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく女性一人。舟に乘つて來られ候程に。即ち言葉をかはして候へば。二本の杉の謂れ玉葛の御事。唯今御物語りの如く懇に語られ。玉葛の事を身の上のやうに申され。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「さては玉葛の御亡心にて御座あらうずると存じ候。それを如何にと申すに。この所にて御果てはなく候へども。御立願ありたる御寺なれば。筑紫より直に當寺に參り給ふ風情にて。御詞をかはされたると存じ候間。暫く御逗留なされ。懇に御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事の候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ「さては玉葛の内侍假に現れ給ひけるぞや。

「たとひ業因重くとも

ワキ上内侍二「照らさざらめや日の光。照らさざらめや日の光、大慈大悲の誓ひある。法の燈火明

〇御亡心—御亡靈。

【六】
○業因—後に惡い果報を受けるべき罪行。
○照らさざらめや—佛の光を日光に譬へた、普賢觀經に「衆罪如霜露、慧日能消除」
○大慈大悲—觀世音の慈悲の廣大なことをたゝへた語
○法の燈火—佛に供へる燈

【六】後段

僧さては、玉葛の内侍が假の姿に現れて來られたのであつたのだ。たとひこの人の業因がどんなに重くても、日光の如き佛の御光がその闇路を照らさない筈はないのだ。大慈大悲の觀音の御光を仰いで、

火、これを直に佛の光に喩へた。玉葉集、選子内親王の御歌に「あきらけき法の燈火なかりせば心の闇のいかで晴れまし」

【七】○戀ひわたる身はそれならで玉葛いかなるすぢを尋ね來ぬらん―玉葛の卷、源氏が玉葛に會つて詠んだ歌。但し原歌には第二句「それなれど」とあるを變へて玉葛の歌とし、昔の身ではなく、母を戀ひ慕ふ世のものであるのに、今は亡き世にこゝへ來たのであらうと自問する意に用ゐた。○つくも髮われや戀ふらし―伊勢物語の歌「百年に一年足らぬつくも髮われを戀ふらし面影に見ゆ」を引き、面影の序とした。○塵の身―人間の身。汚れたものであるとの喩、面影に立つを、塵の立つにいひかけ、塵を承けて拂へどと續けた。○ながき闇路や―娑婆に對する執着の心が強くて成佛することが出來ないとの意に用ゐる、闇から黒髮を呼び起した。○飽かぬや―黒に對する赤といひかけた。

らかに、亡き影いざや、弔はん亡き影いざや弔はん

【七】 一聲の囃子にて、後ジテ玉葛内侍、面増髮・鬘・鬘帶・襟白・着附箔・唐織脱掛・扇の裝束にて舞臺に入り常座に立ちて、

後ジテ 一聲『戀ひわたる身はそれならで。玉葛。いかなるすぢを。尋ね來ぬらん。尋ねても。法の教へに逢はんとの。心ひかるる一筋に。そのままならで玉葛の。亂るる色は恥かしや。つくも髮

［カケリ］ に狂ひの樣を示し、續いて次の謠に合せて舞ふ。

シテ『つくも髮。われや戀ふらし面影に

地『立つやあだなる塵の身は

シテ『拂へど拂へど執心の

地『ながき闇路や

シテ『黑髮の

地『飽かぬやいつの寢亂れ髮

さあ、この亡き人を囘向しよう」

といつて讀經してゐるうちに夢心地となる。

【七】 後ジテ玉葛内侍の靈、旅僧の夢に現れる態で登場。

玉葛「――『戀ひわたる身はそれならで玉葛、いかなるすぢを尋ね來ぬらん』

（この玉葛は、昔母を戀ひこがれた娑婆の身ではなく、今は亡き世のものであるのに、どうしてこゝへ尋ねて來たのでせう）

それは外でもないのです。たゞ佛の御敎へを受けたいと思ふ一心で昔に變つた姿で參りましたが、この亂れたさまがお恥かしうございます」といつて

［カケリ］ に妄執に心の亂れた樣を示し、

玉葛「戀しい昔の面影が眼にちらついて、この汚れた身には、どのやうに拂つても拂つても、執着の心が離れず、いつまでも冥土の闇路に迷うて、忘れられない何日かの寢亂れ髮の結ぼほれたやうに、心が結ぼほれて、晴れる時がないのでございます。――

シテ「むすぼほれ行く。思ひかな

地『げに妄執の雲霧の。げに妄執の雲霧の。迷ひもよしや憂かりける。人を初瀬の山颪。はげしく落ちて。露も涙もちりぢりに秋の葉の身も。朽ち果てね恨めしや

シテ『恨みは人をも世をも

地『恨みは人をも世をも。思ひ思はじ唯身一つの。報いの罪や、數々の憂き名に立ちしも懺悔の有樣。或は湧き返り。岩もる水の。思ひに咽び。或は焦がるるや、身より出づる玉と見るまで包めども。螢に亂れつる影もよしなや、恥かしやと。この妄執を。ひるがへす。心は眞如の玉葛。心は眞如の玉葛。長き夢路はさめにけり

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む、

ほんとに、雲霧のやうな妄執の迷ひに苦しむのは、つまらない情ないことです。一層のこと、初瀬の山颪が烈しく吹いて、露も涙も秋の木葉も、みんな散り散りに吹き散らすやうに、この身も朽ち果ててしまふがよい。あゝ恨めしいことだ。いや／＼人をも世をも恨めしいとは思ひますまい。みんなわが身一つから出た色色犯した罪の報いだ。かれこれと浮名を立てられたのも、今から思へば、懺悔ともなつたであらう。あの頃の事を懺悔申せば、或時には岩から漏れ出る水の涌き返るやうな烈しい思ひもしました。また或時は思ひ焦がれる心がどのやうに隱しても外に現れ出て、螢のやうに、身を焦がして思ひ亂れたことでございます。思へば、何といふつまらない恥かしいことでございませう」

と玉葛は妄執の心を飜して佛性に立ち歸り、迷ひから覺めて成佛した。そして僧の夢もさめてしまつた。

○むすぼほれ行く―髮の結ぼれるを、思ひの結ぼれて晴れない事にいひかけた。
○妄執の雲霧―迷妄執着の爲に心の曇ることを雲霧に喩へた。
○憂かりける人を初瀬の山颪―下句「烈しかれとは祈らぬものを」で、千載集、源俊頼の歌。
○秋の葉の身―風に散り易い秋の木葉の如き身。
○恨みは人をも世をも―恨めしといつたのを承けて、いや／＼人をも世をも恨むまいと思ひ返したのである。
○身一つの―自分自身の。
○數々の―罪と憂き名とにかゝる。
○懺悔―罪を愧ぢ悔いてこれを人前に明かにすること、心地觀經に「若覆レ罪者、罪即增長、發露懺悔、罪即消除」
○岩もる水の―源氏物語胡蝶の巻、柏木衞門督が玉葛に心をかけて贈つた「思ふとも君は知らじな沸き返り岩もる水の色し見えねば」を引いた。
○焦がるるや―以下語釋、附記に掲げる。

〔考　異〕

諸本（左流）

【三】[illegible]　のぼりかねたる氣色（下懸岩間）かな。

古鈔本（貞享二年本）

異同がない。

附記

○心の月の御舟―曇りのない心を心の月といひ、雲行く月を舟に喩へて月の御舟といふ。

○水馴棹―水に浸り馴れた棹。水を身にいひかけ、孤獨の境遇をのべたのである。

○棹も袖の色にのみ―棹の雫までが涙に濡れた袖の色に染まるとの意。新後撰集、慈鎮の歌に「山里は袖の紅葉の色ぞこき昔を戀ふる秋の涙に」。

○秋の涙の村時雨―涙が棹の雫を染めるといったのを承けて、木葉を紅く染める村時雨を秋の涙に見たてたのである。光明峯寺攝政家歌合、兵部卿成實の歌に「紅のはつしほ急ぐ衣手の秋の涙や時雨なるらん」。

○古川野邊―村時雨降るを古にいひかけた。古川は布留川とも書き、山邊郡布留（石上寺のある地）を流れる川で、末は初瀬川に入る。

○浮舟の楫を絶え―寄るべのない身上を、楫緒の斷れた浮舟に喩へていふ。新古今集、曾禰好忠の歌に「由良のとを渡る舟人楫をたえ行方も知らぬ戀の路かな」。

○綱手かなしも―新勅撰集鎌倉右大臣（實朝）の歌「世の中は常にもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも」を引いた。綱手は船に繋いで引く綱。

○響の灘―袖中抄に「ひびきの灘播磨にあり、俗說にはひびき灘とも云ふ」。

○思ひに跡も方もなし―氣になることもない。玉葛の卷、歸洛船中に於ける玉葛の歌「憂きことに胸のみさわぐひびきには響の灘もさはらざりけり」に據った。

○行きかたも知らぬ身のうき―同じく玉葛船中の歌に「行く先も見えぬ波路に船出して風にまかする身こそ浮きたれ」

○憂き目を水鳥―憂き目を見るを水鳥にいひかけ、玉葛の卷に玉葛が都に着いた時の様を記して「たゞ水鳥の陸にまどへる心地してつれ

づれならはぬありさまのたづきなきを思ふに、歸らんにもはしたなく」とあるを引いた。
○足引の—山の枕詞。行き惱む足を引きといひかけたのである。
○唐土までも聞ゆなる—支那にまで聞え渡つた有名な。大和に對して唐土といつたのである。
○年も經ぬ祈る契りは初瀨山—新古今集、藤原定家の歌を引いた。下句「尾上の鐘のよその夕暮」。契りの盡き果つを初瀨山にいひかけたのである。
○よそにのみ—尾上の鐘が餘所の人にのみ相會ふ時を知らせる意と、餘所事として思ひあきらめる意とに兼ね用ゐた。
○今日の逢ふ瀨も—今日僧に逢ふ機會を得た者も、昔右近に邂逅したものと同じ身である。瀨は機會、川の縁語。
○法の衣の玉—再會することの出來たのは、法の力であるといひかけて、法の衣、衣の玉とつゞけ、玉の如き法の光を以て玉葛の闇路を照らし給へといつたのである。衣の玉は法華經五百弟子受記品に見えた、佛性を喩へた語。委しくは「班女」に引く。
○焦がるるや—源氏物語螢の卷、玉葛が螢兵部卿宮に贈つた歌「聲はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ」を引いた。後拾遺集、和泉式部の歌にも「もの思へば澤の螢もわが身よりあこがれ出づる玉かとぞ見る」
○螢に亂れつる影—螢の卷に、兵部卿宮が源氏の西の對へ來られた夜、源氏が直衣の袖に螢を數多包んで持ち、玉葛の几帳を引上げてこれを放ち、その光で宮に玉葛を見せられたとあるに據つた。
○眞如の玉葛—眞如の玉、玉葛、葛の長きとつゞけた。
○長き夢路はさめにけり—玉葛の執心が晴れて成佛した意と、僧の夢がさめた意とを兼ねて用ゐた。

玉井(たまのゐ)　觀(剛　喜)

解説

【能柄】脇能　二段劇能

【人物】**ワキ**　彦火々出見尊、**前シテ**　豐玉姫、**前ツレ**　玉依姫**狂言**（オモ）文蛤、**同**（立衆）蛤・海草（四五人）、**後子方**　天女（豐玉姫）、**同**　天女（玉依姫）、**後シテ**　海神

【所】海の都

【時】神代（無季）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに觀世小次郎の作といふ。言繼卿記天文元年四月二十九日の條に本曲演能のことが見えてゐる。

【梗概】彦火々出見尊が兄火闌降命の釣針を魚にお取られになつて、兄命からひどく責められ給うたので、海の都へこれを取返しにお渡りになり、玉井の傍にある桂の木蔭に佇んでお出でになると、豐玉姫・玉依姫が水を汲みに來て、尊の御姿に心をひかれ、海の宮殿に案内せられた。かうして尊は姫の父海神の款待を受けて、こゝに三年の年月をお過しになつたが、戀御國にお歸りにならうとすると、姫達は潮滿瓊潮涸瓊を、海神は魚の取つた釣針を尊に捧げ、舞樂

を奏して、その行を盛んにし、五丈の艪にお乘せして、尊を陸地へお送りになつた。

【出典】 古事記・日本書紀ともに記された神代說話であるが、本曲は主として日本書紀に據つたやうであるから、その本文を擧げると、

兄火闌降命自有㆓海幸㆒、弟彥火火出見尊自有㆓山幸㆒、始兄弟二人相謂曰、試欲㆑易㆑幸、遂相易之、各不㆑得㆓其利㆒、兄悔之乃還㆓弟弓箭㆒、而乞㆓己釣鉤㆒、弟時既失㆓兄鉤㆒、無㆑由㆓訪覓㆒、故別作㆓新鉤㆒與㆑兄、兄不㆓肯受㆒而責(ハタル)㆓其故鉤㆒、弟患之、即以㆓其橫刀㆒鍛㆓作新鉤㆒、盛㆓一箕㆒而與之、兄忿之曰、非㆓我故鉤㆒雖㆑多不㆑取、益復急責、故彥火火出見尊憂苦甚深、行吟㆓海畔㆒、時逢㆓鹽土老翁㆒、老翁問曰、何故在㆑此愁乎、對以㆓事之本末㆒、老翁曰、勿㆓復憂㆒、吾當爲㆑汝計之、乃作㆓無目籠㆒、內㆓彥火火出見尊於籠中㆒、沈㆓之于海㆒、即自然有㆓可怜小汀㆒、於是棄㆑籠遊行、忽至㆓海神之宮㆒、其宮也雉堞整頓(トトノホリ)、臺宇玲瓏(テリカカヤケリ)、門前有㆓一井㆒、井上有㆓一湯津杜(カツラノキ)樹㆒、枝葉扶疏、時彥火火出見尊就㆓其樹下㆒徙倚彷徨、良久有㆓一美人㆒、排㆑闥而出、遂以㆓玉鋺㆒來當汲㆑水、因擧目視之、乃驚而還入、白㆓其父母㆒曰、有㆓一希客者㆒、在㆓門前樹下㆒、海神於是鋪㆓設八重席薦(ハヤタタミ)㆒以延內之、坐定、因問㆓其來意㆒、時彥火火出見尊對以㆓情之委曲㆒、海神乃集㆓大小之魚㆒逼問之、僉曰、不㆑識、唯赤女比有㆓口疾㆒而不㆑來、固召㆑之、探㆓其口㆒者果得㆓失鉤㆒、已而彥火火出見尊因娶㆓海神女豐玉姬㆒、仍留㆓住海宮㆒已經㆓三年㆒、彼處雖㆓復安樂㆒猶有㆓憶㆑鄉之情㆒、故時復太息、豐玉姬聞之謂㆓其父㆒曰、天孫悽然數歎、蓋懷㆑土之憂乎、海神乃延㆓彥火火出見尊㆒、從容語曰、天孫若欲㆑還㆑鄉者、吾當㆑奉㆑送、便授㆓所㆑得釣鉤㆒、因誨之曰、以㆓此鉤㆒與㆓汝兄㆒時、則陰呼㆓此鉤㆒曰㆓貧鉤㆒、然後與之、復授㆓潮滿瓊及潮涸瓊㆒而誨之曰、漬㆓潮滿瓊㆒者則潮忽滿、以㆑此沒㆓溺汝兄㆒、若兄悔而祈者、還漬㆓潮涸瓊㆒則潮自涸、以㆑此救之、如此逼惱則汝兄自伏、及㆑將㆓歸去㆒、豐玉姬謂㆓天孫㆒曰、妾已娠矣……

【總評】 著名な神代說話を題材としたもので、これを說話の體系から觀れば、海幸彥・山幸彥の爭ひは一種の職業說話、豐玉姬との結婚は異民族結婚說話として解すべきものでなからうかと思ふが、謠曲作者がこのやうな神話に對して、時代的色彩を帶びた宗教的な特殊な解釋を下さないで、忠實に原形を保存したのは、同じく上代說話を取扱つた〔大蛇〕とともに特に注意すべきことであらう。脚色の上から見れば、その第二段後ジテは龍王であり、後ヅレも天女で、〔江島〕などに近い行き方であるが、第一段は勿論、第二段もその內容から見れば、現在物、劇能として類別せらるべきものであらう。しかもこのやうな劇能でありながら、後ジテは龍神であるが故に、乃至はその題材が神話であるが故に、これを脇能として取扱つてゐるのは珍しい例である。——〔大蛇〕は五番目物としてゐる——詞章は他の脇能に比べて敍事的要素が多分に含まれてゐるやうに思はれる。例へば第三節ワキシテの掛合の如き、多くの曲では純然たる

科白となつてゐるが、この曲では「一身を隱して行みたり」たといつて居り、クセの如きも、普通の曲ではシテの科白として解釋せられるものであるが、この曲では叙事の體をとり、且その間に三年を經過してゐる。——平家物語を題材とした閻浪のクセには、例へば〔千手〕の如き、これと同様の弊害に陷つたものがあるが、これらはいづれも餘りに原文に據り過ぎた逸脱であらう。

【一】

〔後見、柱の立木（丸臺）と井筒の作物を正面先に持ち出し臺前に置く。

ワキ、彦火火出見尊、唐冠・赤地金襴鉢卷・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り眞中に立ち、〕

〔ワキ〕（名ノリ）それ天地開け始まりしより。天神七代地神四代に至り。火火出見の尊とはわが事なり。さても兄火闌降の命の釣針を。かりそめながら海邊に釣を垂れしに。かの釣針を魚にとられぬ。この由を兄命に申せども。唯もとの針を返せと宣ふ間。劍をくづし針に作りて返すといへども。猶もとの鈎をはたる。さらば海中に入り。かの釣針を尋ねんと思ひ立ちて候

〔ワキ〕（サシ）わたづみのそこともしらぬ鹽土男の。翁の

【一】

第一段

〔後見は作り物を目付の前で、ワキ彦火々出見尊登場。〕

〔ワキ〕自分は天地開闢の後、天神七代を經て地神第四代目に當る彦火々出見尊である。ここ、自分はほんの戯れに、兄君火闌降命の釣針を借りて海邊で釣をしたところ、その釣針を魚に取られてしまつた。この事を兄命に申し上げて、お斷りしたが、兄命はたゞもとの釣針を返せとばかり仰しやる。それで、劍をこわして針を作つて、それをお返ししたが、やはりもとの釣針を返せとお責めになる。この上は是非がないから、海の中へ入つて、あの釣針を尋ね出さうと思ひ立つたのだ。

〔自己紹介、自己の事件の經緯を述べ、〕

〔ワキ〕かうして、鹽土の翁の敎へに從つて、

【一】

○天神七代—一に國常立尊、二に國狭槌尊、三に豐斟渟尊、四に泥土煑尊・沙土煑尊、五に大戸之道尊・大苫邊尊、六に面足尊・惶根尊、七に伊弉諾尊・伊弉冊尊（日本書紀）。

○地神四代—一に天照大神、二に正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊、三に天津彦彦火瓊瓊杵尊、四に彦火火出見尊。

○火火出見の尊—委しくは天津日高彦火火出見尊。亦の名火遠理尊、御父は瓊々杵尊、御母は大山祇神の女鹿葦津姫。

○この由—兄の言葉、

○火闌降命—彦火々出見尊の同母兄。

○かりそめながら—釣針を借りといひかけた。

○劍をくづし—劍をこわして。

○鈎をはたる—鈎は釣針、はたるとは責め求めること。

○わたづみ—海、「わたつみ」とも。海の神の意で、「つ」は濁らずに讀むのが

教へに從ひて無目籠の猛き心

ツキ上歌 すぐなる道を行く如く。すぐなる道を行く如く。波路遥かに隔て來てここぞ名に負ふわたづみの。都と知れば水もなく。廣き眞砂に、着きにけり廣き眞砂に着きにけり

「都と知れば水もなく」と正面先に出でまたもとに歸りて海の都に着きたる心。正面に直して、

ワキ「さてもわれ鹽土男の翁が教へに從ひ。わたづみの都に入りぬ。これに瑠璃の瓦を敷けるかう門あり。門前に玉の井あり（と作物を見）。この井の有樣銀色かかやき世の常ならず。又湯津の桂の樹あり。木の下に立ち寄り。暫く事の由をも窺はばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ豐玉姫、面增・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、ツレ玉依姫、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、二人とも水桶を持ちて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ち向合ひ、

無目籠の舟に乘り、底も知れない大海を、平坦な路でも行くやうに、大膽に進んで、遠い波路を漕ぎ分けて、はや噂に高い海の都——こゝには水もなく、眞砂の廣々と敷きつめられた海の都に着いた」

といつてゐるうちに、舟は海の都にお着きになつた態で、舞臺は海の龍宮となり、舞臺には玉の井とその側に桂の木がある。

「やあ、かうして自分は鹽土の翁の教へに從つて、海の都に來てしまつた。おゝ、こゝに瑠璃の瓦を敷いた大門があり、門の前には玉のやうな美しい井戸がある（と井戸の方へ進み）この井戸の樣子を見ると銀色に輝いて、普通の井戸とはちがつてゐる。おゝ又、こゝに枝葉の繁つた桂の木がある。この木の下に立ち寄つて、暫くあたりの樣子を探ることにしよう」

といつて桂の木蔭に佇む態。

【三】

前ジテ豐玉姫、前ヅレ玉依姫と共に、井戸の水を汲む心で水桶を持つて登場。

が正しいが、謡曲では常に「づ」と濁つて謡ふ。

○そこともー底を其所にいひかけた。

○鹽土男の翁ー潮路を知る航海の神。

○無目籠ー編み目がないほど細かく編んだ籠。

○猛き心ー籠の竹を猛きにいひかけた。

○瑠璃の瓦ー瑠璃は青色の珠で七寶の一。

○かう門ー光門、高門、衡門（かぶき門）皐門（王侯の門）などの字を充ててゐる。記紀には單に門と記してゐる。

○玉の井ー玉の如く美しい井戸。

○湯津の桂の樹ー湯津はいほつ即ち五百箇で、枝葉の繁つてゐること。

○事の由ーこゝではあたりの樣子といふ意。

【三】

ツレ一聲「はかりなき。齡を延ぶる明暮の。永き月日の。光かな

ツレは正面に向きて、

ツレ二句「營む業も手ずさみに。シテ・ツレ（向合ひ）「掬ぶも淸き。水ならん

上歌ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ「濁りなき心の水の泉まで。老いせぬ齡を汲みて知る。シテ・ツレ（向合ひ）「藥の水の故なれや。老いせぬ門に出で入るや。月日曇らぬ久方の天にもますやこの國の。行末遠き。住居かな

ツレ下歌「くり返す玉の釣瓶の掛繩の。上歌「長き命を汲みて知る。心の底も曇りなき。月の桂の、光添ふ枝を連ねて諸共に。朝夕馴るる玉の井の。深き契りは、賴もしや深き契りは賴もしや

「深き契りは」―上シテとツレ入替り、シテは眞中に、ツレは
さ睦しく語り合ひながら玉井に近づく態。

豐玉・玉依「私たちは限りもなく長生きをして、毎日毎日樂しい月日の光を迎へてゐることです。そして手遊び半分の仕事のやうに水を汲むと、その水がまたほんとに淸らかなことです」

豐玉・玉依「この淸らかな泉の水を汲むと、心も澄み、年も若々しくなりますが、それも、この水が藥の水だからでございませう。ほんとにこの不老門を照らす月日の淸らかた美しいこと、かの天上界にもまして、行末めでたい住家だと思はれます」

豐玉・玉依「かうして、いつも玉の釣瓶の掛繩を手にとつて、壽命長久の水を汲むと、心も淸々しくなり、その上、水に映る桂の木までが月のやうに光を添へて、ほんとに私たち姉妹、朝夕に來たれて玉井の水を汲む私達姉妹は、仲のむつまじい仕合せ者だと思はれます」

○營む業も手ずさみに—務めとしてする仕事も慰みとしてすると同樣に樂しくて。手ずさみは手でする慰み。

○老いせぬ門に出で入るや—和漢朗詠集、保胤の詩「長生殿裏春秋富、不老門前日月遲」を引き、門に出入するを月日の出入にいひかけた。

○久方の—天の枕詞。

○天にもますや—天上界よりもなほ勝れた。

○この國—海中の國。

○掛繩の長き—掛繩は釣瓶を引上げる繩。繩の長きを長き命にいひかけた。

○月の桂—月宮にある桂〔かつら〕、は〔羽衣〕にいふ〔二〕によそへていつた。

○枝を連ねて—兄弟のことを連枝といふので、桂の緣でこの語を出した。

○深き契り—井戸の深さをいひかけた。

【三】

○白露の—知らぬを白露にいひかけ、露の玉、玉の釣瓶といひ續けた。

○あさま—あからさま。

○なべてならざる—普通でない。

○見えける—見られた。

○忘るるほどの—わが身の恥かしさをも忘れて見惚れるほどに美しい。

脇正面に立つ。

ワキ、シテ・ツレを見て立ち、

【三】

ワキ「われ玉の井の邊に佇む處に、その樣けたかき女性二人來り。玉の釣瓶を持ち水を汲む氣色見えたり。言葉をかけんもいかがなれば。これなる桂の木蔭に立ち寄り。身を隱しつつ佇みたり

（と正面に向く）

シテ「人ありとだに白露の。玉の釣瓶を沈めんと（水桶を見）。玉の井に立ち寄り底を見れば（と井筒の前へ行きて中を見）。桂の木蔭に人見えたり。これは如何なる人やらん（ともとの座に歸る）

ワキ「忍ぶ姿も顯れて。あさまになりぬさりながら。なべてならざる御姿（とシテに向き）。如何なる人にてましますぞ

シテ（ワキに向き）「あら恥かしやわが姿の。見えける事もわれながら。忘るる程の御氣色。形も殊に

【三】

彦火々出見尊は二人の女性を見て、

尊「自分が玉の井の邊に佇んでゐると、けだかい姿をした女性が二人來て、玉の釣瓶を持つて水を汲む樣子が見える。しかし、突然この女性に言葉をかけるのも變だから、この桂の木蔭に身を隱して、見てゐよう」

と木蔭に隱れる。豐玉姫は水を汲まうとして、井の中を見て、水に映る人影に氣がつき、

豐玉「このやうな所に人がゐようとは夢にも思はず、玉の釣瓶を入れようと思つて、井戸の傍へ立ち寄り、井の底を見ると、桂の木蔭に人影が見える。これはまあどういふ人なのであらう」

尊「姿を隱してゐたのだが、見つけられてしまつた。だがしかし（と獨言のやうにいつて、豐玉姫に向ひ）並々ならぬ御立派な御樣子にお見あげしますが、一體あなたはどういふ方でいらつしやいます」

豐玉「あらお恥かしい。私の姿の見られることもうち忘れて、お見惚れしてゐましたやうた、御立派な御樣子、御姿も殊に

○唯人｜世間並みの人。

○天の御神｜高天原に現れ給うた神々を汎くいふ。

○龍宮｜海底にある龍王の宮殿。海宮を龍宮と混同したのである。

みやびやかなり。唯人ならず見奉る。御名を名のりおはしませ

ワキ「今は何をか包むべき。われは天孫地神四代。火火出見の尊とはわが事なり

ツレ「あらありがたや天の御神の。御孫の尊を目のあたり。見奉るぞ不思議なる

シテ「いやさればこそ始めより。天孫の光隠れなし。さてこれまでの臨幸は。そも何事の故やらん

ワキ「げに御不審は御理。われ釣針を魚にとられ。逢々これまで尋ね來る。ここをばいづくと申すやらん。委しく語り給ふべし

シテ「知ろしめさぬは御理。これは龍宮わたづみの宮

ワキ「かく言の葉をかはし給ふ。二人の御名は

御品が高く、普通の方ではないとお見上げ致しますが、どうかお名前をお聞かせ下さいませ」

彦「今は何を隠さう。自分は天神の子孫で、地神第四代目の彦火々出見尊です」

玉依「これはまああありがたい、天の神様の御子孫の尊を眼のあたりお見上げすることが出來ようとは。ほんとに不思議にさへ思はれます」

豊玉「いゝえ、やはりさうだつたのです。私は始めからどうも天の神様の御子孫にちがひないと思はれました。それにしても、こゝまでお出ましになりましたのは、どういふわけでございます」

彦「成程お疑ひは御尤もです。實は私は釣針を魚にとられたので、それを探しに、遙々こゝまで尋ねに來たのです。して、こゝは何といふ所です。委しく聞かせて下さい」

豊玉「御存じのないのは御尤もでございます。こゝは龍宮、海の都でございます」

彦「して、今お話してゐるあなた方、お二人のお名前は

○豐玉姫—綿津見神の御子で、神武天皇の御母。
○せうと—兄人で、兄姉の義であるが、弟妹の意にも用ゐる。こゝでは妹の意。
○玉依姫—豐玉姫の御妹。
○御神—彥火々出見尊。
○木綿四手の—うち解けて語りいふを木綿に、幣の紙を神にいひかけた。木綿四手はゆふの木皮で作つた布又は紙の幣。
○神にぞ靡く—神の心に靡くを大幣の靡くにいひかけた。
○大幣の引く手あまたの—伊勢物語の歌—大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ—を借りて、姫が尊に心を引かれる意に用ゐた。大幣は榊に麻苧を長くつけた祓の具で、祓の時、人々がこれをなでるので、引く手あまたといつたのである。
【四】
○うちつけなる—だしぬけの。ぶしつけな。
○かぞいろ—父母の古語。
○やがて—そのまゝ、すぐと。

シテ「豐玉姫
ツレ「われはせうとの玉依姫
地「互に連枝の名のりして（シテ正面に出で）。つつましながら御神の（見上ぐるやうにワキへ向き）。みやびやかなるに。はやうち解けて木綿四手の（左へ廻り）。神にぞ靡く大幣の引く手あまたの、心かな引く手あまたの心かな

とシテはもとの座に歸り、ツレは地謠座前へ行きて下に居る、シテワキに向ひ、

【四】
シテ「いかに申し上げ候。うちつけなる御事なれども。やがて父母に逢はせ奉り。かの釣針をも尋ぬべし。御心安く思し召され候へ
ワキ「さらばやがて伴ひ申し。宮中へ參り候べし

シテ大小前へ行きて坐す。ワキもその場に坐す、宮中の心にて、後見、正面の作物を引く。（シテの水桶をも引く）

地クリ「忝くも天の御神の御孫。わたづみの都に

豐玉「私は豐玉姫」
玉依「私は妹の玉依姫でございます」
と姉妹は名を名乘つて、女性の身の恥かしくもあるが、彥火々出見尊の餘りにも御上品な御姿に、早くもうち解けて、尊に深く心をひきつけられるのであつた。

【四】
豐玉「申しあげます。失禮でございますが、すぐ兩親にお逢はせ申しあげて、その釣針をも尋ね出しませう。どうぞ御安心遊ばしませ」
尊「それでは早速御同道して、御殿へ參りませう」

ここで、豐玉姫尊は尊を宮殿へ御案内した所で、舞臺は宮殿の内となる。

豐玉「畏くも天の神樣の御子孫が海の都へ

○高垣姫垣―書紀に雉堞の字を充つ。高く築いた垣と丈の低い垣。
○臺宇―高く造つた家。書紀に臺宇玲瓏と書いてこたかとのやてりかゝやきと訓ませてゐる。
○雲の八重疊―書紀には單に「八重席薦」古事記には「美智皮之疊敷二八重一」とあり、雲の字は冠してゐない。かかやきを承けて雲の字を出したのであるが、寄都の形容としては穩當でない。
○請じ入れ―招き入れ。
○いつきかしづき―大切にお仕へ申し。
○臨幸の意趣を―尊が語り給ふのである。
○せうと―こゝでは弟の意。
○潮滿潮涸―御寶、書紀の文字通。
○久方の―國も久しく榮えんといふ意、久方のを天の枕詞として、下の天に續けて行つた。
○外祖―母方の祖父、母の甲子の意に母方の祖父となること。即ち豐玉姫を妻に迎へること。

至り給ふ事、ありがたかりける。御影かな

シテ・サシ「然れば高垣姫垣調ほり

地「臺宇てりかゞやき。雲の八重疊を敷き。尊を請じ入れ奉り

シテ「父母の神。いつきかしづき

地「臨幸の意趣を。語り給ふ

地「われ兄の釣針を。かりそめながら波間行く。魚に取られてなき由を。歎き給へどその針に。あらずは取らじとにかくに。せうとを痛め様々に。猛き心の如何ならんと。語り給へば父の神御心安く思し召せ。まづ釣針を尋ねつつ御國に歸し申すべし

シテ「猶兄の怒りあらば

地「潮滿潮涸の。二つの瓊を尊に奉りなば御心に。任せて國も久方の。天より降る御神の。外祖と

お出で下さいますのは、ほんとにありがたいことでございます」

龍宮には、高い垣や低い垣を調和よく取りめぐらし、宮殿は玉の如く磨き立てられ、その中に立派なお席をしつらへて、尊をお招き申しあげ、姫の父母神が丁寧に御饗應申しあげると、尊はこゝへお出でになつた御趣旨をお話しになる。

尊「自分はほんの戯れに兄命の釣針を借りたところ、それを波間行く魚に取られたので、なくしましたと、兄命にお斷りしたが、兄命は是非とも元の針を返さなければいけないといつて、何や彼やとこの弟をお責めになつて、お憤りが激しく、困つてゐるのです」

と、お話しになると、豐玉姫の父神は「御安心なさいませ、まづ釣針を探し出して、お國へお歸し致しませう。たとひそれでも、兄命のお怒りが解けないやうでしたら、潮滿と潮涸の二つの珠を尊に獻上いたしますから、それで、思ふやうに運ばし、お國を永くお治めなされませ」――かういつて、天孫の外祖(父)となり、豐玉姫も懐妊せられ

なりて豊姫もただならぬ姿有明の。月日程なく三年を送り給へり

【五】

ツキ「かくて三年になりぬれば。わが國に歸り上るべし。海路のしるべ如何ならん

シテ「御心安く思し召せ。『わたづみの宮主伴ひて。海中の乘物樣々あり

地「大鰐に乘じ疾風を吹かせ（シテ立上り）。陸地に送りつけ申さん。その程は待たせおはしませ

と仕手柱際にてツキに向きて開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて幕に入る。

た模樣で、月日は早くも過ぎ去り、尊は三年をこゝにお過しになつたのである。

【五】

ツキ「かうして早や三年にもなつたから、わが國へ歸らうと思ふが、海路の案內はどうであらう」

豊玉「御安心遊ばせ、海神がお供致しますし、海中の乘物も色々ございますが、殊に大鰐にお乘せ致し、疾風を吹かせて、陸地にお送り申しあげませう。その用意を致します間、暫くお待ち下さいませ」

といつて、豊玉姫・玉依姫は退場。

○豊姫—豊玉姫の略。
○ただならぬ姿—懷妊の樣子。
○有明の—姿ありを有明に有明の月を、年の月日にいひかけた。

【五】
○わたづみの宮主—姫の父綿津見神卽ち海神。

【間】

【間】　亂序の囃子にて　狂言オモ文蛤、面鼻引・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて名乘座に出で、

オモ「かやうに候者は。海中に住む文蛤の精にて候。唯今出づる事餘の儀にあらず。さても地神四代彥火火出見の尊。わたづみの都へ臨幸ありしその子細は。尊釣に好き給ひ。朝夕釣を垂れ給ふ處に。うろくづの中に惡魚あつて。尊の釣針を食ひ切り失せ申して候。然るにその針は兄尊の針を借り給ふ御事なれば。御歸りあつて。魚に喰はれたる由御申し候へば。いやあの針は子細ある。是非とも御返しあれと御申し候間。さては尋ねて參らせんとて。鹽土男の翁に海中の樣體を御尋ねあり。卽ち海中へ分け入り給ふ。程なく龍宮の卓門に臨幸あつて。玉の井の輝くを御覽じて餘りの面はゆさ

○面はゆさ—まばゆさ。

に。桂の木の蔭に休らひ給ふ處に。豐玉姫玉依姫は玉の井に立寄り。玉のはね釣瓶にて薬の水を汲まんとて。井の内を御覧あるに。尊の御姿映り見え候間。如何なる御方ぞと尋ね給へば。われは日本の尊なるが。釣針を魚に喰はれこれまで参りたり。もし左樣の事御存じ候はば。教へて給はり候へと御申し候へば。豐玉姫易き御事にて候。されば尋ね参らせんとて。はや互に御心を移され宮中に御供ありて。夫婦の語らひをなし給ふ。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなるものまでも。酒宴の致さうと存じ。是まで出でて候。まづ我等如きの者を呼び出さう。(幕に向ひ)いかに渡り候か

狂言立衆、美男鬘・着附縮小袖・女帯の裝束、同立衆海草四五人、面見德・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて橋懸に出で、

立衆「何事にて候ぞ

一オモ「めでたき折柄なれば皆々うち寄り。酒宴の致さうと存じ呼び出して候

立衆「尤もにて候

オモ「まづかう渡り候へ

立衆「心得て候

一同舞臺に入り竝びて下に居り、

立衆「めでたき折柄なれば、文蛤酌に立たしめ

オモ「心得て候

オモ仕手柱際へ出で、

オモ「酒宴のなしてかひ〳〵しく〳〵も。蚫貝の盃に文蛤の銚子を出だし。見目よき蛤の上臈貝に御酌を取らせ。汀にゐたる文蛤。簾貝をかけならべ。紅梅木に鳴く鶯の烏貝も。有明の西に傾く月も赤貝。曇らぬ時を吹く法螺貝は。天地人の榮螺となりて。〳〵。納まる海中に入りにけり

と舞ひて、一同幕に入る。

【六】
出端の囃子にて、後子方（又はツレ）天女二人、直面（ツレの時は連面）・黒垂・天冠・襟赤・着附摺箔・長絹・大口・腰帯・扇の裝束にて、一人は青き珠、一人は銀の珠を盆に載せて持ち、橋懸にて向合ひ、

後ツレ（二人）『光散る。潮滿瓊のおのづから。曇らぬ御影。仰ぐなり（といひて正面に向き）

地『おのおの瓊を。捧げつつ。おのおの瓊を（と舞臺に入り）。捧げつつ。豐姫玉依二人の姫宮。金銀盌裏に瓊を供へ。尊に捧げ（とワキへ向き）。奉り。かの釣針を。待ち給ふ。わたづみの宮主。持參せよ

【七】
と幕の方に向き、直して大小前に立つ。
大癋の囃子にて、後ジテ海神、面鼻瘤惡尉・白頭・輪冠（大龍を戴く）・金緞鉢卷・襟花色・着附無色段厚板・狩衣・半切・腰帯・扇の裝束にて右手に鹿背杖を突き、左手に釣針を持ちて、橋懸一の松に出で、

後ジテ『まうとの君の命に隨ひ。わたづみの宮主。釣針を尋ねて（と舞臺に入り）。天孫の御前に。奉る

とワキの前へ行きて釣針を下に置き、立ちて一の松に行き

【六】
第二段
後ヅレ天女二人（豊玉姫と玉依姫）が潮滿瓊と潮涸瓊を持って登場。

天女「光り輝くこの潮滿瓊のやうに、曇りのない泰平の御代を仰ぐのでございます」

と、それぞれ瓊を捧げ持った豐玉姫、玉依姫の二人の姫宮は、瓊を金銀の盌にのせて、尊に奉らうと、かの釣針をお待ちになり、

天女「海神さま、釣針をお持ち下さい」

【七】
後ジテ海神、釣針を持って登場。

海神「賓客彦火々出見尊の御命令により、海神は釣針を尋ね出して、天孫の御前に奉ります」

【六】
○盌裏―盌は物を入れる小さな器。裏は中。
○わたづみの宮主持參せよ―この句は姫の詞としては穩當でない。尊の御詞と解すべきもので、或は「かの釣針を待ち給ふ」も尊についての叙事と見られるのであるが、實演にはツレの言行として取扱つてゐる。さうすれば「持參せよ」は崇敬體でありたい。

【七】
○まうとの君―眞人の君。賓客人。尊を指す。

○袖をかへし—袖を翻し。

○桂の黛—黛は書き眉、桂は月の桂で、三日月のやうな形をした美しい眉墨。○雪を廻らす—張衡の舞賦に「袖如レ回レ雪」とあり、舞の美しい形容。月、花、雪と並べたのである。

【八】

○老龍—傳說と混同して海神を龍王と見たのである。○鹿背杖—手に持つ所に撞木のある杖、撞木杖、

床几にかゝる。

地「潮滿潮涸二つの瓊を。潮滿潮涸二つの瓊を。釣針に取り添へ捧げ申し（とツレワキの前に珠を置き、）舞樂を奏し。豐姫玉依。袖を返して。舞ひ給ふ（と袖の露をとり）

〔天女舞〕（ツレ二人相舞）

地「いづれも妙なる舞の袖。いづれも妙なる舞の袖。玉のかんざし桂の黛。月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす。袂かな

と舞ひ上げて笛座の前へ行き下に居る。

【八】

シテ「わたづみの宮主（といひて立上り）

〔舞働〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

シテ「わたづみの宮主

地「姿は老龍の。雲に蟠り。鹿背杖にすがり。左右に返す。袂も花やかに。足踏はとうとうと、拍子

と、潮滿・潮涸の二つの瓊を釣針に添へて、尊に奉り、次で舞樂を奏し、豐玉姫・玉依姫は袖を翻して美しい舞を舞はれる。

〔天女舞〕

豐玉姫・玉依姫が舞ふ。

二人の姫がいづれも美しい舞を舞はれる、その舞姿の奇麗なこと、玉の簪、桂の黛、月も照り映える花のやうな姿、ほんとに美しい立派な舞姿である。

【八】

〔舞働〕

海神は勇ましい舞を演ずる。

海神は老龍の姿で雲に蟠り、撞木杖にすがりながら、さす手ひく手の舞に、袂を花やかに翻し、足をとう〳〵と踏み、拍子を合はせて、面白く舞ふ。

を揃へて時移れば。尊は御座を。立ち給ひ（とワキ立ちて常座へ行く）。歸り給へば袂にすがり（シテワキの袖に手をかけ）。わたづみの乘物を奉らんと（シテ二三足下りて坐し）。五丈の鰐に（と立ち）。乘せ奉り（ワキ幕に入る）。二人の姫に（ツレ立ち）。瓊を持たせ（ツレ珠を持ちて幕に入り）。龍王立ち來る（シテ脇座へ行きて幕に向き）。波を拂ひ。潮を蹴立て。遥かに送りつけ奉り（と幕際へ行き）。遥かに送りつけ奉りて。又龍宮にぞ。歸りける（と飛び返り袖をかつぎて下に居り、直に立ちて留む）。

そのうちに時刻も過ぎたので、彦火々出見尊が御座を立つてお歸りになると海神は尊の袂にすがつて、『海の乘物をさしあげませう』と、五丈の鰐にお乘せ申し、二人の姫に瓊を持たせ、折柄寄せ來る波を拂ひ潮を蹴立てて、遥か遠くまでお見送り申しあげて、また龍宮に歸つた。

ワキ彦火々出見尊がまづ幕に入り、シテ海神これを見送つて退場。

○五丈の鰐—書紀には八尋鰐、古事記には一尋とある。

〔考異〕

諸流（觀剛喜）

剛・喜ともに著しい異同はない。

古謠本（光悦本）

【一】ここ とても……晉く事の由、光やうこをも……

【三】ワキ われ玉の井（光きよくせい）の……木蔭に立ち寄り（光て）……（シテ）人あ りと……桂の木蔭（光桂木の蔭）に……

【四】シテ いかに申し……うちつけなる御事（光申事）なれども……地 毫字……奉り（光る）

【八】地 妻は……拍子を揃へて（光ナシ）……

田村

観(寶 春 剛 喜)

解説

【能柄】二番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　東國僧、ワキツレ　同従僧(二人)、前シテ　童子(田村丸の靈)　狂言　清水寺門前の者、後シテ　坂上田村丸

【所】京都　清水寺

【時】三月中旬

【作者】能本作者註文、二百十番謡目録ともに世阿彌の作とす。金春禅竹の五音三曲集に第四節、「春宵一刻値千金」からクセ上「面白の春べや」までを引いてゐる。但し現行曲の「あらあら面白の地主の花の景色やな。櫻の木の間に漏る月の雪もふる夜嵐の」が、五音三曲集には「やう〱面白の地主の花よ候やな。櫻の雲間にもる月の、雪もふる夜あらしの」とある。演能の最も古い記録は、飯尾宅御成記にある寛正七年二月廿五日のもので、次で親元日記文明十五年三月十二日の條にも見えてゐる。言經卿記文祿四年三月廿九日の條に本曲註釋の事が出てゐる。

【梗概】春三月、東國の僧が都見物に出て、清水寺に參詣してゐると、一人の童子が來て花の木蔭を清める。僧はこの童子に寺の來歴を尋ねると、童子は昔賢心といふ沙門が行叡居士と名乘る觀音の化現に遭ひ、その敎へに從つて、坂上田村丸を檀那としてこの寺を創立し

た由を述べ、且僧に尋ねられるがまゝに、附近の名所を教へてゐるうちに、月が山の端から出て、この櫻に映ずる景色が實に美しい。童子は興に乘じてこの美景を賞讃し、やがて田村堂の内陣に隱れてしまつた。僧は奇特の思ひをして、終夜法華經を讀誦してゐると、その夢に田村丸の幽靈が現れ出て、伊勢國鈴鹿山の兇徒を平らげた軍物語をし、これも觀音の佛力であるといつて消え失せる。

【出典】本曲の前段清水寺建立の由來は、今昔物語卷十一「田村將軍始建二清水寺一語第卅二」に、

今は昔、大和國高市の郡八多(やた)の郷に小島山寺と云ふ寺有り。其寺に僧有けり。名を賢心と云ふ。報恩大師と云ける人の弟子也。賢心專に聖の道を求て苦行怠る事無し。然る間夢の中に人來て告て云く「南を去て北に趣(ゆ)け」と。夢覺て後、北に向はむと思ふ。……淀川にして金の色の水一筋にて流るを見る。但し我れ一人是を見る、餘の人は是を不レ見ず、定て知ぬ是我が爲に瑞相を現せる也と思て、此水の源を尋て行く、新京の東の山に入る。山の體を見るに、峻くして木暗き事無レ限し。山の中に瀧有り、朽たる木を山の上の道として、其れを踏て瀧の下に至る。杖を取て獨り立てり。此所を見るに、心深く染みて更に餘の念ひ無し。吉く見れば瀧の西の岸の上に一の草の庵有り。其中を一人の俗｜｜年老て髮白し、其形ち七十餘許也。賢心寄て俗に問て云く「｜｜は何なる人の在ますぞ。亦此に住して何年にか成給へる、亦姓名は何とか申す」と。翁答て云く、「姓は隱れ遁れたり、名をば行叡と云ふ、我れ此に住して二百年に及ぶ。而るに年來汝を待つと云へども未だ不レ來ず、適々幸に來れり喜ぶ所也、……此の草の庵の所をば堂を可レ建き所也、此前なる林は觀音を可二造奉一き料の木也。我れ若し遲く返り來らば、速に此願を可レ遂し」と不二云畢一るに、翁掻消つ樣に失ぬ。……如レ此くして此所にして三年過ぬ。而る間大納言坂上の田村麻呂と云ふ人、近衞の將監と有ける時……本公の隙京を出て東の山に行て、……奇異の水の流出たるを見る。……遂に賢心に會ぬ。……喜て白壁の天皇に賢心が有樣を申て、度者一人を給りて度する事を令レ得て、名を延鎭と改めつ。其年の四月十三日に、東大寺の戒壇院にして具足戒を受つ。其時に延鎭將監と同心にして力を合せて、彼所に岸を壞ち谷を塡て、伽藍を始て建つ。……今の清水寺と云ふ是也。

この事は、參考源平盛衰記の清水寺縁起(南都本)にも記してゐるが、第二段の鈴鹿の凶賊を討滅したことは、上記の書には見えない。然し「田村の草子」に、田村麻呂が鈴鹿山のおほだけ丸といふ鬼神を征伐すべき勅命を蒙り、この所の鈴鹿御前といふ天女と契りを結び、天女と力を協せて鬼神を討つたと記して居り、幸若舞曲「未來記」にも、

扨其後に田村丸十二年三月にたらひ、奈良坂山のかたつぶて、鈴鹿山の立烏帽子、かゝる逆徒を平らげ、國を鎭め給ふたり。

と記して居るのを見れば、謡曲制作當時、この種の傳說が流布してゐて、作者はこれを脚色したものであらう。――田村の草子、未來記には清水寺縁起は記してゐないから、前段はこれらと關係がない。

【概評】〔箙〕〔八島〕とともに勝修羅物三番として珍重せられてゐるのであるが、中にもこの曲は花實を兼ね備へた逸品である。前段は清水寺縁起を說くのが主であるが、くだくだしい佛說を架言しないで、春の時地主權現の櫻を配して、極めて花やかな興趣を添へ、後段には華麗な前段に對して、誠に壯快な武勇を語り、しかも最後を「これ觀音の佛力なり」と結んで、作者所期の效果を完全に奏してゐるのである。佛敎の效驗、觀音の利益を說いた曲として、最も傑れたものであるといひ得よう。

【二】

次第の囃子にて、ツキ東國僧、角帽子・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、ツキヅレ從僧二人、ツキと同樣の裝束（水衣は縷）にて舞臺に入り向合ひて、

ツキ ツキヅレ 〽次第 鄙の都路隔て來て。鄙の都路隔て來て 九重の春に急がん

地取にツキは正面に向き、（ツレは下に居り）

ツキ 〽これは東國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この春思ひ立ちて候

といひて、ツキヅレ（立ち）と向合ひ、

ツキ ツキヅレ 〽道行 頃もはや。彌生なかばの春の空。彌生なかばの春の空。影ものどかに廻る日の霞むそな

【一】 前段

舞臺は初め關東のある所で、ツキ東國僧、ツキヅレ從僧を隨へて登場。

僧「國々の國府をいくつも通つて來たが、なほ旅を急いで、早く都の春景色を眺めたいものだ」

こゝ、まづ次第を謠つて旅の心持を敍べ、

僧「私は關東の方から出て來た僧です。私はまだ都を見たことがないので、この春思ひ立つて、旅に出かけて來たのです」

こゝ見物人に自己紹介をし、

僧「時候も丁度三月の中旬、春の眞盛りで、のどかな旅を續けてゐるうちに、早くも夕日影のおぼろに霞む西の方に、音

【一】

〔一〕鄙の都路―鄙の都は地方の國府即ち國司の廳の所在地をいふ。萬葉集卷十八にも「天ざかる鄙の都にあめつちのかくこひすらば生けるしるしあり」と見ゆ。

〔二〕九重―都。天の九天に象つて天子の門を九としたところから出た名。拾芥抄に「借之門以九重」、文選呂向の註に「九重天子之門數也」

〔三〕彌生―三月の異名。

〔四〕影ものどかに廻る日の―のどかな春の日影が東から西へめぐつて行く方。即ち西の方。

○音羽山―清水寺のある山をいふ。別に逢坂山の南嶺に同名の山がある。
○瀧の響―清水寺の下に音羽の瀧がある。
○清水寺―京都東山八坂の東南の山腹にある。水鏡に「七月二日(延暦十七年)、田村將軍清水の觀音をつくり奉り、又已が家をこぼちわたして堂を建てき」。解説參照。

【二】
○おのづから―櫻の花がそのまゝ佛への春らしい手向ぐさとなつてゐるとの意。
○地主權現―清水寺の鎭守の神で、寺の傍にある。神社考に「清水寺鎭守本地文殊號二地主權現一、大己貴之垂跡也、四月九日祭レ之」こゝに名木の櫻がある。
○大悲の光―觀音の衆生を憐む大慈悲を春の光に喩へていふ。
○大慈大悲の春の花―以下「五濁の水に影清し」まで當時行はれてゐた今様歌であらう。「花月」にも見ゆ。
○十惡―人間の陷り易い十種の罪惡、殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・愚痴をいふ。

たや音羽山。瀧の響も靜かなる。清水寺に着きにけり清水寺に着きにけり

ワキ「瀧の響も靜かなる」と正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りてワキヅレと向合ひ、清水寺に着きたる心。道行濟みて、ワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これは都清水寺とかや申すげに候。(右の方に向き)これなる櫻の盛りと見えて候。(ツレに向き)人を待ちて委しく尋ねばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き順次竝びて下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ童子、面童子・黒頭・金緞鉢卷・襟淺黄・着附縫箔・萠黄水衣・腰帶・扇の裝束にて萩箒を持ちて出で、常座に立ちて、

シテ一聲「おのづから。春の手向となりにけり。地主權現の。花盛り

シテサシ「それ花の名所多しといへども。大悲の光色添ふ故か。この寺の地主の櫻に若くはなし。さればにや大慈大悲の春の花。十惡の里に芳し

羽山が見え出し、靜かな瀧の響が聞えて來て、愈々京の清水寺に着いた」

と旅のさまを叙べてゐるうちに京に着いた態で、舞臺は清水寺となる。

僧「旅を急いだので、存外早く都に着きました。こゝが清水寺といふ所のやうで、この櫻が丁度眞盛りと見えます。こゝで人を待つてゐて、名所の謂れを委しく尋ねたいものだと思ひます」

といつて脇座へ行き、人の來るのを待つてゐる。

【二】

シテ坂上田村丸の靈、童子の姿で箒を持つて登場し、

童子「この地主權現の櫻は今花の眞盛りで、この花がそのまゝ春の季節に適はしい佛への手向ぐさとなつてゐる。一體世間に花の名所は少くないが、こゝの櫻は觀世音の大慈大悲の御光がさし添ふ爲か、この地主權現の櫻ほど美しいものは外にない。誠に觀世音菩薩は、この春の花のやうに、大慈大悲を以て罪惡に

く。三十三身の秋の月。五濁の水に影淸し

シテ下歌「千早振る神のお庭の雪なれや。上歌「白妙に。雲も霞も埋もれて。雲も霞も埋もれて。いづれ櫻の梢ぞと。(右の方に向き)見渡せば八重一重げに九重の春の空。四方の山なみおのづから。時ぞと見ゆる(少し出で、)氣色かな時ぞと見ゆる氣色かな(と正面に直す)

【三】 ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる人に尋ね申すべき事の候

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「見申せば美しき玉箒を持ち。木蔭を淸め給ひ候は。もし花守にて御入り候か

シテ「さん候これはこの地主權現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木蔭を淸め候程に。花守とや申さん。又宮つことや申すべき。いづれに

充ちた衆生を極樂に導き給ひ、又秋の月のやうに、身を種々の姿に變じて、汚濁の俗界を淸めて下さるのだ。

おゝ、そよ吹く風につれて、この神境の櫻が散つて雪のやうだ。あたり一面眞白で、雲も霞も落花に埋もれて、どれが櫻の梢だか見分けられない位だが、よく見れば、一重櫻もあれば八重櫻もあり、都全體、この山つゞき全體、いかにも春らしい美しい景色だ」

こゝあたりの景色を賞美しながら、權現の木蔭を掃除しようとする。

【三】 僧、童子を見つけて、

僧「もうし、そなたにお尋ねいたします」

童子「私の事ですか、何の御用です」

僧「お見かけすれば、美しい箒木を持つて木蔭を掃除していらつしやるが、もしやこゝの花守でいらつしやいますか」

童子「さうです、私はこの地主權現にお仕へしてゐるものです。いつも花時には木蔭を掃除してゐるのですから、仰せの通り花守と申しませうか、又は社人だと申しませうか、いづれに致せ、由緒のある

○三十三身―觀音が衆生を濟度する方便に、佛身・辟支佛身・聲聞身・梵王身・帝釋身・自在天身・大自在天身・天大將軍身・毘沙門身・小王身・長者身・居士身・宰官身・婆羅門身・比丘身・比丘尼身・優婆塞身・優婆夷身・長者婦女身・居士婦女身・宰官婦女身・婆羅門婦女身・童男身・童女身・天身・龍身・夜叉身・乾闥婆身・阿修羅身・迦樓羅・緊那羅身・摩睺羅伽身・人非人身・執金剛神身の三十三種の姿に變化するをいふ。法華經普門品に見ゆ。○五濁―濁世に起る五種の汚濁。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁をいひ、又は五濁をいふ。[illegible] 法華經方便品に見ゆ。○千早振る―神の枕詞。[illegible]

仕へてゐる人。
○大同二年、坂上の田村丸、子島寺―本曲の末に記す。
○賢心―子島寺を創立した報恩の弟子で、後に延鎭と改めた。ゲンシンと濁つて謠ふのは訛りである。下懸では「延鎭」と謠ふ。
○沙門―沙門那Sramanaの略で、勤息と譯す。諸の善法を勤修して諸の惡を止息する意、僧のこと。
○生身―畫像木像などでない佛の本體。
○觀世音―阿彌陀如來の左の脇士、大慈大悲を以て十方の世界に身を現じ、世人のその名を稱する音聲を觀じて皆解脱せしめる菩薩。
○木津川―源を伊賀國より發し、山城の八幡町で淀川に合す。古記には賢心の行叡に會つたのを菩提川としてゐる。閒晶も同じ。
○檀那―Dana. 施主と譯す。僧に金品を施す人。
○伽藍―僧伽藍摩Samghârâmaの略、精舍と譯す。佛弟子の集つて道を修める所。
○菩薩―菩提薩埵Bodhisattvaの略、菩薩とも略す。覺有情と譯し佛陀の次位にあるもの。

由ある者と御覽候へ
ワキ「げにげに由ありげに見えて候。まづまづ當寺の御來歷。委しく語り給ふべし
シテ（語）「そもそも當寺清水寺と申すは。大同二年の御草創。坂上の田村丸の御願なり。昔大和の國子島寺といふ所に。賢心といへる沙門。生身の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時木津川の川上より。金色の光さししを。尋ね上つて見ればー人の老翁あり。かの翁語つて曰く。われはこれ行叡居士といへり。汝一人の檀那を待ち。大伽藍を建立すべしとて。東をさして飛び去りぬ。されば行叡居士といつぱ。これ觀音薩埵の御再誕。また檀那を待てとありしは。これ坂上の田村丸
地上歌「今もその。名に流れたる清水の。（シテ右へ向

者だとお思ひ下さい」
僧「いかにも由緒のある方のやうに思はれます。何はともあれ、この清水寺の御來歷を委しくお話し下さい」
童子「それではお話しませう。一體この清水寺は大同二年に御創立になつたもので、坂上田村丸の御願によつて出來たものです。その由來と申すのは、昔大和國子島寺といふ所に、賢心といふ僧があつて、どうか觀世音菩薩の御本體を拜みたいものだと祈つてゐましたところ、ある時、木津川の川上から金色の光がさしたので、不思議に思つて溯つて行くと、そこに一人の老翁がゐました。そして、その翁が賢心に申すには『自分は行叡居士といふ者だが、お前は一人の檀那を待つて、大寺院を建立するがよからう』と、かういつて東の方へ飛んで行つてしまつたのです。この行叡居士といふのは、實は觀音菩薩の御再來で、又檀那を待てといはれたその檀那は、坂上田村丸のことなのです。
かうして、清水寺が建立せられてよりこの方、今日に至るまで有名な寺として續いて來たもので、この御本尊觀世音菩薩

○名に流れたる―名高い。流れは清水の縁語。

○深き誓ひ―觀音の衆生を濟度せんとの誓願をいふ。深きは水の縁語。

○千手の御手―詳しくは千手千眼觀世音菩薩といふ。千手は同時に無限の動作をなし千眼は同時に一切の事理を知る。この菩薩の自在神力を標示したもの。

○とりどり樣々―御手の縁で「取り」とつゞけた。

○安樂世界―極樂淨土。觀世音は阿彌陀佛の脇士であるからいふ。

○娑婆―Sabha. 雜界と譯す。現世界のこと。

○愚かなるべしや―仰ぐなどといつただけでは不十分である。この上もなく尊いとの意。

【四】

○塔婆―卒都婆Stupaの略。略して塔ともいふ。佛の遺骨を藏め又は供養の爲に建てるもので、小は木石のものもあれば、三重五重の大建築もある。こゝの塔婆は所謂三重塔である。

○歌の中山―清水から清閑寺に至る山路。

○清閑寺―清水寺の東南、直谷の北にある。延暦二十一年[illegible]法師の開いた寺で、本尊は千手觀音。

○今熊野―新熊野ともいふ。

き）名に流れたる清水の、深き誓ひも數々に（正面に直して）千手の、御手のとりどり樣々の誓ひ普くて（前へ出でて）國土萬民を漏らさじの。大悲の影ぞありがたき。げにや安樂世界より（目附柱の方へ行きて）今この娑婆に示現して、われ等が爲の觀世音仰ぐも愚か、なるべしや仰ぐも愚かなるべしや

（と仕手柱先に立ち、萩箒を後見に渡し、扇を手に持つ）

【四】

ワキ「近頃面白き人に參り逢ひて候ものかな。又見え渡りたるは皆名所にてぞ候らん御教へ候へ

シテ「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし

ワキ（正面に向き）まづ南に當つて塔婆の見えて候は、いかなる所にて候ぞ

シテ（正面に向き）あれこそ歌の中山清閑寺。今熊野

が衆生救濟の深い御誓願を以て、千手千眼の御姿を示し、あらゆる衆生の願ひをお聞きになり、すべての衆生を漏らさず救うて下さる大慈大悲の御心は、實にありがたいことです。誠に觀音菩薩と申せば、阿彌陀如來の脇士として極樂世界においでになる御身分でありながら、特にこの苦しい現世に來現して、われ等衆生をお救ひ下さるのは、何と申しやうもないありがたいことです」

【四】

そこで、僧は話題を轉じて、

僧「近頃にない愉快な方にお目にかゝりました。それから、話は違ひますが、このあたりにずつと見えるのは、皆名所でせう。どうかお教へ下さい」

童子「さうです、皆名所です。御尋ね下さい。お教へしませう」

僧「まづ南の方に塔が見えますが、あれはどういふ所です」

童子「あれが歌の中山・清閑寺です。それに續いて今熊野まで見えます」

まで見えて候へ

ワキ（笛座の上を見て）また北に當つて入相の聞え候は。いかなる御寺にて候ぞ

シテ（笛座の方に向き）あれは上見ぬ鷲の尾の寺。（脇柱の方に向き）や。御覽候へ音羽の山の嶺よりも。出でたる月のかかやきて。（二人とも正面に向き）この地主の櫻に映る景色。まづまづこれこそ御覽じ事なれ

ワキ『げにげにこれこそ暇惜しけれ。こと心なき春の一時

シテ『げに惜しむべし

ワキ『惜しむべしや

『春宵一刻。値千金。花に淸香。月に陰

『げに千金にも。代へじとは。今この時かや

（とワキの方へ行き、ワキの袖に手をかけて二三足正面先へ誘ひ出し、ワキも誘はれて前へ出て、正面に向き、

僧「それからまた、北の方に夕暮の鐘が聞えますが、あれはどういふお寺です」

童子「あれは名高い靈山寺……。（といひかけ東の方から出る月を見て）やあ、御覽なさい、音羽山から月が出ました。あの月が輝いて地主の櫻に映る景色、これこそまづ第一等の見ものでせう」

僧「おゝ實によい景色、ほんとに時の移るのが惜しまれます。この春景色を見ては、外に何の思ふ所もありません」

童子「ほんとにこの一刻を十分味ひたいものです」

僧「ほんとです、時の過ぎて行くのが實に惜しまれます」

童子僧「花には美しい香があり、月には淸い光があり、春の一刻は實に千金の値がある」

といふ詩を同吟し、

○三十三間堂の東南三町許の所にある。百練抄に「應保元年十月十六日、奉レ移二熊野御靈於新造社壇一、今熊野是也、後白河御願也」

○入相―夕暮の鐘。

○上見ぬ鷲の尾の寺―鷲の尾の寺は天竺靈鷲山に擬へた名で、靈山寺一名正法寺をいふ。淸水寺の北、法觀寺の東にある。上見ぬは鷲の形容で、鷲は空高く上つて、もはやわが上に見る所がないとの意。夫木抄に「またはよも羽を鼓ぶる鳥もあらじ上見ぬ鷲の雲の通路」

○暇惜しけれ―時の過ぎ去るのが惜しい。この景色をいつまでも見てゐたいとの意。

○こと心なき―この景色を樂しむ以外に、何も思ふことがない。

○惜しむべしや―「や」は感動の助詞。

○春宵一刻値千金―蘇東坡の春夜の詩―春宵一刻値千金、花有二淸香一月有レ陰、歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沈々―を引いた。

○散るや心なるらん—花の散る面白さに、人の心も浮かれ出るとの意。
○さぞな—さすが。
○時めける粧ひ—時節にかなつた盛んな姿。
○青陽—青柳。
○音羽の瀧の—のどかなる音といひかけ、瀧の白絲から「繰り返し」を呼び出した。慈鎮の家集拾玉集に「くり返し亂れて人を渡すかな清水寺の瀧の白絲」
○ただ頼め標茅が原のさしも草われ世の中にあらん限りは—新古今集釋教の部に「この歌は清水觀音の御歌となんいひ傳へたる」と詞書した歌。但し原歌の初句「なほ頼め」とある。標茅が原は下野國にあり、さしも草の産地、さしも草は蓬で蓬の短いものであるから、之を心の短い意に喩へ、短氣を起すな、ひたすらわれを頼めといつたもの。「袋草子にこの歌の註として「物思ひ侍る女の、はかなく、しかもこじくは死なんと申しけるに示しける」とある。
○濁らじものを—御誓願に偽りはないといふ意を清水の縁で濁らじといつた。
○枯れたる木なりとも—大

地「あらあら面白の地主の花の景色やな。櫻の木の間に漏る月の雪もふる夜嵐の。誘ふ花とつれて散るや心なるらん

（と眺めてツレは脇座に歸りて下に居り、シテは愈〻興に乘じ、これより音に合せて舞ふ。舞クセ）

地クセ「さぞな名にし負ふ。花の都の春の空。げに時めける粧ひ青楊の影みどりにて。風のどかなる。音羽の瀧の白絲の くり返し返しても面白やありがたやな。地主權現の花の色も異なり

シテ「ただ頼め。標茅が原のさしも草

地「われ世の中に。あらん限りはの御誓願。濁らじものを清水の。緑もさすや青柳の。げにも枯れたる木なりとも。花櫻木の粧ひいづくの春もおしなめて。のどけき影は有明の。天も花に醉へりや。面白の春べやあら面白の春べや

（と謡ひて、眞中に行き下に居る、ワキシテに向ひ、）

童子「ほんとに千金を以てしても換へられないのは、この今の景色です。あゝこの地主權現の花景色は實に面白い。櫻の木の間から月が漏れ出る。そよ吹く夜風につれて花が雪のやうに散る。あまりの面白さに、自分の心までが浮かれ出るやうだ」

童子「さすが名高い花の都の春景色だけあつて、春の粧ひを凝らしたさま、青柳の色は緑で、風はのどかで、幾度繰返して見ても、褒め足りない、實に面白い景色だ。わけても、この地主權現の花は、他所とは違つて格別美しい。觀音菩薩は『たゞ頼め標茅が原のさしも草、われ世の中にあらん限りは』

（自分がこの現世に示現してゐる以上は、必ず救つてやるから、短氣を起さず、ひたすら自分を頼りにするがよい）

と仰せになつた通り、觀音の御慈悲はいつまでもお變りがなく、『枯れた木にも花を咲かせる』と仰しやつた位だから、この清水のあたりには、青柳は緑滴るばかりであり、櫻の花は眞盛りであり、全くのどかな春景色で、天まで花に醉つてゐるやうだ。實に面白い景色だ」

と僧のゐることも忘れたかのやうに、童子はうち興じる。

悲心陀羅尼經に「此大神呪、乾枯樹、尙得〻生〻枝柯華菓〻、何況有情有識衆生身有〻病患〻、治〻之不〻差者必無〻是處〻」とあるので、枯木にも花が咲くといひかけに、花櫻木とつゞけた。

○有明の—影はありといひかけた。

○天も花に醉へり—和漢朗詠集、菅公の花時天似醉序の句に「春之暮月、月之三朝、天醉〻于花〻、桃李盛也」

【五】

○いさやその名も—どうであるか、その名も知らぬを白雪にいひかけた。

○跡を惜しまば—寺に跡をつけるとの意にかけて、わが立ち去る跡を惜まばといつた。

○蘆垣の—蘆で編んだ垣は編み目の間が密なので、間近きの枕詞とした。

○間近きほどか—歸る先は近いか。

○遠近の—或は歸る先が遠いか」といひかけて、遠近のといひ、古今集讀人知らずの歌「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」を借り—おぼつかなくも—の序とした。

○坂の上の—土地の坂上と掛け、の坂上と雨方にかけた。

【五】

地ロンギ「げにやけしきを見るからに。ただ人ならぬ粧ひのその名如何なる人やらん

シテ「如何にとも。いさやその名も白雪の。跡を惜しまばこの寺に歸る方を御覽ぜよ

地「歸るやいづく蘆垣の。間近きほどか遠近の

シテ「たづきも知らぬ山中に

地「おぼつかなくも。思ひ給はばわが行く方を見よやとて（シテ立上り）。地主權現の御前より（と前へ出で）下るかと見えしが。下りはせで坂の上の田村堂の軒漏るや（と日附柱際より大小前へ返し）。月のむら戸を押し開けて内に入らせ給ひけり内陣に、入らせ給ひけり

「月のむら戸を」と扇を開きて戸を開く形をして仕手柱際へ行き、扇をたゝみて静かに中入。

【五】

僧「どうも樣子を見てゐるのに、普通の人ではないやうだ。（と獨言して童子に向ひ）一體あなたはどういふ方なのです、お名前は何と仰しやいます」

童子「いや私の名か、私の名は何と申さうか。まあ、それを知りたいと思はれるなら、この寺の、私の歸る方を御覽なさい」

僧「では、そのお歸りになる所は、お近くなのですか、それとも遠くの……」

童子「それほど氣がかりに思はれるなら、私の行先を御覽なさい」

といつて、地主權現の神前から下るやうに見えたが、下りはしないで、坂の上に上り、月影のさした田村堂の緖戶を押し開けて、内陣にお入りになつた。

前ジテ・童子、田村堂に入る態で退場。

【六】

狂言清水寺門前の者、着附・長上下・腰帶・扇の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

狂言「かやうに候者は。清水寺門前に住居する者にて候。この間は久しく觀音へ參らず候間、今日は

○田村堂―清水寺の境内、轉倉堂の西にあり、田村麿及び行叡・延鎮の像を安置す。
○月のむら戸―月影の漏り入るも軒端の村戸、村戸は網戸のことか。
○内陣―社寺の神佛を安置した奥の間。

【二】
○近頃にて候―近頃にない甚だ嬉しいことです。
○圓鎮―延鎮に同じ。賢心の後の名。
○淀川―木津川の下流。

參詣申さばやと存ずる。（ツキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御參詣なされ候ぞ

ツキ「これは遠國より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて候か

狂言「なか〳〵このあたりの者にて候

ツキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候（と舞臺の眞中に出で下に居て）。さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ツキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。當寺の御謂れ田村丸の御事。御存じに於ては語つて聞かされ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を仰せられ候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ツキ「近頃にて候

狂言「まづ當寺清水寺と申すは。平城天皇の御宇。大同二年の御草創。坂上の田村丸の御願にて建て給ひたると申す。昔大和の國子島寺に圓鎮と申す沙門のありたるが。われ生身の觀世音の直に拜みたしとて。朝暮念願なされ候處に。ある時淀川の水上に當つて金色の光さし申し候間。尋ねとりて御覽あれば。この瀧壺に到り給ふ。卽ち千手の佛像光明赫奕としてましますを御覽じ。三度拜をなし給ひたると申す。また山上の方に。不思議の燈火見え候間。これへも尋ね行きて見給ひ候へば。一人の老翁忽然としてましますこれはこれ行叡居士といへり。この地に住みて七百歲なり。汝沙門はこの所にありて。一人の檀那を待ち。大伽藍の建立すべしとて。東をさして飛び去り給ふ。されば行叡居士と申すも。觀音薩埵の御再誕なれば。圓鎮の滿足かたがた以て成就仕りたりと申す。

○夥しく催し――多勢の同類を寄せ集めて。

○奇特なる――不思議な、霊妙な。

【六】

また田村丸當寺を御建立の樣體は。その頃勢州鈴鹿山に。鬼神住みて國土の民を惱まし候間。田村丸に物使立つて。急ぎ鬼神の平らげよとの御事なり。畏つて候と御請けを申され。まづ當寺へ參り給ひ。今度鈴鹿山の鬼神を平らげさせて給はり候へ。さやうにてあるならば。當寺を御建立あるべしと御立願のなされ。鈴鹿へ向ひ給ふが。鬼神もこの由を聞き。夥しく催し出で向ひ候へども。當寺觀音の佛力を以て。鬼神の易々と平らげ。その後當寺を御建立あり。清水寺と額を打たれ。今の世までありがたき御寺にて候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に童子一人花守の體にて來られ候程に。則ち當寺の謂れ尋ねて候へば。唯今御物語りの如く懇に語り。所の名所などを敎へ。何とやらん由ありげにて。田村堂の邊にて姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なることを承り候ものかな。あれなるは田村堂と申して。卽ち田村丸の御影を作り込み候か。御佾尊くましますにより。田村丸現れ出で給ひ。御詞をかはされたると存じ候間。暫く御逗留なされ。ありがたき御經をも讀誦ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「我等もさやうに存じ候間。花の木蔭に候ひて。ありがたき御經をも讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

【六】　といひて狂言は引く。

上歌「待得て夜もすがら。散るや櫻の蔭にゐて、

【六】　後段

終夜、この花の散る櫻の木蔭にゐて、

○花も妙なる法―櫻を承けて、妙法華の三字を出し、讀誦する御經が法華經であることを示した。
○法の場―寺。
○迷はぬ月の―讀經によつて心の迷ひの晴れる意を月に喩へた。

【七】

○清水寺の瀧つ波―次の一河の流れを引出す料とした。
○一河の流れを汲んで―平家物語巻七に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず同じ流れをむすぶも他生の緣なほ深し」說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻……皆是先世結緣」
○觀音擁護の結緣―觀音が衆生を擁護救濟する因緣手がかりを結ぶ、

散るや櫻の蔭にゐて。花も妙なる法の場。迷はぬ月の夜と共に。この御經を、讀誦するこの御經を讀誦する

【七】 一聲の囃子にて、後ジテ田村丸、面平太・黑垂・梨打烏帽子・白鉢巻・襟淺黄・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて、法被の右肩を脱ぎて出で、常座に立ちて、

後ジテ「あらありがたの御經やな。清水寺の瀧つ波。まこと一河の流れを汲んで。他生の緣ある旅人に（とワキへ向き）。言葉をかはす夜聲の讀誦（右の方に向き）これぞ即ち大慈大悲の。觀音擁護の。結緣たり（と正面に直す）

ワキ「不思議やな花の光にかかやきて。男體の人の見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ「今は何をか包むべき。人皇五十一代。平城天皇の御宇にありし。坂上の田村丸

地「東夷を平らげ惡魔を鎭め。天下泰平の忠勤た

月の光に心を澄まし、このありがたい法華經を讀誦しよう」

といつて讀經する態で

【七】

やがて僧がうと〳〵と眠ると、その夢に現れた態で、後ジテ坂上田村丸登場。

田村「あゝありがたい御經だ。この清水寺の瀧水の緣とでもいはうか、諺に『一河の流れを汲むも他生の緣』といふ通り、前世から何かの因緣があつて、夜の讀經の聲にひかされて、旅人と言葉をかはすこととなつた。これが即ち大慈大悲の觀世音が衆生を救濟し給ふお引合せといふものだ」

僧は夢の中に田村丸の姿を見て、

僧「これは不思議だ、花の光に輝いて、立派な男の方がお見えになるが、一體あなたはどういふ方なのです」

田村「今は何を隱さう、自分は人皇五十一代平城天皇の御代に仕へた坂上田村丸で、自分が東國の逆賊を平らげ惡魔を亡ぼして、天下を太平にする武功を建てたのも、この清水寺の佛力によるのだ、―

りしも。即ち當寺の佛力なり

地サシ「然るに君の宣旨には（舞臺の眞中へ出で）。勢州鈴鹿の惡魔を鎭め都鄙安全になすべしとの。仰せによつて軍兵を調へ（床几にかゝり）。既に赴く時節に至りて。この觀音の佛前に參り。祈念を致し立願せしに

シテ「不思議の瑞驗あらたなれば

地「歡喜微笑の賴みを含んで。急ぎ凶徒に。打つ立ちけり

地クセ「普天の下、率土の中いづく王地にあらざるや。やがて名にし負ふ。關の戸ささで逢坂の。山を越ゆれば浦波の。粟津の森やかげろふの。石山寺を伏し拜みこれも清水の一佛と（日附柱の方に向きて合掌して）。賴みはあひに近江路や。勢田の長橋踏み鳴らし駒も足並や、勇むらん（と拍子を踏みて）

○瑞驗―佛のありがたい靈驗。○歡喜微笑の賴み―歡び笑ひの相形で現れ給ふ觀音の慈悲を賴りにして。○普天の下率土の中―日本國中。詩經小雅に「普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣」○關の戸ささで逢坂の―關の戸といふ名はあるが、その戸をも閉ざす要のない泰平の御代に逢ふといふ意を含めて、逢坂を呼び起した。逢坂は山城と近江の國境にあつた關所。○浦波の粟津―波の泡を粟にいひかけた、粟津は近江國栗太郡にある。○かげろふの石山寺―「かげろふ」は石の枕詞。粟津の晴嵐は近江八景の一で、晴嵐はかげろふ（陽炎）であるから、かう續けたのであらう。○清水の一佛―石山寺は勢田の南にあり、この寺の本尊も觀世音であるから、清水の一佛（同じ佛）といつた。○賴みはあひに近江路や―逢ひに逢うて賴もしいといふのを、國名にいひかけた。○勢田の長橋―勢田は粟津の南にあり、長橋は琵琶湖の湖尻に架けた橋。

それといふのは、わが大君より宣旨を賜はり、伊勢國鈴鹿山の惡魔を討つて、日本國中を安全にせよと仰せられたのである。自分は仰せを承つて、軍兵を調へ、討伐に出かける時、この觀世音の佛前に參り、惡賊討滅の祈願を凝らすと、不思議にもありがたい御靈驗があつたので、この歡びの微笑を湛へ給ふ觀世音を賴みにして、惡賊退治に出掛けた。——

もとよりこの國中、天下すべて王土でない所はないのであるから、やがては國中遍く戸ざしをしない太平の地にしようと、堅い自信を以て逢阪山を越え、志賀の浦波を眺めながら粟津の森を過ぎ、石山寺では、これも清水と同じ觀世音であると伏し拜み、意に佛力を賴みにして、勢田の長橋を踏み鳴らして近江路を進み、馬の足なみも勇ましく驅けて行つたのである。——

○弓馬の道もさきかけんと―梅の花が他の花に先立つて咲くにいひかけた。
○勝つ色見せたる―太平記千劒破の條、陣中の連歌、長崎師宗の句に「さきがけてかつ色見せよ山櫻」
○猛き心はあらかねの―勇猛な心は荒しを土の枕詞の「あらかねの」にいひかけた。
○土も木もわが大君の―太平記、紀朝雄の歌。委しくは後にいふ。
○なほ數々に大丈夫が―神力佛力が數々增すを大丈夫にいひかけた。
○待つとは知らで―武士が敵を討たんと待つとの意を獵夫が鹿を待つ意に寄せてさを鹿を呼び起した。
○さを鹿―牡鹿。さは接頭語。次の鈴鹿と鹿の字を重ねて文のあやとしただけである。牡鹿即ち鈴鹿の凶徒が御祓したやうに解せられ易いのは、文飾に力を注ぎ過ぎた餘弊である。
○鈴鹿の御祓―昔齋宮が鈴鹿川で御身を清め祓ひ給ふ儀式があつたので、神護があらたかであるとの意を含めてこの語を出し、世々の序としたのであらう。

（馬に乗りたる心）
シテ『既に伊勢路の山近く（と立上り）
地「弓馬の道もさきかけんと。勝つ色見せたる梅が枝の。花も紅葉も色めきて（正面に出で）。猛き心はあらかねの。土も木もわが大君の神國に。もとより觀音の御誓ひ佛力といひ神力も。なほ數々に大丈夫が（左へ廻りて大小前に立ち）。待つとは知らでさを鹿の。鈴鹿の禊せし世々までも。思へば佳例なるべし

【八】

地「さる程に山河を動かす鬼神の聲（づか〳〵と正面に出で）。天に響き地に滿ちて（面を上下につかひ）。滿目青山動搖せり（と右へ廻りて常座へ出で）

〔カケリ〕（に合戰の樣を示し、常座にて右の方に向き、）

シテ「いかに鬼神も確かに聞け。昔もさる例あり。

そのうちに、早くも伊勢に近づくや、萬花に先立つて開く梅の花のやうに、拔群の武功を建てようと、心も花や紅葉のやうに時めき、氣も勇むのである。元來わが國は神國で、草も木もすべて王威に服する上、更に觀世音の御加護を受けてゐるのであるから、神力と佛力とがうち添うて、數々の力を得てゐるのだから、敵を討ち平らげるのは容易なことだ。敵はさうも氣づかないでゐるだらうが、神護によつて今に敵を滅ぼし、後世のめでたい先例となることかと思へば、實に嬉しいことだ」

【八】

田村「とかくする間に、山河をも動かすばかりの恐ろしい鬼神の聲が、天に響き地に滿ち、山といふ山、すべてが動搖したのだ」

〔カケリ〕
（に鬼神と戰ふ樣を示し、）

田村「自分はその時、『おい鬼神もよく聞け

千方といひし逆臣に仕へし鬼も。王意を背く天罰にて。千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし（と脇正面へ行きかゝり）ましてや間近き鈴鹿山

地「ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見れば伊勢の海（正面先へ出で）。安濃の松原むら立ち來つて（笛座の方へ行き）。鬼神は。黒雲鐵火を降らしつつ（上を見）。數千騎に身を變じて山の。如くに見えたる處に

シテ「あれを見よ不思議やな（と眞中にて正面を見渡し）

地「あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手觀音の。光を放つて虚空に飛行し。千の御手毎に。大悲の弓には。智慧の矢をはめて。一度放せば千の矢先。雨霰と降りかかつて。鬼神の上に。亂れ落つれば。悉く矢先にかかつて鬼神は殘らず討たれにけり

昔にもかういふ例があつた。かの千方といふ逆臣に仕へた鬼も王威に背いた天罰で、千方を棄てるや忽ちに亡んでしまつたのだ。ましてこの都近い鈴鹿山に於て、惡賊どもに何程の反抗が出來るものか。といひながら、遙かかなたを見渡すと、安濃の松原のあたりに鬼神が群れ集まつて押し寄せ來り、黒雲を吐き鐵火を降らし、數千騎に身を變じて、宛も山のやうに見えた。――

その時、不思議や味方の軍兵の旗の上に、千手觀音が御光を放ち、虚空を飛行し、千の御手の一つ一つに大悲の弓を持ち、智慧の矢を番へて、一度にどうとお放ちになると、その千の矢先が雨霰のやうに降りかかつて、鬼神の上に亂れ落ちたので、鬼神は免れる術もなく、盡く矢先にかかつて討たれて、殘らず殺されてしまつたのである。――……

〇世々までも―ずつと末の後世までも、
〇佳例なるべし―田村丸の討賊がめでたい先例となるであらう、

【八】
〇滿目青山―見渡す限りの青い山々、黄檗の傳心法要に出てゐる語、
〇千方―木曲の末に記す、
〇千方を捨つれば―千方を見棄てたことが失策であつたやうな書き方で、その意を得ない、
〇鈴鹿山―近江・伊賀・伊勢の三國に跨る。
〇ふりさけ見れば―手をかざして遙か遠くを見渡せば
〇阿濃の松原―勢陽雜記に「あのの松原は、古來名所と聞き傳れども今は無し、これも明應年中の地震以前には、津町と海とのあはひにふりたる松原あり」
〇むら立ち來つて―松原の樣と、鬼神の群集する樣とに兼ねて用ゐた。
〇大悲の弓には―智慧の矢に―引二大悲弓一、放二智慧箭一、覆二煩惱賊一、得二菩提一。

〇呪詛諸毒藥―法華經普門品に「呪詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還着於本人」とあるを引いた。他人が自分を呪ひ、諸々の毒藥を以て危害を加へようとしても、觀世音を念ずれば、その危害は還つて害を加へようとした本人に歸着するとの意。

地「ありがたしありがたしや誠に呪詛(合掌)。諸毒藥念彼。觀音の力を合はせて即ち還著於本人即ち還著於本人の(ト小廻りをし)、敵は亡びにけりこれ。觀音の。佛力なり

と常座にて留拍子を踏む。

實にありがたいことで、經文に「敵が如何なる危害を我に加へようとしても、たゞ觀音の御力を祈りさへすれば、その危害は却つて敵自身に還り、自分は助つて、敵が亡びてしまふのである」とある通り、敵はたやすく亡びてしまつたのだ。これは全く觀世音の御力である」

といつて、田村丸は消え失せる。

〔考異〕

諸流〔五流〕

【一】ワキ「東の都路……春に急がん(下懸出でうよ)……道行く頃もはや……めぐる(下懸出づる)日の……　【二】シテ一聲「おのづから地主權現の(下懸の櫻の)花盛り　キリ……大悲の光色添ふ故か(下懸ナシ)……おのづから時ぞと見ゆる……氣色かな(下懸のどかなる春の氣色は面白や〳〵)　【三】シテ「(下懸いで〳〵語つて聞かせ申さん)抑も當寺清水寺と申すは……金色の光さししを尋ね(下懸立ちしを)、知るべに行きて見ればこの瀧壺に至り給ひ、觀音の佛像光明赫奕として現れ給ふ、又山上の木の間より、灯の影ほのかに見えしを、あやしみ)上つて見れば一人の……　【七】後シテ「あらありがたの御經やな(下懸あら面白の折からやな、地主權現の花盛り)……觀音擁護の結縁たり(下懸向道なり)　ワキ「不思議やな花の光にかかやきて(下懸うつろひてその様け高き)男體の人の(下懸甲冑を帯し)見え給ふは……シテ「今は何をか包むべき(下懸これは)……　【八】シテ「いかに鬼神も確かに聞け(下懸正に聞くらん)昔もさる例あり(下懸ナシ)……シテ「……王位を背く(下懸犯す)……

古謠本〔光悦本〕

【一】ワキ「これは東國方(光東の方)より……この春思ひ立ちて(光都一見とこゝろざし)候……急ぎ候程に……尋ねばやと思ひ候(光ナシ)

【三】ワキ「見申せば……もし(光おことは)花守にて御入り候か(光ましますか)。シテ「さん候……いつも(光ナシ)花の頃は……ワキ「げにげに

に由ありげに見えて候(光荒面白の返答やな)……委しく語り給ふべし(光御物語候へ)……シテ「抑も當寺……かの翁語つて(光者名のつて)曰く……【四】ワキ「近頃……逢ひて候ものかな(光ナシ)……シテ「さん候皆名所にて候(光ナシ)……ワキ「又北に……聞え候は如何なる御寺にて(光御寺をは何と申)候ぞ。シテ「あれは……や、(光あれ)御覽候へ……この地主の櫻(光花の梢)に……【七】後ジテ「あらありがたの……他生の緣ある(光になる)……結緣たり(光なる)……地サシ「然るに(光れは)……【八】シテ「いかに鬼神も……王位を背く(光きし)

附記

○大同二年―平城天皇の第二年。清水寺の建立、帝王編年記には延暦十五年とし、水鏡・拾芥抄には延暦十七年とす。たゞ緣起には「寶龜十二年初建立、延暦十七年更造㆓大佛殿㆒、大同二年又造㆓伽藍㆒比㆓觀音寺㆒」(拾葉抄所引)とある。

○坂上の田村丸―日本後紀に「弘仁二年辛卯五月、大納言正三位兼右近衛大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨㆓粟田別業㆒、時年五十四、田村麻呂者、從三位左京太夫兼右衞士督苅田麻呂子、正四位上犬養之孫、身長五尺八寸、胸厚一尺二寸、目如㆓蒼鷹㆒、鬢繍㆓金絲㆒、有㆑事而重㆑身則二百一斤、欲㆑輕則六十四斤、隨㆓心所㆘欲、怒㆑目轉視則禽獸懼伏、平居談笑則老少馴親、毘沙門化㆑身來護㆓我國㆒」と。延暦年中陸奥羽に遣されて夷賊を平らげ武勳を建てた。

○子島寺―高市郡高取村の子島に觀音寺がある。古の子島寺の址であるといふ。元亨釋書に「報恩、天平寶字四年於㆓和州高市郡子島神祠畔㆒建㆓伽藍㆒、安㆓一丈八尺觀自在菩薩像及四大天王像㆒、號曰㆓子島寺㆒、桓武帝勅賜㆓官祿恩㆒及受㆓封戸㆒」

○千方といひし逆臣―太平記卷十六「日本朝敵の事」に「天智天皇の御宇に、藤原千方といふ者あつて、金鬼・風鬼・水鬼・隱形鬼といふ四つの鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして矢を射るに立たず。風鬼は大風を吹かせて敵城を吹き破る。……かくの如くの神變、凡夫の智力を以て防ぐべきにあらざれば、伊賀伊勢の兩國、これが爲に妨げられて、王化に從ふ者なし。爰に紀朝雄といひける者、宣旨を蒙つてかの國に下り、一首の歌を詠みて鬼の中へぞ送りける。草も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼の棲なるべき。四つの鬼この歌を見て、さては我等惡逆無道の臣に隨つて、善政有德の君を背き奉りける事、天罰遁るゝ處なかりけりとて、忽に四方へ去つて失せにければ、千方勢を失うて、やがて官軍に討たれにけり」

檀風（だんぷう）　寶（剛）

解説

【能柄】四・五番目　二段劇能

【人物】**前ワキツレ**　本間三郎、**狂言**　同太刀持、**子方**　資朝の子梅若、**ワキ**　帥阿闍梨、**前ツレ**　壬生資朝、**ワキツレ**　輿舁（二人）、**狂言**　早打（本間の家來）、**ワキツレ**　船頭、**後シテ**　熊野權現

【所】**第一段**　佐渡本間宅及刑場　**第二段**　同船着場

【時】元弘二年五月下旬（六月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記に寛正六年二月廿八日仙洞御所で觀世が演じたと見えてゐる。

【梗概】佐渡島の本間三郎は、元弘變に流罪に處せられた壬生大納言資朝卿を預つてゐたが、昨日鎌倉から飛脚が來て、北條氏の嚴命を傳へたので、愈明日は資朝卿を誅することとなつた。折柄卿の一子梅若が都今熊野の帥阿闍梨に伴はれて、この島に渡り、幸ひにも父の生前に對面することが出來たが、卿はやがて誅せられてしまつた。梅若は本

間を父の目前の敵として恨み、阿闍梨の助けをかりて、その夜本望を達し、船着場まで逃げのびて、將に漕ぎ出ようとする船に便乘を求めたが、船頭は許さない。そこで、阿闍梨がその船を祈り戻さうと法力を盡すと、三熊野權現が出現して、船を吹き戻し、二人を船に乘せるや、また順風を出して、片時のうちに若狹の浦へ送りつけ、無事に都に歸された。

【出典】 太平記卷二「長崎新左衛門尉意見事、附阿新殿事」から出てゐるやうである。その本文は語釋に隨所に引いて、謡曲と比較することとする。

【概評】 德川時代の淨瑠璃・歌舞伎と同樣、室町時代の謡曲も、生々しい近代史を材料とすることを憚つたのであらう、太平記時代の史實を材料とした古曲は本曲の外全く見當らない。その意味に於て本曲は珍重すべきものであらう。

脚色について見ると、太平記では父子生前對面してゐないのを、本曲に父子對面の場を作つたのは、親子の情を寫す上にも、また武士の情を描く上にも有效であつたと思ふ。甚だ場面の變化に富んでゐて、池内信嘉氏が「能の見方謡の聞き方」に本曲を評して「初段は春榮に似たれ共、尋ね來る者が小兒丈けに可憐なるのみならず、誠忠なる客僧の苦心は同情を惹き、中段は盛久に近けれ共、子方の附き纒ふ爲め一層の哀れさを加へ、道行のロンギは短けれ共、シテ、ワキ、子方の掛合となりて趣深く、本間を刺す所は闇月の如くにして而も風情あり、切は調伏曾我に似通ひたれ共、目前に船を祈り戻すことあれば、形代を祈るよりは一段の勢ひあり、終始通じて悲壯の趣は吾人をして覺えず快哉を叫ばしむ」といつて居られるやうに、各場面について樣々の異なつた趣を出してゐるのであるが、全體として能く引締つた、感じの強い曲柄であるとはいへない、寧ろ雜駁な嫌ひがあると思れるのである。

【一】○御家人—大名の家來。
○本間の三郎—太平記卷二に據れば、資朝を預かつたのは、佐渡國の守護本間山城入道で、本間三郎はその臣である。但し資朝を斬り、またその子に討たれたのは本曲の通り本間三郎となつてゐる。
○元弘の合戰—元弘元年、

【一】 ワキヅレ本間三郎、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・直垂上下・込大口・扇・小刀の装束にて、狂言太刀持、（着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の装束にて太刀を持つ）を従へ、鏡臺に入りて、

本間　これは佐渡の島の御家人。本間の三郎にて候。さてもこの度元弘の合戰に公家うち負け給

第一段

【一】 舞臺は本間三郎の宅。ワキヅレ本間三郎、狂言太刀持を連れて登場。

本間　私は佐渡の島守護職の御家來で、本間三郎といふ者です。さてこの度元弘の合戰に、朝廷方がお負けになり、その御

ひて候。中にも壬生の大納言資朝の卿は。囚人となりこの島へ流され給ひて候を。某預かり申して候。色々痛はり申す處に。昨日鎌倉より飛脚立つて。資朝の卿は大事の囚人にて候間。急ぎ誅し申せとの御諚にて候程に。痛はしながら明日濱の上野にて誅し申し候。この由を資朝の卿へ申さばやと存じ候

とといひて狂言に向ひ、

本間「いかに誰かある

狂言「御前に候

本間「資朝の卿は大事の囚人にてある間。番をよく仕り候へ

狂言「畏つて候

本間「又囚人のゆかりなど尋ね來りて候とも。對面はかたく禁制の由申し候へ

狂言「心得申して候

といひて、本間は鳴座、狂言は地謠座前へ行きて下に居る。

次第の囃子にて、子方梅若、襟赤・着附厚板・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、ワキ師阿闍梨、兜巾・篠懸・着附大格子・水衣・白大口・腰帶・扇・小刀・數珠の裝束にて橋懸に出で、子方一

味方の中でも、壬生大納言資朝卿は捕はれ人となつて、この島にお流されになつたのを、私がお預かりしてゐるのです。それ以來私は何かと大切にお取扱ひしてゐたのですが、昨日鎌倉から飛脚が着いて『資朝卿は重い罪人であるから、すぐ殺せ』といふ御命令なので、お氣の毒ながら、明日濱邊の上手で殺すのです。この事を資朝卿にお知らせしませう」

と見物人に自己紹介して、事件の概略を述べ、さて劇に移つて、狂言太刀持に資朝卿を嚴重に監視するやう命ずる。

【一】後醍醐天皇の北條氏を討滅しようと遊ばされた御企が洩れて、北條氏が京都に攻め上つた戰亂をいふ。○公家―武家に對していふ朝廷方。○壬生の大納言資朝―日野俊光の三男。俊基とともに北條氏討滅の主謀者で、事顯れて鎌倉に召捕へられ、佐渡に流され、こゝで斬られた、この時官は權中納言で、大納言には至らなかつた。○急ぎ誅し申せ―太平記卷二に、「さる程に、君の御謀叛を申し勸めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪に行はるべしと、評定一途に定つて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする、資朝卿を斬り奉るべしと、其國の守護本間山城入道に下知せらる」○濱の上野―濱邊の、水際から少し距つて丘になつてゐる所。

【二】橋懸は京都の態で、子方資朝卿の子梅若、ワキ師阿闍梨に伴はれて登場。

【三】

の松、ワキ三の松に立ちて向合ひ、

子方ワキ次第「親の行方を尋ね行く。親の行方を尋ね行く。越路の旅ぞ遥けき

地取に正面に向き、

ワキ「かやうに候者は。都今熊野梛の木の坊に。帥の阿闍梨と申す山伏にて候。又これに御座候御方は。壬生の大納言資朝の卿の御子息。梅若子と申し候が。さる子細あつて我等が坊に御座候。資朝の卿は流人の身となり給ひ。佐渡の島に流され給ひて候。梅若子未だ父のこの世に御座候由を聞し召し。今一度御對面ありたき由仰せられ候間。餘りに御心中御痛はしく存じ。我等御供申し。唯今佐渡の島へと急ぎ候

子方・ワキ向合ひ、

子方ワキ道行「名殘ある都の空は遠ざかり。都の空は遠ざかり。末は遥かの越の海。今ぞ始めて白眞弓

梅若帥「親の行方を尋ねる爲に、北越の方へ旅に出かけよう」

と、次第に旅の目的を述べ、さて帥阿闍梨は見物人に向つて、

帥「この私は、京都今熊野の梛の木の坊にゐる帥阿闍梨といふ山伏です。それからこゝにお出でになる方は（と梅若を見て）壬生大納言資朝卿の御子息で、梅若君といふのであるが、ある事情があつて、私達の坊に居られるのです。父の資朝卿は流され者となつて、佐渡の島に流されて居られるのですが、梅若君は父君がまだ御存命であるといふことをお聞きになつて、も一度父君にお會ひしたいといはれるので、あまりにお心根がいぢらしいので、私がお供をして、これから佐渡の島へ急いで行くのです」

と自己紹介して、事件の發端を叙べ、

梅若帥「名殘惜しい都の空をば次第に遠ざかつて、遥かな田舍の北越の海を始めて眼に見て、敦賀の港から船に乗り出し、廣

○今熊野—京都、三十三間堂の東南、後白河法皇がこゝに熊野權現を勸請遊ばされたので、今熊野といふ。梛の木の坊はその坊名であらう。

○帥の阿闍梨—〔谷行〕のワキと同名であるが、恐らく謠曲作者の假作であらう。太平記には資朝の一子が佐渡に渡つた後、一人の僧の厚意に依つて本間の持佛堂へ案内せられ、又本間を討つた後、年老いた山伏の祈禱によつて救はれて島を免れ出たといふ。その僧・山伏の名は見えない。

○梅若子—太平記には阿新とある。卷二に「この資朝の子息國光の中納言、その比は阿新殿とて、歲十三にておはしけるが、父の囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隱れて居られけるが、父誅せられ給ふべき由を聞いて、今は何事にか命を惜むべき、父と共に斬られて、冥途の旅の供をもし、又最後の御有樣をも見奉るべしとて佐渡に渡つたとある。

○白眞弓—始めて知らるといひかけ、弓の弦と同音の敦賀の枕詞とした。

○敦賀の津―越前國にある太平記に「都を出でて十日餘と申すに、越前の敦賀の津に着きにけり、是より商人船に乘つて、程なく佐渡の國へぞ着きにける」
○浦々泊り重なりて―衣の緣語裏にいひかけた。重なりも衣の緣語。

敦賀の津より船出して。波路遙かの旅衣。浦々泊り重なりて行けば沖にも里見ゆる。佐渡の島にも着きにけり佐渡の島にも着きにけり

一渡海遙かの―とツレは正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りて佐渡に着きたる心。道行濟みて二人とも正面に向き、

ツレ「急ぎ候程に。佐渡の島に御着きにて候。この所にて囚人の奉行をば本間とやらん申し候。まづ〳〵案内を申さうずるにて候。(子方に)此方へ御入り候へ

といひて入替り、ツレは一の松に出で、

ツレ「いかにこの内へ案内申し候

狂言太刀持立ちて仕手柱先へ出で、

狂言「案内とは誰にて渡り候ぞ

ツレ「本間殿の御館はこれにて候か

狂言「さん候本間殿の館にて候。何の御用にて候ぞ

ツレ「これは都東山今熊野梛の木の坊に。帥の阿闍梨と申す客僧にて候。又これに渡り候は。資朝の卿の御子息にて候が。本間殿の御目にかゝり申したき子細の候ひて。これまで遙々参りて候。この由御申しあつて給はり候へ

狂言「その事にて候。囚人のゆかりの者に對面は禁制にて候間

廣とした海を漕ぎ渡り、あちらこちらの浦々で泊りを重ねて行くうちに、遙か彼方の沖合に人里が見えて來て、やがて佐渡の島に着いた」

といつてゐるうちに佐渡に着いた態で、やがて本間三郎の宅へ行き、資朝卿に對面させてほしいと賴み込む。本間は結局二人に會ふこととなつて、

○少人—稚兒。

○客僧—山伏の異稱。

なるまじく候

ツレ「遙々の所これまで御供申して候程に。御心得を以て引合はせて給はり候へ

狂言「重ねて承り候間その由申し候べし。暫くそれに御待ち候へ。（本間の前に出で）いかに申し候。都東山今熊野梛の木の坊に師の阿闍梨と申す客僧。幼き人を同道にて。かの少人は資朝の卿の御子息の由にて。今一度御對面ありたきとの事により。御供申したる由申し候

本間「何とて禁制の由をば申さぬぞ

狂言「その由申して候へば。遙々參りて候間。是非とも本間殿まで引合はせてくれよと申され候

本間「げに／＼汝の申す如く。資朝の卿の御事は。別して痛はり候間。やがて對面せうずるにて候。此方へ通し候へ

狂言「畏つて候。（ツレの前へ出で）最前の人の渡り候か

ツレ「これに候

狂言「その由申して候へば。本間殿御對面あらうずるとの御事にて候。かう／＼御通り候へ

ツレ「心得申し候

（ツレ・子方[illegible]座に入る。本間立ちて、）

本間「都よりの客僧はいづくに渡り候ぞ

本間「都から來られた山伏はどこに居られるのです。

ツレ「これに候。唯今申し入れ候如く、これは都今熊野梛の木の坊に。帥の阿闍梨と申す山伏にて候。またこれに渡り候幼き人は。資朝の卿の御子息。御名をば梅若子と申し候。資朝の卿は流人となり。この島に御座候由聞し召し及ばれ。今一度御對面ありたき由仰せ候程に。遙々これまで御供申して候。然るべきやうに御申し候ひて。引き合はせ申されて給はり候へ

本間「委細承り候。總じて囚人のゆかりなどに對面は堅く禁制にて候へども。幼き人の遙々これまで御下向にて候程に。その由資朝の卿へ申し候べし。暫くそれに御待ち候へ

ツレ「さらばこれに待ち申し候べし

【三】

一同くつろぐ。

ツレ壬生資朝、着附厚板・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて橋懸に出て、

帥「こゝに居ります。先程お取次の方まで申し入れましたやうに、私は都の今熊野梛の木の坊に居る帥阿闍梨といふ山伏です。それから、こゝに居られる小さい方は、資朝の卿の御子息で、お名前を梅若君と申します。そして、父資朝卿が流され者となつて、この島に居られるといふことを耳にせられ、も一度父君にお會ひしたいといはれるので、遠い所をこゝまでお供して來たのです。どうか宜しくお取計らひの上、父君にお會はせ下さい」

本間「承知しました。一體罪人がその縁者などに會ふといふことは嚴しく禁ぜられてゐるのですが、小さい人が遠い所をわざわざこゝまで來られたのですから、この事を資朝卿にお傳へしませう。暫くそこでお待ち下さい」

帥「では、こゝで待つてゐませう」

【三】

橋懸が壬生資朝の囚室の態で、ツレ壬生資朝登場。

○委細承り候―太平記には「今日明日斬らるべき人に、これを見せては、なかなか冥路の障ともなりぬべし。又關東の聞えもいかゞあらんずらんとて、父子の對面を許さず」とある。
○ゆかり―縁者。

○籠鳥は雲を戀ひ—源平盛衰記、院宣の文に「籠鳥戀レ雲之思、遙浮二千里之南一、歸雁失レ友之情、定通二九重之中途一歟」を引いた。
○科なうして配所の月を—徒然草に「顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見ん事、さも覺えぬべし」撰集抄卷三中納言顯基事に「帝（後一條天皇）はかなくならせ給ひしかば、中納言天台楞嚴院に登りて頭おろしこ、大原といふ所になん行ひすましていまそかりける。朝に仕へしそのかみより明け暮れ、あはれ罪なくて配所の月を見ばやとて涙を流し」
○住み果つまじき—結局は死ななければならない。
〔痛はし—氣の毒である。〕

ツレサシ「籠鳥は雲を戀ひ。歸雁は友を忍ぶ心。それは鳥類にこそ聞きしに。人間に於てわれ程物思ふ者はよもあらじ。「げにや科なうして配所の月を見る事。古人の望むところなれども。『住み果つまじき世の中に。明暮物を思はんより。あつぱれ疾う斬られればやと思ひ候

この間に本間は常座に立ち、ツレ謠を聞きて、

本間「あら痛はしや何事やらん獨言を仰せ候よ。
（ツレに向ひ）いかに申し候。本間が參りて候
ツレ「本間殿と仰せ候か此方へ御出で候へ

二人とも舞臺に入り、ツレは地謠座前、本間は眞中にて下に居り、

本間「唯今參ること餘の儀にあらず、昨日鎌倉より飛脚立つて。急ぎ誅し申せとの御事にて候程に。明日濱の上野に御供申し。御痛はしながら誅し申し候べし。御最期の御用意あらうずるに

資朝「古人の言葉に『籠の鳥は自由な空の雲を戀ひ慕ひ、列を離れた雁は友を慕ひ求める』といふことがあるが、それはただ鳥類についていつただけの事と思つてゐたのに、そのやうな身上となつた自分、苟も人間に生まれながら、自分ほど悲しい物思ひをする者は、よもや外にはあるまい。『罪がなくて配所の月を眺めたい』とは、古人が望んだことではあるが、自分のやうな罪人となつては、何の面白いことがあらう。結局人間は一度は死ななければならないのだから、朝夕に悲しい物思ひをしてゐるよりは、一層のこと、早くさつぱりと斬られた方がよい」

（と獨言をいふ。本間は梅若と面會させる爲、……へ來て、この獨言を立聞きして、）

本間「あゝお氣の毒なことだ。何やら獨言をいつて居られる。（と獨言をいつて資朝に向ひ）もうし、本間がお伺ひしました」
資朝「本間殿ですか、どうぞこちらへお出で下さい」

やがて舞臺も資朝囚室の一部となり、二人は舞臺に入つて、

本間「唯今お伺ひしたのは外の事でもございません。昨日鎌倉から飛脚が着いて、急いで殺せといふ命令なので、明日濱の上手にお連れして、お氣の毒ながら、お首級を頂くことと致します。どうぞ御最期

(一)ちよと—一寸。

(二)門違ひ—行くべき家をとりちがへること。

(三)なかなかの事—勿論といふ意の時代語。

(四)聊爾—粗忽、失禮。

て候

シテ「唯今も獨言に申し候如く。かくてながらへ人に面をさらさんより。あつぱれとう斬られればやと望みし事。さては叶ひて候よ

本間「又御悦びあるべき事の候。都今熊野梛の木の坊に。師の阿闍梨と申す山伏の。御子息を伴ひ遙々御下向候。そと御對面候へ

シテ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。以前も事の序に申す如く。某は總じて子を持たぬ者にて候。定めて門違ひにて候べし。急いで追つ歸され候へ

本間「何と御子は持たぬと仰せ候か

シテ「なかなかの事。

本間「さては聊爾なる事を申すものにて候。やがて追つ歸し候べし（と立上る）

の御用意をなさるやうに」

貴婦「唯今も獨言に申しましたやうに、このやうなざまで人に恥かしい顔をさらすよりは、寧ろさつぱりと早く斬られたいと思つてゐた事です、それでは私の望みが叶ふといふものです」

本間「それから又、お悦びになることがあります。京都今熊野の梛の木の坊の師阿闍梨といふ山伏が、御子息をお連れして、遠い所を下つて來られました。一寸御會ひなさい」

貴婦はわが子の身上を案じて、

貴婦「これは意外な事を伺ふものです。以前にもお話の序に申しましたやうに、私は大體子といふ者がないのです。多分門違ひをしたのでせう。すぐ追つ歸して下さい」

本間「何ですと、お子はないと仰しやるのですか」

貴婦「さうです」

本間「すると、あの男は隨分粗忽なことを申したものです。早速追つ歸しませう」

貴婦はさすがに思案の體になりながら、

○物越—何か物を隔てにしこれに身を隠して、その陰から向ふを覗き込む料とするもの。

○不便—あはれ。氣の毒。

ツレ「暫く。都の者と聞けばなつかしう候間。そと一目見申したく候

本間「さらば物越より御覽候へ

二人立ち、本間扇を開き、物の隔ての心にて、ツレに扇より覗かしめ、

本間「あれなる人の事にて候。（ツレしをる）あら不思議や。御子息にてはなき由仰せられ候が。何とて御落涙候ぞ（扇を直す）

ツレ「御不審尤もにて候。かの者の親も我等如きの流人にて候はむが。配所を聞き違へ來りたるかと。かの者の心中不便に存じ。さて落涙仕りて候

本間「さあらば追つ歸し申し候べし

ツレ「急いで御歸し候へ

本間「心得申し候

ワキ・子方脇座に立ち寄る。本間狂言座へ出で、

資朝「一寸お待ち下さい、都の者と聞くと、なつかしく思はれるので、そつと一目見たいのですが」

本間「それならば、物越から御覽なさい」

本間、物の隔てから梅若を資朝卿に見せ、

本間「あそこにゐる人のことです」

資朝わが子を見て思はず涙をこぼす。本間これを不審に思つて、

本間「これは不思議だ。御子息ではないと仰しやつたのに、どうしてお泣きになるのです」

資朝「御不審は御尤もです。あの子の親も私と同樣流人となつてゐるのでせうか、その流された所を聞きちがへて來たのかと思ふと、あの子の心根がかわいさうに思はれて、それで涙を落したのです」

本間「やはりお子でないのならば、追つ歸しませう」

資朝「すぐ歸して下さい」

本間「承知しました」

[illegible]

○やはか—いかでか。どうして。
○言語道斷—いひやうもなく呆れ果てたこと。
○弓矢八幡—武士が武の神八幡大菩薩と祖先神とを證人とし、これに背けば神罰を蒙ることを覺悟して誓ふ詞。
○御座なき上は候—御子がない以上は致し方がない。
○近頃—近頃にない。甚しい。
○一向に—全く。
○あら笑止—ああ困つたことよ。

本間「最前の客僧はいづくに渡り候ぞ
ツレ「これに候
本間「仰せの通りを資朝の卿に申して候へば、總じて資朝の卿に御子は御座なき由仰せられ候。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ
ツレ「あら不思議や。某が申しつる通り仰せ候はば、やはかさやうには仰せられ候まじ
本間「言語道斷。かかる口惜しき事を承り候ものかな。弓矢八幡の神も御照覧あれ。慥に申して候。その上資朝の卿に御子は御座なき上は候。近頃聊爾なる事を承り候ものかな。この上は某は一向に存ずまじく候(といひてくつろぐ)
ツレ「なうなう暫く。(本間の姿を見失ひて)ここあら笑止や。(子方に)いかに梅若殿。唯今本間が申しつる事を聞し召されて候か。思ひもよらぬ御事にて候

本間「先程の山伏はどこにお出でです」
ツレ「こゝにゐます」
本間「あなたの仰しやつた通りを資朝卿にお傳へしたところ、資朝卿には全くお子様がないとの事です。どうしてこのやうな粗忽なことを仰しやるのです」
ツレ「これは不思議だ。自分が申した通りに仰しやれば、どうしてもそのやうに仰しやる筈がないのです」
本間「これは怪しからぬ。殘念な事を聞くものだ。神に誓つて僞りは申さぬ。委しくお傳へしたのです。その上資朝卿がお子様がないといはれる以上、是非がないことです。あなたは實に粗忽なことをいふ人だ。もはや自分は全く知らぬ」(腹を立てて立去る。)
ツレ「もしもし一寸お待ち下さい。(本間の姿は見えない)さあ困つた。(梅若に)梅若殿、今本間が申したことをお聞きになりましたか。實に思ひもよらぬ事です」

○かひも渚の―効もなきを渚にいひかけた。
○かたし貝―二枚貝の貝の片方ばかりになつてゐるもの。逢はぬの序とした。
○思ひ子―愛する子。悲しく思ひといひかけた。
○なかなか―却つて。
○思ふ心―子の爲めを思ふ親心。
○一世とかねたる―親子の緣は現世だけのもの、一世限りのものであると、豫ねていはれてゐる。
○なくや涙に―逢ふ事も無くを泣くにいひかけた。
○見みえぬ―見たり、見せたりしない。
○立ち添ひながら―雲霞と親子と兩方にかゝる。
【四】

子方「悲しやな遥々尋ね下りたる。かひも渚のかたし貝。あはぬ思ひを如何にせん
ツレ「われも戀しく思ひ子を。最期に見たくは思へども。わが子と名のらば敵とて。もしや命を失はれんと。思へば他人と言ひつるこそ。なかなか思ふ心なれ
子方「一世とかねたるこの世にだに。添ひも果てざる親子の中
ツレ「ましてやいはん後の世の
と別々に慕ひ、
ツレ子方「契りもさぞな逢ふ事も。なくや涙にかき曇り
地「姿見みえぬ親と子の。隔ての雲霞。立ち添ひながらもげに逢はぬ事ぞ悲しき
【四】
地ロンギ「今日御最期に定まれば。今日御最期に定

梅若「あゝ悲しい、遥々と遠い所を尋ねて來た甲斐もなく、お父上にお會ひ出來ないとは、まあどうしよう」
資朝はまた資朝で、
資朝「自分も戀しいと思つてゐるいとし子に、この最期の際に一目會ひたいとは思ふのだが、わが子と名乘つたならば、敵の一類として、もしやあの子をも殺されてしまひはしないかと案じられるので、それで他人だといつたのだが、これが却つてほんとの親心といふものだ(ト歎く)
梅若「昔から「親子の緣は一世」といはれてゐるのに、その一世限りの現世でさへ添ひ遂げることが出來ないとは、何といふ悲しい親子の間柄であらう」
資朝「現世でさへ逢ふことが出來ないのだから、まして後世ではさぞかし逢ふことは出來ないであらう」
梅若「このやうな薄い緣では、さぞかしもう逢ふことが出來ないであらう」
と父子別々に、しかし同じ心で、
悲しみに泣いて、涙に眼もくもり、僅かの隔てが雲霞のやうな妨げとなつて、すぐそばにゐながらも、親子互に姿を見せ合ふことが出來ず、逢へないでゐるといふのは、實に悲しいことである。
【四】
やがて資朝卿の斬らるべき日となり、
地「最早、今日が資朝卿の御最期ときまつ

○期したる―豫期した、覺悟した。

○肝消え―心の甚しく亂れること。

○御首の座敷―首を斬られるものの坐る座席。太平記に「五月二十九日の暮程に資朝卿を牢より出し奉りて、『…夜に入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、爰より十町許ある河原へ出し奉り、輿舁き据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き給ふ』」

まれば。痛はしながら力なく。武士輿に乘せ申し、濱の上野に急ぐなり

と、ワキヅレ輿舁二人、着附厚板・白大口・腰帶の裝束にて、輿の作物を持ち出し、ツレその間に立ちて刑場に赴く心、

ツレ「かねて期したる事なれば。惜しき命にあらざれど。さすが最期の道なれば心凄き氣色かな

子方「梅若父の御最期と。聞くより目くれ肝消え。起きつ轉びつ泣く泣くお輿の跡につきて行く

と子方・ワキ、ツレの後に隨ひ、

地「お輿を早め行く程に。濱の上野も近くなる

ツレ「波路ただよふ磯千鳥

ワキ「沖の鷗も音を添へてあはれさや增さるらん

と囃子を大ノリし、

地「御首の座敷これなりと。輿よりおろし申せば。

資朝「敷皮の。上に直らせ給へば。武士やがて立

たので、お氣の毒ながら致し方もなく、武士が輿にお乘せして、濱の上手へ急いでお連れするのだ」

と資朝卿を刑場へ連れて行く。

資朝「前から覺悟してゐた事であるから、命を惜しいとも思はないが、さすがこれが最期の道だと思へば、何となくもの凄じい感じがすることだ」

梅若「この梅若も、父上の御最期と聞くや、目もくらみ心も亂れて、正しく歩くことも出來ず、起きたりころんだりしながら、泣きながらお輿の跡からついて行くのだ」

本間「お輿を急がせて行くうちに、もはや濱の上手に近くなつた」

資朝「波には磯千鳥が漂うてゐる……」

本間「磯千鳥も沖の鷗も自分達と音を合はせて鳴き、一層あはれを催させることだ」

とそれぞれわが心持を獨言のやうにいつてゐるうちに刑場へ着いた態で、

本間「こゝがお首を斬る所です」

と輿からお下しすると、資朝卿は敷皮の上にお坐りになる。武士は直にその

○御十念―南無阿彌陀佛を十度稱へること。

【五】

○面目もなき―人に合はせる顔がない。きまりの悪い、恥かしいこと。

○かの者を助け給ひ―太平記では生前親子對面してゐないから、この依賴もない。

ち寄り。御後に立ちまはり御十念と勸めけり御十念と勸めけり

と刑場に着きたる心にて、輿舁は引き、ツレは正面先に坐し、本間は太刀を拔きてその後に立つ。

【五】

子方「なう自らこそこれまで參りて候へ

とツレの傍へ驅け寄る。ツレ子方に向ひ、

ツレ「何とてこれまでは下りたるぞ。最期は今にてはなきぞかたはらへ忍び候へ。（ワキに）いかに客僧まづ其方へ召され候へ

子方ワキに伴はれ脇正面に下り坐す。

ツレ（本間に）「いかに本間殿へ申し候。近頃面目もなき申し事にて候へども。眞は某が子にて候。この上は本間殿を賴み申し候。未だ幼き者の事にて候程に。あはれ御心得を以てかの者を助け給ひ。都へ送り給ひ候へかし

本間「かかる痛はしき事こそ候はね。我等も始め

後に立ち寄つて、最後の十度の念佛をお勸めした。

梅若はこれまで父の後について來たのであるが、父の姿を見るや走り出て、

【五】

梅若「お父上、私がこゝまで參つたのでございます」

資朝「どうしてこゝまで下つて來つたのだ。父の最期は今ではないのだぞ。あちらへ行つて隱れてお出で。（師に）山伏どのとにかくこの子をあちらへ連れて行つて下さい」

梅若は師阿闍梨に連れられて退く。

資朝「本間殿、非常にお恥かしい話ですが、あれは實は私の子です。この上はたゞただ本間殿のお情をお賴りにします。まだ小さい子の事ですから、どうかあなたのお心で、あの子を助けて都へ送り歸して下さい」

本間「このやうなお氣の毒なことはありま

〇明けなば―明日夜が明けたならば。
〇早船―艪を多くとりつけた船足の早い船。
〇御知見―御照覽と同じ意
〇あへなく―張合なく、はかなく。太平記に「切手後に廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろは猶坐せるが如し」

よりさやうに見申して候へども。深く御隠し候程に申さず候。梅若殿の御事は。明けなば早船を拵へ。都へ送りつけ申し候べし。御心安く思し召され候へ

ツレ「これは眞にて候か

本間「なかなかの事。弓矢八幡も御知見あれ。都へ送りつけ申さうずるにて候

ツレ「さてはこの上に思ひ置く事もなく候。はやはや首を打ち給へと

地「西に向ひて手を合はせ。西に向ひて手を合はせ。南無阿彌陀佛と高らかに。稱へ給へばあへなく御首は前に。落ちにけり御首は前に落ちにけり

ト、ツレは斬られたる心にて切戸より引く。
後見、ツレの死骸の心にて熨斗目と掛絡とを正面先に出す。

【六】

本間「いかに客僧へ申し候。資朝の卿の御事は。囚

せん。私も始めからさうだと思つたのですが、深くお隠しになるので、何とも申さなかつたのです。梅若殿のことは私がお引受けして、明日夜が明けたならば、早船の仕度をして、都へお送りしませう。お安心なされませ」

資朝「それはほんとですか」

本間「さうです、神に誓つて確かに、都へお送り致しませう」

資朝「かう伺つた上は、もはや何も思ひ残す事はありません。早く首を打つて下さい」

と西に向つて手を合はせ『南無阿彌陀佛』と聲高らかにお稱へになるや否や、資朝卿のお首は果敢なくも前に落ちてしまつたのである。

【六】

本間「山伏殿、資朝卿の方は罪人だから是

○力なき事―致し方のないこと。

○御死骸を賜はり候へ―太平記に「この程常に法談なんどし給ひける僧來りて、葬禮如レ形取營み、空しき骨を拾うて、阿新に奉りければ、阿新是を一目見て、取る手も撓く倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、替れる白骨を見る事よと、泣き悲しむも理也、阿新未だ幼稚なれ共、けなげなる所存ありければ、父の遺骨を唯一人召仕ひける中間に持たせて、先我よりさきに高野山に參りて、奥の院とかやに納めよとて、都へ歸し上せ、我身は勞る由にて、尙本間が館にぞ留りける。」是は本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故也―

人にて御座候間力なき事にて候。梅若子の御事は。御遺言の如く明日御船を申しつけ。都へ送り申し候べし。御心安く思し召され候へ

ワキ「懇に承りありがたう候。明日都へ御送り頼み申し候。又御死骸を賜はり候へ孝養申したう候

本間「なかなかの事御心靜かに御孝養候へ。我等は私宅に歸り候べし。梅若子を御供あつて。やがて御出であらうずるにて候

ワキ「心得申し候

ワキ、熨斗目・掛絡を大切にとり納め、子方と共にくつろぐ。

本間「いかに面々聞き候へ。この間の番にさぞくたびれ候らん。今夜は皆々私宅に歸り休み候へ。某も臥所に入つて心靜かに夜を明かさうずるにてあるぞ。その分心得候へ

狂言「畏つて候。（名乘座へ出で）皆々承り候へ。この程囚人の番

非もないが、梅若君の方は父君の御遺言の通り明日お舟をいひつけて、都へお送りしませう。御安心なされませ」

師「御親切ありがたう。明日都へお送り下さるやうお願ひ致します。それから資朝卿の御死骸を私の方へ下さい、御回向をしたいと思ひますから」

本間「よろしい、ゆつくりと御回向なされ。私はお先に自宅へ歸りますが、やがて梅若君をお連れしてお出で下さい」

師「ありがたう」

（と師阿闍梨は資朝卿の死骸をとり片づける。本間は部下の者達に、）

本間「皆の者ども、この間中は囚人の番で嘸くたびれたであらう。今夜は皆自分の家へ歸つて休むがよからう。自分も寢床へ入つて、ゆつくり夜を明かさうと思ふのだ」

（といつて自宅へ歸る。師阿闍梨と梅若もやがて本間の宅へ來て、）

にてくたびれ申すべき間。わが家に歸り休み候へとの御事にて候間。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

ワキ・子方、舞臺に出で、

【七】

ワキ「いかに梅若子へ申し候。これは本間殿の館にて候。今夜は御心靜かに御休み候へ。明けなば船を仕立て送り申すべき由申され候。御心安く思し召され候へ

子方「いかに申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ

子方「本間を討つて賜はり候へ

ワキ「ああ暫く候。まづ御心を靜めて聞し召され候へ。本間は一旦囚人を預かり申したるまでにてこそ候へ。眞の親の敵は。相摸の守高時こそ敵にて御座候へ。それは都へ御上り候ひて。自然の時節を御待ち候へ

【七】

師「梅若君、こゝが本間殿の館です。今夜はゆつくりお休みなされ。夜が明けたならば、船を仕立てて送つてくれるとの事ですから、御安心なされませ」

梅若「阿闍梨殿」

師「何です」

梅若「本間を討つて下さい」

師「あゝ一寸お待ち下さい、まづお氣を靜めてお聞き下さい、本間はたゞ一時罪人としてお預かりしただけです。親御のほんとの敵は、相摸守高時です。そしてその敵は都へお上りになつた上で、よい機會をお待ちなされ」

【七】

○相摸の守高時―北條貞時の子で、鎌倉幕府の執權。資朝等はその横暴を憎んで討滅を企て、却つてその爲に誅せられたのである。

○けなげなる—かひがひしい。

子方「いや日の前にて討ちたるこそ親の敵にて候へ

ツキ「げにげに仰せは尤もにて候へども、この島國にて人を討つては。さて御命をば何と召され候べき。唯思し召し御止まり候へ

子方「たとひ命は失ふとも。討たでは叶ひ候まじ

ツキ「何と命は捨つるとも。討たでは叶ふまじきと仰せ候か。かかるけなげなる事を仰せ候ものかな。この上は討つて參らせ候べし。しかもかの者申し候は。内の者どもこの程の番にくたびれてぞあるらん、まづまづ私宅に歸れ。その身も臥所に入つて夜を明かさうずる由申し候ひし程に。討つべき夜には日本一の夜にて候、御本望にて候程に。一の刀をば梅若子遊ばされ候へ。二の刀をばこの客僧仕るべし、もし又かの者起

梅若「いや目の前で討つたのが、親の敵です」

帥「いかにも御尤もな仰せですが、この島國で人を討つては、御自分のお命も危いのです。是非おあきらめなさい」

梅若「たとひ自分の命を亡くしても、親の敵を討たずにはゐられません」

帥「何といはれる、命を捨てても敵を討たずには置かぬと仰しやるのですか。これは實に殊勝なことです。それでは討つてあげませう。都合のよいことには、先程あの男が家來の者たちに『この間中の見張り番でくたびれたであらう、まづわが家へ歸れ、自分も寢床に入つて、ゆつくり夜を明かさう』と申しましたから、敵を討つのには第一等都合のよい夜です。仇討の本望をお遂げになるのだから、最初の斬込は梅若君あなたがなさいませ、第二番にはこの山伏が斬り込みませう。もし運惡くあの男が起きてゐて、討ち損つたならば、人の手にかゝるまでもなく、あなたと刺し違へて死にませう。さあこち

○夏蟲の身を焦がすべき―太平記に、阿新が親の敵を討たうと忍び入つたが、本間入道父子の居所が知れないので、父を斬つた本間三郎に狙ひ寄つた事を記して、「折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲のあまた明障子に取附きたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲あまた内へ入つて、やがて燈を打ち消しぬ」とあるを引いた。明障子は紙張りの障子をいふ。

きあはせ。討ち損ずるものならば。人手にはかかるまじ。梅若子と刺し違へ申し候べし。此方へ御入り候へ。（脇座へ向き）あら笑止や。未だ火が消えず候はいかに。何の爲にか夏蟲の。身を焦がすべき火を取らんと

子方「明り障子に飛びつきたり

ツレ「これこそ消すべき便りなれと。障子を細目に開けければ（と形を示し）

子方「蟲は悦び内に入り（と眞中へ行き）

ツレ「すは火はばつと消えたるは

地「燈火ともに敵の命今こそ消えて失すべけれ。密かに狙ひ寄り。密かに狙ひ寄り。守り刀を拔き持つて。本間の三郎が。胸のあたりに乗りかかり。三刀まで刺し徹し。縁を飛び下り逃げければ。追手は聲々に。留めよ留めよと追つかく

らへお出でなさい」

（と本間の寢所に近づいた心。）

師「あゝ困つた。まだ火が消えずに燈つてゐるわ。そして、何の爲にか、夏蟲が身を焦がすべき火を取らうとして……」

梅若「あゝ、あのやうに紙障子に飛びついてゐる」

師「丁度この夏蟲が火を消すのに都合のよいものだ」

といつて、障子を細目に開けると、

梅若「おゝ蟲が喜んで内へ飛び入り……」

師「そらつ。火がぱつと消えたわ」

梅若「この燈火と同じやうに、敵の命も今消えてしまふのだ」

と、そつと敵へ狙ひ寄り、守り刀を拔いて、本間三郎の胸のあたりに乗りかかり、三刀まで刺し徹して、縁から飛び下りて逃げて行つたので、追手の者は「彼奴を引留めよ、引捕へよ」と聲々に叫びたから、追つ駈けた。

る

子方・ワキ、太刀を抜きて本間を殺し、逃げ去る心にて後見座にくつろぐ。

【四】 早鼓にて、狂言早打、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帯・扇・小刀の装束にて杖を突き、名乗座に駆け出で、

早打「なう忙しや／＼。さても／＼言語道斷なる事かな。總じて物には油斷を致すまじき事にて候。都東山椰の木の坊に師の阿闍梨と申す山伏。資朝の卿の御子息を同道致し。本間殿に對面申し。その後資朝の卿討たれ給ふを。本間殿を親の敵と思ひ。山伏と兩人して易々と本間殿を討ち申して候。誠に幼き人は親の敵と思はるゝも尤もにて候へども。御身の敵は相摸の守高時とこそ申せ。あれは敵ではなきと御斷りをば得言はぬ客僧が。近頃憎う御座候。總じてこの島は出入自由にならぬ所なれば。遠くは行くまい。急いで追驅けう。やう／＼思案をするに。あの本間殿さへ討ち取る程の山伏なれば。なか／＼某一人にては心許ない。大勢引き連れて追驅けう。皆々出合ひ候へ／＼

といひて引く。

【八】 ワキ・子方、船着場の心にて脇座へ行く。

ワキヅレ船頭、着附段熨斗目・素袍上下・腰帯・扇・小刀の装束にて櫂棹を持ちて出で、

船頭「この程風を待ち候處に。日本一の追風が吹き候程に。船を出ださばやと存じ候

ワキ「はや拔群にのび來りて候。又あれに出船の

【四】

○心許ない―氣がかりである。

【八】

○拔群―すぐれて、非常に、

○のび來り―逃げのびて來た。

○あれに出船の便―太平記

【八】

第二段

舞臺は佐渡の船着場、ワキヅレ船頭、船出の仕度をする態で登場。

船頭「先程から風を待つてゐたところ、この上もないよい追風が吹いて來たから、船を出しませう」

この時に岸を離れようとする。梅若と師阿闍梨は漸くにして追手を逃れてこゝまで來た心で、

僧「もはや随分遠くに逃げのびました。お

に「年老いたる山伏一人行合ひたり。此兒（阿新）を見て、痛はしくや思ひけん…湊に商人船共多く候へば乘せ奉りて、越後越中の方まで送り附けまゐらすべしと云ひて……程なく湊にぞ行き着きける。夜明けて便船やあると尋ねけるに、…遙の澳に乘りうかべたる大船、順風になりぬと悦びて、檣を立て苫をまく。山伏手を上げて、其船是へ寄せてたび給へ、便船申さんと呼ばはりけれども、曾て耳に聞入れず。船人聲を帆に上げて、湊の外に漕ぎ出す。山伏大に腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、澳行く船に立向つて、いらたか数珠をさら〳〵と押揉んで、」船を祈り戻し、難なくこゝを船出したとある。

候。あの船に乘せ申さうずるにて候。（船頭に向ひ）なうその船に便船申さう

船頭「御覽候へこれは柱を立て。帆を引きたる船にて候程に。未だ出でぬ船に仰せ候へ

ツキ「これは親の敵を討つて。跡より追手のかかる者にて候へば。平に乘せて給はり候へ

船頭「殊更さやうの科人ならば。なほこの船には叶ひ候まじ

ツキ「よし科人はこの客僧。よし客僧をば乘せずとも。この稚兒ひとり乘せてたべ

船頭「稚兒も法師も知らぬとて。なほこの船を押して行く

ツキ「ああその船寄せずは悔しき事のあるべきぞ

船頭「何の悔しくあるべきぞ。船棹だにも忘るる

おあそこに今漕ぎ出る船があります。あの船にお乘せしませう。（船頭に）おういおい、その船に乘せて貰ひたい」

船頭「御覽なさい、この船はもはや帆柱を立て帆もあげてしまつたのだから、まだ岸を出ない船に仰しやい」

ツキ「自分たちは親の敵を討つて來た者で、跡から追手が追ひかけてくるのだから、是非乘せて下さい」

船頭「そのやうな科人ならば、なほ更のことこの船に乘せることは出來ません」

ツキ「いやその科人はこの山伏だ。たとひ山伏を乘せてくれないにしても、この兒だけ乘せて下さい」

船頭「兒も法師も、自分は構はない」といつて、なほもこの船を沖へ押し出して行く。

ツキ「おいその船をこちらへ寄せたければ、後悔することが出來ようぞ」

船頭「何を後悔することがあらう。よい風

○風に出船の習ひ―順風が吹き出せば、何を置いても直に漕ぎ出るのが船の習ひである。

○こちの風―こちは東風。

○向うて西になさうぞえい―反對に西風にしてやるぞよ。「えい」は力を入れる爲に添へた詞。

【九】

は。風に出船の習ひなり

ワキ「さてこの風は

船頭「こちの風

ワキ「向うて西になさうぞえい

船頭「あら忌はしや聞かじとて。なほこの船を押して行く

ワキ『暫しといへど

船頭『留めもせず

ワキ『暫しといへど

船頭『音もせず

地『船は波間に遠ざかれば追手は跡に近づきたり

船頭はこの間に船を次第に押し出したる心にて橋懸へ行き立つ。

【九】

ワキ「あら笑止や。頼みたる船は遠ざかる。追手は跡に近づく。さて御命をば何と仕り候べき。某

が出れば、何を措いても、櫂棹をさへ忘れても、船出するのが、自分達の習はしなのだ」

師「ところで、そのよいといふこの風は……」

船頭「東風だ」

師「では、これを反對の西風にしてやるぞ」

船頭「えゝ、縁起の悪い、そんなことは耳に聞くまい」

と、なほ船を沖へ押し出して行く。

師「暫く待つてくれ」

といふが、船頭は留めもせず、また

師「暫く待つてくれ」

といふが、返事もせず、船は次第に沖合へ遠ざかつて行く、追手は愈〻近づいて來る。

【九】

師「あゝ困つたことだ。頼みにした船は遠ざかつて行く、追手は後へ近づいて來る。これではお命もどうなることやら。（三思

きつと案じ出したる事の候（とどつかと坐して）われこの年月三熊野の權現へ歩みを運び候も、かやうの爲にてこそ候へ。海上に三所權現を勸請申し。幷に不動明王の索にかけて。あの船を祈り戻さうずるにて候。（船頭に）やあやあその船戻せとこそ。寄せずは祈り戻さうずるぞ

船頭 なにこの船を祈り戻さうとや

ツレ なかなかの事

船頭 山伏は物の怪などをこそ祈れ。船祈つたる山伏は未だ聞かぬよ

ツレ いやいかにいふとも悔まうぞ。悔むな男

地 台嶺の雲を凌ぎ、台嶺の雲を凌ぎ年行の。功を積むこと一千餘箇日しばしば身命を捨て熊野、權現に頼みをかけば。などかしるしのなかるべき。一、矜羯羅二制多伽、三に倶利迦羅七大

○三熊野—紀伊國にある新宮・本宮・那智の三社。山伏道の最も尊信する所である。

○三所權現—前揭の熊野三社。

○勸請—神佛の靈を移し迎へること。

○不動明王—山伏の尊信する五大明王中の中央尊で、大日如來が一切の惡魔を降伏せんがために變化して、忿怒身を現したもの。

○索—不動明王が左手に持ち、惡魔を束縛することを標示した繩。

○物の怪—生靈・死靈などで、人に禍ひをなすもの。

○台嶺—天台山、比叡山をいふ。

○年行—年來の修行。

○矜羯羅—八大童子の一で不動明王の脇士。觀音の化身といふ。

○制多伽—同じく八大童子の一。

○倶利迦羅—大日如來の因位三毒煩惱の形で、行者のために現す忿怒身。

○七大—七大童子といふ名稱は見當らない。八大金剛童子を引き出す料としただけであらう。

實にさうだ、旨く考へついたことがある。自分がこの永い年月三熊野權現に參詣したのも、かういふ時の役に立てようが爲だ。海上に三熊野權現をお迎へ申し、あの船を祈り戻しませう。（船頭に）おういおい、その船を戻せといふに。戻さなければ祈り戻すぞ」

船頭「なに、この船を祈り戻すといふのか」

山伏「さうだ」

船頭「山伏は生靈死靈などを祈り伏せるものだが、まだ船を祈り戻したといふ山伏は聞いたことがないぞ」

山伏「いや何といはうとも、後で悔むまいぞ、この男め。……雲を凌ぐばかりの山に入り、一千餘箇日の長い間修行の功を積み、その間度々命をも失ふ思ひをして、熊野權現を信仰したのであるから、その效驗のない筈はない。——

「一に矜羯羅、二に制多伽、三に倶利迦羅、その外不動明王の御使者である八

八大金剛童子。東方

とワキ烈しく祈る。船頭次第に祈り戻されたる心に切戸より入る。

【一〇】

早笛にて、後ジテ熊野權現、面小癋見・赤頭・色鉢卷・唐冠・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて出で、

地ロンギ「不思議やこちの風變り。西吹く風となる事はいかなる謂れなるらん

後ジテ「本宮證誠殿。阿彌陀如來の誓ひにて。西吹く風となし給ひて船を留め給へり

地「さてまた西の風も止み。東風吹く風となることは

シテ「新宮藥師如來の。淨瑠璃淨土は東にて。東風吹く風となし給ふ

地「さてまた飛瀧權現は

シテ「波路に飛んで影向す

地「瀧本の千手觀音は

大金剛童子様、なほまた東方には降三世明王……」——」と必死になつて祈る。祈られて船は次第に岸へ戻つてくる。

【一〇】

後ジテ熊野權現登場。

師「これは不思議だ。今までの東風が變つて、西風が吹いてくるのは、どうしたわけであらう」

權現「熊野本宮證誠殿の御本地阿彌陀如來の御慈悲によつて、極樂淨土の方角である西方へ吹く風として、船をお留めになつたのである」

師「それからまた、(船に乘ると)西風は止んで、追風の東風となつたのは……」

權現「新宮の御本地藥師如來の御在所たる淨瑠璃世界は東方なので、東風となされたのである」

師「それからまた、那智の飛瀧權現は……」

權現「お名前の通り波路を飛んでお現れになつたのだ」

師「同じく、瀧本の千手觀音は……」

○八大金剛童子—不動明王の脇士である八童子即ち、慧光菩薩、慧喜菩薩、阿耨達菩薩、指德菩薩、烏俱婆誐、清淨比丘、矜羯羅、制多伽をいふ。

○東方—五大明王を呼ばうとして、東方降三世明王といひかけたのである。

【一〇】

○本宮證誠殿—熊野本宮の神殿の名。神社考に「本宮證誠殿本地阿彌陀、新宮藥師、那智飛瀧權現本地千手觀音」

○西吹く風と—熊野本宮の本地阿彌陀如來の在所は西方淨土であるから。

○東風吹く風と—新宮の本地藥師如來は東方淨瑠璃國の教主であるから。

○飛瀧權現—那智權現。

○瀧本の千手觀音—飛瀧權現の本地であるのを、別物のやうに扱つた。

シテ『二十八部衆の。風變船を早めたり

地』さて飛行夜叉は。不動明王の。索の繩を船につけて。萬里の蒼波を片時が程に。若狹の浦に引きつけて。それより都に歸し給ふ。げにありがたき三熊野の。げにありがたき三熊野の。誓ひの末こそ久しけれ

とシテ、子方・ワキを助くる心にて舞ひ、仕手柱際にて留拍子を踏む。

權現の二十八部衆を率ゐて、順風に乘る船を愈〻お早めになるのだ――なほこの外、飛行夜叉は不動明王の索の繩を船につけて、萬里を距てた大海を、瞬く間に漕ぎ渡して、早くも若狹の浦に引きつけ、それから都にお歸しになつた。實に三熊野權現のありがたい御慈悲は永へに變りがないのである。

○二十八部衆―觀世音菩薩に屬待する、婆藪仙人、大辨功德天、那羅延堅固、密迹金剛、大梵天王、帝釋天王、摩醯首羅王、東方天、金色孔雀天、增長天、毗沙門天、廣目天、摩和羅女、滿善車王、神母天、五部淨、難陀龍王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅王、阿修羅王、金大王、乾闥婆王、沙迦羅王、金毗羅王、滿仙王、散脂大將、畢婆迦羅王の二十八神。

〔考異〕

諸流（寶生）

前ッレ千生賣僧を開は前ジテとナ、【一〇】地「不思議やこちの風……」の前に、剛「抑もわが朝に靈神跡を垂れ給ひて。威光も神德いまだいなりと申せども。熊野權現の。誓ひぞ勝れたりける」を加ふ。その他詞の異同は少くない。

古本（元和八年本）

【一】太田これは（元加様に候者は）——本間の三郎（元何某）にて候……元弘の合戰（元亂）に……色々痛はり申す（元ナシ）處に、昨日鎌倉（元御）より 資朝の卿は（元ナシ）——囚人にて候間急ぎ（元御座候程に）……候程に（元間）痛はしながら……誅し申し候（元ナシ）……有ト候て（元いかに誰か有る、トて御前に候。本間昨日都より飛脚立て。資朝卿を急ぎ誅し申せとの御事にて候間。明日濱のうは野にて誅し申べし。今夜計の事なれば。いかにも番をかたく申付候へ。又囚人のゆかりに對面は禁制にて有ぞ。其分心得候へ。トて畏て候）

【二】……[illegible]に候者は（元是は）……山伏（元客僧）にて候……御座候御方（元渡り候權き人）は……ホきる子細あって……御座候由を聞

召し(元資朝卿は遠流の身と成給ひ。佐渡の島に御座候を)……餘りに御心中……我等(元頼れ申都を忍ひ出て。唯今)……ワキ「急ぎ候程
に……此方へ御入り候へ(元祿本にあり。以下ワキ・トモの掛合元祿本にあるもこゝには省略す)本間「都よりの……ワキ「(元さん候)これに
候。(元本間「是は何の爲の御下向にて候そ)。唯今申し入れ……由仰せ候程に(元にて愚僧を御頼候程に)遙々……本間「委細承り候(元扨は資
朝卿の御子息にて御座候か。是迄遙々の御出神妙に存候)總じて幼き人の(元ナシ)……申し候べし(元對面させ申さふするにて候)暫く…
：ワキ「(元心得申候) さらばこれに待ち申し候べし。(元本間「いかに資朝卿へ申候。本間か參りて候)　【三】ツレ(元はシテ)。本間「唯今…
：鎌倉(元都)より……ツレ「唯今も……人(元諸人)に……あつぱれとう斬られればやと望みし事(元よく誅せられ度と申し事)……本間「又(元
歎きの中の)御悦びあるべき事(元ナシ)の候……山伏の御子息を作ひ (元十二三計成稚き人をともなひ申され。是は資朝卿の御子息梅若
子にて御座候か。今一度御對面有度とて)……ツレ「これは……以前も(元日外)……申す(元つる)如く某は總じて(元男女に)子を持たぬ
……ツレ「暫く……本間「さらば(元去りなから都より遙々來りたる心中餘りに不便に候程に)物越より御覽候へ。(元シテ「實々都の者は床敷
候程に。さらはそと見らするにて候)。本間「あれなる人の事にて候(元あれ〳〵御覽候へ。シテ「されはこそ思ひもよらす。一向にしらぬ者
にて候急いておつかへされ候へ)あら不思議や……配所を聞き遣へ……かの者の心中(元親の配所を尋急。稚き者の遙々來りたる心ざし)
不便に……さて(元發へす)落涙……本間「さあらば追つ歸し申し候べし(元扨は御子息にては御座なく候か。シテ「中々の事某か子にてはな
く候)。ツレ「急いで御歸し候へ(元追歸して給り候へ)。本間「心得申し(元て)候。(元頓て追歸し申さうするにて候)……本間「仰せの通りを
……總じて資朝の卿に御子は(元御子息にては)……ワキ「あら不思議や……仰せ候はば(元なふ御思案あつても御覽候へ。御子にてもなき
人の遙々是迄下り給ふへきか。天晴客僧か申通を資朝卿へ御申し候はは)……仰せられ候まじ。(元本間「扨は資朝卿へ申さぬと思召候か。
ツレ「左樣に存候)。本間「言語道斷……御照覽あれ(元照覽候へ)……申して候(元へ共)……御子は(元御子息の)……ツレ「ならなら……あら
笑止や(元早御内へ御入候はいかに)。いかに(元ナシ)梅若殿唯今……御事にて候(元是は何と仕候へき)　【四】地「……急ぐなり
(元きけり)……かねて……命にあらざれど(元ねとも)……其御首の……武士やがて立ち寄り(元太刀を拔持)……　【五】子方「な
う自ら……參りて候へ(元荒悲しや我をもつれて御入候へ)ツレ「何とてこれまで……忍び候へ(元ナシ)……まづ(元この稚き者を)其方へ
召され候へ(元ワキ「畏つて候)。ツレ「いかに……申し候(元すへき事の候。本間「何事にて候ぞ)近頃……この上は本間殿を頼み申し候(元ナ
シ)(元彼者の事は)未だ幼き……あはれ(元ナシ)かの者を助け……候べし(元扶て給り候へかし)本間「かかる……申さず候。(元御心安く思

し召れ候へ)梅若殿の……本間「なかなか……御知見(元照覽)あれ……ワキ「(元荒有難や候)さてはこの上(元世)に……【六】本間「いか
に……の前に、(元子「荒悲しや我をもつれて御入候へ」ワキ「言語道斷かゝるあへなき事社候はね。去ながら御存生の中に御對面候事。
返々も御本望にて候)を加ふ。本間「いかに……送り申し候べし(元今夜は某が館へ御出あつて)御心安く思召され候へ(元御休み候へ)。ワキ
「恕に……賜はり候へ(元ナシ)本間「なかなか……梅若子の御供あつて(元ナシ)……ワキ「心得申し候(元承候やかて御館へ參り候へし)
本間「いかに……今夜は(元ナシ)……【七】ワキ「ああ悄く候。まづ御心を靜めて聞召され候へ(元かゝる聊爾なる事を承り候物哉彼)本
間は……誠の(元御身の)親の……こそ(元誠の親の)敵にて……子方「いや日の前にて(元父を)討ち……敵にて候へ(元うたては叶ひ候ま
じ)。ワキ「げにげに……(元去ながら)この島國……ワキ「何と(元たとひ)命は……仰せ候か(元子「中々の事討て給り候へ」ワキ「)かかる
…刺し違へ申し候べし(元さうするにて候)子「心得申候」ワキ「此方へ……消えず候はいかに(元思ひ出したる事の候)何の爲にか……
地「燈火の……胸のあたり(元あいた)に……
【間】元祿本にはノカシ詞あり、こゝには略す。
【八】ワキ「はや拔群に……出船の候あの(元舟の見へ候此)船に……その(元あれなる)船に使船申さう(元なふ)。船頭「御覽候へこれは(元此
舟は)……帆を引きたる(元引はかりの)船にて……ワキ「これは親の敵を(元陸にて人を)討つて……船頭「殊更(元いやいや)……ワキ「よし
……よし(元ナシ)客僧をば……船頭(元いやいや)稚兒も法師も……ワキ「ああ(元ナシ)……あるべきぞ(元あらうするぞ)【九】ワキ「あら
笑止や……海上に三所權現を(元忝くも三熊野を海上に)し……寄せずば(元もとさすは明王のさつくにかけて)祈り戻さう……ワキ「いや
いかにいふとも悄まうぞ(元其船よせすして)悔むな……【一〇】地ロンギの前に、(元地「抑我朝に靈神跡をたれ給ひ。ハヽて。威光も
神德もまち〳〵なりと申せ共。熊野權現の誓ひぞ勝れ給へる)を加ふ。地「さて飛行……久しけれ(元めでたけれ)

竹生島

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】 脇能 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 醍醐帝臣下、**ワキツレ** 同從者（二人）、**前シテ** 漁翁（龍神）、**前ツレ** 女（辯才天）、**狂言** 社人、**後ツレ** 辯才天、**後シテ** 龍神

【所】 近江國 竹生島

【時】 醍醐帝御宇 三月中旬

【作者】 能本作者註文には作者不明とし、二百十番謠目錄には金春禪竹の作とす。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】 醍醐帝の朝臣が竹生島に參詣しようとして、琵琶湖畔へ來ると、漁翁が海士女を乘せて釣舟を漕いで來るのに出遭つた。朝臣はこれに便船を賴んで、湖畔の景色を賞したから、やがて竹生島に着き、漁翁に案内せられて、明神に參拜した。その時かの女も共に社前に參つたので、朝臣は「この島は女人禁制でたいか」と不審すると、二人は「辯才天は九生如來の御再誕で殊に女體の神であるか

ら、女人こそ參るべき所である」と答へて、女は社殿に入り、漁翁は水中に入つた。その夜、辯才天女が出現して舞を舞ひ、龍神もまた現れて、金銀珠玉をかの朝臣に贈り、衆生濟度國土守護の誓ひを述べた。

【出典】特に擧ぐべきほどのものはない。

【概評】本曲と同じく辯才天女の神德をのべたものに〔江島〕がある。兩曲を比較すると、〔江島〕は島が涌出して辯才天の垂跡するに至つた次第を詳述して豪快な感を與へ、これは湖畔の風光・島の景致を描寫して清爽な趣を示してゐる。兩曲それぞれ異なつた趣向を凝らしてゐるのであるが、前者があまりに冗漫で敍事的であるのに比べて、本曲の清淡で劇的である方が、やゝたち勝つて見える。

【一】○竹に生まるる鶯の—島の名に因んで出し、竹生島の序とした。鶯が竹に栖むことは、八雲御抄にも「鶯の巣はなべては竹なり」とある。○竹生島—近江國琵琶湖の北部にあり、湖中の大島。島に辯才天女を祀る。○延喜の聖代—延喜は醍醐天皇の年號。村上天皇の天暦年中とともに、常にわが國聖代の例として擧げ奉る。○竹生島の明神—島中に竹生島神社があり、霜速彦命の子淺井姫を祀る。但しここでは辯才天を指したのである。神社考に「昔行基菩薩來二此島一、神女現レ形逢二其基初建レ寺置二辯才天女像一……此島辯才天者、所謂南閻浮提中有二湖海一、湖海中有二水精輪山一、即天女所レ住

【一】後見、一畳臺を大小前に出し、上に宮の作物に引廻を掛けて置く。

次第の囃子にて、ワキ朝臣、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキ同様の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「竹に生まるる鶯の。竹に生まるる鶯の竹生島、詣で急がん

次第三返がへし濟みて、ワキは正面に向き、（ワキヅレは下に居り）

ワキ「抑もこれは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は。靈神にて御座候間。この度君に御暇を申し。唯今竹生島に參詣

【二】

前段

舞臺は初め京都で、ワキは醍醐帝の朝臣、ワキヅレの從臣を隨へて登場。

朝臣「鶯の生まれる竹に縁のある竹生島に參詣しよう」

上の次第に旅行の目的地をのべ、

朝臣「自分は醍醐天皇にお仕へ申してゐる臣下であるが、近江國竹生島の明神は靈驗のあらたかな神樣だから、今度帝からお暇を戴いて、これから竹生島に參詣するのです。

是曰二大辯才功徳天女一本地法身大士而好二音樂一故名二妙音天一垂二迹于此一因崇二竹生島大明神一。
○四の宮―山城國宇治郡山科村の一部。
○河原の宮居―四の宮、諸羽山の麓にある諸羽明神。
○末早き―河原の水が末早く走り流るといひかけて走井を呼び起す料とした。
○名も走井―有名なといふ意で名も走りといひ、走井にいひかけた。走井は吹き上げる水の意で、近江國大津と逢坂の關との間にある。
○曇らぬ御代に―水に映る月影の曇らないのを御代の明らかな意にいひかけた。
○逢坂の關の宮居―御代に逢ふといひかけた。逢坂は近江國滋賀郡にある。宮居は關の明神をいひ、鴨長明の無名抄に「會坂の關の明神と申すは、昔の蝉丸なり」とある。
○山越―京都北白河から志賀へ出る如意嶽の山越えの路をいふ。
○志賀の里―天智・弘文兩帝の都であつた、大津の北方の地。
○鳰の浦―琵琶湖畔、琵琶湖を古く鳰の海といつた。
【二】

仕り候

といひて、ツヂレ立上りワキと向合ひて、

ワキツレ上歌「四の宮や。河原の宮居末早き。河原の宮居末早き。名も走井の水の月。曇らぬ御代に、逢坂の關の宮居を伏し拜み。山越近き志賀の里。鳰の浦にも着きにけり鳰の浦にも着きにけり

「山越近き志賀の里」とワキは正面に向きて三四足出でまたもとへ歸り、鳰の浦に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。鳰の浦に着きて候。あれを見れば釣舟の來り候。暫く相待ち。便船を乞はばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【三】

後見、舟の作物を持ち出し脇正面に置く。

一聲の囃子にて、シテ漁翁、面笑尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・紫絓水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・色入唐織着流・扇の裝束にて舞臺に入り舟に乘り、ツレは眞中に立ち、シテはその後に立ちて棹を持ち、

と三人向き合つて、

勅使「四宮河原の明神を通り過ぎ、早くもあの有名な走井に來て、水に映る月影の曇りのないのを見ても、御政道の明らかな大御代を仰ぎまつり、逢坂に來ては關の明神を伏し拜み、山越をすると間もなく、琵琶湖畔、志賀の里に着いた」

といつてゐるうちに、志賀の里に着いた事で、琵琶湖畔に……

勅使「道を急いだので、思ひの外早く琵琶湖畔に着いた。あそこを見ると、釣舟がやつて來る。暫く待つてゐて、あれに乘せて貰ふことにしませう」

といつて舟の來るのを待つてゐる。

【三】

シテは漁翁の姿を装ひ、ツレは若い海女の姿を装つて、漁舟に竿を差し寄せ、舟に乘つて登場。舟を漕ぎながらあたりの景色を眺めて、

○彌生―三月の雅名。
○うらら―うらゝか。
○朝ぼらけ―朝開。夜のほの〴〵と明ける頃。
○憂き業となき―景色の面白さに漁業の辛いことをもうち忘れるとの意。
○うろくづ―魚。
○身一つを助けやせん―自分一人の生活を立てる助けにならうかと思つて。「數を盡して」に對して「一つ」といつたのである。
○わび人―はかなく貧しく世を渡る人。
○隙も波間に―休む暇もなきを波にいひかけた。
○同じ業ながら―同じく辛い漁業であるといつても、こゝは景色が勝れてゐるから「他所よりもよい」との意。
○浦山かけて―浦から山へかけて。
○志賀の都―前に擧げた天智・弘文兩帝の都。
○花園―天智天皇の時に出來た遊覧地。
○昔ながらの山櫻―千載集（平忠度）の歌「さゝ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」を引いた。昔ながらは昔のまゝの意に地名の長等山をいひかけた。この山は三井寺の西にある。
○眞野の入江―近江國滋賀郡堅田村の北。
○船呼ばひ―船を呼びかけること。

シテサシ「面白や頃は彌生の半ばなれば。波もうららに海の面
ツレ『霞み渡れる朝ぼらけ
シテ一聲『のどかに通ふ舟の道
シテツレ『憂き業となき。心かな
シテサシ『これはこの浦里に住み馴れて。明暮運ぶうろくづの。シテツレ『數を盡して身一つを。助けやせんとわび人の。隙も波間に。明け暮れて。世を渡るこそ。もの憂けれ
シテツレ下歌『よしよし同じ業ながら世にこえたりなこの海の。上歌『名所多き數々に。名所多き數々に。浦山かけて眺むれば。志賀の都、花園昔ながらの山櫻。眞野の入江の船呼ばひ。いざさし寄せて言問はんいざさし寄せて言問はん

「いざさし寄せて」とシテ棹の先に右手を掛けて舟を漕ぎ寄する心。

漁翁「實に面白い景色だ。今は三月の中旬で、湖面はうらゝかで波もなく……」
女「一面に霞み渡つたこの明け方ののどかなけしき……」
二人「あまりの面白さに、このいやな漁師の仕事も一向辛いとも思はれないわ」
漁翁「わし等はこの浦里に長らく住み馴れて、朝な夕な、魚を出來るだけ取り盡して、それでやつと自分だけ食つて行けるかと思はれるやうな、しがない者で、明けても暮れても波の上に漂うて、一寸の暇もなく働いて、渡世して行かなければならないとは、情ない身上だ」
二人「いや〳〵同じ渡世にしても、こゝは他所とは違つて勝れてよい所なのだ。第一名所が多くて、から浦から山へかけ眺め渡すと、志賀の都だとか、花園だとか『昔ながらの山櫻』と歌に詠まれた……おや向ふの眞野の入江の方から舟を呼ぶ聲がする。さあ舟を漕ぎ寄せて、何の用事か聞かう」
（[illegible]）

【三】
○便船—折よく漕ぎあはせた船に序ながら乘せて貰ふこと。
○誓ひの船—佛が衆生を極樂の彼岸に渡す誓願を船に喩へた語。
○とかく申さば—かれこれと故障をいへば。
○御心にも違ひ—參詣者の御本意にも背き。
○迎ひの船—佛が衆生を極樂へ迎へ導く船に見立てたのである。
○法の力—佛法の功德。船に乘りといひかけた。
○名こそささ波や—名には波といふ文字があるけれど、といひかけて、次の句に移つた。「ささ波」は湖邊の地名、轉じて志賀の枕詞とす。

【三】　ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる舟に便船申さうなう

シテ「棹を留めて」これは渡舟にてもなし。御覽候へ釣舟にて候よ

ワキ「こなたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に始めて參詣の者なり。「誓ひの船に乘るべきなり

シテ「げにこの所は靈地にて。歩みを運び給ふ人を。とかく申さば御心にも違ひ。又は神慮も計りがたし

ツレ「さらばお舟を參らせん

ワキ「嬉しやさては迎ひの船。法の力と覺えたり

シテ「今日は殊更のどかにて。心にかかる風もなし

地下歌「名こそささ波や志賀の浦にお立ちあるは

【三】　朝臣はこれを見て

朝臣「おうい、その舟に便乘させてくれい」

漁翁「これは渡舟ぢやない、御覽なされ、釣舟ですわ」

朝臣「自分も釣舟だといふことが分つて居ればこそ、便乘させてくれいといつたのだ。自分は初めて竹生島に參詣する者なのだ。それを弘誓の船として乘せて貰ひたいのだ」

漁翁「なるほど、この所は靈驗のあらたかな所で、そこへ御參詣なさる方に對して、かれこれ文句をつけては、御當人のお心持を惡くするばかりでなく、神樣の思召にも背くことになるかも知れない」

女「それならば舟にお乘せしませう」

朝臣「これはありがたい、かうして神境へ乘せて行つて貰ふのは、極樂への迎へ船のやうなもので、これも全く佛法の功德だと思はれることだ」

漁翁「今日は殊にのどかな天氣で、舟人にとつて何より氣にかゝる風もなく、土地の名にこそさゝ波といふが、眞の波には

○痛はしや―お氣の毒なことだ。
○江に近き―近江の字を分けて用ゐた。
○時知らぬ山―伊勢物語に「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪の降るらむ」を引いた。
○都の富士―比叡山。
○さえかへる―寒さの強いこと。
○比良―近江國滋賀郡にある國中第一の高山。
○嶺おろし―山から吹き下す風。
○沖漕ぐ舟は―何といつても春のことであるから、出船の絶えることがない。
○雲居の外に見し人―全くかけ離れた、何の緣故もない人。
○馴衣―着馴れた衣、親しくなるといひかけ、衣の緣語浦(裏)とつゞけた。
○綠樹影沈んで―建長寺の僧自休藏主が竹生島に詣でた時の詩「綠樹影沈魚上レ木、淸淺月落兎奔レ浪、靈灯雲地無二今古一、不レ斷神風濟度舟」を引いた。

都人か痛はしや。お舟に召されて浦々を眺め給へや

「お舟に召されて」とシテ右手にてワキを招く。ワキ招かれて舟に乘り、ツレとワキは下に居り、シテは棹を持ちて立ち漕ぎ行く心。

地上歌「所は海の上。所は海の上。國は近江の江に近き。山々の、春なれや花はさながら白雪の。降るか殘るか時知らぬ。山は都の富士なれや。なほさえかへる春の日に。比良の嶺おろし吹くとても。沖漕ぐ舟はよも盡きじ。旅の習ひの思はずも。雲居の外に見し人も。同じ舟に馴衣浦を隔てて行く程に。竹生島も見えたりや

シテ『綠樹影沈んで

地『魚木に上る氣色あり。月海上に浮かんでは兎も波を走るか面白の島のけしきや

とシテ棹に手を掛け、舟は竹生島に着きたる心。

少しもないのだ。その志賀の浦にお立ちになつてゐるのは都の方ですか。いやお氣の毒なことだ。さあ舟にお乘りになつて、浦々の景色を御覽なされませ」

といつて朝臣を舟に乘せ、また舟を漕ぎ出して、

漁翁「この近江の國は全く海の上にあるやうな所だ。岸邊に近い山々では、丁度今は春だから、まるで雪が降つたやうに、櫻の花が咲き亂れてゐるわ。あの春夏の區別もない白い山は、都の富士、比叡山であらう。この春の日にも、比良の山おろしの風が吹いてくると、まだ寒さが隨分きついが、何といつてものどかな春のことだ。沖へさして漕いで行く船の絶える時はなささうだ。……旅といふものは不思議なもので、全く思ひがけない人とも同じ舟に乘り合はせるもので、そしてこのやうにお親しくして、段々と岸を漕ぎ離れて行くうちに、おやもう竹生島が見えて來たわ。

綠滴る木の影が湖水に映つて、その木影の間を魚の泳いで行くさまは、魚が木に登るやうだ。月が海上に浮かぶ時は、兎も波を走るやうだ。この島の景色は實に面白い」

【四】
○尉―老翁。
○辯才天―委しくは大辯才功德天。金光明最勝王經護法の天女で、無礙の辯才を有し、佛法を流布し、壽命增益、怨敵退散、財寶滿足の利益を施すといふ。「竹生島の大明神」の語釋參照。
○九生如來―下懸では「くじやうによらい」と謠ふ。拾葉抄所引の竹生島緣起には「辯才天は大自財、天宮にては大日、須彌山の頂上に顯れ給ふ時は辯才天、下界にては伊勢天照大神宮と顯れ給ふ。此時は曼陀羅の八葉の中におはします。四佛・四菩薩・中央大日、これ九尊を以て九生如來と名づく。此時は本地大日如來にてましますなり。又本地阿彌陀と立つる時は、九品の淨土を指して九生如來と申すなり」と、刊行會本には「久成如來」の字を充て、その辭解に「久成は久遠實成の略にして、久遠劫以前に實に成佛せる事を表はす語」云々といふ。姑く兩說を揭げて後考を俟つ。
○再誕―生まれ變り。
○女人こそ參るべけれ―竹生島辯才天の本地は阿彌陀如來で、彌陀四十八願の一

【四】
ワキ「舟が着いて候御上り候へ
ツレ あら嬉しやや がて神前へ參り候べし
（とワキ舟より出て脇座へ行きて立つ。ツレも出て笛座前に坐し、シテも棹を下に置きて舟より出づ。後見、舟の作物を引く。）
シテ この尉が御道しるべ申さうずるにて候（と宮の作物に向ひ）。これこそ辯才天にて候へよくよく御祈念候へ
（ワキ作物に向ひ二三足出でて下に居り、）
ワキ 承り及びたるよりもいや勝りてありがたう候（と禮拜し）。不思議やなこの島は（と立上りてツレを見やり）。女人禁制とこそ承りて候に。あれなる女人は何とて參られて候ぞ（と元の座に歸りて立つ）
シテ それは知らぬ人の申し事にて候。忝くもこの島は。九生如來の御再誕なれば。殊に女人こそ參るべけれ
ツレ（ワキに）なうそれまでもなきものを

さあたりの景色を眺めながら、朝臣に話しかけて舟を漕いで行くうちに、竹生島に着いた態で、舞臺は竹生島となる。

【四】
漁翁「舟が着きました、お上りなされ」
朝臣「あゝありがたい、早速神樣に參詣しませう」
一同舟より上り、
漁翁「このぢゝが御案內しませう」
と社殿へ案內する。（舞臺に置かれた作物の社殿はこの時初めて見物人に見えるのである）
漁翁「これが辯才天です、よく御祈念なされませ」
朝臣「話に聞いてゐたよりも、一層ありがたいお社だ」
と禮拜して、海士女に氣がつき、
朝臣「これは變だ、この島は女人禁制だと聞いてゐたのに、あの女はどうしてこゝへ參られたのです」
と老翁に尋ねる。
漁翁「女人禁制だとは、何も知らない人のいふことです。忝くもこの島の神樣は、阿彌陀如來の御再來なのですから、殊更女こそお參りするのがよいのです」
女「いえ、御本地の阿彌陀如來のことを申し上げるまでもありません。現在この辯

地「辯才天は女體にて。辯才天は女體にて。その神徳もあらたなる。天女と現じおはしませば。女人とて隔てなし唯知らぬ人の言葉なり

【五】

地クセ「かかる悲願を起して。正覺年久しししつうわうの古より利生更に怠らず

シテ「げにげにかほど疑ひも

地「荒磯島の松蔭を便りに寄する海士小舟（とツレ立ちて角へ行き）。われは人間にあらずとて（とワキに向き）。社壇の。扉を押し開き（と扇を開きてその形を示し）。御殿に入らせ給ひければ（とツレ作物の中へ入る）。翁も水中に（とシテ立上り）。入るかと見しが白波の立ち歸りわれはこの海の（とワキに向ひ開き）。主ぞといひ捨ててまた、波に入らせ給ひけり

と波に入る心を示し、來序の囃子にて中入。

才天が女體の神様で、神徳のあらたかな天女としてお現れになつたのですから、女だとて分け隔てをなさらないのです。それに、女人禁制などとは、何もわけを知らない人の申すことです」

【五】

女「辯才天はこのやうな大慈悲の誓願をお起しになつて、衆生に長い年月御利益をお授けになり、古く獅子通王といはれた昔から、ずつと御利益に變りがないのです」

漁翁「全くこのやうな確かなことはありません。……では、この島の松蔭に泊めて置いた釣舟に乘つて……」

女「自分は實は人間ではないのだ」

といつて、社殿の扉を開いて、御殿の中にお入りになると、老翁も水中に入るやうに思はれたが、また歸つて來て

漁翁「自分はこの海の主である」

といつたまゝ、海中へ入つてしまはれた。

ツレ女は社殿の中に入り、シテ老翁は海中に入つた態で退場。

【間】　狂言社人、梨打烏帽子・上頭掛・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。竹生島の天女に仕へ申す神職の者にて候。さても當島と申すは。人皇十二代

に女人往生のことがあるので、かういつた。

【五】

○悲願—大慈悲の誓願。

○正覺—佛の悟り。こゝでは佛として衆生に利益を與へること。

○ししつうわう—諸本多くは獅子通王の字を充て、「勝拾葉抄所引の縁起にも「獅子王佛の出世遙以前より辯才天十惡五逆蠢々蚑行の類闡提の輩を濟度し給ふこと、過阿僧祇利益遙に諸佛の大悲に越えたり」とあるが、この佛名の出所が分らない。

○利生—衆生を利益すること。

○荒磯島—疑ひもあらじといひかけた。

○立ち歸り—波の立つを翁の立ち歸るにいひかけた。

【間】

○竹一夜―竹が一節延びる間といふ意か、或は一節を一夜にいひかけたか。
○金輪際―大地の下百六十萬由旬、水輪の上にあるといふ。深い海底といふほどの意。
○あゝくさめ―水に入つた爲に風邪をひいて、くさめが出たのである。

景行天皇の御宇に、竹一夜のうちに金輪際より涌出したる島なり。さるによつて竹生まるゝ島と書いて竹生島と申し候。さて又天女の御事は。現世安穏福德圓滿に護り給ふにより。國々在々所々よりも信仰致し。參り下向の人々は夥しき御事にて候。また唯今當今に仕へ御申しある臣下殿。當島へ御參詣にて候間。御禮の爲に出でて候。急いで御禮申さう。（ワキに辭儀して）御禮申し候。これは當島の天女に仕へ申す神職の者にて候。御禮の爲出でて候。さて初めて御參詣の御方は。寶物を御拜み候が。その御望みはなく候か

ワキ「げに〳〵承り及びたる御寶物にて候。拜ませて給はり候へ

狂言「畏つて候。さらばやがて御藏を開き申さう。

と後見座に行き、葛桶の蓋に寶物をのせて持ち出し、眞中に坐して、

狂言「これは卽ち御藏の鍵にて候。これは天女の朝夕御看經ある數珠にて候。よく〳〵御拜み候へ。（ワキヅレに）方々も御拜み候へ。これは二股の竹。當島第一の寶にて候。御覽候へこれは火も水も取る玉にて候。よく〳〵御覽候へ

と一々寶物を示して後これを後見座へ返し、元の座に歸りて、

狂言「さて御寶物はこれまでにて候。さて又當島の神祕に岩飛びと申す事の候。この岩飛びを致さうか。何と御座あらうずるにて候

ワキ「さあらば岩飛び飛んで見せられ候へ

狂言「畏つて候（といひて水衣の肩をあげ）

狂言「いで〳〵岩飛び初めんとて。〳〵。岩尾の上に走り上り。東を見れば日輪月輪照り輝いて。西を見れば入日を招き。あぶなさうな岩尾の上より。〳〵。水底にずんぶと入りにけり。あゝくさめ〳〵

と謡ひ舞ひて幕に入る。

出端の囃子にて、

【六】

地「御殿頻りに鳴動して。日月光りかかやきて。山の端出づる如くにて。現れ給ふぞかたじけなき

と後見、宮の引廻を下す。後ヅレ辯才天女、面連面・黒垂・天冠・着附摺箔・長絹・大口・腰帶・扇の装束にて、宮の中に床几にかゝり、

後ヅレ「抑もこれは。この島に住んで神を敬ひ國を護る。辯才天とは。わが事なり

地「その時虚空に音樂聞え。その時虚空に音樂聞え（ツレ作物より出で）。花降り下る。春の夜の。月に輝く少女の袂。かへすがへすも。面白や

〔天女舞〕

地「夜遊の舞樂も時過ぎて。夜遊の舞樂も時過ぎて。月澄み渡る。湖づらに。波風頻りに鳴動して。下界の龍神。現れたり

【六】

後段

御殿が頻りに鳴り動いて、日光月光が山の端から現れ出るやうな、光り輝いた尊い御姿で、辯才天女の御出現になるのは、實にありがたいことである。

後ヅレ辯才天女、宮の作物の中から姿を現し、

天女「自分はこの島に住んで、神を敬ひ國を護る辯才天女である」

その時、空中に音樂が聞え、花が降り下り、天女が春の夜の月に美しい姿を輝かして、舞をお舞ひになるのは、實に面白いことである。

〔天女舞〕

（辯才天女、舞をお舞ひになる。）

かうして、夜の舞樂を奏せられるうちに、次第に時が過ぎて行くと、月光の澄み渡つた湖面に波風が頻りに鳴り動いて、海中の龍神が現れ出た。

【六】

○虚空―大空。

○かへすがへすも―舞の袂を飜へすといひかけた。

○下界―こゝでは海中をいふ。

と仕手柱際へ行きて座に向ひ龍神を迎ふる心を示し、ワキの上に行きて坐す。

【七】

早笛にて、後ジテ龍神、面黒髭・赤頭・輪冠(龍戴)・金襴鉢巻・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帯の装束にて打杖を後にさし、火焔玉を戴せたる盤を両手に持ちて出で常座に立ち、

地「龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光も輝く金銀珠玉をかのまれ人に。捧ぐるけしき。」と玉盤をワキに渡し、「ありがたかりける。奇特かな。」と打杖を手に持ち、

〔舞働〕

後ジテ「もとより衆生。済度の誓ひ

と謡ひて拍子を踏み、次の謡に合せて仕科。

地「もとより衆生。済度の誓ひ。様々なれば。或は天女の形を現じ。有縁の衆生の所願を叶へ。又は下界の龍神となつて。國土を鎮め。誓ひを現し。天女は宮中に入らせ給へば。龍神は即ち湖水に飛行して。波を蹴立て。水をかへして天地

【七】

後ジテ龍神登場。

龍神が湖面に出現して、光り輝く金銀珠玉を、かの朝臣に捧げるさまは、誠にありがたい奇特なことである。

龍神は金銀珠玉を朝臣に贈つて、

〔舞働〕

に龍神の勇ましいさまを示し、

龍神「もと／＼衆生を濟度する爲には、色色の方便を用ゐるのであるから、或時は天女の姿となつて現れ出で、佛を信ずる衆生の願望を叶へてやり、又ある時は海中の龍神となつて、國土の安穩を護り、わが誓願を實行するのである」

と、かくて天女として現れた方が社殿にお入りになると、龍神は湖水に飛んで行つて、波を蹴立て水を覆へして、勢ひの盛んな、天地一體を樂ぐやうな

【七】

○まれ人―客人。ワキの朝臣を指す。

○有縁の衆生―縁のある衆生、神佛を信仰する者、

○天地に滿る―國土を守護する力の偉大さを示した一

大蛇となつて、龍宮に飛んで入つてしまつた。

後ジテ龍神、龍宮に入る態で退場。

に群る大蛇の形。天地に群る大蛇の形は。龍宮に飛んでぞ。入りにける

「天女は宮中に」とツレ立ちて幕に入る。シテこれを見送り、「天地に群る大蛇の」と橋懸へ驅け出で飛びかへり左袖を被きて留む。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ道行「四の宮や河原の宮居（下懸流れ）……　【二】シテ上歌「……いざさし（寶春剛喜漕ぎ）よせて……　【六】地「御殿……日月光りかかやきて（下懸雲晴れて）……現れ給ふぞかたじけなき（下懸ありがたさよ）

古謡本（元祿八年本）

【一】ワキ「抑もこれは……この度（元ナシ）……　【二】シテ下歌「よしよし……世にこえたり（元けり）な……　【三】ワキ「嬉しやさては迎ひ（元誓ひ）の船……　【四】ワキ「あら嬉しやがて神前へ參り候べし（元ナシ）　【五】地「荒磯島の……入るかと見しが（元れは）……

張良（ちやうりやう）　觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】五番目　二段劇能

【人物】**前ワキ**　張良、**前シテ**　黄石公、**狂言**　張良從者
後ワキ　張良、**後シテ**　黄石公、**後ツレ**　龍神

【所】支那　下邳

【時】漢高祖の代（九月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに觀世小次郎の作とし、言繼卿記天文元年五月一日の條に本曲演能のこと、言經卿記文祿四年三月三十日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗概】漢高祖の臣張良が、ある夜の夢に、下邳の土橋で一人の老翁に行き逢ふと、かの老翁が沓を落して、張良に取つて履かせよといつた。張良は腹立たしくも思つたが、老人を敬つてその言葉に從ふと、老翁は五日の後こゝで兵法の奧儀を傳へようといつた、といふ夢を見た。張良はこの靈夢に從つて、當日下邳へ行くと、果して老翁が來てゐたが、時刻が遲れたといつて、なほ五日の後に會ふことを約束して

立ち去つた。張良はこの度は朝疾く行き着くと、かの老翁――それは黃石公といつた――が來て、張良の熱心を褒めたが、なほも志を試す爲に、馬上から沓を急流に投げ落した。張良は直に河に飛び入つたが、流れが急で、取ることが出來ない。その上大蛇が現れ出て、かの沓を取り去つたが、張良はこれに恐れず、劒を拔いてかゝると、大蛇はこれに恐れて、沓を張良に與へたので、張良は黃石公にこれを奉り、兵法を授かつた。大蛇は實は觀音の化身で、爾來張良の守護神となつた。

【出典】前漢書張良の傳、史記留侯世家などに記された支那傳說で、その史記の文を擧げると、

留侯張良者、其先韓人也、大父開レ地相二韓昭侯・宣惠王・襄哀王一、父平相二釐王・悼惠王一、悼惠王二十三年平卒、卒二十歲秦滅レ韓、良年少未レ宦二事韓一、韓破、良家僮三百人、弟死不レ葬、悉以二家財一求下客刺二秦王一爲レ韓報上レ仇、以二大父父五世相一レ韓故、良嘗學二禮淮陽一、東見二倉海君一、得二力士一、爲二鐵椎一重百二十斤、秦皇帝東游、良與レ客狙二擊秦皇帝博浪沙中一、誤中二副車一、秦皇帝大怒大索二天下一、求レ賊甚急、爲二張良一故也、良乃更二姓名一、亡二匿下邳一、良嘗閒從容步游二下邳圯上一、有二一老父一衣レ褐、至二良所一、直墮二其履圯下一、顧謂レ良曰、孺子下取レ履、良愕然欲レ毆レ之、爲二其老一彊忍下取レ履、父曰履レ我、良業爲取レ履、因長跪履レ之、父以レ足受笑而去、良殊大驚隨二目之一、父去里所復還曰、孺子可レ教矣、後五日平明與レ我會レ此、良因怪レ之跪曰諾、後五日平明良往、父已先在怒曰、與二老人一期後何也、去曰、後五日早會、五日鷄鳴良往、父又先在、復怒曰、後何也、去曰、後五日復早來、五日良夜未レ半往、有レ頃父亦來、喜曰、當レ如レ是、出二一編書一曰、讀レ此則爲二王者師一矣、後十年興、十三年孺子見レ我、濟北穀城山下黃石即我矣、遂去無二他言一、不二復見一、旦日視二其書一、乃太公兵法也。

本曲は大體これに據つたものであらうか。源平盛衰記・太平記等の國書にはこの傳說を傳へてゐない。たゞ舞曲に「張良」があつて、殊に本曲と同樣觀世音のことを記してゐる。――但し本曲では觀音の化身を大蛇としてゐるが、舞曲では黃石公としてゐる――か、その制作の前後は俄かに定め難い。

【概評】唐事物の謠曲はいづれも普通の曲とは脚色の樣式を異にしてゐる。本曲も亦その一であるが、他の唐事物が大抵狂言の口開又はワキの半開口から始まつて、殆ど叙事文で終始してゐるのに比べて、これはワキの名乘から始まつて、科白の部分が多い。しかもワキ・シテなどの出入が、前ワキ登場・前ジテ登場・前ジテ退場・前ワキ退場、後ワキ登場・後ジテ登場・後ヅレ登場・後ヅレ退場・後ジテ退場・後ワキ退場と、截然と區劃的になつてゐるのは、類型の少い手法である。

傳説の劇化法についても、原據では張良と黄石公の會合を三度としてあるのを、本曲ではこれに從ひつゝもその第一回を夢中の會合としたのは、巧みな工夫である。たゞ後ヅレ大蛇を出したことは、觀音の利生を説かうとする宗教的作意と舞臺を賑はさんとする戲曲的興味から出たことで、當時の一般思想からいつて、また謠曲作者の常套手段として、特に不審すべきほどの事ではないが、今日の我々から觀れば蛇足の感を與へるに過ぎない。恐らく本曲以前に、舞曲「張良」又はそれに類似した邦譯の草子があつて、この作者はそれに捉はれたのではなからうかと思ふ。

【一】名乘笛にて、ワキ張良、着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて出で舞臺の眞中に立ち、

ワキ「これは漢の高祖の臣下張良とはわが事なり。われ公庭に隙なき身なれども。ある夜不思議の夢を見る。これより下邳といふ所に土橋あり。かの土橋に何となく休らふ處に。一人の老翁馬上にて行き逢ふ。かの者左の沓を落し。某に取つて履かせよといふ。何者なればわれに向ひかくいふらんと思ひつれども。かれが氣色たゞものならず。その上老いたるを貴み親と思ひ沓を取つて履かせて候。その時かの者申すやう。

【一】
○漢の高祖―劉邦といひ、項羽と支那の天下を爭つてこれに勝ち、前漢の第一世皇帝となつた。「項羽」參照。
○張良―解説に史記の傳を掲げた。
○公庭―公の場所、公務。
○下邳―今の江蘇省邳縣。
○かれが氣色―こゝの氣色は人の品格などについていふ。

【一】

第一段

舞臺は初め支那の宮で、ワキ張良登場。

張良 自分は漢の高祖の臣下張良です。さて自分は公務が忙しくて暇のない身でありますが、ある夜不思議な夢を見たのです。それは、下邳といふ所に土橋があつて、自分がその土橋に何といふわけもなく休んでゐると、一人の老人が馬に乘つてやつて來て、左の沓を落して、自分に「その沓を拾つて履かせよ」といふのです。一體いかなる者で、自分にこのやうな失禮なことをいふのであらうと、腹立たしく思つたが、その老人の樣子を見ると、氣品が高くて、普通の人とは思はれず、且又年寄つた人は敬つて親のやうに思ふのが禮儀だと思つて、その沓を拾つて履かせました。すると、その時その老

○兵法の大事―戰略に關する方術の奥儀。
○やうやう―漸く。次第に。
○日を考へ―日數を數へ考へ。
○五更―寅の刻、今の午前四時頃。
○時や遲きと―時刻が遲れはしないかと心配しながらとの意。

【三】

○遲なはりや―遲くなつたぞ。遲れたぞ。
○契り置きし―約束して置いた。
○杉の門―時刻も過ぎといひかけ、杉の緣語松にかけて「待つかひも」とつづけた。

汝誠の志あり。今日より五日に當らん日ここに來れ。兵法の大事を傳ふべき由申して夢さめぬ。やうやう日を考へ候へば。今日五日に相當り候程に。唯今下邳の土橋へと急ぎ候

ツキ道行「五更の天も明け行けば。五更の天も明け行けば。時や遲きと行く程に。道は遙かに山の端も。白み渡れる川波や。下邳の土橋に着きにけり下邳の土橋に着きにけり

「白み渡れる」と右の方に向きて二三足出で「下邳の土橋に」の返句を謠ひながら脇座に行く。

【三】

シテ黃石公、面小牛尉・尉髪・襟淺黃・着附小格子厚板・茶緋水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ「あら遲なはりやいかに張良。年老いたる者と契り置きし。その言の葉もはや違ひぬ。」われは先刻よりここに來り。曉鐘を數へ待ちつるに。『はやその時刻も杉の門

人が「お前には誠の志がある、今日から五日目に當る日にこゝへ來い。兵法の奥儀を授けよう」といつたと思ふと、夢がさめたのです。それから日を數へて見ると、今日が丁度その五日目に當るので、これから下邳の土橋へ行くのです」

と見物人に自己紹介をし、

張良「はや夜も次第に明けて行くので、時刻に遲れはしないかと心配しながら行くと、何分道が遠いので、山の端も白み渡つた頃に、川波の立つ下邳の土橋に着いた―

といつてゐるうちに、下邳に着いた態で、舞臺は下邳の土橋となる。

【三】

すると、張良を早くから待ち受けてゐた態で、シテ黃石公が登場。

黃石「おゝ時刻に遲れたぞ、おい張良、年寄つた者と約束して置いた言葉に、お前はもはや背いたのだ。自分は先程からここに來て、曉を告げる鐘の音を數へたから、お前を待つてゐたのだが、もはやその時刻も過ぎてしまつたのだ。待ち甲斐のないことであつた。早く歸つてしまへ。

地上謠「待つかひもなしはや歸れ。待つかひもなしはや歸れ。汝誠の志。あらば今日より五日に。當らんその日夜深く。來らばわれも又ここに。必ず出で逢ひ約束の如く傳へん。後れ給ふな張良と(一の松にてワキに向き)。怒りをなして老翁は(三の松へ急ぎ歸り)。かき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

とシテ中入。ワキ仕手柱際に出でてシテを見送り、直して舞臺の眞中に立ち、

【三】

ワキ「言語道斷。以ての外の機嫌にて候はいかに。又われながらかくの如く。ゆくへも知らぬ御事に。かやうに恐れ從ふこと。その故なきに似たれども。大事を傳へて末世に遺し。「兵法の師といはれんと

地上謠「思ふ心を見ん爲と。思ふ心を見ん爲と。知れば歸るも恨みなし」と右の方を見つゝ又こそここに

しかしお前にたは誠の志があるたらば、また今日から五日目に當る日、まだ夜の暗いうちに、こゝへ來たならば、自分も亦きつとこゝへ來てお前に出逢ひ、約束の通り兵法の奧儀を傳へよう。今度はきつと後れるな」

と腹を立てて、老人はかき消すやうになくなつてしまつた。

【三】

張良「これは驚いた。何といふひどい憤り方であらう。それにしても、自分も亦自分で、あのやうな何處の人だか素性も分らない御方に對して、このやうに恐れ從ふといふのは、全く理由のないことだとも思ふのだが、兵法の奧儀を傳受して、これを後の世に遺し、永く兵法の師といはれたいと思ふのだ。そしてあの御方はたゞ自分のこの志を試すだけだといふことが分れば、今空しく歸つたところで、何も恨みに思ふことはないのだ。またこ

【三】

○言語道斷―いひやうもなく呆れ果てたこと。瓔珞經に「言語道斷、心行所滅」

○以ての外の機嫌―以ての外の不機嫌。非常な立腹。

○ゆくへも知らぬ御事―どこの人か素性も分らない御方。

○末世―後世。

○思ふ心を見ん―兵法の師といはれたいと思ふ、その志を試す爲に、彼は腹立てたのだと分れば。

○勇みをなして—元氣を出して。

【間】

○無になる—無意味になる。

來らめと。勇みをなして、歸りけり勇みをなして歸りけり　こへやつて來よう」と元氣を出して歸つた。

と勇ましく早鼓にて中入。

【間】早鼓にて、狂言張良の從者、官人頭巾・着附厚板・側次・括袴・脚半・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。漢の高祖の臣下張良の御内に仕へ申す者にて候。さても張良この程不思議の夢を御覽じて候。その樣體は。この國の傍に下邳と申す所に土橋あり。張良かの橋に遊びて居給ふに。いづくともなく老人馬上にて來り。左の沓を落し。いかに張良その沓取つて履かせよと申す。張良何者なればわれに向ひかくいふぞと思し召し。知らぬ顏にて居給ふが。老いたるを敬ふは父母の如しといふ語を思し召し出され。そのまゝ沓を履かせ給へば。又落して取つて履かせよと申す。張良これを履かせねば。始めに履かせたが無になると思し召し。これを履かせ給へば。老人申す樣は。今日より五日に當る日にこの所へ來るべし。兵法の大事を傳へんとの事なり。張良夢心ながら不審に思し召し。五日に當る日かの土橋へ御出でありしに。夢に御覽ぜられたる老人來り。遲く候とて腹を立て。またこれより五日に當る日この所へ來り給へ。大事を相傳あるべしとて。かき消すやうに失せ給ふ。さて又かの老人を如何なる者ぞと尋ぬるに。土橋の上に穀城山と申す山あり。その山に住む黃石公と申す者なるが。張良世に超え器量第一の人なれば。兵法の大事を傳へんその志を見ん爲に。かやうの振舞ありたると申す。總じて高祖の兵に蕭何韓信樊噲張良この四人は。隱れもなき兵にて候。中にも張良は智慧第一の人なれば。かの一卷を授かり給はば。高祖の御爲にも。彌・頼もしく思し召す御事にて候。又今日も五日に當る日にて候間。かの土橋へ御出でにて候程に。御供の用意仕り。これまで出でて候。(常正面に向き)やあ〳〵何といふぞ。御供もいらず唯獨り御出でと申すか。それならば罷り歸らう。もしお尋ねもあらば。これまで出でたる由御申しあつて給はり候

【四】

○瑤臺霜滿てり―和漢朗詠集、謝觀の賦「瑤臺霜滿、一聲之玄鶴唳天、巴峽秋深、五夜之哀猿叫月」を引いた。瑤臺は夏桀王の建てた玉の臺。玄鶴は年老いて色黒くなつた鶴。巴峽は湖北省巴東縣の山峽で猿の名所。五夜は一夜を甲乙丙丁戊に分けた最後の第五夜で夜明け方―

○山の峽―山と山との間。

○渡せる橋に―新古今集、大伴家持の歌「鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」を借りた。

○滿つ潮の―願ひも滿つと、いひかけ、滿潮の潮の意で、曉と一寸つけた。

へ。その分心得候へ〳〵

といひて幕に入る。

後見、一聲臺を大小前に出す。

一聲の囃子にて、後ワキ張良、唐冠・金入鉢卷・着附厚板・半切・腰帶・扇・劔の裝束にて橋懸に出で一の松に立ち、

【四】

後ワキ〔一聲〕瑤臺霜滿てり。一聲の玄鶴空に啼く。巴峽秋深し。五夜の哀猿月に叫ぶ（と左の方に向き）。もの凄しき。山路かな（と正面に直し）

地〔上歌〕有明の。月も隈なき深更に。月も隈なき深更に。山の峽より見渡せば（仕手柱より舞臺を見込み）。所は下邳の川波に（舞臺に入り）。渡せる橋に置く霜の白きを見れば今朝はまだ（目附柱際にて一聲臺を見）。渡りし人の跡もなし。嬉しや今ははや（と臺へ行き）。曉かけて遙かに。夜馬に鞭打つ人影の（幕の方を見）。駒を早むる氣色あり（臺を見かけて）思ふ願ひも滿つ潮の（眞中へ行き）。

常座へ行きて下に居る。

第二段

【四】舞臺は下邳の土橋。後ワキ張良は前から遙々やつて來た態で登場。

張良「かうしてやつて來た山路は、詩の句に――

『玉の臺にも秋の霜が一面に降りて、年老いた鶴が淋しく悲しげに一聲高く天に向つて鳴き、巴峽のあたりは全く晩秋の寂しさに閉されて、夜明け方、猿が哀しい聲で月に向つて泣き叫んでゐる』

と詠まれたとそのまゝな、實にもの凄い氣色だ。

有明の月の曇りなく澄み渡つたこの夜更けに、山の間から向ふを見渡すと、あの下邳の川に架かつてゐる橋の上に降り置いた霜が、白いまゝで消えてゐないところを見ると、今朝はまだ誰も渡つた人がないのだ。あゝ嬉しい。今度こそはわが念願をも遂げることが出來るのだ」

といひながら向ふを見ると、この夜明け方に早くも、遙か彼方から馬に鞭をうつて急いでやつて來る人影が見える

【五】

○黄石公—解説に掲げた史記の文参照。

○器量勝れ—材幹手腕が人より勝れ。

○味方をいさめ—味方に勇氣をつけ。

【五】

大癋の嘯子にて、後ジテ黄石公、面茗荷惡尉・白垂・唐帽子・金緞鉢巻・襟淺黄・着附無色厚板・袷狩衣・半切・腰帶・唐團扇の裝束にて卷物を懐中し、橋懸一の松に出で、

後ジテ「抑もこれは。黄石公といふ。老人なり。「ここに漢の高祖の臣下張良といふ者。ただ公庭を見て君臣を重んじ。義を全うして心猛く。「賢才人に越え。器量勝れ

地「國を治め。民をあはれむ志

シテ「天道に通じて忽ちに

地「諸佛も感應まのあたり

シテ「大事を傳へて高祖に仕へ

地「敵を平らげ味方をいさめ。天下を治めん謀。汝に傳へんと。駒を早めて（と舞臺に進み）。來り給ふを張良遙かに（ワキ立ちてシテに向き）。見奉ればありしに變れる。石公の粧ひ（シテ一畳臺に上り）。眼の光もあたりを拂ひ（床几にかゝり）。姿もかかやく威勢

【五】

後ジテ黄石公、馬を走らせて來た態で登場。

黄石「自分は黄石公といふ老人である。さて漢の高祖の臣下で張良といふ者は、ただ公務を專らにして私事を顧みず、君臣の情誼を重んじ義理を全うして、心が勇猛で智慧に勝れ、才幹の人に秀でた人物で、そのよく國を治め民をあはれむ志が天に通じ、諸佛も忽ち感應遊ばされるので、まのあたりに兵法の奥儀を傳へ、これを以て、高祖に仕へて、敵を平らげ味方を勇氣づけ、天下を治める謀にさせようと思ふのである。さあその謀を汝張良に傳へよふ。

といつて、馬を急がせてこちらへ來られるのを、張良が遙か遠くから見奉ると、黄石公の様子は、前に會つた時とはうつて變つて、眼の光も鋭くてあたりを拂ひ、姿も輝くばかり偉いさまであるので、張良はその威勢に恐れて、

に恐れて。橋もとに畏り。待ち居たり（とワキ下に居てシテに辭儀す）

【六】

シテ「いかに張良。いしくも早く來たるものかな。近づき給へものいはん

ワキ「その時張良立ち上り。衣冠正しく引き繕ひ。土橋を遙かに上り行けば

と言ひながらシテの右側へ行く。

シテ「あつぱれ一器量の人體かなと。思ひながらも今一度。心を見んと石公は

地上歌「履いたる沓を馬上より。履いたる沓を馬上より。遙かの川に（目附柱の方を見）。落し給へば張良つづいて飛んで下り。流るる沓を。取らんとすれども所は下邳の。巖石いはほに、足もたまらず早き瀨の。矢を射る如く落ちくる水に。浮きぬ沈みぬ流るる沓を。取るべきやうこそなか

【六】○いしくも——いみじくも。殊勝にも。

○巖石いはほ—同じ語を漢語讀みと和訓と重ねていつたのである。當時の一種の讀み癖で、太平記にも「磐石いはほ」などとある。

○足もたまらず—足も踏み留まり得ず。

橋の袂に畏つて、黄石公の到着を待つてゐた。

【六】

やがて黄石公は土橋に着いて、

黄石「おい張良、感心に早く來たものだなあ。さあもつと近くへお出で、話をしよう」

といはれて、張良は立ち上り、衣裝を整へて、遙か彼方の土橋へ上つて行くと、——

黄石公は、「あゝ實に才幹の勝れた男だ」と思つたが、なほも一度張良の心を試して見ようと思つて、履いてゐた沓を馬の上から遙か彼方の川に投げ落されると、張良は引續いて飛んで下り、水に流れて行く沓を取らうとしたが、この下邳の河底は巖石で、足を踏み留めることも出來ず、水は早瀨で矢を射るかやうに流れて、沓はその早い流れを浮きつ沈みつして行くので、どうにもこれを取る術がなかつた。

【七】

〇かかりけり―張良に組みかゝつた。

〇面も振らず―あたりをふり向きもせず、脇見もせず。

【八】

りけれ

「落し給へば」と、シテが沓を落す心にて後見沓を目附柱際に投ぐ。ワキ流れ足にて目附柱の方に出で、沓を取らんとして取り得ぬ心にて脇座に立ち幕の方に向く。

【七】

早笛にて、後ヅレ龍神、面黒髭・赤頭・輪冠（龍を戴く）・金緞鉢巻・着附厚板・法被・半切・腰帯・打杖の裝束にて橋懸一の松に出で、

地「不思議や川波立ちかへり。不思議や川波立ちかへり（舞臺に入り）。俄かに川霧立ち暗がつて。波間に出づる。蛇體の勢ひ。紅の舌を振り立て振り立て（ワキの方へ行き）。張良を目がけてかかりけるが。流るる沓を。おつ取り上げて（沓を拾ひて持ち）、面も振らず。かかりけり

〔舞働〕

ツレ打杖を持ちて舞ひ、ワキと爭ふ心を示し、

【八】

ワキ「張良騷がず劍を抜き持ち

地「張良騷がず劍を抜き持ち蛇體にかかれば（と

【七】

後ヅレ龍神登場。

そこへまた、不思議なことに、川波が立ち騒いで、俄かに川霧がたちこめてあたりが暗くなり、波間から勢ひの盛んな蛇體が現れ出て、紅の舌を振り立て振り立てして、張良を目がけて組みかゝつた。そして流れて行く沓を取りあげて、脇目を振らずに、また組みかかつて來た。

〔舞働〕

に龍神が張良に組みつく態の所作を示す。

【八】

しかし張良は落ちつき拂つて、劍を抜いて手に持ち、かの蛇體に組みかゝると、大蛇は劍の光に恐れて、持つてる

（ワキ劍を拔きてツレにかゝりて）大蛇は劍の光に恐れ（ツレたぢろぎ、ヒト下りて）持ちたる沓を。さし出だせば（沓をワキに渡し）。沓をおつ取り劍を收め（ワキ劍を收め）。又川岸に えいやと上り。さてかの沓を。取り出だし。石公に履かせ。奉れば（トワキ沓をシテの前に出して辭儀し）

シテ「石公馬より靜かに下り立ち（と臺より下り）

地「石公馬より靜かに下り立ち。さるにても汝。善き哉善き哉と、かの一卷を取り出だし。張良に與へ（と卷物をワキに與へ）。給ひしかば。則ち披き。悉く拜見し（ワキ卷物を開き）。秘曲口傳を殘さず傳へ（ワキ卷物を卷きて）またかの大蛇は觀音の再誕汝が心を見ん爲なれば（ツレ立ちワキへ向きて）今より後は。守護神となるべしと大蛇は雲居に攀ぢ上れば（ツレ幕に入る）。石公遙かの高山にあがり（一の松へ

○善き哉―神佛などが人を賞める詞。
○かの一卷―兵法の書。
○秘曲―大切に秘密にして容易に人に知らせないもので、音樂についていふ語であるのを、兵法の大事に轉用した。
○口傳―他見を憚れる秘事を口づから傳授すること。又その口傳を書き傳へたもの。
○觀音―觀世音菩薩の略。阿彌陀如來の脇士で、衆生濟度の方便に三十三身に變化する。その一に大龍身といふのがあるので、蛇體を觀音の化身としたのである。謠曲「張良」では黄石公を觀音の化身としてゐる。
○再誕―生まれ變り。但しこゝでは化現、化身の意。

た沓をさし出したので、張良はこれを受取つて、劍を鞘に收め、また川岸にえいやと飛び上り、さてかの沓を取り出して、黄石公にお履かせすると、黄石公は靜かに馬から下りて、

黄石　いかたことお前は偉い―

と褒めて、かの兵法の一卷を取り出して張良に與へられると、張良は早速これを披いてすつかり拜見して、兵法の大事奧儀を殘らず傳受した。それからまたかの大蛇は、

大蛇　自分は觀世音の化身で、お前の心を試す爲にかうしたのであるから、今後はお前を守護する神とならう―

といつて、雲の中に攀ぢ上つて行くと、黄石公はまた遙か彼方の高山に登り、空中に光を放つて、今までの形を變へ、文字通りの黄石の姿となつて跡を留め

られたのは、實にありがたいことである。

行き」。金色の光を虚空に放し。忽ち姿を黄石と現し。殘し給ふぞ。ありがたき

と三の松にて留む。ツキ正面に向き卷物を拜す。

〔考異〕

諸流（五流）

殆ど異同がない。

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「これは……とはわが事なり（光中者にて候）……唯今下邳の土橋へと（光かの所に）急ぎ候。道行「五更の……時や遲き（光し）と

【二】地上歌」待つかひも……今日（光今）より……　【四】後ワキ「瑞臺……天（光そら）に……　【八】地「石公馬より……口傳を（光ナシ）

殘さず……現し（光れ）給ふぞ……

土蜘蛛（つちぐも）

觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】 五番目　複式劇能

【人物】 **前ツレ**　源賴光、**トモ**　同從者、**前ツレ**　胡蝶、**前シテ**　僧形（土蜘蛛）、**前ワキ**　獨武者、**狂言**　同從者、**後ワキ**　獨武者、**ワキツレ**（立衆）　同從兵（數人）　**後シテ**　土蜘蛛

【所】 **第一段**　京都源賴光館　**第二段**　洛外土蜘蛛塚

【時】 平安盛朝　（七月）

【異稱】 〔土蜘〕とも書く。

【作者】 作者演能等本曲に關する古記錄は見當らない。

【梗概】 源賴光が病に惱んでゐると、胡蝶といふ侍女が典藥頭からの藥を持つて見舞に來た。その夜、僧形の者が賴光の枕邊に來て、見舞を述べた。賴光がこれを怪しむと「そなたの病氣も、この蜘蛛の所爲ではないか」といつて、千筋の絲を投げかけ、賴光を卷き殺さうとした。賴光は化生の者と知るや、膝丸の名劍を以てこれを切りつけると、そ

の形は消えてしまつた。頼光の聲に驚いて、獨武者が見舞に馳せ參じた。そしてこの話を聞いて、直に妖怪退治を思ひ立ち、血汐の流れた跡をたどつて、土蜘蛛の塚を尋ね求め、その土窟を覆して、遂にこれを退治した。

【出典】　語釋に擧げた日本書紀の土蜘蛛説話を頼光主從の武勇傳説に採り入れた、平家物語劍卷の記事から出たもので、その文を擧げると

頼光瘧病を仕出し、如何に落せども落ちず、後には毎日に發りけり。發りぬれば頭痛く、身ほとほり、天にも着かず地にもつかず、中にうかれて惱まれけり。かやうに逼迫する事、三十餘日にぞ及びける。或時又大事に發りて、少し減につきて、醒方になりければ、四天王の者共看病しけるも、皆閑所に入りて休みけり。頼光少し夜深方の事なれば、幽なる燭の影より、長七尺ばかりなる法師、するゝと歩みよりて、繩をさばきて頼光につけんとす。頼光是に驚きてがはと起き「何者なれば、頼光に繩をばつけんとするぞ、惡き奴かな」とて、枕に立て置れたる膝丸おつ取りて、はたと切る。四天王共聞きつけて、我も我もと走りより、「何事にて候」と申しければ、しかじかとぞ宣ひける。燈臺の下を見ければ、血こぼれたり。手に火を炬して見れば、妻戶より簀子へ血こぼれけり。此を追ひ行く程に、北野の後に大なる塚あり。彼塚に入りたりければ、即ち塚を掘り崩して見る程に、四尺許なる山蜘蛛にてぞありける。搦めて參りたりければ、頼光「安からざることかな、是ほどの奴に誑され、三十餘日惱さるゝこそ不思議なれ、大路に曝すべし」とて、鐵の串に指し、河原に立ててぞ置きける。是よりぞ膝丸をば蜘蛛切とぞ號しける。

【概評】　頼光主從の武勇傳説を取扱つた曲には、本曲のほかに「大江山」「羅生門」があり、いづれも興味の深いもので、後世の文藝にも大きな影響を與へてゐる。その中でも本曲は節の運び方が簡勁で、舞臺的興趣の豐かなものであるが、たゞ前ヅレ胡蝶は全體から遊離してゐて、これを單純な頼光の侍女としてのみ見る時は、むしろ削除した方がよいやうに思はれる。これについて「能樂」第十一號に池内如水氏が、

我輩は此の胡蝶を以て、通常頼光に近侍せる女と見ず、是れ又蜘蛛の精靈の變化の一種にして、頼光の病氣と云へるは、畢竟此の女に存するものと認めたく思ふたり。されば此の「色を盡して」といふ色は、いろいろ品々など云ふ意味にあらずして、讀んで字の如く色欲の色と正解するを以て正當とす。……其精靈となりて入込むに就ては、從來頼光の寵愛せし侍女を喰ひ殺して、人知れず其後に代りたりと見ても良し、又曾に召抱へられし非常の美人と見ても可なり。或は床の下を檢せば眞正の胡蝶の白骨は切々にたりて隱しありしかも知れず。

といはれたのは面白い見解で、かう見ると、胡蝶の登場は極めて有意義なものとなるのである、

【一】

後見、一畳臺を脇座に置く。ツレ源頼光、風折烏帽子・襟淺黄・着附厚板・練貫・大口・腰帯・扇の装束にて出で、臺の上に安坐し、後見の出したる葛桶に左手をかく。後見その上に肩より縫箔を覆ひて病床にある態。トモ頼光従者、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の装束にて太刀を持ちてツレの後より出で、太刀をツレの前に置きて地謡座前に坐す。

次第の囃子にて、ツレ胡蝶、面連面・鬘・鬘帯・襟赤・着附箔・唐織着流・扇の装束にて舞臺に入り、名乗座にて囃子座の方に向き、

胡蝶次第「浮きたつ雲の行方をや。浮きたつ雲の行方をや。風の心地を尋ねん

地取に正面に向き、

胡蝶サシ「これは頼光の御内に仕へ申す。胡蝶と申す女にて候。「さても頼光例ならず悩ませ給ふにより。典薬の頭より御薬を持ち。唯今頼光の御所へ参り候

といひて脇座の方に向き、

第一段

舞臺は京都源頼光の館頼光病室の態で、ツレ源頼光、トモ従者を従へて登場。病床に臥してゐる。ツレ胡蝶登場。

胡蝶「お危いやうに伺つたお風邪の御容態をお伺ひしませう」

と次第にわが心持を謡ひ、

胡蝶「私は頼光様の御内にお仕へしてゐる胡蝶と申す女でございます。さて頼光様にはひどくお悪いので、典薬頭からお薬を戴いて、これから頼光様の御邸へ伺ふのです」

と見物人に自己紹介をし、さて頼光の館に着いた態で、

【一】

○浮きたつ雲の行方をや―雲に蜘蛛を匂はせて、風の序とした。

○風の心地を尋ねん―風邪の容態を見舞はう。但し元禄本及び寶剛喜の諸流には「風の心に任すらん」とあり従つて上の句も単なる序詞ではなく「この世は風のままにまに動いて行く浮雲のやうなものである」といふ意味になる。

○頼光―源満仲の子で、圓融帝より後一條帝に至る五朝に仕へ、左馬権頭に至り治安元年七月薨じた。武勇の聞えの高かつた人である【大江山】参照。

○胡蝶―假作の人物。

○典薬の頭―醫薬のことを司る典薬寮の長官。

胡蝶「いかに誰か御入り候

トモ「誰にて御座候ぞ

胡蝶「典薬の頭より御薬を持ちて。胡蝶が参りたる由御申し候へ

トモ「心得申し候。御機嫌を以て申し上げうずるにて候

（胡蝶下に居る。）

【三】頼光サシ「ここに消えかしこに結ぶ水の泡の。浮世に廻る身にこそありけれ。げにや人知れぬ心は重き小夜衣の。恨みん方もなき袖を。かたしきわぶる思ひかな

トモ（頼光に對して）「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶の参られて候

頼光「此方へ來れと申し候へ

トモ「畏つて候。（立ちて胡蝶の前へ出で）此方へ御参り候

胡蝶「どなたかお出でてございませうか。

従者「どなたです。

胡蝶「典薬頭からお薬を戴いて、胡蝶が参りましたと、かうお取次ぎ下さい。

従者「承知しました。御機嫌のおよい折を見計つて申しあげませう。

【三】

頼光「人間の身といふものは、消えたかと思へば出來、出來たかと思へば消える水の泡のやうな、果敢ないものだ。殊に自身は重い病氣に罹つて、夜着さへ重く感じられるほどからだが弱り、誰恨みやうもなく、寝ることも易々とは出來かねてゐることだ。

（病床に臥いてゐる。從者がその前に出て、）

従者「申しあげます。胡蝶が典薬頭からのお薬を持つて参られました。

頼光「こちらへ來るやうに申せ。

従者「畏りました。

（胡蝶の控へてゐる所へ來て、）

○御機嫌を以て—御機嫌のよい折を見計つて。

【三】

○ここに消えかしこに結ぶ水の泡の浮世に廻る身にこそありけれ—千載集、藤原公任の歌、

○人知れぬ心—人には分らない苦しい思ひ。

○重き小夜衣—新古今集、寂然法師の歌「さらぬだに重きが上の小夜衣わが妻ならぬ妻な重ねそ」を借り、病氣の爲にからだが弱つて夜着さへ重く感ぜられるといひ、衣の縁語裏にかけて恨みんとつゞけた。小夜衣の小は接頭語。

○かたしきわぶる—片袖を下に敷いて寝ることも思ふやうにならない。

「期を待つ」—死期を待つ。

○いやいやそれは苦しからず—侍女の詞としては穏當でない。古典に擧けた古書本の方がよい。

○思ひも捨てず—あきらめてはしまはず。

○色を盡して—様々療治の手段を盡して。

○夜晝の—夜晝ともに療治の手段を盡すと、夜晝の區別もなく病に惱むと、兩方にかけた。

○心を轉ぜず・・・氣を他へ移しも出來ず。

【二】

へ

胡蝶、典藥の頭の使として…中に出て下に居て頼光に、

胡蝶　いかに申し上げ候。典藥の頭より御藥を持ちて參りて候。御心地は何と御入り候ぞ

頼光　昨日より心も弱り身も苦しみて。今は期を待つばかりなり

胡蝶　いやいやそれは苦しからず。病ふは苦しき習ひながら。療治によりて癒る事の。例は多き世の中に

頼光　思ひも捨てず様々に

地上歌　色を盡して夜晝の。色を盡して夜晝の。境も知らぬ有様の。時の移るをも。覺えぬ程の心かな。げにや心を轉ぜずそのままに思ひ沈む身の。胸を苦しむる心となるぞ悲しき

【三】

地上歌の中程に、胡蝶…静かに立ち切戸より入る。

胡蝶　切戸に入ると、シテ、前…角帽子・沙門・襟花色・着附無色

従者「こちらへお通りなされ」

胡蝶は頼光の前に出て、

胡蝶「申しあげます。典藥頭からお藥を戴いて參りました。御氣分は如何でございます」

頼光「昨日からめつきり元氣も衰へ、からだも苦しくなつて、今はたゞ死期を待つてゐるばかりだ」

胡蝶「いえ〳〵決してそのやうなことはございません。病氣といふものは苦しいものではございますが、療治次第で癒る例は多いのでございますから……」

頼光「自分もさう思つて、この世をあきらめきらず、日夜色々と療治の手段を盡してゐるのだが、絶え間なく病氣に苦しめられて、時の過ぎ行くのも氣がつかないやうな有様だ。かうして氣を外へ移すことも出來ず、終始苦しい思ひに胸を痛めるのは、ほんとに悲しいことだ」

胡蝶、退場。

【三】

第二十…

厚板・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて巢を隱し持ち、橋懸一の松に出で、

シテ一聲「月清き。夜半とも見えず雲霧の。かかれば曇る。心かな。（頼光に向ひ）いかに頼光。御心地は何と御座候ぞ

頼光「不思議やな誰とも知らぬ僧形の。深更に及んでわれを訪ふ。その名はいかにおぼつかな

シテ「おろかの仰せ候や。惱み給ふもわがせこが。來べき宵なりささがにの

（と謡ひながら舞臺に入り常座に立ち、）

頼光「蜘蛛の振舞かねてより。知らぬといふに猶近づく。姿は蜘蛛の如くなるが（と居立ちてシテを見る）

シテ「かくるや千筋の絲筋に（と頼光を目がけて巢を一つ投げ掛く）

頼光「五體をつづめ（と平伏し）

僧「いかな聖代でも、妖怪が業をすれば、かうして月に雲霧がかゝるやうに、病氣にさせてやれるのだ」

（と獨言をいつて、頼光に向ひ、）

僧「申し頼光殿、御病氣はどんな御様子です」

頼光「これは不思議だ、誰だか分らないが、僧の姿をしたものが、この夜更になつて自分を訪ねて來た。一體何といふものだらう、變なことだ」

僧「迂濶なことをいふ方だ。今病氣に苦しんで居られるのも『わがせこが來べき宵なりさゝがにの』と歌に詠まれた、あの蜘蛛の所爲ではないか」

頼光「蜘蛛の所爲だとといふことは、これまで全く氣がつかなかつた。……といふうちに、猶近づいて來る姿を見ると、なる程蜘蛛のやうだが……」

僧「かうして千筋の絲をかけてやるのだ」

（と頼光を目がけて蜘蛛の絲を投げかける）

頼光「その爲にからだがこのやうにちゞまる……」

○月清き夜半とも　聖代を月清き夜に、妖怪を雲霧に、頼光の病を曇る心に喩へてもの凄じい夜景を叙べた。

○わがせこが來べき宵なりさゝがにの　下句「蜘蛛のふるまひかねてしるしも」で、古今集に「衣通姫のひとりゐて帝を戀ひ奉りて」と詞書して出た歌。この歌詞を借りて蜘蛛の序とし、頼光の惱むのは蜘蛛の所爲であるといつたのである。さゝがには笹蟹で蜘蛛の一名であり雲と區別する爲に蜘蛛の枕詞とす。

○つづめ　ちぢめ。

シテ「身を苦しむる（と頼光を見詰め）

地上歌「化生と見るよりも。化生と見るよりも（頼光太刀を取上げ）。枕にありし膝丸を（太刀を抜き）。抜き開きちやうと切れば（と臺より飛び下りシテと切組み）。そむくる所を續けさまに。足もためず、薙ぎ伏せつつ。得たりやおうと罵る聲に。形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり

（形は消えて、とシテ巣を頼光に投げかけて橋懸へ走り込み直に幕に入る。頼光巣を薙ぎ拂ひてシテを一の松まで追ひかけ行き幕を見込み、舞臺に歸り臺に腰をかく。）

僧「さうして身を苦しめるのだ」

かくして、この僧形の者が妖怪變化であることが分るや否や、頼光は枕許にあつた膝丸の刀を拔いて、ちやうと切りかゝると、蜘蛛は逃げ出したが、その後を續けさまに、足を踏みしめる暇もなく斬りつゞけて、僧形の者を薙ぎ仆し、頼光が『それ見ろ、やつつけてしまつたぞ』といふや、はや僧形の姿は消えてしまつた。

○化生―妖怪變化。
○枕にありし―枕もとにあつた。
○膝丸―源氏重代の寶刀の名。保元物語には「牛千頭が膝の皮を取落したりければ」この名をつけられたといふ。解説參照。
○そむくる所―後むきになつて逃げるところ。
○足もためず―足を踏みしめる暇もなく。
○得たりやおう―おゝうまくやつてのけたと成功した時に發する聲。

【四】

（早鼓にて、ワキ獨武者、侍烏帽子・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて舞臺に驅け入り、常座にて頼光に禮儀して、）

ワキ「御聲の高く聞え候程に馳せ參じて候。何と申したる御事にて候ぞ

頼光「いしくも早く來たる者かな。近う來り候へ語つて聞かせ候べし（ワキ眞中に進む）（五）さても夜半

（頼光の聲に驚いて馳せ參じた態で、ワキ獨武者登場、頼光の前に出て、）

武者「わが君の御聲が高く聞えましたので、馳せ參じました。どう遊ばしたのでございます」

頼光「よくもまあ早く來てくれた。もつと近う寄るがよい。今の樣子を話して聞かせよう」

（獨武者、頼光の側へ行く。）

○いしくも―いみじくも、見事にも。

○言語道斷―いひやうもなく驚いたこと。瓔珞經に「言語道斷心行所滅」
○太刀つけのあと―太刀で斬りつけた跡。
○けしからず―異常に。
○たんだへ―尋ね求めての意。「探題」を動詞にはたらかせたのである。

ばかりの頃。誰とも知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞと尋ねしに。わがせこが來べき宵なりささがにの。蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌を連ね。即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。われに千筋の絲を繰りかけしを。枕にありし膝丸にて切り伏せつるが。化生の者とてかき消すやうに失せしなり。これと申すも偏に劒の威德と思へば。今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべし。なんぼう奇特なる事にてはなきか

ワキ「言語道斷。今に始めぬ君の御威光劒の威德。かたがた以てめでたき御事にて候。（橋懸の方を見て）又御太刀つけの跡を見候へば。けしからず血の流れ候。（賴光に向きて）この血をたんだへ。化生の者を退治仕らうずるにて候

賴光「さて今の事件といふのは、この夜中に、誰だか分らないが、僧の姿をしたものが來て、自分の容態を尋ねたのだ。それで『お前は何者だ』と尋ねると、『わがせこが來べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまひかねてしるしも』といふ古歌を吟じて、忽ちに七尺ばかりの大きな蜘蛛となり、自分に千筋の絲を投げかけたので、枕許にあつた膝丸で斬り伏せたのだが、妖怪のことだから、かき消すやうに消え失せてしまつたのだ。かうして妖怪を斬り伏せることの出來たのも、全く劒の威德だと思ふから、今日からこの膝丸を蜘蛛切と名づけようと思ふ。實に珍しいありがたい事ではないか」

武者「これは驚き入りました。今日に始まつたことではございませんが、わが君の御威光と申し、劒の威德と申し、いづれから見ましても、實にめでたいことでございます。（僧形の逃げた跡を見て）御太刀を以てお斬りになりました跡を見ますと、非常に血が流れてゐます。この血の道筋を尋ね求めて、かの妖怪を退治致さうと存じます」

頼光「急いで参り候へ

ツレ「畏つて候

早鼓にてツレ中入、ツレも共に幕に入る。

頼光「急いで行け」
武者「畏りました」
獨武者、妖怪退治に出掛ける態で退場、第一段終つて源頼光も退場。

【型】早鼓にて、狂言早打、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帯・扇・小刀の裝束にて杖をつきて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。源頼光の御内獨武者に仕へ申す者にて候。唯今これへ出づる事餘の儀にあらず。さても頼光この程御心地例ならず。典薬頭より御薬を持たせ。胡蝶と申す女房を御遣はし候が。それにつき夜前いづくとも知らぬ僧形一人。頼光の御寝所に参り。いかに頼光御心地は何と御座あると申す。頼光不思議に思し召し。誰なれば行方も知らぬ僧形の。われを尋ぬると思し召し。御枕を上げ給へば。その時僧形。わがせこが来べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かねてしるしもと、いひ。御側へ寄り。千筋の絲を繰りかけ候間。その時頼光膝丸を持つて切り拂ひ給へば。化生の者とてかき消すやうに失せ申し候處に。頼うだる御方聞きつけ給ひ。御聲の高く聞え候程に馳せ参じたると御申し候へば。いしくも早く来るものかなとて。かの僧形の御身近く寄り添ひ。古歌を吟じたる様子。御秘藏の膝丸にて御手柄の様體御物語りありて。今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべしと御申し候へば。頼うだる人申され候は。げにも血の流れたる様體隠れなく候。これをしるべに尋ね参り。化生の者を退治申さうずるとありければ。尤もと仰せられ候故唯今より御出で候。我等も御供申さんと存じ。これまで出でて候。誠に頼うだる人の御出である上は。いかなる化生なりとも。退治せられうずる事は疑ひも御座ない。某も化生の住家へ参り。恐らくは手柄を致さうと存ずる。頼うだ人の御出であらば。こなたへ知らせて給はり候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【註】

○頼うだる御方—頼みにしてゐる人、主人。

【五】

○土も木もわが大君の―太平記卷十六、紀朝雄の歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼の宿と定めむ」を引いた。委しくは「田村」の語釋に擧ぐ。

○獨武者―「大江山」にも「賴光保昌綱公時貞光季武獨武者」「保昌が館に獨武者」などとあるが、その名は分らない。刊行會本辭解に「或は火取武者にて蠋又は松明の役を承りし童武者に猛勇の者ありしを世に呼び慣はしたるなどか」とあるのは如何であらう。

○天魔鬼神―天魔は天界の魔王、鬼神は不可思議力を持つた鬼、

【五】

後見、屋根に青葉をつけ引廻を掛けたる塚の作物を大小前に出す。

一聲の囃子にて、後ワキ獨武者、白鉢卷・着附厚板・法被・白大口・腰帶・襷・太刀の裝束、ワキヅレ（立衆）從者二人又は四人、白鉢卷・着附厚板・白大口・腰帶・太刀の裝束にて橋懸一の松に出で、正面に向き、

立衆「一聲」土も木も。わが大君の國なれば。いづくか鬼の。やどりなる

ワキ「その時獨武者進み出で。かの塚に向ひ。大音上げていふやう。これは音にも聞きつらん。賴光の御内にその名を得たる獨武者。如何なる天魔鬼神なりとも。命魂を斷たんこの塚を地に崩せや崩せ人々と（とワキ立衆を見返り）。呼ばはり叫ぶその聲に。力を得たる。ばかりなり（と舞臺に入り脇座に立並び塚に向き）。下知に從ふ武士の。下知に從ふ武士の。塚を崩し。石をかへせば（と塚の上を見て二足出で）。塚の內より火焰を放ち。水を出だすと

【五】

第二段

舞臺は洛外土蜘蛛の塚。

後ワキ獨武者、ワキヅレ從兵大勢を引連れて登場

武者從兵「土も木も一切のものが皆、わが大君のものであるから、この國中、どこに鬼の棲むべき所があるものか」

と勇ましく塚の前に出で、

その時獨武者が進み出て、かの妖怪の棲む塚に向つて、大きな聲を張り上げて、

武者「自分のことは噂にも聞いたであらうが、賴光の家來で殊に名の高い獨武者だ。いかなる天魔鬼神であらうとも、命を斷つてしまふのだ。さあ皆の者、この塚を崩せ崩せ」

と叫ぶと、その聲に一同の者は愈元氣を加へるばかりである。そして主の命令に從つて、武士達が塚を崩し石を掘り返すと、塚の中から或は火焰を放ち或は水を出して、これに對抗したが、武士達はこれを意とせず、大勢で古塚

【六】

〇葛城山―大和國葛城郡にある。日本書紀に「神武天皇已未春二月、高尾張邑有二土蜘蛛一、其爲人也、身短而手足長、與二侏儒一相類、皇軍結二葛網一而掩襲殺之、因改號二其邑一曰二葛城一」とあるに據つて「われは昔」といつたのである。但しこゝにいふ土蜘蛛の塚は、劍卷によれば京都「北野のうしろ」にあつたのである。
〇土蜘蛛―もと太古の土賊の名で、このことは前揭日本書紀の外古風土記などにも出てゐる。但しこゝでは實物の土蜘蛛として取扱つた。劍卷には山蜘蛛とある。

いへども（と塚の眞中を見て二足出で）。大勢崩すや古塚の（と二三足出で）。怪しき岩間の陰よりも。鬼神の形は。現れたり

【六】と後見作物の引廻を下す。塚には蜘蛛の巣を掛け、その中に、後ジテ土蜘蛛、面顰・赤頭・金緞鉢巻・襟花色・着附段厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて兩手を突き居る。ワキシテの姿を見て二三足下り太刀に手をかく。

後ジテ「汝知らずやわれ昔。葛城山に年を經し。土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障りをなさんと。賴光に近づき奉れば。却つて命を。斷たんとや

ワキ「その時獨武者進み出で（と塚に少し近寄り）

地「その時獨武者進み出でて。汝王地に住みながら。君を惱ますその天罰の（と塚へ二足つめ）。劍にあたつて惱むのみかは。命魂を斷たんと。手に手を取り組みかかりければ（と立衆と竝びて塚へ近づき）。蜘蛛の精靈千筋の絲を繰りためて（シテ巢を破りて

を崩すと、その怪しげな岩の陰から鬼神の姿が現れ出た。

後ジテ土蜘蛛が作物の塚から現れ出る。

【六】

土蜘「お前達はおれを知らないのか。おれは昔大和の葛城山に永年住んでゐた土蜘蛛の精靈だぞ。昔ばかりではない、今の大御代に於ても障りをなさうと思つて、賴光に近づいて行つたところ、反對におれの命を斷たうとするのか」

その時獨武者は進み出て、

武者「汝はこの王地に住みながら、わが君をお惱ませした、その天罰が當つて、この劍で苦しめられただけでは濟まない、命もとられてしまふのだぞ」

と一同一致協力して、土蜘蛛に組んでかゝると、蜘蛛の精靈は千筋の絲を引き出して、獨武者に幾度も幾度も投げかけたので、その絲が獨武者の手足に

半身を塚より出し）。投げかけ投げかけ白絲の（と手に持ちたる巣をワキに投げかけ）。手足に纏はり五體をつづめて（ワキ後へ下り）。仆れ臥してぞ見えたりける

とワキ右足を折り太刀を抜き放ちて脇座へ飛び返りすつくと立ちて太刀をかざす。シテ作物より出で、

〔舞働〕

シテ巣を投げかけてワキの身を纏はんとし、ワキ太刀にてこれを切拂ひ互に力を爭ひ、

ワキ『然りとはいへども

地『然りとはいへども神國王地の惠みを賴み。かの土蜘蛛を。中に取りこめ大勢亂れ。かかりければ（ワキ立衆左右に分れてシテの前に太刀を差出す）。劒の光に。少し恐るる氣色を便りに（シテ安坐す）、切り伏せ切り伏せ土蜘蛛の（一同にてシテを切りつけ）。首うち落し（ワキシテを切り）。喜び勇み。都へとてこそ。歸りけれ

シテ「首うち落し」に殺されたる意にて切戸より入る。ワキ太刀をかたげて仕手柱先に留拍子を踏む。

纏はり、からだが縮まつて、今にも倒れてしまひさうになつた。

〔舞働〕に土蜘蛛と獨武者とが一は巣の絲を以て一は太刀を以て相爭ふ。

然し、獨武者等がわが國が神國であり王地であることを力賴みにして、大勢で土蜘蛛を包圍し、亂れ打ちに打ちかかると、土蜘蛛は劒の光に少し恐れる樣子に見えた。これを幸ひと元氣を增して、土蜘蛛を切り伏せ切り伏せして、遂にその首をうち落し、喜び勇んで都へ歸つた。

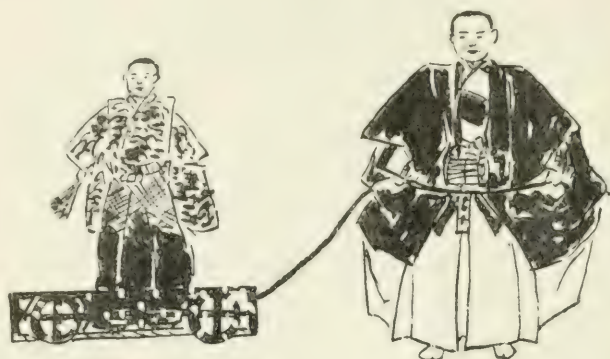
考異

諸流（五流）

【一】ワキ「下雲浮きたつ（下懸たる）雲の行方をや（下懸ば）風の心地を尋ねん（寶剛喜心に任すらん、春心に尋ねん） 【五】後ツレ一聲「土も木も……東の宿りなる（春白波の音更け過ぐる荒磯に旅つくりそふ関の岸、剛藤波のかゝれる木々の梢をば嵐やよせて散らすらん、喜春ニ略同ジ）

古名本（元祿八年本）

【一】胡蝶「浮きたつ……風の心地を尋ねん（元心に任すらん）。サシ これは頼光の御内（元御所）に…… 御薬を持ち（元申）…御所へ参り（元歸り）候 【二】胡蝶「いやいやそれは苦しからず（元實々仰はさる事なれ共、病ふは苦しき習ひ（元物）ながら、療治によりて癒る（元かなふ御事の…… 頼光「思ひも捨てず（元力を添へて）…… 地上哥「色を盡して……程の心（元風情）かな……心となるぞ悲しき（元クセ「然るに六賊の。其心得をしらるるや。か程苦しき胸のうち。いかで薬のなかるべき。頼「今の我等が有様を。同「かたるもよしな世の中に神も佛もなかるらん。人しれぬ思ひをは。誰に語りて慰んと。起臥に我心くるしき事をいかにせん） 【三】シテ一「おろかの仰せ候や憐み給ふも（元ナシ）わがせこが…… 地上哥「化生と……是（元を）もためず…… 【四】頼光「いしくも（元實々）早くも……聞かせ候べし（元給ふ）。さても（元今夜）夜半ばかりの頃（元かとよ）……古歌を連ね御ち（元詠し其たけ）七尺……絲を繰りかけしを（元かくる所を）……かき消すやうに失せしなり（元行衛もしらす失ぬ）……ワキ「言語道斷…剣の（元御）威徳……めでたき事にて（元ふ）候又（元是にいまた）御太刀つけのあとを見候へばけしからず（元と覺しくて）血の（元ナシ）流れ候この血をたんだへ（元しるへに尋行）…… 頼光「（元實々いしくも申者哉）さらば急いで参り候へ…… 【六】後シテ「汝知らずや……近づき奉れば（元病ふを成しに）……

土車（つちぐるま）　觀（喜）

解　説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　**ワキ**　僧（深草少將）　**狂言**　善光寺堂守、**子方**　少將の一子、**シテ**　傅小次郎

【所】　信濃國　善光寺

【時】　（無季）

【作者】　世子六十以後申樂談儀、能本作者註文に世阿彌の作とし、申樂談儀には「つちくるま曲舞、こはきもんし一有、ねん比すべし」又「今のかしはさきにはつちくるまの曲舞をいれらるゝ」ともある。親元日記に文明十五年三月十二日演能のことが出てゐる。

【梗概】　深草少將は妻に死別した悲しみの餘り、一子を捨てて出家し、信濃國善光寺に來てゐた。傅小次郎は若君とともにその行方を尋ね廻り、心も亂れつつ、土車を引いて善光寺に辿り着き、遂に父子再會の喜びを得た。

【出典】　作者の創案した世話物で、典據といふべきほどのものはない。

【概評】本曲は「高野物狂」とともに男の物狂を主想としたもので、一は養君の行方を失つて、これは養君の父を尋ねて物に狂ふのであるが、一體物狂などといふことは、心の狭い情の深い女性に適はしいもので、六尺の男子にはもと〳〵似合はしからぬものである上に、殊に本曲の父少將は妻を戀慕する餘りにわが子を捨ててゐるのであるから、さうした父を持つた子に對しては一層同情されながらも、父子の別離に對して深い哀憐の情が起りにくい。從つてシテの物狂に對しても十分な感興を催し得ない。構想に於て「高野物狂」よりも劣つてゐると思ふ。たゞ土車といふ珍しいものが、一曲のあやをなしてゐるだけである。

【一】

次第の囃子にて、ワキ僧(深草少將)、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束にて出で、名乘座に立ちて囃子座の方に向き、

ワキ次第「夢の世なれば驚きて。夢の世なれば驚きて。捨つるや現なるらん

地取に正面に向き、

ワキ「かやうに候者は。深草の少將がなれる果てにて候。われ妻に後れ。浮世あぢきなくなり行き候程に。一子を捨てかやうの姿となりて候。われ世に在りし時より。善光寺への望みにて。この程は信濃の國に候が。今日もまた御堂へ參らばやと思ひ候

【一】舞臺は信濃國善光寺。ワキ深草少將、出家姿で登場。

少將「この現世はまことに果敢ない、夢のやうなものであるが、このことに氣がついて出家入道しただけは、夢でない、正しき事實である」

少將〔次第に自分の心持を述べ、〕「こゝへ出ました私は、もと深草の少將といはれた身がこのやうになつたのです。私は妻に死に別れて、浮世があぢきなくなつて來たので、一人の子をも見捨てて、このやうな出家姿となつたのです。私はまだ在俗の頃から、善光寺に參詣したいといふ望みを持つてゐましたので、この間からこの信濃國に來てゐるのですが、今日もまた御本堂にお參りしようと思ふのです」

【一】

○夢の世なれば驚きて—この次第「敦盛」のと同じ。蓮生法師の歌「夢の世の現なりせばいかゞせむ覺め行くあとを待ちてこそあれ」に據つたもので、この世は果敢ない夢のやうなものであるが、これに氣がついて、出家入道したのは夢でない事實であるとの意。

○深草の少將—「通小町」のシテと同名であるが關係はない。單なる假作人物である。

○善光寺—信濃國長野にあり、推古天皇十年若麻續東人善光が麻續里に草創し皇極天皇元年今の地に移したもので、欽明天皇十三年百濟國聖明王の獻じた阿彌陀如來を本尊とす。

といひて脇座へ行き下に居る。

狂言善光寺堂守、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は、信濃の國善光寺の如來堂を守る者にて候。今日は某が番にて候間。罷り出で番の致さばやと存ずる

といひて常座の前に行き下に居る。

【二】

後見、土車の作物に繩をつけて橋懸の中程に置く。

一聲の囃子にて、子方少將の子、襟赤・着附縫箔・稚兒袴・扇の裝束、シテ小次郎、襟淺黄・着附段熨斗目・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、子方は車に乘り、シテは車の前に行き綱を持ちて、

シテ「いかにあれなる道行人。善光寺への道教へてたべ。「なに物狂とや。『よしさ思しめされんにつきては。なほ御情は有明の。つれなくも御通り候ものかな。「これに御入り候は主君にて御座候が。父を失ひかなたこなたを御尋ね候(子方下に居てしをる)。これを憐みてたび給へ。(子方に向ひ)あら笑止や又むつかり候よ。いやいやさやうに心弱くむつかり候はば。今日よりしては御供申

こゝ見物人に自己紹介をして御堂に參詣す。狂言の堂守ら登場して、御堂の番をする。

【二】

橋懸は都から善光寺へ參る街道で、シテ傅小次郎子方深草少將の一子を粗末な土車に乘せて登場、わが養君の父を尋ねあぐんで氣も狂つて居る。小次郎は道行く人に言葉をかける心で、

傅「申し、その道を歩いて行く方。善光寺へ參詣する道を敎へて下さい。……なに私を氣違ひだと仰しやるのか。氣違ひならば氣違ひでもよろしい。で、私を氣違ひとお思ひになるならば、なほ更のこと、私にお情をかけて下さつてもよささうなものだのに、まあ何といふ無情な、こちらがお尋ねしてゐるのに、素知らぬ顏をして、素通してしまはれることだ。こゝにお出でになるのは、私の御主君だが、父君の行方が知れないので、あちらこちらと尋ねていらつしやるのです。そのお心持に御同情して下さい。(若君が泣いてゐるのを見て)あゝ困つた。またおむつかりになるのですね。えゝもうよろしい、そのやうにお氣が弱くておむつかりになる

【二】

○物狂―氣ちがひ。
○御情は有明の―御情はあるべきを有明にいひかけ、古今集、壬生忠岑の歌「有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものはなし」に據り、つれなくもと續けた。つれなくは情なくといふ意。
(ﾛ)御通り候―刊行會本には「お通り候」とある。
○笑止や―困つたことだ。
○むつかり―小兒が機嫌を惡くしてすね泣くこと。

すまじく候（と下に居る）

子方「いかにめのと。今日よりしては泣くまじいぞとよ

シテ「あらいとほしや。さあらばいづくまでも御供申し。父御に逢はせ參らせ候べし（二人とも立上り）。

『痛はしや古は。鸞輿屬車に召されし御身の。名も高かりし日月も。地に遠近の土の車。引きかへしたる有様かな（と面を伏せ）。諸佛念衆生。衆生不念佛（と綱を放して合掌）

シテ子方〔次第〕住まで世に經る土車。住まで世に經る、土車めぐるや雨の浮雲（と謠ひながら綱を持ちて子方と向合ひ）

地「住まで世に經る土車。住まで世に經る土車めぐるや雨の浮雲（と二人とも正面に向き）

子方サシ「これは都のほとり深草の者にて候が、思

のならば、今日からはお供を致しますまい」

子「ねいめのと、今日からはきつと泣かないよ」

傅「おゝ、おいとしい。それならばどこまでもお供して、お父さまにお逢はせ申しませう。……あゝお氣の毒な、昔は結構なお輿やお車にお乘りになつた、御立派な御身分であつたものを、今はこのやうな遠い田舍を、みぢめな土車に乘つてお出でになるとは、何といふ昔とは裏表な御境遇だらう。裏表といへば、佛樣は衆生をお念ひ下さるのに、衆生は佛樣のことを念はないのだ。あゝ勿體ないことだ」

（と合掌して佛を念じ、）

子傅「同じ所に落ちついて住むことも出來ず、この土車のやうに、あちらこちらへと流浪して、雨催しの浮雲のやうな、不安なその日その日を過してゐることだ」

（と身上を歎き、）

子「私は都近くの深草の者なのですが、意

○めのと―守り役の男。

○いとほしや―いぢらしく氣の毒だ。

○鸞輿―鸞鳥の鳴き聲に似せて鈴をつけた輿。天子の乗御であるが、こゝでは華麗な樣を誇張していつたのである。

○屬車―天子に從屬する臣下の乘る車。

○名も高かりし―名の高きを日月の高きにいひかけた。

○地に遠近の―地に落ちといひかけた。

○土の車―土を運ぶ粗末な車。

○引きかへしたる―全く反對した、これまでとは裏表な。車を引きといひかけたのである。

○諸佛念衆生―諸佛は衆生の利益を念ふが、衆生は佛の慈悲を念はない。もの事の逆である例として擧げたのである。

○住まで世に經る―一所に定住しないで、轉々流浪する身をわが引く土車の輪の廻ぐるさまに比べたのである。

○雨の浮雲―流浪の身を雨を催す浮雲に喩へたのである。

○深草―山城國紀伊郡、伏見の南。

○かなしみの母―愛する母かなしはいとしに同じ。
○思ひの家―歎きに沈んだ家。火の家、火宅の意をも含めてゐる。
○白雪の―行方をも知らずを白雪に、雪の跡を父の跡にいひかけた。
○春秋―「しゆんじふ」とも訓ふ。
○まとはされ―纏はされ。取卷かれ。始終花鳥酒宴の遊びに明かし暮らして。
○信濃の―憂き旅をしといひかけた。

ひの外に父を失ひ。諸國を廻り候なり

シテ「悲しきかなや生死無常の世の習ひ。一人に限りたる事はなけれども

シテ子方（向合ひ）「かなしみの母は空しくなり。殘る父さへ幾程なく。思ひの家を出で給へば。その行き方をも。白雪の。跡を尋ねて。迷ふなり

シテ（正面に向き）「あはれやげに古は。花鳥酒宴にまとはされ。春秋を送り迎へし御身の。かくあさましくなりぬれば。僅かなる露の命を殘さんと

シテ上歌「念佛申し鼓を打ち

地「袖をひろげ物を乞ふ。上歌「心を人の憐まば。心を人の憐まば。尋ぬる父の行き方を。教へてたばせ給へと。問ふは果敢なき憂き身ぞと。思ひながらも憂き旅を。信濃の國に聞えたる善光寺にも着きにけり　善光寺にも着きにけり

外なことにも、父の行方が分らなくなつたので、諸國を尋ね廻つてゐるのです」

傳「あゝ悲しいことだ。生死の定め難い、何事につけても果敢ないのが、この世の習はしで、不仕合なのは、何も自分一人に限つたわけではないけれども……」

子「なつかしい母上はお亡くなりになり、後にお殘り下さつた父上さへ、間もなくお悲しみの餘り、出家なされたので、そのお行方も分らず、かうしてそのお跡を尋ね迷うてゐるのです」

と問はず語りに身上話をいひ、

傳「ほんとにお氣の毒なことだ。昔は花鳥の風流酒宴の樂しみに明暮の時を過して、年月をお送りになつたお身上であるのに、今はこのやうなあさましい境遇におなりになつたので、果敢ない僅かな露命を繋ぐ爲に、念佛したり、鼓をうつたりして、袖を出して、物を貰つて歩いてゐるのだ。どなたなりと、この心持のお察しがついたならば、どうかお尋ねしてゐる父君のお行方を教へて下さい。……このやうなざまをして、尋ね歩くのは、いかなこと果敢ない辛い身上だと思ひながらも、辛い旅をつゞけてゐるうちに、

―問ふは果敢なき―とシテ車を少し引き、「善光寺にも着きにけり」と子方車より出で舞臺に入り大小前に立ち、シテも後より入りて常座に立つ。後見、車を引く。

【三】

狂言立ちてシテに向ひ、

狂言「いかにこれなる狂人。面白う狂ひ候へ

シテ「いや今は狂ひたうもなく候

狂言「御身はすねたる事を申す者かな。物狂なれば狂へと申す。たゞ狂うて見せ候へ

シテ「いやいや狂ひ候まじ

狂言「さては狂ふまじきか。近頃憎き事を申す者かな。狂ふまじきならばこの如來堂には叶ふまじきぞ。急いで出で候へ。いや〳〵御堂ばかりは曲もなく候。この國には叶ふまじ。この國ばかりはなほもせばく候。總じて天が下に叶ふまじきとよ

シテ「何と天が下に叶ふまじきと候や。恐れながらおことの身として。天が下に叶ふまじとは思ひもよらぬ仰せかな。そのかみ天智天皇の御宇かとよ。千方といひし逆臣ありしが。その身も

この有名な信濃の善光寺に着いた―

と主從ともに悲しい思ひをしながら車を引いて行くうちに、遂に善光寺に着いた態で舞臺に入る。

【三】

悲しみの餘り心の亂れた小次郎が車を引きながら善光寺へ來たのを見て、狂言の堂守が小次郎に向ひ、

堂守「おい氣違ひ、面白く物狂を舞つて見ろ」

傳「いや今は狂ひたくもない」

堂守「お前はすねた事をいふ男だな。お前は氣違ひだから物狂をしろといふのだ。是非狂つて見せろ」

傳「いや狂ふまい」

堂守「ではどうしても狂はないといふのか。實に憎いことをいふ奴だ、狂はないならば、この如來堂へは入れてやらないぞ。すぐ出て行け。いや御堂だけでは面白くない。この信濃國に居つてはならない。いやそれだけでもまだ足りない、この日本どこにも居ることはならないぞ」

傳「何と仰しやる。この日本國にゐてはならないと仰しやるのか。失禮ながらそなたの身分で、日本國にゐてならないなどといはれるのは、以ての外のことだ。昔天智天皇の御代のことだといふ話だが、千方といふ惡逆の臣があつて、自分自身

【三】◎いかにこれなる狂人―以下、狂言詞齋本の文に從ふ。

○天智天皇の御宇かとよ―太平記卷十六「日本朝敵事」に「天智天皇の御宇に、藤原千方と云ふ者あつて、金鬼、風鬼、水鬼、隱形鬼といふ四つの鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして、矢を射るに立たず、風鬼は大風を吹かせて、敵城を吹破る、水鬼は洪水を流して、敵を陸地に溺らす、隱形鬼は其形を隱して、俄に敵を拉く、如斯の術、凡夫の智力を以て防ぐべきにあらざれば伊賀、伊勢の兩國、是が爲に妨げられて、王化に從ふ者なし。爰に紀朝雄といひける者、宣旨を蒙つて、彼國に下り、一首の歌を讀みて、鬼の中へぞ送りける、草も木も我大君の國なればいづくか鬼の棲なるべき、四つの鬼此歌を見て、さては我等惡逆無道の臣に隨つて、善政有德の君を背き奉りける事、天罰遁るゝ處なかりけりとて、忽に四方に

去つて失せにければ、千方勢を失うて、軈て朝雄に討たれにけり」
○四つの鬼―前掲の金鬼・風鬼・水鬼・隱形鬼をいふ。
○藤原の朝臣―紀朝雄即ち紀朝臣の誤り、千方と混同したのである。
○一天四海―一天の下、四方の海の内。
○あらかねの―土の枕詞。
○われ等まで―車の輪といひかけた。
○道せばからぬ―政道の正しく廣いことを土車を引く道に寄せていつた。
○せかせ給ふ―塞きとめ給ふ。のけ者にし給ふ。
○信濃路や木曾の棧道―かけての序。棧道は信濃國西筑摩郡上松と福島との間にある險道。
○危からぬ―棧道に寄せていふ。
○法の聲―讀經。
○他の力―他力。自力に對する語で、阿彌陀如來の本願力。衆生がわが力を頼みとせずひたすら彌陀の慈悲に縋つて成佛すること。他人の憐みをいひかけたのである。
○佛は衆生を一子と―佛は平等の慈愛を以てすべての

勢ひありし上、四つの鬼を使ひしかば、攻むべきやうもなかりしに。藤原の朝臣一首の歌を書き、鬼の城に遣はすその歌に、『土も木も。わが大君の國なれば。いづくか鬼の。宿と定めん

地 この歌のことわりに。この歌のことわりに。鬼も愛でて去りぬれば。千方も亡び候ひて、一天四海波を、うち治め給へば國も動かぬあらかねの。土の車のわれ等まで。道せばからぬ大君の。御影の國なるをば獨りせかせ給ふか

〔この歌のことわりに―に子方地謠座の前へ行き下に居る。シテは謠に合せて舞ふ。シテはなほ引續き、〕

シテ「殊更當國信濃路や

地 木曾の棧道かけてげに。頼みも危からぬ。法の聲立ててなほ。諸人の憐み他の力洩らさじものを彌陀佛の。御影も普く憐ませ給へ人々。憐みの中にもこのお佛ぞ上なき。佛は衆生を一子

にも力があつた上、金鬼・風鬼・水鬼・隱形鬼といふ四つの鬼を使つてゐたので、これを攻め亡ぼす術がなかつたところ、紀の朝臣が一首の歌を書いて、鬼の城へ送つたのだ。その歌といふのは、――

『土も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼の宿と定めん』

（土も木も、わが國土にあるものはすべて大君のものであるから、王威に背く鬼の栖むべき所がどこにあらう）

といふので、この歌の道理に鬼も感心して、そこを立去つたので、千方も亡びてしまひ、日本國中を鎭定せられたので、あはれな土爾來揺ぎのない國柄となり、あはれな土車を引いてゐる自分どもまで、御仁政の明らかな大君の御惠みに浴してゐるものを、どうして私どもだけのけ者にしようとなさるのだ。

僧「殊にこの信濃國善光寺は願ひごとを必ずお聞き下さるので、御佛に向つて一生懸命讀經申し上げ、なほその上多勢の方々に御同情をお願ひしてゐるのです。阿彌陀如來は他力本願を以てすべての者をお救ひ下さるのですもの、どうか御佛のお慈悲から私どもをお洩らしになりませぬやうに、どうかあなた方も私どもを

と思しめさるれば。殊更われ等が影頼み頼む中にも彌陀は母にてましませば。父にも逢はせて。たばせ給へなまみだ

シテ「阿彌陀佛

地「阿彌陀佛。歌舞の菩薩聲々に。花のふり鼓。篳篥笙の笛和琴。聲を上げて叫べども。父とも答へずあはれとだにも知らざれば。よしそれまでぞ。ささらも八撥をも。うち捨てて狂はじ皆うち捨てて狂はじ

（と舞ひて下に居る（物狂）。ワキこれを見て立ち、）

【四】ワキ「不思議の事の候。これなる物狂を如何なる者ぞと思ひて候へば。古里に留め置きたる一子にて候。又こなたなるは傅の小次郎にて候。あら不便と衰へて候や。やがて名乘つて悦ばせばやと思ひ候。や。あら何ともなや。一度思ひ切り

衆生を同じくわが子のやうに愛し給ふとの意、親鸞の浄土和讃に「十方の如來衆生を一子の如くに憐念す」

○彌陀は母―釋迦を父として喩へたのである。

○歌舞の菩薩―極樂で歌舞音樂を奏して佛徳を讃美する菩薩。

○花のふり鼓―天から花降りを振鼓にいひかけた。振鼓は舞人が手に持ちて振り動かして鳴らす鼓の一種。

○篳篥―管の短い竪笛。

○笙―十七の管から出來てゐる吹奏樂器。

○和琴―六絃の琴。

○聲をあげて―樂器の聲を父を尋ねる聲にかけていふ。

○よしそれまでぞ―父に會ふことが出來ないならば、もはや用のないことだといふ意。

○ささら―竹の先を割り、これを摺り合せて鳴らす一種の樂器、

○八撥―横にして二つの撥で打つ打樂器、羯鼓。

【四】○不便―かわいさうに。

○やがて―早速。

○あら何ともなや―あゝこれはいけない。思ひ返していつたのである。

のけ者にせず御同情下さいませ。いづれの神佛もみなお慈悲深い中にも、殊にこの阿彌陀如來ほどお慈悲深い方はございません。この御佛はすべての衆生を同じくわが子のやうにお愛し下さるので、私どもは殊にこの御佛のお力をお頼み申してゐるのです。その上阿彌陀佛は佛の中の母と仰ぐ方なのですから、どうか私どもの父にもお逢はせ下さいませ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……あの極樂の歌舞の菩薩衆が虚空から花を降らして色々の音樂を奏せられるやうに、振鼓を鳴らしたり、篳篥や笙を吹いたり、和琴を彈いたりして、一所懸命聲を張りあげて叫んでも、自分が父だと答へて下さる聲はなく、誰一人かわいさうだと思つてくれる人もないのだ。ええ、もうこの上はこのやうなことをしても何の役にも立たないことだ。さゝらも八撥も皆捨ててしまはう、もう決して狂ふまい」

と、狂ふまいといひながら、悲しさにもの狂はしくなつて、結局物狂を演じたのである。深草少將は先程からこの態を見てゐて、

【四】少將「不思議なことだ。この物狂を何者かと思へば、故郷に殘して置いた自分の一人子であつた。そして又こちらにゐるのは守り役の小次郎だ。あゝ可哀想にひどく痩せ衰へたものだ。早速名乘つて悦ば

○輪廻の心―迷界六道に輪廻する心。執着の心。
○今逢ひ見たらば―執着の心を起して今父子相逢へば、その爲に佛心を失つて、未來永劫に會ふことが出來ず、執着を離れ佛心を保てば、極樂に生まれて永く相會ふことが出來るとの意。
○三界の絆―親子の愛着をいふ。諺に「子は三界の首枷」。三界は衆生の生死輪廻する欲・色・無色界をいふ。
○さらぬやうにて―親子でないやうなふりをして、素知らぬ顔をして。
【五】

たる道に。又輪廻の心の出で來て候は如何に。今逢ひ見たらば終の別れ。今逢ひ見ずは終の悦び。「まことに三界の絆を
地「ここにて切ると思ひなし。南無阿彌陀佛と稱へてさらぬやうにて行き過ぐるさらぬやうにて行き過ぐる

【五】　と後見座に行きてくつろぐ。

シテ（子方に）いかに申し候。これまで父御をば尋ね參らせて候へども。父御に似たる人さへ御座なく候。さて何と仕り候べき
子方「今は命も惜しからず。前なる川に身を投げ空しくならばやと思ひ候
シテ「げにげにけなげにも仰せ候ものかな。さらば御供申し身を投げ候べし。さりとも善光寺にては尋ね逢ひ參らせうずると存じ候へども。今

せてやりませう。いや一寸待て。これはいけない。一度俗世間の愛着を思ひ切つて置きながら、またこのやうな未練な心を起したのはよくない。今執着にひかれて親子再會したならば、佛心を失うて未來永劫逢ふことが出來なくなるのだ。今思ひ切つて逢ひさへしなければ、極樂に生まれて永久の悦びが得られるのだ。さうだ、三界の絆、親子の愛着をこゝで斷ち切らう」
と決心して『南無阿彌陀佛』と稱へて、素知らぬ顔をして、二人の前を通り過ぎた。

【五】　小次郎主從は善光寺へ來ても、父に會ふことが出來ないので、

傅「若君、こゝまでお父上をお尋ねして來たのですが、お父上に似た人さへ見當りません。どう致しませう」
子「父上にお逢ひ出來ない上は、もはや命もほしくない、あの前にある川に身を投げて死んでしまひたいと思ふ」
傅「おゝ、けなげな事を仰しやいます。それならば私もお供をして身を投げませう。それにしても、善光寺ではきつとお逢ひすることが出來ようと思つてゐまし

○退屈―張りつめた氣力のなくなつたこと。
○生死輪廻―衆生が過去の業因によつて、三界六道に車輪の廻るが如くに轉々として生死すること。
○有相執着―人が感官で感知する事物は實は假象に過ぎないのに、これを實有の如くに思つて、これに心を捉はれること。
○流轉無窮―六道講式に「流轉無窮、如車廻庭、昇沈不定、似鳥遊林」とあるを引いた。
○見佛聞法―極樂に往生して、常に阿彌陀佛を見て、その說法を聞くこと。
○破戒―五戒十戒等佛敎の戒律を破り犯すこと。
○闡提―一闡提 Icchantika の略。斷善根と譯す。佛法を誹謗し因果の理法を信じないもの。
○一念十念の間に―彌陀の名號を一度乃至十度稱へる間に。彌陀四十八願の第十八に「至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺」又その成就文に「諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至十念、至心回向、願生彼國、即得往生」

はや某も退屈仕りて候。今宵は如來の御前にて。御心靜かに念佛を御申し候へ。明けなば川へ御供申し、候べし

地クリ「それ生死輪廻の根元を尋ぬるに。有相執着の妄念より起れり

シテサシ「おのれと心に迷うて流轉無窮にして

地「車の庭に廻るが如し。昇沈不定にしては鳥の林に遊ぶに異ならず

シテ「悲しきかなやわれ等今。人界に生を受くとはいひながら

地「見佛聞法の結縁をもなさざれば。未來の樂しみも。いかがと思ひ。知られたり

（居グセ）

地「凡そ彌陀の悲願には。破戒闡提をも洩らさず。一念十念の間に彼の國に迎へ取るべしと

たのに、もはや私の張りつめた氣力も弛んでしまひました。今晩は如來堂で心靜かに念佛をなさいませ。夜が明けたならば、川へお供致しませう」

（と如來堂へ參つた態で、）

傳「一體人間が三界六道に轉々生死するのも、その原因を糺せば、果敢ない假の世の一時的な關係に執着の妄念を起すからのことだ。われとわが心に迷うて、その結果いつまでも車が地を廻るやうに、ぐる〳〵と六道に流轉し、或時は高く昇るかと思へば、また或時は低く沈んで、宛も鳥が林で遊んでゐるやうな變轉をしてゐるのだ。

ほんとに悲しいことだ。自分達は今幸ひと人間界に生まれたものの、この際、佛を拜みその說法を聞くべき因緣を結ばなければ、來世で極樂往生の樂しみを得られようとは思はれないのだ。

阿彌陀如來のお慈悲深い御本願には、佛戒を犯した者も佛法を誹謗する大惡人も、一度なり十度なり念佛すれば、漏れなく極樂淨土へ迎へ取らうと、法藏比丘であらせられた實に久しい間によく〳〵お考へになつて、かういふ御本願をお立てになつたのだ。さうした御慈悲から、

○五劫思惟の本願―彌陀如来が四十八願を建立したのは、未だ法藏比丘といつてゐた時、五劫の久しい間、思惟工夫した結果である。劫は極めて悠久な時間をいふ。
○極重惡人無他方便―惠心僧都の往生要集下に出てゐる。
【六】

五劫思惟の本願なり
シテ「さればにやその心
地「極重惡人無他方便唯稱彌陀。得生極樂と說かせ給へる。この理に任せつつわれ等を助けおはしませわれ等を助けおはしませ（と合掌す）
【六】
シテ「思ひ切りたる事なれば（と立ち）。二人は手に手を取りかはし（と子方へ行きその袖に手をかけ）。川のほとりに立ち出づる（と子方も立ち二人とも正面に向く）
ツレ橋懸一の松に出でて、
ツレ「思ひ切りたる事なれども。又引きかへす心地して。門前さして追うて行く（と舞臺に入り常座に立つ）
シテ「すはや川も近づきぬと。二人は西にうち向ひ。既に憂き身を投げんとす（と子方と共に正面先へづかづかと出づ）
ツレ「ああ暫しとて引き留むる（と二人を引き分け）

『非常に重い惡人は、外の方便では救ひ上げることが出來ないが、たゞ阿彌陀佛を念ずれば、極樂淨土に生まれることが出來るのである』とお說きになつたのだ。この御敎への通りに、どうか私どもをお助け下さいませ」（と佛に念ずる）
【六】
やがて夜も明けた態で二人は御堂を出て、
傳「もう思ひあきらめたことですから、二人で手をとりあつて、川の側へ參りませう」
と前の川へ行く。深草少將は一度御堂を出たのであるが、またあと戻りして、
少將「一度思ひ切つたのではあるが、やはり後髮を引かれる思ひがして、また善光寺の門前の方へわが子を追うて行くことだ」（と寺へ來る）
傳「それ、もはや川に近づきました」
と、二人は西方淨土の方に向つて、今にも身を投げようとする。
少將「あゝ暫く」
と少將が二人を引き留める。
傳「生きてゐるのが辛くて死なうとする

○なかなかに―却つて。

○白雪の―眞と知らずといひかけた。

○葉末の露―深草の草の縁で出し、露の縁で消えとつづけた。

○渚の波―喩へ方もなきを渚に、波の寄るを夜にいひかけた。

シテ「ありて憂ければ捨つる身を。留め給ふはなかなかに。われ等が爲には憂き人なり

ワキ「今は何をか包むべき。これこそ父の少將よ

シテ「更に眞と白雪の。古里の名は

ワキ「深草の

地『葉末の露の消えもせで。命のあれば又父に逢ふこそ嬉しかりけれ（ワキ子方の側へ行き三人とも下に居り）。逢ふ事の。もし夢ならば如何にせん。現になり行かばまたもや父に別れなん

地（キリ）『ともに命のながらへて。又廻りあふ小車の。別れし時の憂き思ひ。今逢ふ事の嬉しさを。何にたとへん。方も渚の波夜晝戀ひしわが父に逢ふこそ嬉しかりけれ逢ふこそ嬉しかりけれ

（「ともに命ながらへて」にワキ子方を連れて靜かに幕に入りシテは後に殘り常座にて留拍子を蹈む。）

のに、それをお留め下さるのは、私どもにとつては、却つて恨めしい人と思はれます」

少將「今は何を隱さう、自分が父の少將だぞ」

傳「まるでほんととも思はれませんが、御鄕里の名は……」

少將「深草で……」

子「まあこのやうなはかたい命も生きてゐればこそ、父上にまたお會ひすることが出來たのだ。あゝ嬉しい（と父の側へ駆け寄り）。でも、今お逢ひしたことが夢であつたならば、醒めた後どうしよう。夢でない事實だとしても、また父上にお別れするやうになりはしないだらうか」

子「二人とも生き永らへて、かうして夜お逢ひすることの出來た嬉しさ。お別れした時の辛い思ひにひき比べて、今お逢ひすることの出來たこの嬉しさを何に喩へよう、喩へやうもないことだ。夜となく晝となく戀しく思つてゐた父上にお逢ひ出來たのは、ほんとに嬉しいことだ」

（父子再會の喜びを得て退場。）

考異

諸流（觀喜）

【一】ワキ「かやうに候者……思ひ候」喜これは深草の何某と申し者のなれる果にて候。われ俗にて候ひし時、相馴れし妻に後れしより浮世あぢきなく候ひて、かやうの姿と罷りなりて候。又年月の望みにて候程に、唯今思ひ立ち善光寺へと急ぎ候。上生れぬ先の身を知れば、（ハル）あはれむべき親もなし。親のなければわが爲に心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山に泊るこそ、實に捨つる身の習ひなれ。（ハル） 【三】シテ「何と天が下に…… 恐れながら御事の身として天が下に叶ふまじとは思ひもよらぬ仰せかな（喜南々私としてせさせ給ふべきか。土も木もわが大君の國ぞかし） 【六】シテ「これこそ父の少將（喜何某）よ

吉島本（元祿八年本）

【二】シテ「あらいとほしや（元捨參らせふすると申は僞りにて候）さあらば（元ナシ）…… 【三】シテ「何と天が下に……四つの鬼を使ひしかば（元ナシ誤脫カ）

經政　観(寶　春　剛　喜)

解説

【能柄】二番目　單式夢幻能

【人物】ワキ　僧都行慶、シテ　平經政の靈

【所】山城　仁和寺

【時】平家時代　秋(九月)

【異稱】「經正」とも書く。

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。春日大宮若宮御祭禮圖の田樂の能にこの曲名が見え、親長卿記長享二年二月二十三日の條に本曲演能の事が見えてゐる。

【梗概】平經政は幼少の時から仁和寺御所(守覺法親王)の御寵遇を蒙り、青山といふ琵琶の名器を拜借したが、西海の合戰に討死したので、御所では僧都行慶に仰せつけて、この琵琶を手向け、管絃講を催して、その跡を弔はれた。すると、經政の幽靈が夢幻の如くに現れ出でて琵琶を彈き、又修羅の苦患を示した。

【出典】本曲は平家物語卷七「經政の都落」の事」に、

修理太夫經盛の嫡子皇后宮亮經政は、幼少の時より仁和寺の御室の御所に童形にて候はれしかば、かゝる怱劇の中にも、君の御名殘きつと思ひ出で參らせ、侍五六騎召し具して、仁和寺殿へ馳せ參り……御前の御坪にかしこまる。御室やがて御出であつて、御簾高くあげさせ、「是へ是へ」と召されければ、經政大床へこそ參られけれ。供に候ふ藤兵衛尉有敎を召す。赤地の錦の袋に入れたりける御琵琶を持つて參つたり。經政是を取次いで、「御前に指し置き申されけるは、「先年下し預つて候ひし靑山持たせて參つて候。名殘は盡きず候へども、さしもの我朝の重寶を田舍の塵になさんことの口惜しう候へば、參らせ置き候。若し不思議に運命開けて、都へ立ち歸る事も候はば、其時こそ重ねて下し預り候はめ」と申されたりければ、御室あはれに思し召して、一首の御詠を遊いてぞ下されける。

俺かずして別るゝ君が名殘をば後のかたみにつゝみてぞ置く

經政御硯下されて、

呉竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうちかな

さて經政御前を罷り出でられけるに、數輩の童形、出世者、坊官、侍、僧に至るまで、經政の名殘を惜しみ、袂にすがり淚を流し、袖を濕らさぬはなかりけり。中にも幼少の時小師にておはせし大納言の法師行慶と申しけるは、葉室の大納言光頼卿の御子なり。餘りに名殘を惜しみ參らせて、桂川の端までうち送り、それより暇乞うて歸られける。

とあるに據つたのである。

【概評】　複式夢幻能の前半を省略した半能とはちがつて、初めから單式に脚色したもので、その類型は〔杜若〕〔松風〕などにも見られるのであるが、シテを終始夢まぼろしの如きおぼろなものとして取扱つてゐることは、本曲が最も著しい。殊にその主材が琵琶であるから、一層幽かな和やかな響きを與へてゐる。たゞ第五節に修羅の苦患を描いてゐるのは、二番目修羅物の常套手段であるとはいふものゝ、本曲の如き場合には甚だ唐突な不調和な感じを起させる。〔紘上〕の如き靈驗説話としないまでも、やはり技藝の效驗を取立てて、幽靈成佛の平和な終結とした方がよかつたやうに思はれる。

【一】　名乘笛にて、ワキ僧都行慶、沙門頭巾・着附小格子・水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り名乘座に立

【二】　[illegible]

○仁和寺御室—本曲の末に記す。
○僧都行慶—平家物語に「大納言の法師行慶と申しけるは、葉室の大納言光頼卿の御子なり」。解說參照。
○但馬の守經政—本曲の末に記す。
○童形—未だ元服しない貴人の男子をいふ。
○君—この時の仁和寺門主後白河法皇第四の皇子守覺法親王を指す。
○西海の合戰—壽永三年二月の一の谷の戰を指す。
○青山—本曲の末に記す。
○管絃講—管絃を奏して死者の靈を弔ふ法事。
○役者—管絃講に管絃の役を受持つ者。
○一樹の蔭に宿り—平家物語卷十「千手」に「一樹の蔭に宿りあひ、同じ流れをむすぶも、皆是先世の契りといふ白拍子を」。說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻……皆是先世結緣」
○御値遇—こゝでは特に愛せらるゝこと。
○かけまくも—惠みを深くかけるといひかけた。
○宮中—禪室の御所を指す
○成等正覺—等正覺を成就

ち、

ツキ「これは仁和寺御室に仕へ申す。僧都行慶にて候。さても平家の一門但馬の守經政は。未だ童形の時より。君御寵愛なのめならず候。然るに今度西海の合戰に討たれ給ひて候。又青山と申す御琵琶は。經政存生の時より預け下されて候。かの御琵琶を佛前にすゑ置き。管絃講にて弔ひ申せとの御事にて候程に。役者を集め候」

といひて脇座へ行き床几にかゝり、

ワキサシ「げにや一樹の蔭に宿り。一河の流れを汲むことも。皆これ他生の緣ぞかし。ましてや多年の御値遇。惠みを深くかけまくも。忝くも宮中にて。法事をなして夜もすがら。平の經政成等正覺と。弔ひ給ふありがたさよ

地上歌「殊に又。かの青山といふ琵琶を。かの青山といふ琵琶を。亡者の爲に手向けつつ。同じく

行慶「私は仁和寺御室御所(守覺法親王)にお仕へしてゐる僧都行慶です。さて平家の一族である但馬守經政は、まだ子供の頃から、法親王樣が大層御寵愛遊ばしたのでありますが、今度の一の谷の合戰でお討たれになりました。そして又、青山と申す御琵琶は、この經政の存命の時、お貸し預けになつたものなので、その御琵琶を佛前に供へ、管絃講を催して、經政の回向を致せと法親王樣から仰せ出されたので、管絃の役者を集めるのです」

こゝ見物人に自己紹介をして事件の發端を述べ、やがて管絃講が催された心で、

行慶「まことに諺にも『同じ木蔭に雨宿りをし、同じ河の水を汲むのも、皆前生からの因緣事である』といつて居る通りで、まして經政が永年の間法親王樣の御寵遇を戴いたのは、前生からの深い御因緣事とは申しながら、格別のお惠みを以て、畏れ多くもこの御所で法事を遊ばし『どうか平經政が成佛するやうに』と終夜御回向遊ばすのは、實にありがたい次第だ。殊にまた、あの青山といふ御琵琶をこの亡者の爲にお手向けになつて、なほ管絃

することの。等正覺は如來十號の第三で佛といふと同じ意。即ち成佛すること。
○絲竹　絃樂器と管樂器。管絃講の法事をすること。
○貴賤の道も普しや　佛道には貴賤貧富の差別がなく皆平等に成佛せられることが、今明らかに知られるとの意。法親王が臣下の經政の爲に法事を行はせられることを指し「法の門」「普しや」に法華經普門品の名を含ませた。
【三】○風枯木を吹けば　和漢朗詠集、白樂天の詩句「風吹二枯木一晴天雨、月照二平沙一夏夜霜」を引いた。風の音を雨に、月の色を霜に見立てたのである。晴天を「はれてん」と讀むのは朗詠の讀み癖である。
○霜の起居も　霜の置くを起居にいひかけた。
○假に見えつる草の蔭　草葉の蔭から假に現れ出て。
○露の身ながら消え殘る　身は果敢なく露のやうに消えたが、妄執は消えないで殘つて。
○妄執の縁　琵琶に執心の殘つたことを指す。

絲竹の聲も佛事を、なし添へて。日々夜々の法の門貴賤の道も、普しや貴賤の道も普しや

【三】シテ平經政、面中將・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白淺黄・着附唐織・長絹・色大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて、地上歌の間に幕より出でて常座に立ち、

シテサシ「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の。霜の起居も安からで。假に見えつる草の蔭。露の身ながら消え殘る。妄執の縁こそ。つたなけれ

ツレキシテに向ひ、

ツレ「不思議やなはや深更になるままに。夜の燈火幽かなる。光のうちに人影の。あるかなきかに見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテワキに向ひ、

シテ「われ經政が幽靈なるが。御弔ひのありがたさに。これまで現れ參りたり

ツレ「そも經政の幽靈と。答ふる方を見んとすれ

講の御法事までお催しになつて、日夜うち續いて御回向を賜はるといふことは、佛道に貴賤の差別のないことが明らかに知られて、實にありがたいことだ」
法親王のありがたい思召に感激する。
【三】シテ平經政の靈、法親王の御回向を受け幻の如くに登場。
經政「詩の句に「風が葉の落ちかゝつた木に吹き渡ると、木葉が散り亂れて、晴天の日でも雨の降るやうな音を立て、月が廣々とした砂原を照らすと、あたりが眞白で、夏の夜でも霜が降つたやうだ」とあるが、自分はその雨につけ霜につけ、心身の落ちつく時とてはなく、身は露のやうに果敢なく消えながら、琵琶に對する妄執だけが後に殘つて、このやうに草葉の蔭から假に現れ出るといふのは、われながらあさましいことだ」
と獨言をいつて法事の席に近づく。行慶はこの姿を見とめて、
行慶「これは不思議だ。もはや夜更けとなつて、燈火の光も薄くなつたのに、その幽かな光の中に、人影があるのかないのか分らない程ぼんやりと見えるが、一體あなたはどういふ方なのです」
經政「私は經政の幽靈ですが、御回向がありがたくて、こゝまで現れて來たのです」
行慶「これは變だ、經政の幽靈だと答へる

○あるかなきかにかげろふの―後撰集讀人知らずの歌に「世の中といひつるものは陽炎のあるかなきかの程にぞありける」

○まぼろし―夢ともつかず現とも思はれないはかなげなもの。

「常なき身とて經政の―」「これ」は背を重ねた。

○生をこそ隔つれど―あの世とこの世と、幽明境を異にしてゐるが―

○呉竹の筧の水は―宮殿に擧げた經政の歌「呉竹の筧の水はかはれどもなほ住みあかぬ宮の内かな」を引いた。

ば、また消え消えと形もなくて

シテ「聲は幽かに絶え殘つて

ワキ「まさしく見えつる人影の

シテ「あるかと見れば

ワキ「また見えもせで

シテ「あるか

ワキ「なきかに

シテ「かげろふの

地上歌「まぼろしの。常なき身とて經政の。常なき身とて經政の。もとの浮世に歸り來て。それとは名乘れどもその主の。形は見えぬ妄執の。生をこそ隔つれどもわれは人を見るものを。げにや呉竹の。筧の水はかはるとも。住みあかざりし宮のうち。まぼろしに參りたり夢まぼろしに參りたり

方を見ようとすれば、先程の姿は消え消えとなつて、形もなく……」

經政「聲はこのやうに幽かながら消え殘つてゐるが……」

行慶「先程は確かに人影が見えたのだが……」

經政「見えるかと思へば……」

行慶「また見えもせず……」

經政「あるのかないのか分らない、かげろふのやうた果敢ない身なので、もとの浮世に歸つて來て『自分は經政だ』と名乘つても、人には見えないのだ。たゞ自分だけは形に現れない妄執の念ひの爲に、幽明境を異にした今でも、人を見ることが出來るのだが。さう〳〵、この世にゐた時、『呉竹の筧の水は』と詠んだが、その住み飽きなかつた御所の内が、死んだ後の今でもなつかしくて、夢まぼろしのやうに出て來たのです」

（行慶の側へ行く。）

とシテ舞臺の眞中へ行きて下に居る。

【三】ワキ「不思議やな經政の幽靈形は消え聲は殘つて。なほも言葉をかはしけるぞや。「よしや夢なりとも現なりとも。法事の功力成就して。亡者に言葉をかはす事よ。あら不思議の事やな

シテ「われ若年の昔より宮の內に參り。世上に面をさらす事も。偏に君の御恩德なり。「中にも手向け下さるる。青山の御琵琶。娑婆にて御許されを蒙り。常は手馴れし四つの緒に

地下歌「今もひかかる心故。聞きしに似たる撥音の。これぞまさしく妙音の、誓ひなるべし。

上歌「されば かの經政は。されば かの經政は。未だ若年の昔より。外には仁義禮智信の。五常を守りつつ。內にはまた花鳥風月。詩歌管絃を專らとし。春秋を松蔭の草の露水のあはれ世の心に洩

【三】〇功力—功德の力。〇面をさらす事も—世間の人々に知られることも。〇娑婆—現世。〇四つの緒—琵琶。琵琶は四絃である。〇今もひかかる—引かかるは琵琶の緣語。〇妙音—琵琶の樂音の妙なることを佛の妙なる誓ひにとりなしたのである。〇五常—漢書董仲舒傳に「仁義禮智信、五常之道、王者所當修飾也」〇春秋を松蔭の—春は花鳥秋は風月を待つを松にいひかけた。〇草の露水のあはれ—古今集序の「草の露水の泡を見て、わが身を驚き」を引き、泡をあはれにいひかけた。〇心に洩るる花もなし—世上のものすべて風雅の種となつた。經政は極めて風流な人であつたといふのである。

【三】行慶「これは不思議だ。經政の幽靈の形は消えたが、聲はまだ殘つて、言葉をかはしたのだ。さうだ、夢であらうと現であらうと、いづれにしても、法事の功德が現れて、亡者と言葉をかはしたのだ。實に不思議なことだ」

經政「私が早く年のいかない時からこの御所に參つて、世間の人々に知られるやうになつたのも、全く法親王樣の御恩惠の賜物です。殊に唯今お手向け下さる青山の御琵琶は、この世にゐました時、拜借を許され、始終彈き馴れてゐたのですが、そして今もその琵琶に執心が殘つてゐるのですが、今以前に聞いたと同じやうな撥音、妙なる樂の音を聞くことの出來ましたのは、全く佛樣の妙なる御利益であるとありがたく存ぜられます」

この經政はまだ年のいかなかつた頃から、外には仁義禮智信の五常の德を守り、內にはまた花鳥風月、その時折の風物につけて、詩歌管絃の風流を樂しみ、春は花鳥を、秋は風月を待ち、草の露につけ水の泡につけ、世上のものすべてを風雅の種とした、誠に風流な

【四】

○夜半樂—唐樂の曲名。頃は夜半といひかけ、時の夜半と樂の響きとから眠りをさますとつゞけた。

○時の調子—季節に相應した樂音の調子。例へば春は雙調、秋は平調をその時の調子とす。

ゐる、花もなし心に洩るゝる花もなし

【四】

ワキ「亡者の爲には何よりも。娑婆にて手馴れし青山の琵琶。おのおの樂器を調へて。『絲竹の手向をすゝむれば

と謠ひながら立ち正面に向きて居立ち、扇を開きて左手に持ち琵琶を彈く心。

シテ「亡者も立ち寄り燈火の影に。人には見えぬものながら。手向の琵琶を調むれば

とシテも謠ひながら立ち正面先に出で居立ちて扇を開き左手に持ち、

ワキ『時しも頃は夜半樂。眠りを覺ます折節に

シテ「不思議や晴れたる空かき曇り（と正面を見渡し）。俄かに降りくる雨の音

ワキ『頻りに草木を拂ひつゝ。時の調子も如何ならん

シテ「いや雨にてはなかりけり。あれ御覽ぜよ雲

人であつたのである。

【四】

行慶「亡者の爲には何よりもこの世で彈き馴れた青山の琵琶を手向けるのがよからう」

と皆の者がそれぞれ樂器を調へて、管絃講を以て回向をすると、亡者も燈火の影に立ち寄つて、人には見えないながらも、この手向の琵琶を調へると、

行慶「今はもはや夜中で、樂の音に僅かに眠りを覺ましてゐると……」

經政「不思議にも今まで晴れてゐた空が曇つて、俄かに雨が降つて來て……」

行慶「降りしきる雨の草木に吹きあたる音で、時の調子も亂れることであらう」

經政「いや今のは雨ではなかつた。あれ御

○月に雙の岡の―松が月影に竝んで見えるといふのを地名にいひかけた。雙の岡は仁和寺の南にある。
○大絃は嘈々として―白樂天の琵琶行「大絃嘈々如二急雨一、小絃切々如二私語一」を引いた。嘈々は音のやかましい貌、切々は音の絶えないこと、私語は男女の密話をいふ。
○第一第二の絃は―和漢朗詠集、白樂天の詩句「第一第二絃索々、秋風拂二松疎韻一落、第三第四絃冷々、夜鶴憶レ子籠中鳴」を引いた。索々は聲の亂れたさま、疎韻は絶え〳〵な響き、冷々はすさまじくものさびしいこと。
○鷄も心して―鷄の縁で曉を告げる鷄を出した。
○一聲の鳳管―和漢朗詠集公乘憶の句「一聲鳳管、秋驚二秦嶺之雲一、數拍霓裳、曉送二緱山之月一」を引いた。鳳管は簫。秦嶺は支那秦國にある深山。
○鳳凰もこれにめでて―列仙傳に秦穆王の女弄玉とその夫簫史が簫を吹いて鳳凰の聲を眞似ると、鳳凰がこれをめでてその屋上に來た、それで穆王は鳳臺を建

の端の（と立上りて上を見）
シテこれより諸に合せて舞ふ。（ワキは扇を疊みてもとの座に坐す）
地「月に雙の岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨の如くに音づれたり。面白や折からなりけり。大絃は嘈々として。村雨の如しさて。小絃は切々として。私語に異ならず
（舞クセ）
地ヤセ「第一第二の絃は。索々として秋の風。松を拂つて疎韻落つ。第三第四の絃は。冷々として夜の鶴の。子を思うて籠のうちに鳴く。鷄も心して。夜遊の別れとどめよ
シテ『一聲の鳳管は
地「秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれにめでて。梧竹に飛び下りて。翼を連ねて舞ひ遊べば。律呂の聲々に。情聲に發す。聲文をなすことも。昔

覽なさい、雲間から漏れ出た月影に竝んで見える雙の岡の松の葉が風の爲に吹き落ちて、村雨のやうな音を立てゝゐるのです。折も折とて、ほんとに面白い趣です。『大きな絃はやかましい音を立てゝ村雨のやうであり、小さな絃は細々した音を續けて私語のやうだ』といふ詩句や、『第一第二の絃は聲が亂れて秋風が松に吹き渡るやうな絶え絶えの響を立て、第三第四の絃はものさびしい音を出して夜の鶴が子を思つて籠の中で鳴いてゐるやうである』といふ詩句とそのまゝな趣です。あゝ面白いことだ、曉を告げる鷄もよく氣をつけて、この夜遊が早く終らないやうにしてくれ」
經政「まことに『簫の笛を一度吹けば秦嶺の秋雲を動かす』といふ詩句のやうに、鳳凰もこの樂の音に聞き惚れて、梧竹に飛び下り、翼を竝べて舞ひ遊ぶやうな趣で、律呂の調つた音樂に人の情が表れ、情が表れればまた樂の調が一層面白くなり、われ知らず昔の事が思ひ出されて、舞を舞ふ心持に誘はれることだ。さうだ、舞といへば、舞に縁のある太官山もこゝ

つたとある故事によつて、この品を出した。
〇梧竹に鳳凰下り—格物論に鳳凰は梧桐に栖み竹實を食すとあるので、梧竹の品を出した。
〇律呂—音樂の調子。律は高い聲、呂は低い聲。
〇情聲に發す—毛詩に「情發二於聲一、聲成レ文」とあるを引いた。
〇昔を返す舞の—生前の昔の様に引返すと舞の袖を飜すと、上下に兼ねていふ。
〇衣笠山—仁和寺の東北にある。袖の縁で衣を引出したのである。
【五】
〇閻浮—須彌四洲の一、閻浮提の略。この世のこと。
〇瞋恚—憤怒。修羅道にて受ける苦患の一。
〇燈火を背けては—和漢朗詠集、白樂天の詩句「背レ燭共憐深夜月、蹋レ花同惜少年春」を引き、月より日月を手に取る阿修羅に轉じた。
〇帝釋修羅の戰ひ—帝釋は須彌山の頂上忉利天の天主で、佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征す。修羅は闘爭を事とする世界で、その王阿修羅王は帝釋天王と[illegible]を爭ひ、天に上つて日月

を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊や あら面白の夜遊や
(と舞ひ上げて大小前に立ち、)

【五】
地「あら名殘惜しの。夜遊やな(と常座へ行き)
〔カケリ〕
シテ「あら恨めしやたまたま閻浮の夜遊に歸り。心をのぶる折節に。『また瞋恚の起る恨めしや
ワキ「さきに見えつる人影の。なほ現るるは經政か
シテ「あら恥かしやわが姿。はや人々に見えけるぞや(と眞中へ行き)。『あの燈火を消し給へとよ(とワキへ向き)
(これより謡に合せて仕科。)
地「燈火を背けては。ともに憐む深夜の月をも。手に取るや帝釋修羅の。戰ひは。火を散らして(太刀を拔き)。瞋恚の猛火は雨と

から近い所にあるのだ。實に面白い夜遊だ」
(と管絃の面白さに誘はれて舞を舞ひ、)

【五】
經政「あゝこの夜遊が名殘惜しいことだ」
(といつてゐるうちに、今ある修羅道の苦患が襲つて來て、)
〔カケリ〕
(にその苦しい戰ひの様を示し、)
經政「あゝ恨めしいことだ。たまたまこの現世に立ち歸つて、面白い夜遊に心を樂ませてゐると、また憤怒の念ひが起つてくる、あゝ恨めしいことだ」
行慶「先程燈火の光に見えた人影が、今もなほ見えるのは、やはり經政なのですか」
(經政は修羅道に苦しむ様を人に見られたのを愧ぢて、)
經政「あゝ恥かしい、自分のこの姿がはや人々に見えたのだ。あの燈火を消して下さい。…… 燈火を後にしても姿は隱れず、月日をも手に取らうとする阿修羅と帝釋天との戰ひは、火花を散らす恐ろしい勢ひで、憤怒に燃える猛火は雨のやうに身にふりかゝるので、劍を拔いて敵を斬らうとすれば、他を斬るばかりか、われとわが身を斬り、身から流れ出る血は波

なつて。身にかかれば、拂ふ劍は。他を惱ましわれと身を斬る(と下に居て太刀を捨て)。紅波は却つて猛火となれば。身を燒く苦患(と立ち)。恥かしや。人には見えじものを。あの燈火を。消さんとて。その身は愚人。夏の蟲の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに。燈火を嵐とともに。燈火を吹き消してくらまぎれより。魄靈は、失せにけり魄靈の影は失せにけり

(と常座にて留拍子を踏む)

のやうであるが、その波は火を消さないばかりか、却つて猛火の勢ひを增すので、身を燒く苦しみを受けるのだ。あゝ恥かしい、このやうなさまを人には見せまいと思つてゐたのに。さあ早くあの燈火を消さう」

といつて、飛んで火に入る夏蟲と同樣な愚人のやうに、燈火の側に飛び入り、嵐が吹くとともに燈火を吹き消して、あたりの暗くなつたのを機會として、經政の幽靈は消え失せてしまつた。

をも取らうとした。この事長阿含經に見え、太平記卷十二「神泉苑事」にも「此北帝釋の軍に打勝つて手に日月を握り」とある。
○紅波―修羅の身から流れ出る血を紅の波に喩へていふ。
○見えじ―見せじ。
○愚人夏の蟲の―源平盛衰記卷八「法皇三井灌頂事」に「智者は秋の鹿鳴きて山に入り、愚人は夏の蟲飛んで火に燒くとぞながめさせ給ひける」

〔考　異〕

諸　流　(五　流)

【一】ワキ「これは……役者を集め候(下懸これは北山仁和寺御室の御所に仕へ申す。大納言の僧都行慶にて候。さても但馬守經政は。幼少の頃より御室に召し置かれ。さながら奉公の如く御座候ひし程に。君も不便に思し召され候處に。この度一の谷にて討たれ給ひて候間。色々法事をなされ候。又靑山といふ御琵琶は。經政存生の時より預け置かれし名物なれば。御室にたて置かれ。絲竹の手向までとり行はれ候。今日は殊に仰せつけられて候程に。法事をなし申し候)　【二】シテサシ(下懸あら面白の琵琶の音や)……風枯木を吹けば……

【四】ワキ「亡者の爲には……」……亡者も――調むれば(下懸ナシ)。ワキ「時しも頃は(下懸既にこの夜も)夜半樂眠りを覺ます折節に(下懸扉すみ渡る絲竹の手向の琵琶を調むれば)

古活本（元祿八年本）

【一】〃「これは……元大納言の信都行慶にて候……　【二】地上歌「幻の……筧の水はかはるとも（元れとも）……

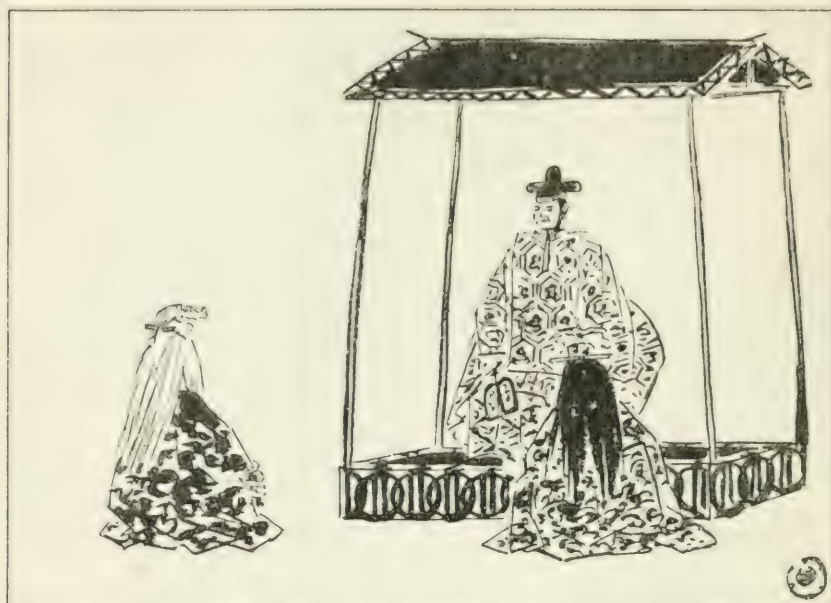
附記

〇仁和寺御室＝山城國葛野郡花園村御室にあり、仁和年中光孝天皇の建立し給うた眞言宗御室派の本山。宇多天皇御落飾の後この所に一堂を構へて住み給うたので、御室又は仁和寺御所といふ。爾來常に法親王の住み給ふ所となつてゐる。

〇但馬の守經政＝平清盛の弟經盛の嫡子。幼少の時仁和寺の守覺法親王に仕へた。琵琶の上手で、官位は皇后宮亮、但馬守正四位に至つた。一の谷の合戰に討死した。

〇青山＝仁明天皇の御時掃部頭貞敏が玄象・獅子丸とともに唐から相傳した琵琶の名器。その後仁和寺に傳つてゐたのを、經政が宇佐八幡宮に勅使に立つた時、守覺法親王からお預り申し、平家都落の際返上したものである。平家物語卷七「青山の沙汰の事」に委しく出てゐる。［絃上］參照。

鶴亀（つるかめ）　觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】脇能　一段劇能

【人物】**狂言**　官人、**シテ**　皇帝（玄宗）、**ワキ**　大臣、**ワキツレ**　從臣（二人）、**子方**　鶴、**子方**　龜

【所】支那　皇居

【時】（唐玄宗の代）正月

【異稱】喜多流では〔月宮殿（げっきうでん）〕といふ。

【作者】作者及び演能に關する古記錄は見當らない。二百十番謡目錄にも作者未詳とす。

【梗概】支那の華麗な皇居に於て四季の節會の事始が催され、毎年の嘉例によつて鶴龜を舞はしめ、その後、月宮殿で舞樂を奏する。

【出典】新年のめでたい祝言能として創作したもので、典據といふべきほどのものはないが、鶴龜を以て世を祝ひ人を壽ぐことは、語釋に揭げたやうに、支那でも准南子その他で鶴龜を長壽のものといひ、殊にわが國では夙く古今集の頃から鶴龜を竝べ擧げてめでたい例とし、同

集在原滋春の歌に、

鶴龜も千年の後は知らなくにあかぬ心に任せはててん

などとあり、下つて院政時代の今様歌に、

蓬萊山には千年ふる、千秋萬歳かさなれり、御前の松には鶴巣くひ、巖の上には龜遊ぶ。

鎌倉初期の宴曲抄、寄山祝に、

千年の松の翠も、萬年の苔の色までも、鶴龜の名をあらはせば、この砌にや榮えむ、龜谷山亘福山、嵐萬歳を呼ばふなり。

などといひ慣はしたのである。

【概評】詞章としては現行曲中最も短いものであり、劇としての構想脚色にも深く注意したものではない。たゞめでたい歌謡と花やかな舞踊とを以て祝言の心持を表したものに過ぎない。しかし、かうした劇としては甚だ幼稚な所に却つて象徴的な瑞相の深く感じ得られることを忘れてはならない。舞臺を當代ともせず、遠く支那に持つて行つたのも、この象徴的な例證的な感じを強めようとしたのに外ならない。

【序】舞臺は支那の皇居で、宮殿の作物が出てゐる。まづ狂言官人が登場して、玄宗皇帝が聖天子で、今日鶴龜の御遊を催されるといふことを觸れる。

【序】後見、一疊臺を大小前に持ち出し、その上に大宮の作物を置く。

狂言官人、官人頭巾・着附厚板・側次・括袴・脚半・腰帶・扇の装束にて名乘座に出で、

狂言(口開)「かやうに候者は。玄宗皇帝に仕へ申す官人にて候。誠にこの君賢王にてましませば。吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをせず。誠にめでたき御代にて候。然れば今日は月宮殿へ行幸なり。鶴龜を舞はさせられ。御遊あるべきとの御事なり。その分卿相雲客に至るまで。皆々この殿へ参内申され候へ。

【序】

○玄宗皇帝——支那唐代の天子。「楊貴妃」參照。

【一】
○青陽―春の異稱。爾雅に「春爲二青陽一、夏爲二朱明一、秋爲二白藏一、冬爲二玄英一」
○節會―節日その他規定の公事がある日の集會で、群臣に酒饌を賜はる。
○不老門―洛陽十四門の一。和漢朗詠集、慶滋保胤の詩句「長生殿裏春秋富、不老門前日月遲」によつて「日月の光」とつゞけた。
○袖を連ね踵を接いで―多勢の人が相竝び、絶え間もなくうち續いて、
○拜をすすむる―天子に敬禮する、
○萬戸―多くの家、萬民。同行會本に「萬簡」の字を充ててゐるのは如何であらう。

心得候へ／＼、
といひて引く。

【一】
眞來序の囃子にて、シテ皇帝、唐冠・金紗鉢卷・襟白・着附厚板・袷狩衣・半切・腰帶・唐團扇の裝束、ワキ大臣、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從臣二人、ワキ同樣の裝束にて舞臺に入り、シテは一疊臺に上りて床几にかゝり、ワキ・ワキヅレは脇正面に竝びて下に居り、

シテサシ「それ青陽の春になれば。四季の節會の事始め
地「不老門にて日月の。光を天子の叡覽にて
シテ「百官卿相に至るまで。袖を連ね踵を接いで
地「その數一億百餘人
シテ「拜をすすむる萬戸の聲
地「一同に拜するその音は
シテ「天に響きて
地「夥し
地上歌「庭の砂は金銀の。庭の砂は金銀の。玉を連

【一】
シテ皇帝、ワキ大臣、ワキヅレ從臣登場、宮殿の中にある態。

大臣「まづ年の春になると、四季折々の節會の最初の御儀式として、天子が不老門に出御遊ばされ、のどかな日月の光を叡覽遊ばされる。すると、大臣參議を初めとしての諸の役人が相竝びうち續いて群集し、その人數が一億百餘人に及び、なほ天子を禮拜し奉る一般萬民の一同うち揃つて禮拜し奉るその音は、天に響くばかり夥しいことである。――

さて、この宮殿のお庭の砂は金銀の玉をならべ敷いたものであり、御床は幾重にもうち重ねた錦で作られ、戸は瑠璃で、桁は硨磲で、橋は瑪瑙で作られて居り、

○敷妙の—玉を連ねて敷くを敷妙にいひかけた。敷妙のは枕・床などの枕詞で、こゝでは錦の床の枕詞に用ゐたのである。
○五百重の—幾重にもうち重ねた。
○瑠璃の樞—瑠璃は七寶の一で紺色の寶玉。樞は戸。
○硨磲の行桁—硨磲は七寶の一で、白色の光澤のある一種の貝の外殼。行桁は居根裏の横にわたした木。
○瑪瑙—七寶の一で、玻璃の如き光澤ある鑛石。
○蓬萊山—仙人の住むといふ支那傳説の山で、方丈・瀛洲と併せて三神山といふ。漢書郊祀志に「三神山在渤海、金銀爲宮闕」山海經に「蓬萊山在海中、上有仙人宮室、皆以金玉爲之」
○君の惠みぞありがたき—以上第一節演奏の形から見れば、シテ皇帝の詞であるが、さう解しては文意が穩かでない、通謠には大臣の詞として取扱つた。
【三】
○嘉例—めでたい例。
○月宮殿—月世界にある廣寒宮。これを皇居の宮殿の名としてこゝに出した。
○龜は萬年の齢—廣五行記補に「龜齢經萬歳」

ねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の樞。硨磲の。行桁瑪瑙の橋。池の汀の鶴龜は。蓬萊山もよそならず。君の惠みぞ、ありがたき君の惠みぞありがたき

【三】

地上歌「庭の砂は金銀の」に、子方鶴、(面連面)・鬘・鬘帶・黒垂鶴立物・襟赤・着附摺箔・長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束、子方龜、(面邯鄲男)・白垂・龜立物・金緞鉢卷・襟淺黄・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて幕より出で、橋懸に立つ。

ワキ橋懸の子方を見てシテの前に出で辭儀して、

ワキ「いかに奏聞申すべき事の候。毎年の嘉例の如く。鶴龜を舞はせられ。その後月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候

シテ「ともかくも計らひ候へ

ワキ・ワキヅレ脇座へ行き下に居る。

地「龜は萬年の齢を經。鶴も千代をや。重ぬらん

に鶴龜舞臺に入り、

〔中舞〕(鶴龜相舞)

お池の水際には千年萬年の齢を重ねるめでたい鶴や龜が遊んでゐて、かの仙人の住むといふ蓬萊山と何の變りもないのである。かくの如き尊い天子の大御惠に浴するのは、實にありがたいことである」

（君徳を讃歎す。）

【三】

この時子方鶴、子方龜が登場して、御池の水際に遊んでゐる態。大臣はこれを見て、皇帝に、

大臣「奏上致します。毎年のおめでたい御吉例の通り、鶴龜に舞を舞はせ、それから月宮殿で舞樂をお催し遊ばしますやうにと存じあげます」

皇帝「然るべく取計つてくれ」

そこで、大臣は鶴龜に舞を舞はせることにし、

一同「龜は萬年の年をとり、鶴も千年生きるだらう」

とあつて、鶴龜子

〔中舞〕

を相舞で舞ふ。

○鶴は千代｜淮南子に「鶴千歳極二其游一」
○何を引かまし姫小松の｜拾遺集壬生忠岑の歌「子の日する野べに小松のなかりせば千代のためしに何を引かまし」を引いた。
○緑の龜｜小松の緑といひかけた。龜に緑の、と冠したのは鶴の丹頂に對したのである。
【三】○月宮殿の白衣の｜月世界の宮殿には白衣の天人が十五人、黑衣の天人が十五人居て、毎日十五人で、日毎に一人づつ交替して舞を舞ふ、その白衣の天人ばかりとなつた時が滿月であるといふ。その白衣の天人を指したのである。「羽衣」參照。
○紅葉の葉袖｜上に花の袖とあるので、羽袖を葉袖にいひかけたのである。
○雪の袂を｜舞の美しい様を形容して廻雪といひ慣はしであるので、かういつた。
○薄紫の｜衣の薄いを色の薄紫にいひかけ、薄紫の雲の上人とつゞけた。雲の上人は宮中に奉仕してゐる高官の人々。
○霓裳羽衣の曲｜唐玄宗皇帝が天人の音樂に象つて作つたといふ樂曲。白樂天の長恨歌に「風吹二仙袂一飄颻擧、猶似二霓裳羽衣舞一」「羽衣」參照。
○駕輿丁｜御輿をかつぐ者

地上歌「千代のためしの數々に。何を引かまし姫小松の。緑の龜も。舞ひ遊べば（と龜正面に出で）。丹頂の鶴も（と鶴正面に出で）。一千年の。齢を君に。授け奉り。庭上に參向申しければ（と鶴龜シテに辭儀し）。君も御感の餘りにや舞樂を奏して。舞ひ給ふ

「君も御感の餘りにや」に鶴龜ワキヅレの次へ行きて下に居り、シテ床几を離れて前に出で、

〔樂〕を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

【三】地（キリ）「月宮殿の。白衣の袂。月宮殿の。白衣の袂の色々妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴え行く。雪の袂を。飜す衣も薄紫の。雲の上人の舞樂の聲々に。霓裳羽衣の曲をなせば。山河草木國土豐かに千代萬代と。舞ひ給へば。官人駕輿丁御輿を早め。君の齢も長生殿に。君

一同『千年萬年榮え給ふ、めでたい喩へに何を引かう。行末久しい姫小松が、何よりめでたい喩へで……』
と緑色をした龜が舞を舞ふと、丹頂の鶴もわが一千年の壽命を大君に捧げ奉つて、庭前に參向したので、大君も御叡感の餘りであらう、舞樂を奏して舞ひ給ふのである。

〔樂〕
皇帝が興に乘じて舞ひ給ふ態。

【三】
かくして、月宮殿で、月世界の白衣の天人のやうに、春は色美しい花の袖、秋は時雨に色を染めた紅葉のやうな羽袖、冬は雪のやうな袂、それ〴〵季節に適はしい様をして、雲上人達が霓裳羽衣の曲を奏すると、天子親らも『山河草木、すべて國土が豐かで、千年萬年幾久しく榮えるやうに』とお舞ひになる。そして役人や駕輿丁が輦輿を進めて、その名も天子の御長命を壽いた長

生殿に還御になるのは、實にめでたいことである。

の齢も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ

と仕手柱先にて留拍子を踏み、　シテ・鶴・龜・ワキ・ワキヅレの順にて幕に入る。

○長生殿—唐の皇居寢殿の名。齢の長きといひかけ、目頭の不老門と照應させた長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時」

〔考　異〕

諸　流　（五　流）

【一】地「不老門にて……。地「その數……。地「一同に……の地を實下懸ではワキ謠とし、地「夥し」を同じくシテ謠とす。

古謠本　（元祿八年本）

【一】地（元大臣）「不老門にて……シテ「百官……踵をついで（元ぎ）地（元大臣）「その數……地（元ナシ）「一同に……　シテ（元大臣）「天に響きて。地（元シテ）「夥し　【二】ワキ「いかに奏聞申すべき事の候（元申候。シテ「奏聞とは何事ぞ）……月宮殿にて舞（元ナシ）樂を……　地上歌「千代の……昔も御感の餘りにや舞樂を奏して舞ひ給ふ（元えつほに入せ給ひ舞樂の祕曲は面白や）　【三】地「月宮殿の……雪の袂を（元ナシ）……

定家（ていか）

観（寳春剛喜）

解説

【能柄】三番目 複式夢幻能

【人物】ワキ 北國僧、ワキツレ 同從僧（二人）、前シテ 里女（式子内親王の靈）、狂言 所の者、後シテ 式子内親王

【所】京都 千本

【時】十月中旬

【異稱】古く〔定家葛〕といつた。

【作者】能本作者註文には金春禪竹の作、二百十番謠目錄には世阿彌の作とす。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十七日演能のこと、言經卿記に文祿四年四月四日註釋のことが出てゐる。

【梗概】北國僧が都に上り、千本のあたりで夕景色を眺めてゐると、俄かに時雨が降つて來たので、傍の亭に立ち寄ると、一人の女が現れてこれは藤原定家卿の建てられた時雨の亭であると教へ、式子内親王のお墓に連れて行き、内親王が定家卿と人目忍ぶ契りをお結びになつた

が、まもなくお亡くなりになつたので、卿の執心が葛となつて、そのお墓に這ひまとつたといふ戀物語を語り、自分がその内親王であるといつて消え失せる。僧が御跡を弔つて法華經を讀誦すると、内親王の靈がお墓から現れ出て、法華經の功力によつて成佛したことを喜び、報恩の舞を舞ひ、またもとのお墓に埋もれておしまひになる。

【出典】 史實を吟味すれば、式子内親王の齋院となり給うたのは平治元年、お退きになつたのが嘉應元年で、定家は平治にはまだ生れてゐず、嘉應元年に僅か九歳であるから、このやうな戀のありやうがない。たゞ謠曲拾葉集所引の雜文集に、

今は昔、後白河院の皇女式子内親王と申し奉るあり。初めは賀茂の齋宮にそなはり、程なくおりゐさせ給ふに、定家卿及ばずながら御志淺からざりけり。或時參り給ひて、

歎くとも戀ふともあはん道やなき、君葛城の峯の白雲

と口ずさぶやうにて申させ給ふ。此卿けしからずみめわろき人なりければ、齋院御返しにも及ばず、「その御つらにてや」とばかり仰せられて、打ちそぶかせ給へば、御言葉の下より定家、

さればこそ夜とは契れ葛城の、神も我が身も同じ心に

とよみ給ひけるとなん。

とある。本書が果して謠曲以前のものであるか疑はしいが、謠曲制作當時これに似た傳説があつて、それを本として脚色したのでなからうか。

【概評】 男女とも邪婬の妄執に苦しむ樣を描いたものには、本曲の外に〔通小町〕〔船橋〕〔女郎花〕などがあり、その中で男の方の妄執が女よりも一層強いのは、本曲と〔通小町〕とで、〔通小町〕の男は悽惨であるが、これの男はむしろ執拗である。尤も本曲では男の方は登場せず、女性の方の苦惱だけを示してゐるのであるが、普通の鬘物のやうに女性の自發的な戀に苦しむのではなく、男性の執拗な妄執の爲に一層苦しめられるのであるから、勝れた讀人同志の戀であるにも似ず、又多くの引歌を連ねてゐるにも拘らず、全體に陰慘な感じを與へてゐる。殊に結末、一度成佛の喜びを述べてゐるにも拘らず、やはりもとの如く定家葛の這ひまとはる中に埋もれてしまふのは、顚倒を襲つた、むしろ不合理ともいひたい脚色である。第三節クセの文は、第三者の物語といふよりも、或時は内親王の、或時は定家の述懷のやうで、冷靜に見れば妥當を缺いてゐるが、實演から受ける感じはさほど異樣に思はれない。

【一】

後見塚に青苔をまとはし引廻をかけたる作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・茶水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキ同様の裝束（水衣は縹）にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ次第「山より出づる北時雨。山より出づる北時雨行方や定めなかるらん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは北國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この度思ひ立ち都に上り候

といひて、ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ道行「冬立つや。旅の衣の朝まだき。旅の衣の朝まだき。雲も行きかふ遠近の。山又山を越え過ぎて。紅葉に殘る眺めまで。花の都に着きにけり花の都に着きにけり

ワキ「紅葉に殘る眺めまで」と正面に向きて三四足出でまたもとに歸りて都に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

【一】

前段

舞臺は初め北國の或所で、ワキ北國の僧、ワキヅレ從僧を從へて登場。

僧「北山の方から降つてくる時雨も、自分と同様、どこに落ちつくといふ目當もないのであらう」

と次第に旅の心持を述べ、

僧「私は北國の方から出て來た僧ですが、まだ都を見物したことがないので、今度思ひ立つて、都へ上るのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「冬になるや早速、まだ朝夜も明けない間に、旅に出かけて、雲の往き來するあちこちの山々を越えて、旅を續けて行くうちに、冬になつてもまだ散り殘つてゐる紅葉の眺めまで美しい都に、はや着いた」

といつて、やがて都に着いた態で、舞臺は京都下京、定家の時雨の亭の邊となる。

【一】

○北時雨―北の方から降つてくる時雨。源氏物語胡蝶の巻に「冬の景色に變り來て、木の葉を誘ふ北時雨」このワキは北國僧であるからこの語を出した。

○冬立つや―冬になるや。冬の立つを旅に出で立つにいひかけ、又裁つの縁で旅の衣と續けた。

○朝まだき―朝まだ夜の明けないうちに。衣の縁語麻を朝にいひかけた。

○紅葉に殘る眺めまで―冬になつてもまだ散り殘つてゐる紅葉が花のやうであるといひかけて、花の都とつづけた。

○花の都―帝都をほめたたへた語。

ワキ「急ぎ候程に。これははや都千本のあたりにてありげに候。暫くこのあたりに休らはばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひてワキヅレは地謠座前に行きて坐し、ワキは舞臺の眞中にて正面に向き、

ワキ「面白や頃は神無月十日餘り。木々の梢も冬枯れて。枝に殘りの紅葉の色。所々の有樣までも。都の景色は一入の。眺め殊なる夕かな。（目附柱の方に向き）あら笑止や。俄かに時雨が降り來りて候。（脇座へ向き）これに由ありげなる宿りの候。立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候

といひて脇座へ行きかゝる。

【三】

シテ里女、面深井・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなう御僧。何しにその宿りへは立ち寄り給ひ候ぞ

僧「旅を急いだので、もはやこゝは京都の千本のあたりらしい。暫くこの邊で休みませう」

といつて、あたりの景色を眺め、

僧「あゝ實に面白い。今は十月の十日餘りで、木々の梢は冬枯れとなつたのだが、まだ枝に散り殘つてゐる紅葉の色がほんとに美しくて、あちらこちらの眺めにしても、さすが都の景色は一段と勝れてゐて、いかにも他所とはちがつた夕氣色だ（雨が降る）おやこれは困つた。俄かに時雨が降つて來た。おゝこゝに何やら由緒のありさうな、雨宿りをするに都合のよい所がある。こゝに寄つて、時雨の晴れるのを待ちませう」

といつて、時雨の亭に入つて休む態。

【三】

シテ式子内親王の靈、里女の姿を裝つて登場。

女「もうしもしお僧さま、どうしてその家へお立ち寄りになるのです」

○千本—京都の西北部、元の千本松原、今の北野神社の東北の地。

○神無月—十月の雅名。

○笑止や—困つたことだ。

○時雨を晴らさばや—時雨の晴れあがるのを待たうといふ意。

【三】

ワキ脇座にてシテに向ひ、

ワキ「唯今の時雨を晴らさん爲に立ち寄りてこそ候へ

シテ「それは時雨の亭とて由ある所なり。その心をも知ろしめして立ち寄らせ給ふかと。思へばかやうに申すなり

ワキ（正面に向き）げにげにこれなる額を見れば。時雨の亭と書かれたり折から面白うこそ候へ。（シテに向き）これは如何なる人の建て置かれたる所にて候ぞ

シテ「これは藤原の定家の卿の建て置き給へる所なり。都の内とは申しながら。心すごく時雨ものあはれなればとてこの亭を建て置き。時雨の頃の年々は。ここにて歌をも詠じ給ひしとなり。『古跡といひ折からといひ。その心をも知ろ

僧「今降つて來た時雨の晴れるのを待たうと思つて、こゝへ立ち寄つたのです」

女「それは時雨の亭といつて由緒のある所です。そのわけを御承知でお立ち寄りになつたのかと思つて、かうお尋ねしたのでございます」

僧は亭の額を見る心で、

僧「なるほど、この額を見ると『時雨の亭』と書いてある。これは丁度今の場合ほんとに面白いことです。これはどういふ人が建てて置かれた所です」

女「これは藤原の定家卿がお建てになつた所です。都の内とは申したから、いかにももの淋しい所で、時雨の降る時などものあはれに感じられるといふので、この亭をお建てになり、年々時雨の降る頃には、この亭で歌などお詠みになつたといふことでございます。昔の舊跡でもあり、又今丁度時雨の降つた時でもあり、

○時雨の亭—定家卿の遺跡その所在は千本の雨歡喜寺相國寺の普光院、嵯峨の厭離庵、衣笠山松原村、小倉山の麓など諸説あつて定かでないが、本曲では歡喜寺内と解してゐる。應仁記に「千本に雨歡喜寺、この寺に定家墓あり」

○藤原の定家—千載集の撰者俊成の子、後鳥羽院の勅を奉じて新古今集を、後堀河院の勅を奉じて新勅撰集を撰んだ、正二位權中納言に上り、剃髪して明靜と號した、仁治二年八十歳で薨じた、

○逆緣の法を—通りがかりの緣、序ながら回向せられよとの意。

○僞りのなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけん—藤原定家の歌。續後拾遺集には「時雨知レ時と いへる心を」と詞書して、家集拾遺愚草には「時雨知レ時私家」と詞書して見ゆ。○言書—和歌の詞書。小序前書。○なき世に殘る—僞りのなきを定家の亡き世にいひかけたり。

しめして。逆緣の法をも說き給ひて。かの御菩提を御弔ひあれと。勸め參らせんその爲に。これまで現れ來りたり（と舞臺に入る）

ワキ「さては藤原の定家の卿の建て置き給へる所かや。さてさて時雨をとどむる宿の。歌はいづれの言の葉やらん

シテ當座に立ちて、

シテ「いやいづれとも定めなき。時雨の頃の年々なれば。わきてそれとは申し難しさりながら。時雨時を知るといふ心を。『僞りのなき世なりけり神無月。誰が誠よりしぐれそめけん。』この言書に私の家にてと書かれたれば。もしこの歌をや申すべき

ワキ「げにあはれなる言の葉かな。さしも時雨は僞りの。なき世に殘る跡ながら

「このわけを御承知になつて、お序ながら御讀經を遊ばして、かの定家卿の御菩提を御弔ひになりますやうにと、お勸め申したいと思つて、こゝまで出て參つたのでございます」

僧「すると、これは藤原の定家卿がお建てになつた所なのですか。ところで、この所で時雨の事をお詠みになつた歌といふのは、どういふ言葉なのでせう」

女「いえ別段どれと定めることは出來ません。時雨の頃は毎年あるのですから、特にこれととりわけて申すことも出來かねますが、『時雨が時を知つてゐるといふ心持を』——

『僞りのなき世なりけり神無月、誰が誠よりしぐれそめけん』

（この世の中はうその多いものだと思つてゐたのに、誰の誠の心から出たものか、十月になると、誤りなく時雨が降る。これを以て見ると、この世の中もうそのないものだ）

といふ歌の詞書に、『私の家にて』と書かれてありますので、或はこの歌を指すのでございませうか」

僧「なるほどこれは趣の深い歌です。全くこの歌の詞の通り、時雨はうそ僞りがなくて、歌の作者の死んだ今日も、誤りなく降るのですが……

シテ「人はあだなる古事を。語れば今も假の世に

ツレ「他生の縁は朽ちもせぬ。これぞ一樹の蔭の宿り

シテ「一河の流れを汲みてだに

ツレ「心を知れと

シテ「折からに

地上歌「今降るも。宿は昔の時雨にて。宿は昔の時雨にて。心澄みにしその人の。あはれを知るも夢の世の。げに定めなや定家の。軒端の夕時雨。ふるきに歸る涙かな（としをり）。庭も籬もそれとなく。荒れのみまさる叢の。露の宿りもかれがれに物凄き夕なりけり物凄き夕なりけり

【三】

シテ「今日は志す日にて候程に。墓所へ參り候御參り候へかし

ワキ「それこそ出家の望みにて候へ。やがて參ら

女「人の命は果敢ないもので、昔の事をお話しますと、今もこの世に……」

僧「あなたとお會ひするのも、前世からの盡きない宿縁で、これこそ『同じ木蔭に雨宿りをし……』

女「同じ河の水を汲むのでさへも……」

僧「深い意味のあることを知れと……」

女「今も今とて、降るこの時雨も、昔この宿に降つたと同じ時雨で、こゝに心を清く澄まして住んだ人の風雅な生活を思ふにつけても、この世の中が夢のやうな無常なものであることが知られて、定家卿が軒端に音づれる夕時雨を眺められた昔の事を思ひ出すと、とかく涙がこぼれ出るのでございます。今はこのやうに昔の面影はなく、どこが庭やら、どれが垣根やら分らないほど荒れはてて行つて、叢に置く露さへかれがれで、ほんとにもの凄い夕氣色でございます」

【三】

女「今日は命日でございますから、これからお墓へお參り致します。お僧さまもお參り下さいませ」

僧「それこそ出家の望むところです。早速

○人はあだなる—人は空しくなつた。

○他生の縁—前世からの因縁。

○一樹の蔭の宿り—平家物語「千手」に「一樹の蔭に宿りあひ、同じ流れをむすぶも、皆是先世の契りといふ」白拍子を「說法明眼論に「或宿二一村一、宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿……皆是先世結緣」

○今降るも宿は—今降る時雨も昔の宿に降つたと同じ時雨で。

○心澄みにし—心の淸く澄むを宿に住むにいひかけた

○定めなや定家の—定の音を重ね、家の縁で軒端とつゞけた。

○ふるきに歸る—昔の事を思ひ出す。時雨の降るを舊きにいひかけた。

○庭も籬もそれとなく—どこが庭でどれが籬（垣根）であるか差別のつかないまでに。古今集僧正遍昭の歌に「里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」

【三】

○星霜ふりたる—年月のたつた。杜牧集に「經二幾年一、日二幾換二星霜一」
○式子内親王—後白河天皇第三皇女、平治元年賀茂の齋院となつて十一年間を過され、後薙髪して如法と號された。世に萱齋院と申す。建永元年薨去。新古今時代の最も勝れた女流歌人であられた。
○定家葛—拾葉抄に「葉は橘の如く又五味子に似たり花は梔に似て小く白し。年を經て久しきは四五月に小き白き花咲く、香あり、其蔓細く長し。垣及び石にはふ」と。せきだかづらの別名となつてゐるのであるがこの名は本曲の作者がつけたものでなからうか。
○賀茂の齋の院—天皇の御即位毎に未婚の皇女又は女王を伊勢大神宮と賀茂神社とに奉侍せしめ給うた。そして文字には伊勢のを齋宮賀茂のを齋院と區別したが和文よみにはいづれも「いつきのみや」といふ。
○下り居させ—齋院の御役をお退きになり。

うずるにて候

シテ・ツキともに作物に向き二三足出で、

シテ「なうなうこれなる石塔御覧候へ

ワキ「不思議やなこれなる石塔を見れば。星霜古りたるに蔦葛這ひまとひ形も見えず候。これは如何なる人のしるしにて候ぞ（とシテに向く）

シテ「これは式子内親王の御墓にて候。又この葛をば定家葛と申し候

ワキ「あら面白や定家葛とは。如何やうなる謂れにて候ぞ御物語り候へ

シテ「式子内親王始めは賀茂の齋の院にそなはり給ひしが。程なく下り居させ給ひしを。定家の卿忍び忍びの御契り浅からず。その後式子内親王程なく空しくなり給ひしに。定家の執心葛となつて御墓に這ひ纏ひ。互の苦しみ離れやら

参りませう」

やがて式子内親王のお墓の前へ來た態で、

女「もし、この石塔を御覧なさいませ」

僧「これは變だ、この石塔を見ると、隨分年月がたつてゐるが、蔦葛が石塔に這ひまとつて、形も見えない。一體これはどういふ人の墓じるしなのです」

女「これは式子内親王のお墓でございます。そしてこの葛を定家葛と申します」

僧「これは面白い、定家葛とはどういふ謂れがあるのです、お話下さい」

女「式子内親王は始めは賀茂の齋院とおなりになつたのですが、間もなくお役をお退きになりましたのを、定家卿が人に隱れて深い契りをお結びになりました。その後式子内親王は間もなくお亡くなりになりましたが、定家卿の執心が葛となつてお墓に這ひまとはり、お二人とも苦患を脱がれることがお出來になりませ

○心の奥の信夫山|伊勢物語の歌「しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく」を引いた。心の奥を陸奥にいひかけた。信夫山は岩代國信夫郡にある。
○道芝の露の|通ふ道、道芝、露の世、露の世語、世語りといひつゞけたのである
○よしぞなき|つまらないことだ。
○玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば|新古今集式子内親王の歌。下句「忍ぶることの弱りもぞする」玉の緒は命のこと。
○心の秋の花薄|忍ぶ心の弱るのを心の秋といひ、秋の花薄、穗に出でと續けた。
○穗に出で|外に現れ人に知られる意。
○かれがれの中|二人の間の離れ離れに遠々しくなることを、薄の縁でかれがれといつたのである。
○昔は物を思はざりし|拾遺集藤原敦忠の歌に「逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり」
○後の心ぞはてしもなき|逢ひ見た後の心盡しは限りがない。
○あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて|定家の家集拾遺愚草の歌。下句「世々にふりぬる山藍の袖」
○山藍の袖|山藍で模様を摺つた白布衣、舞人の着る

ず。『ともに邪婬の妄執を。御經を讀み弔ひ給はば。猶々語り參らせ候はん

といひて、次のクリに舞臺の眞中へ行き下に居り、ワキも同時に坐す、

地クリ『忘れぬものを古の。心の奥の信夫山。忍びて通ふ道芝の露の。世語りよしぞなき

シテサシ『今は玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

地『忍ぶる事の弱るなる。心の秋の花薄。穗に出で初めし契りとて又かれがれの中となりて

シテ『昔は物を。思はざりし

地『後の心ぞ。はてしもなき

(居クセ)

地クセ『あはれ知れ。霜より霜に朽ち果てて。世々にふりにし山藍の。袖の涙の身の昔。憂き戀せじと御祓せし。賀茂の齋の院にしも。そなはり

ん。御經を讀んで、二人の邪婬の妄執をお晴らし下さいますならば、なほもつとお話申し上げませう」

といつて僧の前に坐り、

女「今に忘れられないことでございますが、昔烈しい戀慕の心から、人に忍んで通ひ會うたことが、はかないこの世の噂話に傳へられるやうになりましたのは、ほんとに情ないことでございます。思へば——

『玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば、忍ぶることの弱りもぞする』

(一層のこと、この命が亡くなるものならば亡くなつてしまふがよい。この切ない戀心を人に知られないやうに隱してゐるが、とても耐へきれない。このまゝで命を永らへてゐたならば、遂には戀を隱す力が弱つて、人に知られてしまふかも知れないから)

と心配しました通り、戀心を抑へることが出來なく、契りを結ぶやうになりましたが、人に知られて、また遠々しい離れ離れの間柄となり、『逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり』といふやうな、前よりも一層物思ひの絶えない身となりました。そして——

『あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて、世々にふりぬる山藍の袖』

(年ごとに次第に老い衰へてしまつた、どうか察してくれ)

○小忌衣。
○戀せじと御祓せし—古今集讀人知らずの歌「戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけずぞなりにけらしも」（伊勢物語にも）を引いた。
○色に出でけるぞ—拾遺集平兼盛の歌に「忍ぶれど色に出でにけりわが戀はものや思ふと人の問ふまで」
○あだし世—はかない現世
○あだなる中—移り氣な浮氣な戀。
○よその聞え—外聞。世間の噂。
○大方の空恐ろしき—外聞は多しを大方にいひかけ、空から日、日から雲と續けた。
○雲の通ひ路絶え果てて—古今集僧正遍昭の歌「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ少女の姿しばし留めむ」を引き、内親王と逢ふことのなくなつた意に轉用したもの。
○歎くとも戀ふとも逢はん道やなき—拾遺愚草の歌。下句「君葛城の嶺の白雲」
○葛紅葉の—葛の紅葉した色と纏はる姿とを戀慕の執着に喩へた。
○荊の髪も結ぼほれ—戀にやつれて荊のやうに髪の亂れ結ぼれた樣を葛の蔓に纏はる樣にいひかけた。
○消えかへる—すつかり消えてしまふ。
【四】
○くれはとり—日の暮れる

給ふ身なれども。神や受けずもなりにけん。人の契りの色に出でけるぞ悲しき。包むとすれどあだし世の。あだなる中の名は洩れて。よその聞えは大方の。空恐ろしき日の光。雲の通ひ路絶え果てて。少女の姿とどめ得ぬ。心ぞつらき諸共に

シテ「げにや歎くとも。戀ふとも逢はん道やなき

地「君葛城の峯の雲と。詠じけん心まで。思へばかかる執心の。定家葛と身はなりて。この御跡にいつとなく。離れもやらで葛紅葉の。色焦がれ纏はり。荊の髪も結ぼほれ。露霜に消えかへる妄執を助け給へや

【四】

地ロンギ「古りにし事を聞くからに。今日も程なくくれはとり。怪しや御身誰やらん

シテ「誰とても。なき身のはては淺茅生の。霜に朽

といふ歌のやうに老い衰へてしまひました。實をいへば、もとは浮氣な戀をしないやうにと神に誓つて、賀茂の齋院とおなりになつたお方なのですが、神樣がお聞き入れにならなかつたものか、契りを結んで人に知られるやうになつたのは悲しいことでございます。その後も、どんなにか人に隱さうとはしても、はかないこの世のさがなさには、浮氣な戀が世間に洩れて、人の噂は高くなり、そら恐ろしくなつて、二人の逢ふことも絶え果ててしまひ、顏も見られない辛い思ひをしたのでございます。そして——

『歎くとも戀ふとも逢はん道やなき、君葛城の嶺の白雲』

（戀しい君は遠い葛城山の白雲のやうに離れてしまつて、どんなに歎いても戀しても、逢ふすべがない）

と詠むやうになりました。思へばこのやうな戀の執心が定家葛と化して、この内親王の御跡にいつとはなくからみついて離れず、葛紅葉のやうに戀ひ焦かれて這ひまとはり、姿もやつれ果てて、露霜のやうに消えてしまひました。この妄執の罪をどうぞお救ひ下さいませ—

【四】

僧「昔のお話を伺つてゐるうちに、今日も程なく夕暮となりましたが、一體あなたはどなたなのです、實に不審に思はれますが」

女「誰だと申したところで、もはやこの身

を呉織いにひかけ、呉織漢織といふ成語によつて、呉織を怪しの枕詞とした。呉織のこと〔呉服〕に作らる。
○淺茅生の霜に朽ちにし―新古今集源通光の歌に「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな」
○よしや草葉の―よしぞなきの音を重ねてよしやといひ、伊勢物語に「何のあだにか思ひけんよしや草葉よならんさが見ん」とあるを借り、草の名の忍ぶにいひかけた。
○かげろふの―石の枕詞。姿は影の如くといひかけたのである。

【間】

ちにし名ばかりは、殘りても猶よしぞなき

地よしや草葉の忍ぶとも。色には出でよその名をも

シテ『今は包まじ

地、この上は、われこそ式子内親王（とシテ立ち）。これまで見え來れども まことの姿はかげろふの石に殘す形だに（少し後へ下り）それとも見えず蔦葛苦しみを助け給へといふかと見えて失せにけり。いふかと見えて失せにけり

と作物へ中入。

は霜に朽ち果てたもので、徒らな名だけ殘つても、致し方のないことでございます」

僧「いやたとへ草葉の蔭に隱れたお身の上にしても、お名前だけは聞かせて下さい」

女「今は隱しますまい。私が式子内親王でこゝまで現れて來たのですが、まことの姿は消えて、石塔に殘す形さへ蔦葛に這ひまとはれて、それとも見えないものとなり、苦しんでゐるのです。どうぞこの苦患をお救ひ下さい」

といふかと思ふと消えてしまつた

前シテ作物の塚の中に隱れ入る。

【間】 狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。都千本のあたりに住居する者にて候。この間はいづ方へも參らず候間。今日は罷り出で。心を慰め申さばやと存ずる。いや誠に流石は都にて候。名門舊跡多く候間。いかやうなる慰みも出來申し候。（ワキを見て）いやこれに見馴れぬ御僧の御座候か。いづかたより御出でなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは北國方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか／＼この邊の者にて候

○夫の心もなきやうに—前出「戀せじと御祓せし」と同じ意。
○歡喜寺—京都千本、今の般舟三昧院、こゝに時雨亭があつたといふ。
○しるし—墓標。
○取りのけ候な—取り除くな。なは禁止の助詞。

ワキ「左様にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候
狂言「畏つて候。（舞臺の眞中へ行き下に居て）さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。時雨の亭の子細又定家葛の事。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。われ等もこのあたりに住居仕り候へども。左様の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候御事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「さる程に式子内親王と申したる御方は。人皇八十二代後鳥羽院の御宇に御座ありたる御方なるが。始めは賀茂の御手洗へ御參りありて。夫の心もなきやうにと御祈りあり。その後賀茂の齋（いつき）の宮に移り給ふが。程なくおりゐの御身とならせられ。歡喜寺と申す所に住ませ給ふが。定家卿と忍び忍びの御契りありたると申すが。戀路の道も絶え〲になり。内親王世を去り給ひし程に。御墓を築き立て。これなるしるしを建て御申し候。又定家卿も程なく空しくなり給ひて候が。それにつき不思議なる事の候。定家卿果て給ひし頃より。式子内親王の御墓に蔦葛の這ひまとひ。形も見え分かず候間。あたりの者どもとりのけ候へば。一夜の内にもとの如くになり候間。人々不審をなし申す處に。このあたりに貴き御方の御座候が。その人の夢に見え給ふは。内親王の御墓へかゝりたる葛を取りのけ候な。あれは定家の執心葛となりて。御墓に這ひまとふ間。この後とり退くるならば。祟りをなさうずるとの御事にて候間。さては恐ろしき事なりとて。その後とり退く者もなく候間。かやうに形も見えず。それより定家葛と申し候。又あれに見えたるは時雨の亭と申して。定家卿の建て置かれ候が。時雨の節は申すに及ばず。もの淋しき折節は。あの亭にて御歌など遊ばされたると

〔五〕

「念ひの珠」念珠、數珠。身を思ふといひかけた、〇數々に」玉の數々を回向の數々にいひかけた、

〔六〕

申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すこと餘の儀にあらず。最前時雨の亭に立ち寄り候處に。いづくともなく女性一人來られ。時雨の亭につき樣々古歌など詠まれ。この所へ同道申され。式子内親王の御墓を敎へ。定家葛の事唯今御物語の如く懇に語り。われこそ式子内親王といひもあへず。塚のほとりにて姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候。さては式子内親王假に現れ御言葉をかはし給ふと存じ候間。暫く御逗留なされ御菩提を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

〔五〕

ワキ ワキヅレ 上歌(待謡)「夕も過ぐる月影に。夕も過ぐる月影に。松風吹きて物凄き草の蔭なる露の身を。念ひの珠の數々に。弔ふ縁は、ありがたや弔ふ縁はありがたや

〔六〕

後ジテ式子内親王、引廻をかけたる作物の中にて、

〔五〕 後段

偖夕暮ももはや過ぎて、夜の月影がさし、松風が吹き渡つて、もの凄い折柄、この草葉の蔭に果敢なく消えた人の事を思ひ、數珠を繰つて、色々回向するのだが、かういふ縁を得たのは、ほんとにありがたいことだ」

〔六〕 [illegible]

後ジテ式子内親王、塚の中にて、

涙も。ほろほろと解けひろごれば（とシテ立ち）。よろよろと足弱車の火宅を（と作物を出で）。出でたるありがたさよ（と眞中にてワキへ合掌）。この報恩にいざさらば（と常座へ行き）。ありし雲居の花の袖。昔を今に返すなる。その舞姫の小忌衣

シテ『おもなの舞の

地『有様やな

〔序舞〕

【八】

シテワカ「おもなの舞の。有樣やな

と謠ひ引續き次の謠に合せて舞ふ。

地『おもなやおもはゆの。有樣やな

シテ「もとよりこの身は

地「月の顔ばせも

シテ「曇りがちに

地「桂の黛も

ながらも、苦患の三界から免れ出ることの出來ましたのは、ほんとにありがたうございます。では、この御恩報じに、昔御所にゐた頃の花やかな樣を今こゝに繰り返し、あの舞姫の小忌衣を着て、舞を舞つてお目にかけませう。でもお恥かしい舞ざまでございます」

といつて、

〔序舞〕を舞ひ、

【八】

式子「お恥かしい舞ざまでございます、氣まりの悪い有様でございます。もともとこの身は月のやうな晴れやかな顔であり、三日月のやうな美しい眉であつたものが、落ちぶれて、顔は曇りがちに、黛は消えがちになり、たゞ涙にのみ溺れて、露のやうに消えてしまひ、あの葛城の神のやうな醜い姿となつてしまひました。

○足弱車―車輪の弱い進みの遅い車。
○火宅―苦惱の多い三界を喩へた語。法華經譬喩品に「三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏」
○昔を今に返すなる―昔の様を今に繰り返す意と舞袖を飜す意とを兼ねた。
○小忌衣―五節舞姫などの着る裝束。
○おもな―面目のない、恥かしい。

【八】

○面はゆ―まばゆい、晴れがましい。
○月の顔ばせ―美しい晴れやかな顔。
○桂の黛―三日月の如き眉。桂は月中にある樹、轉じて月の意。

シテ『落ちぶるる涙の
地『露と消えてもつたなや蔦の葉の。葛城の神姿。恥かしやよしなや。夜の契りの。夢のうちにとありつる所に歸るは葛の葉の。もとの如く。這ひ纏はるるや定家葛。這ひ纏はるるや定家葛の。はかなくも形は埋もれて。失せにけり

シテ「もとの如く」と作物の内に入り、「這ひ纏はるるや」と柱をまはりて葛にからまる形をし、「はかなくも」と扇にて面をかくし平坐して埋もれたる態を示し、「失せにけり」と扇をたゝみて留む。

ほんとに情ないお恥かしいことで、たゞ夜の間だけ、夢のうちにのみお目にかゝれるのでございます」といつて、もとの墓に歸ると、定家葛はもと通り墓に這ひまとはつてゐて、内親王の御姿はその中に埋もれて消えてしまつた。

○落ちぶる—零落する。書き眉が落つといひかけ、又落つる涙とつゞけた。
○つたなや蔦の—「つた」の音を重ねた。
○葛城の神姿—一言主神。役小角に葛で縛られたといふ故事をいふ。〔葛城〕參照。
○夜の契り—葛城の神が役小角に使役せられて岩橋を架けた時、姿の醜いのを恥ぢて、夜ばかり働いたといふ故事。拾遺集女藏人左近の歌に「岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くるわびしき葛城の神」
○はかなくも—葛の葉といひかけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

著しい異同はない。

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「急ぎ候程に……暫くこのあたりに（光ナシ）……ワキ「面白や……俄かに時雨が（光の）……ナシ）その宿りへは（光何とて）立ち寄り……ワキ「唯今の……寄りてこそ候へ（光扨爰をはいつくと申候そ。シテ「これは……この亭（光やとり）を建て置き（光給ひ）……その心をも知ろし召して（光ナシ）……御菩提（光あと）を御（光ナシ）弔ひあれ（光給へ）と……ワキ「さては藤原の（光ナシ）……

【二】シテ「なうなう……何しに（光ナシ）……シテ「それ（光是）は時雨の……

【三】ワキ「それこそ出家の望みにて候へ（光ナシ）……シテ「（光昔）式子内親王始め……

御覧ぜらるゝもすなき事件にもれぬれば病婦の身となり給ひぬソノ後――先此御前に召び給ひ

【出典】第一段箱王祐經對面の事は、曾我物語卷四「箱王祐經に逍ひし事」と同趣で、恐らくこの物語に據つたのであらう。第二段祐經調伏の事は、曾我物語には見えないが、卷一「伊東を調伏する事」に、箱根別當が伊東祐親の依頼を受けて、祐經の父祐繼を調伏したことを記してゐるから、本曲はこれを祐經調伏の事に取りかへて脚色したものであらう。

【概評】第一段は可憐、第二段は凄壯、全篇を通じて相當まとまつた脚色であるが、第一段の舞臺面のやゝ緊張を缺く憾みのあるのは、ツレ源頼朝以下、主題に關係の薄い人物の多人數登場することが、シテと子方との對立を不鮮明ならしめるのであらう。曾我物の謠曲には、本曲の外に〔切兼曾我〕〔元服曾我〕〔小袖曾我〕〔夜討曾我〕などがある。本曲はその中〔小袖〕〔夜討〕に次いだ佳作であらう。

【一】

次第の囃子にて、ツレ源頼朝、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帯・扇・小刀の裝束、シテ工藤祐經、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帯・扇・小刀の裝束、ツレ（立衆）頼朝從者五人又は七人、シテと同樣の裝束にて舞臺に入り、

一同次第「海山かけて行く雲の海山かけて行く雲の箱根の寺に參らん

頼朝「抑もこれは兵衛の佐頼朝とはわが事なり

シテ立衆「それ治まれる御代のしるし。東南に雲收まつて西北に風靜かなり

頼朝「殊更當時一統の、道も直なる文武の二つ

シテ立衆「いづれも叶ふ時代とて

【一】

第一段

舞臺は初め相模國鎌倉で、ツレ源頼朝、シテ工藤祐經以下ツレ從者多勢を隨へて登場。

一同「湖もあれば山もある、かなた雲の往き來してゐる、あの箱根寺へ參詣しよう」

（次第に旅の目的地を述べ、）

頼朝「自分が兵衛佐源頼朝である」

（見物人に自己紹介をし、）

從者一同「天下太平な御治世のめでたいしるしには、東南の雲が隱れ消え、西北の風も靜かなことだ」

頼朝「殊に今は天下が統一して、政治は正しく行はれ、文武の二道とも……」

從者一同「みな盛んな御時代なので……」

【一】

○海山かけて—箱根寺は箱根山にあり、その山中には蘆の湖があるので、行く雲に寄せて附近の景趣を叙したのである。

○箱根の寺—雲の端を箱にいひかけた。箱根寺は相摸國足柄下郡元箱根村にあり天平寶字元年僧滿願が靈夢を蒙つて創建したものであるといふ。箱根三所權現を祀る。

○兵衛の佐頼朝—征夷大將軍正二位右近衛大將に至り正治元年五十三歳で薨じた兵衛佐はその伊豆に配流される以前の官であつたが、その後も永く前兵衛佐と呼ばれてゐた。

○東南に雲收まつて—泰平の相。出典は分らないが「吳服」にもこの句が出てゐる。

頼朝「國見もこれか相摸嶺や
立衆「箱根詣での御爲に
頼朝「明くるを待つや星月夜
一同(道行)「鎌倉山を朝立ちて。鎌倉山を朝立ちて。まだ有明の影殘る。雲こそ匂へ朝日影西に向ひて行く雲の。富士の高嶺の程を知る。足柄山を分け過ぎて。梢に波を湖や。箱根山にも着きにけり箱根山にも着きにけり
シテ「やがて御社參あらうずるにて候
といひて脇座より地謡座へかけて順次に竝ぶ。
【三】
子方箱王、着附厚板・白大口・腰帶・扇・小刀・太刀の裝束、ワキ箱根別當、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、
ワキサシ「この程の日數待たれて今日既に。鎌倉殿の御參詣。これを物見とこの寺の。老若の衆徒稚兒童。數を盡してわれもわれもと。皆面々に

○當時一統の―頼朝が鎌倉に幕府を開いて、天下を統一したことをいふ。
○道もすぐなる―政道を道路にかけていつたのである。
○文武につゝ―一統に對しにつゝといつた。
○國見―上古、天皇が山に登つて國内の狀勢を御覽遊ばされたことをいふ。
○相摸嶺や―箱根山は、相摸連山の一峯であるから、相摸嶺も國見山の一つであるといひかけて、箱根の枕詞とした。
○箱根詣で―箱根權現參詣。
○明くるを待ちて―箱の緣語開くといひかけた。
○星月夜―鎌倉の枕詞。
○雲こそ匂へ―雲が紅色に染まつて來て、日の出るのをいふ。
○富士の高嶺の程を知る―高い足柄山に登つて、富士山がなほ更に遙か上にあるのを見て、その如何に高いかを知るとの意。
○足柄山―相摸と駿河の二國に跨る。
○梢に波を湖や―梢の間から波を見るを湖にいひかけた。湖は箱根山中の蘆の湖。
【三】
○物見―見物。
○衆徒稚兒童―衆徒は大人の僧、稚兒童はまだ剃髮しない小人。

頼朝「相摸嶺に上つて行くのも、昔の國見と同樣な意義があらうかと思つて……」
從者一同「箱根權現に御參詣遊ばす爲に……」
頼朝「夜の明けるのを待つて出かけるのだ」
と述べ、やがて旅に出る心で、
一同「鎌倉山を朝早く立つて、まだ有明の月影の空に殘つてゐる中を進んで行くうちに、雲が紅色に染まり、朝日がさし出て、やがて西の方へと向つて行く。自分達も同じく西に向つて進み、足柄山に登つては、愈〻富士山の高いことを知り、梢の間から湖の波を見てゐる間に、はや箱根山に着いた」
と旅程を述べてゐるうちに旅は進んだ態で、舞臺は伊豆國箱根權現となる。祐經は頼朝に向ひ、
祐經「早速御參拜なされますやうに」
といつて、一同神前に禮拜する態。
【三】
子方箱王、ワキ箱根別當に伴はれて登場。
別當「この間から日を數へて待つてゐるうちに、今日は愈〻その當日となつて、鎌倉將軍頼朝公が御參詣なされたので、寺中の者ともはこれを見物しようと思つて、年老つたものも若いものも、僧侶も稚兒も、殘らずわれもわれもと、皆誘ひ

○箱王―曾我五郎時致の童名。幼時箱根寺に預けられてゐたが、後元服し、建久四年兄十郎祐成と共に父河津三郎の敵工藤祐經を討つた。「元服曾我」「小袖曾我」參照。
○講堂―七堂伽藍の一、敎法を講演する堂で、普通金堂の後にある。
○鎌倉殿―賴朝をいふ。
○風折―風折烏帽子。
○念珠氣高く―數珠を持つて上品に。
○左の座上―左側の上座。
○北條殿―北條時政。賴朝の妻政子は時政の女である。時政のことと「吾妻鏡」に作らる

誘へば

子方「人なみなみに箱王も。かたへの稚兒に誘はれて。講堂の庭に立ち出づる。「いかに申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ

子方「鎌倉殿の御參詣。たまさかの御事にて候。御供の人々の名を知らず候。教へて給はり候へ

ワキ「易き間の事御尋ね候へ教へ申さう

子方「まづ一番に風折召され。念珠氣高く見え給ふは。鎌倉殿にて御座候か

ワキ「あれこそ鎌倉殿候よ。なんぼういみじき御威光にて候ぞ

子方「さて御供の人々の。二行に列座せられたり。まづ左の座上をば誰と申し候ぞ

ワキ「あれは鎌倉殿の御舅北條殿候よ

合はせて出掛けるので……

箱王「自分も人並に、そこらにゐる稚兒に誘はれて、講堂の庭へ見物に出かけるのだ」

さいつて別當に向ひ、

箱王「別當さま」

別當「何です」

箱王「將軍樣の御參詣はめつたにないので、御供の方々の名前を存じません。どうぞ敎へて下さい」

別當「お易いことだ。お尋ねなさい、敎へてあげよう」

箱王「まづ第一番に、風折烏帽子をお召しになつて、數珠を手に持ち、氣品の高い樣子をしていらつしやるのは、あれが將軍樣ですか」

別當「あれが將軍樣ですよ。實に大した御威光ですよ」

箱王「それからお供の方々は、二列に列んで居られますが、まづ左側の上座に居られるのは、何といふ方です」

別當「あれは將軍樣のお舅の北條時政殿ですよ」

○左巴―紋所の名。
○宇都宮の彌三郎―名は頼綱、成綱の子、曾我物語にはこの人の名は擧げてゐない。
○右巴―紋所の名。
○小山の判官―名は朝政。政光の子。曾我物語にはこの人の名も擧げてゐない。
○松皮―紋所の名。
○小笠原―長清か。この名も曾我物語には擧げてゐない。
○諸司の別當梶原父子―父は景時、子は景季。曾我物語には父だけを擧げて「これこそは當時聞ゆる梶原平三景時とて、侍どもの鬼神に思ふものよ」といふ。景時のことは「切兼曾我」に見え、景季のことは「箙」に作らる。
○香の直垂―香色の鎧直垂。香色は薄紅に黄をかけたもの。
○和田の左衛門―名は義盛(「七騎落」參照)。曾我物語に「侍の右の一の座」として擧ぐ。
○秩父の莊司重忠―曾我物語に「左の一の座」として擧ぐ。
○つき出したる扇づかひ―前の方に扇を突き出して威

子方「左巴は
ワキ「宇都宮の彌三郎
子方「右巴は
ワキ「小山の判官
子方「松皮は
ワキ「小笠原
子方「さてまた中座の一番は
ワキ「諸司の別當梶原父子
子方「香の直垂二人は誰そ
ワキ「一人の大男は和田の左衛門。今一人は秩父の莊司重忠
子方「さてその次につき出したる扇づかひ
ワキ「今此方を見候や
子方「あれをば誰とか申し候ぞ
ワキ「あれこそ工藤一臈

箱王「左巴の紋をつけた人は……」
別當「宇都宮の彌三郎です」
箱王「右巴の紋をつけたのは……」
別當「小山の判官です」
箱王「松皮の紋をつけたのは……」
別當「小笠原です」
箱王「それからまた中座の第一番に居られるのは……」
別當「諸司の別當梶原殿の父子です」
箱王「香色の直垂を着た二人の人は誰です」
別當「一人の大男の方は和田の左衛門で、も一人の方は秩父の莊司重忠です」
箱王「それからその次に、扇を前に突き出して、威張つた風をして扇いでゐるのは……」
別當「今こちらを見てゐる人ですか」
箱王「あの人は何といふ人です」
別當「あれが工藤一臈……」
といひも終らないうちに、

張つた態度で扇ぐことをいふ。曾我物語には「馬手の方に少し引きのきて、半裝束の數珠もちて、香の直垂着たる」とある。
○工藤一﨟祐經—伊豆伊東の領主で曾我兄弟の父の敵曾我物語に「御分の父河津殿とは從弟なり、御前さらぬ切者」とある。
【三】○河津殿—曾我兄弟の父河津三郎祐泰。伊東祐親の子所領の爭ひから祐經の臣に赤澤山で射られた。兄弟の五つ三つの時であつた。
○赤澤山—伊豆國田方郡にある。曾我物語卷一に「奥野の口、赤澤山の麓、八幡山の境なる切所」で討たれたといふ。
○狩くら—狩場。
○尾越の矢—峯を越して飛んでくる矢。
○弓矢八幡—武士が神にかけて誓ふ詞。
○夏引の絲—夏、蠶から引いた絲。敵とはなしといひかけ、絲の緣語筋の序とした。
○筋なき人—すぢ道のない人。わけの分らない者。
○かまひて—必ず。きつと。
○天に口なし—古諺。平家

子方「祐經候か
ワキ「暫く。かやうの所に久しくは御座なきものにて候。此方へ御入り候へ
シテ子方の立去らんとするを見て、
【三】シテ「あら珍しや箱王殿。御身の父河津殿は。赤澤山の狩くらにて。尾越の矢にあたりて空しくなり給ひたるを。某がしわざとばつと風聞仕り候。弓矢八幡箱根權現も照覽あれ。某は存ぜず候
子方「さて自らが敵をば誰とか申し候ぞ
シテ「いや敵とは夏引の絲。筋なき人のいひごとを。かまひて用ゐ給ふなよ
子方「用ゐはせずと世語りの。天に口なし人のいひ事
シテ「それをも承引し給ふなと
子方『かの古武者の祐經に

箱王「祐經ですか—」
別當「靜かに。このやうな所に長くゐるものではありません。こちらへお出でなさい」
と箱王の心を察して連れ去らうとすると、先程からこちらを見てゐた祐經は、この稚兒が箱王であることを知つて、
【三】祐經「おゝこれは珍しい、箱王殿。そなたのお父さまの河津殿は、赤澤山の狩場で峯越しに飛んで來た矢に當つて亡くなられたのを、世間では自分のしわざだと、ぱつと噂を立ててゐるが、八幡大菩薩箱根權現もお聞き下さい、斷じて自分は知らないのです」
箱王「すると、私の敵は何といふ人なのです」
祐經「いや敵などはないのです。わけの分らない人のいふことを、決して聞き入れてはいけませんよ」
箱王「自分が聞かうとしないでも、世間の者は噂を立てるもので、『誰にも天に口なし人をしていはしめる』といふ通り……」
祐經「いやそれも聞き入れてはいけません」
と、かの老獪な物馴れた武士である箱

物語巻一「清水炎上の事」に「天に口なし人を以ていはせよと申す」
○承引し——合點す。聞き入れる。
○古武者——老巧な、物なれた、喰へない武士。
○すかされて——だまされ、いひくるめられて。

【四】
○同宿——同じ宿坊にゐるも

シテ「泣いつ笑うつすかされて

子方「さばかりたけき

シテ「箱王も

地「幼き身の悲しさは、誠しやかにいひなされて。心もよわよわと、あきれ果てたる氣色かな

地「さて頼朝は御座を立ち。さて頼朝は御座を立ち。はや御下向ありしかば御供の侍面々に。門前さして出でければ

子方「箱王はただひとり

地「講堂の庭にたたずみて、敵の跡を見送りて泣くより外の事はなし泣くより外の事はなし

ツレ源頼朝以下、シテ・ツレ頼朝の從者一同幕に入る。

【四】

子方「よくよく物を案ずるに。げにわれながら後れたり。今この時の折を得て、祐經が手にかからんと、同宿の太刀を盜み取り

經に、泣いたり笑つたりして、うまくいひ丸められたので、あのやうに勢ひ込んだ箱王も、年の幼い悲しさには、誠しやかにいひまくられると、心もよわつて、たゞ呆れ返つてゐる有様であつた。

そのうちに、頼朝公は御座を立つて、もはやお歸りになるので、お供の侍達も皆門前の方へ出て行つたので、箱王はたゞひとり講堂の庭に彳んで、敵の跡を見送り、泣くより外に致し方がなかつた。

【四】

源頼朝及び祐經以下從者一同は鎌倉に歸る態で退場。箱王は泣く泣く跡を見送つてゐたが、氣をとり直し、

箱王「よく考へ直して見ると、實にわれながら氣後れをしたものだ。今この折を幸ひに、祐經の手にかゝつて死なう——と同じ宿坊にゐる者の太刀を盜み取り

地、敵の跡を慕ひつつ。駒の蹄にかからんと。門前さして追うて行く門前さして追うて行く

ワキ「言語道斷。かかる聊爾なる御事にて候。さやうの御心中あるならば。敵の前のたふれなるべし。「ただまづ歸り給へとて

地、手どり足どり誘ひ別當の坊に。歸りけり別當の坊に歸りけり

子方まづ幕に入る。

敵を討つことが出來なければ、自分が敵の馬の蹄にかゝつて死なうと、敵を慕つて、門前の方へ追ひかけて行く。

別當はこれを見て、

別當「これは驚いた。これはあまり輕卒なことですぞ。そのやうなお考へだと、敵を前にしながら失敗しますぞ。一先お歸りなさい」

と手足をとつて、無理やりに別當の坊に連れ歸つた。

箱王と別當、坊に歸る態で退場。

○駒の蹄にかからん—死を堵して敵に近づく意。

○聊爾—粗忽。輕卒。

○たふれ—ふため。不利益。

○手どり足どり—無理に引き立てて。

【間】

【間】　ワキ中入。狂言名乘座に立ち、

ワキ「いかに誰かある

狂言能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にてワキの前に出で、

狂言「御前に候

ワキ「護摩の壇上をかざり候へ

狂言「畏つて候

狂言「扨も／＼唯今箱王殿の風情を見て。われ等如きの者までも涙を流して候。さすが河津殿の御子にて候。親の敵祐經を討ちたく思し召せども。名ばかり聞いて見知り給はねば。鎌倉殿箱根詣では祐經も御供と思し召し。別當に御申し候は。鎌倉殿の御參詣御供の人々の名を敎へ給へとありければ。

まづ鎌倉殿を始め。左巴は誰。松皮は誰。さて又中座の紅の直垂一人は誰ぞ。その次につき出したる扇遣ひは誰人ぞと尋ね給へば。あれこそ工藤一﨟と教へ給へば。その時箱王殿親の敵と心得。飛びかかり給ふ處を。別當押し留め。かやうの所に長居は無用と引き立て入り給ふ處を。祐經箱王殿を呼びかけ。御父河津殿は赤澤山にて果て給ひしを。某が仕業と申すか。それは知らぬ者の申し事にて候と。言葉に花を咲かせ申されければ。すごすごとなり呆れ果てて御座候が。はや頼朝の御下向とて皆々御立ち候へば。箱王殿思案して。何と申すとも親の敵は祐經なり。一太刀恨みて腹切らんと。同宿の太刀を追取つて敵を目がけ給ふを。同宿達箱王殿を連れて歸られ候が。別當聞し召し。さりとては痛はしき事なり。幼き身にて敵討は思ひも寄らず。まづ靜まり給へと御宥めあり。この上は祐經を形代に作り護摩の壇上にすゑ。調伏して御本意を遂げさせ申すべし。即ち護摩壇を飾り候へと仰せつけられて候間。急ぎ護摩壇の飾り候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【五】

後見、一疊臺を舞臺に持ち出し、臺上に形代を置く。後ツレ箱根別當、前の裝束に白大口を着け、ワキヅレ従僧八人又は十人、ワキ同様の裝束にて出で、

後ツレ「抑も佛陀の御誓願。もとより衆生の所願を滿てて

ワキヅレ「これも年月思ひ深き

ワキ「箱根の海の恨みをなす

ワキヅレ「敵を亡ぼしたび給はば

【五】　第二段

（舞臺は箱根別當の坊で、護摩壇が嚴かに飾りつけられ、前には祐經の形代が置いてある。後ツレ箱根別當、ワキヅレ従僧を多勢連れて登場、護摩の修法を始める態で、

別當「一體佛樣の御誓願は、衆生の願ひ事をお叶へ下さることであつて……」

従僧「この願ひと申すのも、永い年月深く思ひ込んだもので……」

別當「箱根の湖のやうな深い恨みを持つた……」

従僧「この敵を亡ぼして戴けますならば……

○言葉に花を咲かせ—言葉を飾り立てて巧にいひくるめる意。

○恨みをなす—海の浦といひかけた。

○惡魔降伏の御誓ひ—不動明王を初め五大尊の誓願。
○ここはの—ここばくの。多くの。
○護摩—梵語Homa焚燒と譯す。密教修法の一。智慧の火を以て煩惱の薪を燒く意味で、火を焚いて佛に祈ること。
○飛ぶ鳥をも落す—勢ひの盛んな喩へ。
○刃の驗德—不動明王の手に持ち給ふ劍のやうな鋭い祈禱の靈驗。
○不動明王—五大尊明王の中央尊。大日如來が惡魔降伏の爲に忿怒身に化現せられたもので、右手に劍、左手に索を持ち、大火焰の中にあり、石上に坐す。
○五智の如來—法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の五智を圓滿に具備した、大日、阿閦、彌陀、釋迦、寶生の五如來。
○五體—地水火風空の五大から成る人の身。
○大威德—五大尊明王の一。三面六臂あつて忿怒の相を現し、劍鉾輪杵を執り、大白牛に駕し、一切の毒蛇惡龍を降伏す。
○藥師の眞言—藥師如來の前で誦する呪文。

ワキ『惡魔降伏の御誓ひ
ワキヅレ』惡しきを平らげ善きを助くる
ワキ』その御威光を賴まんと
ワキヅレ』ここはの行者
ワキ』十餘人
地』護摩の壇上をかまへつつ。凡そ飛ぶ鳥をも。落すばかりと面々に。護摩の壇上をかまへつつ。凡そ飛ぶ鳥をも。落すばかりと面々に。刃の驗德を顯して。年頃賴みをかくる大聖不動明王の。火焰に愚老がその身を焦がし。五智の如來に五體を投げ。大威德の乘り給ふ水牛の角に命をかけ。首を傾け數珠をもみ。藥師の眞言千手の陀羅尼。妙音聲を高くあげ

【六】
出端の囃子にて、後ジテ不動明王、面不動・白頭・金入鉢卷・蓮華冠・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・劍・繩の裝束にて出で、

ワキ』東方

後ジテ』抑もこれは。中央に立つて惡魔を降伏し

……」
別當「惡魔を降伏するとの御誓願に適ひ……」
從僧「惡い者を亡ぼして善人をお助け下さるといふ……」
別當「その尊い御威光をどれほどかありがたく仰ぎ奉ることでせう」
と多勢の修行者十餘人も、護摩の壇を嚴かに飾り立て、飛ぶ鳥をも落すばかりな勢ひで、いづれも恐ろしく祈禱の心をこめて、
別當「年來信仰致しまする大聖不動明王の火焰に、この愚僧の身を投げ入れ、五智如來にこの身を捧げ奉り、大威德明王のお乘り遊ばす水牛の角にかゝつて、わが命を棄てようとも苦しうございません」
と首を傾け、數珠を揉んで、藥師如來の眞言、千手觀音の陀羅尼を誦じ、高らかな聲をあげて、
別當「東方には降三世明王、西方には……」
と五大尊明王を呼びかけて調伏の祈禱をする。

【六】
奇瑞の效驗現れて、後ジテ不動明王登場、

不動「自分は五大尊明王の中央に立つて、

○千手の陀羅尼―千手觀音の前で誦する呪文。陀羅尼は梵語Dharani呪と譯す。眞言も同義である。
○東方―東方降三世明王云云と五大尊を呼びかけるのである。

【六】

○矜羯羅制吒迦―不動明王の左右に侍する二童子。
○五壇―五大尊をそれぞれ祭つた五つの壇。
○五大尊―不動明王及び後に出る四尊。
○形代―人がた。呪ふべき人の形を作つて佛前に置きこれを通じてその本人を苦しめるのである。
○調伏―五大尊に祈つて怨敵魔障を降伏すること。天台・眞言宗で行ふ。
○海山の御法―海の如く深く、山の如く高い佛法。箱根の海といひかけたのである。
○實相―實相。ありのままのすがた。
○自性の月の―自性は本來の變りなき法性。これを月の光に喩へた。
○隈なき―月の縁語。
○降三世明王―五大尊の一。四面八臂あつて忿怒の相を示し、三世の怨敵を降伏す。

衆生を守る。大聖不動明王。矜羯羅制吒迦を始めとして

地 五壇の上に現れ給へば

シテ 護摩の煙

地 不動の火焰

シテ 光明赫奕として

地 氣色もあらたに五大尊の。四面の佛前に現れ給ひてかの形代を。調伏し給ふ。あらありがたや恐ろしや

地 山河草木震動し。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから實相の色を顯し。自性の月の。光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の聲耳に通じて。明々とすみやかなり

シテ 東方の降三世明王は

地 降三世明王は。青蓮の眦に。惡魔を降伏して。

惡魔を降伏し、衆生を守護する大聖不動明王である。と、侍童の矜羯羅童子・制吒迦童子を始め、多くの童子を率ゐて、不動明王が護摩壇の上にお現れになると、護摩の煙も不動の火焰も、光明赫き渡り、まことにあらたかな樣で、五大尊明王が四方の護摩壇にお現れになつて、かの人がたを調伏せられた。實にありがたくも恐ろしい有樣である。

かくて山河も草木も震動して、箱根の山も湖も、佛法の威光で自然とあらたかな趣を呈し、更に淸らかな月の光がさし出て、護摩の煙の上をも隈なく照らし、祈禱の鈴の聲は耳にしみ入り、まことに明らかな澄みわたつた有樣である。

その中で、東方に配する降三世明王が

壇上に翔り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火焔の炎を吹きかけ給へば大威德は水牛の。角振り立てて現れ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風の鐵雨を降らして大紅蓮の責めをなせば。中央の大聖不動はさつくの繩にて祐經が。形代を卷き縛り護摩の壇上に引き伏せて。利劍を振り上げ刺し通して。なほ嚴重の奇特を見せんと。形代が首を切つて。劍の先につなぬき給へば。身の毛もよだちて面々に。目を驚かす有樣なり。さてこそ終には箱王も。さてこそ終には箱王も。その本望をば遂げにけり

と當座に留拍子を踏む。

○青蓮の眦―青蓮華のやうな青白分明な威光のある眼。法華經妙音菩薩品に「目如ニ廣大青蓮華葉一」
○軍荼利夜叉―五大尊の一。一頭八臂で忿怒の相を示し一切諸惡鬼神を降伏す。
○金剛夜叉―五大尊の一。三面六臂で忿怒の相を示し火焰につゝまれて一切の可畏夜叉を摧伏す。
○寒風の鐵雨―寒風に吹き送られる鐵の如き雨。
○大紅蓮―八寒地獄の一。寒さの爲に背肉がたゞれて大紅蓮の如くになる地獄。
○利劍―鋭い劍。
○つなぬき―つらぬき。

青蓮華のやうな眼を開いて、惡魔を降伏して、護摩壇上にお翔けになり、南方に配する軍荼利夜叉明王は火焰の炎を吹きかけられ、西方の大威德明王は水牛の角を振り立てて現れ給ひ、北方の金剛夜叉明王は寒風に吹き送られる鐵のやうな雨を降らして、大紅蓮地獄の責め苦をお與へになると、中央の大聖不動明王は索の繩で祐經の人がたを卷き縛つて、護摩壇の上に引き伏せ、銳い劍をふりあげて刺し通し、たほも恐ろしい靈驗を示さうといつて、人がたの首を切つて、劍の先に貫かれたので、皆の者は餘りの恐ろしさに身の毛もよだち、目を見張るばかりであつた。この調伏の效驗によつて、箱王も終に敵討の本望を遂げたのである。

舞臺には不動以外の四大尊は登場しない。不動明王だけで、この樣を示して見せるのである。

〔考　異〕

諸　流　（喜剛喜）

三流の間殆ど異同がない。

昭和六年一月五日印刷
昭和六年一月十日發行

謠曲大觀第三卷奥附（非賣品）

不許複製

著者　佐成謙太郎
東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　三樹退三
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ一
印刷者　守岡功
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ一
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目　株式會社　明治書院
【振替貯金口座東京四九九一番】
電話神田（25）二二一六番　二六九六番　一四一四番

謡曲大觀總目錄

（曲名の左に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。別巻は索引その他）